

WebSphere® IBM WebSphere Process Server for
Multiplatforms
バージョン 7.0.0

WebSphere Process Server のインストールおよび構成



WebSphere IBM WebSphere Process Server for
Multiplatforms
バージョン 7.0.0

WebSphere Process Server のインストールおよび構成



本書は、WebSphere Process Server for Multiplatforms バージョン 7、リリース 0、モディフィケーション 0 (製品番号 5724-L01)、および新しい版で明記されていない限り、以降のすべてのリリースおよびモディフィケーションに適用されます。

本書についてのご意見は、doc-comments@us.ibm.com へ E メールでお寄せください。皆様の率直なご意見をお待ちしています。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

原典： WebSphere® Process Server for Multiplatforms
Version 7.0.0
Installing and Configuring WebSphere Process Server

第1刷 2010.4

© Copyright IBM Corporation 2005, 2010.

目次

表	vii
-------------	-----

第 1 章 WebSphere Process Server: 製品パッケージの内容	1
---	----------

第 2 章 WebSphere Process Server のインストールの準備	33
--	-----------

WebSphere Process Server のインストールに関する前提条件	33
サーバーおよびノードの停止	34
製品インストール前の共通データベースの手動作成	36
DB2 for IBM i データベースの作成	37
DB2 データベースの作成	39
z/OS 用の DB2 データベースの作成	40
Informix データベースの作成	42
Oracle データベースの作成	43
Microsoft SQL Server データベースの作成	45

第 3 章 ソフトウェアのインストール	47
--------------------------------------	-----------

Launchpad の開始	48
WebSphere Process Server の初回の対話式インストール	49
WebSphere Application Server Network Deployment の既存のインストール済み環境への WebSphere Process Server の対話式インストール	55
WebSphere Process Server のサイレント・インストール	62
非 root ユーザーとしての WebSphere Process Server のサイレント・インストール	64
ファースト・ステップ・コンソールの開始	69
ファースト・ステップ・コンソールのオプション	71
メッセージ・サービス・クライアントのインストール	77
JNDILookup Web Service アプリケーションのインストール	78
製品のインストール済み環境の変更	79
手動による IBM Installation Manager の始動	80

第 4 章 ドキュメンテーションのインストール	81
--	-----------

新しいヘルプ・システムのインストール	82
ヘルプ・システムへの最新ドキュメンテーションのインストール	83
ヘルプ・システムへの別のバージョンのドキュメンテーションのインストール	84
Eclipse ベースの他のヘルプ・ビューアーへのドキュメンテーションのインストール	86
ヘルプ・システムの始動	88
ヘルプ・システムの停止	89
ヘルプ・システムの表示	89

ドキュメンテーションのアンインストール	90
-------------------------------	----

第 5 章 製品のインストールの検査	91
-------------------------------------	-----------

インストール済みファイルの検査合計の検証	92
部品表との照合	94
構成済みファイルの品目に対する新しいベースライン検査合計の計算	98
検査合計の比較からのファイルの除外	101
特定のファイルおよびコンポーネントの検査合計の比較	105
installver_wbi コマンド行ユーティリティのデフォルトのメッセージ・ダイジェスト・アルゴリズムの変更	108
メモリー不足の状態の処理	109

第 6 章 ほかの WebSphere 製品のインストール済み環境との共存	111
--	------------

各種 WebSphere 製品の既存のインストール済み環境と共存する WebSphere Process Server または WebSphere Process Server Client のインストール	112
ほかの WebSphere 製品のプロファイルと共存する新しい WebSphere Process Server プロファイルの作成	117

第 7 章 対話式でのソフトウェアの更新	119
---------------------------------------	------------

サイレント・モードでのソフトウェアの更新	121
更新のロールバック	123

第 8 章 ソフトウェアのアンインストール	125
--	------------

Installation Manager を使用した WebSphere Process Server のアンインストール	125
アンインストールに失敗した後の再インストールの準備	126
AIX システムでアンインストールに失敗した後の再インストールの準備	127
HP-UX システムでアンインストールに失敗した後の再インストールの準備	130
Linux システムでアンインストールに失敗した後の再インストールの準備	133
Solaris システムでアンインストールに失敗した後の再インストールの準備	136
Windows システムでアンインストールに失敗した後の再インストールの準備	139
Business Process Choreographer のアンインストール	143

第 9 章 インストール情報	145
---------------------------------	------------

製品およびプロファイルのデフォルトのインストール・ディレクトリー	145
インストール・コマンド	148

プロファイル、ノード、サーバー、ホスト、およびセルの命名の考慮事項	150
WebSphere Process Server の機能	157
製品のバージョン情報および履歴情報	158
複数プロファイル環境のプロファイル・コマンド	158
パスポート・アドバンテージからインストールするときの特別な考慮事項	159

第 10 章 インストールおよび構成のトラブルシューティング 161

インストール時およびプロファイル作成時のメッセージおよび既知の問題	162
既知の問題	163
サポートされる IBM JDK が見つかりませんでした。この製品に同梱されている IBM JDK は <i>install_root/JDK</i> に配置されている必要があります。この問題を訂正して再試行してください。	165
警告: スtring "<type_name>" をタイプ FontStruct に変換できません (Warning: Cannot convert string "<type_name>" to type FontStruct)	165
インストールとプロファイル作成のログ・ファイル	166
Launchpad アプリケーションまたはファースト・ステップのトラブルシューティング	168
サイレント・インストールのトラブルシューティング	170
失敗した Ant 構成スクリプトの診断	171
プロファイルの作成または拡張時の障害からのリカバリー	173
Business Process Choreographer 構成のトラブルシューティング	176

第 11 章 WebSphere Process Server の構成 177

共通の構成	177
スタンドアロン構成と Network Deployment 構成の違い	177
Network Deployment 構成の作成	178
WebSphere Process Server のインストール - Network Deployment 構成の前提	182
プロファイルの作成方法および Network Deployment 構成用共通データベースの作成方法の決定	183
プロファイルの構成	220
プロファイル	220
プロファイルの作成または拡張に関する前提条件	221
プロファイルの作成	230
プロファイルの拡張	355
manageprofiles コマンド行ユーティリティー	444
IBM i でのリモート・データベース・サポートの構成	471
manageprofiles コマンド行ユーティリティーを使用したプロファイルの削除	477
データベースの構成	478
必須のデータベース管理者タスクの識別	481
データベース特権	482
コンポーネント固有のデータベース構成	485

データベース設計ツールを使用したデータベース設計ファイルの作成	510
追加データベース構成情報	517
デプロイメント環境のセットアップ	526
デプロイメント環境の作成	527
デプロイメント環境設定の編集	553
デプロイメント環境の検証	557
サーバーまたはクラスターの SCA サポートの構成	564
サーバーおよびクラスターでの Service Component Architecture サポートに関する考慮事項	566
管理コンソールでのすべての REST サービスの構成	567
サービス・プロバイダーでの REST サービスの構成	568
サーバー、クラスター、またはコンポーネント用の REST サービスの構成	569
コマンド行を使用した REST サービスの構成	571
Business Process Choreographer の構成	572
Business Space の構成	572
プロファイル管理ツールを使用した Business Space の構成	574
「デプロイメント環境構成」ウィザードの一部として Business Space を構成する	577
ネットワーク・デプロイメント環境のためのビジネス・スペースの構成	579
ビジネス・スペース内で使用するための特定のウィジェットのセットアップ	611
Business Space のセキュリティーのセットアップ	619
Business Space を構成するためのコマンド (wsadmin スクリプト)	636
WebSphere Portal での Business Space の構成	653
WebSphere Portal サーバーでの Business Space の構成	654
WebSphere Portal クラスターでの Business Space の構成	657
WebSphere Portal で Business Space を構成するためのプロパティ・ファイルの例	660
WebSphere Portal でのウィジェットの SSO および SSL の構成	662
WebSphere Portal での Business Space ウィジェット用のスペースの作成	664
WebSphere Portal でのビジネス・スペースの移動	664
V6.2.x Business Space ウィジェットの WebSphere Portal の V7.0 環境へのマイグレーション	665
WebSphere Portal で Business Space を構成するためのコマンド (wsadmin スクリプト)	666
ビジネス・ルールおよびセレクターの構成	674
ビジネス・ルールとセレクターの監査ログの構成	674
コマンドを使用したビジネス・ルールとセレクターの監査の構成	676
ビジネス・ルール・マネージャーのインストールの考慮事項	679
リレーションシップ・サービスの構成	685

拡張メッセージング・リソースの構成	686	WebSphere Business Integration Adapter の構成 . . .	735
拡張メッセージング・サービスを使用可能にする	687	WebSphere Business Integration Adapter の管理の	
遅延応答を処理するためのリスナー・ポートの拡		セットアップ	736
張の構成	688	Service Federation Management 用の WebSphere	
拡張メッセージング・プロバイダーを選択する	689	Process Server の構成	738
メッセージング・サーバー環境のセットアップ	696	Service Connectivity Management 接続サーバーの	
JNDILookup Web Service の構成	696	構成	738
Common Event Infrastructure の構成	697	Service Connectivity Management 接続プロバイダ	
Common Event Infrastructure コンポーネント	697	ーの構成	739
管理コンソールを使用した Common Event		Service Component Architecture モジュールの	
Infrastructure の構成	699	Service Connectivity Management の使用	742
Common Event Infrastructure アプリケーションの		Service Connectivity Management (SCM) のプロ	
デプロイ	702	キシヤ・ゲートウェイへのマッピング	743
イベント・メッセージングの構成	705	構成のトラブルシューティング	744
イベント・データベースの構成	709		
WebSphere Business Monitor 用のクロスセル			
Common Event Infrastructure 構成	735		

表

1. WebSphere Process Server に付属するソフトウェア	2	27. サイトのエレメント属性	85
2. AIX メディア・パック (32 ビット・プラットフォーム用) の内容	7	28. install_root デフォルト・ディレクトリー	146
3. AIX メディア・パック (64 ビット・プラットフォーム用) の内容	8	29. profile_root デフォルト・ディレクトリー	146
4. HP-UX メディア・パック (32 ビット・プラットフォーム用) の内容	10	30. WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment が既にインストールされている場合の install_root デフォルト・ディレクトリー	147
5. HP-UX メディア・パック (64 ビット・プラットフォーム用) の内容	12	31. Installation Manager のデフォルトのインストール・ディレクトリー	148
6. Linux x86 メディア・パック (32 ビット・プラットフォーム用) の内容	13	32. WebSphere Process Server のインストール・コマンド	149
7. Linux x86 メディア・パック (64 ビット・プラットフォーム用) の内容	15	33. WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V7.0 CD 上のソフトウェアのインストール・コマンド	149
8. Linux POWER メディア・パック (32 ビット・プラットフォーム用) の内容	17	34. WebSphere Portal add-in for WebSphere Process Server V7.0 DVD のインストール・コマンド	150
9. Linux POWER メディア・パック (64 ビット・プラットフォーム用) の内容	18	35. ノード、サーバー、ホスト、およびセルの命名ガイドライン	151
10. Linux on System z メディア・パック (31 ビット・プラットフォーム用) の内容	20	36. 製品のバージョン情報および履歴情報のリンク	158
11. Linux on System z メディア・パック (64 ビット・プラットフォーム用) の内容	21	37. インストールおよびプロファイル作成に関連する既知の問題と解決策	163
12. Solaris メディア・パック (SPARC 32 ビット・プラットフォーム用) の内容	23	38. WebSphere Process Server コンポーネントのインストール・ログおよびプロファイル・ログ	166
13. Solaris メディア・パック (SPARC 64 ビット・プラットフォーム用) の内容	25	39. スタンドアロン構成と Network Deployment 構成の違い	178
14. Solaris メディア・パック (AMD 64 ビット・プラットフォーム用) の内容	26	40. Derby Embedded または Derby Embedded 40 の場合の必須のデータベース構成フィールド	196
15. Windows メディア・パック (32 ビット・プラットフォーム用) の内容	28	41. Derby Network Server または Derby Network Server 40 の場合の必須のデータベース構成フィールド	197
16. Windows メディア・パック (64 ビット・プラットフォーム用) の内容	30	42. DB2 Universal Database の場合の必須のデータベース構成フィールド	197
17. 利用可能なデータベース・タイプおよびそのディレクトリー名	37	43. DB2 データ・サーバーの場合の必須のデータベース構成フィールド	198
18. WebSphere Process Server 用の DB2 for i5/OS または DB2 for IBM i スクリプト	38	44. DB2 for z/OS V8 および V9 の場合の必須のデータベース構成フィールド	199
19. WebSphere Process Server 用の DB2 スクリプト	39	45. DB2 for IBM i (ツールボックス) または DB2 for IBM i (ツールボックス) の場合の必須のデータベース構成フィールド	199
20. WebSphere Process Server 用の DB2 for z/OS スクリプト	41	46. Informix Dynamic Server の場合の必須のデータベース構成フィールド	200
21. WebSphere Process Server 用の Informix スクリプト	42	47. Microsoft SQL Server DataDirect および Microsoft SQL Server (Microsoft) の場合の必須のデータベース構成フィールド	201
22. WebSphere Process Server 用の Oracle スクリプト	43	48. Oracle の場合の必須のデータベース構成フィールド	202
23. デフォルトのスキーマ	44	49. Oracle をメッセージング・エンジンと共に使用するための必須のデータベース構成フィールド	203
24. WebSphere Process Server 用の Microsoft SQL Server スクリプト	45		
25. ファースト・ステップ・コンソールで使用可能なオプション	71		
26. ファースト・ステップ・コンソールのオプションが呼び出すコマンド	75		

50. 既存のデプロイメント・マネージャー上のデプロイメント環境パターンによって提供されるクラスター	284	75. 指定される manageprofiles コマンド行ユーティリティー・パラメーター	314
51. Derby Embedded または Derby Embedded 40 の場合の必須のデータベース構成フィールド	294	76. デフォルトの manageprofiles コマンド行ユーティリティー・パラメーター	315
52. Derby Network Server または Derby Network Server 40 の場合の必須のデータベース構成フィールド	294	77. 指定される manageprofiles コマンド行ユーティリティー・パラメーター	316
53. DB2 Universal Database の場合の必須のデータベース構成フィールド	294	78. デフォルトの manageprofiles コマンド行ユーティリティー・パラメーター	316
54. DB2 データ・サーバーの場合の必須のデータベース構成フィールド	295	79. 指定される manageprofiles コマンド行ユーティリティー・パラメーター	317
55. DB2 for z/OS V8 および V9 の場合の必須のデータベース構成フィールド	296	80. デフォルトの manageprofiles コマンド行ユーティリティー・パラメーター	317
56. DB2 for IBM i (ツールボックス) または DB2 for IBM i (ツールボックス) の場合の必須のデータベース構成フィールド	297	81. 指定される manageprofiles コマンド行ユーティリティー・パラメーター	319
57. Informix Dynamic Server の場合の必須のデータベース構成フィールド	298	82. デフォルトの manageprofiles コマンド行ユーティリティー・パラメーター	319
58. Microsoft SQL Server DataDirect および Microsoft SQL Server (Microsoft) の場合の必須のデータベース構成フィールド	298	83. Oracle 用追加 manageprofiles コマンド行ユーティリティー・パラメーター	320
59. Oracle の場合の必須のデータベース構成フィールド	300	84. 指定される manageprofiles コマンド行ユーティリティー・パラメーター	323
60. Oracle をメッセージング・エンジンと共に使用するための必須のデータベース構成フィールド	301	85. デフォルトの manageprofiles コマンド行ユーティリティー・パラメーター	323
61. 指定される manageprofiles コマンド行ユーティリティー・パラメーター	305	86. Oracle 用追加 manageprofiles コマンド行ユーティリティー・パラメーター	324
62. デフォルトの manageprofiles コマンド行ユーティリティー・パラメーター	306	87. 指定される manageprofiles コマンド行ユーティリティー・パラメーター	327
63. 指定される manageprofiles コマンド行ユーティリティー・パラメーター	307	88. デフォルトの manageprofiles コマンド行ユーティリティー・パラメーター	328
64. デフォルトの manageprofiles コマンド行ユーティリティー・パラメーター	307	89. Oracle 用追加 manageprofiles コマンド行ユーティリティー・パラメーター	328
65. 指定される manageprofiles コマンド行ユーティリティー・パラメーター	308	90. 指定される manageprofiles コマンド行ユーティリティー・パラメーター	328
66. デフォルトの manageprofiles コマンド行ユーティリティー・パラメーター	309	91. デフォルトの manageprofiles コマンド行ユーティリティー・パラメーター	329
67. 指定される manageprofiles コマンド行ユーティリティー・パラメーター	309	92. Oracle 用追加 manageprofiles コマンド行ユーティリティー・パラメーター	330
68. デフォルトの manageprofiles コマンド行ユーティリティー・パラメーター	310	93. 指定される manageprofiles コマンド行ユーティリティー・パラメーター	331
69. 指定される manageprofiles コマンド行ユーティリティー・パラメーター	311	94. デフォルトの manageprofiles コマンド行ユーティリティー・パラメーター	331
70. デフォルトの manageprofiles コマンド行ユーティリティー・パラメーター	311	95. 指定される manageprofiles コマンド行ユーティリティー・パラメーター	332
71. 指定される manageprofiles コマンド行ユーティリティー・パラメーター	312	96. デフォルトの manageprofiles コマンド行ユーティリティー・パラメーター	332
72. デフォルトの manageprofiles コマンド行ユーティリティー・パラメーター	312	97. 共通データベースの構成に使用できる manageprofiles パラメーター (Derby Embedded または Derby Embedded 40 を使用)	334
73. 指定される manageprofiles コマンド行ユーティリティー・パラメーター	313	98. 共通データベースの構成に使用できる manageprofiles パラメーター (Derby Network Server または Derby Network Server 40 を使用)	335
74. デフォルトの manageprofiles コマンド行ユーティリティー・パラメーター	314	99. 共通データベースの構成に使用できる manageprofiles パラメーター (DB2 Universal を使用)	336

100. 共通データベースの構成に使用できる manageprofiles パラメーター (DB2 データ・サ ーバーを使用)	337	117. Derby Network Server または Derby Network Server 40 の場合の必須のデータベース構成フ ィールド	395
101. i5/OS または IBM i オペレーティング・シス テムに提供されたデータベースを使用した共 通データベースの構成のために使用可能な manageprofiles パラメーター	338	118. DB2 Universal Database の場合の必須のデー タベース構成フィールド	396
102. DB2 for z/OS v8 または DB2 for z/OS v9 を 使用した共通データベースの構成のために使 用可能な manageprofiles パラメーター	339	119. DB2 データ・サーバーの場合の必須のデー タベース構成フィールド	396
103. 共通データベースの構成に使用できる manageprofiles パラメーター (Oracle を使用)	341	120. DB2 for z/OS V8 および V9 の場合の必須の データベース構成フィールド	397
104. 共通データベースの構成に使用できる manageprofiles パラメーター (Informix Dynamic Server を使用)	342	121. DB2 for IBM i (ツールボックス) または DB2 for IBM i (ツールボックス) の場合の必須の データベース構成フィールド	398
105. Microsoft SQL Server を使用した Common デ ータベースの構成のために使用可能な manageprofiles パラメーター	344	122. Informix Dynamic Server の場合の必須のデー タベース構成フィールド	399
106. Derby Embedded または Derby Embedded 40 を使用した Common Event Infrastructure デー タベースの構成のために使用可能な manageprofiles パラメーター	346	123. Microsoft SQL Server DataDirect および Microsoft SQL Server (Microsoft) の場合の必 須のデータベース構成フィールド	399
107. Derby Network Server または Derby Network Server 40 を使用した Common Event Infrastructure データベースの構成のために使 用可能な manageprofiles パラメーター	347	124. Oracle の場合の必須のデータベース構成フ ィールド	401
108. DB2 Universal を使用した Common Event Infrastructure データベースの構成のために使 用可能な manageprofiles パラメーター	347	125. Oracle をメッセージング・エンジンと共に使 用するための必須のデータベース構成フ ィールド	402
109. DB2 データ・サーバーを使用した Common Event Infrastructure データベースの構成に使用 できる manageprofiles パラメーター	348	126. 指定される manageprofiles コマンド行ユー ティリティー・パラメーター	406
110. i5/OS または IBM i オペレーティング・シス テムに提供されたデータベースを使用した Common Event Infrastructure データベースの 構成のために使用可能な manageprofiles パラ メーター	349	127. デフォルトの manageprofiles コマンド行ユー ティリティー・パラメーター	407
111. DB2 for z/OS v8 または DB2 for z/OS v9 を 使用した Common Event Infrastructure データ ベースの構成のために使用可能な manageprofiles パラメーター	350	128. 指定される manageprofiles コマンド行ユー ティリティー・パラメーター	407
112. Oracle を使用した Common Event Infrastructure データベースの構成のために使 用可能な manageprofiles パラメーター	351	129. デフォルトの manageprofiles コマンド行ユー ティリティー・パラメーター	408
113. Informix Dynamic Server を使用した Common Event Infrastructure データベースの構成のため に使用可能な manageprofiles パラメーター	352	130. 指定される manageprofiles コマンド行ユー ティリティー・パラメーター	408
114. Microsoft SQL Server を使用した Common Event Infrastructure データベースの構成のため に使用可能な manageprofiles パラメーター	354	131. デフォルトの manageprofiles コマンド行ユー ティリティー・パラメーター	409
115. 既存のデプロイメント・マネージャー上のデ プロイメント環境パターンによって提供され るクラスター	386	132. 指定される manageprofiles コマンド行ユー ティリティー・パラメーター	409
116. Derby Embedded または Derby Embedded 40 の場合の必須のデータベース構成フィールド	395	133. デフォルトの manageprofiles コマンド行ユー ティリティー・パラメーター	410
		134. 指定される manageprofiles コマンド行ユー ティリティー・パラメーター	410
		135. 指定される manageprofiles コマンド行ユー ティリティー・パラメーター	411
		136. 指定される manageprofiles コマンド行ユー ティリティー・パラメーター	412
		137. デフォルトの manageprofiles コマンド行ユー ティリティー・パラメーター	413
		138. Oracle 用追加 manageprofiles コマンド行ユー ティリティー・パラメーター	413
		139. 指定される manageprofiles コマンド行ユー ティリティー・パラメーター	416
		140. デフォルトの manageprofiles コマンド行ユー ティリティー・パラメーター	417
		141. Oracle 用追加 manageprofiles コマンド行ユー ティリティー・パラメーター	417
		142. 指定される manageprofiles コマンド行ユー ティリティー・パラメーター	420

143. デフォルトの manageprofiles コマンド行ユーティリティー・パラメーター	420	160. DB2 for z/OS v8 または DB2 for z/OS v9 を使用した Common Event Infrastructure データベースの構成のために使用可能な manageprofiles パラメーター	439
144. 指定される manageprofiles コマンド行ユーティリティー・パラメーター	421	161. Oracle を使用した Common Event Infrastructure データベースの構成のために使用可能な manageprofiles パラメーター	440
145. デフォルトの manageprofiles コマンド行ユーティリティー・パラメーター	421	162. Informix Dynamic Server を使用した Common Event Infrastructure データベースの構成のために使用可能な manageprofiles パラメーター	441
146. 共通データベースの構成に使用できる manageprofiles パラメーター (Derby Embedded または Derby Embedded 40 を使用)	422	163. Microsoft SQL Server を使用した Common Event Infrastructure データベースの構成のために使用可能な manageprofiles パラメーター	443
147. 共通データベースの構成に使用できる manageprofiles パラメーター (Derby Network Server または Derby Network Server 40 を使用)	423	164. デフォルトのスキーマ名	448
148. 共通データベースの構成に使用できる manageprofiles パラメーター (DB2 Universal を使用)	425	165. 個々のコンポーネントに必要なデータベース	478
149. 共通データベースの構成に使用できる manageprofiles パラメーター (DB2 データ・サーバーを使用)	426	166. データベース特権	482
150. i5/OS または IBM i オペレーティング・システムに提供されたデータベースを使用した共通データベースの構成のために使用可能な manageprofiles パラメーター	427	167. 追加の Oracle データベース特権	484
151. DB2 for z/OS v8 または DB2 for z/OS v9 を使用した共通データベースの構成のために使用可能な manageprofiles パラメーター	428	168. サポートされるデータベース製品	486
152. 共通データベースの構成に使用できる manageprofiles パラメーター (Oracle を使用)	430	169. インストーラー・オプション	487
153. 共通データベースの構成に使用できる manageprofiles パラメーター (Informix Dynamic Server を使用)	431	170. 「プロファイル管理ツール」オプション	488
154. Microsoft SQL Server を使用した Common データベースの構成のために使用可能な manageprofiles パラメーター	433	171. 共通データベース・スクリプトの命名規則	490
155. Derby Embedded または Derby Embedded 40 を使用した Common Event Infrastructure データベースの構成のために使用可能な manageprofiles パラメーター	435	172. WebSphere Process Server の各コンポーネントによって作成されるテーブル	491
156. Derby Network Server または Derby Network Server 40 を使用した Common Event Infrastructure データベースの構成のために使用可能な manageprofiles パラメーター	436	173. サポートされるデータベース製品	499
157. DB2 Universal を使用した Common Event Infrastructure データベースの構成のために使用可能な manageprofiles パラメーター	436	174. サポートされるデータベース製品	504
158. DB2 データ・サーバーを使用した Common Event Infrastructure データベースの構成に使用できる manageprofiles パラメーター	437	175. サポートされるデータベース製品	507
159. i5/OS または IBM i オペレーティング・システムに提供されたデータベースを使用した Common Event Infrastructure データベースの構成のために使用可能な manageprofiles パラメーター	438	176. CEI コンポーネントのスタンドアロン・データベース設計の制約事項.	511
		177. DB2 を使用する場合のデフォルトのユーザー ID およびスキーマ名特権	517
		178. シナリオ 1	519
		179. シナリオ 2	520
		180. シナリオ 3	521
		181. 標準的なスタンドアロン環境のセットアップ	523
		182. 標準的なデプロイメント環境のセットアップ	524
		183. データベース・プロバイダーごとのテーブルの作成	525
		184. データベース・プロバイダーごとのスキーマの作成	525
		185. デプロイメント環境のコンポーネントの関係	540
		186. トポロジー・インスタンスの使用可能状況 (使用可能性が低い順から高い順)	552
		187.	612
		188. イベント・データベースの制限	709

第 1 章 WebSphere Process Server: 製品パッケージの内容

ここでは、WebSphere® Process Server の入手方法、そのメディア・パックに格納されているソフトウェア、ダウンロード可能な電子インストール・イメージについて説明します。

WebSphere Process Server の入手方法

以下のいずれかの方法で、製品コードを取得することができます。

- CD-ROM および DVD メディアなどの製品メディア・パックから。
- パスポート・アドバンテージ・サイトから。ここでは、ライセンス交付を受けたカスタマーがインストール・イメージをダウンロードすることができます。ダウンロード可能なイメージの詳細については、パスポート・アドバンテージのダウンロードの資料を参照してください。

このソフトウェアを購入するには、IBM® 担当員または IBM 販売店にお問い合わせいただくか、WebSphere Process Server のホーム・ページ (<http://www.ibm.com/software/integration/wps>) にアクセスして、左側の列の「How to buy」のリンクを選択します。

WebSphere Process Server に付属するソフトウェア

各メディア・パックには、WebSphere Process Server をインストールし、WebSphere Process Server 環境をセットアップし、アプリケーションのアセンブルとデプロイを行うのに必要なソフトウェアが含まれています。また、お客様の実稼働環境や開発環境に付加価値とツール・サポートを提供するオプションの補助ソフトウェア・プログラムも、各メディア・パックに組み込まれています。

2 ページの表 1 に、WebSphere Process Server 製品に付属するソフトウェアを示します。必ずしもすべてのプラットフォームにすべてのソフトウェアが供給されているわけではありません。

表 1. WebSphere Process Server に付属するソフトウェア

ソフトウェア	説明
WebSphere Process Server	<p>サービス指向アーキテクチャー (SOA) を基本にした、単一の単純化プログラミング・モデルである WebSphere Process Server は、オープン・スタンダードに基づくすべての統合スタイルを実現しサポートすることにより、多種多様な要員、ワークフロー、アプリケーション、システム、プラットフォーム、およびアーキテクチャーにまたがるビジネス・プロセスを自動化する次世代のビジネス・プロセス・サーバーです。WebSphere Process Server のこのリリースの新機能は、「WebSphere Process Server for Multiplatforms V7.0 製品の概要」PDF の『このリリースの新機能』のトピックで説明しています。または、WebSphere Process Server for Multiplatforms V7.0 オンライン・インフォメーション・センター (http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/dmndhelp/v7r0mx/) で、トピックを表示できます。</p>
WebSphere Portal Add-in for WebSphere Process Server	<p>WebSphere Portal を使用すると、Web ベースのクライアントから標準ベースの iWidget 統合を介して、アプリケーションだけでなく、WebSphere Process Server によって規定されたヒューマン・タスクやビジネス・プロセスにもアクセスすることができます。</p>
WebSphere Application Server Network Deployment	<p>業界最高峰の Java™ ベース・アプリケーション・プラットフォームで、ダイナミックな e-ビジネスの世界でのエンタープライズ・データやトランザクションを統合します。WebSphere Process Server の土台になっている Network Deployment 版は、優れたアプリケーション・デプロイメント環境を提供し、WebSphere 製品ファミリーから期待されるセキュリティ、パフォーマンス、可用性、接続性、スケーラビリティに加え、トランザクション管理の拡張機能を提供するアプリケーション・サービスを備えています。さらにこの構成によって、クラスタリング、エッジ・オブ・ネットワーク・サービス、Web サービス機能の強化、分散構成の高可用性を実現できます。</p> <p>WebSphere Application Server Network Deployment について詳しくは、WebSphere Application Server Network Deployment インフォメーション・センターを参照してください。</p>

表 1. WebSphere Process Server に付属するソフトウェア (続き)

ソフトウェア	説明
IBM HTTP Server	<p>すべての e-business アプリケーションの基礎は Web サーバーです。IBM HTTP Server の機能には、次のようなものが含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 容易なインストール • SSL セキュア接続のサポート • Fast Response Cache Accelerator • WebSphere バンドルの一部としての IBM サポート • ハードウェア暗号のサポート • IHS サーバーの管理および構成に役立つ Administration Server • すべての WebSphere 製品に共通の、ナビゲートが容易な設計を採用したヘルプ情報
Web サーバー・プラグイン	<p>WebSphere Process Server は、サポートしている Web サーバーごとに、固有のバイナリー・プラグイン・モジュールと関連のプラグイン構成ファイルを提供します。プラグイン・インストール・ウィザードにより、必要なファイルがインストールされ、WebSphere Process Server の Web サーバーと基本のアプリケーション・サーバーが構成されてサーバー間の通信が可能になります。</p>
WebSphere Application Server Application Clients	<p>アプリケーション・クライアント・モジュールは、Java アプリケーションにアクセスするためのクライアントが格納されている Java Archive (JAR) ファイルです。基礎となる WebSphere Application Server 製品と通信する Java EE およびシン・アプリケーション・クライアントを実行するには、Application Server のエレメントをクライアントの実行先ユニットにインストールしておく必要があります。ただし、システムに Application Server がインストールされていない場合は、使用しているクライアント・アプリケーションにスタンドアロンのクライアント・ランタイム環境を提供する Application Clients をインストールできます。</p>
Eclipse ベースの WebSphere Process Server ヘルプ・システム	<p>WebSphere Process Server ヘルプ・システムは、WebSphere Process Server と一緒にインストールするようパッケージされた、Eclipse ベースおよびブラウザ・ベースのヘルプ・システムです。WebSphere Process Server の資料は、Eclipse 文書プラグインとしてダウンロードするようパッケージされており、このヘルプ・システムを使用して表示できます。このヘルプ・システムおよび文書プラグイン形式は、Eclipse Project によって開発されたオープン・ソースの方法に基づいています。</p>
WebSphere Application Server Edge Components	<p>WebSphere Application Server Edge Components は、高可用性、ハイ・ボリューム環境のニーズに対応しています。Edge Components には高性能のロード・バランシング、キャッシング、および集中セキュリティ機能があります。詳細については、WebSphere Application Server Edge Components の Web ページを参照してください。</p>

表 1. WebSphere Process Server に付属するソフトウェア (続き)

ソフトウェア	説明
DB2 [®] Restricted Enterprise Edition	<p>DB2 Restricted Enterprise Edition には、DB2 Enterprise Server Edition (DB2 Enterprise 9) の一部が含まれています。DB2 Enterprise 9 は、中規模から大規模の企業のデータ・サーバー要件を満たすように設計されています。これは、Linux[®]、UNIX[®]、または Windows[®] サーバーにデプロイでき、1 個のプロセッサから 100 個のプロセッサまで、あらゆるサイズに対応可能です。DB2 Enterprise 9 は、エンタープライズ全体のオンデマンド・ソリューションを構築するのに理想的なファウンデーションです。広範な配列の自律型または自己管理機能により、管理者の時間が開放されてビジネス・バリューの推進に集中できます。使いやすい DB2 および自己管理特性のおかげで、小規模な実装では専門管理者が不要な場合さえあります。</p> <p>DB2 が提供するクライアントは以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • DB2 Runtime Client。このクライアントは、アプリケーションが DB2 サーバーにアクセスできるようにするのに最適です。 • DB2 Client。このクライアントには、DB2 Runtime Client にあるすべての機能に加えて、クライアント/サーバー構成、データベース管理、アプリケーション開発の機能が組み込まれています。
IBM Tivoli [®] Directory Server	<p>IBM Tivoli Directory Server 製品は、強力な Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) インフラストラクチャーです。Tivoli Directory Server は、包括的な ID 管理アプリケーションと先進のソフトウェア・アーキテクチャーを展開するための基盤を提供します。詳しくは、IBM Tivoli Directory Server を参照してください。</p>
IBM Tivoli Access Manager	<p>IBM Tivoli Access Manager は、e-ビジネス・アプリケーションとすぐに統合して、機密保護機能のある、統一されたパーソナルな e-ビジネス体験を提供します。認証および許可の API を提供し、統合を行うことにより、Tivoli Access Manager は、拡大する企業内に分散する可能性のあるビジネス上重要なアプリケーションおよびデータに対する機密保護機能のあるアクセスを支援します。詳しくは、IBM Tivoli Access Manager for e-business を参照してください。</p>

表 1. WebSphere Process Server に付属するソフトウェア (続き)

ソフトウェア	説明
IBM Support Assistant	<p>IBM Support Assistant (ISA) は、さまざまな IBM サポート・リソースの使用を支援するツールです。IBM Support Assistant は、ソフトウェアに関する疑問点の解決に役立つ次の 4 つのコンポーネントを備えています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 検索コンポーネント。複数の場所にある適切なサポート情報にアクセスする際に役立ちます。 • サポート・リンク・コンポーネント。各種の IBM Web リソース (IBM 製品サイト、IBM サポート・サイト、IBM ニュース・グループへのリンクなど) にアクセスするために便利なロケーションを提供します。 • 教育コンポーネント: IBM 製品の教育 Web サイト (IBM Education Assistant モジュールなど) へのガイド付きアクセスを提供します。 • Service (サービス) コンポーネント: 主要なシステム・データを含む詳細な問題報告書を IBM に送ることができます。 <p>IBM Support Assistant と WebSphere Process Server を一緒に使用する場合は、IBM Support Assistant バージョン 4.0.2 をインストールしてから、WebSphere Process Server 用のプラグインをインストールする必要があります。</p>
IBM DMZ Secure Proxy Server for IBM WebSphere Application Server	<p>IBM DMZ Secure Proxy Server for IBM WebSphere Application Server を使用して、プロキシ・サーバー用のセキュアなプラットフォームを実現できます。これにより、アプリケーション・サーバーを非武装地帯 (DMZ) にインストールしてプロキシ・サーバーをホストすることを選択した場合は、発生する可能性のあるセキュリティ・リスクを削減しつつ、プロキシ・サーバーを DMZ にインストールすることができます。</p>
IBM WebSphere Installation Factory	<p>IBM WebSphere Installation Factory は、特定のニーズに合わせて、信頼できる反復可能な方法で WebSphere Application Server をインストールするためのインストール・パッケージを作成します。</p> <p>Installation Factory では、カスタマイズ・インストール・パッケージ (CIP) および統合インストール・パッケージ (IIP) の 2 種類のパッケージを生成できます。CIP は、保守、プロファイル・カスタマイズ、およびユーザー定義のスクリプト記述に加え、WebSphere Application Server 製品をインストールするために使用します。IIP は、アプリケーション・サーバー、フィーチャー・パック、およびその他のユーザー・ファイルなどの WebSphere ソフトウェアのスタック全体をインストールすることが可能な大きなパッケージです。</p>

表 1. WebSphere Process Server に付属するソフトウェア (続き)

ソフトウェア	説明
IBM Rational® Application Developer Assembly and Deployment Features for WebSphere Software V7.5	IBM Rational Application Developer Assembly and Deployment Features for WebSphere Software V7.5 は、ビジュアルな開発フィーチャーによって Eclipse を拡張します。これは、Java 開発者が高品質の Java J2EE、ポータル、Web/Web 2.0、Web サービス、および SOA アプリケーションを迅速に設計、開発、アセンブル、テスト、プロファイル作成、およびデプロイするのに役立ちます。
IBM Rational Agent Controller V8.0	IBM Rational Agent Controller は、クライアント・アプリケーションが起動してローカルまたはリモートのアプリケーションを管理できるようにし、実行中のアプリケーションの情報を他のアプリケーションに提供するデーモンです。
IBM Tivoli Composite Application Manager for WebSphere	IBM Tivoli Composite Application Manager for WebSphere は、ビジネス上重要なアプリケーションのパフォーマンスを高めるのに役立ちます。これにより、リアルタイムでの問題の検出、分析、および修復機能が提供され、オンデマンド・アプリケーションのアベイラビリティおよびパフォーマンスを維持できます。

WebSphere Process Server に付属するメディア・パック

WebSphere Process Server には 7 つのメディア・パックがあります。各メディア・パックには、特定の稼働環境に適用される製品メディアが含まれています。

注: メディア・パックにはそれぞれ、WebSphere Process Server V7.0 Quick Start CD が含まれています。この CD-ROM には、各国語版の「WebSphere Process Server クイック・スタート・ガイド」が収録されています。

プラットフォームごとの内容の詳細については、以下のセクションを参照してください。

- 『AIX メディア・パック』
- 10 ページの『HP-UX メディア・パック』
- 13 ページの『Linux x86 メディア・パック』
- 16 ページの『Linux POWER メディア・パック』
- 19 ページの『Linux on System z メディア・パック』
- 23 ページの『Solaris メディア・パック』
- 28 ページの『Windows メディア・パック』

AIX® メディア・パック

WebSphere Process Server for AIX メディア・パックには、32 ビットおよび 64 ビット・プラットフォーム用の WebSphere Process Server の内容が含まれています。7 ページの表 2 は、32 ビット・プラットフォーム用の内容を示したものです。8 ページの表 3 は、64 ビット・プラットフォーム用の内容を示したものです。

表 2. AIX メディア・パック (32 ビット・プラットフォーム用) の内容

メディア・ラベル	供給形態
WebSphere Process Server V7.0 for AIX 32-bit	<p>1 枚の DVD に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Process Server (WBI ディレクトリー内) • マイグレーション・ツール (Migration ディレクトリー内) • WebSphere Application Server Network Deployment (V7.0) (WAS ディレクトリー内) <p><i>WebSphere Process Server V7.0 DVD</i> および <i>WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V7.0 CD</i> の任意のインストール可能コンポーネントをインストールし、その情報を表示するには、ルート・ディレクトリー内にある Launchpad アプリケーションを使用します。</p>
WebSphere Portal Add-in for WebSphere Process Server V7.0 for AIX 32-bit	1 枚の DVD
WebSphere Application Server Network Deployment V7.0 Supplements for AIX on PowerPC 32-bit	<p>2 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Application Server 用アプリケーション・クライアント • IBM HTTP Server • IBM Support Assistant • Web サーバー・プラグイン • マイグレーション・ツール
WorldType Fonts for Multiplatform, Multilingual for WebSphere Application Server Network Deployment V7.0 32/64-bit	1 枚の CD-ROM
IBM DMZ Secure Proxy Server V7.0 for AIX 32-bit	1 枚の CD-ROM
IBM Edge Components and IBM Edge Components for IPv6 V7.0 for AIX 32/64-bit	1 枚の DVD
IBM Tivoli Access Manager for e-business V6.1 for AIX 32/64-bit	1 枚の CD-ROM
IBM DB2 Restricted Enterprise Server Edition V9.5 - Authorized User Option - Activation CD	1 枚の CD-ROM
IBM DB2 Enterprise Server Edition V9.5 for AIX	1 枚の DVD
IBM Data Server Runtime Client V9.5 for AIX	1 枚の DVD

表2. AIX メディア・パック (32 ビット・プラットフォーム用) の内容 (続き)

メディア・ラベル	供給形態
IBM Data Server Drivers V9.5 for AIX, HP-UX, Solaris, Linux, and Windows	1 枚の DVD
IBM Data Server Client V9.5 for AIX	1 枚の DVD
IBM Rational Application Developer Assembly and Deployment Features for WebSphere Software V7.5 32/64-bit	6 枚の CD-ROM
IBM Tivoli Composite Application Manager for WebSphere V7.0 for UNIX-AIX, HP-UX and Solaris	1 枚の CD-ROM
IBM WebSphere Installation Factory V7.0 for AIX on PowerPC® 32-bit	1 枚の CD-ROM
IBM Support Assistant V4.0.2 (WorkBench) for Linux 32-bit	1 枚の CD-ROM
IBM Support Assistant V4.0.2 (WorkBench) for Windows 32-bit	1 枚の CD-ROM
IBM Support Assistant V4.0.2 (Agent) for AIX on x86 32-bit	1 枚の CD-ROM

表3. AIX メディア・パック (64 ビット・プラットフォーム用) の内容

メディア・ラベル	供給形態
WebSphere Process Server V7.0 for AIX 64-bit	<p>1 枚の DVD に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Process Server (WBI ディレクトリー内) • IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システム (IEHS ディレクトリー内) • マイグレーション・ツール (Migration ディレクトリー内) • WebSphere Application Server Network Deployment (V7.0) (WAS ディレクトリー内) <p><i>WebSphere Process Server V7.0 DVD および WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V7.0 CD の任意のインストール可能コンポーネントをインストールし、その情報を表示するには、ルート・ディレクトリー内にある Launchpad アプリケーションを使用します。</i></p>
WebSphere Portal Add-in for WebSphere Process Server V7.0 for AIX 64-bit	1 枚の DVD

表 3. AIX メディア・パック (64 ビット・プラットフォーム用) の内容 (続き)

メディア・ラベル	供給形態
WebSphere Application Server Network Deployment V7.0 Supplements for AIX on PowerPC 64-bit	2 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。 <ul style="list-style-type: none"> • IBM HTTP Server • IBM Support Assistant • Web サーバー・プラグイン • マイグレーション・ツール
WorldType Fonts for Multiplatform, Multilingual for WebSphere Application Server Network Deployment V7.0 32/64-bit	1 枚の CD-ROM
IBM DMZ Secure Proxy Server V7.0 for AIX 64-bit	1 枚の CD-ROM
IBM Edge Components and IBM Edge Components for IPv6 V7.0 for AIX 32/64-bit	1 枚の DVD
IBM Rational Application Developer Assembly and Deployment Features for WebSphere Software V7.5 32/64-bit	6 枚の CD-ROM
IBM Tivoli Composite Application Manager for WebSphere V7.0 for UNIX-AIX, HP-UX and Solaris	1 枚の CD-ROM
IBM Tivoli Access Manager for e-business V6.1 for AIX 32/64-bit	1 枚の CD-ROM
IBM Tivoli Directory Server V6.2 AIX 64-bit	1 枚の DVD
IBM DB2 Restricted Enterprise Server Edition V9.5 - Authorized User Option - Activation CD	1 枚の CD-ROM
IBM DB2 Enterprise Server Edition V9.5 for AIX	1 枚の DVD
IBM Data Server Runtime Client V9.5 for AIX	1 枚の DVD
IBM Data Server Drivers V9.5 for AIX, HP-UX, Solaris, Linux, and Windows	1 枚の DVD
IBM Data Server Client V9.5 for AIX	1 枚の DVD
IBM WebSphere Installation Factory V7.0 for AIX on PowerPC 64-bit	1 枚の CD-ROM

表 3. AIX メディア・パック (64 ビット・プラットフォーム用) の内容 (続き)

メディア・ラベル	供給形態
IBM Support Assistant V4.0.2 (WorkBench) for Linux 32-bit	1 枚の CD-ROM
IBM Support Assistant V4.0.2 (WorkBench) for Windows 32-bit	1 枚の CD-ROM

HP-UX メディア・パック

WebSphere Process Server for HP-UX メディア・パックには、32 ビットおよび 64 ビット・プラットフォーム用の WebSphere Process Server の内容が含まれています。表 4 は、32 ビット・プラットフォーム用の内容を示したものです。12 ページの表 5 は、64 ビット・プラットフォーム用の内容を示したものです。

表 4. HP-UX メディア・パック (32 ビット・プラットフォーム用) の内容

メディア・ラベル	供給形態
WebSphere Process Server V7.0 HP-UX 32-bit	1 枚の DVD に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。 <ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Process Server (WBI ディレクトリー内) • マイグレーション・ツール (Migration ディレクトリー内) • WebSphere Application Server Network Deployment (V7.0) (WAS ディレクトリー内) <p><i>WebSphere Process Server V7.0 DVD および WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V7.0 CD の任意のインストール可能コンポーネントをインストールし、その情報を表示するには、ルート・ディレクトリー内にある Launchpad アプリケーションを使用します。</i></p>
WebSphere Portal Add-in for WebSphere Process Server V7.0 for HP-UX on PA-RISC 32-bit	1 枚の DVD
WebSphere Application Server Network Deployment V7.0 Supplements for HP-UX on PA-RISC 32-bit	2 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。 <ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Application Server 用アプリケーション・クライアント • IBM HTTP Server • IBM Support Assistant • Web サーバー・プラグイン • マイグレーション・ツール
WorldType Fonts for Multiplatform, Multilingual for WebSphere Application Server Network Deployment V7.0 32/64-bit	1 枚の CD-ROM
IBM DMZ Secure Proxy Server V7.0 for HP-UX 32-bit	1 枚の CD-ROM

表 4. HP-UX メディア・パック (32 ビット・プラットフォーム用) の内容 (続き)

メディア・ラベル	供給形態
IBM Edge Components and IBM Edge Components for IPv6 V7.0 for HP-UX 32/64-bit	1 枚の DVD
IBM Rational Application Developer Assembly and Deployment Features for WebSphere Software V7.5 32/64-bit	6 枚の CD-ROM
IBM Tivoli Access Manager for e-business V6.1 for HP-UX 32/64-bit	1 枚の CD-ROM
IBM DB2 Restricted Enterprise Server Edition V9.5 - Authorized User Option - Activation CD	1 枚の CD-ROM
IBM DB2 Enterprise Server Edition V9.5 for HP-UX on HP Integrity Itanium-based systems	1 枚の DVD
IBM Data Server Runtime Client V9.5 for HP-UX on HP Integrity Itanium-based systems	1 枚の DVD
IBM Data Server Drivers V9.5 for AIX, HP-UX, Solaris, Linux, and Windows	1 枚の DVD
IBM Data Server Client V9.5 for HP-UX on HP Integrity Itanium-based systems	1 枚の DVD
IBM Tivoli Composite Application Manager for WebSphere V7.0 for UNIX-AIX, HP-UX and Solaris	1 枚の CD-ROM
IBM WebSphere Installation Factory V7.0 for HP-UX 32-bit	1 枚の CD-ROM
IBM Support Assistant V4.0.2 (WorkBench) for Linux 32-bit	1 枚の CD-ROM
IBM Support Assistant V4.0.2 (WorkBench) for Windows 32-bit	1 枚の CD-ROM

表 5. HP-UX メディア・パック (64 ビット・プラットフォーム用) の内容

メディア・ラベル	供給形態
WebSphere Process Server for V7.0 HP-UX IA64	<p>1 枚の DVD に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Process Server (WBI ディレクトリー内) • マイグレーション・ツール (Migration ディレクトリー内) • WebSphere Application Server Network Deployment (V7.0) (WAS ディレクトリー内) <p><i>WebSphere Process Server V7.0 DVD</i> および <i>WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V7.0 CD</i> の任意のインストール可能コンポーネントをインストールし、その情報を表示するには、ルート・ディレクトリー内にある Launchpad アプリケーションを使用します。</p>
WebSphere Portal Add-in for WebSphere Process Server V7.0 for HP-UX on IA64 64-bit	1 枚の DVD
WebSphere Application Server Network Deployment V7.0 Supplements for HP-UX on Integrity 64-bit	<p>2 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • IBM HTTP Server • IBM Support Assistant • Web サーバー・プラグイン • マイグレーション・ツール
WorldType Fonts for Multiplatform, Multilingual for WebSphere Application Server Network Deployment V7.0 32/64-bit	1 枚の CD-ROM
IBM DMZ Secure Proxy Server V7.0 for HP-UX 64-bit	1 枚の CD-ROM
IBM Rational Application Developer Assembly and Deployment Features for WebSphere Software V7.5 32/64-bit	6 枚の CD-ROM
IBM Tivoli Composite Application Manager for WebSphere V7.0 for UNIX-AIX, HP-UX and Solaris	1 枚の CD-ROM
IBM Tivoli Access Manager for e-business V6.1 for HP-UX 32/64-bit	1 枚の CD-ROM
IBM DB2 Restricted Enterprise Server Edition V9.5 - Authorized User Option - Activation CD	1 枚の CD-ROM

表 5. HP-UX メディア・パック (64 ビット・プラットフォーム用) の内容 (続き)

メディア・ラベル	供給形態
IBM DB2 Enterprise Server Edition V9.5 for HP-UX on HP Integrity Itanium-based systems	1 枚の DVD
IBM Data Server Runtime Client V9.5 for HP-UX on HP Integrity Itanium-based systems	1 枚の DVD
IBM Data Server Drivers V9.5 for AIX, HP-UX, Solaris, Linux, and Windows	1 枚の DVD
IBM Data Server Client V9.5 for HP-UX on HP Integrity Itanium-based systems	1 枚の DVD
IBM Tivoli Directory Server V6.2 for HP-UX IA64	1 枚の CD-ROM
IBM WebSphere Installation Factory V7.0 for HP-UX 64-bit	1 枚の CD-ROM
IBM Support Assistant V4.0.2 (WorkBench) for Linux 32-bit	1 枚の CD-ROM
IBM Support Assistant V4.0.2 (WorkBench) for Windows 32-bit	1 枚の CD-ROM

Linux x86 メディア・パック

WebSphere Process Server for Linux x86 メディア・パックには、32 ビットおよび 64 ビット・プラットフォーム用の WebSphere Process Server の内容が含まれています。表 6 は、32 ビット・プラットフォーム用の内容を示したものです。15 ページの表 7 は、64 ビット・プラットフォーム用の内容を示したものです。

表 6. Linux x86 メディア・パック (32 ビット・プラットフォーム用) の内容

メディア・ラベル	供給形態
WebSphere Process Server V7.0 for Linux x86 32-bit	<p>1 枚の DVD に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Process Server (WBI ディレクトリー内) • IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システム (IEHS ディレクトリー内) • マイグレーション・ツール (Migration ディレクトリー内) • WebSphere Application Server Network Deployment (V7.0) (WAS ディレクトリー内) <p><i>WebSphere Process Server V7.0 DVD および WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V7.0 CD の任意のインストール可能コンポーネントをインストールし、その情報を表示するには、ルート・ディレクトリー内にある Launchpad アプリケーションを使用します。</i></p>

表 6. Linux x86 メディア・パック (32 ビット・プラットフォーム用) の内容 (続き)

メディア・ラベル	供給形態
WebSphere Portal Add-in for WebSphere Process Server V7.0 for Linux on x86 32-bit	1 枚の DVD
WebSphere Application Server Network Deployment V7.0 Supplements for Linux x86 32-bit	2 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。 <ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Application Server 用アプリケーション・クライアント • IBM HTTP Server • IBM Support Assistant • Web サーバー・プラグイン • マイグレーション・ツール
WebSphere Application Server Network Deployment Rational Agent Controller V8.0	1 枚の CD-ROM
WorldType Fonts for Multiplatform, Multilingual for WebSphere Application Server Network Deployment V7.0 32/64-bit	1 枚の CD-ROM
IBM DMZ Secure Proxy Server V7.0 for Linux x86 32-bit	1 枚の CD-ROM
IBM Rational Application Developer Assembly and Deployment Features for WebSphere Software V7.5 32/64-bit	6 枚の CD-ROM
IBM Edge Components and IBM Edge Components for IPv6 V7.0 for Linux 32/64-bit	1 枚の DVD
IBM Tivoli Access Manager for e-business V6.1 for Linux 32/64-bit	1 枚の CD-ROM
IBM Tivoli Composite Application Manager for WebSphere V7.0 for Linux 32-bit, Multilingual	1 枚の CD-ROM
IBM Data Server Runtime Client V9.5 for Linux on 32-bit AMD and Intel® systems (x86)	1 枚の DVD
IBM Data Server Drivers V9.5 for AIX, HP-UX, Solaris, Linux, and Windows	1 枚の DVD
IBM Data Server Client V9.5 for Linux on 32-bit AMD and Intel systems (x86)	1 枚の DVD

表 6. Linux x86 メディア・パック (32 ビット・プラットフォーム用) の内容 (続き)

メディア・ラベル	供給形態
IBM DB2 Restricted Enterprise Server Edition V9.5 - Authorized User Option - Activation CD	1 枚の CD-ROM
IBM WebSphere Installation Factory V7.0 for Linux on x86 32-bit	1 枚の CD-ROM
IBM Support Assistant V4.0.2 (WorkBench) for Linux 32-bit	1 枚の CD-ROM
IBM Support Assistant V4.0.2 (WorkBench) for Windows 32-bit	1 枚の CD-ROM
IBM Support Assistant V4.0.2 (Agent) for Linux on x86 32-bit	1 枚の CD-ROM

表 7. Linux x86 メディア・パック (64 ビット・プラットフォーム用) の内容

メディア・ラベル	供給形態
WebSphere Process Server V7.0 for Linux x86 64-bit	<p>1 枚の DVD に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Process Server (WBI ディレクトリー内) • マイグレーション・ツール (Migration ディレクトリー内) • WebSphere Application Server Network Deployment (V7.0) (WAS ディレクトリー内) <p><i>WebSphere Process Server V7.0 DVD</i> および <i>WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V7.0 CD</i> の任意のインストール可能コンポーネントをインストールし、その情報を表示するには、ルート・ディレクトリー内にある Launchpad アプリケーションを使用します。</p>
WebSphere Portal Add-in for WebSphere Process Server V7.0 for Linux on x86 64-bit	1 枚の DVD
WebSphere Application Server Network Deployment V7.0 Supplements for Linux 64-bit	<p>2 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • IBM HTTP Server • IBM Support Assistant • Web サーバー・プラグイン • マイグレーション・ツール
IBM DMZ Secure Proxy Server V7.0 for Linux x86 64-bit	1 枚の CD-ROM
IBM Rational Application Developer Assembly and Deployment Features for WebSphere Software V7.5 32/64-bit	6 枚の CD-ROM

表7. Linux x86 メディア・パック (64 ビット・プラットフォーム用) の内容 (続き)

メディア・ラベル	供給形態
IBM Edge Components and IBM Edge Components for IPv6 V7.0 for Linux 32/64-bit	1 枚の DVD
IBM Data Server Runtime Client V9.5 for Linux on AMD64 and Intel EM64T systems (x64)	1 枚の DVD
IBM DB2 Enterprise Server Edition V9.5 for Linux on AMD64 and Intel EM64T systems (x64)	1 枚の DVD
IBM Data Server Runtime Client V9.5 for Linux on AMD64 and Intel EM64T systems (x64)	1 枚の DVD
IBM Data Server Client V9.5 for Linux on AMD64 and Intel EM64T systems (x64)	1 枚の DVD
IBM DB2 Enterprise Server Edition V9.5 for Linux on AMD64 and Intel EM64T systems (x64)	1 枚の DVD
IBM Tivoli Access Manager for e-business V6.1 for Linux 32/64-bit	1 枚の CD-ROM
IBM Tivoli Composite Application Manager for WebSphere V7.0 for Linux 64-bit, Multilingual	1 枚の CD-ROM
IBM Tivoli Directory Server V6.2 for Linux x86 64-bit	1 枚の DVD
IBM WebSphere Installation Factory V7.0 for Linux on x86 64-bit	1 枚の CD-ROM
IBM Support Assistant V4.0.2 (WorkBench) for Linux 32-bit	1 枚の CD-ROM
IBM Support Assistant V4.0.2 (WorkBench) for Windows 32-bit	1 枚の CD-ROM

Linux POWER® メディア・パック

WebSphere Process Server for Linux POWER メディア・パックには、32 ビットおよび 64 ビット・プラットフォーム用の WebSphere Process Server の内容が含まれています。17 ページの表 8 は、32 ビット・プラットフォーム用の内容を示したものです。18 ページの表 9 は、64 ビット・プラットフォーム用の内容を示したものです。

表 8. Linux POWER メディア・バック (32 ビット・プラットフォーム用) の内容

メディア・ラベル	供給形態
WebSphere Process Server V7.0 for Linux PowerPC 32-bit	1 枚の DVD に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。 <ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Process Server (WBI ディレクトリー内) • マイグレーション・ツール (Migration ディレクトリー内) • WebSphere Application Server Network Deployment (V7.0) (WAS ディレクトリー内) <p><i>WebSphere Process Server V7.0 DVD</i> および <i>WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V7.0 CD</i> の任意のインストール可能コンポーネントをインストールし、その情報を表示するには、ルート・ディレクトリー内にある Launchpad アプリケーションを使用します。</p>
WebSphere Portal Add-in for WebSphere Process Server V7.0 for Linux on POWER 32-bit	1 枚の DVD
WebSphere Application Server Network Deployment V7.0 Supplements for Linux PowerPC	2 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。 <ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Application Server 用アプリケーション・クライアント • IBM HTTP Server • IBM Support Assistant • Web サーバー・プラグイン • マイグレーション・ツール
WorldType Fonts for Multiplatform, Multilingual for WebSphere Application Server Network Deployment V7.0 32/64-bit	1 枚の CD-ROM
IBM DMZ Secure Proxy Server V7.0 for Linux on PowerPC 32-bit	1 枚の CD-ROM
IBM Edge Components and IBM Edge Components for IPv6 V7.0 for Linux PowerPC 32/64-bit	1 枚の DVD
IBM Rational Application Developer Assembly and Deployment Features for WebSphere Software V7.5 32/64-bit	6 枚の CD-ROM
IBM Tivoli Access Manager for e-business V6.1 Linux PowerPC 32/64-bit	1 枚の CD-ROM

表8. Linux POWER メディア・パック (32 ビット・プラットフォーム用) の内容 (続き)

メディア・ラベル	供給形態
IBM DB2 Restricted Enterprise Server Edition V9.5 - Authorized User Option - Activation CD	1 枚の CD-ROM
IBM DB2 Enterprise Server Edition V9.5 for Linux on POWER (System i [®] and System p [®]) systems	1 枚の DVD
IBM Data Server Runtime Client V9.5 for Linux on POWER (System i and System p) systems	1 枚の DVD
IBM Data Server Drivers V9.5 for AIX, HP-UX, Solaris, Linux, and Windows	1 枚の DVD
IBM Data Server Client V9.5 for Linux on POWER (System i and System p) systems	1 枚の DVD
IBM WebSphere Installation Factory V7.0 Linux on PowerPC 32-bit	1 枚の CD-ROM
IBM Support Assistant V4.0.2 (WorkBench) for Linux 32-bit	1 枚の CD-ROM
IBM Support Assistant V4.0.2 (WorkBench) for Windows 32-bit	1 枚の CD-ROM
IBM Support Assistant V4.0.2 (Agent) for Linux on x86 32-bit	1 枚の CD-ROM

表9. Linux POWER メディア・パック (64 ビット・プラットフォーム用) の内容

メディア・ラベル	供給形態
WebSphere Process Server V7.0 for Linux PowerPC 64-bit	<p>1 枚の DVD に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Process Server (WBI ディレクトリー内) • マイグレーション・ツール (Migration ディレクトリー内) • WebSphere Application Server Network Deployment (V7.0) (WAS ディレクトリー内) <p><i>WebSphere Process Server V7.0 DVD および WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V7.0 CD の任意のインストール可能コンポーネントをインストールし、その情報を表示するには、ルート・ディレクトリー内にある Launchpad アプリケーションを使用します。</i></p>

表9. Linux POWER メディア・パック (64 ビット・プラットフォーム用) の内容 (続き)

メディア・ラベル	供給形態
WebSphere Portal Add-in for WebSphere Process Server V7.0 for Linux on POWER 64-bit	1 枚の DVD
WebSphere Application Server Network Deployment V7.0 Supplements for Linux PowerPC 64-bit	2 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。 <ul style="list-style-type: none"> • IBM HTTP Server • IBM Support Assistant • Web サーバー・プラグイン • マイグレーション・ツール
IBM DMZ Secure Proxy Server V7.0 for Linux on PowerPC 64-bit	1 枚の CD-ROM
IBM Tivoli Directory Server V6.2 for Linux PowerPC 64-bit	1 枚の DVD
IBM Edge Components and IBM Edge Components for IPv6 V7.0 for Linux PowerPC 32/64-bit	1 枚の DVD
IBM Rational Application Developer Assembly and Deployment Features for WebSphere Software V7.5 32/64-bit	6 枚の CD-ROM
IBM DB2 Restricted Enterprise Server Edition V9.5 - Authorized User Option - Activation CD	1 枚の CD-ROM
IBM DB2 Enterprise Server Edition V9.5 for Linux on POWER (System i and System p) systems	1 枚の DVD
IBM Tivoli Access Manager for e-business V6.1 for Linux PowerPC 32/64-bit	1 枚の CD-ROM
IBM WebSphere Installation Factory V7.0 for Linux on PowerPC 64-bit	1 枚の CD-ROM
IBM Support Assistant V4.0.2 (WorkBench) for Linux 32-bit	1 枚の CD-ROM
IBM Support Assistant V4.0.2 (WorkBench) for Windows 32-bit	1 枚の CD-ROM

Linux on System z® メディア・パック

WebSphere Process Server for Linux on System z メディア・パックには、32 ビットおよび 64 ビット・プラットフォーム用の WebSphere Process Server の内容が含ま

れています。表 10 は、32 ビット・プラットフォーム用の内容を示したものです。21 ページの表 11 は、64 ビット・プラットフォーム用の内容を示したものです。

表 10. *Linux on System z* メディア・パック (31 ビット・プラットフォーム用) の内容

メディア・ラベル	供給形態
WebSphere Process Server V7.0 for Linux on System z 31-bit	1 枚の DVD に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。 <ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Process Server (WBI ディレクトリー内) • マイグレーション・ツール (Migration ディレクトリー内) • WebSphere Application Server Network Deployment (V7.0) (WAS ディレクトリー内) <p><i>WebSphere Process Server V7.0 DVD</i> および <i>WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V7.0 CD</i> の任意のインストール可能コンポーネントをインストールし、その情報を表示するには、ルート・ディレクトリー内にある Launchpad アプリケーションを使用します。</p>
WebSphere Application Server Network Deployment V7.0 Supplements for Linux on System z	2 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。 <ul style="list-style-type: none"> • IBM HTTP Server • IBM Support Assistant • Web サーバー・プラグイン • マイグレーション・ツール
WorldType Fonts for Multiplatform, Multilingual for WebSphere Application Server Network Deployment V7.0 32/64-bit	1 枚の CD-ROM
IBM DMZ Secure Proxy Server V7.0 for Linux on System z 31-bit	1 枚の CD-ROM
IBM Edge Components and IBM Edge Components for IPv6 V7.0 for Linux on System z 32/64-bit	1 枚の DVD
IBM Rational Application Developer Assembly and Deployment Features for WebSphere Software V7.5 32/64-bit	6 枚の CD-ROM
IBM Tivoli Access Manager for e-business V6.1 for Linux PowerPC on System z 31/64-bit	1 枚の CD-ROM
IBM DB2 Restricted Enterprise Server Edition V9.5 - Authorized User Option - Activation CD	1 枚の CD-ROM

表 10. Linux on System z メディア・パック (31 ビット・プラットフォーム用) の内容 (続き)

メディア・ラベル	供給形態
IBM DB2 Enterprise Server Edition V9.5 for Linux on System z	1 枚の DVD
IBM Data Server Runtime Client V9.5 for Linux on System z	1 枚の DVD
IBM Data Server Drivers V9.5 for AIX, HP-UX, Solaris, Linux, and Windows	1 枚の DVD
IBM Data Server Client V9.5 for Linux on System z	1 枚の DVD
IBM Tivoli Composite Application Manager for WebSphere Application Server V7.0 for Linux 32/64-bit	1 枚の CD-ROM
IBM WebSphere Installation Factory V7.0 for Linux on System z 31-bit	1 枚の CD-ROM
IBM Support Assistant V4.0.2 (WorkBench) for Linux 32-bit	1 枚の CD-ROM
IBM Support Assistant V4.0.2 (WorkBench) for Windows 32-bit	1 枚の CD-ROM

表 11. Linux on System z メディア・パック (64 ビット・プラットフォーム用) の内容

メディア・ラベル	供給形態
WebSphere Process Server V7.0 for Linux on System z 64-bit	<p>1 枚の DVD に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Process Server (WBI ディレクトリー内) • マイグレーション・ツール (Migration ディレクトリー内) • WebSphere Application Server Network Deployment (V7.0) (WAS ディレクトリー内) <p><i>WebSphere Process Server V7.0 DVD</i> および <i>WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V7.0 CD</i> の任意のインストール可能コンポーネントをインストールし、その情報を表示するには、ルート・ディレクトリー内にある Launchpad アプリケーションを使用します。</p>
WebSphere Portal Add-in for WebSphere Process Server V7.0 for Linux on System z 64-bit	1 枚の DVD

表 11. Linux on System z メディア・パック (64 ビット・プラットフォーム用) の内容 (続き)

メディア・ラベル	供給形態
WebSphere Application Server Network Deployment V7.0 Supplements for Linux on System z 64-bit	2 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。 <ul style="list-style-type: none"> • IBM HTTP Server • IBM Support Assistant • Web サーバー・プラグイン • マイグレーション・ツール
IBM DMZ Secure Proxy Server V7.0 for Linux on System z 64-bit	1 枚の CD-ROM
IBM Edge Components and IBM Edge Components for IPv6 V7.0 for Linux on System z 32/64-bit	1 枚の DVD
IBM DB2 Restricted Enterprise Server Edition V9.5 - Authorized User Option - Activation CD	1 枚の CD-ROM
IBM DB2 Enterprise Server Edition V9.5 for Linux on System z	1 枚の DVD
IBM Data Server Runtime Client V9.5 for Linux on System z	1 枚の DVD
IBM Data Server Drivers V9.5 for AIX, HP-UX, Solaris, Linux, and Windows	1 枚の DVD
IBM Data Server Client V9.5 for Linux on System z	1 枚の DVD
IBM Tivoli Access Manager for e-business V6.1 for Linux PowerPC on System z 32/64-bit	1 枚の CD-ROM
IBM Tivoli Directory Server V6.2 Linux on System z 64-bit	1 枚の DVD
IBM Edge Components and IBM Edge Components for IPv6 V7.0 for Linux on System z 32/64-bit	1 枚の DVD
IBM Rational Application Developer Assembly and Deployment Features for WebSphere Software V7.5 32/64-bit	6 枚の CD-ROM
IBM Tivoli Composite Application Manager for WebSphere V7.0 for Linux PowerPC on System z 64-bit	1 枚の CD-ROM

表 11. Linux on System z メディア・パック (64 ビット・プラットフォーム用) の内容 (続き)

メディア・ラベル	供給形態
IBM WebSphere Installation Factory V7.0 for Linux on System z 64-bit	1 枚の CD-ROM
IBM Support Assistant V4.0.2 (WorkBench) for Linux 32-bit	1 枚の CD-ROM
IBM Support Assistant V4.0.2 (WorkBench) for Windows 32-bit	1 枚の CD-ROM

Solaris メディア・パック

WebSphere Process Server for Solaris メディア・パックには、SPARC 32 ビットおよび SPARC 64 ビット・プラットフォームと AMD 64 ビット・プラットフォーム用の WebSphere Process Server の内容が含まれています。表 12 は、SPARC 32 ビット・プラットフォーム用の内容を示したものです。25 ページの表 13 は、SPARC 64 ビット・プラットフォーム用の内容を示したものです。26 ページの表 14 は、AMD 64 ビット・プラットフォーム用の内容を示したものです。

表 12. Solaris メディア・パック (SPARC 32 ビット・プラットフォーム用) の内容

メディア・ラベル	供給形態
WebSphere Process Server V7.0 for Solaris on SPARC 32-bit	1 枚の DVD に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。 <ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Process Server (WBI ディレクトリー内) • マイグレーション・ツール (Migration ディレクトリー内) • WebSphere Application Server Network Deployment (V7.0) (WAS ディレクトリー内) <p><i>WebSphere Process Server V7.0 DVD および WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V7.0 CD の任意のインストール可能コンポーネントをインストールし、その情報を表示するには、ルート・ディレクトリー内にある Launchpad アプリケーションを使用します。</i></p>
WebSphere Portal Add-in for WebSphere Process Server V7.0 for Solaris on SPARC 32-bit	1 枚の DVD
WebSphere Application Server Network Deployment V7.0 Supplements for Solaris SPARC 32-bit	2 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。 <ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Application Server 用アプリケーション・クライアント • IBM HTTP Server • IBM Support Assistant • Web サーバー・プラグイン • マイグレーション・ツール

表 12. Solaris メディア・パック (SPARC 32 ビット・プラットフォーム用) の内容 (続き)

メディア・ラベル	供給形態
WorldType Fonts for Multiplatform, Multilingual for WebSphere Application Server Network Deployment V7.0 32/64-bit	1 枚の CD-ROM
IBM DMZ Secure Proxy Server V7.0 for Solaris SPARC 32-bit	1 枚の CD-ROM
IBM Edge Components and IBM Edge Components for IPv6 V7.0 for Solaris on SPARC 32/64-bit	1 枚の DVD
IBM Tivoli Access Manager for e-business V6.1 for Solaris SPARC 32/64-bit	1 枚の CD-ROM
IBM Tivoli Composite Application Manager for WebSphere V7.0 for UNIX-AIX, HP-UX and Solaris	1 枚の CD-ROM
IBM DB2 Restricted Enterprise Server Edition V9.5 - Authorized User Option - Activation CD	1 枚の CD-ROM
IBM DB2 Enterprise Server Edition V9.5 for Solaris on UltraSPARC systems	1 枚の DVD
IBM Data Server Runtime Client V9.5 for Solaris on UltraSPARC systems	1 枚の DVD
IBM Data Server Drivers V9.5 for AIX, HP-UX, Solaris, Linux, and Windows	1 枚の DVD
IBM Data Server Client V9.5 for Solaris on UltraSPARC systems	1 枚の DVD
IBM Rational Application Developer Assembly and Deployment Features for WebSphere Software V7.5 32/64-bit	6 枚の CD-ROM
IBM WebSphere Installation Factory V7.0 Solaris on SPARC 32-bit	1 枚の CD-ROM
IBM Support Assistant V4.0.2 (WorkBench) for Linux 32-bit	1 枚の CD-ROM
IBM Support Assistant V4.0.2 (WorkBench) for Windows 32-bit	1 枚の CD-ROM

表 12. Solaris メディア・パック (SPARC 32 ビット・プラットフォーム用) の内容 (続き)

メディア・ラベル	供給形態
IBM Support Assistant V4.0.2 (Agent) for Solaris on SPARC 32-bit	1 枚の CD-ROM

表 13. Solaris メディア・パック (SPARC 64 ビット・プラットフォーム用) の内容

メディア・ラベル	供給形態
WebSphere Process Server V7.0 for Solaris SPARC 64-bit	1 枚の DVD に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。 <ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Process Server (WBI ディレクトリー内) • マイグレーション・ツール (Migration ディレクトリー内) • WebSphere Application Server Network Deployment (V7.0) (WAS ディレクトリー内) <p><i>WebSphere Process Server V7.0 DVD および WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V7.0 CD の任意のインストール可能コンポーネントをインストールし、その情報を表示するには、ルート・ディレクトリー内にある Launchpad アプリケーションを使用します。</i></p>
WebSphere Portal Add-in for WebSphere Process Server V7.0 for Solaris on SPARC 64-bit	1 枚の DVD
WebSphere Application Server Network Deployment V7.0 Supplements for Solaris SPARC 64-bit	2 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。 <ul style="list-style-type: none"> • IBM HTTP Server • IBM Support Assistant • Web サーバー・プラグイン • マイグレーション・ツール
WorldType Fonts for Multiplatform, Multilingual for WebSphere Application Server Network Deployment V7.0 32/64-bit	1 枚の CD-ROM
IBM DB2 Enterprise Server Edition V9.5 for Solaris on UltraSPARC systems	1 枚の DVD
IBM DB2 Restricted Enterprise Server Edition V9.5 - Authorized User Option - Activation CD	1 枚の CD-ROM
IBM Data Server Runtime Client V9.5 for Solaris on UltraSPARC systems	1 枚の DVD
IBM Data Server Drivers V9.5 for AIX, HP-UX, Solaris, Linux, and Windows	1 枚の DVD

表 13. Solaris メディア・パック (SPARC 64 ビット・プラットフォーム用) の内容 (続き)

メディア・ラベル	供給形態
IBM Data Server Client V9.5 for Solaris on UltraSPARC systems	1 枚の DVD
IBM Tivoli Composite Application Manager for WebSphere V7.0 for UNIX-AIX, HP-UX and Solaris	1 枚の CD-ROM
IBM DMZ Secure Proxy Server V7.0 for Solaris SPARC 64-bit	1 枚の CD-ROM
IBM Edge Components and IBM Edge Components for IPv6 V7.0 for Solaris on SPARC 32/64-bit	1 枚の DVD
IBM Tivoli Directory Server V6.2 for Solaris SPARC 64-bit	1 枚の DVD
IBM WebSphere Installation Factory V7.0 Solaris on SPARC 64-bit	1 枚の CD-ROM
IBM Support Assistant V4.0.2 (WorkBench) for Linux 32-bit	1 枚の CD-ROM
IBM Support Assistant V4.0.2 (WorkBench) for Windows 32-bit	1 枚の CD-ROM

表 14. Solaris メディア・パック (AMD 64 ビット・プラットフォーム用) の内容

メディア・ラベル	供給形態
WebSphere Process Server V7.0 for Solaris AMD 64-bit	<p>1 枚の DVD に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Process Server (WBI ディレクトリー内) • マイグレーション・ツール (Migration ディレクトリー内) • WebSphere Application Server Network Deployment (V7.0) (WAS ディレクトリー内) <p><i>WebSphere Process Server V7.0 DVD</i> および <i>WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V7.0 CD</i> の任意のインストール可能コンポーネントをインストールし、その情報を表示するには、ルート・ディレクトリー内にある Launchpad アプリケーションを使用します。</p>
WebSphere Portal Add-in for WebSphere Process Server V7.0 for Solaris on AMD 64-bit	1 枚の DVD
WebSphere Application Server Network Deployment V7.0 Supplements for Solaris AMD 64-bit	<p>2 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • IBM HTTP Server • IBM Support Assistant • Web サーバー・プラグイン • マイグレーション・ツール

表 14. Solaris メディア・パック (AMD 64 ビット・プラットフォーム用) の内容 (続き)

メディア・ラベル	供給形態
WorldType Fonts for Multiplatform, Multilingual for WebSphere Application Server Network Deployment V7.0 32/64-bit	1 枚の CD-ROM
IBM DB2 Restricted Enterprise Server Edition V9.5 - Authorized User Option - Activation CD	1 枚の CD-ROM
IBM DB2 Enterprise Server Edition V9.5 for Solaris on x64 systems	1 枚の DVD
IBM DB2 Enterprise Server Edition V9.5 for Solaris on UltraSPARC systems	1 枚の DVD
IBM Data Server Runtime Client V9.5 for Solaris x64	1 枚の DVD
IBM Data Server Runtime Client V9.5 for Solaris on UltraSPARC systems	1 枚の DVD
IBM Data Server Drivers V9.5 for AIX, HP-UX, Solaris, Linux, and Windows	1 枚の DVD
IBM Data Server Client V9.5 for Solaris x64	1 枚の DVD
IBM Data Server Client V9.5 for Solaris on UltraSPARC systems	1 枚の DVD
IBM Tivoli Composite Application Manager for WebSphere V7.0 for UNIX-AIX, HP-UX and Solaris	1 枚の CD-ROM
IBM DMZ Secure Proxy Server V7.0 for Solaris AMD 64-bit	1 枚の CD-ROM
IBM Edge Components and IBM Edge Components for IPv6 V7.0 for Solaris AMD 64-bit	1 枚の DVD
IBM Tivoli Access Manager for e-business V6.1 for Solaris AMD 64-bit	1 枚の CD-ROM
IBM Tivoli Directory Server V6.2 Solaris AMD 64-bit	1 枚の DVD
IBM Rational Application Developer Assembly and Deployment Features for WebSphere Software V7.5 32/64-bit	6 枚の CD-ROM

表 14. Solaris メディア・パック (AMD 64 ビット・プラットフォーム用) の内容 (続き)

メディア・ラベル	供給形態
IBM WebSphere Installation Factory V7.0 for Solaris AMD 64-bit	1 枚の CD-ROM
IBM Support Assistant V4.0.2 (WorkBench) for Linux 32-bit	1 枚の CD-ROM
IBM Support Assistant V4.0.2 (WorkBench) for Windows 32-bit	1 枚の CD-ROM

Windows メディア・パック

WebSphere Process Server for Windows メディア・パックには、32 ビットおよび 64 ビット・プラットフォーム用の WebSphere Process Server の内容が含まれています。表 15 は、32 ビット・プラットフォーム用の内容を示したものです。30 ページの表 16 は、64 ビット・プラットフォーム用の内容を示したものです。

表 15. Windows メディア・パック (32 ビット・プラットフォーム用) の内容

メディア・ラベル	供給形態
WebSphere Process Server V7.0 for Windows 32-bit	1 枚の DVD に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。 <ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Process Server (WBI ディレクトリー内) • IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システム (IEHS ディレクトリー内) • マイグレーション・ツール (Migration ディレクトリー内) • WebSphere Application Server Network Deployment (V7.0) (WAS ディレクトリー内) <p><i>WebSphere Process Server V7.0 DVD および WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V7.0 CD の任意のインストール可能コンポーネントをインストールし、その情報を表示するには、ルート・ディレクトリー内にある Launchpad アプリケーションを使用します。</i></p>
WebSphere Portal Add-in for WebSphere Process Server V7.0 for Windows 32-bit	1 枚の DVD
WebSphere Application Server Network Deployment V7.0 Supplements for Windows on Intel 32-bit	2 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。 <ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Application Server 用アプリケーション・クライアント • IBM HTTP Server • IBM Support Assistant • Web サーバー・プラグイン • マイグレーション・ツール

表 15. Windows メディア・バック (32 ビット・プラットフォーム用) の内容 (続き)

メディア・ラベル	供給形態
WebSphere Application Server Network Deployment Rational Agent Controller V8.0	1 枚の CD-ROM
WorldType Fonts for Multiplatform, Multilingual for WebSphere Application Server Network Deployment V7.0 32/64-bit	1 枚の CD-ROM
IBM DMZ Secure Proxy Server V7.0 for Windows 32-bit	1 枚の CD-ROM
IBM Edge Components and IBM Edge Components for IPv6 V7.0 for Windows 32/64-bit	1 枚の CD-ROM
IBM Tivoli Access Manager for e-business V6.1 for Windows 32/64-bit	1 枚の CD-ROM
IBM Tivoli Directory Server V6.2 for Windows 32/64-bit	1 枚の DVD
IBM DB2 Restricted Enterprise Server Edition V9.5 - Authorized User Option - Activation CD	1 枚の CD-ROM
IBM DB2 Enterprise Server Edition V9.5 for Windows on 32-bit AMD and Intel systems (x86)	1 枚の DVD
IBM Data Server Runtime Client V9.5 for Windows on 32-bit AMD and Intel systems (x86)	1 枚の DVD
IBM Data Server Drivers V9.5 for Windows on 32-bit AMD and Intel systems (x86)	1 枚の DVD
IBM Data Server Client V9.5 for Windows on 32-bit AMD and Intel systems (x86)	1 枚の DVD
IBM Rational Application Developer Assembly and Deployment Features for WebSphere Software V7.5 32/64-bit	6 枚の CD-ROM
IBM Tivoli Composite Application Manager for WebSphere V7.0 for UNIX-AIX, HP-UX and Solaris	1 枚の CD-ROM
IBM WebSphere Installation Factory V7.0 Windows on x86 32-bit	1 枚の CD-ROM

表 15. Windows メディア・パック (32 ビット・プラットフォーム用) の内容 (続き)

メディア・ラベル	供給形態
IBM Support Assistant V4.0.2 (WorkBench) for Linux 32-bit	1 枚の CD-ROM
IBM Support Assistant V4.0.2 (WorkBench) for Windows 32-bit	1 枚の CD-ROM
IBM Support Assistant V4.0.2 (Agent) for Windows on x86 32-bit	1 枚の CD-ROM

表 16. Windows メディア・パック (64 ビット・プラットフォーム用) の内容

メディア・ラベル	供給形態
WebSphere Process Server V7.0 for Windows 64-bit	2 枚の DVD に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。 <ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Process Server (WBI ディレクトリー内) • マイグレーション・ツール (Migration ディレクトリー内) • WebSphere Application Server Network Deployment (V7.0) (WAS ディレクトリー内) <p><i>WebSphere Process Server V7.0 DVD および WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V7.0 CD の任意のインストール可能コンポーネントをインストールし、その情報を表示するには、ルート・ディレクトリー内にある Launchpad アプリケーションを使用します。</i></p>
WebSphere Portal Add-in for WebSphere Process Server V7.0 for Windows 64-bit	1 枚の DVD
WebSphere Application Server Network Deployment V7.0 Supplements for Windows AMD 64-bit	1 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。 <ul style="list-style-type: none"> • IBM HTTP Server • IBM Support Assistant • Web サーバー・プラグイン • マイグレーション・ツール
WorldType Fonts for Multiplatform, Multilingual for WebSphere Application Server Network Deployment V7.0 32/64-bit	1 枚の CD-ROM
IBM DMZ Secure Proxy Server V7.0 for Windows 64-bit	1 枚の CD-ROM
IBM Edge Components and IBM Edge Components for IPv6 V7.0 for Windows 32/64-bit	1 枚の DVD
IBM Tivoli Access Manager for e-business V6.1 for Windows 32/64-bit	1 枚の CD-ROM

表 16. Windows メディア・バック (64 ビット・プラットフォーム用) の内容 (続き)

メディア・ラベル	供給形態
IBM DB2 Restricted Enterprise Server Edition V9.5 - Authorized User Option - Activation CD	1 枚の CD-ROM
IBM Tivoli Directory Server V6.2 for Windows 32/64-bit	1 枚の DVD
IBM DB2 Enterprise Server Edition V9.5 for Windows on AMD64 and Intel EM64T systems (x64)	1 枚の DVD
IBM Data Server Runtime Client V9.5 for Windows on AMD64 and Intel EM64T systems (x64)	1 枚の DVD
IBM Data Server Drivers V9.5 for Windows on AMD64 and Intel EM64T systems (x64)	1 枚の DVD
IBM Data Server Client V9.5 for Windows on AMD64 and Intel EM64T systems (x64)	1 枚の DVD
IBM Rational Application Developer Assembly and Deployment Features for WebSphere Software V7.5 32/64-bit	6 枚の CD-ROM
IBM Tivoli Composite Application Manager for WebSphere V7.0 for UNIX-AIX, HP-UX and Solaris	1 枚の CD-ROM
IBM WebSphere Installation Factory V7.0 Windows on x86 64-bit	1 枚の CD-ROM
IBM Support Assistant V4.0.2 (WorkBench) for Linux 32-bit	1 枚の CD-ROM
IBM Support Assistant V4.0.2 (WorkBench) for Windows 32-bit	1 枚の CD-ROM

IBM Message Service Client for C/C++ および IBM Message Service Client for .NET は、メディア・バックの一部ではなくなりました。これらの製品の最新バージョンは、IBM サポート & ダウンロード Web サイト (『IA94: IBM Message Service Client for C/C++』および『IA9H: IBM Message Service Client for .NET』) からダウンロードできます。

WebSphere のお客様による IBM Tivoli Federated Identity Manager の制限付き使用の情報は、Tivoli Federated Identity Manager for WebSphere Application Server Network Deployment からアクセスできます。

第 2 章 WebSphere Process Server のインストールの準備

WebSphere Process Server をインストールする前に、ご使用のシステムがすべてのハードウェアおよびソフトウェア要件を満たしていることを確認して、オペレーティング・システムをインストールに向けて準備する必要があります。また、スタンドアロン・サーバーを作成するのか Network Deployment のシナリオを作成するのかを決定し、必要に応じて詳細な構成計画を立てる必要もあります。

このタスクについて

サブトピックでは、WebSphere Process Server を新しい環境と既存の環境にインストールするための準備について説明しています。この情報を参照して、スタンドアロン・サーバーのシナリオを作成するのか、Network Deployment のシナリオを作成するのかを選択し、既存の環境に与える影響について検討します。

次のタスク

47 ページの『第 3 章 ソフトウェアのインストール』にある指示に従って、ソフトウェアをインストールします。

WebSphere Process Server のインストールに関する前提条件

WebSphere Process Server または WebSphere Process Server Client をインストールする前に、一連の前提条件が満たされていることを確認する必要があります。

前提条件は以下のとおりです。

- インストールの計画をたてます。

インストールの計画、および WebSphere Process Server で必要とされるデータベースについて詳しくは、『WebSphere Process Server の計画』およびソフトウェアのニーズの判別の各トピックを参照してください。

- 必ずすべてのハードウェア要件およびソフトウェア要件をシステムが満たすようにします。また、インストールのための十分なスペースをシステムに確保します (一時スペースを含む)。詳しくは、<http://www.ibm.com/support/docview.wss?uid=swg27006205>を参照してください。
- WebSphere Application Server Network Deployment の新規インストールと共に本製品をインストールする場合、Launchpad アプリケーションを使用してインストール・プロセスを開始すると、Launchpad によって IBM Installation Manager (まだインストールされていない場合)、WebSphere Application Server Network Deployment、WebSphere Application Server Feature Pack for XML、WebSphere Application Server Feature Pack for Service Component Architecture (SCA) (Service Data Objects (SDO) フィーチャー付属)、および WebSphere Process Server がインストールされます。詳しくは、49 ページの『WebSphere Process Server の初回の対話式インストール』を参照してください。
- WebSphere Integration Developer 製品には、デフォルトの統合テスト・クライアントが付属しています。デフォルトの統合テスト・クライアントの代わりに、この

WebSphere Process Server インストール済み環境を統合テスト・クライアントとして使用する場合は、このシナリオのセットアップ方法についてWebSphere Integration Developer による使用のための WebSphere Process Server のインストール計画を参照してください。

- インストール用のオペレーティング・システムを準備します。プラットフォーム固有の情報へのリンクについては、WebSphere Application Server Network Deployment インフォメーション・センターの『製品インストールのためのオペレーティング・システムの準備』を参照してください。
- WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の既存のインストール済み環境に WebSphere Process Server をインストールする場合は、製品体系が一致していることを確認する必要があります。64 ビット・バージョンの WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment に 32 ビット・バージョンの WebSphere Process Server をインストールすることも、32 ビット・バージョンの WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment に 64 ビット・バージョンの WebSphere Process Server をインストールすることもできません。
- パスポート・アドバンテージで入手したイメージからインストールを行う場合は、159 ページの『パスポート・アドバンテージからインストールするときの特別な考慮事項』を参照して、ユーザー許可とディレクトリー・セットアップに関するガイドラインを確認してください。
- 機能の追加先または拡張の対象とするすべての製品で、サーバー、デプロイメント・マネージャー、およびノード・エージェントのすべてのプロセスを停止します。これらのタスクの実行方法については、『サーバーおよびノードの停止』を参照してください。
- 機能の追加先または拡張の対象とする製品で、すべての保守パッケージをアンインストールします。これを行う理由は、製品を変換するために必要な機能およびコンポーネントには、保守が適用されていないためです。すべての保守パッケージを除去すると、製品全体が同じリリース・レベルになります。その後で、保守パッケージを再適用できます。
- **Linux** **Linux** プラットフォームの場合: WebSphere Process Server インストールに以下の項目があることを確認します。
 - カーネルおよび C ランタイム・ライブラリー
 - C++ ランタイム・ライブラリーの最新のバージョンとすべての互換性バージョン
 - X Window ライブラリーおよびランタイム
 - GTK ランタイム・ライブラリー

前提条件が満たされたら、製品をインストールする準備は完了です。

サーバーおよびノードの停止

機能の追加先とする製品、または拡張あるいはアンインストールを行う製品のすべてで、サーバー、デプロイメント・マネージャー、ノード・エージェントのすべてのプロセスを停止します。

このタスクについて

特定のコマンドを使用して、サーバー、デプロイメント・マネージャー、およびノード・エージェント・プロセスを停止します。以下のステップを実行してこれらのプロセスを停止してください。

手順

- 1 つ以上のデプロイメント・マネージャーがインストールされている場合は、**stopManager** コマンドを使用して各 *dmgr* プロセスを停止します。例えば、プラットフォームに応じて、以下のコマンドのいずれかを実行します (ここで、*profile_root* はデプロイメント・マネージャー・プロファイルのインストール・ディレクトリを表します)。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
`profile_root/bin/stopManager.sh`

- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合:
`profile_root%bin%stopManager.bat`

セキュリティが有効な場合は、代わりに以下のコマンドのいずれかを使用します。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
`profile_root/bin/stopManager.sh -user user_ID -password password`

- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合:
`profile_root%bin%stopManager.bat -user user_ID -password password`

2. **stopNode** コマンドを使用して、ノード・エージェント・プロセスを停止します。システムのデプロイメント・マネージャーに統合されているノードがある場合は、統合されたノードと共に各サーバーで実行されている可能性のある個々のノード・エージェント・プロセスを停止します。例えば、プラットフォームに応じて、以下のいずれかのコマンドを実行し、ノード・エージェント・プロセスを停止します (ここで、*profile_root* は統合ノードのインストール・ディレクトリを表します)。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
`profile_root/bin/stopNode.sh`

- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合:
`profile_root%bin%stopNode.bat`

サーバーが稼働中で、セキュリティが使用可能な場合は、代わりに以下のコマンドのいずれかを使用します。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
`profile_root/bin/stopNode.sh -user user_ID -password password`

- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合:
`profile_root%bin%stopNode.bat -user user_ID -password password`

3. **stopServer** コマンドを使用して、稼働しているスタンドアロン・サーバーをそれぞれ停止します。サーバー上のすべてのプロファイルのサーバー・プロセスをすべて停止します。例えば、プラットフォームに応じて、以下のいずれかのコマ

ンドを実行し、プロファイル内のサーバーを停止します。この例では、`profile_root` は、以下のようなプロファイルのインストール・ロケーションを表します。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
`profile_root/bin/stopServer.sh server1`

- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合:
`profile_root%bin%stopServer.bat server1`

サーバーが稼働中で、セキュリティーが使用可能な場合は、代わりに以下のコマンドのいずれかを使用します。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
`profile_root/bin/stopServer.sh server1 -user user_ID -password password`

- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合:
`profile_root%bin%stopServer.bat server1 -user user_ID -password password`

次のタスク

これで、WebSphere 製品に機能を追加したり、この製品を拡張またはアンインストールできるようになりました。

製品インストール前の共通データベースの手動作成

共通データベースを手動で作成する場合、以下の指示に従ってください。

このタスクについて

WebSphere Process Server には、共通データベースを手動で作成する際に使用できるデフォルトのスクリプトが用意されています。次のような状況の場合は、データベースを手動で作成することを検討してください。

- 組織において、DBA 特権を持つユーザーがデータベースを作成する必要がある場合は、プロファイルを作成または拡張する前に、そのユーザーが共通データベースを作成する必要があります。
- 製品のインストール中にプロファイルを作成または拡張する場合は、WebSphere Process Server をインストールする前に、DBA 特権を持つユーザーが共通データベースを作成する必要があります。

手順

1. データベース作成スクリプトを含むディレクトリーに移動します。スクリプトは、製品メディアおよび製品インストール後のディレクトリーの両方にあります。デフォルトでは、スクリプトは以下のディレクトリーにあります。
 - 製品メディアの場所:

- **Linux** **UNIX** `<media_root>/dbscripts` または
`<extract_directory>/dbscripts`

- **Windows** <media_root>%dbscripts または
<extract_directory>%dbscripts
 - インストール後の場所:
 - **Linux** **UNIX** *install_root/dbscripts*
 - **Windows** *install_root%dbscripts*
2. ご使用のデータベース製品向けの共通データベース・スクリプトを含むディレクトリーを開きます。デフォルトの場所はプラットフォームによって異なります。
- **Linux** **UNIX** *.../CommonDB/db_type*
 - **Windows** *...%CommonDB%db_type*

変数 *db_type* はサポートされているデータベース・タイプを表します。データベース・タイプおよびディレクトリー名については、表 17 を参照してください。

利用可能なデータベース・タイプおよびそのディレクトリー名は、以下のとおりです。

表 17. 利用可能なデータベース・タイプおよびそのディレクトリー名

データベース・タイプ	ディレクトリー名	対応するサブトピック
DB2 for i5/OS® (ツールボックス) および DB2 for IBM i (ツールボックス)	DB2iSeries	『DB2 for IBM i データベースの作成』
DB2 Universal Database™ (z/OS® 以外のすべてのオペレーティング・システム)	DB2	39 ページの『DB2 データベースの作成』
DB2 for z/OS バージョン 8.x	DB2z0SV8	40 ページの『z/OS 用の DB2 データベースの作成』
DB2 for z/OS バージョン 9.x	DB2z0SV9	
Informix®	Informix	42 ページの『Informix データベースの作成』
Oracle	Oracle	43 ページの『Oracle データベースの作成』
Microsoft® SQL Server	SQLServer	45 ページの『Microsoft SQL Server データベースの作成』

3. 表 17 で対応するサブトピックのリンクをクリックして、共通データベースの手動による作成を続けます。

DB2 for IBM i データベースの作成

共通データベースを手動で作成するには、WebSphere Process Server に付属のスクリプトを編集および実行する必要があります。このトピックでは、DB2 for i5/OS および DB2 for IBM i データベースに関連付けられたスクリプトの編集および実行方法を説明します。

このタスクについて

スクリプトを実行して DB2 for i5/OS または DB2 for IBM i データベースを手動で作成できるようにするには、まず WebSphere Process Server 用にスクリプトをカスタマイズする必要があります。WebSphere Process Server には、以下のスクリプトが付属しています。

表 18. WebSphere Process Server 用の DB2 for i5/OS または DB2 for IBM i スクリプト

createDatabase_CommonDB.sql
createTable_AppScheduler.sql
createTable_mediation.sql
createTable_RelationshipService.sql
createTable_customization.sql
dropTable_AppScheduler.sql
configCommonDB
createTable_CommonDB.sql
createTable_lockmanager.sql
createTable_Recovery.sql
createTable_EsbLoggerMediation.sql
insertTable_CommonDB.sql
createDBTables
createTable_lockmanager.sql
createTable_customization.sql
createTable_mediation.sql
createTable_DirectDeploy.sql
createTable_AppScheduler.sql

手順

1. 必ずデータベース・スキーマを更新可能な権限を持つユーザー ID を使用してください。
2. データベース・スクリプトが格納されているディレクトリを見つけます。
 - `<media_root>/dbscripts/CommonDB` または `<extract_directory>/dbscripts/CommonDB`
3. `configCommonDB` の場所を探索します。
 - a. `DB_NAME` 変数をデータベース名 (`*LOCAL` や `*SYSBAS` など) で置き換えます。
 - b. `USER_NAME` 変数を DB2 for i5/OS または DB2 for IBM i のユーザー名 (`db2admin` など) で置き換えます。
 - c. `DB_SCHEMA` 変数を DB2 for i5/OS または DB2 for IBM i のスキーマ名 (`WPRCSDB` など) で置き換えます。

重要: 新規のローカル・データベースを作成する場合は、`createDB` パラメーターを `configCommonDB` スクリプトに渡す必要があります。それ以外は、既存のデータベースが使用されます。

また、システム内で重複しない固有のスキーマ名を指定する必要もあります。

4. QShell で configCommonDB スクリプトを実行します。これにより createDBTables スクリプトが実行され、共通データベースで必要なスキーマとテーブルが作成されます。

新規のローカル・データベースを作成する場合は、**createDB** パラメーターを configCommonDB スクリプトに渡す必要があります。それ以外は、既存のデータベースが使用されます。以下に例を示します。

configCommonDB.sh createDB - 新規データベース内にテーブルを作成します。

configCommonDB.sh - 既存のデータベースを使用してテーブルを作成します。

重要: これらのスクリプトを実行するには、IBM i システムで *SECOFR 権限が必要になります。

5. エラーが発生した場合、またはデータベース・クライアントの出力で障害があることが示された場合、報告されたエラーを修正して、再試行します。

タスクの結果

共通データベースのスキーマが作成されます。

DB2 データベースの作成

共通データベースを手動で作成するには、WebSphere Process Server に付属のスクリプトを編集および実行する必要があります。このトピックでは、DB2 データベースに関連付けられたスクリプトの編集および実行方法を説明します。

このタスクについて

スクリプトを実行して DB2 データベースを手動で作成できるようにするには、まず WebSphere Process Server 用にスクリプトをカスタマイズする必要があります。WebSphere Process Server には、以下のスクリプトが付属しています。

表 19. WebSphere Process Server 用の DB2 スクリプト

configCommonDB.bat
configCommonDB.sh
createDBTables.bat
createDBTables.sh
createTable_CommonDB.sql
createTable_lockmanager.sql
createTable_Recovery.sql
createTable_EsbLoggerMediation.sql
createTable_governancerepository.sql
insertTable_CommonDB.sql
createTable_Relationship.sql
createTable_RelationshipService.sql
createTable_customization.sql
createTable_mediation.sql

表 19. WebSphere Process Server 用の DB2 スクリプト (続き)

createTable_DirectDeploy.sql
createTable_AppScheduler.sql

手順

- 必ずデータベース・スキーマを更新可能な権限を持つユーザー ID を使用してください。
- データベース・スクリプトが格納されているディレクトリーを見つけます。
 - Linux** **UNIX** `<media_root>/dbscripts/CommonDB` または `<extract_directory>/dbscripts/CommonDB`
 - Windows** `<media_root>%dbscripts%CommonDB` または `<extract_directory>%dbscripts%CommonDB`
- configCommonDB.bat ファイルまたは configCommonDB.sh ファイルを見つけ、以下のサブタスクを実行します。
 - `DB_NAME` 変数をデータベース名 (例えば、WPRCSDB) で置き換えます。
 - `USER_NAME` 変数をデータベースのユーザー名で置き換えます (例えば、db2admin)。

新規のローカル・データベースを作成する場合は、**createDB** パラメーターを configCommonDB スクリプトに渡す必要があります。それ以外は、既存のデータベースが使用されます。以下に例を示します。

configCommonDB.sh createDB - 新規データベース内にテーブルを作成します。

configCommonDB.sh - 既存のデータベースを使用してテーブルを作成します。

重要: これらのスクリプトを実行するには、IBM i システムで *SECOFR 権限が必要になります。

- createDatabase_CommonDB.sql ファイルの場所を探し、以下のサブタスクを実行します。
 - `DB_NAME` 変数をデータベース名 (例えば、WPRCSDB) で置き換えます。
- configCommonDB.bat または configCommonDB.sh スクリプトを実行します。これにより createDBTables.bat または createDBTables.sh スクリプトが実行され、共通データベースで必要なスキーマとテーブルが作成されます。
- エラーが発生した場合、またはデータベース・クライアントの出力で障害があることが示された場合、報告されたエラーを修正して、再試行します。

タスクの結果

DB2 データベースが作成されます。

z/OS 用の DB2 データベースの作成

共通データベースを手動で作成するには、WebSphere Process Server に付属のスクリプトを編集および実行する必要があります。このトピックでは、DB2 for z/OS データベースに関連付けられたスクリプトの編集および実行方法を説明します。

このタスクについて

スクリプトを実行して DB2 for z/OS データベースを手動で作成できるようにするには、まず WebSphere Process Server 用にスクリプトをカスタマイズする必要があります。WebSphere Process Server には、以下のスクリプトが付属しています。

表 20. WebSphere Process Server 用の DB2 for z/OS スクリプト

createTable_AppScheduler.sql
createTable_CommonDB.sql
createTable_DirectDeploy.sql
createTable_EsbLoggerMediation.sql
createTable_Recovery.sql
createTable_Relationship.sql
createTable_RelationshipService.sql
createTable_customization.sql
createTable_governancerepository.sql
createTable_lockmanager.sql
createTable_mediation.sql
insertTable_CommonDB.sql

手順

1. 必ずデータベース・スキーマを更新可能な権限を持つユーザー ID を使用してください。
2. データベース・スクリプトが格納されているディレクトリを見つけます。
 - **Linux** **UNIX** `<media_root>/dbscripts/CommonDB` または `<extract_directory>/dbscripts/CommonDB`
 - **Windows** `<media_root>%dbscripts%CommonDB` または `<extract_directory>%dbscripts%CommonDB`
3. DB2zOSV8 ディレクトリまたは DB2zOSV9 ディレクトリのスクリプトを編集するかどうかを選択します。
4. DB2 for z/OS スクリプト内の以下の変数 (@DB_NAME@、@STOGRPE@、および @SCHEMA@) を、ご使用のデータベース固有の情報に置き換えます。
5. 表 20 にリストされている DB2 for z/OS スクリプトを実行します。ご使用のデータベースで .sql スクリプトを実行する方法については、そのデータベース製品の資料を参照してください。
6. エラーが発生した場合、またはデータベース・クライアントの出力で障害があることが示された場合、報告されたエラーを修正して、再試行します。

タスクの結果

DB2 for z/OS データベースが作成されます。

例

createTable_lockmanager.sql スクリプトが、WESB V7.0 CD イメージの dbscripts/CommonDB/DB2zOSV8 フォルダの下にありません。

CD イメージからスクリプトを直接使用してデータベースをセットアップできるため、製品全体のインストールを待機したり、これらのスクリプトを取得するためのプロファイルを作成したりする必要はありません。

CD イメージからスクリプトを使用して共通データベースを作成すると、createTable_lockmanager.sql スクリプトがないため、これらのテーブルへの応答に関してランタイム問題が発生する可能性があります。

ただし、このファイルは、WebSphere Process Server のインストール後に <INSTALL>/dbscripts/CommonDB/DB2zOSV8 の下に置かれます。また、プロファイルの作成後には profiles/<profiles>/dbscripts フォルダの下に置かれます。

これを修正するには、製品をインストールした後、<INSTALL>/dbscripts/CommonDB/DB2zOSV8 ロケーションの下にあるスクリプトを使用します。

Informix データベースの作成

共通データベースを手動で作成するには、WebSphere Process Server に付属のスクリプトを編集および実行する必要があります。このトピックでは、Informix データベースに関連付けられたスクリプトの編集および実行方法を説明します。

このタスクについて

スクリプトを実行して Informix データベースを手動で作成できるようにするには、まず WebSphere Process Server 用にスクリプトをカスタマイズする必要があります。WebSphere Process Server には、以下のスクリプトが付属しています。

表 21. WebSphere Process Server 用の Informix スクリプト

createDatabase_CommonDB.sql
createTable_RelationshipService.sql
dropTable_AppScheduler.sql
createTable_CommonDB.sql
createTable_lockmanager.sql
createTable_Recovery.sql
createTable_EsbLoggerMediation.sql
insertTable_CommonDB.sql
configCommonDB.bat
createTable_customization.sql
createTable_mediation.sql
createTable_DirectDeploy.sql
createTable_AppScheduler.sql

手順

1. 必ずデータベース・スキーマを更新可能な権限を持つユーザー ID を使用してください。
2. データベース・スクリプトが格納されているディレクトリーを見つけてます。
 - **Linux** **UNIX** `<media_root>/dbscripts/CommonDB` または `<extract_directory>/dbscripts/CommonDB`
 - **Windows** `<media_root>%dbscripts%CommonDB` または `<extract_directory>%dbscripts%CommonDB`
3. `createDatabase_CommonDB.sql` ファイルの場所を探し、以下のサブタスクを実行します。
 - a. `DB_NAME` 変数をデータベース名 (例えば、`WPRCSDB`) で置き換えます。
 - b. `DB_INSTANCE` 変数を Informix インスタンス (例えば、`ol_myinstance`) で置き換えます。
 - c. `DB_LOCATION` 変数を Informix データベースのロケーション (`c:%informix` など) で置き換えます。
4. `configCommonDB.bat` スクリプトを実行します。これにより `createDBTables` スクリプトが実行され、共通データベースで必要なスキーマとテーブルが作成されます。
5. エラーが発生した場合、またはデータベース・クライアントの出力で障害があることが示された場合、報告されたエラーを修正して、再試行します。

タスクの結果

Informix データベースが作成されます。

Oracle データベースの作成

共通データベースを手動で作成するには、WebSphere Process Server に付属のスクリプトを編集および実行する必要があります。このトピックでは、Oracle データベースに関連付けられたスクリプトの編集および実行方法を説明します。

このタスクについて

スクリプトを実行して Oracle データベースを手動で作成できるようにするには、まず WebSphere Process Server 用にスクリプトをカスタマイズする必要があります。WebSphere Process Server には、以下のスクリプトが付属しています。

表 22. WebSphere Process Server 用の Oracle スクリプト

<code>configCommonDB.bat</code>
<code>configCommonDB.sh</code>
<code>createDatabase_commonDB.sql</code>
<code>createTable_commonDB.sql</code>
<code>createTable_EsbLoggerMediation.sql</code>
<code>createTable_governancerepository.sql</code>
<code>createTable_lockmanager.sql</code>
<code>createTable_Recovery.sql</code>

表 22. WebSphere Process Server 用の Oracle スクリプト (続き)

createTable_RelationshipMetadataTable.sql
insertTable_CommonDB.sql
createTable_RelationshipViewMetaaTable.sql
createTable_customization.sql
createTable_mediation.sql
createTable_DirectDeploy.sql
createTable_AppScheduler.sql

手順

- 必ずデータベース・スキーマを更新可能な権限を持つユーザー ID を使用してください。
- データベース・スクリプトが格納されているディレクトリーを見つけます。
 - Linux** **UNIX** `media_root/dbscripts/CommonDB/oracle` or `<extract_directory>/dbscripts/CommonDB/oracle`
 - Windows** `media_root%dbscripts%CommonDB%oracle` or `<extract_directory>%dbscripts%CommonDB%oracle`
- configCommonDB.bat ファイルまたは configCommonDB.sh ファイルを見つけ、以下のサブタスクを実行します。
 - DB_NAME 変数を Oracle データベース名 [SID] (ORCL など) で置き換えます。
 - DB_USER 変数を Oracle ユーザー (例えば、orcCOMM) で置き換えます。
- createSchema_CommonDB.sql ファイル (必要なスキーマを作成するために使用するテンプレート) の場所を見つけます。データベース・スキーマを作成するには、以下のようにします。
 - DB_USER 変数をデータベース・スキーマ名で置き換えます。例えば、orcCOMM とします。
 - dbCommonPassword 変数をデータベース・スキーマのパスワードで置き換えます。例えば、youNameIt とします。変更されていない場合、DB_USER のパスワード入力を求められます。
 - 追加のスキーマごとに上記の手順を繰り返します。
 - 必須: createSchema_CommonDB.sql スクリプトを実行します。

以下のコンポーネントはスキーマを必要とします。プロファイルの作成中にこれらのスキーマが渡されなかった場合は、自動的に生成されます。デフォルトのスキーマは以下のとおりです。

表 23. デフォルトのスキーマ

コンポーネント	デフォルト値
CommonDB	first3CharOfSIDCOMM
Business Space	IBMBUSSP
SCA.SYSTEM ME	first3CharOfSIDSS00
SCA.APP ME	first3CharOfSIDSA00

表 23. デフォルトのスキーマ (続き)

コンポーネント	デフォルト値
CEI ME	<i>first3CharOfSIDCM00</i>
BPC ME	<i>first3CharOfSIDBM00</i>
CEI	<i>first3CharOfSIDCEID</i>

上記のパラメーターにおいて、パスワードの値はプロファイルの構成方法によって異なります。値は、dbPassword、または manageprofiles コマンド行ユーティリティーの実行中に使用する値にすることができます。これらのスクリプトを実行するには、SYSDBA 特権を持っている必要があります。

- すべてのスクリプトを *extract_directory%dbscripts%CommonDB* ディレクトリーから Oracle ワークステーションにコピーし、*configCommonDB.bat* スクリプトまたは *configCommonDB.sh* スクリプトを実行します。

注: このスクリプトは、上記のステップ 4 (44 ページ) で指定されたデータベース・スキーマ名 (例えば *orcCOMM*) を使用して、表を作成するためのデータベースを接続するため、スクリプトを実行する前に、このデータベース・スキーマ名が作成されていることを確認します。

- エラーが発生した場合、またはデータベース・クライアントの出力で障害があることが示された場合、報告されたエラーを修正して、再試行します。

タスクの結果

Oracle データベースが作成されます。

Microsoft SQL Server データベースの作成

共通データベースを手動で作成するには、WebSphere Process Server に付属のスクリプトを編集および実行する必要があります。このトピックでは、Microsoft SQL Server データベースに関連付けられたスクリプトの編集および実行方法を説明します。

このタスクについて

スクリプトを実行して MicrosoftSQL Server データベースを手動で作成できるようにするには、まず WebSphere Process Server 用にスクリプトをカスタマイズする必要があります。WebSphere Process Server には、以下のスクリプトが付属しています。

表 24. WebSphere Process Server 用の Microsoft SQL Server スクリプト

<i>createDatabase_CommonDB.sql</i>
<i>createTable_RelationshipService.sql</i>
<i>dropTable_AppScheduler.sql</i>
<i>createTable_CommonDB.sql</i>
<i>createTable_lockmanager.sql</i>
<i>createTable_Recovery.sql</i>
<i>createTable_EsbLoggerMediation.sql</i>
<i>insertTable_CommonDB.sql</i>

表 24. WebSphere Process Server 用の Microsoft SQL Server スクリプト (続き)

configCommonDB.bat
createTable_customization.sql
createTable_mediation.sql
createTable_DirectDeploy.sql
createTable_AppScheduler.sql

手順

- 必ずデータベース・スキーマを更新可能な権限を持つユーザー ID を使用してください。
- データベース・スクリプトが格納されているディレクトリーを見つけます。
 - Linux** **UNIX** `<media_root>/dbscripts/CommonDB` または `<extract_directory>/dbscripts/CommonDB`
 - Windows** `<media_root>%dbscripts%CommonDB` または `<extract_directory>%dbscripts%CommonDB`
- configCommonDB.bat ファイルまたは configCommonDB.sh ファイルを見つけ、以下のサブタスクを実行します。
 - `DB_NAME` 変数をデータベース名 (例えば、WPRCSDB) で置き換えます。
 - `DB_USER` 変数をデータベースのユーザー名 (例えば、sqluser) で置き換えます。
 - `DB_HOSTNAME` 変数を SQL ホスト名 (例えば、me.usca.ibm.com) で置き換えます。
- 45 ページの表 24 にリストされている Microsoft SQL Server スクリプトを実行します。ご使用のデータベースで .sql スクリプトを実行する方法については、そのデータベース製品の資料を参照してください。
- エラーが発生した場合、またはデータベース・クライアントの出力で障害があることが示された場合、報告されたエラーを修正して、再試行します。

タスクの結果

Microsoft SQL Server データベースが作成されます。

第 3 章 ソフトウェアのインストール

WebSphere Process Server 製品の入手方法は 2 つあります。1 つは製品パッケージ内のディスクから入手する方法で、もう 1 つは Passport Advantage® サイトからインストール・イメージをダウンロードする方法です (この場合は、そのためのライセンスが必要です)。ソフトウェアは、Launchpad プログラムで対話的にインストールするか、Installation Manager をサイレント・インストール・モードで実行してサイレントにインストールします。サイレント・モードでは、インストール・ウィザードはグラフィカル・インターフェースを表示せずに、応答ファイルから応答を読み取ります。

WebSphere Process Server のソフトウェアをインストールする前に、現在の環境およびビジネス要件を評価して、実装するシステムがニーズを満たしていることを確認する必要があります。WebSphere Process Server のようなミドルウェアの場合、ご使用のエンタープライズ情報システム (EIS) のさまざまな面 (容量やセキュリティなど) を評価する必要があります。

ダウンロード可能なイメージの詳細については、パスポート・アドバンテージ Web サイトの<http://www-01.ibm.com/software/lotus/passportadvantage/>を参照してください。

インストールの計画、および WebSphere Process Server で必要とされるデータベースについて詳しくは、『WebSphere Process Server の計画』の各トピックを参照してください。

次に、33 ページの『WebSphere Process Server のインストールに関する前提条件』にあるインストール前提条件を確認します。

インストールを計画して前提条件を検査したら、該当するディスクまたは配布メディアからソフトウェアをインストールします。ソフトウェアのインストールは、ランチパッドから対話式で行うか、製品パッケージのインストールに必要なコマンドを入力する応答ファイルを使用して、サイレント・モードで行うかを選択できます。

- すべてのプラットフォームで対話的にインストールするには、49 ページの『WebSphere Process Server の初回の対話式インストール』を参照してください。
- **Linux** **UNIX** **Windows** Linux、UNIX、および Windows プラットフォームにサイレント・インストールするには、62 ページの『WebSphere Process Server のサイレント・インストール』を参照してください。

注: **HP-UX** **Solaris** HP-UX PA-RISC または Solaris on AMD (64 ビット) プラットフォームにインストールする場合は、サイレント・インストール・モードを使用する必要があります。

Windows 2000、Windows XP、Windows Vista、および Windows 7 オペレーティング・システムでの最大推奨パス長さは 60 文字です。

ソフトウェアをインストールすると、製品の中核のファイル一式がワークステーション上に作成されます。これらのファイルは、スタンドアロン・サーバーおよびデプロイメント環境を構成する場合に必要です。

インストールを実行したら、プロファイル管理ツールを使用して、スタンドアロン・サーバー・プロファイル、デプロイメント・マネージャー・プロファイル、カスタム・プロファイル、またはデプロイメント環境構成を作成することができます。また、ファースト・ステップ・コンソールを使用して、スタンドアロン・サーバー・プロファイルまたはデプロイメント・マネージャー・プロファイルが正常に作成されたことを検証したり、サーバーを始動または停止したり、その他のタスクを実行したりすることもできます。

Launchpad の開始

WebSphere Process Server の Launchpad は、サーバー環境全体のインストールを一元的に実行するための参照ポイントであり、この環境には、WebSphere Process Server、WebSphere Application Server Network Deployment、Web サーバー、および追加のサポート・ソフトウェアや資料を組み込むことができます。

始める前に

Launchpad アプリケーションは、製品 DVD およびダウンロード済みインストール・イメージに収録されています。開始する前に、以下の前提条件を満たす必要があります。

- 33 ページの『WebSphere Process Server のインストールに関する前提条件』のトピックを参照して、製品をインストールするための前提条件を確認します。
- Launchpad は Web アプリケーションなので、サポートされるバージョンの Web ブラウザーがインストールされている必要があります。

Linux

UNIX

Windows

WebSphere Application Server Network

Deployment インフォメーション・センターにあるプラットフォーム固有のトピック『インストールのためのオペレーティング・システムの準備』には、すべてのプラットフォームでサポートされる Web ブラウザーのインストールに関する詳しい指示があります。

手順

1. システムにログオンします。
2. 製品 DVD からインストールするか、またはパスポート・アドバンテージからダウンロードしたイメージからインストールするかに応じて、以下のいずれかの方法でメディアにアクセスします。
 - 製品 DVD からインストールする場合は、以下のステップを実行します。
 - a. *WebSphere Process Server Version 7.0* のラベルの付いた製品ディスクをディスク・ドライブに挿入します。必要に応じてディスク・ドライブをマウントします。ワークステーションで自動実行が使用可能な場合は、WebSphere Process Server Launchpad プログラムが自動的に開きます。

自動実行が使用可能でない場合: ワークステーションで自動実行が使用可能でない場合は、以下のコマンドの 1 つを入力して手動で Launchpad を開始します。

- **Linux** **UNIX** `mount_point/launchpad.sh`

- **Windows** (コマンド行から) `DVD_root¥launchpad.exe`

- パスポート・アドバンテージからダウンロードしたイメージを使用してインストールする場合は、以下のステップを実行します。
 - a. イメージを抽出したディレクトリーへナビゲートします。
 - b. 以下のコマンドのいずれかを入力して、Launchpad を開始します。

- **Linux** **UNIX** `extract_directory/launchpad.sh`

- **Windows** (コマンド行から) `extract_directory¥launchpad.exe`

タスクの結果

Launchpad が開きます。Launchpad の開始に関する問題が発生した場合は、168 ページの『Launchpad アプリケーションまたはファースト・ステップのトラブルシューティング』に記載されているトラブルシューティング情報を使用して問題を修正してください。Launchpad がご使用のシステムの言語で初期化されていない場合は、「言語の選択」フィールドで適切な言語を選択します。

Launchpad を使用して、WebSphere Process Server および関連製品のインストールを開始できます。

次のタスク

このトピックにアクセスした元のインストール手順に戻って、手順を継続してください。

WebSphere Process Server の初回の対話式インストール

WebSphere Process Server は対話式にインストールできます。この手順では、インストール・プロセスを Launchpad アプリケーションから開始することを想定しています。さらに、WebSphere Process Server のインストールに必要な前提条件となる基本製品のインストール済み環境がないと想定しています。前提条件となる基本製品には、WebSphere Application Server Network Deployment、WebSphere Application Server Feature Pack for XML、WebSphere Application Server Feature Pack for Service Component Architecture (SCA) (サービス・データ・オブジェクト (SDO) 機能付き) などがあります。

始める前に

WebSphere Process Server をインストールする前に、以下のタスクを実行します。

- 33 ページの『WebSphere Process Server のインストールに関する前提条件』のトピックを参照して、製品をインストールするための前提条件を確認します。オペレーティング・システムおよびソフトウェアの前提条件レベルが特に重要です。インストール・プロセスでは前提条件となるオペレーティング・システム・パッチが自動的に検査されますが、前提条件をまだ検討していない場合は、

<http://www.ibm.com/support/docview.wss?uid=swg27006205> でその検討を行ってください。この Web サイトには、サポートされているオペレーティング・システム、およびオペレーティング・システムを準拠させるためにインストールする必要があるオペレーティング・システムのフィックスおよびパッチがすべて記載されています。さらに、すべての前提ソフトウェアの必要レベルも記載されています。

- **Installation Manager** および **WebSphere Application Server** のインストール・ローションを確認するため、145 ページの『製品およびプロファイルのデフォルトのインストール・ディレクトリー』情報を調べます。
- **Launchpad** は Web アプリケーションなので、サポートされるバージョンの Web ブラウザーがインストールされている必要があります。

Linux **UNIX** **Windows** **WebSphere Application Server Network Deployment** インフォメーション・センターにあるプラットフォーム固有のトピック『インストールのためのオペレーティング・システムの準備』には、すべてのプラットフォームでサポートされる Web ブラウザーのインストールに関する詳しい指示があります。

このタスクについて

WebSphere Application Server Network Deployment の新規インストールと共に本製品をインストールする場合、**Launchpad** アプリケーションを使用してインストール・プロセスを開始すると、**Launchpad** によって **IBM Installation Manager** (まだインストールされていない場合)、**WebSphere Application Server Network Deployment**、**WebSphere Application Server Feature Pack for XML**、**WebSphere Application Server Feature Pack for Service Component Architecture (SCA)** (**Service Data Objects (SDO)** フィーチャー付属)、および **WebSphere Process Server** がインストールされます。

重要: 製品のインストール中または変更中に、**Installation Manager** インターフェースまたはログ・ファイルに以下のようなエラーが表示される場合があります。

```
228 ERROR 07:41.26 Installation Manager cannot remove feature import.configLauncher.  
feature from an installation package that was imported to Installation Manager.  
229 ERROR 07:41.54 Installation Manager cannot remove feature import.productProviders.  
feature from an installation package that was imported to Installation Manager.
```

これらのエラーは無視しても構いません。

手順

1. イメージを抽出したディレクトリーにナビゲートし、以下のコマンドを入力して、**Launchpad** アプリケーションを開始します。
 - **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
`extract_directory/launchpad.sh`
 - **Windows** **Windows** プラットフォームの場合 (コマンド行から):
`extract_directory\launchpad.exe`
2. **Launchpad** の左ペインで、以下のいずれかの入力項目をクリックします。クリックする入力項目は、自分が **root** ユーザー (管理ユーザー) か非 **root** ユーザー (非管理ユーザー) によって異なります。

- root ユーザーまたは管理ユーザーの場合は、「新規インストール」をクリックします。
 - 非 root ユーザーまたは非管理ユーザーの場合は、「非管理または非 root インストール」をクリックします。
3. IBM Installation Manager がインストールされている場合は、Installation Manager が実行されていないことを確認します。
 4. Launchpad の右側ペインで、ステップ 1 として、WebSphere Application Server Network Deployment のインストール済み環境のロケーションを指定するか、デフォルトのロケーションを受け入れて、「WebSphere Application Server のインストール」をクリックします。

制約事項:

- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: IBM Installation Manager の場合、インストール・ディレクトリーのパスの長さは 80 文字以内で指定する必要があります。そのため、ユーザー ID は 20 文字以内で指定することを強くお勧めします。
- WebSphere Application Server Network Deployment のインストール用に独自のディレクトリーを指定する場合、そのディレクトリーは空であっても存在することはできません。

Launchpad アプリケーションにより、以下のタスクが実行されます。

- WebSphere Application Server Network Deployment が指定したディレクトリーにインストールされます。
- IBM Installation Manager がまだインストールされていない場合は、デフォルトのインストール場所にインストールします。IBM Installation Manager のレベルが正しくない場合は、Launchpad アプリケーションによって正しいレベルに更新されます。

Installation Manager および WebSphere Application Server のインストール・ロケーションを確認するため、145 ページの『製品およびプロファイルのデフォルトのインストール・ディレクトリー』情報を調べます。

Installation Manager の追加資料は、Installation Manager インフォメーション・センターで参照することができます。

- WebSphere Application Server が Installation Manager へ自動的にインポートされます。

重要: この製品は、サイレント・インストールによってインストールされます。インストールには数分かかることがあります。インストールと Installation Manager へのインポートが成功したことを示すメッセージが返されるまでは、先に進まないでください。成功のメッセージではなく、以下のいずれかのメッセージが返される場合があります。

- WebSphere Application Server のインストールは失敗しました。この場合は、以下のログ・ファイルを確認して原因を特定してください。

– **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
was_home/logs/install/log.txt

- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合:

`was_home¥logs¥install¥log.txt`

logs ディレクトリーがシステム上に存在しない場合は、インストールがプロセスのごく初期の段階で失敗しています。この場合は、以下のログ・ファイルを確認してください。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:

`user_home/waslogs/log.txt`

- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合:

`user_home¥waslogs¥log.txt`

- WebSphere Application Server のインストールは正常に完了しましたが、Installation Manager へのインポート中にエラーが発生しました。この場合は、以下のログ・ファイルを確認して原因を特定してください。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:

`was_home/logs/launchpad_import.txt`

- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合:

`was_home¥logs¥launchpad_import.txt`

5. Launchpad の右ペインで、ステップ 2 として、「**WebSphere Process Server のインストール**」をクリックします。Launchpad アプリケーションは Installation Manager とその「パッケージのインストール」ウィザードを開始します。
6. 「パッケージのインストール (Install Packages)」ウィザードの「インストール」ページでは、推奨されるすべてのパッケージがインストール用に事前選択されています。これには、WebSphere Application Server Feature Pack for XML、WebSphere Application Server Feature Pack for Service Component Architecture (SCA)、および WebSphere Process Server が含まれます。「次へ」をクリックします。
7. 「パッケージのインストール」ウィザードのライセンス・ページで使用許諾契約書をよく読み、「**使用条件の条項に同意します。**」を選択します。「次へ」をクリックします。フィーチャー・パックのライセンスもパネルに表示されます。すべてのライセンスを受け入れます。
8. 「パッケージのインストール」ウィザードのロケーションのページでは、**IBM WebSphere Application Server - ND_XXXXX** (XXXXX は日付タイム・スタンプ) と「**既存のパッケージ・グループを使用する (Use the existing package group)**」ラジオ・ボタンがデフォルトで選択されています。これらの選択はそのままにして、「次へ」をクリックします。

注: 実行中のプロセスが検出されると、「パッケージのインストール」ウィザードはメッセージを表示します。このメッセージが表示された場合は、「**キャンセル**」をクリックし、実行中のプロセスをシャットダウンしてから、インストールを再開してください。

9. 「パッケージのインストール」ウィザードはオペレーティング・システムを検査して、WebSphere Process Server インストールのための前提条件が満たされているかどうかを調べます。前提条件検査の結果により、ユーザーの次のアクションが決まります。

- 前提条件検査に合格した場合 (つまり、サポートされるオペレーティング・システムが検出された場合) は、メッセージは表示されません。インストールは「パッケージのインストール」ウィザードの「フィーチャー」ページで続行されます。ステップ 10 に進んでください。
- 前提条件検査が不合格の場合 (例えば、サポートされるオペレーティング・システムが最小サポート・レベルにない場合) は、エラー・メッセージが表示され、インストールは停止します。WebSphere Process Server をインストールするためには、メッセージに説明されている問題に対処する必要があります。
- サポートされるオペレーティング・システムのより高いメジャー・リリースが稼働している場合、またはオペレーティング・システム自体がサポート対象のリストにない場合は、警告が出されることがあります。インストールを続行することはできますが、保守を適用しないとインストール済み環境または製品が正常に稼働しなくなる可能性があります。

このような警告が出された場合は、製品サポート Web ページにアクセスして、最新保守パッケージを取得し、インストール終了後に適用してください。サポートされているバージョンへのマイグレーションについては、IBM 以外の前提条件および相互に必要な製品の資料を参照してください。

10. 「パッケージのインストール」ウィザードの「フィーチャー」ページで、デフォルトで選択されている項目をそのままにして「次へ」をクリックします。
 - a. オプション: サンプルをインストールするには、「**IBM WebSphere Process Server 7.0.0.0**」と「**WebSphere Process Server**」を展開し、「**サンプル・アプリケーション**」チェック・ボックスを選択します。ここでサンプル・アプリケーションをインストールしない場合でも、『インストール後にサンプルまたはデフォルトのスタンドアロン開発プロファイルをインストールするには』の説明に従ってあとからインストールすることができます。
 - b. オプション: WebSphere Process Server のデフォルトのスタンドアロン開発プロファイルをインストールするには、「**IBM WebSphere Process Server 7.0.0.0**」、次に「**WebSphere Process Server**」を展開し、「**スタンドアロン開発 WebSphere Process Server プロファイル (qwps)**」のチェック・ボックスを選択します。WebSphere Enterprise Service Bus のデフォルトのスタンドアロン開発プロファイルをインストールするには、「**スタンドアロン開発 WebSphere Enterprise Service Bus プロファイル (qesb)**」のチェック・ボックスを選択します。

スタンドアロン開発プロファイルは、ビジネス・ルール・マネージャーが使用可能に設定されているデフォルトの開発プロファイルです。開発プロファイルの作成を選択した場合は、管理者セキュリティ ID とパスワード資格情報の入力画面が表示されます。実稼働環境の場合、開発プロファイルは使用できません。ここでデフォルトのスタンドアロン開発プロファイルをインストールしない場合でも、『インストール後にサンプルまたはデフォルトのスタンドアロン開発プロファイルをインストールするには』の説明に従ってあとからインストールすることができます。

11. 要約情報を確認します。要約情報に誤りがある場合は、「戻る」をクリックして選択内容を変更してください。

- 「インストール」をクリックします。インストールが完了すると、インストールの状況と、正常にインストールされたパッケージを示すページが表示されます。

重要: このプロセスは、数分かかる場合があります。このページが表示されるまで、先には進まないでください。

- プロファイル管理ツールを起動する場合は、「プロファイル管理ツール」ラジオ・ボタンを選択したままにします。起動しない場合は、「なし」のラジオ・ボタンを選択します。
- 「終了」をクリックします。
- 必要に応じて Installation Manager を閉じます。

タスクの結果

WebSphere Process Serverがインストールされます。

次のタスク

プロファイル管理ツールで、または `manageprofiles` コマンド行ユーティリティを使用して、スタンドアロン・サーバー・プロファイルまたはデプロイメント・マネージャーを定義する必要があります。実稼働環境では、プロファイル管理ツールまたは `manageprofiles` コマンド行ユーティリティで作成されたプロファイルのみを使用できます。詳しくは、230 ページの『プロファイルの作成』および 355 ページの『プロファイルの拡張』の下のトピックを参照してください。

制約事項:

インストール中にスタンドアロン開発プロファイルを作成した場合は、このプロファイルは実稼働環境では機能しないことに注意してください。このプロファイルは、作業用の実動プロファイルを作成せずに、WebSphere Process Server についてよく理解できるようにすることを目的としています。このプロファイルは、ファースト・ステップ・コンソールで以下のステップを実行して開始できます。

- コマンド・ウィンドウをオープンします。
- ご使用のプラットフォームおよび作成したプロファイルのタイプに応じて、以下のいずれかのディレクトリーに変更します。
 - Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
`install_root/profiles/qwps/firststeps/wbi`
 - Windows** **Windows** プラットフォームの場合:
`install_root¥profiles¥qwps¥firststeps¥wbi`
 - Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
`install_root/profiles/qesb/firststeps/esb`
 - Windows** **Windows** プラットフォームの場合:
`install_root¥profiles¥qesb¥firststeps¥esb`
- `firststeps` コマンドを実行して、コンソールを開始します。
 - Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
`./firststeps.sh`

- **Windows** Windows プラットフォームの場合: firststeps.bat

インストール後にサンプルまたはデフォルトのスタンドアロン開発プロファイル
をインストールするには:

ここでサンプルまたはデフォルトのスタンドアロン開発プロファイルをインス
トールしない場合は、以下のステップを実行することによってあとからインストール
することができます。

1. Installation Manager を手動で起動します。詳しくは、80 ページの『手動による
IBM Installation Manager の始動』を参照してください。
2. 「ファイル」>「設定」をクリックします。
3. 「リポジトリの設定 (Repositories Preferences)」 ページで、「リポジトリの
追加」をクリックします。
4. 「リポジトリの追加」 ページで以下のファイルの位置を参照し、「インストー
ル中および更新中にサービス・リポジトリの検索」の横のチェック・ボックス
が選択されていないことを確認して「OK」をクリックします。

- **Linux** **UNIX** Linux および UNIX プラットフォームの場合:

`extract_directory/repository/repository.config`

- **Windows** Windows プラットフォームの場合 (コマンド行から):

`extract_directory%repository%repository.config`

5. Installation Manager の最初のページに戻ります。
6. 「変更」を選択します。
7. 「変更」ウィザード・ページの説明に従って、サンプル・アプリケーションをイン
ストールするか、またはスタンドアロンの WebSphere Process Serverまたは
WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルを作成します。

WebSphere Application Server Network Deployment の既存のインス トール済み環境への WebSphere Process Server の対話式インストール

WebSphere Process Server は、サポートされるバージョンの WebSphere Application
Server Network Deployment の既存のインストール済み環境に対話的にインストール
できます。この手順では、Launchpad アプリケーションからインストール・プロセ
スを開始し、root ユーザーまたは管理者ユーザーが処理を行うと想定しています。
さらに、サポートされるバージョンの WebSphere Application Server Network
Deployment のインストール済み環境は既に存在しますが、WebSphere Process Server
のインストールに必要なその他の前提条件の基本製品 (WebSphere Application
Server Feature Pack for XML および WebSphere Application Server Feature Pack for
Service Component Architecture (SCA) (サービス・データ・オブジェクト (SDO) 機
能付き)) はインストールされているか、またはインストールされていないと想定し
ています。

始める前に

WebSphere Process Server をインストールする前に、以下のタスクを実行します。

- 33 ページの『WebSphere Process Server のインストールに関する前提条件』のト
ピックを参照して、製品をインストールするための前提条件を確認します。オベ

レーティング・システムおよびソフトウェアの前提条件レベルが特に重要です。インストール・プロセスでは前提条件となるオペレーティング・システム・パッチが自動的に検査されますが、前提条件をまだ検討していない場合は、<http://www.ibm.com/support/docview.wss?uid=swg27006205> でその検討を行ってください。この Web サイトには、サポートされているオペレーティング・システム、およびオペレーティング・システムを準拠させるためにインストールする必要があるオペレーティング・システムのフィックスおよびパッチがすべて記載されています。さらに、すべての前提ソフトウェアの必要レベルも記載されています。

- Installation Manager および WebSphere Application Server のインストール・ローションを確認するため、145 ページの『製品およびプロファイルのデフォルトのインストール・ディレクトリー』情報を調べます。
- Launchpad は Web アプリケーションなので、サポートされるバージョンの Web ブラウザーがインストールされている必要があります。

Linux **UNIX** **Windows** **Linux、UNIX、および Windows プラットフォームの場合:** WebSphere Application Server Network Deployment インフォメーション・センターにあるプラットフォーム固有のトピック『製品インストールのためのオペレーティング・システムの準備』には、すべてのプラットフォームでサポートされる Web ブラウザーのインストールに関する詳しい指示があります。

このタスクについて

WebSphere Application Server Network Deployment の既存のインストール済み環境に WebSphere Process Server をインストールする場合は、その既存環境がサポートされるレベルのものであること、および必要なインストール・ツールがインストールされていることを確認する必要があります。Launchpad アプリケーションに従ってこの処理を行います。

重要: 製品のインストール中または変更中に、Installation Manager インターフェースまたはログ・ファイルに以下のようなエラーが表示される場合があります。

```
228 ERROR 07:41.26 Installation Manager cannot remove feature import.configLauncher.  
feature from an installation package that was imported to Installation Manager.  
229 ERROR 07:41.54 Installation Manager cannot remove feature import.productProviders.  
feature from an installation package that was imported to Installation Manager.
```

これらのエラーは無視しても構いません。

手順

1. イメージを抽出したディレクトリーにナビゲートし、以下のコマンドを入力して、Launchpad アプリケーションを開始します。
 - **Linux** **UNIX** **Linux および UNIX プラットフォームの場合:**
`extract_directory/launchpad.sh`
 - **Windows** **Windows プラットフォームの場合 (コマンド行から):**
`extract_directory\launchpad.exe`
2. Launchpad の左側のペインで、「既存の WebSphere Application Server へのインストール」をクリックします。

3. 必要レベルの IBM Installation Manager がインストールされているかどうかに応じて、以下のアクションのいずれかを選択します。
 - Installation Manager インストール済み環境が必要レベル以上である場合は、ステップ 4 に進みます。
 - Installation Manager がインストールされていない場合、またはインストールされていても必要レベルより低い場合は、次のステップを実行します。
 - a. ステップ 1 では、Launchpad の「既存の WebSphere Application Server へのインストール」ページで、「**IBM Installation Manager のインストールまたは更新**」をクリックします。「インストール・パッケージ」ウィザードが別ウィンドウで開きます。IBM Installation Manager のバージョンは事前選択されています。
 - b. 「次へ」をクリックします。
 - c. Installation Manager の後続ページで、各ページの指示に従い、デフォルトを受け入れます。Installation Manager がシステムに既にインストールされている場合は、アプリケーションはそれが正しいレベルにあるかどうかを検査し、必要な場合は正しいレベルに更新します。
 - d. Installation Manager のインストール後に表示される正常終了のページを閉じます。このとき、「**Installation Manager の再始動**」をクリックしないでください。
 - e. Launchpad アプリケーションに戻ります。

Installation Manager の追加資料は、Installation Manager インフォメーション・センターで参照することができます。

4. インストール済みのバージョンの WebSphere Application Server Network Deployment のレベルに応じて、以下のアクションのいずれかを選択します。
 - インストール済み環境が保守の必要レベル以上である場合は、ステップ 5 (58 ページ) に進みます。
 - インストール済み環境が保守の必要レベルより低い場合は、まず Installation Manager アプリケーションが閉じられていることを確認します。次に、Launchpad の「既存の WebSphere Application Server へのインストール」ページで、ステップ 2 として、「**WebSphere Application Server の更新**」をクリックして WebSphere Application Server 共通インストール・パッケージを実行します。以下の手順を実行します。
 - a. WebSphere Application Server インストーラーでページ「検出された IBM WebSphere Application Server」にナビゲートします。
 - b. 「**既存のインストールに保守を適用し、フィーチャーを追加する**」を選択し、WebSphere Process Server をインストールする先のインストール済み環境を指定します。

重要: WebSphere Process Server のサンプルのインストールが必要な場合は、使用する WebSphere Application Server Network Deployment のインストール済み環境にサンプルをインストールしておく必要があります。
 - c. インストーラーの残りのページを続行します。インストーラーは、既存の WebSphere Application Server のインストール済み環境に保守を追加します。

5. WebSphere Application Server Network Deployment のインストール済み環境が既に Installation Manager にインポートされているかどうかに応じて、以下のアクションのいずれかを選択します。
 - インストール済み環境が既にインポートされており、その保守レベルが変更されていない場合は、ステップ 6 に進みます。
 - インストール済み環境がまだインポートされていない場合、または既にインポートされてもその保守レベルが変更されている場合は、以下のステップを実行してインポートします。
 - a. Launchpad の「既存の WebSphere Application Server へのインストール」ページで、ステップ 3 として、「**WebSphere Application Server を Installation Manager にインポートします。**」をクリックします。Launchpad は Installation Manager アプリケーションを始動します。
 - b. Installation Manager の「開始」ページで、「**インポート**」をクリックします。
 - c. 「既存の WebSphere インストールをインポート」ページで、WebSphere Process Server のインストール先の WebSphere Application Server Network Deployment の場所を指定します。
 - d. 「次へ」をクリックして、後続ページに進み、このディレクトリーの場所および共有されたリソース・ディレクトリーの場所を設定します。
 - e. インポート・プロセスが完了したら、正常終了のページで、「**終了**」をクリックします。
 - f. Installation Manager を閉じます。
6. WebSphere Application Server Feature Pack for XML または WebSphere Application Server Feature Pack for Service Component Architecture (SCA) (サービス・データ・オブジェクト (SDO) 機能付き、または機能なし) を WebSphere Application Server Network Deployment のインストール済み環境に既にインストールしたかどうかに基づき、以下のアクションを選択します。
 - いずれのフィーチャー・パックもインストールしていない場合、ステップ 8 (59 ページ) に進みます。
 - いずれか 1 つ、あるいは両方のフィーチャー・パックがインストール済みの場合、以下のステップを実行します。
 - a. Launchpad の「既存の WebSphere Application Server へのインストール」ページで、ステップ 4 として、「**フィーチャー・パックの更新**」をクリックします。Launchpad は Installation Manager アプリケーションを始動します。
 - b. Installation Manager の「開始」ページで、「**更新**」をクリックします。
 - c. 手順 119 ページの『第 7 章 対話式でのソフトウェアの更新』のステップ 5 (120 ページ) からステップ 12 (121 ページ) に従い、パッケージ・グループ「**IBM WebSphere Application Server - ND**」を選択します。
7. サービス・データ・オブジェクト (SDO) 機能が WebSphere Application Server Feature Pack for Service Component Architecture (SCA) のインストール済み環境にインストールされているかどうかに応じて、以下のアクションのいずれかを選択します。
 - この機能を既にインストールしている場合、ステップ 8 (59 ページ) に進みます。

- この機能をまだインストールしていない 場合、以下のステップを実行します。
 - a. Installation Manager を始動します。詳しくは、80 ページの『手動による IBM Installation Manager の始動』を参照してください。
 - b. Installation Manager の「開始」ページで、「変更」をクリックします。
 - c. 手順 79 ページの『製品のインストール済み環境の変更』のステップ 4 (79 ページ) からステップ 8 (80 ページ) に従い、WebSphere Application Server Feature Pack for Service Component Architecture (SCA) および SDO 機能を含むパッケージ・グループを選択します。
- 8. Installation Manager アプリケーションがクローズされたことを確認します。次に、Launchpad の「既存の WebSphere Application Server へのインストール」ページでステップ 5 として、「**WebSphere Process Server のインストール (Install WebSphere Process Server)**」をクリックします。Launchpad アプリケーションは Installation Manager とその「パッケージのインストール」ウィザードを開始します。
- 9. 「パッケージのインストール」ウィザードの「インストール」ページでは、推奨されるすべてのパッケージがインストール用に事前選択されています。これには、WebSphere Application Server Feature Pack for XML、WebSphere Application Server Feature Pack for Service Component Architecture (SCA)、および WebSphere Process Server が含まれます。「次へ」をクリックします。

重要: 既にインストール済みのフィーチャー・パックの横にあるチェック・ボックスをすべてクリアします。

10. 「パッケージのインストール」ウィザードのライセンス・ページで使用許諾契約書をよく読み、「**使用条件の条項に同意します。**」を選択します。「次へ」をクリックします。フィーチャー・パックのライセンスもパネルに表示されます。すべてのライセンスを受け入れます。
11. 「パッケージのインストール」ウィザードの「ロケーション」ページで、WebSphere Application Server のインストール済み環境用のパッケージ・グループを選択し、「次へ」をクリックします。

注: 実行中のプロセスが検出されると、「パッケージのインストール」ウィザードはメッセージを表示します。このメッセージが表示された場合は、「**キャンセル**」をクリックし、実行中のプロセスをシャットダウンしてから、インストールを再開してください。

12. 「パッケージのインストール」ウィザードはオペレーティング・システムを検査して、WebSphere Process Server インストールのための前提条件が満たされているかどうかを調べます。前提条件検査の結果により、ユーザーの次のアクションが決まります。
 - 前提条件検査に合格した場合 (つまり、サポートされるオペレーティング・システムが検出された場合) は、メッセージは表示されません。インストールは「パッケージのインストール」ウィザードの「フィーチャー」ページで続行されます。ステップ 13 (60 ページ) に進んでください。
 - 前提条件検査が不合格の場合 (例えば、サポートされるオペレーティング・システムが最小サポート・レベルにない場合) は、エラー・メッセージが表

示され、インストールは停止します。 WebSphere Process Server をインストールするためには、メッセージに説明されている問題に対処する必要があります。

- サポートされるオペレーティング・システムのより高いメジャー・リリースが稼働している場合、またはオペレーティング・システム自体がサポート対象のリストにない場合は、警告が出されることがあります。インストールを続行することはできますが、保守を適用しないとインストール済み環境または製品が正常に稼働しなくなる可能性があります。

このような警告が出された場合は、製品サポート Web ページにアクセスして、最新保守パッケージを取得し、インストール終了後に適用してください。サポートされているバージョンへのマイグレーションについては、IBM 以外の前提条件および相互に必要な製品の資料を参照してください。

13. 「パッケージのインストール」ウィザードの「フィーチャー」ページで、デフォルトで選択されている項目をそのままにして「次へ」をクリックします。
 - a. オプション: サンプルをインストールするには、「**IBM WebSphere Process Server 7.0.0.0**」と「**WebSphere Process Server**」を展開し、「**サンプル・アプリケーション**」チェック・ボックスを選択します。 WebSphere Process Server のサンプルをインストールするには、WebSphere Application Server のサンプルをインストールしておく必要があります。ここでサンプル・アプリケーションをインストールしない場合でも、『インストール後にサンプルまたはデフォルトのスタンドアロン開発プロファイルをインストールするには』の説明に従ってあとからインストールすることができます。
 - b. オプション: WebSphere Process Server のデフォルトのスタンドアロン開発プロファイルをインストールするには、「**IBM WebSphere Process Server 7.0.0.0**」、次に「**WebSphere Process Server**」を展開し、「**スタンドアロン開発 WebSphere Process Server プロファイル (qwps)**」のチェック・ボックスを選択します。 WebSphere Enterprise Service Bus のデフォルトのスタンドアロン開発プロファイルをインストールするには、「**スタンドアロン開発 WebSphere Enterprise Service Bus プロファイル (qesb)**」のチェック・ボックスを選択します。

スタンドアロン開発プロファイルは、ビジネス・ルール・マネージャーが使用可能に設定されているデフォルトの開発プロファイルです。開発プロファイルの作成を選択した場合は、管理者セキュリティ ID とパスワード資格情報の入力画面が表示されます。実稼働環境の場合、開発プロファイルは使用できません。ここでデフォルトのスタンドアロン開発プロファイルをインストールしない場合でも、『インストール後にサンプルまたはデフォルトのスタンドアロン開発プロファイルをインストールするには』の説明に従ってあとからインストールすることができます。

14. 要約情報を確認します。要約情報に誤りがある場合は、「戻る」をクリックして選択内容を変更してください。
15. 「インストール」をクリックします。 インストールが完了すると、インストールの状況と、正常にインストールされたパッケージを示すページが表示されます。

重要: このプロセスは、数分かかる場合があります。このページが表示されるまで、先には進まないでください。

16. プロファイル管理ツールを起動する場合は、「プロファイル管理ツール」ラジオ・ボタンを選択をしたままにします。起動しない場合は、「なし」のラジオ・ボタンを選択します。
17. 「終了」をクリックします。
18. 必要に応じて Installation Manager を閉じます。

タスクの結果

WebSphere Process Serverがインストールされます。

次のタスク

プロファイル管理ツールで、または `manageprofiles` コマンド行ユーティリティーを使用して、スタンドアロン・サーバー・プロファイルまたはデプロイメント・マネージャーを定義する必要があります。実稼働環境では、プロファイル管理ツールまたは `manageprofiles` コマンド行ユーティリティーで作成されたプロファイルのみを使用できます。詳しくは、230 ページの『プロファイルの作成』および 355 ページの『プロファイルの拡張』の下のトピックを参照してください。

制約事項:

インストール中にスタンドアロン開発プロファイルを作成した場合は、このプロファイルは実稼働環境では機能しないことに注意してください。このプロファイルは、作業用の実動プロファイルを作成せずに、WebSphere Process Server についてよく理解できるようにすることを目的としています。このプロファイルは、ファースト・ステップ・コンソールで以下のステップを実行して開始できます。

1. コマンド・ウィンドウをオープンします。
2. ご使用のプラットフォームおよび作成したプロファイルのタイプに応じて、以下のいずれかのディレクトリーに変更します。
 - **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
`install_root/profiles/qwps/firststeps/wbi`
 - **Windows** **Windows** プラットフォームの場合:
`install_root%profiles%qwps%firststeps%wbi`
 - **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
`install_root/profiles/qesb/firststeps/esb`
 - **Windows** **Windows** プラットフォームの場合:
`install_root%profiles%qesb%firststeps%esb`
3. `firststeps` コマンドを実行して、コンソールを開始します。
 - **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
`./firststeps.sh`
 - **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `firststeps.bat`

インストール後にサンプルまたはデフォルトのスタンドアロン開発プロファイルをインストールするには: ここでサンプルまたはデフォルトのスタンドアロン開発プロファイルをインストールしない場合は、以下のステップを実行することによって後からインストールすることができます。

1. Installation Manager を手動で起動します。詳しくは、80 ページの『手動による IBM Installation Manager の始動』を参照してください。
2. 「ファイル」>「設定」をクリックします。
3. 「リポジトリ設定 (Repositories Preferences)」ページで、「リポジトリの追加」をクリックします。
4. 「リポジトリの追加」ページで、次のファイルの場所を参照し、「インストール中および更新中にサービス・リポジトリの検索」の横のチェック・ボックスが選択されていないことを確認し、「OK」をクリックします。
 - **Linux** **UNIX** Linux および UNIX プラットフォームの場合:
`extract_directory/repository/repository.config`
 - **Windows** Windows プラットフォームの場合 (コマンド行から):
`extract_directory¥repository¥repository.config`
5. Installation Manager の最初のページに戻ります。
6. 「変更」を選択します。
7. 「変更」ウィザード・ページの説明に従って、サンプル・アプリケーションをインストールするか、またはスタンドアロンの WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルを作成します。

WebSphere Process Server のサイレント・インストール

WebSphere Process Server 製品パッケージをサイレント・インストール・モードでインストールできます。サイレント・モードでインストールするときは、ユーザー・インターフェースは使用できません。代わりに応答ファイルを使用して、製品パッケージのインストールに必要なコマンドを入力します。この手順では、WebSphere Process Server のインストールの前提条件となる基本製品がインストールされている場合とインストールされていない場合を想定しています。これらの前提条件となる製品には、WebSphere Application Server Network Deployment インストール・マネージャー、WebSphere Application Server Feature Pack for XML、WebSphere Application Server Feature Pack for Service Component Architecture (SCA) (サービス・データ・オブジェクト (SDO) 機能付き) などがあります。

始める前に

WebSphere Process Server をインストールする前に、33 ページの『WebSphere Process Server のインストールに関する前提条件』のトピックを参照して、製品をインストールするための前提条件のリストを確認してください。

オペレーティング・システムおよびソフトウェアの前提条件レベルが特に重要です。インストール・プロセスでは前提条件となるオペレーティング・システム・パッチが自動的に検査されますが、前提条件をまだ検討していない場合は、<http://www.ibm.com/support/docview.wss?uid=swg27006205>でその検討を行ってください。この Web サイトには、サポートされているオペレーティング・システム、およびオペレーティング・システムを準拠させるためにインストールする必要があるオペレーティング・システムのフィックスおよびパッチがすべて記載されています。さらに、すべての前提ソフトウェアの必要レベルも記載されています。

Installation Manager および WebSphere Application Server のインストール・ロケーションを確認するため、145 ページの『製品およびプロファイルのデフォルトのインストール・ディレクトリー』 情報を調べます。

このタスクについて

インストール・プロセスを開始するには、run_templates または run_template.bat スクリプトを編集して実行します。このスクリプトは、以下のタスクの一部または全部を実行します。

- WebSphere Application Server Network Deployment をインストールします。
- IBM Installation Manager がまだインストールされていない場合はインストールし、既にインストールされている場合は適切なレベルに更新します。
- WebSphere Application Server Network Deployment を Installation Manager にインポートします。
- 作成された応答ファイルを使用して、必要な基本製品と WebSphere Process Server をインストールします。
- 製品パッケージが入っているリポジトリのロケーションを使用してインストール済み環境を自動的に構成します。

重要: 製品のインストール中または変更中に、Installation Manager インターフェースまたはログ・ファイルに以下のようなエラーが表示される場合があります。

```
228 ERROR 07:41.26 Installation Manager cannot remove feature import.configLauncher.  
feature from an installation package that was imported to Installation Manager.  
229 ERROR 07:41.54 Installation Manager cannot remove feature import.productProviders.  
feature from an installation package that was imported to Installation Manager.
```

これらのエラーは無視しても構いません。

手順

1. 必要な基本製品と WebSphere Process Server のインストールに使用するデフォルト応答ファイルを検索します。

応答ファイル名とディレクトリーを以下に示します。

- **Linux** **UNIX** `DVD_root` または `extract_root/responsefiles/wbi/template_response.xml`
 - **Windows** `DVD_root` または `extract_root¥responsefiles¥wbi¥template_response.xml`
2. 応答ファイルを編集します。 応答ファイル・テンプレートのテキストの指示に従って、パラメーターを変更します。 応答ファイルは、Installation Manager でアクションを記録することによって作成できます。 応答ファイルを記録すると、Installation Manager で行った選択が XML ファイルに保管されます。 Installation Manager をサイレント・モードで実行すると、Installation Manager は XML 応答ファイル内のデータを使用してインストールを実行します。 詳しくは、http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/install/v1r2/index.jsp?topic=com.ibm.silentinstall12.doc/topics/t_silent_create_response_files_IM.htmlを参照してください。
 3. スクリプト・ファイルは、応答ファイルと同じディレクトリーにあります。

- **Linux** **UNIX** `DVD_root` または `extract_root/responsefiles/wbi/run_templates`
 - **Windows** `DVD_root` または `extract_root%responsefiles%wbi%run_template.bat`
4. スクリプトのテキストの指示に従い、パラメーターを変更してスクリプトを編集します。インストール後の環境に不要なパラメーターはコメント化します。例えば、WebSphere Application Server Network Deployment が既にシステムにインストールされており、その上に WebSphere Process Server をインストールする予定の場合は、WebSphere Application Server Network Deployment をインストールするパラメーターはコメント化します。

注: `run_templates` スクリプトを非 root ユーザーとして実行する場合は、以下のコマンドをスクリプトで使用して IBM Installation Manager をインストールします。詳しくは、『非 root ユーザーとしての WebSphere Process Server のサイレント・インストール』を参照してください。

```

"${IM_IMAGE}"/userinst --launcher.ini
"${IM_IMAGE}"/user-silent-install.ini -input
"${PROGDIR}"/template_response.xml -log
${WAS_LOCATION}"/wps/silent_install.log

```

5. `run_templates` スクリプトを実行します。

タスクの結果

`run_templates` スクリプトは応答ファイルを読み取り、必要なすべての前提条件と WebSphere Process Server をインストールし、指定されたディレクトリーにログ・ファイルを書き出します。166 ページの『インストールとプロファイル作成のログ・ファイル』を参照してください。

次のタスク

プロファイル管理ツールで、または `manageprofiles` コマンド行ユーティリティーを使用して、スタンドアロン・サーバー・プロファイルまたはデプロイメント・マネージャーを定義する必要があります。実稼働環境では、プロファイル管理ツールまたは `manageprofiles` コマンド行ユーティリティーで作成されたプロファイルのみを使用できます。詳しくは、230 ページの『プロファイルの作成』および 355 ページの『プロファイルの拡張』を参照してください。

非 root ユーザーとしての WebSphere Process Server のサイレント・インストール

WebSphere Process Server 製品パッケージを、サイレント・インストール・モードで非 root ユーザーとしてインストールできます。サイレント・モードでインストールするときは、ユーザー・インターフェースは使用できません。代わりに応答ファイルを使用して、製品パッケージのインストールに必要なコマンドを入力します。この手順では、WebSphere Process Server のインストールの前提条件となる基本製品がインストールされている場合とインストールされていない場合を想定しています。これらの前提条件となる製品には、WebSphere Application Server Network Deployment インストール・マネージャー、WebSphere Application Server Feature

Pack for XML、WebSphere Application Server Feature Pack for Service Component Architecture (SCA) (サービス・データ・オブジェクト (SDO) 機能付き) などがあります。

始める前に

WebSphere Process Server をインストールする前に、33 ページの『WebSphere Process Server のインストールに関する前提条件』のトピックを参照して、製品をインストールするための前提条件のリストを確認してください。

このタスクについて

インストール・プロセスを開始するには、run_templates または run_template.bat スクリプトを編集して実行します。このスクリプトは、以下のタスクの一部または全部を実行します。

- WebSphere Application Server Network Deployment をインストールします。
- IBM Installation Manager がまだインストールされていない場合はインストールし、既にインストールされている場合は適切なレベルに更新します。
- WebSphere Application Server Network Deployment を Installation Manager にインポートします。
- 作成された応答ファイルを使用して、必要な基本製品と WebSphere Process Server をインストールします。
- 製品パッケージが入っているリポジトリのロケーションを使用してインストール済み環境を自動的に構成します。

手順

1. ご使用のオペレーティング・システムに該当する製品イメージをダウンロードして、その製品イメージを解凍します。例えば、Solaris 64 ビット・イメージ WPS_v7_Solaris_SPARC_64_Install.tar.gz の場合は、以下のようにします。

```
mkdir <extract_root>
cd <extract_root>
gunzip -c WPS_v7_Solaris_SPARC_64_Install.tar.gz | tar xvf -
```

WebSphere Process Server のインストールに使用する応答ファイルとスクリプトは、extract_root/responsefiles/WBI にあります。

2. オリジナルの run_templates スクリプトと template_response.xml 応答ファイルをバックアップします。以下に例を示します。

```
cp run_templates run_templates.org
cp template_response.xml my_response.xml file
```

3. run_templates スクリプトを以下のように編集します。
 - a. このスクリプトで、WebSphere Application Server のインストール先を指定します。

注: WebSphere Application Server と IBM Installation Manager は、以下のロケーションにインストールされるものとします。

WAS: /export/home/wps/wpsv7/ProcServer

IBM IM: /export/home/wps/wpsv7/IM/eclipse

以下に例を示します。

```
WAS_LOCATION=/export/home/wps/wpsv7/ProcServer
```

WebSphere Application Server のインストール・コマンド:

```
"${WAS_IMAGE}"/install -silent -OPT silentInstallLicenseAcceptance=true  
-OPT allowNonRootSilentInstall=true -OPT disableOSPrereqChecking=true  
-OPT disableNonBlockingPrereqChecking=true -OPT installType=installNew  
-OPT profileType=none -OPT feature=samplesSelected -OPT  
feature=languagepack.console.all -OPT feature=languagepack.server.all  
-OPT installLocation="${WAS_LOCATION}"
```

上記の例では、WAS_LOCATION で指定されたロケーションに WebSphere Application Server がインストールされますが、プロファイルは作成されません。WebSphere Process Server のインストールが完了したら、インストール後のタスクとしてプロファイルを作成する必要があります。

WebSphere Application Server が既にインストールされている場合は、run_templates スクリプトを編集して、上記のインストール・コマンドをコメント化します。

- b. IBM Installation Manager のインストールに使用するコマンドを変更します。Installation Manager のインストールは、root ユーザーのインストールと非 root ユーザーのインストールの両方で実行できます。インストール・ロケーションは my_response.xml ファイルで定義できます。ステップ 4a を参照してください。

非 root ユーザーの場合は、run_templates スクリプトを更新して、Installation Manager をインストールするための以下のコマンドを組み込みます。

```
"${IM_IMAGE}"/userinst --launcher.ini "${IM_IMAGE}"/user-silent-install.ini  
-input "${PROGDIR}"/my_response.xml -log "${WAS_LOCATION}"/logs/wps/silent_install.log
```

root ユーザーの場合は、以下のコマンドを使用できます。

```
"${IM_IMAGE}"/install --launcher.ini "${IM_IMAGE}"/silent-install.ini  
-input "${PROGDIR}"/my_response.xml -log "${WAS_LOCATION}"/logs/wps/silent_install.log
```

注: Installation Manager のインストールに関する重要事項:

- -log オプションで使用される WAS_LOCATION/logs/wps/silent_install.log ファイルには、応答ファイル内のすべてのアクションの結果が格納されます。このログ・ファイルを参照して、結果を確認してください。
- IBM IM を非 root ユーザーとしてインストールすると、そのユーザーのホーム・ディレクトリー /home/user/var/ibm/InstallationManager の下に、/var/ibm/InstallationManager フォルダが作成されます。root ユーザーとしてインストールする場合は、/var/ibm/InstallationManager の直下にこのフォルダが作成されます。これは、Installation Manager に関する情報と、Installation Manager が処理する各種パッケージに関する情報を格納するエージェント・データ・ロケーション (詳細情報) です。このフォルダのロケーションを変更したい場合は、run_templates スクリプトで、Installation Manager のインストール・アクションに **-dataLocation** パラメーターを使用します。以下に例を示します。

```
IM_IMAGE/install --launcher.ini IM_IMAGE
/silent-install.ini -dataLocation <path_IBMIM_dataLocationFolder> -input
PROGDIR/my_response.xml -log WAS_LOCATION/logs/wps/silent_install.log
```

4. 応答ファイルのコピー (例: my_response.xml) を以下のように編集します。このファイルには、Installation Manager と WebSphere Process Server をインストールするインストール・アクションに対する応答がすべて格納されます。

- a. Installation Manager のインストール・ロケーションを編集します。

```
<!-- #####
このプロファイル・ノードは、IBM Installation Manager (IM)
のインストール先を定義します。IM のインストール先を変更する場合は、
installLocation と eclipseLocation の両方の値を変更して、適切なディレクトリー
を指定します。
```

```
#####-->
<profile kind='self' installLocation='/export/home/wps/wpsv7/IM/eclipse'
id='IBM Installation Manager'> <data key='eclipseLocation'
value='/export/home/wps/wpsv7/IM/eclipse' /></profile>
<!-- #####
eclipseCache のロケーションを変更します (キャッシュがまだ
作成されていない場合のみ)。eclipseCache は共有リソース・ディレクトリーです。
#####-->
<preference value="/export/home/wps/wpsv7/IM/eclipseCache"
name="com.ibm.cic.common.core.preferences.eclipseCache" />
```

上記の例では、Installation Manager が /export/home/wps/wpsv7/IM/eclipse にインストールされ、キャッシュが /export/home/wps/wpsv7/IM/eclipseCache にインストールされるように、応答ファイルが変更されています。

- b. 非 root ユーザーの場合は、インストール先のディレクトリーに対する書き込みアクセス権限があることを確認する必要があります。

注: Installation Manager での profile の参照は、WebSphere Application Server プロファイルではなくバイナリーのインストール・ロケーションを示します。

```
<profile installLocation='/export/home/wps/wpsv7/ProcServer'
id='IBM WebSphere Application Server - ND'><data key='eclipseLocation'
value='/export/home/wps/wpsv7/ProcServer' />
```

id フィールド (IBM WebSphere Application Server - ND) によって、この特定の WebSphere Application Server インストールが Installation Manager に対して識別されます。これは必要に応じて変更できますが、今後 WebSphere Application Server ロケーションのインポートや他のパッケージの更新を行う際には、応答ファイルで必ず同じ値を使用してください。

- c. WebSphere Application Server ロケーションをインポートすることを指定します。このコマンドは Installation Manager に対して、WebSphere Application Server Network Deployment (ステップ 4b で指定したロケーション) をインポートするように指示します。前のステップでプロファイル ID を変更した場合は、ここでもプロファイル ID を変更する必要があります。

```
<import profile="IBM WebSphere Application Server - ND" type="WAS" />
```

- d. 必要な前提条件と WebSphere Process Server をインストールすることを指定します。以下の行は Installation Manager に対して、IM ベースのオフラインをインストールするように指示します。前のステップでプロファイル ID

を変更した場合は、ここでもプロファイル ID を変更する必要があります。
なお、Installation Manager での profile は、バイナリーのインストール・ロケーションを示します。

```
<install>
<offering profile="IBM WebSphere Application Server -
ND" id="com.ibm.websphere.XML.v10" />
<offering profile="IBM WebSphere Application Server -
ND" id="com.ibm.websphere.SCA.v10" />
<offering profile="IBM WebSphere Application Server -
ND" id="com.ibm.ws.WPS" />
</install>
```

5. run_templates スクリプトを実行します。例えば、非 root ユーザーの場合、コンソール出力で以下の run_templates スクリプトを参照してください。

```
bash-3.00$ ./run_templates
/home/wpsuser/WPS70/responsefiles/WBI/../../WAS/install -silent -OPT
silentInstallLicenseAcceptance=true -OPT allowNonRootSilentInstall=true -OPT
disableOSPrereqChecking=true
-OPT disableNonBlockingPrereqChecking=true -OPT
installType=installNew -OPT profileType=none
-OPT feature=samplesSelected -OPT feature=languagepack.console.all -OPT
feature=languagepack.server.all -OPT
installLocation=/export/home/wps/wpsv7/ProcServer
WAS rc: 0
/home/wpsuser/WPS70/responsefiles/WBI/../../IM/userinst --launcher.ini
/home/wpsuser/WPS70/responsefiles/WBI/../../IM/user-silent-install.ini -input
/home/wpsuser/WPS70/responsefiles/WBI/my_response.xml -log
/export/home/wps/wpsv7/ProcServer/logs/wps/silent_install.log
```

次のステップでは、manageProfiles コマンドまたはプロファイル管理ツールを使用し、既存のプロファイルを拡張するか新規のプロファイルを作成して、フィーチャー・パックで提供される機能を使用可能に設定します。プロファイルの作成、削除、拡張については、インフォメーション・センターの項目を参照してください。さらに、Network Deployment を使用する場合は、プロファイルのルールと制限に関するトピックも参照してください。

'WAS rc:0' の出力は、WebSphere Application Server が正常にインストールされたことを示します。また、WAS_LOCATION/logs/install/log.txt で INSTCONFSUCCESS メッセージを確認することでも、同じことを確認できます。

出力「次のステップ...」は、WebSphere Process Server が正常にインストールされたことを示します。

次のタスク

インストール後のタスクを実行し、インストールを検証します。

- INSTCONFSUCCESS メッセージが WAS_LOCATION/logs/install/log.txt ファイルにあることを確認します。このメッセージは WebSphere Application Server がインストールされたことを示します。
- WAS_LOCATION/logs/wps/silent_install.log を確認して、WebSphere Process Server がインストールされたことを検証します。インストールが成功した場合は、以下のようなメッセージが表示されます。run_templates スクリプトの実行に使用したシェルにも、同じメッセージが表示されます。

次のステップでは、manageProfiles コマンドまたはプロファイル管理ツールを使用し、既存のプロファイルを拡張するか新規のプロファイルを作成して、フィーチャー・パックで提供される機能を使用可能に設定します。プロファイルの作成、削除、拡張については、インフォメーション・センターの項目を参照してください。さらに、Network Deployment を使用する場合は、プロファイルのルールと制限に関するトピックも参照してください。

ファースト・ステップ・コンソールの開始

WebSphere Process Server をインストールしたら、ファースト・ステップ・コンソールを使用して、製品ツールの開始、製品資料へのアクセス、個別プロファイルに関連するサーバーおよび管理コンソールなどのエレメントへの指示を行います。汎用バージョンのコンソールと、インストール内のプロファイルごとのバージョンが使用可能です。

各コンソールのオプションは、インストールした機能と、当該オペレーティング・システムで使用可能なエレメントに応じて動的に表示されます。オプションには、インストールの検証、サーバーまたはデプロイメント・マネージャーの開始と停止、管理コンソールへのアクセス、プロファイル管理ツールの開始、サンプル・ギャラリーへのアクセス、製品資料へのアクセス、マイグレーション・ウィザードの開始などがあります。ファースト・ステップ・コンソールの開始方法は、汎用バージョンかプロファイル固有バージョンかに応じて異なります。

以下のセクションでは、ファースト・ステップ・コンソールの開始手順を、そのバージョンおよびシステムで使用されているプラットフォームごとに詳しく説明します。

- 70 ページの『汎用バージョンのファースト・ステップ・コンソールの開始』
- 70 ページの『Linux、UNIX、および Windows プラットフォームのプロファイルに関連付けられたファースト・ステップ・コンソールの開始』

制約事項:

- WebSphere Process Server Client には関連するファースト・ステップ・コンソールがありません。基盤となる WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment のインストール済み環境には、独自のファースト・ステップ・コンソールが用意されています。
- **Windows** デフォルトのブラウザとして Mozilla 2.x を使用し、そのインストール・ロケーションのパス名にスペースが含まれていると、ファースト・ステップ・コンソールが起動しない場合があります。この問題を解消するには、以下のいずれかのアクションを実行してください。
 - Mozilla を、パス名にスペースを含まないロケーションにインストールする。
 - レジストリー・キーを変更してスペースを削除する。
 - 一時的なデフォルト・ブラウザとして Internet Explorer を指定してから、Mozilla をデフォルト・ブラウザに設定する。この操作により、レジストリー・キーからスペースが自動的に削除されます。

汎用バージョンのファースト・ステップ・コンソールの開始

以下のステップを実行し、汎用バージョンのファースト・ステップ・コンソールを開始します。

1. コマンド・ウィンドウをオープンします。
2. 以下のディレクトリーに移動します。
 - **Linux** **UNIX** `install_root/firststeps/wbi`
 - **Windows** `install_root%firststeps%wbi`

変数 `install_root` は、Linux システム、UNIX システム、または Windows システム上の WebSphere Process Server インストール済み環境のロケーションを表します。

3. 以下のいずれかのコマンドを実行して、コンソールを開始します。
 - **Linux** **UNIX** `./firststeps.sh`
 - **Windows** `firststeps.bat`

ファースト・パス:

Windows 「スタート」 → 「プログラム」 → 「IBM WebSphere」 → 「Process Server 7.0」 → 「ファースト・ステップ」を選択して、Windows プラットフォームで汎用バージョンのコンソールを開始することもできます。

Linux、UNIX、および Windows プラットフォームのプロファイルに関連付けられたファースト・ステップ・コンソールの開始

Linux **UNIX** **Windows** 以下のステップを実行し、プロファイルに関連付けられたファースト・ステップ・コンソールを開始します。

1. コマンド・ウィンドウをオープンします。
2. 以下のディレクトリーに移動します (`profile_root` は、WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus のプロファイルのインストール場所を表します)。
 - WebSphere Process Server プロファイルの場合:
 - **Linux** **UNIX** `profile_root/firststeps/wbi`
 - **Windows** `profile_root%firststeps%wbi`
 - WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルの場合:
 - **Linux** **UNIX** `profile_root/firststeps/esb`
 - **Windows** `profile_root%firststeps%esb`
3. **firststeps** コマンドを実行して、コンソールを開始します。
 - **Linux** **UNIX** `./firststeps.sh`
 - **Windows** `firststeps.bat`

ファースト・パス:

以下のいずれかのタスクを実行して、プロファイルに関連付けられているバージョンのファースト・ステップ・コンソールを開始することもできます。

- プロファイルの作成または拡張処理の終了時に「プロファイル作成の完了」または「プロファイル拡張の完了」パネルの「ファースト・ステップ・コンソール」チェック・ボックスにチェック・マークを付ける。
- **Windows** WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus のプロファイルと関連付けられたファースト・ステップ・コンソールを始動する場合は、「スタート」 → 「プログラム」 → 「IBM WebSphere」 → 「Process Server 7.0」 → Profiles → 「*profile_name*」 → 「ファースト・ステップ」を選択する。

ファースト・ステップ・コンソールで選択できるオプションの説明については、『ファースト・ステップ・コンソールのオプション』を参照してください。

ファースト・ステップ・コンソールのオプション

WebSphere Process Server をインストールしたら、ファースト・ステップ・コンソールを使用して、製品ツールの開始、製品資料へのアクセス、個別プロファイルに関連するサーバーおよび管理コンソールなどのエレメントへの指示を行います。汎用バージョンのコンソールと、インストール内のプロファイルごとのバージョンが使用可能です。各コンソールのオプションは、インストールした機能と、当該オペレーティング・システムで使用可能なエレメントに応じて動的に表示されます。オプションには、インストールの検証、サーバーまたはデプロイメント・マネージャーの開始と停止、管理コンソールへのアクセス、プロファイル管理ツールの開始、サンプル・ギャラリーへのアクセス、製品資料へのアクセス、マイグレーション・ウィザードの開始などがあります。

注: 基礎となる WebSphere Application Server インストールには、専用のファースト・ステップ・コンソールがあります。

さまざまなタイプのファースト・ステップ・コンソールに表示されるオプションを、表 25 に要約します。各オプションは、72 ページの『オプションの説明』で定義します。75 ページの『使用のヒント』では、各オプションで呼び出すコマンドについて説明します。

表 25. ファースト・ステップ・コンソールで使用可能なオプション

オプション	汎用バージョン	スタンドアロン・サーバーのプロファイル・バージョン	デプロイメント・マネージャーのプロファイル・バージョン	カスタム・プロファイル・バージョン
インストール検査	使用不可	使用可能	使用可能	使用不可
サーバーの始動および停止	使用不可	使用可能	使用不可	使用不可
デプロイメント・マネージャーの開始および停止	使用不可	使用不可	使用可能	使用不可

表 25. ファースト・ステップ・コンソールで使用可能なオプション (続き)

オプション	汎用バージョン	スタンドアロン・サーバーのプロファイル・バージョン	デプロイメント・マネージャーのプロファイル・バージョン	カスタム・プロファイル・バージョン
管理コンソール	使用不可	使用可能	使用可能	使用不可
プロファイル管理ツール	使用可能	使用可能	使用可能	使用可能
サンプル・ギャラリー	使用不可	使用可能	使用不可	使用不可
インフォメーション・センター	使用可能	使用可能	使用可能	使用可能
マイグレーション・ウィザード	使用可能	使用可能	使用可能	使用可能
著作権および商標	使用可能	使用不可	使用不可	使用不可
終了	使用可能	使用可能	使用可能	使用可能

オプションの説明

さまざまなバージョンのファースト・ステップ・コンソールで表示されるオプションについて、以下に説明します。

インストール検査

インストール検査テストを開始します。このテストでは、そのスタートアップの間に、スタンドアロン・サーバーまたはデプロイメント・マネージャーを始動し、モニターします。

スタンドアロン・サーバーまたはデプロイメント・マネージャーのプロファイルを作成して以来初めてファースト・ステップ・コンソールを使用した場合、「インストール検査」を選択してインストールを確認します。検査プロセスにより、スタンドアロン・サーバーまたはデプロイメント・マネージャーが始動されます。

インストール検査ツール (IVT) が稼働している間は、「サーバーの起動」および「デプロイメント・マネージャーの開始」オプションは選択できません。

IVT では、スタンドアロン・サーバーまたはデプロイメント・マネージャーに関する以下の有用な情報を提供します。

- サーバー・プロセスの名前
- プロファイルの名前
- プロファイル・パス (プロファイルのファイル・パスおよび名前)
- プロファイルのタイプ
- セル名
- ノード名
- 現行のエンコード
- 管理コンソールのポート番号

- SystemOut.log ファイルのロケーションおよびファイル内にリストされたエラーの数を含むさまざまな通知メッセージ
- システム正常性レポート (スタンドアロン・サーバーの場合のみ)
- 完了メッセージ

インストールの検査について詳しくは、91 ページの『第 5 章 製品のインストールの検査』およびその子トピックを参照してください。

サーバーの始動

サーバーが稼働している場合に「**サーバーの停止**」に切り替えます。

「**サーバーの始動**」オプションを選択すると、出力画面に状況メッセージが表示されます。成功メッセージは、サーバーが e-ビジネス用に開いていることを通知します。次に、メニュー項目が「**サーバーの停止**」に変わり、「**管理コンソール**」および「**サンプル・ギャラリー**」オプションの両方が使用可能になります (それらがインストールされている場合)。

「**サーバーの起動**」オプションを選択した場合、サーバーの起動中に「**インストール検査**」オプションを選択することはできません。

デプロイメント・マネージャーの始動

デプロイメント・マネージャーが稼働している場合に「**デプロイメント・マネージャーの停止**」に切り替えます。

「**デプロイメント・マネージャーの始動**」オプションを選択すると、出力画面に状況メッセージが表示されます。成功メッセージは、デプロイメント・マネージャーが e-ビジネス用に開いていることを通知します。次に、メニュー項目が「**デプロイメント・マネージャーの停止**」に変わり、「**管理コンソール**」オプションが使用可能になります (インストールされている場合)。



「**デプロイメント・マネージャーの開始**」オプションを選択した場合、デプロイメント・マネージャーの実行中に「**インストール検査**」オプションを選択することはできません。

管理コンソール

プロファイルの作成時または拡張時に管理コンソールをデプロイした場合のみ表示されます。このオプションは、スタンドアロン・サーバーまたはデプロイメント・マネージャーが始動されない限り選択できません。

管理コンソールは、Web ブラウザー内で実行される構成エディターです。管理コンソールを使用することによって、スタンドアロン・サーバーまたはデプロイメント・マネージャー、およびセル内にあるすべてのアプリケーション用の XML 構成ファイルで作業することが可能になります。

管理コンソールを起動するには、「**管理コンソール**」を選択します。

問題の回避:   これらのオペレーティング・システムに製品をインストールする場合は、IPv6 を無効にしてマシンを再始動した後、管理コンソールを表示してログインを行う必要があります。IPv6 の無効化について詳しくは、『IPv6 for Microsoft® Windows®: Frequently Asked Questions』を参照してください。

管理コンソールにより、ログイン名を求めるプロンプトが出されます。このプロンプトはセキュリティーのために出されるのではなく、セッション中に

行った構成変更を識別するためのタグにすぎません。管理セキュリティーが使用可能になっている場合、セキュア・サインオンも使用できます。

インフォメーション・センターのインストール手順では、インストール時にセキュリティーを使用可能にした場合、管理ユーザー ID とパスワードを書き留めておくよう忠告しています。ID とパスワードがないと、管理コンソールまたはスクリプトを使用できません。

プロファイル管理ツール

プロファイル管理ツールを開始します。このツールを使用すると、スタンドアロン・サーバー、デプロイメント・マネージャー、またはカスタム・プロファイルを作成できます。

プロファイルは、スタンドアロン・サーバーまたはデプロイメント・マネージャー用のランタイム環境を定義するファイルから構成されます。各プロファイルには、独自の管理インターフェースがあります。カスタム・プロファイルは例外です。カスタム・プロファイルは、ユーザーがデプロイメント・マネージャー・セルに統合したりカスタマイズしたりする空のノードです。カスタム・プロファイル用には、デフォルトのサーバー・プロセスまたはアプリケーションは作成されません。

各プロファイルには、独自のファースト・ステップ・コンソールがあります。ファースト・ステップ・コンソールを開始するコマンドは、プロファイルのファイル・セット内にあります。プロファイルに関連したファースト・ステップ・コンソールの開始プロンプトが、プロファイル管理ツールの最後のパネルに表示されます。

制約事項: 64 ビット・アーキテクチャー (Linux on System z プラットフォームは除く) 上でプロファイルを作成または拡張するときは、プロファイル管理ツールを使用することはできません。その他の 64 ビット・アーキテクチャー上でプロファイルを作成するには、`manageprofiles` コマンド行ユーティリティーを使用できます。32 ビットのインストール済み環境を使用している場合は、これらのアーキテクチャー上でもプロファイル管理ツールを使用することができます。

サンプル・ギャラリー

プロファイルの作成時または拡張時に WebSphere Process Server サンプルをインストールした場合のみ表示されます。このオプションにより、管理コンソールで WebSphere Process Server サンプル・ギャラリーが開始されます。このオプションは、サーバーが始動されない限り選択できません。

サンプル・ギャラリーを開始するには、「**サンプル・ギャラリー**」を選択します。

製品の初期インストール時に WebSphere Process Server サンプルをインストールしていない場合、ファースト・ステップ・コンソール上にオプションは表示されません。増分インストールを実行して、サンプル機能を追加することができます。サンプルを追加すると、ファースト・ステップ・コンソール上にオプションが表示されます。

インフォメーション・センター

WebSphere Process Server オンライン・インフォメーション・センターにリンクしています。

マイグレーション・ウィザード

マイグレーション・ツールへのグラフィカル・インターフェースである、WebSphere Process Server のバージョン間マイグレーション・ウィザードを開始します。バージョン間マイグレーション・ウィザードは、WebSphere Process Server の旧バージョンから新バージョンへのマイグレーションを支援するグラフィカル・インターフェースです。このインターフェースについて詳しくは、BPM プロファイル・マイグレーション・ウィザードを使用したプロファイルのマイグレーションを参照してください。

著作権および商標

WebSphere Process Serverの著作権および商標を示します。

終了 ファースト・ステップ・コンソールを閉じます。

使用のヒント

表 26 に、WebSphere Process Server ファースト・ステップ・コンソールのオプションが呼び出すコマンドを示します。以下の個々のコマンドの詳細については、WebSphere Application Server Network Deployment インフォメーション・センターの『コマンド行ユーティリティー』セクションで、コマンドを検索してください。

- startServer コマンド
- stopServer コマンド
- startManager コマンド
- stopManager コマンド

WebSphere Process Server 製品に組み込まれている、インストール検証テスト、ファースト・ステップ・コンソール、プロファイル管理ツール、およびマイグレーション・ウィザードを開始するために使用されるコマンドは、同等の WebSphere Application Server Network Deployment のコマンドと名前が異っていたり、異なるディレクトリー・ロケーションに存在していたり、異なる機能を実行したりします。そのため、WebSphere Application Server Network Deployment のインフォメーション・センターにあるこれらのコマンドへのリンクは、ここでは示しません。

表 26. ファースト・ステップ・コンソールのオプションが呼び出すコマンド

オプション	リンク
インストール検査	wbi_ivt コマンド行ユーティリティーを呼び出します。 インストール検査テスト・コマンドがある場所は、以下のとおりです。 <ul style="list-style-type: none">• Linux UNIX Linux および UNIX プラットフォーム: <code>profile_root/bin/wbi_ivt.sh</code>• Windows Windows プラットフォーム: <code>profile_root%bin#wbi_ivt.bat</code>

表 26. ファースト・ステップ・コンソールのオプションが呼び出すコマンド (続き)

オプション	リンク
サーバーの始動	<p>startServer コマンドを呼び出します。</p> <p>startServer コマンドがある場所は、以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • Linux UNIX Linux および UNIX プラットフォームの場合: <code>profile_root/bin/startServer.sh</code> • Windows Windows プラットフォームの場合: <code>profile_root%bin%startServer.bat</code> <p>同一ワークステーション上に複数のスタンドアロン・サーバーがある場合、コマンドにより、ファースト・ステップ・コンソール内のプロファイルと同じプロファイルに関連付けられたスタンドアロン・サーバーが始動されません。</p>
サーバーの停止	<p>stopServer コマンドを呼び出します。</p> <p>stopServer コマンドがある場所は、以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • Linux UNIX Linux および UNIX プラットフォームの場合: <code>profile_root/bin/stopServer.sh</code> • Windows Windows プラットフォームの場合: <code>profile_root%bin%stopServer.bat</code>
デプロイメント・マネージャーの始動	<p>startManager コマンドを呼び出します。</p> <p>startManager コマンドがある場所は、以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • Linux UNIX Linux および UNIX プラットフォームの場合: <code>profile_root/bin/startManager.sh</code> • Windows Windows プラットフォームの場合: <code>profile_root%bin%startManager.bat</code> <p>同一ワークステーション上に複数のデプロイメント・マネージャーがある場合、コマンドにより、ファースト・ステップ・コンソール内のプロファイルと同じプロファイルに関連付けられたデプロイメント・マネージャーが始動されます。</p>
デプロイメント・マネージャーの停止	<p>stopManager コマンドを呼び出します。</p> <p>stopManager コマンドがある場所は、以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • Linux UNIX Linux および UNIX プラットフォームの場合: <code>profile_root/bin/stopManager.sh</code> • Windows Windows プラットフォームの場合: <code>profile_root%bin%stopManager.bat</code>

表 26. ファースト・ステップ・コンソールのオプションが呼び出すコマンド (続き)

オプション	リンク
管理コンソール	<p>デフォルトのブラウザを開いて管理コンソールの Web アドレスを指定します。</p> <p>同一ワークステーション上に複数のサーバーがある場合、ポートは異なります。ファースト・ステップ・コンソールにより、ファースト・ステップ・コンソール内のプロファイルと同じプロファイルに関連付けられた管理コンソールが開始されます。</p>
プロファイル管理ツール	<p>pmt コマンドを呼び出します。</p> <p>pmt コマンドがある場所は、以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> Linux UNIX Linux および UNIX プラットフォームの場合: <code>install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh</code> Windows プラットフォームの場合: <code>install_root%bin%ProfileManagement%pmt.bat</code>
サンプル・ギャラリー	<p>デフォルト・ブラウザを開いてサンプル Web アドレスを指定します。</p>
インフォメーション・センター	<p>WebSphere Process Server オンライン・インフォメーション・センターを表示するデフォルト・ブラウザが開きます。</p>
マイグレーション・ウィザード	<p>WebSphere Process Server のバージョン間マイグレーション・スクリプトを呼び出して、マイグレーション・ウィザードを開始します。</p> <p>バージョン間マイグレーション・スクリプトのロケーションは、以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> Linux UNIX Linux および UNIX プラットフォームの場合: <code>was_home/bin/bpm_migration/BPMMigrate.sh</code> Windows Windows プラットフォームの場合: <code>was_home%bin%bpm_migration%BPMMigrate.bat</code>

メッセージ・サービス・クライアントのインストール

C、C++、または .NET アプリケーションが WebSphere Process Server と対話できるようにするには、メッセージ・サービス・クライアントを使用します。

このタスクについて

メッセージ・サービス・クライアントをインストールするために実行すべき手順は、クライアントのタイプおよび使用するインストールのタイプによって異なります。これらの手順については、当該タイプのクライアントに関する資料で説明されています。

手順

- Message Service Client for .NET のインストール
- Message Service Client for C/C++ のインストール

JNDILookup Web Service アプリケーションのインストール

WebSphere Process Server は、非 Java クライアントには解釈できない管理対象 JMS オブジェクトを保持しています。非 Java クライアントが管理対象オブジェクトにアクセスできるようにするため、WebSphere Process Server には JNDILookup Web Service が用意されています。この Web サービスは、プロキシとして動作して、非 Java クライアントが JMS 管理対象オブジェクトを取得できるようにします。

始める前に

JNDILookup Web Service アプリケーションをインストールする前に、システムに WebSphere Process Server がインストールされ、稼働していることを確認する必要があります。

このタスクについて

WebSphere Process Server インストールに対して非 Java クライアントからのアクセスがある場合は、JNDILookup Web Service をインストールする必要があります。このアプリケーションは、次の手順に従い、管理コンソールを使用してインストールできます。

重要: 以下のステップを実行し始めてからアプリケーションのインストールを中止する場合は、「キャンセル」をクリックして終了してください。管理コンソールの別のページに移動する場合は、まず必ず、アプリケーションのインストール・ページで「キャンセル」をクリックしてください。

手順

1. コンソールのナビゲーション・ツリーで、「アプリケーション」 → 「新規アプリケーション (New Application)」をクリックします。
 - 2 ページで構成される「アプリケーション・インストールの準備」ページの最初のページが表示されます。
2. 最初の「アプリケーション・インストールの準備」ページで、新規アプリケーションへのパスを指定します。
 - a. `install_root/installableApps`ディレクトリーを参照し、`SIBXJndiLookupEAR.ear` を選択します。
 - b. 「次へ」をクリックします。
3. 2 番目の「アプリケーション・インストールの準備」ページで、次のステップを実行します。
 - a. デフォルトのバインディングおよびマッピングを生成するかどうかを選択します。

デフォルトのバインディングを使用すると、アプリケーション内の未完了のバインディングにデフォルト値が入力されます。既存のバインディングは変更されません。デフォルト・バインディングの生成で使用されるデフォルト値は、カスタマイズすることができます。

- b. 「次へ」をクリックします。

「新規アプリケーションのインストール」ページが表示されます。

4. 「ステップ 1: インストール・オプションの選択」パネルで、「**Web サービスのデプロイ**」を選択します。
5. 「**ステップ 5: 要約**」をクリックして、「要約」パネルに移動します。
6. 「要約」パネルで、「**終了**」をクリックします。

次のタスク

アプリケーションのインストールの進行を示すメッセージを確認します。アプリケーションが正常にインストールされたら、マスター構成への変更を保管します。コンソール・ナビゲーション・ツリーで「**アプリケーション**」 → 「**エンタープライズ・アプリケーション**」の順にクリックしてアクセスされる「エンタープライズ・アプリケーション」ページ上の、デプロイ済みアプリケーションのリストに **SIBXJndiLookup** が表示されるようになります。

「エンタープライズ・アプリケーション」ページからアプリケーションを開始するには、**SIBXJndiLookup** を選択して、「**開始**」をクリックします。

製品のインストール済み環境の変更

Installation Manager を使用してフィーチャーおよび機能の追加または除去を行うことにより、インストール済みのソフトウェア・パッケージを変更できます。

始める前に

変更を行う前に、Installation Manager を使用してインストールしたプログラムをすべて閉じてください。Installation Manager の追加資料は、Installation Manager インフォメーション・センターで参照することができます。

重要: 製品のインストール中または変更中に、Installation Manager インターフェースまたはログ・ファイルに以下のようなエラーが表示される場合があります。

```
228 ERROR 07:41.26 Installation Manager cannot remove feature import.configLauncher.  
feature from an installation package that was imported to Installation Manager.  
229 ERROR 07:41.54 Installation Manager cannot remove feature import.productProviders.  
feature from an installation package that was imported to Installation Manager.
```

これらのエラーは無視しても構いません。

手順

1. Installation Manager を始動します。詳しくは、80 ページの『手動によるIBM Installation Manager の始動』を参照してください。
2. Installation Manager の「開始」ページで、「**変更**」をクリックします。
3. IBM Installation Manager がシステム上に検出されない場合、または古いバージョンがインストールされている場合は、最新リリースのインストールに進む必要があります。ウィザードに表示中の指示に従って、IBM Installation Manager のインストールを完了してください。
4. 「パッケージの変更 (Modify Packages)」ウィザードで、変更するパッケージを選択し、「**次へ**」をクリックします。

5. リスト項目を展開し、インストール済み環境内で変更するフィーチャーを選択して、「次へ」をクリックします。
6. 要約情報を確認します。要約情報に誤りがある場合は、「戻る」をクリックして選択内容を変更してください。要約情報が正しい場合、「変更」をクリックします。

変更が完了すると、変更の状況を示すページが表示されます。「ログ・ファイルの表示 (View Log File)」をクリックして完了ログを表示します。

7. 「終了」をクリックします。
8. Installation Manager を閉じます。

タスクの結果

WebSphere Process Server インストール済み環境が変更されました。

手動によるIBM Installation Manager の始動

Launchpad プログラムから製品のインストールを開始する場合、IBM Installation Manager がまだワークステーションにインストールされていない場合は、そのインストールが自動的に実行されます。このトピックは、ツールのインストール後にツールを開始する方法を説明します。

手順

以下のタスクのいずれかを実行して、Installation Manager を始動します。

- **Linux** **UNIX** Installation Manager のインストール・ディレクトリーに移動し、コマンド **IBMIM** を実行します。147 ページの『Installation Manager 用のデフォルトのインストール・ディレクトリー』を参照してください。
- **Windows** Windows タスクバーから、「スタート」>「すべてのプログラム」または「プログラム」>「IBM Installation Manager」>「IBM Installation Manager」をクリックします。

次のタスク

Installation Manager の追加資料を、Installation Manager インフォメーション・センターで確認してください。

第 4 章 ドキュメンテーションのインストール

WebSphere Process Server ヘルプ・システムは、製品インストールの Launchpad から以下のシステムでインストールできます。Microsoft Windows XP、Red Hat Enterprise Linux V5、および AIX 5.3 for 64-bit PowerPCシステムです。WebSphere Process Server ヘルプ・システムのインストール後、最新のドキュメンテーションでローカル・インストールを更新できます。

始める前に

このセクションのトピックでは、WebSphere Process Server ヘルプ・システムおよび製品ドキュメンテーションをユーザーのコンピューターにインストールする方法を説明します。WebSphere Process Server が、Microsoft Windows XP、Red Hat Enterprise Linux V5、または AIX 5.3 for 64-bit PowerPC システム以外のシステムにインストールされる場合、またはインターネット経由で情報を表示することを希望する場合、次のリンクをクリックして WebSphere Business Process Management バージョン 7.0 インフォメーション・センターにアクセスできます。『IBM WebSphere Business Process Management Version 7.0 インフォメーション・センター』です。

WebSphere Business Process Management 製品 (Adobe® Acrobat Portable Document Format (PDF) バージョンの情報など) のドキュメンテーション・セットにアクセスする別の方法として、製品の Web ページにある、「ライブラリー」リンクを使用します。WebSphere Business Process Management ページ (『BPM - Business Process Management』) にある製品 Web ページのリストを表示できます。

このタスクについて

ドキュメンテーションのインストール後、WebSphere Process Server ヘルプ・システムをスタンドアロン・モード、サーバー・モードのいずれかで始動し使用できます。

- スタンドアロン・モードでは、WebSphere Process Server ヘルプ・システムは個人用のヘルプ・システムとして機能します。
- サーバー (インフォメーション・センター) モードでは、ドキュメンテーションつき WebSphere Process Server ヘルプ・システムは公開されたドキュメンテーション・サーバーとして機能し、ネットワーク上の他の Web ブラウザーは指定のポートでこのヘルプ・システムに接続できます。

ドキュメンテーションのローカル・コピーを保有することで、インターネットに接続されていない場合でも、インストール、保守および製品の使用に必要な情報にアクセスできます。

手順

- WebSphere Process Server ヘルプ・システムおよびドキュメンテーションをインストールするには、82 ページの『新しいヘルプ・システムのインストール』を参照してください。

- WebSphere Process Server ヘルプ・システムを既にインストール済みの場合に WebSphere Process Server バージョン 7.0 ドキュメンテーションを更新するには、83 ページの『ヘルプ・システムへの最新ドキュメンテーションのインストール』を参照してください。
- WebSphere Process Server ヘルプ・システムを既にインストール済みの場合に WebSphere Process Server ドキュメンテーションの別のバージョンを追加するには、84 ページの『ヘルプ・システムへの別のバージョンのドキュメンテーションのインストール』を参照してください。
- 製品ドキュメンテーションを WebSphere Process Server ヘルプ・システムではなく Eclipse ベースのヘルプ・システムに追加するには、86 ページの『Eclipse ベースの他のヘルプ・ビューアーへのドキュメンテーションのインストール』を参照してください。

次のタスク

IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システムのインストールが完了すると、ヘルプ・システムを開いて製品ドキュメンテーションを表示できるようになります。WebSphere Process Server ヘルプ・システムの概要については、『ドキュメンテーションによるこそ (Welcome to the documentation)』のヘルプ・トピックを確認してください。

製品の最新情報を確認するには、『WebSphere Process Server』を参照してください。

新しいヘルプ・システムのインストール

WebSphere Process Server ヘルプ・システム (製品ドキュメンテーションを含む) を WebSphere Process Server Launchpad からインストールします。

始める前に

ヘルプ・システムおよびドキュメンテーションをインストールするには、正常に動作しているインターネット接続が必要です。

手順

1. WebSphere Process Server がインストールされているディレクトリーに移動し、以下のコマンドのいずれかを入力して、Launchpad を始動します。
 - **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合: `launchpad.sh`
 - **Windows** プラットフォームの場合: `launchpad.exe`
2. Launchpad から「ヘルプ・システムのインストール」をクリックします。
3. 「インストール・ロケーションを指定してください」フィールドにヘルプ・システムをインストールするディレクトリーを入力します。
4. 「ヘルプ・システムのインストールおよび始動」をクリックします

ヘルプ・システムがコンピューターにインストールされ、ドキュメンテーションのインストールに関する説明が表示されます。

5. ヘルプ・システム・ツールバーの「更新」アイコン () をクリックします。

既にインストール済みのあらゆるドキュメンテーション・セットのリストが表示されます。

6. インストール済みドキュメンテーション・リストの下部にある「次へ」をクリックします。

インストールするドキュメンテーション・セットのリストが表示されます。このセットには各国語版の製品ドキュメンテーションが含まれており、別の製品に関するドキュメンテーション・セットが含まれる場合もあります。

7. 「完了」をクリックすると、インストールが完了します。

タスクの結果

ヘルプ・システムがインストールおよび始動され、ドキュメンテーションを表示できます。

次のタスク

ヘルプ・システムを停止するには、89 ページの『ヘルプ・システムの停止』を参照してください。

関連タスク

90 ページの『ドキュメンテーションのアンインストール』

IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システム (その中のすべてのドキュメンテーションを含む) をローカル・システムからアンインストールするには、ヘルプ・システムがインストールされているディレクトリーを削除します。

89 ページの『ヘルプ・システムの停止』

ヘルプ・システムを停止するには、ご使用のコンピューター上でコマンド・ファイルを使用します。

ヘルプ・システムへの最新ドキュメンテーションのインストール

IBM WebSphere Process Server のヘルプ・システムが既にインストールされている場合は、そのヘルプ・システム内で更新機能を使用することにより、製品ドキュメンテーションの更新バージョンをヘルプ・システムにインストールできます。

始める前に

IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システムにドキュメンテーションをインストールするには、ドキュメンテーションをダウンロードするためのインターネット接続が機能している必要があります。

このタスクについて

更新機能を使用して、WebSphere Business Process Management 製品ファミリーと同じバージョンの製品に対して提供されている最新の資料でローカル・インストールを更新できます。

手順

1. IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システムを開始します。サポートが必要な場合は、『ヘルプ・システムの始動』の説明に従ってください。

- ヘルプ・システム・ツールバーの「更新」アイコン () をクリックします。

既にインストール済みのあらゆるドキュメンテーション・セットのリストが表示されます。

- インストール済みドキュメンテーション・リストの下部にある「次へ」をクリックします。

インストールするドキュメンテーション・セットのリストが表示されます。このセットには各国語版の製品ドキュメンテーションが含まれており、別の製品に関するドキュメンテーション・セットが含まれる場合もあります。

- 「完了」をクリックすると、インストールが完了します。

次のタスク

ヘルプ・システムで、新規にインストールされたドキュメンテーションを表示できます。

更新されたドキュメンテーションが表示されない場合、ヘルプ・システムを停止し再始動して表示してください。

関連タスク

86 ページの『Eclipse ベースの他のヘルプ・ビューアーへのドキュメンテーションのインストール』

Eclipse ベースのヘルプ・ビューアーを使用していて、WebSphere Process Server のドキュメンテーションをそこで表示できるようにしたい場合は、ビューアーをそのドキュメンテーションを表示するように構成できます。

89 ページの『ヘルプ・システムの停止』

ヘルプ・システムを停止するには、ご使用のコンピューター上でコマンド・ファイルを使用します。

88 ページの『ヘルプ・システムの始動』

ヘルプ・システムを始動するには、ご使用のコンピューター上でコマンド・ファイルを使用します。

ヘルプ・システムへの別のバージョンのドキュメンテーションのインストール

WebSphere Process Server ヘルプ・システムには、異なるバージョンの製品ドキュメンテーションをインストールできます。例えば、旧バージョンの製品 (WebSphere Process Server バージョン 6.2 など) のヘルプ・システムが既にインストール済みの場合は、そのヘルプ・システムに新しい製品バージョンのドキュメンテーションを追加できます。

始める前に

IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システムにドキュメンテーションをインストールするには、ドキュメンテーションをダウンロードするためのインターネット接続が機能している必要があります。

使用できるのは、以前にインストールした IBM WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus のヘルプ・システムのみです。WebSphere Process Server および WebSphere Enterprise Service Bus のヘルプ・システムは (バージョンが同じであれば) 同等であり、相互に入れ替えて使用できます。

注: ヘルプ・システムには、更新機能が含まれている必要があります。更新機能が含まれていない旧バージョンの WebSphere Process Server を保有している場合、更新機能を使用して製品ドキュメンテーションを更新することができません。

このタスクについて

インストールするドキュメンテーションを示すには、新製品バージョンのドキュメンテーション更新サイトを参照するように bookmarks.xml ファイルを変更します。

以下のいずれかの組み合わせのドキュメンテーションをインストールできます。

- 7.0 用のドキュメンテーションをバージョン 6.2 またはバージョン 6.1.2 の WebSphere Process Server ヘルプ・システムに追加する
- 6.2 用のドキュメンテーションをバージョン 6.1.2 の WebSphere Process Server ヘルプ・システムに追加する
- 6.1.2 用のドキュメンテーションをバージョン 6.2 の WebSphere Process Server ヘルプ・システムに追加する
- WebSphere Business Process Management 製品以外のドキュメンテーションを WebSphere Process Server ヘルプ・システムに追加する

手順


1. 別のバージョンのドキュメンテーションをヘルプ・システムに追加するには、以下のステップを実行します。
 - a. ヘルプ・システムのプラグイン・ディレクトリーに移動します。
 - b. そのプラグイン・ディレクトリーで、Eclipse の webapp プラグイン・ディレクトリーを探します (通常は、org.eclipse.help.webapp_<version> のような名前です)。例えば、バージョン 3.1.1 の Eclipse webapp プラグイン・フォルダーの名前は、org.eclipse.help.webapp_3.1.1 です。
 - c. そのプラグイン・フォルダーで、ファイル bookmarks.xml を編集のために開きます。
 - d. サイト・エレメント属性の値を追加するか、変更します。

表 27. サイトのエレメント属性

name (optional)	IBM ヘルプ・システム・サーバー
url	<ul style="list-style-type: none"> • バージョン 7.0 のドキュメンテーションの場合: http://publib.boulder.ibm.com/dmndhelp/downloads/v7r0mx • バージョン 6.2 のドキュメンテーションの場合: http://publib.boulder.ibm.com/dmndhelp/downloads/v6r2mx • バージョン 6.1.2 のドキュメンテーションの場合: http://publib.boulder.ibm.com/dmndhelp/downloads/

例えば、バージョン 7.0 のインフォメーション・センターを参照するには、このファイルを次のように更新します。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<bookmarks>
  <site name="IBM Help System server"
    url="http://publib.boulder.ibm.com/dmndhelp/downloads/v7r0mx" />
</bookmarks>
```

2. WebSphere Process Server ヘルプ・システムを開始します。サポートが必要な場合は、『ヘルプ・システムの始動』の説明に従ってください。
3. ヘルプ・システム・ツールバーの「更新」アイコン () をクリックします。
4. 先に進んで、インストールするドキュメンテーションを選択します。選択が終了したら、ドキュメンテーションがインストールされたことを確認します。

次のタスク

ヘルプ・システムで、新規にインストールされたドキュメンテーションを表示できます。

更新されたドキュメンテーションが表示されない場合、ヘルプ・システムを停止し再始動して表示してください。

関連タスク

89 ページの『ヘルプ・システムの停止』

ヘルプ・システムを停止するには、ご使用のコンピューター上でコマンド・ファイルを使用します。

88 ページの『ヘルプ・システムの始動』

ヘルプ・システムを始動するには、ご使用のコンピューター上でコマンド・ファイルを使用します。

Eclipse ベースの他のヘルプ・ビューアーへのドキュメンテーションのインストール

Eclipse ベースのヘルプ・ビューアーを使用していて、WebSphere Process Server のドキュメンテーションをそこで表示できるようにしたい場合は、ビューアーをそのドキュメンテーションを表示するように構成できます。

始める前に

Eclipse ベースのヘルプ・ビューアーにドキュメンテーションをインストールするには、インターネットに接続してドキュメンテーションをダウンロードする必要があります。また、Eclipse ベースのヘルプ・ビューアーのバージョンが 3.1.0 以上である必要があります。

このタスクについて

IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システムは、特に WebSphere Business Process Management 製品のバージョン 7.0 を対象とする更新サーバーからドキュメンテーションをダウンロードするように構成されています。その更新サーバーからドキュメンテーションをダウンロードするように他の Eclipse ベースのヘルプ・システムを構成できます。

手順

1. Eclipse ベースのヘルプ・ビューアーのプラグイン・ディレクトリーに移動します。
2. そのプラグイン・ディレクトリーで、Eclipse の webapp プラグイン・ディレクトリーを探します (通常は、org.eclipse.help.webapp_<version> のような名前です)。例えば、3.1.0 バージョンの Eclipse webapp プラグイン・フォルダーの名前は、org.eclipse.help.webapp_3.1.0 です。
3. そのプラグイン・フォルダーで、ファイル bookmarks.xml を編集のために開きます。
4. サイト・エレメント属性の値を追加するか、変更します。

オプション	説明
name (optional)	更新サーバー
url	http://publib.boulder.ibm.com/dmndhelp/downloads/v7r0mx

例えば、バージョン 7.0 のインフォメーション・センターを参照するには、このファイルを次のように更新します。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<bookmarks>
  <site name="update server"
        url="http://publib.boulder.ibm.com/dmndhelp/downloads/v7r0mx" />
</bookmarks>
```

5. スタンドアロン・モードでヘルプ・システムを始動します。サーバー・モードでは更新機能を使用できません。ヘルプ・システムがすでに実行中の場合は、停止してから再始動する必要があります。
6. 適切なボタンをクリックして、ドキュメンテーションを更新します。
7. 先に進んで、インストールするドキュメンテーションを選択します。選択が終了したら、ドキュメンテーションがインストールされたことを確認します。

次のタスク

ヘルプ・システムで、新規にインストールされたドキュメンテーションを表示できません。

更新されたドキュメンテーションが表示されない場合、ヘルプ・システムを停止し再始動して表示してください。

関連タスク

89 ページの『ヘルプ・システムの停止』

ヘルプ・システムを停止するには、ご使用のコンピューター上でコマンド・ファイルを使用します。

『ヘルプ・システムの始動』

ヘルプ・システムを始動するには、ご使用のコンピューター上でコマンド・ファイルを使用します。

ヘルプ・システムの始動

ヘルプ・システムを始動するには、ご使用のコンピューター上でコマンド・ファイルを使用します。

始める前に

いずれかのバージョンのヘルプ・システムがワークステーションにインストールされている必要があります。

手順

- ヘルプ・システムをスタンドアロン・モードで始動するには、以下の手順を実行します。
 - ヘルプ・システムがインストールされているディレクトリーに移動します。
 - 以下の該当する `help_start` スクリプトを実行します。
 - Linux および UNIX プラットフォームの場合:** `help_start.sh`
 - Windows プラットフォームの場合:** `help_start.bat`システムが始動するまでに数分かかることがあります。
- ヘルプ・システムをサーバー (インフォメーション・センター) モードで始動するには、以下の手順を実行します。
 - ヘルプ・システムがインストールされているディレクトリーに移動します。
 - オプション: インフォメーション・センター・サーバーを始動するポートを変更します。

デフォルトでは、サーバーはポート 8888 で始動します。

サーバーを別のポートで始動したい場合、適切な `start` スクリプトを編集して `-port` 設定を変更します。

- Linux および UNIX プラットフォームの場合:** `IC_start.sh`
- Windows プラットフォームの場合:** `IC_start.bat`

例えば、ポート 9876 を使用するには、`-port 9876` と入力します。

- 以下の該当する `help_start` スクリプトを実行します。
 - Linux および UNIX プラットフォームの場合:** `IC_start.sh`
 - Windows プラットフォームの場合:** `IC_start.bat`

タスクの結果

ヘルプ・システムが開始されます。

- スタンドアロン・モードの場合は、Web ブラウザーが開き、ヘルプ・システムのコンテンツが表示されます。
- サーバー・モードの場合は、ユーザーが Web ブラウザーを開いてヘルプ・システムのコンテンツを表示できます。

関連タスク

『ヘルプ・システムの停止』

ヘルプ・システムを停止するには、ご使用のコンピューター上でコマンド・ファイルを使用します。

ヘルプ・システムの停止

ヘルプ・システムを停止するには、ご使用のコンピューター上でコマンド・ファイルを使用します。

始める前に

いずれかのバージョンのヘルプ・システムがワークステーションにインストールされている必要があります。

手順

- スタンドアロン・モードで実行されているヘルプ・システム・ビューアーを停止するには、以下の手順を実行します。
 1. ヘルプ・システムがインストールされているディレクトリーに移動します。
 2. そのディレクトリーで、次のうち適切なスクリプトを開始します。
 - Linux および UNIX プラットフォームの場合: `help_end.sh`
 - Windows プラットフォームの場合: `help_end.bat`
- サーバー・モードで実行されているヘルプ・システム・ビューアーを停止するには、以下の手順を実行します。
 1. ヘルプ・システムがインストールされているディレクトリーに移動します。
 2. そのディレクトリーで、次のうち適切なスクリプトを開始します。
 - Linux および UNIX プラットフォームの場合: `IC_end.sh`
 - Windows プラットフォームの場合: `IC_end.bat`

タスクの結果

ヘルプ・システムが停止されます。

関連タスク

88 ページの『ヘルプ・システムの始動』

ヘルプ・システムを始動するには、ご使用のコンピューター上でコマンド・ファイルを使用します。

ヘルプ・システムの表示

ヘルプ・システムのコンテンツを表示するには、Web ブラウザーを使用します。

このタスクについて

ヘルプ・システムをサーバー・モードで実行すると、ユーザー定義のポートで Web アプリケーションが呼び出され、そのヘルプ・システムに接続する任意の Web ブラウザーにヘルプのコンテンツが提供されます。ヘルプ・ページおよびメニューは、Web ブラウザーのロケールで表示されます。サーバーを始動するポートを変更するために、開始スクリプトをテキスト・エディターで変更できます。

インフォメーション・センターをスタンドアロン・モードで開始すると、ドキュメンテーションが自動的に表示されます。

しかし、サーバー・モードで資料を表示させるには、以下の手順を実行する必要があります。

手順

1. Web ブラウザーを開きます。
2. ヘルプ・ページの URL `http://<servername>:<port>/help` を入力します。ここで、<servername> は WebSphere Process Server ヘルプ・システムがインストールされているシステムのホスト名または IP アドレスです。

例えば、インフォメーション・センターがサーバー `xyz.com` にインストールされており、デフォルトのポートを使用している場合は、URL `http://xyz.ibm.com:8888/help` を入力することでインフォメーション・センターを開くことができます。

3. Enter を押します。

システムが始動するまでに数分かかることがあります。

ドキュメンテーションのアンインストール

IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システム (その中のすべてのドキュメンテーションを含む) をローカル・システムからアンインストールするには、ヘルプ・システムがインストールされているディレクトリーを削除します。

このタスクについて

WebSphere Process Server ヘルプ・システムを削除すると、ヘルプ・システムおよびすべてのドキュメンテーション (この場所にインストールした他のあらゆる製品ドキュメンテーションを含む) が除去されることに注意してください。

第 5 章 製品のインストールの検査

WebSphere Process Server が正常にインストールされ、スタンドアロン・サーバー・プロファイルまたはデプロイメント・マネージャー・プロファイルが正常に作成されていることを確認するには、インストール検査ツールを使用します。プロファイルは、デプロイメント・マネージャーまたはサーバー用のランタイム環境を定義するファイルから構成されます。installver_wbi 検査合計ツールを使用してコア製品ファイルを検査します。インストール検査テスト (IVT) ツールを使用して、各プロファイルを検査します。

始める前に

インストール検査ツールは、WebSphere Process Server をインストールし、スタンドアロン・サーバー・プロファイルまたはデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成した後に使用することができます。

このタスクについて

インストール検査ツールを使用して、製品が正常にインストールされたことを確認できます。WebSphere Process Server には、次の 2 つのインストール検査ツールが含まれています。

- installver_wbi 検査合計ツール。システムにインストールされた WebSphere Process Server ファイルが完全にインストールされたかどうかを検査します。installver_wbi コマンド行ユーティリティーは、各インストール済み WebSphere Process Server ファイルの検査合計をファイルごとの正しい検査合計と比較して相違点を報告します。
- インストール検査テスト (IVT) ツール。デプロイメント・マネージャー・プロファイルとスタンドアロン・サーバー・プロファイルをテストして、サーバー・プロセスが開始できるかどうかを確認します。IVT プログラムは、製品のログ・ファイルをスキャンしてエラーの有無を調べ、製品のコア機能を検証します。さらに、IVT はシステム正常性検査を実行し、スタンドアロン・サーバー・プロファイル用のレポートを生成します。

検査ツールを使用するには、以下のステップを実行します。

手順

1. すべての WebSphere Process Server ファイルが正しくインストールされているかどうか検査するには、installver_wbi コマンド行ユーティリティーを実行します。

詳しくは、92 ページの『インストール済みファイルの検査合計の検証』を参照してください。

2. プロファイルが適切に作成されているかどうかを検査するには、インストール検査テスト (IVT) ツールを使用します。ファースト・ステップ・コンソールで、「インストール検査」をクリックするか、または wbi_ivt コマンド行ユーティリティーを使用します。

次のタスク

製品をインストールし、インストールを検査した後、さらにプロファイルを作成してインストールを構成することができます。

インストール済みファイルの検査合計の検証

製品のインストール後または保守パッケージのインストール後に、インストール検査ユーティリティ (IVU) を使用できます。これにより、インストール済みのファイル・セットの検査合計を計算し、製品部品表の検査合計と照合して検証できます。

始める前に

製品をインストールすると、IVU もインストールされます。これは、`installver_wbi.bat` コマンド行ツールです。

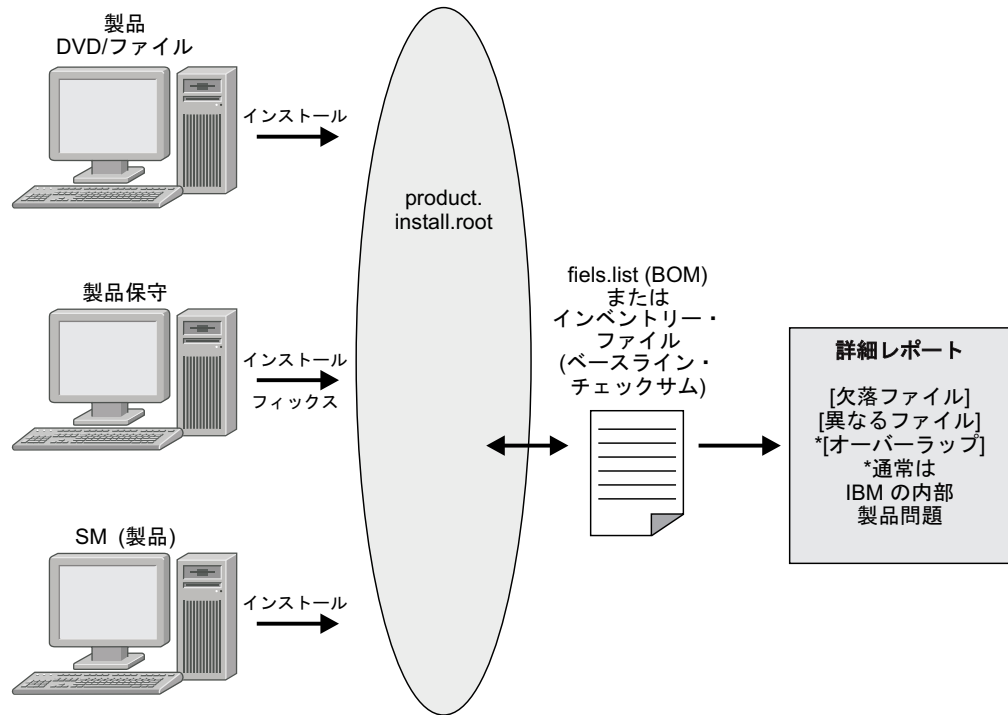
このタスクについて

`installver_wbi.bat` コマンド行ツールを使用して、インストール済みファイルの検査合計を計算し、その検査合計を製品の部品表と照合します。

インストール検査ユーティリティ・ツールは、WebSphere Process Server のインストール中にインストールされます。

また、重要な構成変更を行った後で、IVU を使用して、システムの新しい検査合計を計算することもできます。`installver_wbi.bat` ツールは、構成済みのシステムの品目内にある各ファイルごとに新しいベースライン検査合計を計算して、その後の比較処理でファイルの変更点を示すために使用することができます。このようにして比較すると、構成済みシステム上のファイルの改ざんなどを検出できます。例えば、

新しい検査合計を使用して複数のシステム間でインストール済み環境を比較することができます。以下の図は、主要な使用例を説明しています。ここでは、製品ライフ・サイクルの任意の時点で製品検査を実行するか、またはベースライン検査合計機能の一部であるインベントリー・ファイルを使用して、構成システムのファイル全体の検査を行うことができます。



このツールの最も一般的な使用法は、製品の部品表をインストール済みのファイル・セットと比較することですが、その他のタスクも可能です。

インストール済みのファイルの検査合計を確認するには、以下のステップを実行します。

手順

- インストール済みのファイルを部品表と照合します。

詳しくは、94 ページの『部品表との照合』を参照してください。

- 新しいベースライン検査合計を作成し、使用します。

詳しくは、98 ページの『構成済みファイルの品目に対する新しいベースライン検査合計の計算』を参照してください。

- ファイルやコンポーネントを比較から除外します。

詳しくは、101 ページの『検査合計の比較からのファイルの除外』を参照してください。

- 特定のファイルやコンポーネントのみを比較の対象に含めます。

詳しくは、105 ページの『特定のファイルおよびコンポーネントの検査合計の比較』を参照してください。

- 検査合計を計算するためのデフォルトのメッセージ・ダイジェスト・アルゴリズムを変更します。

詳しくは、108 ページの『installver_wbi コマンド行ユーティリティーのデフォルトのメッセージ・ダイジェスト・アルゴリズムの変更』を参照してください。

- メモリー不足状態を処理します。

詳しくは、109 ページの『メモリー不足の状態の処理』を参照してください。

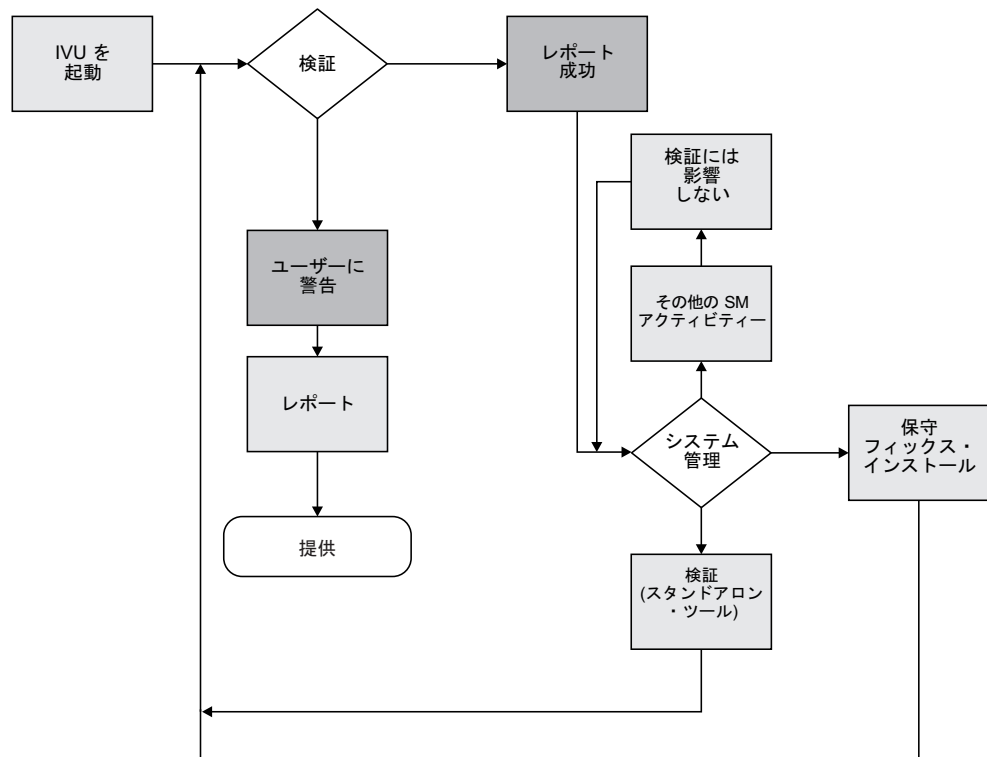
- installver_wbi.bat コマンド・ファイルを検査します。

タスクの結果

インストール済みまたは更新済みのファイル・セットが製品の部品表と一致するという条件が満たされると、製品ファイルの検証が終了したことになります。

問題が検出された場合は、WebSphere Process Server Support Web サイトをチェックして、その問題が既知の問題であるかどうかを確認してください。

IVU は次の図で説明するロジックを使用したタスクを実行します。



部品表との照合

製品のインストール後、インストール済みファイルの実際の検査合計を、製品に付属している部品表と照合します。検査合計が一致すれば、インストールされた製品のインストールが適切であることになります。検査合計が異なる場合は、相違点を調べて、問題があるかどうかを判断します。

始める前に

インストール済みファイルの検査合計と付属する部品表の比較を行う前に、製品をインストールしてください。

このタスクについて

installver_wbi コマンド行ユーティリティを使用して、部品表ファイル・セットとインストール済みファイルの検査合計を照合し、すべてのインストール済みファイ

ルが正しいかどうか確認します。このインストール・ファイルの検査システム機能を提供するために、製品にはコンポーネントごとの部品表ファイルが付属しています。

installver_wbi コマンド行ユーティリティーは、インストール済み環境内で検出された全コンポーネントのリストを動的に生成します。

installver_wbi コマンド・ファイルは、インストール・ルート・ディレクトリーの次の bin ディレクトリー内にあります。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:

```
install_root/bin/installver_wbi.sh
```

- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合:

```
install_root%bin%installver_wbi.bat
```

コマンド行から installver_wbi ユーティリティーを開始するには、ディレクトリーを bin ディレクトリーに移動します。

部品表をインストール済みファイル・システムと照合するには、以下のステップを実行します。

手順

- 製品ファイルの検査合計を、部品表ファイル内の正しい検査合計と比較するには、以下のコマンドを入力します。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:

```
install_root/bin/installver_wbi.sh
```

- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合:

```
install_root%bin%installver_wbi.bat
```

- 検査合計を比較してトレース結果を表示するには、以下のコマンドを入力します。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:

```
./installver_wbi.sh -trace
```

- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: installver_wbi.bat -trace

- installver_wbi コマンド行ユーティリティーの使用法に関する情報を表示するには、以下のコマンドを入力します。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:

```
./installver_wbi.sh -help
```

- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: installver_wbi.bat -help

- 検査合計を比較して、特定のファイルおよびコンポーネントのみを比較の対象として含める場合は、105 ページの『特定のファイルおよびコンポーネントの検査合計の比較』を参照してください。 コマンドでリストしたファイルおよびコンポーネントのみを比較することができます。

- 検査合計を比較し、除外するファイルのリストを無視するには、以下のコマンドを入力します。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
./installver_wbi.sh -ignoreuserexclude
- **Windows** **Windows** プラットフォーム: installver_wbi.bat
-ignoreuserexclude

部品表の検査合計から除外するファイルのリストを指定する方法については、101 ページの『検査合計の比較からのファイルの除外』を参照してください。

- 検査合計を比較し、すべての IBM 除外ファイルを無視するには、以下のコマンドを入力します。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォーム:
./installver_wbi.sh -ignoreibmexclude
- **Windows** **Windows** プラットフォーム: installver_wbi.bat
-ignoreibmexclude

タスクの結果

install_root/bin ディレクトリーから検査合計のコマンドのうちのいずれかを実行すると、端末コンソールにコマンドの状況が表示されます。

ロギングの結果: *installver_wbi* コマンド行ユーティリティーで、コンポーネントごとにメッセージが作成されます。また、部品表にあるすべてのコンポーネントの検査に基づいた、全体としての成功も報告します。以下のメッセージは完了を示します。

- I CWNVU0400I: [ivu] Total issues found : 625
- I CWNVU0340I: [ivu] Done.

これらのメッセージでは、検出された問題の合計数を報告します。問題の数がゼロの場合は、すべてのコンポーネントが存在しており、問題はありません。

installver_wbi ユーティリティーでは、ログ用のファイル名を指定せずに **-log** パラメーターを使用した場合、コマンドの結果を *install_root/logs/installver.log* ファイルに記録します。

-log パラメーターと引数を使用して、出力をリダイレクトすることができます。存在しているディレクトリーを指定する必要があります。例: *./installver_wbi.sh -log /tmp/waslogs/my_installver.log*

例

以下のコマンドでは、この例を生成し、インストール済みの製品を製品の部品表と比較した結果を表示します。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
./installver_wbi.sh
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: installver_wbi.bat

エラーのあるコンポーネントからの出力例

この例では、比較によって検出されたエラーを示しています。

```

I CWNVU0160I: [ivu] Verifying.
I CWNVU0170I: [ivu] The installation root directory is E:\WPS61¥
I CWNVU0300I: [ivu] The total number of user excluded files found is 38.
I CWNVU0300I: [ivu] The total number of IBM excluded files found is 82.
I CWNVU0185I: [ivu] Searching component directory for file listing: files.list
I CWNVU0460I: [ivu] The utility is running.
I CWNVU0260I: [ivu] The total number of components found is: 441
I CWNVU0270I: [ivu] Gathering installation root data.
W CWNVU0280W: [ivu] Component mismatch: expected mismatchcomponentname
but found mismatchingname
I CWNVU0360I: [ivu] The following bill of materials issue is found for component
nullvaluesample: Hash must not be null or an empty string.
I CWNVU0360I: [ivu] The following bill of materials issue is found for component
nullvaluesample: Name must not be null or an empty string.
I CWNVU0360I: [ivu] The following bill of materials issue is found for component
nullvaluesample: Hash must not be null or an empty string.
I CWNVU0360I: [ivu] The following bill of materials issue is found for component
nullvaluesample: Permission must not be null or an empty string.
I CWNVU0360I: [ivu] The following bill of materials issue is found for component
symlinksample: Hash must not be null or an empty string.
I CWNVU0290I: [ivu] Starting the verification for 6 components.

I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: _binarycomponentsample
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: _binarycomponentsample

I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: nullvaluesample
I CWNVU0430I: [ivu] The following file is missing: testpath
I CWNVU0390I: [ivu] Component issues found : 1
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: nullvaluesample

I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: overlapbinarycomponentsample
W CWNVU0422W: [ivu] The following file is overlapped: lib/binaryTest.jar
W CWNVU0425W: [ivu] The overlap is caused by: _binarycomponentsample
I CWNVU0390I: [ivu] Component issues found : 1
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: overlapbinarycomponentsample

I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: regularcomponentsample
I CWNVU0440I: [ivu] The following file is different: lib/different.jar
I CWNVU0410I: [ivu] fc19318dd13128ce14344d066510a982269c241b is the
checksum in the bill of materials.
I CWNVU0420I: [ivu] 517d5a7240861ec297fa07542a7bf7470bb604fe is the
checksum on the file system.
I CWNVU0440I: [ivu] The following file is different: lib/ibmtemplateexclude.jar
I CWNVU0410I: [ivu] d3ac7a4ef1a8ffb4134f2f6e7f3c0d249d74b674 is the
checksum in the bill of materials.
I CWNVU0420I: [ivu] d3ac7a4ef1a838b4134f2f6e7f3c0d249d74b674 is the
checksum on the file system.
I CWNVU0430I: [ivu] The following file is missing: lib/missing.jar
I CWNVU0440I: [ivu] The following file is different: lib/usertemplateexclude.jar
I CWNVU0410I: [ivu] 12dea96fec20593566ab75ff2c9949596833adc9 is the
checksum in the bill of materials.
I CWNVU0420I: [ivu] 12dea96fec20593566ab75692c9949596833adc9 is the
checksum on the file system.
I CWNVU0430I: [ivu] The following file is missing: missingfilebutwithbaddirectory/
missingBadDirectory.jar
I CWNVU0390I: [ivu] Component issues found : 5
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: regularcomponentsample

I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: symlinksample
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: symlinksample

I CWNVU0400I: [ivu] Total issues found : 7
I CWNVU0340I: [ivu] Done.

```

標準的な正常インストールの出力例

この例では、正常なインストールの検査の標準的な結果を示しています。

実際上の問題と判断する前に、その問題をよく調べてください。

```
I CWNVU0160I: [ivu] Verifying.
I CWNVU0170I: [ivu] The installation root directory is E:\WPS61¥
I CWNVU0300I: [ivu] The total number of user excluded files found is 38.
I CWNVU0300I: [ivu] The total number of IBM excluded files found is 82.
I CWNVU0185I: [ivu] Searching component directory for file listing: files.list
I CWNVU0460I: [ivu] The utility is running.
I CWNVU0260I: [ivu] The total number of components found is: 441
I CWNVU0270I: [ivu] Gathering installation root data.
I CWNVU0290I: [ivu] Starting the verification for 439 components.

I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: ArtifactLoaderImpl
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: ArtifactLoaderImpl

I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: activity.impl
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: activity.impl

I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: activity.session.impl
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: activity.session.impl

I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: acwa
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: acwa

I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: adapter
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: adapter
...

I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: workspace
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: workspace

I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: workspace.query
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: workspace.query

I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: wps.rt.bundle
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: wps.rt.bundle

I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: wps.wccm.bundle
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: wps.wccm.bundle

I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: wpsnd
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: wpsnd

I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: wsadie.bundle
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: wsadie.bundle

I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: wsba.impl
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: wsba.impl

I CWNVU0400I: [ivu] Total issues found : 0
I CWNVU0340I: [ivu] Done.
```

構成済みファイルの品目に対する新しいベースライン検査合計の計算

インストールの後、インストール済みファイルの実際の検査合計を、製品に付属している部品表と照合することができます。システムを構成した後に、検査合計を作成して、システムを定期的に検査合計と比較できるようにできます。その結果を使用して、構成済みのシステムに対する変更を分析します。

始める前に

製品を構成した後、新しいベースライン検査合計を保管して、システムに対する新しい検査合計の標準を設定します。

このタスクについて

`installver_wbi` コマンド行ユーティリティーを使用すると、構成済みファイルの品目を作成し、これを現在インストールされているファイルと比較することができます。

`installver_wbi` コマンド行ユーティリティーは、インストール・ルート・ディレクトリー内のすべてのファイルの品目に対するベースライン検査合計を新たに計算することができます。コマンド行ユーティリティーを実行すると、デフォルトで、現行作業ディレクトリー内の `sys.inv` ファイルに新しい検査合計が格納されます。別のファイル・パスとファイル名を指定することができます。インストール・ルート・ディレクトリーの外部にファイルを作成したり、比較からファイルを除外したりします。

後で、`sys.inv` ファイル (または、品目の作成時に指定したファイル) にある検査合計を、現在インストールされているファイルの検査合計と比較して、どのファイルが変更になっているかを確認します。

ベースライン検査合計レポートにより、欠落ファイル、追加されたファイル、変更されたファイルが示されます。

`installver_wbi` コマンド行ユーティリティーは、インストール・ルート・ディレクトリーの次の `bin` ディレクトリー内にあります。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:

```
install_root/bin/installver_wbi.sh
```

- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合:

```
install_root%bin%installver_wbi.bat
```

コマンド行から `installver_wbi` ユーティリティーを開始するには、ディレクトリーを `bin` ディレクトリーに移動します。

構成済みファイルの品目に対する新規ベースライン検査合計を計算するには、以下の手順を実行してください。

手順

- インストール・ルート・ディレクトリーに現在インストールされているファイルの品目リストを作成するには、以下のように入力します。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:

```
./installver_wbi.sh -createinventory
```

- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `installver_wbi.bat`

```
-createinventory
```

Windows 例えば、`installver_wbi.bat -createinventory` コマンドを実行して、デフォルトの `install_root¥bin¥sys.inv` ファイルを作成すると、Windows システムに次のメッセージが表示される場合があります。

```
W CWNVU0320W: [ivu] The
C:¥IBM¥WebSphere¥ProcServer¥bin¥sys.inv
inventory file is within the product installation root directory:
C:¥IBM¥WebSphere¥ProcServer.

Create the file outside of the installation root directory to omit the file from the
verification.
I CWNVU0300I: [ivu] The total number of user excluded files found are 2.
I CWNVU0300I: [ivu] The total number of IBM excluded files found are 78.
I CWNVU0310I: [ivu] Creating the following inventory file:
C:¥IBM¥WebSphere¥ProcServer¥bin¥sys.inv
I CWNVU0460I: [ivu] The utility is running.
```

コマンドの実行が終了すると、次の完了メッセージが表示されます。

```
I CWNVU0340I: [ivu] Done.
```

`sys.inv` には、この Windows システムの例に示すような新しい品目が格納されています。

```
#C:¥IBM¥WebSphere¥AppServer¥
#2005.10.10_06.24.06PM_EDT
#user_ID
#-createinventory -log
241fe4e309abfd8f2c5911216dbabd61dd4751a6
|_jvm¥bin¥appletviewer.exe
|42032
|2004.10.28 05.37.02AM EDT
e00c6ea688ab67e004ec6cfac26ec48541a5b9ff
|_jvm¥bin¥dbghe1p.dll
|712192
|2004.10.28 05.36.50AM EDT
916e244deeb44b9d3218aafa3b56c8680aa31f2f
|_jvm¥bin¥extcheck.exe
|42040
|2004.10.28 05.37.02AM EDT
...
7fc3bb38e8b90fed05cd0440953000c2cc965b44
|web¥spidocs¥stylesheet.css
|1240
|2005.10.09 12.14.17AM EDT
22706a0d900c52f1c015c870ddee25581c5d57b
|web¥spidocs¥toHTML¥index.html
|867
|2005.10.09 12.14.17AM EDT
```

- 品目ファイルをインストール・ルート・ディレクトリーの外部のディレクトリーに作成して、品目ファイルを比較から除外するには、以下のように入力します。

– **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:

```
./installver_wbi.sh -createinventory /tmp/system.inv
```

– **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `installver_wbi.bat -createinventory "C:¥temp¥system.inv"`

- 品目リストを、インストール・ルート・ディレクトリーに現在インストールされているファイルと比較するには、以下のように入力します。

– **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:

```
./installver_wbi.sh -compare
```


– **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `installver_wbi.bat -compare`

品目ファイルをデフォルトのロケーション以外の場所で作成した場合は、以下の構文を使用します。

– **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
`./installver_wbi.sh -compare /tmp/system.inv`

– **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `installver_wbi.bat -compare "C:¥temp¥system.inv"`

• 比較してトレースの結果を表示するには、以下のように入力します。

– **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
`./installver_wbi.sh -compare -trace`

– **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `installver_wbi.bat -compare -trace`

• 比較するときに、品目の比較から指定したファイルを除外するには、以下のように入力します。

– **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
`./installver_wbi.sh -compare -exclude fn1;fn2;fn3;...`

– **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `installver_wbi.bat -compare -exclude fn1;fn2;fn3;...`

• 比較するときに、品目の比較に指定したファイルのみを対象として含めるには、以下のように入力します。

– **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
`./installver_wbi.sh -compare -include fn1;fn2;fn3;...`

– **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `installver_wbi.bat -compare -include fn1;fn2;fn3;...`

タスクの結果

`install_root/bin` ディレクトリーから `installver_wbi` コマンドを実行すると、端末コンソールにコマンドの状況が表示されます。ログを作成する場合は、`-log` パラメーターを使用します。

検査合計の比較からのファイルの除外

比較から除外する個々のファイルを指定するか、または除外する個々のコンポーネントを指定します。あるいは、1 つの構成可能なプロパティ・ファイルを作成して、部品表の検査から除外するファイルのリストを指定します。

始める前に

検査合計を比較し、除外プロパティを使用する前に、製品をインストールしてください。

このタスクについて

installver_wbi コマンド行ユーティリティーの除外プロパティーを使用して、ファイルを検査合計の比較から除外することができます。

IBM では、デフォルトでいくつかのファイルを検査合計の比較から除外していません。ユーザーがファイルを除外することもできます。除外されたファイルの数は、最初のいくつかのメッセージの中で報告されます。以下に例を示します。

```
I CWNVU0160I: [ivu] Verifying.  
I CWNVU0170I: [ivu] The installation root directory is ...  
I CWNVU0300I: [ivu] The total number of user excluded files found are 0.  
I CWNVU0300I: [ivu] The total number of IBM excluded files found are 82.  
...
```

ファイルを比較から除外するには、いくつかの方法があります。

installver_wbi コマンド・ファイルは、インストール・ルート・ディレクトリーの次の bin ディレクトリー内にあります。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
`install_root/bin/installver_wbi.sh`
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合:
`install_root%bin%installver_wbi.bat`

コマンド行から installver_wbi ユーティリティーを開始するには、ディレクトリーを bin ディレクトリーに移動します。

ファイルを検査合計の比較から除外するには、以下の手順を実行します。

手順

- 1 つ以上のコンポーネント内の全ファイルをその比較対象から除外するには、以下のコマンドを入力してください。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
`./installver_wbi.sh -excludecomponent comp1;comp2;comp3;...`
- **Windows** **Windows** プラットフォーム: `installver_wbi.bat`
`-excludecomponent comp1;comp2;comp3;...`

Linux **UNIX** 例えば、コンポーネント内にある、既知の許容可能な問題を回避するために、prereq.wccm コンポーネントを除外する場合は、以下のように入力します。

```
./installver_wbi.sh -log -excludecomponent prereq.wccm
```

結果として出力されるメッセージに、以下のような除外が示されます。

```
I CWNVU0160I: [ivu] Verifying.  
I CWNVU0170I: [ivu] The installation root directory is E:\WPS61¥  
I CWNVU0300I: [ivu] The total number of user excluded files found is 38.  
I CWNVU0300I: [ivu] The total number of IBM excluded files found is 82.  
I CWNVU0185I: [ivu] Searching component directory for file listing: files.list  
I CWNVU0460I: [ivu] The utility is running.  
I CWNVU0260I: [ivu] The total number of components found is: 441  
I CWNVU0270I: [ivu] Gathering installation root data.
```

```
I CWNVU0290I: [ivu] Starting the verification for 439 components.
...
I CWNVU0400I: [ivu] Total issues found : 0
I CWNVU0340I: [ivu] Done.
```

- 比較対象から特定のファイルを除くするには、以下のコマンドを入力します。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
`install_root/bin/installver_wbi.sh -exclude fn1;fn2;fn3`
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合:
`install_root%bin%installver_wbi.bat -exclude fn1;fn2;fn3`

例えば、比較の対象として `prereq.wccm` コンポーネントのみを含め、前回の比較実行時に欠落していたファイルを除くするには、以下のように入力します。

```
...
I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: prereq.wccm
I CWNVU0430I: [ivu] The following file is missing:
web/configDocs/activitysessionejbext/ActivitySessionEJBJarExtension.html
I CWNVU0430I: [ivu] The following file is missing:
web/configDocs/activitysessionejbext/ActivitySessionEnterpriseBeanExtension.html
I CWNVU0430I: [ivu] The following file is missing:
web/configDocs/activitysessionejbext/ContainerActivitySession.html
...
```

Windows 以下は、前の例で強調表示された欠落ファイルを除くための入力例です。

```
installver_wbi.bat -log -includecomponent prereq.wccm -exclude web%configDocs%activitysessionejbext%
ActivitySessionEJBJarExtension.html;web%configDocs%activitysessionejbext%
ActivitySessionEnterpriseBeanExtension.html
```

ヒント: **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: ディレクトリーの区切りには、Windows 形式のスラッシュ、または UNIX 形式のスラッシュを使用してください。

結果として、以下のように、除外されたファイルは比較されなかったことが示されます。

```
I CWNVU0160I: [ivu] Verifying.
I CWNVU0170I: [ivu] The installation root directory is ...
I CWNVU0300I: [ivu] The total number of user excluded files found are 0.
I CWNVU0300I: [ivu] The total number of IBM excluded files found are 82.
I CWNVU0185I: [ivu] Searching component directory for file listing: files.list
I CWNVU0260I: [ivu] The total number of components found is: 285
I CWNVU0270I: [ivu] Gathering installation root data.
I CWNVU0460I: [ivu] The utility is running.
I CWNVU0290I: [ivu] Starting the verification for 1 components.

I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: prereq.wccm
I CWNVU0430I: [ivu] The following file is missing:
web/configDocs/activitysessionejbext/ContainerActivitySession.html
...
I CWNVU0390I: [ivu] Component issues found : 623
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: prereq.wccm

I CWNVU0400I: [ivu] Total issues found : 623
I CWNVU0340I: [ivu] Done.
```

2 つのファイルが比較に入れられたとすると、その 2 つがリストに入っており、問題の数は前の例のように 625 となるはずですが。

ヒント: この例の強調表示された行は、次のステップで説明するユーザー・テンプレート・ファイルにリストされた除外ファイルのための予約行です。強調表示された行では、`-exclude` パラメーターを指定した `installver_wbi` コマンド行でリストしたファイルはカウントされません。

- ユーザー・テンプレートを作成および使用して、検査合計を比較するときに、その比較から特定のファイルを除外するには、以下のステップを実行します。部品表の検査から除外するファイルのリストを指定するために、構成可能なプロパティ・ファイルを使用することができます。

1. 以下のコマンドを入力して、空のテンプレート・ファイルを作成します。

– **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
`install_root/bin/installver_wbi.sh template_name -createtemplate`

– **Windows** **Windows** プラットフォームの場合:
`install_root\bin\installver_wbi.bat template_name -createtemplate`

Windows 例えば、Windows システム上にデフォルトのユーザー・テンプレート・ファイル作成するには、以下のように入力します。

```
installver_wbi.bat -createtemplate
I CWNVU0200I: [ivu] Creating template:
C:¥IBM¥WebSphere¥ProcServer¥profiles¥
Dmgr01¥properties¥ivu_user.template
I CWNVU0340I: [ivu] Done.
```

デフォルト・プロファイルの `properties` ディレクトリーに、`ivu_user.template` ファイルが作成されます。この例では、デプロイメント・マネージャー・プロファイルです。

`-template_name` パラメーターはオプションです。ただし、テンプレート・ファイルは、`install_root/profiles/Dmgr01/properties` ディレクトリーのような、デフォルト・プロファイルの `properties` ディレクトリー内に存在していなければなりません。

2. テンプレート・ファイル内に、除外するファイルをリストします。

プロパティ・ファイルの形式は、以下のようになります。

```
<template>
  <componentfiles componentname="name_of_component">
    <file>
      <relativepath action="exclude">file_name</relativepath>
    </file>
  </componentfiles>
</template>
```

例えば、以下のように、前の例に示したコンポーネントとファイルをリストします。

```
<template>
  <componentfiles componentname="prereq.wccm">
    <file>
      <relativepath action="exclude">
web/configDocs/activitysession1jbext/ ¥
ActivitySessionEnterpriseBeanExtension.html
      </relativepath>
    </file>
  </componentfiles>
```

```
<relativepath action="exclude">
web/configDocs/activitysessionejbext/ ¥
ActivitySessionEJBJarExtension.html
</relativepath>
</file>
</componentfiles>
</template>
```

ヒント: 引用符や二重引用符を使用して、ファイル名を区切らないでください。

3. テンプレート・ファイルを使用して、以下のように比較からファイルを除外します。

以下に例を示します。

```
installver_wbi.bat -log
```

ivu_user.template ファイルが、デフォルト・プロファイルの properties ディレクトリーに存在する場合は、installver_wbi コマンド行ユーティリティーがこのファイルを使用します。

結果として、いくつかのユーザー・ファイルが除外されたことが示されます。

```
I CWNVU0160I: [ivu] Verifying.
I CWNVU0170I: [ivu] The installation root directory is ...
I CWNVU0300I: [ivu] The total number of user excluded files found are 2.
I CWNVU0300I: [ivu] The total number of IBM excluded files found are 82.
I CWNVU0185I: [ivu] Searching component directory for file listing: files.list
I CWNVU0460I: [ivu] The utility is running.
I CWNVU0260I: [ivu] The total number of components found is: 285
I CWNVU0270I: [ivu] Gathering installation root data.
I CWNVU0290I: [ivu] Starting the verification for 1 components.

I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: prereq.wccm
I CWNVU0430I: [ivu] The following file is missing:
web/configDocs/activitysessionejbext/ContainerActivitySession.html

...
I CWNVU0430I: [ivu] The following file is missing:
web/configDocs/wssecurity/generator-binding.html
I CWNVU0390I: [ivu] Component issues found : 623
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: prereq.wccm

I CWNVU0400I: [ivu] Total issues found : 623
I CWNVU0340I: [ivu] Done.
```

タスクの結果

install_root/bin ディレクトリーからいずれかの検査合計コマンドを実行すると、端末コンソールまたはログ・ファイルにコマンドの状況が示されます。

特定のファイルおよびコンポーネントの検査合計の比較

部品表の検査の対象に含める個々のファイルまたはコンポーネントを指定します。

始める前に

個々のファイルおよびコンポーネントの検査合計を比較する前に、製品のインストールを完了してください。

このタスクについて

包含プロパティを使用して、個別のファイルおよびコンポーネントを指定することができます。

デフォルトでは、IBM が除外するファイルを除く全ファイルが検査合計の比較の対象に含まれます。以下のような出力が示されます。

```
I CWNVU0160I: [ivu] Verifying.
I CWNVU0170I: [ivu] The installation root directory is E:¥WPS61¥
I CWNVU0300I: [ivu] The total number of user excluded files found are 0.
I CWNVU0300I: [ivu] The total number of IBM excluded files found are 82.
I CWNVU0185I: [ivu] Searching component directory for file listing: files.list
I CWNVU0460I: [ivu] The utility is running.
I CWNVU0260I: [ivu] The total number of components found is: 441
I CWNVU0270I: [ivu] Gathering installation root data.
I CWNVU0460I: [ivu] The utility is running.
I CWNVU0290I: [ivu] Starting the verification for 441 components.

I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: activity
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: activity
```

...

特定のファイルのみを比較の対象に含めるには、いくつかの方法があります。

installver_wbi コマンド・ファイルは、インストール・ルート・ディレクトリーの次の bin ディレクトリー内にあります。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
`install_root/bin/installver_wbi.sh`
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合:
`install_root¥bin¥installver_wbi.bat`

コマンド行から installver_wbi ユーティリティを開始するには、ディレクトリーを bin ディレクトリーに移動します。

特定のファイルおよびコンポーネントの検査合計を比較するには、以下の手順を実行します。

手順

- 検査合計の比較対象として特定のコンポーネントのみを指定するには、以下のコマンドを入力します。
 - **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォーム:
`./installver_wbi.sh -includecomponent comp1;comp2;comp3;...`
 - **Windows** **Windows** プラットフォーム: `installver_wbi.bat`
`-includecomponent comp1;comp2;comp3;...`

例えば、activity コンポーネントを対象に含める場合は、以下のように入力します。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
`./installver_wbi.sh -log -includecomponent activity`

- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `installver_wbi.bat -log -includecomponent activity`

結果として出力されるメッセージに、包含が示されます。以下のような出力が示されます。

```
I CWNVU0160I: [ivu] Verifying.
I CWNVU0170I: [ivu] The installation root directory is ...
I CWNVU0300I: [ivu] The total number of user excluded files found are 0.
I CWNVU0300I: [ivu] The total number of IBM excluded files found are 82.
I CWNVU0185I: [ivu] Searching component directory for file listing: files.list
I CWNVU0460I: [ivu] The utility is running.
I CWNVU0260I: [ivu] The total number of components found is: 285
I CWNVU0270I: [ivu] Gathering installation root data.
I CWNVU0290I: [ivu] Starting the verification for 1 components.

I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: activity
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: activity

I CWNVU0400I: [ivu] Total issues found : 0
I CWNVU0340I: [ivu] Done.
```

- 検査合計の比較対象として特定のファイルのみを指定するには、以下のコマンドを入力します。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
`install_root/bin/installver_wbi.sh -include fn1;fn2;fn3`
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合:
`install_root%bin%installver_wbi.bat -include fn1;fn2;fn3`

例えば、`properties/version/proxy.server.component` ファイルのみを対象に含めることができます。この例では、検査合計の相違点を生成するように変更になります。

- **Windows**
`installver_wbi.bat -log -include properties%version%proxy.server.component`

結果として、対象に含められたファイルが比較され、このファイルを参照するすべてのコンポーネントを探して、285 個のコンポーネントがスキャンされたことが示されます。以下のような出力が示されます。

```
I CWNVU0160I: [ivu] Verifying.
...
I CWNVU0300I: [ivu] The total number of user excluded files found are 0.
I CWNVU0300I: [ivu] The total number of IBM excluded files found is 82.
I CWNVU0185I: [ivu] Searching component directory for file listing: files.list
I CWNVU0460I: [ivu] The utility is running.
I CWNVU0260I: [ivu] The total number of components found is: 285
I CWNVU0270I: [ivu] Gathering installation root data.
I CWNVU0290I: [ivu] Starting the verification for 285 components.

I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: activity
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: activity
...
I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: proxy.server
I CWNVU0440I: [ivu] The following file is different: properties/version/proxy.server.component
I CWNVU0410I: [ivu] f385fc95977092e0482d52f9d1d5bebbc39fbb10 is the checksum in the bill of materials.
I CWNVU0420I: [ivu] b43bda7f1e7202d1f9495fc74ac14b8d85830aab is the checksum on the file system.
I CWNVU0390I: [ivu] Component issues found : 1
```

```
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: proxy.server
...
I CWNVU0400I: [ivu] Total issues found : 1
I CWNVU0340I: [ivu] Done.
```

ファイルが 1 つのコンポーネント内のみにあることが分かっている場合は、以下のように入力して、ファイルの比較を該当するコンポーネントに限定することで、比較を高速化することができます。以下に例を示します。

– **Windows**

```
installver_wbi.bat -log -includecomponent proxy.server -include properties\version\proxy.server.component
```

結果として、比較が 1 つのコンポーネントに限定されたことが示されます。以下のような出力が示されます。

```
I CWNVU0160I: [ivu] Verifying.
...
I CWNVU0300I: [ivu] The total number of user excluded files found are 0.
I CWNVU0300I: [ivu] The total number of IBM excluded files found is 82.
I CWNVU0185I: [ivu] Searching component directory for file listing: files.list
I CWNVU0460I: [ivu] The utility is running.
I CWNVU0260I: [ivu] The total number of components found is: 285
I CWNVU0270I: [ivu] Gathering installation root data.
I CWNVU0460I: [ivu] The utility is running.
I CWNVU0290I: [ivu] Starting the verification for 1 components.

I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: proxy.server
I CWNVU0440I: [ivu] The following file is different: properties/version/proxy.server.component
I CWNVU0410I: [ivu] f385fc95977092e0482d52f9d1d5bebbc39fbb10 is the checksum in the bill
of materials.
I CWNVU0420I: [ivu] b43bda7f1e7202d1f9495fc74ac14b8d85830aab is the checksum on the file
system.
I CWNVU0390I: [ivu] Component issues found : 1
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: proxy.server

I CWNVU0400I: [ivu] Total issues found : 1
I CWNVU0340I: [ivu] Done.
```

タスクの結果

`install_root/bin` ディレクトリーからいずれかの検査合計コマンドを実行すると、端末コンソールまたはログ・ファイルにコマンドの状況が示されます。

installver_wbi コマンド行ユーティリティーのデフォルトのメッセージ・ダイジェスト・アルゴリズムの変更

インストールされたファイルの検査合計を比較するためのデフォルトのメッセージ・ダイジェスト・アルゴリズムは、変更することができます。アルゴリズムを変更するには、`installver_wbi` コマンド・スクリプトを編集する必要があります。

始める前に

デフォルトのメッセージ・ダイジェスト・アルゴリズムを SHA から MD5 へ変更する前に、製品をインストールしてください。

また、コマンド・ファイルを変更する前に、`installver_wbi` コマンド行ユーティリティーを使用して製品ファイルを検査します。

このタスクについて

デフォルトのメッセージ・ダイジェスト・アルゴリズムは、米国連邦標準技術局 (NIST) の Secure Hash Standard (SHS) に含まれるセキュア・ハッシュ・アルゴリズム (SHA) のうちの 1 つです。SHA-1 は、米国政府の標準ハッシュ関数です。詳細については、連邦情報処理標準 (FIPS) Web ページ (<http://csrc.nist.gov/publications/fips/index.html>) の資料 FIPS 180-2 を参照してください。

WebSphere Process Server の FIPS への準拠について詳しくは、『連邦情報処理標準』を参照してください。

これより古い MD5 メッセージ・ダイジェスト・アルゴリズムも使用することができます。MD5 は、SHA ほど安全ではない非推奨タイプのメッセージ・アルゴリズムで、以前のバージョンとの互換性のためにのみ提供されます。

必要な場合に限って、デフォルトのメッセージ・ダイジェスト・アルゴリズムを SHA から MD5 に変更します。この変更を行うには、`installver_wbi.bat` ファイルまたは `installver_wbi.sh` ファイルを編集します。アルゴリズムを変更すると、製品の部品表の SHA ベースの検査合計が無効になります。このため、メッセージ・ダイジェスト・アルゴリズムを変更する前に、製品ファイルを確認します。

デフォルトのメッセージ・ダイジェスト・アルゴリズムを変更するには、以下の手順を実行します。

手順

1. `installver_wbi` コマンド・スクリプトを編集する場合:

• **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
`install_root/bin/installver_wbi.sh` ファイルを編集します。

• **Windows** プラットフォームの場合:
`install_root\bin\installver_wbi.bat` ファイルを編集します。

2. スクリプト・ファイルに以下の環境プロパティを追加します。

```
-Dchecksum.type=MD5
```

デフォルト値は以下のとおりです。

```
-Dchecksum.type=SHA
```

3. 変更を保存します。

タスクの結果

アルゴリズムを変更した後、`installver_wbi` コマンド行ユーティリティーを実行してそれが正しく機能することを確認してください。

メモリー不足の状態の処理

`installver_wbi` コマンド行ユーティリティーの使用時のメモリー要件は、その製品のインストール済みファイル・セットのサイズと関係しています。基本的な検査シナリオでは、インストール済みファイル・セットと、提供されている部品表とを比較するために、最大で 128 MB から 256 MB のヒープ・サイズが必要な場合があります。

このタスクについて

製品の検査またはベースライン検査合計の検査用にさらにメモリーが必要な場合は、installver コマンド・スクリプトに設定値を挿入して、Java 仮想マシン (JVM) の最大ヒープ・サイズの設定を増やしてください。installver_wbi コマンドによって installver コマンド・スクリプトが呼び出されます。

メモリー不足の状態を処理するには、以下の手順を実行します。

手順

1. installver コマンド・スクリプトを編集する場合:

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
`install_root/bin/installver.sh` ファイルを編集します。
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合:
`install_root\bin\installver.bat` ファイルを編集します。

2. 最大ヒープ・サイズの設定を追加または増加させる場合:

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合: 以下の行を変更します。

```
"$JAVA_HOME"/bin/java ¥
```

次のように変更:

```
"$JAVA_HOME"/bin/java -Xmx256M ¥
```

- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: 以下の行を変更します。

```
"%JAVA_HOME%\bin\java" "-Dproduct.home=%WAS_HOME%"
```

次のように変更:

```
"%JAVA_HOME%\bin\java" -Xmx256M "-Dproduct.home=%WAS_HOME%"
```

3. 変更を保存します。




タスクの結果

設定を変更した後、installver_wbi コマンド行ユーティリティーが正しく機能することを確認するため、コマンドを実行してください。

第 6 章 ほかの WebSphere 製品のインストール済み環境との共存

WebSphere Process Server バージョン 7.0 のインストール済み環境は、同一システム上で任意のバージョンの WebSphere Enterprise Service Bus、WebSphere Process Server、および精選された WebSphere 製品と共存できます。

WebSphere Process Server バージョン 7.0 のインストール済み環境は、以下のサポート対象製品とバージョンの 1 つ以上のインストール済み環境と同じシステム上で同時に稼働させることができます。

- IBM WebSphere Process Server バージョン 7.0、6.2、6.1.x、および 6.0.x
- IBM WebSphere Enterprise Service Bus バージョン 7.0、6.2、6.1.x、および 6.0.x
- IBM WebSphere Application Server バージョン 7.0、6.1、6.0.x、および 5.x
- IBM WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 7.0、6.1、6.0.x、および 5.x
- IBM WebSphere Business Integration Server Foundation バージョン 5.x
-    IBM WebSphere Application Server Enterprise バージョン 5.0.x

共存を構成する際、通信エラーを防ぐために発生したすべてのポートの競合を解決する必要があります。ポート番号の設定については、『WebSphere Application Server バージョンにおけるポート番号設定』を参照してください。

サーバーの各バージョンには、異なるデータベースがインストールされている必要があります。

共存と、以下に説明するマイグレーション、更新、または相互協調処理 とを混同しないようにしてください。

- **マイグレーション** とは、WebSphere Process Server の前のリリースから新しいリリースに構成をコピーすることです。WebSphere Process Server または WebSphere ESB の前のバージョンを既にインストールしているシステムに WebSphere Process Server バージョン 7.0 をインストールして、WebSphere Process Server または WebSphere ESB のより新しいバージョンにマイグレーションする場合、詳しくは、WebSphere Process Server へのマイグレーションを参照してください。
- **更新** とは、既存のインストール済み環境にある古いファイルまたはデータを現行情報で置き換えることです。リフレッシュ・パック、暫定修正、フィックスパックなどが更新の例として挙げられます。
- **相互協調処理** とは、共存する複数の製品インストール済み環境などの 2 つの異なるシステム間でデータを交換することです。通常、WebSphere Process Server のこのバージョンは、多数の前のバージョンと相互協調処理が可能です。インターオペラビリティ (相互運用性) をサポートするには、最新の修正レベルを適用

する必要があります。詳しくは、『WebSphere Process Serverと他の WebSphere Application Server 製品との間のインターオペラビリティの計画』を参照してください。

各種 WebSphere 製品の既存のインストール済み環境と共存する WebSphere Process Server または WebSphere Process Server Client のインストール

この手順を使用して、WebSphere Process Server、WebSphere Enterprise Service Bus、または WebSphere Application Server あるいは WebSphere Application Server Network Deployment のサポートされているバージョンのいずれかが既にインストールされているシステムに WebSphere Process Server または WebSphere Process Server Client をインストールします。この手順では、インストール・プロセスを Launchpad アプリケーションから開始することを想定しています。

始める前に

WebSphere Process Server をインストールする前に、以下のタスクを実行します。

- 33 ページの『WebSphere Process Server のインストールに関する前提条件』のトピックを参照して、製品をインストールするための前提条件を確認します。オペレーティング・システムおよびソフトウェアの前提条件レベルが特に重要です。インストール・プロセスでは前提条件となるオペレーティング・システム・パッチが自動的に検査されますが、前提条件をまだ検討していない場合は、<http://www.ibm.com/support/docview.wss?uid=swg27006205> でその検討を行ってください。この Web サイトには、サポートされているオペレーティング・システム、およびオペレーティング・システムを準拠させるためにインストールする必要があるオペレーティング・システムのフィックスおよびパッチがすべて記載されています。さらに、すべての前提ソフトウェアの必要レベルも記載されています。
- Launchpad は Web アプリケーションなので、サポートされるバージョンの Web ブラウザーがインストールされている必要があります。

Linux **UNIX** **Windows** **WebSphere Application Server Network Deployment** インフォメーション・センターにあるプラットフォーム固有のトピック『インストールのためのオペレーティング・システムの準備』には、すべてのプラットフォームでサポートされる Web ブラウザーのインストールに関する詳しい指示があります。

このタスクについて

WebSphere Application Server Network Deployment の新規インストールと共に本製品をインストールする場合、Launchpad アプリケーションを使用してインストール・プロセスを開始すると、Launchpad によって、WebSphere Application Server Network Deployment、WebSphere Application Server Feature Pack for XML、WebSphere Application Server Feature Pack for Service Component Architecture (SCA) (Service Data Objects (SDO) フィーチャー付属)、および WebSphere Process Server がインストールされます。

この手順は、以下の製品のうち 1 つ以上が既にインストールされていることを前提としています。

- WebSphere Process Server、 WebSphere Process Server Client、または WebSphere Enterprise Service Bus バージョン 7.0
- WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 7.0

手順

1. イメージを抽出したディレクトリーにナビゲートし、以下のコマンドを入力して、Launchpad アプリケーションを開始します。
 - **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
`extract_directory/launchpad.sh`
 - **Windows** **Windows** プラットフォームの場合 (コマンド行から):
`extract_directory\launchpad.exe`
2. Launchpad の左ペインで、以下のいずれかの入力項目をクリックします。クリックする入力項目は、自分が root ユーザー (管理ユーザー) か非 root ユーザー (非管理ユーザー) かによって異なります。
 - root ユーザーまたは管理ユーザーの場合は、「**新規インストール**」をクリックします。
 - 非 root ユーザーまたは非管理ユーザーの場合は、「**非管理または非 root インストール**」をクリックします。
3. ステップ 1 で、WebSphere Application Server Network Deployment のインストール先を指定して「**WebSphere Application Server のインストール**」をクリックします。

制約事項: **Windows** IBM Installation Manager の場合、インストール・ディレクトリーのパスの長さは 80 文字以内で指定する必要があります。そのため、ユーザー ID は 20 文字以内で指定することをお勧めします。

Launchpad アプリケーションにより、以下のタスクが実行されます。

- WebSphere Application Server Network Deployment が指定したディレクトリーにインストールされます。

重要: この製品は、サイレント・インストールによってインストールされます。インストールには数分かかることがあります。インストールが正常に終了したことを通知するメッセージが表示されるまで、先には進まないでください。

- WebSphere Application Server が Installation Manager へ自動的にインポートされます。

重要: この製品は、サイレント・インストールによってインストールされます。インストールには数分かかることがあります。インストールと Installation Manager へのインポートが成功したことを示すメッセージが返されるまでは、先に進まないでください。成功のメッセージではなく、以下のいずれかのメッセージが返される場合があります。

- WebSphere Application Server のインストールは失敗しました。 この場合は、以下のログ・ファイルを確認して原因を特定してください。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
was_home/logs/install /log.txt
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: was_home¥logs¥install¥
log.txt

logs ディレクトリーがシステム上に存在しない場合は、インストールがプロセスのごく初期の段階で失敗しています。この場合は、以下のログ・ファイルを確認してください。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
user_home/waslogs/log.txt
 - **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: user_home¥waslogs¥
log.txt
- WebSphere Application Server のインストールは正常に完了しましたが、Installation Manager へのインポート中にエラーが発生しました。この場合は、以下のログ・ファイルを確認して原因を特定してください。
 - **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
was_home/logs/launchpad_import.txt
 - **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: was_home¥logs¥
launchpad_import.txt

4. ステップ 2 では、Launchpad のページで「**WebSphere Process Server のインストール**」をクリックします。Launchpad アプリケーションは Installation Manager とその「パッケージのインストール」ウィザードを開始します。
5. 「パッケージのインストール」ウィザードの「インストール」ページでは、推奨されるすべてのパッケージがインストール用に事前選択されています。これには、WebSphere Application Server Feature Pack for XML、WebSphere Application Server Feature Pack for Service Component Architecture (SCA) (SDO フィーチャー付属)、および WebSphere Process Server が含まれます。「次へ」をクリックします。
6. 「パッケージのインストール」ウィザードのライセンス・ページで使用許諾契約書をよく読み、「**使用条件の条項に同意します。**」を選択します。「次へ」をクリックします。フィーチャー・パックのライセンスもパネルに表示されます。すべてのライセンスを受け入れます。
7. 「パッケージのインストール」ウィザードの「ロケーション」ページでは、「**IBM WebSphere Application Server - ND_XXXXX**」(ここで XXXXX は日付タイム・スタンプです) および「**既存のパッケージ・グループを使用**」のラジオ・ボタンがデフォルトで選択されています。これらの選択はそのままにして、「次へ」をクリックします。

注: 実行中のプロセスが検出されると、「パッケージのインストール」ウィザードはメッセージを表示します。このメッセージが表示された場合は、「**キャンセル**」をクリックし、実行中のプロセスをシャットダウンしてから、インストールを再開してください。

8. 「パッケージのインストール」ウィザードはオペレーティング・システムを検査して、WebSphere Process Server インストールのための前提条件が満たされているかどうかを調べます。前提条件検査の結果により、ユーザーの次のアクションが決まります。

- 前提条件検査に合格した場合 (つまり、サポートされるオペレーティング・システムが検出された場合) は、メッセージは表示されません。インストールは「パッケージのインストール」ウィザードの「フィーチャー」ページで続行されます。ステップ 9 に進んでください。
- 前提条件検査が不合格の場合 (例えば、サポートされるオペレーティング・システムが最小サポート・レベルにない場合) は、エラー・メッセージが表示され、インストールは停止します。WebSphere Process Server をインストールするためには、メッセージに説明されている問題に対処する必要があります。
- サポートされるオペレーティング・システムのより高いメジャー・リリースが稼働している場合、またはオペレーティング・システム自体がサポート対象のリストにない場合は、警告が出されることがあります。インストールを続行することはできますが、保守を適用しないとインストール済み環境または製品が正常に稼働しなくなる可能性があります。

このような警告が出された場合は、製品サポート Web ページにアクセスして、最新保守パッケージを取得し、インストール終了後に適用してください。サポートされているバージョンへのマイグレーションについては、IBM 以外の前提条件および相互に必要な製品の資料を参照してください。

9. 「パッケージのインストール」ウィザードの「フィーチャー」ページで、デフォルトで選択されている項目をそのままにして「次へ」をクリックします。

- a. オプション: サンプルをインストールするには、「**IBM WebSphere Process Server 7.0.0.0**」および「**WebSphere Process Server**」を展開し、「**サンプル・アプリケーション**」のチェック・ボックスを選択します。ここでサンプル・アプリケーションをインストールしない場合でも、『インストール後にサンプルまたはデフォルトのスタンドアロン開発プロファイルをインストールするには』の説明に従ってあとからインストールすることができます。
- b. オプション: WebSphere Process Server のデフォルトのスタンドアロン開発プロファイルをインストールするには、「**IBM WebSphere Process Server 7.0.0.0**」、次に「**WebSphere Process Server**」を展開し、「**スタンドアロン開発 WebSphere Process Server プロファイル (qwps)**」のチェック・ボックスを選択します。WebSphere Enterprise Service Bus のデフォルトのスタンドアロン開発プロファイルをインストールするには、「**スタンドアロン開発 WebSphere Enterprise Service Bus プロファイル (qesb)**」のチェック・ボックスを選択します。

スタンドアロン開発プロファイルは、ビジネス・ルール・マネージャーが使用可能に設定されているデフォルトの開発プロファイルです。開発プロファイルの作成を選択した場合は、管理者セキュリティ ID とパスワード資格情報の入力画面が表示されます。実稼働環境の場合、開発プロファイルは使用できません。ここでデフォルトのスタンドアロン開発プロファイルをインストールしない場合でも、『インストール後にサンプルまたはデフォルトの

スタンドアロン開発プロファイルをインストールするには』の説明に従ってあとからインストールすることができます。

10. 要約情報を確認します。要約情報に誤りがある場合は、「戻る」をクリックして選択内容を変更してください。
11. 「インストール」をクリックします。インストールが完了すると、インストールの状況と、正常にインストールされたパッケージを示すページが表示されます。

重要: このプロセスは、数分かかる場合があります。このページが表示されるまで、先には進まないでください。

12. プロファイル管理ツールを起動する場合は、「プロファイル管理ツール」ラジオ・ボタンを選択をしたままにします。起動しない場合は、「なし」のラジオ・ボタンを選択します。
13. 「終了」をクリックします。

タスクの結果

これで、WebSphere Process Server の 2 つのインストール済み環境を同一のシステム上に共存させることができました。

次のタスク

プロファイル管理ツールで、または `manageprofiles` コマンド行ユーティリティを使用して、スタンドアロン・サーバー・プロファイルまたはデプロイメント・マネージャー・プロファイルを定義する必要があります。実稼働環境では、プロファイル管理ツールまたは `manageprofiles` コマンド行ユーティリティで作成されたプロファイルのみを使用できます。詳しくは、230 ページの『プロファイルの作成』および 355 ページの『プロファイルの拡張』の下のトピックを参照してください。

制約事項:

インストール中にスタンドアロン開発プロファイルを作成した場合は、このプロファイルは実稼働環境では機能しないことに注意してください。このプロファイルは、作業用の実動プロファイルを作成せずに、WebSphere Process Server についてよく理解できるようにすることを目的としています。このプロファイルは、ファースト・ステップ・コンソールで以下のステップを実行して開始できます。

1. コマンド・ウィンドウをオープンします。
2. ご使用のプラットフォームおよび作成したプロファイルのタイプに応じて、以下のいずれかのディレクトリーに変更します。
 - **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
`install_root/profiles/qwps/firststeps/wbi`
 - **Windows** **Windows** プラットフォームの場合:
`install_root¥profiles¥qwps¥firststeps¥wbi`
 - **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
`install_root/profiles/qesb/firststeps/esb`

- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合:
`install_root%profiles%qesb%firststeps%esb`
- 3. `firststeps` コマンドを実行して、コンソールを開始します。
- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
`./firststeps.sh`
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `firststeps.bat`

インストール後にサンプルまたはデフォルトのスタンドアロン開発プロファイル
をインストールするには:

ここでサンプルまたはデフォルトのスタンドアロン開発プロファイルをインストール
しない場合は、以下のステップを実行することによってあとからインストールす
ることができます。

1. **Installation Manager** を手動で起動します。
2. 「ファイル」 > 「設定」 をクリックします。
3. 「リポジトリ設定 (Repositories Preferences)」 ページで、「リポジトリの追
加」 をクリックします。
4. 「リポジトリの追加」 ページで、次のファイルの場所を参照し、「インストー
ル中および更新中にサービス・リポジトリの検索」の横のチェック・ボックス
が選択されていない ことを確認し、「OK」 をクリックします。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
`extract_directory/repository/repository.config`

- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合 (コマンド行から):
`extract_directory%repository%repository.config`

5. **Installation Manager** の最初のページに戻ります。
6. 「変更」 を選択します。
7. 「変更」 ウィザード・ページの説明に従って、サンプル・アプリケーションをイ
ンストールするか、またはスタンドアロンの **WebSphere Process Server** または
WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルを作成します。

ほかの WebSphere 製品のプロファイルと共存する新しい WebSphere Process Server プロファイルの作成




以下の手順を使用して、他の **WebSphere** 製品の構成インスタンスまたはプロファイ
ルと共存する **WebSphere Process Server** バージョン 7.0 プロファイルを作成しま
す。この手順では、プロファイル管理ツールのグラフィカル・ユーザー・インター
フェース (GUI) を使用します。

始める前に

プロファイルの作成または拡張に関する一般的な前提条件を 221 ページの『プロフ
ファイルの作成または拡張に関する前提条件』で確認してください。また、231 ペ
ージの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』または 356 ペ
ージの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』に特有の前提条件に
についても検討してください。

このタスクについて

WebSphere Process Server バージョン 7.0 のインストール済み環境は、以下のサポート対象製品とバージョンの 1 つ以上のインストール済み環境と同じシステム上で同時に稼働させることができます。

- IBM WebSphere Process Server バージョン 7.0、6.2、6.1.x、および 6.0.x
- IBM WebSphere Enterprise Service Bus バージョン 7.0、6.2、6.1.x、および 6.0.x
- IBM WebSphere Application Server バージョン 7.0、6.1、6.0.x、および 5.x
- IBM WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 7.0、6.1、6.0.x、および 5.x
- IBM WebSphere Business Integration Server Foundation バージョン 5.x
-    IBM WebSphere Application Server Enterprise バージョン 5.0.x

既存の構成インスタンスまたはプロファイルが必要です。

新規 WebSphere Process Server プロファイルを作成するには、以下の手順を実行します。

手順

1. 新規 WebSphere Process Server プロファイルを作成します。

そのためには、231 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』または 356 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』の手順を実行します。

プロファイル管理ツールを使用して処理を進めるときには、「ポート値割り当て」パネル上で、新規プロファイル用に指定されたポートが、既存の構成インスタンスに割り当てられたポートとは異なる固有のポートであることを確認してください。

2. スタンドアロン・サーバー・プロファイルまたはデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成した場合は、そのプロファイルが共存するインスタンスと共に正しく動作していることを確認します。プロファイルが正しく動作していることを確認するには、共存するインスタンスの稼働中にファースト・ステップ・コンソールからプロファイルを開始します。正常に開始された場合、プロファイルは正しく動作しています。

タスクの結果

新しい WebSphere Process Server プロファイルが存在します。

第 7 章 対話式でのソフトウェアの更新

IBM Installation Manager を使用してインストールしたソフトウェア・パッケージに対する更新をインストールします。

始める前に

デフォルトでは、リポジトリ設定がローカル更新サイトを指していない限り、インターネット・アクセスが必要です。

インストール済みパッケージには、それぞれデフォルトの IBM 更新リポジトリのロケーションが組み込まれています。インストール済みパッケージの IBM 更新リポジトリ・ロケーションを Installation Manager が検索するためには、「リポジトリの設定 (Repositories preference)」ページで、設定「**インストールおよび更新中のサービス・リポジトリの検索 (Search service repositories during installation and updates)**」を選択する必要があります。この設定はデフォルトで選択されています。

Installation Manager について詳しくは、Installation Manager インフォメーション・センターの Installation Manager ツールのヘルプと資料を参照してください。

このタスクについて

この手順を使用して、IBM Installation Manager を使用してインストールしたパッケージを更新することができます。49 ページの『WebSphere Process Server の初回の対話式インストール』、55 ページの『WebSphere Application Server Network Deployment の既存のインストール済み環境への WebSphere Process Server の対話式インストール』、または 62 ページの『WebSphere Process Server のサイレント・インストール』の手順を使用して WebSphere Process Server をインストールした場合、これらのパッケージには次のものが含まれています。

- WebSphere Process Server
- WebSphere Application Server Feature Pack for XML
- WebSphere Application Server Feature Pack for Service Component Architecture (SCA) (サービス・データ・オブジェクト (SDO) 機能付き)

この手順を使用して、基盤となる WebSphere Application Server Network Deployment のインストール済み環境に更新をインストールすることはできません。WebSphere Application Server Network Deployment を更新するには、IBM WebSphere Update Installer ツールを使用します。このツールの使用方法に関する説明は、WebSphere Application Server Network Deployment インフォメーション・センターの『保守パッケージ、暫定修正、フィックスパック、およびリフレッシュ・パックのインストール (Installing maintenance packages, interim fixes, fix packs, and refresh packs)』を参照してください。

重要: 基盤となる WebSphere Application Server Network Deployment のインストール済み環境にフィックスパックを適用する場合、これを Installation Manager に再インポートする必要があります。暫定修正のみ適用する場合、再インポートは不要です。

手順

1. 更新を行う前に、Installation Manager を使用してインストールしたプログラムをすべて閉じてください。
2. Installation Manager を始動します。詳しくは、80 ページの『手動による IBM Installation Manager の始動』を参照してください。
3. Installation Manager の「開始」ページで、「更新」をクリックします。
4. IBM Installation Manager がシステム上に検出されない場合、または古いバージョンがインストールされている場合は、最新リリースのインストールに進む必要があります。ウィザードに表示中の指示に従って、IBM Installation Manager のインストールを完了してください。
5. 「パッケージの更新 (Update Packages)」ウィザードで、更新する製品パッケージが含まれているパッケージ・グループを選択するか、「すべて更新 (Update all)」チェック・ボックスを選択し、「次へ」をクリックします。Installation Manager は、そのリポジトリおよび更新するソフトウェアの定義済み更新サイトで更新を検索します。検索の進行状況が進行標識で示されます。
6. パッケージの更新が検出されると、「パッケージの更新 (Update Packages)」ページの「更新」リスト内の対応するパッケージの下に、更新が表示されます。デフォルトでは、推奨される最新の更新のみが表示されます。使用可能なパッケージについて検出されたすべての更新を表示するには、「すべて表示 (Show all)」をクリックします。
 - a. 特定の更新の詳細を知るには、その更新をクリックして、「詳細」の下の説明を検討してください。
 - b. 更新に関する追加情報がある場合は、説明テキストの最後に「追加情報 (More info)」リンクが含まれています。このリンクをクリックして、ブラウザで情報を表示します。更新をインストールする前に、この情報を検討してください。
7. インストールする更新を選択するか、デフォルトの選択を復元するために「推奨を選択 (Select Recommended)」をクリックし、「次へ」をクリックします。依存関係にある更新は、自動的に一緒に選択または一緒にクリアされます。

重要: WebSphere Application Server のフィックスに依存関係が存在する場合、前提条件の検査の障害によって、必要な WebSphere Application Server のフィックスが報告されます。WebSphere Application Server のフィックスを適用するには、IBM WebSphere Update Installer ツールを実行する必要があります。フィックスを適用した後、「再チェック (Recheck)」ボタンをクリックして、前提条件が満たされていることを確認し、先へ進みます。

8. 「ライセンス」ページで、選択した更新のご使用条件を読みます。「ライセンス」ページの左側に、選択した更新に関するライセンスのリストが表示されます。それぞれの項目をクリックして、ご使用条件のテキストを表示します。ご使用条件にすべて同意する場合は、「使用条件の条項に同意します」をクリックします。次に、「次へ」をクリックします。

9. 更新をインストールする前に、「要約」ページで、行った選択を検討します。
 - a. これまでのページで行った選択を変更するには、「戻る」をクリックして、変更を行います。
 - b. 満足できる状態になったら、「更新」をクリックし、更新をダウンロードしてインストールします。インストールの完了のパーセンテージが進行標識で示されます。

注: 更新処理の途中で、Installation Manager は、パッケージの基本バージョンのリポジトリのロケーションを尋ねるプロンプトを出すことがあります。DVD またはその他のメディアから製品をインストールした場合は、更新機能を使用する際にそれらのメディアが使用可能になっている必要があります。

10. オプション: 更新処理が完了すると、ページの上部付近に、処理が正常に実行されたことを確認するメッセージが表示されます。「**ログ・ファイルの表示 (View log file)**」をクリックして、現行セッションのログ・ファイルを新しいウィンドウに表示します。続行するには「インストール・ログ (Installation Log)」ウィンドウを閉じる必要があります。
11. 「終了」をクリックして、ウィザードを閉じます。
12. Installation Manager を閉じます。

タスクの結果

Installation Manager が認識するすべての使用可能な製品更新がインストールされます。

サイレント・モードでのソフトウェアの更新

IBM Installation Manager を使用してインストールしたソフトウェア・パッケージに対する更新をサイレント・モードでインストールします。

始める前に

デフォルトでは、リポジトリ設定がローカル更新サイトを指していない限り、インターネット・アクセスが必要です。

このタスクについて

この手順を使用して、IBM Installation Manager を使用してインストールしたパッケージを更新することができます。インストール済みパッケージには、それぞれデフォルトの IBM 更新リポジトリのロケーションが組み込まれています。49 ページの『WebSphere Process Server の初回の対話式インストール』、55 ページの『WebSphere Application Server Network Deployment の既存のインストール済み環境への WebSphere Process Server の対話式インストール』、または 62 ページの『WebSphere Process Server のサイレント・インストール』の手順を使用して WebSphere Process Server をインストールした場合、これらのパッケージには次のものが含まれています。

- WebSphere Process Server
- WebSphere Application Server Feature Pack for XML

- WebSphere Application Server Feature Pack for Service Component Architecture (SCA) (サービス・データ・オブジェクト (SDO) 機能付き)

この手順を使用して、基盤となる WebSphere Application Server Network Deployment のインストール済み環境に更新をインストールすることはできません。WebSphere Application Server Network Deployment を更新するには、IBM WebSphere Update Installer ツールを使用します。このツールの使用方法に関する説明は、WebSphere Application Server Network Deployment インフォメーション・センターの『保守パッケージ、暫定修正、フィックスパック、およびリフレッシュ・パックのインストール (Installing maintenance packages, interim fixes, fix packs, and refresh packs)』を参照してください。

重要: 基盤となる WebSphere Application Server Network Deployment のインストール済み環境にフィックスパックを適用する場合、これを Installation Manager に再インポートする必要があります。暫定修正のみ適用する場合、再インポートは不要です。

手順

1. 更新を行う前に、Installation Manager を使用してインストールしたプログラムをすべて閉じてください。
2. コマンド行で、Installation Manager がインストールされている eclipse サブディレクトリーに移動します。
3. 次のコマンドを入力して実行します (オプションで、ログ・ファイルをお客様自身のロケーションに置き換えてください)。

- **Linux** **UNIX** `./IBMIM --launcher.ini silent-install.ini -updateAll -log ログ・ファイルのパスおよび名前`

- **Windows** `IBMIMc.exe --launcher.ini silent-install.ini -updateAll -log ログ・ファイルのパスおよび名前`

このコマンドを実行すると、Installation Manager によってインストールされたすべてのパッケージ・グループが更新されます。

Installation Manager について詳しくは、Installation Manager インフォメーション・センターの Installation Manager ツールのヘルプと資料を参照してください。

重要: Windows システムの場合、IBMIM.exe コマンドを使用してサイレント更新処理を開始することはできません。コマンド IBMIMc.exe を使用する必要があります。Linux システムまたは UNIX システムの場合、IBMIMc コマンドは使用しないでください。

タスクの結果

Installation Manager が認識するすべての使用可能な製品更新がインストールされます。

更新のロールバック

ロールバック・パッケージ・ウィザードを使用すると、WebSphere Process Server インストールに対する更新を除去して、前のバージョンに戻すことができます。

始める前に

Installation Manager は、ロールバック処理中に以前のバージョンのパッケージのファイルにアクセスできる必要があります。デフォルトでは、それらのファイルはパッケージのインストール時にシステムに保管されています。ワークステーションでそれらのファイルにアクセスできない場合、前のバージョンの製品のインストール元であったリポジトリのロケーションを、Installation Manager の設定（「ファイル」>「設定」>「リポジトリ」）に含める必要があります。DVD またはその他のメディアから製品をインストールした場合は、ロールバック機能を使用する際にそれらのメディアが使用可能になっている必要があります。

このタスクについて

ロールバック機能は、製品パッケージに更新を適用した後で、その更新を除去して以前の製品バージョンに戻すことにした場合に使用します。ロールバック機能を使用すると、Installation Manager は更新されたリソースをアンインストールし、前のバージョンのリソースを再インストールします。一度に 1 つのバージョン・レベルのみをロールバックできます。

以前のバージョンのパッケージにロールバックすると、そのバージョンに関連付けられていた同じ機能も復元されます。機能の追加と削除を行う場合は、「パッケージの変更」ウィザードを使用します。詳しくは、79 ページの『製品のインストール済み環境の変更』を参照してください。

この手順を実行すると、IBM Installation Manager を使用して以下の製品にインストールしたパッケージを削除することができます。

- WebSphere Process Server
- WebSphere Application Server Feature Pack for XML
- WebSphere Application Server Feature Pack for Service Component Architecture (SCA) (サービス・データ・オブジェクト (SDO) 機能付き)

この手順を使用して、基盤となる WebSphere Application Server Network Deployment のインストール済み環境のパッケージを削除することはできません。WebSphere Application Server Network Deployment に対する更新を削除するには、IBM WebSphere Update Installer ツールを使用します。このツールの使用方法に関する説明は、WebSphere Application Server Network Deployment インフォメーション・センターの『保守パッケージ、暫定修正、フィックスパック、およびリフレッシュ・パックのインストール (Installing maintenance packages, interim fixes, fix packs, and refresh packs)』を参照してください。

重要: 基盤となる WebSphere Application Server Network Deployment のインストール済み環境に対するフィックスパックを削除した場合は、これを Installation Manager に再インポートする必要があります。暫定修正だけを削除する場合は、再インポートの必要はありません。

Installation Manager について詳しくは、Installation Manager インフォメーション・センターの Installation Manager ツールのヘルプと資料を参照してください。

手順

1. ロールバックを行う前に、Installation Manager を使用してインストールしたプログラムをすべて閉じてください。
2. Installation Manager を始動します。詳しくは、80 ページの『手動によるIBM Installation Manager の始動』を参照してください。
3. Installation Manager の「開始」ページで「**ロールバック**」をクリックして、「パッケージのロールバック」ウィザードを開始します。
4. 「パッケージのロールバック」ページのパッケージ・グループ名のリストから、ロールバックしたいパッケージが存在するパッケージ・グループを選択し、「次へ」をクリックします。
5. ロールバックしたいパッケージのバージョンを選択し、「次へ」をクリックします。
6. 要約情報を確認し、「**ロールバック**」をクリックしてパッケージをロールバックします。
7. オプション: ロールバック処理が完了すると、ページの上部付近に、処理が正常に実行されたことを確認するメッセージが表示されます。「**ログ・ファイルの表示 (View log file)**」をクリックして、現行セッションのログ・ファイルを新しいウィンドウに表示します。
8. 「終了」をクリックして、ウィザードを閉じます。
9. Installation Manager を閉じます。

タスクの結果

ロールバックの対象として選択したパッケージが削除されます。

第 8 章 ソフトウェアのアンインストール

Installation Manager を使用して WebSphere Process Server をアンインストールします。WebSphere Process Server を同じディレクトリーに再インストールする場合は、手動のステップを実行して、すべてのファイルとレジストリー項目を確実に削除してください。

WebSphere Process Server のインストール済み環境からさまざまなコンポーネントを削除する方法についても説明しています。これらのコンポーネントは、WebSphere Process Server のアンインストール時にアンインストールされます。詳しくは、『Business Process Choreographer 構成の除去』、および『Common Event Infrastructure 構成の除去』を参照してください。

WebSphere Application Server 用 Web サーバー・プラグイン、IBM HTTP Server、および Application Client for WebSphere Application Server などの関連製品をアンインストールするには、WebSphere Application Server Network Deployment および IBM HTTP Server インフォメーション・センターの以下のトピックを参照してください。

- WebSphere Application Server 用の Web サーバー・プラグインのアンインストール
- IBM HTTP Server のアンインストール
- Application Client for WebSphere Application Server のフィーチャー・パックのアンインストール

Installation Manager を使用した WebSphere Process Server のアンインストール

Installation Manager を使用して WebSphere Process Server をアンインストールします。

始める前に

Installation Manager を使用してインストールしたプログラムをすべて閉じます。

このタスクについて

パッケージをアンインストールするには、製品パッケージのインストールに使用したのと同じユーザー・アカウントを使用して、システムにログインする必要があります。

依存関係にある別のパッケージが存在する場合、その依存パッケージのアンインストールも選択しなければ、パッケージをアンインストールできません。例えば、他の製品が WebSphere Application Server Network Deployment に依存していない場合に限り、WebSphere Process Server の基礎となっている WebSphere Application Server Network Deployment インストール済み環境をアンインストールできます。

重要: WebSphere Process Server の基礎となっている WebSphere Application Server Network Deployment のインストール済み環境をアンインストールするには、Installation Manager を使用してください。製品に同梱されている ISMP ベースのアンインストーラーは使用しないでください。これを使用すると、Installation Manager のインストール済み環境が破壊されます。

Installation Manager について詳しくは、Installation Manager インフォメーション・センターの Installation Manager ツールのヘルプと資料を参照してください。

手順

1. Installation Manager を起動します。
2. 「アンインストール」をクリックします。
3. 「IBM WebSphere Process Server」を選択し、「次へ」をクリックします。
4. 要約情報を確認します。
 - 要約情報に誤りがある場合は、「戻る」をクリックして選択内容を変更してください。
 - インストール済み環境の要約情報が正しい場合は、「アンインストール」をクリックします。

アンインストールされた製品の状況がページに表示されます。

5. 「終了」をクリックします。

タスクの結果

WebSphere Process Server のアンインストールが完了しました。

重要: どのパッケージをアンインストールした後も、Eclipse 構成ディレクトリーは削除しないでください。この情報を削除すると、Installation Manager の操作が妨害されます。デフォルトでは、これは `install_root` にある configuration です。

アンインストールに失敗した後の再インストールの準備

ソフトウェアの再インストール方法について説明します。アンインストール・プログラムが正常に完了しなかった場合、ファイルが残り、このために元のディレクトリーに再インストールできないことがあります。このトピックでは、WebSphere Process Server の再インストールのために行う必要がある手順の概要を示します。

始める前に

クリーンではないシステムに WebSphere Process Server を再インストールすることができます。ただし、そのようなインストールを行うと、元のディレクトリーへのインストールを妨げる可能性がある共存シナリオが作成されます。

システムをクリーンすると、アンインストール・プロシージャによって残されるログ・ファイルも含め、前のインストール済み環境からすべてが削除されます。このプロシージャを開始する前に、必要に応じてログ・ファイルをバックアップします。ログ・ファイルの場所については、166 ページの『インストールとプロファイル作成のログ・ファイル』を参照してください。

このタスクについて

その他の関連する製品がインストールの一部に含まれている場合があります、それらをアンインストールする必要があります。詳しくは、WebSphere Application Server Network Deployment and IBM HTTP Server バージョン 7.0 のインフォメーション・センターにある次のトピックを参照してください。

- WebSphere Application Server 用の Web サーバー・プラグインのアンインストール
- Linux UNIX Windows IBM HTTP Server のアンインストール
- Application Client for WebSphere Application Server のフィーチャー・パックのアンインストール

アンインストールに失敗した後で再インストールの準備を行うには、以下のサブトピックの該当する説明に従ってください。システムをクリーンにすると、削除したインストール済み環境の痕跡がなくなります。システムをクリーンにした後、『ソフトウェアのインストール』に進み、製品のインストール方法を再度参照してください。

AIX システムでアンインストールに失敗した後の再インストールの準備

WebSphere Process Server のアンインストールに失敗した場合に AIX システムをクリーンにする方法について説明します。アンインストール・プログラムを実行した後に、製品を元のディレクトリーに再インストールする際にこれを妨げる可能性のあるレジストリー項目を、この手動ステップで除去します。

始める前に

この手順は、Installation Manager を使用して WebSphere Process Server のアンインストールを試行し、その手順が正常に完了しなかった場合のみ実行してください。

注: WebSphere Process Server のアンインストールが正常に完了した場合は、この作業を実行する必要はありません。

正しい製品を除去してクリーンなシステムを作成できるように、製品の *install_root* ディレクトリーを判別します。

デフォルトのディレクトリーのロケーションについては、145 ページの『製品およびプロファイルのデフォルトのインストール・ディレクトリー』を参照してください。

注:

Installation Manager およびプロファイル管理ツールにより、インストール・ルート・ディレクトリーに対して独自のロケーションを指定することができます。以下のファイルを調べて、実際のロケーションを判別します。

- `/usr/.ibm/.nif/.nifregistry` ファイルは、インストール済みのすべての WebSphere Process Server 製品のインストール・ルートを示します。また、すべての WebSphere Application Server 製品を検索します。

- 作成された各プロファイルの `install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log` ファイルは、`invokeWSProfile` メソッドがあるスタンザ内のインストール・ロケーションを示します。

製品のアンインストールでは、`profile_root/logs` ファイルを含む `profile_root` ディレクトリー (`profile_root` はプロファイルのインストール・ロケーションを表す) が削除されないまま残ります。`install_root/logs` ディレクトリーも残ります。

このタスクについて

以前のインストールのファイルが残っているときに製品を新規ディレクトリーに再インストールすると、共存シナリオを作成することができます。ただし、すべてのファイルおよびレジストリー項目を削除すると、WebSphere Process Server を完全に除去することができます。システムをクリーンにすることにより、共存なしで、元のディレクトリーに製品を再インストールすることができます。

重要: この手順では、WebSphere Process Server と WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の両方のアンインストールの後に残された成果物の除去方法を説明します。対象となる WebSphere Application Server 製品は、WebSphere Process Server のインストール済み環境の基盤となる製品であることが前提となっています。

以下の手順を実行して、クリーンなシステムを作成します。

手順

1. 製品をインストールしたユーザーと同じユーザー ID でログオンします。
2. **kill** コマンドを使用して、稼働中のすべての Java プロセスを停止します。

稼働中の Java プロセスが WebSphere Process Server または WebSphere Application Server 製品と無関係で、それらを停止できない場合は、すべての WebSphere Process Server および WebSphere Application Server 製品関連プロセスを停止してください。次のコマンドを使用して、実行中のすべてのプロセスを判別します。

```
ps -ef | grep java
```

kill コマンドで、すべての WebSphere Process Server および WebSphere Application Server 製品関連プロセスを停止します。

```
kill -9 java_pid_1java_pid_2 ...java_pid_n
```

3. インストール済みの WebSphere Process Server および WebSphere Application Server コンポーネントをリストします。

関連パッケージを検索するには、以下のコマンドを入力します。

```
ls1pp -l | grep -i WS
```

WebSphere Process Server パッケージのみを検索するように、照会の範囲を絞るには、次のコマンドを入力します。

```
ls1pp -l | grep -i WSEAA70
```

WebSphere Process Server バージョン 7.0 のパッケージ名の接頭部は WSE、接尾部は 70 です。WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 7.0 のパッケージ名の接頭部は WSB または WSP、接尾部は 70 です。

アンインストールしなかった WebSphere Process Server および WebSphere Application Server 製品のパッケージは除去しないでください。

4. /usr/IBM ディレクトリー、またはご使用のインストール済み環境の相当するトップ・ディレクトリーに変更します。
5. `rm -rf WebSphere` と入力して、この WebSphere Process Server 関連のディレクトリーを削除します。ただし、ProcServer (または、削除した WebSphere Process Server インストール済み環境に関連付けられた AppServer ディレクトリー) が WebSphere ディレクトリー内の唯一のディレクトリーである場合のみ削除を実行してください。このディレクトリーに含まれるすべての製品を削除する場合は、このディレクトリーを削除します。
6. `installRegistryUtils` コマンドを使用して、インストール済みのすべての WebSphere Server 製品のインストール・ロケーションを調べ、インストール・レジストリーから対象の製品を削除します。
7. `vpd.properties` ファイルを編集して、WebSphere Application Server のエントリーを除去します。操作の説明については、WebSphere Application Server Network Deployment インフォメーション・センターのトピック『AIX システムでの手動アンインストール』を参照してください。
8. `WPS_ODM_clean.sh` スクリプトを実行します。
 - a. WebSphere Application Server Product Support サイトにある「Manual Object Data Manager (ODM) cleanup script for AIX」というタイトルの技術情報文書からスクリプトを入手します。
 - b. `WPS_ODM_clean.sh` スクリプトを編集し、ストリング `/usr/WebSphere/AppServer` のすべてのインスタンスを実際のインストール・ルート・ディレクトリーで置き換えます。
 - c. コマンド行から `WPS_ODM_clean.sh` スクリプトを実行します。
9. `.nifregistry` ファイルをクリーンにします。このファイルをクリーンにする手順は以下のとおりです。
 - a. `.nifregistry` ファイルをバックアップします。
 - b. テキスト・エディターで `.nifregistry` ファイルを開きます。行の折り返しがオフになっていることを確認してください。
 - c. `<INSTALL_LOC>` および `<PRODUCT_ID>` を含む行をすべて検索して削除します。ここで `<INSTALL_LOC>` は、アンインストールに失敗した環境があるインストールの場所であり、`<PRODUCT_ID>` は、アンインストールしようとしている製品の製品 ID です。
 - d. `.nifregistry` ファイルを保存して、テキスト・エディターを閉じます。

タスクの結果

この手順を行うと、システムがクリーンになります。これにより、WebSphere Process Server を同じディレクトリーに再インストールすることができます。クリーンなシステムには、以前削除したインストールの痕跡は残っていません。

次のタスク

システムをクリーンにした後、47 ページの『第 3 章 ソフトウェアのインストール』に進み、インストール手順を選択してください。

HP-UX システムでアンインストールに失敗した後の再インストールの準備

WebSphere Process Server のアンインストールに失敗した場合に HP-UX システムをクリーンにする方法について説明します。アンインストール・プログラムを実行した後に、製品を元のディレクトリーに再インストールする際にこれを妨げる可能性のあるレジストリー項目を、この手動ステップで除去します。

始める前に

この手順は、Installation Manager を使用して WebSphere Process Server のアンインストールを試行し、その手順が正常に完了しなかった場合のみ実行してください。

注: WebSphere Process Server のアンインストールが正常に完了した場合は、この作業を実行する必要はありません。

正しい製品を除去してクリーンなシステムを作成できるように、製品の *install_root* ディレクトリーを判別します。

デフォルトのディレクトリーのロケーションについては、145 ページの『製品およびプロファイルのデフォルトのインストール・ディレクトリー』を参照してください。

注:

Installation Manager およびプロファイル管理ツールにより、インストール・ルート・ディレクトリーに対して独自のロケーションを指定することができます。以下のファイルを調べて、実際のロケーションを判別します。

- *opt/.ibm/.nif/.nifregistry* ファイルは、インストール済みのすべての WebSphere Process Server 製品のインストール・ルートを示します。また、すべての WebSphere Application Server 製品を検索します。
- 作成された各プロファイルの *install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log* ファイルは、*invokeWSProfile* メソッドがあるスタンザ内のインストール・ロケーションを示します。

製品のアンインストールでは、*profile_root/logs* ファイルを含む *profile_root* ディレクトリー (*profile_root* はプロファイルのインストール・ロケーションを表す) が削除されないまま残ります。*install_root/logs* ディレクトリーも残ります。

このタスクについて

以前のインストールのファイルが残っているときに製品を新規ディレクトリーに再インストールすると、共存シナリオを作成することができます。ただし、すべてのファイルおよびレジストリー項目を削除すると、WebSphere Process Server を完全

に除去することができます。システムをクリーンにすることにより、共存なしで、元のディレクトリーに製品を再インストールすることができます。

重要: この手順では、WebSphere Process Server と WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の両方のアンインストールの後に残された成果物の除去方法を説明します。対象となる WebSphere Application Server 製品は、WebSphere Process Server のインストール済み環境の基盤となる製品であることが前提となっています。

以下の手順を実行して、クリーンなシステムを作成します。

手順

1. 製品をインストールしたユーザーと同じユーザー ID でログオンします。
2. **kill** コマンドを使用して、稼働中のすべての Java プロセスを停止します。

稼働中の Java プロセスが WebSphere Process Server または WebSphere Application Server 製品と無関係で、それらを停止できない場合は、すべての WebSphere Process Server および WebSphere Application Server 製品関連プロセスを停止してください。次のコマンドを使用して、実行中のすべてのプロセスを判別します。

```
ps -ef | grep java
```

kill コマンドで、すべての WebSphere Process Server および WebSphere Application Server 製品関連プロセスを停止します。

```
kill -9 java_pid_1java_pid_2 ...java_pid_n
```

3. HP-UX System Administration Manager (SAM) ユーティリティーを使用して、パッケージを除去します。
 - a. `/usr/sbin/sam` コマンドを使用して SAM ユーティリティーを開始します。
 - b. `DISPLAY` および `TERM` 環境変数の設定が適切であることを確認します。
 - c. 「ソフトウェア管理 (Software management)」をクリックします。
 - d. 「インストール済みソフトウェアの表示 (View installed software)」をクリックします。
 - e. SD リストで、WebSphere Process Server または WebSphere Application Server エントリーを探します。
 - f. SD リストをクローズします。
 - g. 「ローカル・ホスト・ソフトウェアを削除する (Remove local host software)」をクリックします。
 - h. SD 除去リストに表示されている以下のインスタンスをすべて選択します。
 - **WSEAA70**
 - **WSBAA70**
 - i. 「アクション (Actions)」 → 「削除対象としてマーク (Mark for remove)」を選択します。
 - j. 「アクション (Actions)」 → 「削除 (Remove)」を選択します。
 - k. 「削除分析 (Remove analysis)」ダイアログ・ボックスで「**OK**」をクリックします。

- l. 「**ログ (Logs)**」をクリックして、選択したパッケージの削除をリアルタイムで表示します。
 - m. すべてのパッケージが削除されたら、「**完了**」をクリックします。
 - n. SAM を終了します。
4. パッケージを検索し、除去されたことを確認します。

```
swlist | grep WS
```

と入力すると、WebSphere Process Server および WebSphere Application Server のパッケージが表示されます。

WebSphere Process Server パッケージのみを検索するように、照会の範囲を絞るには、次のコマンドを入力します。

```
swlist | grep WSEAA70
```

5. インストール・ルート・ディレクトリーを除去します。

```
rm -rf install_root
```

と入力して、WebSphere Process Server のディレクトリーを除去します。アンインストールした製品の正しい *install_root* を指定してください。

例えば、デフォルト・インストール・ディレクトリー (*/opt/IBM/WebSphere/ProcServer*) から WebSphere Process Server をアンインストールした場合は、以下のコマンドを実行します。

```
rm -rf /opt/IBM/WebSphere/ProcServer
```

6. `installRegistryUtils` コマンドを使用して、インストール済みのすべての WebSphere Server 製品のインストール・ロケーションを調べ、インストール・レジストリーから対象の製品を削除します。
7. `.nifregistry` ファイルをクリーンにします。このファイルをクリーンにする手順は以下のとおりです。
 - a. `.nifregistry` ファイルをバックアップします。
 - b. テキスト・エディターで `.nifregistry` ファイルを開きます。行の折り返しがオフになっていることを確認してください。
 - c. `<INSTALL_LOC>` および `<PRODUCT_ID>` を含む行をすべて検索して削除します。ここで `<INSTALL_LOC>` は、アンインストールに失敗した環境があるインストールの場所であり、`<PRODUCT_ID>` は、アンインストールしようとしている製品の製品 ID です。
 - d. `.nifregistry` ファイルを保存して、テキスト・エディターを閉じます。

タスクの結果

この手順を行うと、システムがクリーンになります。これにより、WebSphere Process Server を同じディレクトリーに再インストールすることができます。クリーンなシステムには、以前削除したインストールの痕跡は残っていません。

次のタスク

システムをクリーンにした後、47 ページの『第 3 章 ソフトウェアのインストール』に進み、インストール手順を選択してください。

Linux システムでアンインストールに失敗した後の再インストールの準備

WebSphere Process Server のアンインストールに失敗した場合に Linux システムをクリーンにする方法について説明します。アンインストール・プログラムを実行した後に、製品を元のディレクトリーに再インストールする際にこれを妨げる可能性のあるレジストリー項目を、この手動ステップで除去します。

始める前に

この手順は、Installation Manager を使用して WebSphere Process Server のアンインストールを試行し、その手順が正常に完了しなかった場合のみ実行してください。

注: WebSphere Process Server のアンインストールが正常に完了した場合は、この作業を実行する必要はありません。

正しい製品を除去してクリーンなシステムを作成できるように、製品の *install_root* ディレクトリーを判別します。

デフォルトのディレクトリーのロケーションについては、145 ページの『製品およびプロファイルのデフォルトのインストール・ディレクトリー』を参照してください。

注:

Installation Manager およびプロファイル管理ツールにより、インストール・ルート・ディレクトリーに対して独自のロケーションを指定することができます。以下のファイルを調べて、実際のロケーションを判別します。

- *opt/.ibm/.nif/.nifregistry* ファイルは、インストール済みのすべての WebSphere Process Server 製品のインストール・ルートを示します。また、すべての WebSphere Application Server 製品を検索します。
- 作成された各プロファイルの *install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log* ファイルは、*invokeWSProfile* メソッドがあるスタンザ内のインストール・ロケーションを示します。

製品のアンインストールでは、*profile_root/logs* ファイルを含む *profile_root* ディレクトリー (*profile_root* はプロファイルのインストール・ロケーションを表す) が削除されないまま残ります。*install_root/logs* ディレクトリーも残ります。

このタスクについて

以前のインストールのファイルが残っているときに製品を新規ディレクトリーに再インストールすると、共存シナリオを作成することができます。ただし、すべてのファイルおよびレジストリー項目を削除すると、WebSphere Process Server を完全に除去することができます。システムをクリーンにすることにより、共存なしで、元のディレクトリーに製品を再インストールすることができます。

重要: この手順では、WebSphere Process Server と WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の両方のアンインストール

の後に残された成果物の除去方法を説明します。対象となる WebSphere Application Server 製品は、WebSphere Process Server のインストール済み環境の基盤となる製品であることが前提となっています。

以下の手順を実行して、クリーンなシステムを作成します。

手順

1. 製品をインストールしたユーザーと同じユーザー ID でログオンします。
2. **kill** コマンドを使用して、稼働中のすべての Java プロセスを停止します。

稼働中の Java プロセスが WebSphere Process Server または WebSphere Application Server 製品と無関係で、それらを停止できない場合は、すべての WebSphere Process Server および WebSphere Application Server 製品関連プロセスを停止してください。次のコマンドを使用して、実行中のすべてのプロセスを判別します。

```
ps -ef | grep java
```

kill コマンドで、すべての WebSphere Process Server および WebSphere Application Server 製品関連プロセスを停止します。

```
kill -9 java_pid_1java_pid_2 ...java_pid_n
```

3. 関連パッケージを検索します。以下のコマンドを実行すると、WebSphere Process Server および WebSphere Application Server 製品のパッケージが表示されます。

```
rpm -qa | grep WS
```

WebSphere Process Server パッケージのみを検索するように、照会の範囲を絞るには、次のコマンドを入力します。

```
rpm -qa | grep WSEAA70
```

例えば、コマンド `rpm -qa | grep WSEAA70` を実行した後、以下のようなパッケージを表示することができます。

```
WSEAA70LicensingComponent-7.0-0
```

WebSphere Process Server バージョン 7.0 のパッケージ名の接頭部は WSE、接尾部は 70 です。WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 7.0 のパッケージ名の接頭部は WSB または WSP、接尾部は 70 です。アンインストールしなかった WebSphere Process Server および WebSphere Application Server 製品のパッケージは除去しないでください。

4. 削除するパッケージがある場合は、`rpm -e packagename` と入力してアンインストールした製品のパッケージを除去します。

あるいは、以下のようにパッケージを検索し、リスト中のすべての項目が削除対象であることを確認することができます。

```
rpm -qa | grep WSEAA70
```

リストに削除する予定のパッケージのみが含まれている場合、以下のコマンドを使用してすべてのパッケージを除去します。

```
rpm -qa | grep WSEAA70 | xargs rpm -e
```

パッケージの依存関係に問題がある場合は、以下のコマンドを使用してパッケージを除去します。

```
rpm -e packagename --nodeps --justdb
```

`nodeps` オプションを指定すると、依存関係のチェックがスキップされます。`justdb` オプションを指定すると、パッケージのデータベースのみが更新され、ファイル・システムは更新されません。`nodeps` オプションだけを指定すると、パッケージを除去する際に、依存するファイル・システム (ファイルおよびディレクトリー) にミスマッチが生じた場合に、障害が発生する可能性があります。

5. インストール・ルート・ディレクトリーを除去します。

`rm -rf install_root` と入力して、WebSphere Process Server のディレクトリーを除去します。アンインストールした製品の正しい `install_root` を指定してください。

例えば、デフォルト・インストール・ディレクトリー (`/opt/ibm/WebSphere/ProcServer`) から WebSphere Process Server をアンインストールした場合は、以下のコマンドを実行します。

```
rm -rf /opt/ibm/WebSphere/ProcServer
```

6. `vpd.properties` ファイルを編集して、WebSphere Application Server のエントリーを除去します。操作の説明については、WebSphere Application Server Network Deployment インフォメーション・センターのトピック『Linux システムでの手動アンインストール』を参照してください。

7. `/opt/.ibm/.nif/.nifRegistry` ファイルを編集します。

このファイルは、製品のインストールに使用したユーザー ID のホーム・ディレクトリー内にあります。

`/opt/.ibm/.nif/.nifRegistry` ファイルには、WebSphere Process Server 製品のインストール環境ごとに 1 行のエントリー、WebSphere Application Server 製品のインストール環境ごとに 1 つのエントリーがあります。

フラット・ファイル・エディターを使用して、除去した製品のインストール・ルート・ディレクトリーを示す行を除去します。その他の行はそのままにしておきます。

8. `installRegistryUtils` コマンドを使用して、インストール済みのすべての WebSphere Process Server 製品のインストール・ロケーションを調べ、インストール・レジストリーから対象の製品を削除します。

タスクの結果

この手順を行うと、システムがクリーンになります。これにより、WebSphere Process Server を同じディレクトリーに再インストールすることができます。クリーンなシステムには、以前削除したインストールの痕跡は残っていません。

次のタスク

システムをクリーンにした後、47 ページの『第 3 章 ソフトウェアのインストール』に進み、インストール手順を選択してください。

Solaris システムでアンインストールに失敗した後の再インストールの準備

WebSphere Process Server のアンインストールに失敗した場合に Solaris システムをクリーンにする方法について説明します。アンインストール・プログラムを実行した後に、製品を元のディレクトリーに再インストールする際にこれを妨げる可能性のあるレジストリー項目を、この手動ステップで除去します。

始める前に

この手順は、Installation Manager を使用して WebSphere Process Server のアンインストールを試行し、その手順が正常に完了しなかった場合のみ実行してください。

注: WebSphere Process Server のアンインストールが正常に完了した場合は、この作業を実行する必要はありません。

正しい製品を除去してクリーンなシステムを作成できるように、製品の *install_root* ディレクトリーを判別します。

デフォルトのディレクトリーのロケーションについては、145 ページの『製品およびプロファイルのデフォルトのインストール・ディレクトリー』を参照してください。

注:

Installation Manager およびプロファイル管理ツールにより、インストール・ルート・ディレクトリーに対して独自のロケーションを指定することができます。以下のファイルを調べて、実際のロケーションを判別します。

- *opt/.ibm/.nif/.nifregistry* ファイルは、インストール済みのすべての WebSphere Process Server 製品のインストール・ルートを示します。また、すべての WebSphere Application Server 製品を検索します。
- 作成された各プロファイルの *install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log* ファイルは、*invokeWSProfile* メソッドがあるスタンザ内のインストール・ロケーションを示します。

製品のアンインストールでは、*profile_root/logs* ファイルを含む *profile_root* ディレクトリー (*profile_root* はプロファイルのインストール・ロケーションを表す) が削除されないまま残ります。*install_root/logs* ディレクトリーも残ります。

このタスクについて

以前のインストールのファイルが残っているときに製品を新規ディレクトリーに再インストールすると、共存シナリオを作成することができます。ただし、すべてのファイルおよびレジストリー項目を削除すると、WebSphere Process Server を完全に除去することができます。システムをクリーンにすることにより、共存なしで、元のディレクトリーに製品を再インストールすることができます。

重要: この手順では、WebSphere Process Server と WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の両方のアンインストール

の後に残された成果物の除去方法を説明します。対象となる WebSphere Application Server 製品は、WebSphere Process Server のインストール済み環境の基盤となる製品であることが前提となっています。

以下の手順を実行して、クリーンなシステムを作成します。

手順

1. 製品をインストールしたユーザーと同じユーザー ID でログオンします。
2. **kill** コマンドを使用して、稼働中のすべての Java プロセスを停止します。

稼働中の Java プロセスが WebSphere Process Server または WebSphere Application Server 製品と無関係で、それらを停止できない場合は、すべての WebSphere Process Server および WebSphere Application Server 製品関連プロセスを停止してください。次のコマンドを使用して、実行中のすべてのプロセスを判別します。

```
ps -ef | grep java
```

kill コマンドで、すべての WebSphere Process Server および WebSphere Application Server 製品関連プロセスを停止します。

```
kill -9 java_pid_1java_pid_2 ...java_pid_n
```

3. 関連パッケージを検索します。以下のコマンドを実行すると、WebSphere Process Server および WebSphere Application Server 製品のパッケージが表示されます (これらのコマンドを使用してもパッケージが表示されない場合は、次のステップをスキップしてください)。

```
pkginfo | grep WS
```

WebSphere Process Server パッケージのみを検索するように、照会の範囲を絞るには、次のコマンドを入力します。

```
pkginfo | grep WSEAA70
```

例えば、コマンド `pkginfo | grep WSEAA70` を実行した後、以下のようなパッケージ・リストを表示することができます。

```
application WSEAA70                IBM WebSphere Process Server
application WSEAA70LC              LAP Component
```

WebSphere Process Server バージョン 7.0 のパッケージ名の接頭部は WSE、接尾部は 70 です。WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 7.0 のパッケージ名の接頭部は WSB または WSP、接尾部は 70 です。

アンインストールしなかった WebSphere Process Server および WebSphere Application Server 製品のパッケージは除去しないでください。

4. パッケージ情報が登録されているディレクトリーに変更します。

```
cd /var/sadm/pkg
```

5. 次のコマンドを実行し、WebSphere Process Server または WebSphere Application Server 製品関連のパッケージをすべて除去します。

```
pkgrm packagename1 packagename2 packagename3 ...
```

アンインストールしなかった WebSphere Process Server および WebSphere Application Server 製品のパッケージは除去しないでください。

/var/sadm/pkg ディレクトリーから次のコマンドを発行し、/var/sadm/pkg ディレクトリーに登録されているすべての WebSphere Application Server 製品関連パッケージを検索および除去します。

- a. 正しいディレクトリー `cd /var/sadm/pkg` に移動します。
- b. WebSphere Application Server 製品の場合は `ls |grep WSB|xargs -i pkgrm -n {}`
- c. WebSphere Application Server クライアントの場合は `ls |grep WSC|xargs -i pkgrm -n {}`
- d. WebSphere Application Server の Web サーバー・プラグインの場合は `ls |grep WSP|xargs -i pkgrm -n {}`
- e. WebSphere Process Server 製品の場合は `ls |grep WSE|xargs -i pkgrm-n {}`

WebSphere Application Server の Web サーバー・プラグインのパッケージ名は次のとおりです。

```
WSPAA70
WSPAA70AC
WSPAA70BC
WSPAA70CC
WSPAA70DC
WSPAA70FC
WSPAA70FB
WSPAA70GC
WSPAA70HC
```

パッケージを除去する際に問題が発生する場合は、除去前のファイルを含め、/var/sadm/pkg ディレクトリーの関連パッケージ・ディレクトリーを除去します。例えば、`pkgrm -n WSBAA70` コマンドを実行する前に、以下のファイルを除去します。

```
/var/sadm/pkg/WSBAA70/install/preremove
```

6. インストール・ルート (*install_root*) ディレクトリー内にはないプロファイル・ディレクトリーをすべて除去します。

プロファイル・ディレクトリーのロケーションを判別するには、最初に `wasprofile -listProfiles` コマンドを使用してプロファイル名を表示します。その後、プロファイル・ディレクトリーが存在する場所を判別するために、`wasprofile -getPath -profileName profile_name` コマンド (*profile_name* は特定のディレクトリーに対応するプロファイルの名前) を使用します。

7. インストール・ルート・ディレクトリーを除去します。 `rm -rf install_root` と入力して、WebSphere Process Server のディレクトリーを除去します。アンインストールした製品の正しい *install_root* を指定してください。例えば、デフォルト・インストール・ディレクトリー `/opt/IBM/WebSphere/ProcServer` から WebSphere Process Server をアンインストールした場合は、以下のコマンドを実行します。

```
rm -rf /opt/IBM/WebSphere/ProcServer
```

同様に、プロファイル・ディレクトリーもすべて除去します。

8. `/opt/.ibm/.nif/.nifregistry` ファイルを編集します。

このファイルには、各 WebSphere Process Server 製品のインストール環境ごとに 1 行のエントリー、各 WebSphere Application Server 製品のインストール環境ごとに 1 つのエントリーがあります。

それぞれが除去した製品を示す行が 1 行のみになった場合、これらのファイルを削除することができます。そうでない場合は、フラット・ファイル・エディターを使用して、除去した製品のインストール・ルート・ディレクトリーを示す行を除去します。その他の行はそのままにしておきます。

9. `installRegistryUtils` コマンドを使用して、インストール済みのすべての WebSphere Process Server 製品のインストール・ロケーションを調べ、インストール・レジストリーから対象の製品を削除します。

タスクの結果

この手順を行うと、システムがクリーンになります。これにより、WebSphere Process Server を同じディレクトリーに再インストールすることができます。クリーンなシステムには、以前削除したインストールの痕跡は残っていません。

次のタスク

システムをクリーンにした後、47 ページの『第 3 章 ソフトウェアのインストール』に進み、インストール手順を選択してください。

Windows システムでアンインストールに失敗した後の再インストールの準備

WebSphere Process Server のアンインストールに失敗した場合に Windows システムをクリーンにする方法について説明します。アンインストール・プログラムを実行した後に、製品を元のディレクトリーに再インストールする際にこれを妨げる可能性のあるレジストリー項目を、この手動ステップで除去します。

始める前に

この手順を実行する前に、WebSphere Process Server がアンインストールされていること、およびこの手順が最後まで正常に実行されていないことを確認してください。この手順が正常に実行されている場合は、この作業を行う必要はありません。

正しい製品を除去してクリーンなシステムを作成できるように、製品の `install_root` ディレクトリーを判別します。

デフォルトのディレクトリーのロケーションについては、145 ページの『製品およびプロファイルのデフォルトのインストール・ディレクトリー』を参照してください。

以下のファイルを調べて、インストール・ルート・ディレクトリーの実際のロケーションを判別します。

- `.nifRegistry` ファイルは、インストール済みのすべての WebSphere Process Server 製品のインストール・ルートを示します。また、インストール済みのすべての WebSphere Application Server 製品のインストール・ルートも示します。場所は以下のとおりです。
 - 製品をインストールしたユーザー ID が管理特権を持っていた場合のファイルの場所は Windows ルート・ディレクトリー (ほとんどの Windows システムでは `C:\Windows` または `C:\WINNT`) です。

- 製品をインストールしたユーザー ID が管理特権を持っていなかった場合のファイルの場所は、そのユーザー ID のホーム・ディレクトリーです。
- プロファイルの `install_root¥logs¥manageprofiles¥profile_name_create.log` ファイルは、そのプロファイルの場所を示します。このファイルでテキスト `profilePath=` を検索すると、プロファイルの場所が分かります。

製品のアンインストールでは、`profile_root¥logs` ディレクトリーを含む `profile_root` ディレクトリー (`profile_root` はプロファイルのインストール・ローケーションを表す) が削除されないまま残ります。`install_root¥logs` ディレクトリーも残ります。

このタスクについて

以前のインストールのファイルが残っているときに製品を新規ディレクトリーに再インストールすると、共存シナリオを作成することができます。ただし、すべてのファイルおよびレジストリー項目を削除すると、WebSphere Process Server を完全に除去することができます。システムをクリーンにすることにより、共存なしで、元のディレクトリーに製品を再インストールすることができます。

重要: この手順では、WebSphere Process Server と WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の両方のアンインストールの後に残された成果物の除去方法を説明します。対象となる WebSphere Application Server 製品は、WebSphere Process Server のインストール済み環境の基盤となる製品であることが前提となっています。

以下の手順を実行して、クリーンなシステムを作成します。

手順

1. 製品をインストールしたユーザーと同じユーザー ID でログオンします。
2. オプション: Emergency Recovery Disk があることを確認します。このディスクを作成するための説明は、Windows のヘルプ文書に記載されています。

このステップは安全機能です。この手順では、リカバリー・ディスクは必要ありません。

3. オプション: Windows のリソース・キットにある `regback.exe` プログラムを使用してレジストリーをバックアップします。

このステップは安全機能です。この手順では、レジストリーのバックアップ・コピーは必要ありません。

4. アンインストールした WebSphere Process Server および WebSphere Application Server 製品の製品レジストリー項目を削除します。

コマンド・プロンプトから `regback.exe` を呼び出して、Windows システムのレジストリーを編集します。

注意:

レジストリーの取り扱いには注意してください。レジストリー・エディターを使用して、レジストリーの内容を表示したり編集したりする際に、間違ふことがよくあります。エディターは、きわめて危険な結果を生じる場合もある編集上のエラーについて、警告を発してはくれません。レジストリーが壊れることにより、システムが破壊され、Windows オペレーティング・システムを再インストールせざるを得なくなる場合もあります。

- a. **Ctrl-F** を使用して WebSphere のインスタンスをすべて検索し、各項目を削除する必要があるかどうかを判断してください。WebSphere Process Server および WebSphere Application Server に関連したすべてのエントリーを除去できない場合がありますが、これは問題ありません。
- b. WebSphere Process Server および WebSphere Application Server 製品に関連するキーを展開し、選択します。

WebSphere Application Server 製品用の以下のキーがある場合は、削除します。

- HKEY_CURRENT_USER¥Software¥Microsoft¥Windows¥CurrentVersion¥Explorer¥MenuOrder¥Start Menu2¥Programs¥IBM WebSphere ¥Application Server Network Deployment V7.0
- HKEY_CURRENT_USER¥Software¥IBM¥WebSphere Application Server Network Deployment¥7.0.0.0
- HKEY_LOCAL_MACHINE¥Software¥IBM¥Web server Plug-ins for IBM WebSphere Application Server¥7.0.0.0

WebSphere Process Server 製品用の以下のキーがある場合は、以下のキーを削除します。

- HKEY_CURRENT_USER¥Software¥Microsoft¥Windows¥CurrentVersion ¥Explorer¥MenuOrder¥Start Menu2¥Programs¥IBM WebSphere¥ Process Server 7.0
- HKEY_CURRENT_USER¥Software¥IBM¥WebSphere Process Server¥7.0

- c. 関連するキーごとに、メニュー・バーから「編集」>「削除」を選択します。
 - d. キーの削除について確認を求められた場合は、「はい」を選択します。
 - e. 終了したら、メニュー・バーから「レジストリ エディタの終了」の順に選択します。
5. アンインストールした製品のインストール・ルート・ディレクトリーを削除します。
 6. regedit を使用して、アンインストールしたインストール環境に関連付けられている
HKEY_LOCAL_MACHINE¥SYSTEM¥CurrentControlSet¥Services¥IBM WAS61Service という形式のレジストリー・キーがあれば、すべて削除します。
 7. すべてのプロファイル・ディレクトリーを判別し、それらのディレクトリーを削除します。
 8. Windows エクスプローラーのウィンドウを開き、ディレクトリー
C:¥Documents and Settings¥user_id¥Start Menu¥Programs¥IBM WebSphere を参照します (ここで、user_id は製品をインストールしたユーザーです)。

インストールされた WebSphere Application Server が 1 つのみの場合は、以下のフォルダーを削除します (このフォルダーが存在する場合)。

Application Server V7.0

インストールされた WebSphere Application Server Network Deployment が 1 つのみの場合は、以下のフォルダーを削除します (このフォルダーが存在する場合)。

Application Server Network Deployment V7.0

インストールされた WebSphere Process Server が 1 つのみの場合は、以下のフォルダーを削除します (このフォルダーが存在する場合)。

Process Server 7.0

複数のバージョンの WebSphere Application Server または WebSphere Process Server がインストールされている場合は、以下の例のようにフォルダー名の後に数値が付加されます。

- Application Server Network Deployment V7.0 (2)
- Process Server 7.0 (2)

この場合は、以下の手順を使用して削除するフォルダーを判別できます。

- a. Windows エクスプローラーで、C:¥Documents and Settings¥user_id¥Start Menu¥Programs¥IBM WebSphere¥ を開きます (ここで、user_id は製品をインストールしたユーザーです)。
 - b. Application Server V7.0 または Application Server Network Deployment V7.0 フォルダーを開きます。
 - c. Profile Management Tool サブフォルダーを右クリックし、「プロパティ」を選択します。次に、「ショートカット」タブを選択します。
 - d. ターゲット・プロパティを調べて、アンインストールに失敗した WebSphere Application Server のインストールをターゲット・ディレクトリーが指しているかどうかを確認します。指している場合は、Application Server V7.0 または Application Server Network Deployment V7.0 フォルダーを削除します。
 - e. ステップ b から d までを繰り返します。ただし、今回は、ステップ b では Process Server 7.0 サブフォルダーを開くことから始めて、ステップ d ではアンインストールに失敗した WebSphere Process Server のインストールをターゲット・ディレクトリーが指しているかどうかを確認します。
 - f. この他のフォルダー・セットについて (例えば、Application Server Network Deployment V7.0 (2) および Process Server 7.0 (2))、ステップ b から e までを繰り返します。
9. .nifRegistry ファイルの項目を編集します。

.nifRegistry ファイルの場所は以下のとおりです。

- 製品をインストールしたユーザー ID が管理特権を持っていた場合のファイルの場所は Windows ルート・ディレクトリー (ほとんどの Windows システムでは C:¥Windows または C:¥WINNT) です。
- 製品をインストールしたユーザー ID が管理特権を持っていなかった場合のファイルの場所は、そのユーザー ID のホーム・ディレクトリーです。

.nifRegistry ファイルには、各 WebSphere Process Server 製品のインストール環境ごとに 1 行、および各 WebSphere Application Server 製品のインストール環境ごとに 1 行のエントリーがあります。

除去した製品を示す 1 行だけがファイルに存在する場合は、このファイルを削除してもかまいません。そうでない場合は、フラット・ファイル・エディターを使用して、除去した製品のインストール・ルート・ディレクトリーを示す行を除去します。その他の行はそのままにしておきます。ファイルにリストされているインストール環境すべてを除去するまでは、.nifRegistry ファイルを削除しないでください。

10. installRegistryUtils コマンドを使用して、インストール済みのすべての WebSphere Server 製品のインストール・ロケーションを調べ、インストール・レジストリーから対象の製品を削除します。
11. 再始動を指示するプロンプトが表示された場合、サーバーを再始動します。

タスクの結果

この手順を行うと、システムがクリーンになります。これにより、WebSphere Process Server を同じディレクトリーに再インストールすることができます。クリーンなシステムには、以前削除したインストールの痕跡は残っていません。

次のタスク

システムをクリーンにした後、47 ページの『第 3 章 ソフトウェアのインストール』に進み、インストール手順を選択してください。

Business Process Choreographer のアンインストール

Business Process Choreographer を WebSphere Process Server のインストール済み環境から除去する方法については、WebSphere Process Server for Multiplatforms バージョン 7.0 インフォメーション・センターにアクセスし、「**WebSphere Process Server のインストール**」>「**ソフトウェアのアンインストール**」>「**Business Process Choreographer 構成の除去**」にあるトピックを参照してください。この情報は *Business Process Choreographer PDF* でも検索できます。

第 9 章 インストール情報

この参照用セクションには、WebSphere Process Server のインストールに関連するサブタスクと、インストールを支援するための概念説明および参照情報が記載されています。

製品およびプロファイルのデフォルトのインストール・ディレクトリー

このトピックでは、WebSphere Process Server インストール内で使用する具体的変数について説明します。

変数の意味の違いについて

製品情報内の、*install_root* および *profile_root* への参照は、製品インストールおよびプロファイル構成ファイル用の特定のデフォルト・ディレクトリーの場所を表しています。このトピックでは、WebSphere Process Server に使用する規則について説明します。これらの変数の意味は、製品をクリーン・サーバーにインストールするか、WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment が既にインストールされているサーバーにインストールするかによって異なる場合があります。またこれらは、インストールを root ユーザー (Windows システムでは Administrator) として実行しているか、非 root ユーザーとして実行しているかによっても異なる場合があります。

root 以外のユーザーがインストールする場合の制限

Linux **UNIX** **Windows** root、Administrator、および非 root ユーザーが製品をインストールできます。インストール・プログラムが用意するデフォルトのディレクトリーは、ユーザーが root (Administrator) 権限を持つかどうかで異なります。root および Administrator ユーザーは共用製品を登録でき、システム所有のディレクトリー (すべてのユーザーが使用可能なグローバル共用リソース) にインストールできますが、非 root ユーザーはこれできません。root 以外のユーザーは、そのユーザーが所有しているディレクトリーにしかインストールできません。

この資料で使用されている変数

この資料では、特定のデフォルト・ディレクトリーを表すいくつかの変数が使用されています。これらのファイル・パスは、デフォルトのロケーションです。書き込み権限を所有しているディレクトリーであればどのディレクトリーにも、製品およびその他のコンポーネントをインストールし、プロファイルを作成できます。WebSphere Process Server 製品またはコンポーネントを複数インストールする場合は、もちろん複数のロケーションが必要です。

以下に、この資料で使用されている主な変数を示します。

Linux **UNIX** **Windows** *install_root*

WebSphere Process Server のインストール・ロケーション。WebSphere

Process Server は常に、関連付けられた WebSphere Application Server Network Deployment と同じ場所にインストールされます。

profile_root

WebSphere Process Server プロファイルの場所。

クリーンなサーバー上のデフォルト・ディレクトリー

以下の表に、WebSphere Process Server 基本インストールとそのプロファイルのデフォルトのインストールの場所を示します。ただし、これらがデフォルトの場所になるのは、その他の WebSphere 製品の既存のインストール済み環境がない 場合です。

表 28 は、root (Administrator) ユーザーと非 root ユーザーの両方について、インストール・プログラムが WebSphere Process Server と WebSphere Application Server Network Deployment の両方をインストールするデフォルトのインストール・ルート・ディレクトリーを示したものです。

表 28. *install_root* デフォルト・ディレクトリー

root または Administrator ユーザーのデフォルトの <i>install_root</i>	非 root ユーザーのデフォルトの <i>install_root</i>
AIX /usr/IBM/WebSphere/ProcServer	AIX <i>user_home</i> /IBM/WebSphere/ProcServer
HP-UX Solaris /opt/IBM/WebSphere/ProcServer	HP-UX Solaris <i>user_home</i> /IBM/WebSphere/ProcServer
Linux /opt/ibm/WebSphere/ProcServer	Linux <i>user_home</i> /ibm/WebSphere/ProcServer
Windows C:%Program Files%IBM%WebSphere%ProcServer	Windows C:%IBM%WebSphere%ProcServer Windows 7 c:%program files%IBM%WebSphere%ProcServer

表 29 は、root (Administrator) ユーザーと非 root ユーザーの両方について、*profile_name* という名前のプロファイルのデフォルト・インストール・ディレクトリーを示したものです。

表 29. *profile_root* デフォルト・ディレクトリー

root または Administrator ユーザーのデフォルトの <i>profile_root</i>	root 以外のユーザーのデフォルトの <i>profile_root</i>
AIX /usr/IBM/WebSphere/ProcServer/profiles/ <i>profile_name</i>	AIX <i>user_home</i> /IBM/WebSphere/ProcServer/profiles/ <i>profile_name</i>
HP-UX Solaris /opt/IBM/WebSphere/ProcServer/profiles/ <i>profile_name</i>	HP-UX Solaris <i>user_home</i> /IBM/WebSphere/ProcServer/profiles/ <i>profile_name</i>
Linux /opt/ibm/WebSphere/ProcServer/profiles/ <i>profile_name</i>	Linux <i>user_home</i> /ibm/WebSphere/ProcServer/profiles/ <i>profile_name</i>

表 29. *profile_root* デフォルト・ディレクトリー (続き)

root または Administrator ユーザーのデフォルトの <i>profile_root</i>	root 以外のユーザーのデフォルトの <i>profile_root</i>
Windows C:¥Program Files¥IBM¥WebSphere¥ProcServer¥profiles¥ <i>profile_name</i>	Windows C:¥IBM¥WebSphere¥ProcServer¥ profiles¥ <i>profile_name</i>

WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment が既にインストールされている場合のデフォルト・ディレクトリー

サポートされるバージョンの WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment がサーバーにインストールされている場合、WebSphere Process Server をその上にインストールすると、WebSphere Process Server は同じ場所にインストールされます。表 30 は、root (Administrator) ユーザーと非 root ユーザーの両方について、そのような場合でのデフォルトのインストール・ルート・ディレクトリーを示したものです。

表 30. WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment が既にインストールされている場合の *install_root* デフォルト・ディレクトリー

root または Administrator ユーザーのデフォルトの <i>install_root</i>	非 root ユーザーのデフォルトの <i>install_root</i>
AIX /usr/IBM/WebSphere/AppServer	AIX <i>user_home</i> /IBM/WebSphere/ AppServer
HP-UX Linux Solaris /opt/IBM/WebSphere/AppServer	HP-UX Linux Solaris <i>user_home</i> /IBM/WebSphere/AppServer
Windows C:¥Program Files¥IBM¥WebSphere¥AppServer	Windows C:¥IBM¥WebSphere¥AppServer

profile_root のデフォルト・ディレクトリーは、同様に処理されます。

Installation Manager 用のデフォルトのインストール・ディレクトリー

148 ページの表 31 は、Installation Manager ツールに関連する 2 つのデフォルト・ディレクトリーを示したものです。

インストール・ディレクトリー内のディレクトリーは、Launchpad アプリケーションによって Installation Manager が格納される (プラットフォームごとの) デフォルト・ディレクトリーです。

エージェント・データ・ロケーション・ディレクトリー内のディレクトリーは、Installation Manager に関連するデータ (Installation Manager によって実行された操作の状態や履歴など) 用の (プラットフォームごとの) デフォルト・ディレクトリーです。

root (Administrator) ユーザー用と非 root ユーザー用の両方の値が提供されます。

エージェント・データのロケーションについて詳しくは、Installation Manager 資料の『エージェント・データのロケーション』を参照してください。Installation Manager のその他のデフォルト設定について詳しくは、Installation Manager 資料の『管理者または非管理者としてのインストール』を参照してください。

表 31. Installation Manager のデフォルトのインストール・ディレクトリー

root または Administrator ユーザーのデフォルト	非 root ユーザーのデフォルト
インストール・ディレクトリー:	インストール・ディレクトリー:
Linux /opt/IBM/InstallationManager/eclipse	Linux user_home/IBM/InstallationManager/eclipse
UNIX /opt/IBM/InstallationManager/eclipse	UNIX user_home/IBM/InstallationManager/eclipse
Windows C:¥Program Files¥IBM¥Installation Manager¥eclipse	Windows C:¥Documents and Settings¥userID¥IBM¥Installation Manager¥eclipse Vista Windows 7 C:¥ProgramData¥IBM¥Installation Manager
エージェント・データ・ロケーション・ディレクトリー:	エージェント・データ・ロケーション・ディレクトリー:
Linux /var/ibm/InstallationManager	Linux user_home/var/ibm/InstallationManager
UNIX /var/ibm/InstallationManager	UNIX user_home/var/ibm/InstallationManager
Windows C:¥Documents and Settings¥All Users¥Application Data¥IBM¥Installation Manager 2003 Vista Windows 7 C:¥ProgramData¥IBM¥Installation Manager	Windows C:¥Documents and Settings¥userID¥Application Data¥IBM¥Installation Manager 2003 Vista Windows 7 C:¥Users¥userID¥AppData¥Roaming¥IBM¥Installation Manager

インストール・コマンド

WebSphere Process Server およびサポート製品をインストールするためのコマンドの要約。

WebSphere Process Server 製品 DVD

製品 DVD には、以下の製品が含まれています。

- WebSphere Process Server
- WebSphere Application Server Network Deployment
- WebSphere Application Server Feature Pack for XML

- WebSphere Application Server Feature Pack for Service Component Architecture (SCA) (サービス・データ・オブジェクト (SDO) 機能付き)
- Installation Manager
- IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システム

表 32 に、WebSphere Process Server のサイレント・インストールに使用するコマンドをリストします。製品のインストール中に、ソフトウェアは、WebSphere Application Server Network Deployment、WebSphere Application Server Feature Pack for XML、WebSphere Application Server Feature Pack for Service Component Architecture (SCA) (サービス・データ・オブジェクト (SDO) 機能付き)、および Installation Manager もインストールします。WebSphere Process Server は、製品ランチパッドからインストールすることもできます。

IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システムは、製品ランチパッドからインストールする必要があります。

表 32. WebSphere Process Server のインストール・コマンド

オペレーティング・システム	WebSphere Process Server
AIX	/responsefiles/wbi/run_templates (これは、応答ファイルを必要とするサイレント・インストールです。詳しくは、62 ページの『WebSphere Process Server のサイレント・インストール』を参照してください。)
HP-UX	/responsefiles/wbi/run_templates (これは、応答ファイルを必要とするサイレント・インストールです。詳しくは、62 ページの『WebSphere Process Server のサイレント・インストール』を参照してください。)
Linux	/responsefiles/wbi/run_templates (これは、応答ファイルを必要とするサイレント・インストールです。詳しくは、62 ページの『WebSphere Process Server のサイレント・インストール』を参照してください。)
Solaris	/responsefiles/wbi/run_templates (これは、応答ファイルを必要とするサイレント・インストールです。詳しくは、62 ページの『WebSphere Process Server のサイレント・インストール』を参照してください。)
Windows	%responsefiles%\wbi\run_template.bat (これは、応答ファイルを必要とするサイレント・インストールです。詳しくは、62 ページの『WebSphere Process Server のサイレント・インストール』を参照してください。)

WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V7.0 CD

表 33 は、WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V7.0 CD で提供されているソフトウェアをインストールするために使用するコマンドをリストしています。これらの製品 (IBM Support Assistant を除く) は、WebSphere Process Server ランチパッドからインストールすることもできます。

表 33. WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V7.0 CD 上のソフトウェアのインストール・コマンド

オペレーティング・システム	Application Client	IBM HTTP Server	Web サーバー・プラグイン	IBM Support Assistant
AIX	/AppClient/install	/IHS/install	/plugin/install	/ISA/install.bin
HP-UX	/AppClient/install	/IHS/install	/plugin/install	/ISA/install.bin
Linux	/AppClient/install	/IHS/install	/plugin/install	/ISA/install.bin
Solaris	/AppClient/install	/IHS/install	/plugin/install	/ISA/install.bin
Windows	%AppClient%\install.exe	%IHS%\install.exe	%plugin%\install.exe	%ISA%\install.exe

WebSphere Portal add-in for WebSphere Process Server V7.0 DVD

表 34 は、WebSphere Portal add-in for WebSphere Process Server V7.0 DVD で提供されているソフトウェアをインストールするために使用するコマンドをリストしています。このアドインは、WebSphere Process Server ランチパッドからインストールすることもできます。

表 34. WebSphere Portal add-in for WebSphere Process Server V7.0 DVD のインストール・コマンド

オペレーティング・システム	WebSphere Portal add-in for WebSphere Process Server
AIX	/BSPACEP/install
HP-UX	/BSPACEP/install
Linux	/BSPACEP/install
Solaris	/BSPACEP/install
Windows	¥BSPACEP¥install.exe

プロファイル、ノード、サーバー、ホスト、およびセルの命名の考慮事項

このトピックでは、プロファイル、ノード、サーバー、ホスト、およびセル (該当する場合) を命名する際に考慮しなければならない予約語および問題について説明します。

プロファイルの命名の考慮事項

プロファイル名には、固有の名前を付けることができますが、以下の制限があります。プロファイルの名前を付ける際には、以下の文字を使用しないでください。

- スペース
- ご使用のオペレーティング・システムのディレクトリー名に使用できない特殊文字 (*、&、または ? など)
- スラッシュ (/) または円記号 (¥)

全角文字は許可されています。

ノード、サーバー、ホスト、セルの命名の考慮事項

予約名: フィールド値として予約済みのフォルダー名を使用しないでください。予約済みフォルダー名を使用すると、予測不能な結果が起こる可能性があります。以下のワードは、予約されています。

- cells
- nodes
- servers
- clusters
- applications
- deployments

「ノード名およびホスト名」および「ノード名、ホスト名、セル名」パネルのフィールドの説明: 表 35 では、プロファイル管理ツールの「ノード名およびホスト名」および「ノード名、ホスト名、セル名」ページにあるフィールドについて説明します。この表には、フィールド名、デフォルト値、および制約が示されています。プロファイルを作成する場合、この情報をガイドとして使用してください。

表 35. ノード、サーバー、ホスト、およびセルの命名ガイドライン

フィールド名	デフォルト値	制約	説明
スタンドアロン・サーバー・プロファイル			
ノード名	<p>Linux</p> <p>UNIX</p> <p>Windows</p> <p><i>shortHostName</i> Node <i>NodeNumber</i> ここで、</p> <ul style="list-style-type: none"> • <i>shortHostName</i> は短いホスト名です。 • <i>NodeNumber</i> は、01 から始まる連続番号を表します。 	予約名を使用しないでください。	希望の名前を選択してください。システムに複数のサーバーを作成する予定がある場合、インストールを編成するには、固有の名前を使用します。
サーバー名	<p>Linux</p> <p>UNIX</p> <p>Windows</p> <p>server1</p>	サーバーの固有の名前を使用します。	サーバーの論理名です。
ホスト名	<p>Linux</p> <p>UNIX</p> <p>Windows</p> <p>ドメイン・ネーム・サーバー (DNS) 名の長い書式。</p>	<p>ホスト名は、ご使用のネットワークを介してアドレス可能でなければなりません。</p> <p>Business Space の使用を計画している場合は、完全修飾ホスト名を使用します。</p>	ワークステーションの実際の DNS 名または IP アドレスを使用して、ワークステーションと通信できるようにします。この表の後にある、ホスト名に関する追加情報を参照してください。

表 35. ノード、サーバー、ホスト、およびセルの命名ガイドライン (続き)

フィールド名	デフォルト値	制約	説明
セル名	<p>Linux</p> <p>UNIX</p> <p>Windows</p> <p><i>shortHostName</i> Node <i>NodeNumber</i>セル ここで、</p> <ul style="list-style-type: none"> • <i>shortHostName</i> は短いホスト名です。 • <i>NodeNumber</i> は、01 から始まる連続番号を表します。 	<p>セルの固有の名前を使用します。製品が同じ物理ワークステーション上で稼働する場合や、ワークステーションのクラスター上で稼働する場合 (例: Sysplex) は、どんな環境でも、セル名は固有でなければなりません。また、エンティティー間のネットワーク接続性 (セル間の、または各セルと通信する必要のあるクライアントからの) が求められる環境では、セル名は固有でなければなりません。さらに、名前空間がフェデレートされる場合にも、セル名を固有にする必要があります。固有でなければ、<code>javax.naming.NameNotFoundException</code> 例外などの症状が発生する可能性があります。この場合は、固有の名前のセルを作成する必要があります。</p>	<p>すべての統合ノードは、デプロイメント・マネージャー・セルのメンバーになります。</p>
Deployment manager プロファイル			

表 35. ノード、サーバー、ホスト、およびセルの命名ガイドライン (続き)

フィールド名	デフォルト値	制約	説明
ノード名	<p>Linux</p> <p>UNIX</p> <p>Windows</p> <p><i>shortHostName</i> Cell ManagerNode Number ここで、</p> <ul style="list-style-type: none"> • <i>shortHostName</i> は短いホスト名です。 • <i>NodeNumber</i> は、01 から始まる連続番号を表します。 	<p>デプロイメント・マネージャーの固有の名前を使用します。予約名を使用しないでください。</p>	<p>この名前は、デプロイメント・マネージャー・セル内での管理に使用されます。</p>
ホスト名	<p>Linux</p> <p>UNIX</p> <p>Windows</p> <p>ドメイン・ネーム・サーバー (DNS) 名の長い書式。</p>	<p>ホスト名は、ご使用のネットワークを介してアドレス可能でなければなりません。予約名を使用しないでください。</p> <p>Business Space の使用を計画している場合は、完全修飾ホスト名を使用します。</p>	<p>ワークステーションの実際の DNS 名または IP アドレスを使用して、ワークステーションと通信できるようにします。この表の後にある、ホスト名に関する追加情報を参照してください。</p>

表 35. ノード、サーバー、ホスト、およびセルの命名ガイドライン (続き)

フィールド名	デフォルト値	制約	説明
セル名	<p>Linux</p> <p>UNIX</p> <p>Windows</p> <p><i>shortHostName</i> Cell <i>CellNumber</i> ここで、</p> <ul style="list-style-type: none"> • <i>shortHostName</i> は短いホスト名です。 • <i>CellNumber</i> は、01 から始まる連続番号を表します。 	<p>デプロイメント・マネージャー・セルに固有の名前を使用します。製品が同じ物理ワークステーション上で稼働する場合や、ワークステーションのクラスター上で稼働する場合 (例: Sysplex) は、どんな環境でも、セル名は固有でなければなりません。また、エンティティー間のネットワーク接続性 (セル間の、または各セルと通信する必要があるクライアントからの) が求められる環境では、セル名は固有でなければなりません。名前空間が統合される場合でも、セル名は固有である必要があります。固有でなければ、<code>javax.naming.NameNotFoundException</code> 例外などの症状が発生する可能性があります。この場合は、固有の名前のセルを作成する必要があります。</p>	<p>すべての統合ノードは、デプロイメント・マネージャー・セルのメンバーになります。このセルは、プロファイル管理ツールの「ノード名、ホスト名、セル名」ページで指定します。</p>
カスタム・プロファイル			

表 35. ノード、サーバー、ホスト、およびセルの命名ガイドライン (続き)

フィールド名	デフォルト値	制約	説明
ノード名	<p>Linux</p> <p>UNIX</p> <p>Windows</p> <p><i>shortHostName</i> Node <i>NodeNumber</i> ここで、</p> <ul style="list-style-type: none"> • <i>shortHostName</i> は短いホスト名です。 • <i>NodeNumber</i> は、01 から始まる連続番号を表します。 	<p>予約名を使用しないでください。</p> <p>デプロイメント・マネージャー・セル内で固有の名前を使用します。</p>	<p>この名前は、カスタム・プロファイルが追加されるデプロイメント・マネージャー・セル内で管理のために使用されます。デプロイメント・マネージャー・セル内で固有の名前を使用します。</p>
ホスト名	<p>Linux</p> <p>UNIX</p> <p>Windows</p> <p>ドメイン・ネーム・サーバー (DNS) 名の長い書式。</p>	<p>ホスト名は、ご使用のネットワークを介してアドレス可能でなければなりません。</p> <p>Business Space の使用を計画している場合は、完全修飾ホスト名を使用します。</p>	<p>ワークステーションの実際の DNS 名または IP アドレスを使用して、ワークステーションと通信できるようにします。この表の後にある、ホスト名に関する追加情報を参照してください。</p>

Windows ディレクトリー・パスについての考慮事項: インストール・ディレクトリーのパスは、60 文字以下でなければなりません。
*profiles_directory_path**profile_name* ディレクトリーの文字数は、80 文字以下でなければなりません。

ホスト名の考慮事項:

ホスト名は、ノードがインストールされている物理ワークステーションのネットワーク名です。ホスト名は、サーバー上の物理ネットワーク・ノードに解決する必要があります。サーバーが複数のネットワーク・カードを備えている場合は、ホスト名または IP アドレスは、そのネットワーク・カードのいずれか 1 つに解決されなければなりません。リモート・ノードは、ホスト名を使用して、このノードに接続および通信します。

WebSphere Process Server は、インターネット・プロトコル・バージョン 4 (IPv4) およびバージョン 6 (IPv6) の両方に対応しています。管理コンソールなどで IP アドレスを入力できる場所では、どちらの形式で入力しても構いません。ご使用のシステムに IPv6 が実装されている場合は、IP アドレスを IPv6 形式で入力する必要

があります。反対に、IPv6 を使用できない環境では、IP アドレスを IPv4 形式で入力してください。IPv6 について詳しくは、IPv6 の公式 Web サイトを参照してください。

以下のガイドラインが、ご使用のワークステーションに適切なホスト名を付ける場合に役立ちます。

- その他のワークステーションがネットワーク内でアクセスできるホスト名を選択します。
- この値に汎用 ID、localhost を使用しないでください。
- 2 バイト文字セット (DBCS) の文字を使用しているホスト名を持つサーバーには、WebSphere Process Server 製品をインストールしないでください。DBCS 文字は、ホスト名に使用する場合はサポートされていません。
- サーバー名には下線文字 (_) を使用しないようにしてください。インターネット標準では、ドメイン・ネームが Internet Official Protocol Standards の RFC 952 および RFC 1123 に記述されているホスト名の要件に適合するよう定めています。ドメイン・ネームには、文字 (大文字または小文字) および数字のみを使用する必要があります。ただし、名前の末尾にならない限り、ドメイン・ネームにダッシュ文字 (-) を使用してもかまいません。ホスト名では、下線文字 (_) はサポートされていません。サーバー名に下線文字を使用しているサーバーにすでに WebSphere Process Server をインストールした場合、このサーバーにアクセスするには、その名前を変更するまで IP アドレスを使用してアクセスしてください。

同一コンピューター上に共存している複数のノードを固有の IP アドレスで定義する場合は、ドメイン・ネーム・サーバー (DNS) のルックアップ・テーブルで、個々の IP アドレスを定義してください。サーバーの構成ファイルでは、ネットワーク・アドレスが 1 つしかないワークステーションでの複数 IP アドレスのドメイン・ネーム解決が提供されません。

ホスト名に指定する値は、構成文書で `hostName` プロパティの値として使用されます。次のいずれかの形式で、ホスト名の値を指定してください。

- 完全修飾のドメイン・ネーム・サーバー (DNS) ホスト名ストリング。例えば `xmachine.manhattan.ibm.com` など。
- デフォルトの DNS 短縮ホスト名ストリング。例えば `xmachine` など。
- 数値 IP アドレス。例えば `127.1.255.3` など。

完全修飾 DNS ホスト名には、あいまいなところがなく、柔軟性に富むという利点があります。この柔軟性により、ユーザーは、ホスト・システムの実際の IP アドレスを変更しても、サーバー構成を変更する必要がありません。ホスト名のこの値は、動的ホスト構成プロトコル (DHCP) を使用して IP アドレスを割り当てる際に頻繁に IP アドレスを変更することが予定されている場合には、特に有用です。この形式の欠点は、DNS に依存するということです。DNS が使用できないと、接続に支障を来します。

短縮ホスト名も、動的に解決可能です。ショート・ネーム形式には、ネットワークから切断されたときでもシステムがサーバーを実行できるように、ローカルの `hosts` ファイルで再定義されるという機能もあります。`hosts` ファイルの `127.0.0.1` (ローカル・ループバック) に対するショート・ネームを、切断した状態でも実行されるよ

うに定義します。ショート・ネーム形式の欠点は、リモート・アクセスでは DNS に依存するという事です。DNS が使用できないと、接続に支障を来します。

数値 IP アドレスには、DNS によって名前を解決する必要がないという利点があります。リモート・ノードは、DNS が使用できなくても、数値 IP アドレスを使用して名付けられたノードに接続できます。この形式の欠点は、数値 IP アドレスを使用するとアドレスが固定化されるということです。ワークステーションの IP アドレスを変更したら、構成文書の `hostName` プロパティの設定も必ず変更しなければなりません。したがって、DHCP を使用するか、あるいは IP アドレスを定期的に変更する場合は、数値 IP アドレスを使用しないでください。もう一方の形式の欠点としては、ホストがネットワークから切断されるとノードを使用できないということがあります。

関連概念

178 ページの『Network Deployment 構成の作成』

Network Deployment 構成を作成するには、WebSphere Process Server をインストールし、適切なプロファイルを作成し、デプロイメント環境を構成します。

WebSphere Process Server の機能

このトピックでは、Installation Manager でインストール対象として選択可能な WebSphere Process Server 機能について説明します。

サンプル・アプリケーション

Installation Manager で WebSphere Process Server の「サンプル・アプリケーション」機能を選択することにより、WebSphere Process Server と WebSphere Application Server Network Deployment の両方のためのサンプル・アプリケーションをインストールに組み込むかが決まります。サンプル・アプリケーションには、ソース・コード・ファイルと、Java Platform Enterprise Edition (Java EE) および WebSphere のいくつかの最新テクノロジーをデモンストレーションする統合エンタープライズ・アプリケーションの両方が含まれています。

サンプル・アプリケーションについて詳しくは、『サンプル・ギャラリーのインストールおよびアクセス』を参照してください。

実稼働環境でパフォーマンスを高めるためには、サンプル・アプリケーションをインストールしないでください。

WebSphere Process Server - Client

機能パネルで「WebSphere Process Server - Client」を選択すると、WebSphere Process Server Client と WebSphere Process Server がインストールされます。WebSphere Process Server Client だけをインストールするには、WebSphere Process Server のチェック・ボックスをクリアします。

スタンドアロン WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus 開発プロファイル

Installation Manager には、WebSphere Process Server と WebSphere Enterprise Service Bus の両方のためのスタンドアロン開発プロファイルを作成するオプション

機能が含まれています。これらのプロファイルは、実稼働環境では機能しません。これらは、ユーザーが、運用実動プロファイルを作成することなく、WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus についての理解を深めることを目的としています。これらのプロファイルを作成するには、管理者セキュリティー ID およびパスワード資格情報を提供する必要があります。

製品のバージョン情報および履歴情報

製品のバージョン情報および履歴情報とそのリンク

properties/version ディレクトリーにある WBI.product ファイルには、製品、バージョン、ビルドの日付、およびビルド・レベルなどの情報が記載されています。以下に例を示します。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<!DOCTYPE product SYSTEM "product.dtd">
<product name="IBM WebSphere Process Server">
<id>WBI</id>
<version>7.0.0.0</version>
<build-info date="8/31/09" level="of0935.02"/>
</product>
```

該当する製品バージョン情報および履歴情報については、以下のリンクをクリックしてください。

表 36. 製品のバージョン情報および履歴情報のリンク

リンク
製品のバージョン情報
genVersionReport コマンド
versionInfo コマンド
historyInfo コマンド
genHistoryReport コマンド

複数プロファイル環境のプロファイル・コマンド

サーバーに複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用するプロファイルを指定する必要があります。これらのコマンドでは、-profileName 属性を使用して、アドレス指定するプロファイルを指定します。コマンドごとに -profileName 属性を指定する必要をなくすためには、各プロファイルの bin ディレクトリーに存在するバージョンのコマンドを使用します。

WebSphere Process Server の 1 つのインストール済み環境内部で作成する最初のプロファイルがデフォルト・プロファイルになります。デフォルト・プロファイルは、WebSphere Process Server がインストールされているディレクトリーの bin ディレクトリーから実行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。システム上にプロファイルが 1 つしかない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに対して作用します。デフォルト以外のプロファイルをコマンドのターゲットにするには、以下のようにしてコマンドを実行する必要があります。

- 任意のディレクトリーからコマンドを実行する場合は、コマンドの後に `-profileName` 属性と、アドレス指定するプロファイルへの完全修飾パスを指定します。以下に例を示します。

```
startServer -profileName server1
```

- コマンドに対して `-profileName` 属性を指定せずに済むようにするには、アドレス指定するプロファイルの `bin` ディレクトリーに存在するコマンドのバージョンを使用します。このディレクトリーは、プラットフォームに応じて、以下のいずれかになります。

```
- Linux UNIX profile_root/bin
```

```
- Windows profile_root%bin
```

パスポート・アドバンテージからインストールするときの特別な考慮事項

パスポート・アドバンテージで取得したイメージからインストールする場合は、イメージに付属するダウンロードの手順説明を精読し、ユーザー許可とディレクトリー・セットアップに関するいくつかのガイドラインに従う必要があります。

これらのイメージは、*WebSphere Process Server V7.0 DVD* と、*WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V7.0 CD* に、1 対 1 でマップします。これらのイメージは、プラットフォーム別に電子アセンブリーに分類されます。それぞれのアセンブリーにはそのプラットフォーム用のすべてのイメージが含まれているため、そのプラットフォームに必要なすべてのソフトウェアを素早く識別することができます。

パスポート・アドバンテージで取得したインストール・イメージからインストールする場合は、以下のガイドラインに従ってください。

- Linux UNIX `untar` コマンドでファイルを解凍したユーザーと同じユーザーが、製品をインストールするようにします。これらの作業を異なるユーザーが実行した場合、製品のインストーラーは正しく機能しません。
- *WebSphere Process Server V7.0 DVD* および *WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V7.0 CD* のイメージの内容は、別々のディレクトリーに解凍するようにしてください。複数のイメージからのファイルを同じディレクトリーに解凍すると、エラーの原因となります。以下の例のように、兄弟ディレクトリーの使用を検討してください。

```
- Linux UNIX
%/downloads/WPS/image1
%/downloads/WPS/image2
```

```
- Windows
C:%downloads%WPS%image1
C:%downloads%WPS%image2
```

第 10 章 インストールおよび構成のトラブルシューティング

WebSphere Process Server のインストールおよび構成に失敗したときに、問題を診断できます。

手順

1. インストール・プロセスからのエラー・メッセージを読みます。

説明については、『エラー・メッセージ: インストールおよびプロファイルの作成と拡張』を参照してください。メッセージが、記載されているものと対応する場合は、問題を訂正し、インストールされた部分をクリーンアップして、再インストールを試みます。

2. WebSphere Application Server Network Deployment のインストールに失敗した場合は、WebSphere Application Server Network Deployment インフォメーション・センターの『インストールのトラブルシューティング』を参照し、提供されている情報を使用して問題を修正してから、WebSphere Process Server の再インストールを試行してください。
3. WebSphere Application Server Feature Pack for Service Component Architecture (SCA) (サービス・データ・オブジェクト (SDO) 機能付き) のインストールに失敗した場合は、WebSphere Application Server Network Deployment インフォメーション・センターの『インストールのトラブルシューティング』を参照し、提供されている情報を使用して問題を修正してから、WebSphere Process Server の再インストールを試行してください。
4. WebSphere Application Server Network Deployment のインストールは成功したが、WebSphere Feature Pack for Web Services のインストールに失敗した場合は、WebSphere Application Server Network Deployment インフォメーション・センターの『サーバー・プラグインのインストールおよび除去のトラブルシューティング』を参照し、提供されている情報を使用して問題を修正してから、WebSphere Process Server の再インストールを試行してください。

ヒント: WebSphere Process Server インストールの一部としての WebSphere Feature Pack for Web Services のインストール中に問題が発生した場合、インストール・プロセスは続行されず、エラー・メッセージが表示されます。

5. WebSphere Application Server Network Deployment および WebSphere Feature Pack for Web Services のインストールは成功したが、WebSphere Process Server のインストールに失敗した場合は、WebSphere Process Server の他のインストール・ログ・ファイルを調べてください。これらのログ・ファイルの名前、存在場所、および説明について詳しくは、『インストールとプロファイル作成のログ・ファイル』を参照してください。
6. サーバー・プロファイルを正常に作成した場合は、ファースト・ステップ・コンソールまたはコマンド行方式を使用して、サーバーを始動します。
7. 実行中の Java プロセス、および SystemOut.log ファイルと SystemErr.log ファイル内の「*e-business* に対してオープンな状態です」というメッセージを調べて、サーバーが適切に始動およびロードされていることを確認します。

Java プロセスが存在しない場合、あるいはメッセージが表示されない場合は、同じログでその他のエラーを検査します。エラーがあればそれを修正し、再試行します。

SystemOut.log および SystemErr.log ファイルは、以下のプラットフォーム固有のディレクトリにあります。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:

`profile_root/logs/servername`

- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合:

`profile_root¥logs¥servername`

8. サーバーが稼働中の場合は、ファースト・ステップ・コンソールまたはコマンド行方式を使用して停止します。
9. Snoop サブレットを使用して Web サーバーがアプリケーションを WebSphere Process Server から取得できるかどうかを検証する場合は、WebSphere Application Server Network Deployment 資料の『インストールのトラブルシューティング』のステップ『Snoop サブレットを開始し、アプリケーション・サーバーからアプリケーションを検索する Web サーバーの機能を検証します』を参照してください。
10. 管理コンソールを開始します。詳しくは、『管理コンソールの始動と停止』を参照してください。
11. IP アドレスのキャッシュに関する問題を解決するには、WebSphere Application Server Network Deployment 資料の『インストールのトラブルシューティング』のステップ『IP アドレスのキャッシング問題を解決します』を参照してください。

次のタスク

この Product Support Web サイトでは、既知の問題の解決方法に関する最新情報を確認できます。また、問題の解決に必要な情報の収集時間を節約できる資料を参照することができます。PMR を開く前に、IBM WebSphere Process Server サポート・ページを参照してください。

インストール時およびプロファイル作成時のメッセージおよび既知の問題

インストール時および構成時に発生する一般的なエラー・メッセージの一部は、基本的な問題を解決するアクションで処理できます。

注: **Linux** **UNIX** **Windows** 以下の WebSphere Process Server のインストールおよび構成エラーは、Linux、UNIX、および Windows プラットフォームで発生します。

ヒント: WebSphere Application Server Network Deployment のインストールによって生成される可能性のあるメッセージについては、『Business Process Management のメッセージ (Business Process Management messages)』のトピックを参照してください。

WebSphere Process Server のインストール中に、以下のようなエラー・メッセージが表示されることがあります。

- 165 ページの『サポートされる IBM JDK が見つかりませんでした。この製品に同梱されている IBM JDK は *install_root*/JDK に配置されている必要があります。この問題を訂正して再試行してください。』
- 165 ページの『警告: スtring "<type_name>" をタイプ FontStruct に変換できません (Warning: Cannot convert string "<type_name>" to type FontStruct)』

類似したエラー・メッセージが見つからない場合、または提供されている情報では問題が解決されない場合は、IBM の WebSphere Process Server サポートにさらに支援を求めて連絡してください。

既知の問題

以下に示す、インストールおよびプロファイル作成に関連する既知の問題が発生した場合は、推奨されている解決策を実行して問題を解決してください。

表 37. インストールおよびプロファイル作成に関連する既知の問題と解決策

症状	問題	解決策
<p>WebSphere Process Server バージョン 7.0.0.0 と WebSphere Integration Developer バージョン 7.0.0 を、同じパッケージ・グループ内に共存させることができません。</p> <p>または</p> <p>WebSphere Process Server バージョン 7.0.0.0 と Lotus® Forms Designer 3.5.1.0 を、同じパッケージ・グループ内に共存させることができません。</p>	<p>Installation Manager への WebSphere Application Server のサイレント・インポートが失敗したため、WebSphere Process Server パッケージのインストール先として使用できるパッケージ・グループが検出できません。</p>	<p>WebSphere Application Server インストール済み環境を Installation Manager に正しくインポートする必要があります。</p> <p>「スタート」メニューから Installation Manager を開いて「インポート」を選択し、Installation Manager ウィザードの指示に従って WebSphere Application Server をインポートします。</p>

表 37. インストールおよびプロファイル作成に関連する既知の問題と解決策 (続き)

症状	問題	解決策
Launchpad アプリケーションが、WebSphere Application Server のインストールが正常に完了したことを報告しますが、Installation Manager へのインポート中にエラーが発生しました。	Installation Manager への WebSphere Application Server のサイレント・インポートが失敗しました。サイレント・インポートの呼び出し中に Installation Manager が開いていたか、ディスクに関する問題が発生したことが原因として考えられます。	以下のログを調べて、エラーを確認してください。 <ul style="list-style-type: none"> Linux の場合: install_root/logs/ launchpad_import.txt Windows プラットフォームの場合: install_root¥logs¥ launchpad_import.txt ディスク・スペースが不足している場合は、インポートを完了できるだけの十分なスペースをクリーンアップして、「スタート」メニューから Installation Manager を開きます。次に、Installation Manager ウィザードで「インポート」を選択し、WebSphere Application Server をインポートするためのステップを実行します。
インポートのログがありません。 <ul style="list-style-type: none"> Linux の場合: install_root/logs/ launchpad_import.txt Windows プラットフォームの場合: install_root¥logs¥ launchpad_import.txt 	サイレント・インポートの呼び出し中に Installation Manager が開いていました。	「スタート」メニューから Installation Manager を開いて、「インポート」を選択します。次に、WebSphere Application Server をインポートするためのステップを実行します。

表 37. インストールおよびプロファイル作成に関連する既知の問題と解決策 (続き)

症状	問題	解決策
Launchpad アプリケーションが、WebSphere Application Server で障害が発生したことを報告します。	WebSphere Application Server のサイレント・インストールが失敗しました。	<p>以下のログを調べて、エラーを確認してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> Linux の場合: <code>install_root/logs/install/log.txt</code> Windows プラットフォームの場合: <code>install_root¥logs¥install¥log.txt</code> <p>logs ディレクトリーがシステム上に存在しない場合は、インストールがプロセスのごく初期の段階で失敗しています。この場合は、以下のログ・ファイルを確認してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> Linux の場合: <code>user_home/waslogs/log.txt</code> Windows プラットフォームの場合: <code>user_home¥waslogs¥log.txt</code>

サポートされる IBM JDK が見つかりませんでした。この製品に同梱されている IBM JDK は `install_root/JDK` に配置されている必要があります。この問題を訂正して再試行してください。

この製品に付属する IBM Java Development Kit (JDK)、またはご使用のシステムの PATH 環境変数にある JDK を指すためにシンボリック・リンクを使用した場合、IBM SDK for Java の妥当性検査が失敗して、インストールが失敗するおそれがあります。この問題は、IBM SDK for Java の妥当性検査コードが、この製品に付属する JDK がインストールに使用された現行の JDK であるかどうかを検出する方法によって引き起こされます。

この問題を解決するには、WebSphere Process Server のインストール・イメージに提供された JVM 内でシンボリック・リンクを使用せず、またご使用のシステムの PATH 環境変数にあるすべての JVM からシンボリック・リンクを除去します。

警告: スtring "<type_name>" をタイプ FontStruct に変換できません (Warning: Cannot convert string "<type_name>" to type FontStruct)

WebSphere Application Server 用の Web サーバー・プラグインをインストールする場合には、ikeyman ユーティリティーもインストールします。ikeyman ユーティリティーは、Global Services Kit 7 (GSKit7) の一部です。

Linux Linux システムで `ikeyman.sh` スクリプトを実行すると、以下のメッセージが表示される場合があります。

```
警告: スtring "-monotype-arial-regular-r-normal---140---p---iso8859-1" を
      タイプ FontStruct に変換できません
(Warning: Cannot convert string
 "-monotype-arial-regular-r-normal---140---p---iso8859-1"
 to type FontStruct)
```

この警告を無視して `ikeyman` ユーティリティーを使用しても問題ありません。

インストールとプロファイル作成のログ・ファイル

WebSphere Process Server のインストール時やアンインストール時、プロファイルの作成時、拡張時、および削除時には、さまざまなログ・ファイルが作成されます。これらの手順の実行中に問題が発生した場合は、該当するログを参照してください。

表 38 に、WebSphere Process Server のログ・ファイル名、場所、成功および失敗に関する説明を示します。

表 38 に示すいくつかのディレクトリー・パス、ファイル名、および標識値には、エントリーがテーブル・セルのサイズに合うように、スペースが含まれています。実際のディレクトリー・パス、ファイル名、および標識値には、スペースは含まれません。

変数 `install_root` は、WebSphere Process Server のインストール・ディレクトリーを表します。変数 `profile_root` は、プロファイルのルートの場所を表します。

詳しくは、145 ページの『製品およびプロファイルのデフォルトのインストール・ディレクトリー』を参照してください。

表 38. WebSphere Process Server コンポーネントのインストール・ログおよびプロファイル・ログ

ログ名および場所	ログの説明
<ul style="list-style-type: none">Linux UNIX <code>install_root/logs/install/log.txt</code>Windows <code>install_root¥logs¥install¥log.txt</code>	WebSphere Application Server のインストール・ログ・ファイル
<ul style="list-style-type: none">Linux UNIX <code>user_home/waslogs/log.txt</code>Windows <code>user_home¥waslogs¥log.txt</code>	
<ul style="list-style-type: none">Linux UNIX <code>install_root/logs/launchpad_import.txt</code>Windows <code>install_root¥logs¥launchpad_import.txt</code>	Launchpad アプリケーションからの WebSphere Application Server のインポートに関連するすべてのエラーおよび警告

表 38. WebSphere Process Server コンポーネントのインストール・ログおよびプロファイル・ログ (続き)

ログ名および場所	ログの説明
<ul style="list-style-type: none"> Linux UNIX <code>install_root/logs/wbi/install/installconfig_server.log</code> Windows <code>install_root¥logs¥wbi¥install¥installconfig_server.log</code> 	<p>コンポーネントの構成、システム・アプリケーションのインストール、および Windows ショートカットとレジストリー項目の作成を行うために、インストール・プロセスの最後に実行される構成アクションをログに記録します。</p>
<ul style="list-style-type: none"> Linux UNIX <code>install_root/logs/manageprofiles/pmt.log</code> Windows <code>install_root¥logs¥manageprofiles¥pmt.log</code> 	<p>プロファイル管理ツールからすべてのイベントをログに記録します。</p>
<ul style="list-style-type: none"> Linux UNIX <code>install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log</code> Windows <code>install_root¥logs¥manageprofiles¥profile_name_create.log</code> 	<ul style="list-style-type: none"> 名前付きのプロファイルの作成中に発生するすべてのイベントをトレースします。 完全インストールの間に、プロファイル管理ツールを使用したとき、または <code>manageprofiles</code> コマンド行ユーティリティを使用したときに作成されます。
<ul style="list-style-type: none"> Linux UNIX <code>install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create_error.log</code> Windows <code>install_root¥logs¥wbi¥update¥profile_name_create_error.log</code> 	<p><code>profile_name_create.log</code> ファイルから抽出された情報をログに記録します。この情報は、失敗したあらゆる構成アクション、検証、<code>wsadmin</code> 呼び出し、および対応するあらゆるログ・ファイルに関連します。</p>
<ul style="list-style-type: none"> Linux UNIX <code>install_root/logs/manageprofiles/profile_name_augment.log</code> Windows <code>install_root¥logs¥manageprofiles¥profile_name_augment.log</code> 	<ul style="list-style-type: none"> 名前付きのプロファイルの拡張中に発生するすべてのイベントをトレースします。 プロファイルを拡張したとき、プロファイル管理ツールを使用したとき、または <code>manageprofiles</code> コマンド行ユーティリティを使用したときに作成されます。
<ul style="list-style-type: none"> Linux UNIX <code>install_root/logs/manageprofiles/profile_name_augment_error.log</code> Windows <code>install_root¥logs¥wbi¥update¥profile_name_augment_error.log</code> 	<p><code>profile_name_augment.log</code> ファイルから抽出された情報をログに記録します。この情報は、失敗したあらゆる構成アクション、検証、<code>wsadmin</code> 呼び出し、および対応するあらゆるログ・ファイルに関連します。</p>
<ul style="list-style-type: none"> Linux UNIX <code>install_root/logs/manageprofiles/profile_name_delete.log</code> Windows <code>install_root/logs/manageprofiles/profile_name_delete.log</code> 	<ul style="list-style-type: none"> 名前付きのプロファイルの削除中に発生するすべてのイベントをトレースします。 <code>manageprofiles</code> コマンド行ユーティリティによってプロファイル削除が実行されたときに作成されます。
<ul style="list-style-type: none"> Linux UNIX <code>install_root/logs/wbi/uninstall/uninstallconfig_server.log</code> Windows <code>install_root¥logs¥wbi¥uninstall¥uninstallconfig_server.log</code> 	<p>WebSphere Process Server に関係するすべてのアンインストール・イベントをログに記録します。</p>

表 38. WebSphere Process Server コンポーネントのインストール・ログおよびプロファイル・ログ (続き)

ログ名および場所	ログの説明
<ul style="list-style-type: none"> Windows <code>Agent data location¥logs</code> 通常は、<code>C:¥Documents and Settings¥All Users¥Application Data¥IBM¥Installation Manager¥logs</code> Linux UNIX <code>Agent data location/logs</code> 通常は、<code>/var/ibm/InstallationManager/logs</code> 	<p><i>Agent data location</i> の下にある、Installation Manager ログ・ファイル・ディレクトリー。<i>Agent data location</i> について詳しくは、Installation Manager の資料を参照してください。</p>
<ul style="list-style-type: none"> Windows <code>install_root¥logs¥product shortname¥silent_install.log</code> HP-UX Linux Solaris <code>install_root/logs/product shortname/silent_install.log</code> AIX <code>install_root/logs/product shortname/silent_install.log</code> 	<p>サイレント・インストールに関連する概要エラー・メッセージを含むログ・ファイル</p> <p>サイレント・インストールのログとしては、<code>install_root¥logs¥silent_install.log</code>、<code>install_root/logs/silent_install.log</code>、<code>install_root/logs/silent_install.log</code> があります。これは実際には、<code>install_root¥logs¥<product shortname>/silent_install.log</code>、<code>install_root/logs/<product shortname>/silent_install.log</code>、<code>install_root/logs/<product shortname>/silent_install.log</code> です。</p>

Launchpad アプリケーションまたはファースト・ステップのトラブルシューティング

Launchpad アプリケーションまたはファースト・ステップが開始されない場合、以下のトラブルシューティングのヒントを試行してください。

Launchpad アプリケーションのトラブルシューティング

変更を行った後、Launchpad を再起動します。

- Passport Advantage のイメージを使用する場合は、*WebSphere Process Server* バージョン 7.0 DVD、*WebSphere Application Server Network Deployment Supplement* バージョン 7.0 CD、および *WebSphere Portal add-in for WebSphere Process Server* DVD のイメージの内容を、それぞれ別個のディレクトリーに抽出する必要があります。イメージのファイルを同じディレクトリーに抽出すると、エラーが発生する原因となります。兄弟ディレクトリーを使用することをお勧めします。例えば、以下のようなディレクトリーのセットを使用してください。

```

- Linux UNIX

  %/downloads/WPS/image1
  %/downloads/WPS/image2
  %/downloads/WPS/image3

- Windows

  C:¥downloads¥WPS¥image1
  C:¥downloads¥WPS¥image2
  C:¥downloads¥WPS¥image3
  
```

- Launchpad は開始できるが、リンクを選択しても Launchpad 内のページが表示されない場合、ディスク・ドライブに異なるオペレーティング・システム用のメディアが挿入されている可能性があります。メディアの妥当性を確認してください。
- **Windows** Windows システムで Mozilla ブラウザーを使用しようとする、代わりに Internet Explorer が開くことがあります。Internet Explorer が同じシステムにインストールされている場合、Launchpad はデフォルトのブラウザーとして Mozilla を認識しません。Launchpad は Internet Explorer での操作性が良いため、処置は必要ありません。

Mozilla の使用を強制する環境変数を作成するには、コマンド・プロンプトで以下のコマンドを大文字小文字を正確に使用して実行します。

```
set BROWSER=Mozilla
```

- ご使用のブラウザーで JavaScript™ 機能が使用可能になっていることを確認してください。

Linux **UNIX** Mozilla: 「編集」 > 「設定」 > 「詳細」 > 「スクリプト & プラグイン」をクリックします。

- 「Enable JavaScript for: Navigator」を選択します。
- 「以下スクリプトを許可」ですべてのボックスを選択します。

Linux **UNIX** Mozilla Firefox: 「ツール」 > 「オプション」 > 「コンテンツ」をクリックします。

- 「Java を有効にする」を選択します。
- 「JavaScript を有効にする」を選択します。
- 「詳細設定」をクリックし、「次のスクリプトを許可」ですべてのボックスを選択します。

Windows Internet Explorer: 「ツール」 > 「インターネット オプション」 > 「セキュリティ」 > 「インターネット」の「レベルのカスタマイズ」 > 「スクリプト」 > 「アクティブ スクリプト」 > 「有効にする」をクリックします。

これらの操作を試した後でも Launchpad のリンクが機能しない場合は、コンポーネントのインストール・プログラムを直接開始してください。

ファースト・ステップのトラブルシューティング

Mozilla Firefox がデフォルトのブラウザーとして設定されている Microsoft Windows オペレーティング・システムで、ファースト・ステップ・コンソールのリンクをクリックしてもブラウザー・ウィンドウが開かない場合、またはファースト・ステップ・コンソールが起動しないか、起動してもすぐに終了してしまう場合は、以下の回避策を試行してください。

- Windows レジストリーを変更して、ロケーション名に含まれているスペースを削除します。
 1. HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Clients¥StartMenuInternet¥FIREFOX.EXE¥shell¥open¥commandにナビゲートします。

注: 上記の行は、ワード・ラップされている場合があります。必ず、この行に示されているロケーション (レジストリーの「command」キー) までナビゲートしてください。

2. 「(Default)」項目を変更して、パスからスペースを除去します。

例えば、パスが「C:\Program Files\Mozilla Firefox\firefox.exe」に設定されている場合は、このパスを短縮パス「C:\Progra~1\Mozill~1\firefox.exe」に変更してください。

この短縮名は、すべてのシステムで同じであるわけではありません。例えば、「Mozilla Thunderbird」と「Mozilla Firefox」をインストールしてある場合で、これらが両方とも「Program Files」ディレクトリーにインストールされている場合、Mozilla Firefox のロケーションの短縮名は、上記の例と異なっている可能性があります。「dir /X」コマンドを使用して、現行ディレクトリー内の個別のファイルおよびディレクトリーの短縮名を判別することができます。

注: このオプションを選択する場合は、Windows レジストリーを破損しないように注意してください。このキーはロケールによって異なる場合があるため、注意してください。あるいは、別の回避策を実行することもできます。変更を行う前に、レジストリーをバックアップすることをお勧めします。

- スペースが含まれていない別のロケーションに Mozilla Firefox をインストールします。
- デフォルトのブラウザを一時的に変更します。
 1. Windows Internet Explorer をデフォルトのブラウザとして設定します。
 2. Mozilla Firefox をデフォルトのブラウザとして再設定します。これで、最初の回避策で示したレジストリー項目が自動的に変更され、スペースが除去されます。

この方法は、Mozilla Firefox アプリケーション内からデフォルトのブラウザを設定する場合にのみ有効です。「プログラムの追加と削除」で「プログラムのアクセスと既定の設定」コマンドを使用しても、効果はありません。

サイレント・インストールのトラブルシューティング

応答ファイルを使用したサイレント・インストールに失敗した場合は、ログ・ファイルおよびエラー・メッセージを調べて原因を判別し、応答ファイルを変更できません。

始める前に

WebSphere Process Server のサイレント・インストールのための応答ファイルの使用については、62 ページの『WebSphere Process Server のサイレント・インストール』を参照してください。

製品のサイレント・インストールのトラブルシューティングを行うには、以下のステップを実行します。

手順

1. `run_templates` スクリプトを参照し、パラメーターが正しく指定されていることを確認します。このスクリプトは、`install_image/wbi` ディレクトリーに格納されています。
2. 応答ファイルを参照し、オプションの値が正しく指定されていることを確認します。この値を正しく指定しないと、`Installation Manager` プログラムで値を読み取ることができません。誤った指定は、インストール・ウィザードのサイレント・インターフェースに影響を及ぼします。例えば、大/小文字の区別があるプロパティ名では、常に大/小文字の誤りのないようにしてください。また、値は常に二重引用符で囲みます。オプション値が正しくないというエラーの場合、`Installation Manager` プログラムには確認を要求する警告メッセージが表示され、インストールは停止します。
3. 応答ファイルを、製品に同梱される `template_response.xml` ファイル・テンプレートと比較し、必要な修正を行います。このファイルは、`install_image/wbi` ディレクトリーにあります。ファイルの修正後に、再インストールします。
4. 『メッセージ: インストールおよびプロファイルの作成と拡張』に記載されている、よくあるエラー・メッセージを確認します。
5. ログ・ファイルを調べます。『インストールとプロファイル作成のログ・ファイル』リストされている該当するログ・ファイルの説明を参照してください。
6. インストールのトラブルシューティングに関するその他のヒントについては、『インストールのトラブルシューティング』を参照してください。
7. プロファイルが正常に作成されていなかった場合は、『プロファイルの作成または拡張時の障害からのリカバリー』を参照してください。

失敗した Ant 構成スクリプトの診断

オペレーティング・システムに製品をインストールするときの問題が、`Apache Ant` 構成スクリプトの失敗に起因するかどうかを判別します。

始める前に

トラブルシューティング手順を参照して、インストールの問題の診断を開始します。『インストールおよび構成のトラブルシューティング』を参照してください。インストールが正常に完了した後、いくつかの `Ant` スクリプトが製品を構成します。以下では、`Ant` スクリプトに失敗したときに行う処理について説明します。インストール・ログに失敗が示されていない場合に、失敗した `Ant` 構成スクリプトの問題を訂正する方法について調べます。

このタスクについて

`install_root/logs/wbi/install/installconfig_server.log` ファイルが存在する場合は、そのファイルに `Ant` スクリプトの失敗が示されています。以下の構成スクリプトのうち、失敗したスクリプトがあるかどうかを判別します。ある場合は、構成スクリプトのリカバリー手順を使用します。調査アクションを使用して、`WebSphere Process Server` 製品の構成中に以下の構成スクリプトが正常に実行されたかどうかを手動で検証します。失敗したスクリプトがある場合は、リカバリー・アクションのステップを使用してそのスクリプトの機能を実行します。

失敗した Ant 構成スクリプトを診断するには、以下のステップを実行します。

手順

- 失敗した 90SConfigWBIMigrationScript.ant 構成スクリプトを診断します。このスクリプトは、スクリプト `install_root/bin/BPMMigrate` のアクセス権を 755 に変更します。また、このスクリプトは、`install_root/bin/BPMMigrate` スクリプト内の以下のトークンを置き換えます。

変更前:	変更後 (インストール中に選択した値):
<code>\${JAVAROOT}</code>	<code>install_root/java/jre/bin/java</code>
<code>\${MIGRATIONJAR}</code>	<code>install_root/bin/migration/migrationGUI/migrationGUI.jar</code>
<code>\${WASROOT}</code>	<code>install_root</code>
<code>\${PRODUCTID}</code>	<code>\${WS_CMT_PRODUCT_TYPE}</code>

- 調査アクション: 以下のディレクトリーの許可が 755 であることを確認します。
 - Linux UNIX `install_root/bin/BPMMigrate.sh`
 - Windows `install_root%bin%BPMMigrate.bat`
 - リカバリー・アクション: 次のコマンドを実行します。
 - Linux UNIX `chmod 755 install_root/bin/BPMMigrate.sh`
 - Windows `chmod 755 install_root%bin%BPMMigrate.bat`
 - 調査アクション: エディターで次のファイルを開き、以下の値の代わりに実際の値が存在することを確認します。`${JAVAROOT}`、`${MIGRATIONJAR}`、`${WASROOT}`、および `${PRODUCTID}`。
 - Linux UNIX `install_root/bin/BPMMigrate.sh`
 - Windows `install_root%bin%BPMMigrate.bat`
 - リカバリー・アクション: BPMMigrate スクリプト内で、以下のトークンを値に変更します。`${JAVAROOT}`、`${MIGRATIONJAR}`、`${WASROOT}`、および `${PRODUCTID}`。
 - Linux UNIX `install_root/firststeps/wbi/firststeps.sh`
 - Windows `install_root%firststeps%wbi%firststeps.bat`
- 失敗した 85SConfigNoProfileFirstStepsWBI.ant を診断します。このスクリプトにより、`install_root/properties/version/install.wbi/firststeps.wbi` ディレクトリーにあるすべてのファイルが `install_root/firststeps/wbi/html/noprofile` ディレクトリーにコピーされます。このスクリプトは、以下のファイル内の以下のトークンも置き換えます。
 - Linux UNIX `install_root/firststeps/wbi/firststeps.sh`
 - Windows `install_root%firststeps%wbi%firststeps.bat`

変更前:	変更後 (インストール中に選択した値):
<code>\${JAVAROOT}</code>	<code>install_root/java/jre/bin/java</code>
<code>\${PROFILEROOT}</code>	<code>install_root</code>
<code>\${HTMLSHELLJAR}</code>	<code>install_root/lib/htmlshellwbi.jar</code>

変更前:	変更後 (インストール中に選択した値):
<code>\${CELLNAME}</code>	<code>\${WS_CMT_CELL_NAME}</code>

1. 調査アクション: `install_root/properties/version/install.wbi/firststeps.wbi` ディレクトリーにあったすべてのファイルが `install_root/firststeps/wbi/html/noprofile` ディレクトリーにコピーされていることを確認します。
2. リカバリー・アクション: `install_root/properties/version/install.wbi/firststeps.wbi` ディレクトリーにあるすべてのファイルを `install_root/firststeps/wbi/html/noprofile` ディレクトリーにコピーします。
3. 調査アクション: エディターで `install_root/firststeps/wbi/firststeps` スクリプトを開きます。値 `${JAVAROOT}`、`${PROFILERROOT}`、`${HTMLSHELLJAR}`、および `${CELLNAME}` の代わりに実際の値が存在することを確認します。
4. リカバリー・アクション: `install_root/firststeps/wbi/firststeps` スクリプト内で、以下のトークンを値に変更します。`${JAVAROOT}`、`${PROFILERROOT}`、`${HTMLSHELLJAR}`、および `${CELLNAME}`。

タスクの結果

この手順に示す修正アクションを実行してインストール・エラーおよび Ant スクリプトの構成エラーをすべて訂正すると、インストールが完了します。

次のタスク

ファースト・ステップ・コンソールを開始します。

プロファイルの作成または拡張時の障害からのリカバリー

プロファイル管理ツールでは、プロファイルの新規作成時、または既存プロファイルの拡張時に障害が発生する場合があります。 `manageprofiles` コマンド行ユーティリティーの使用時にも同じことが起こる場合があります。このような障害が発生した場合は、このトピックで説明するように、最初にログ・ファイルを調べてから、その状況に応じて、以下のリカバリー手順に従ってください。

ログ・ファイル

`manageprofiles` コマンドに関するログ・ファイルはすべて、 `install_root/logs/manageprofiles` ディレクトリーに格納されます。示されている順序で、次のログ・ファイルを参照します。各ログ・ファイルには、「INSTCONFSUCCESS」というエントリーが含まれていなければなりません。ファイルにこのエントリーが含まれていない場合、障害が検出されています。ログ・ファイルに目を通して、障害が発生した理由を確認し、その対応策を調べてください。

1. ログ・ファイル `profile_name_create_error.log` (`profile_name` はプロファイルの名前)。

注: 新規プロファイルを作成し、既存のプロファイルを拡張しなかった場合のみ、このファイルを調べます。

- **Linux** **UNIX** `install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create_error.log`
- **Windows** `install_root¥logs¥wbi¥ update¥ profile_name_create_error.log`

このログ・ファイルで「Configuration action succeeded」または「Configuration action failed」というテキストを探します。

注: 「Configuration action failed」は、複数出力されていることがあります。それぞれの障害を調査し修正します。プロファイルが作成されている場合は、以下のオプションで説明するログ・ファイルも確認してください。

注: その他の情報を得るには、manageprofiles ディレクトリーの pmt.log というログ・ファイルを参照します。このファイルには、プロファイル管理ツールによる完全インストールの実行中にデフォルト・プロファイルが作成されたとき発生する、すべてのイベントが記録されます。

2. ログ・ファイル `profile_name_augment_error.log` (`profile_name` は、プロファイルの名前)。

このログ・ファイルは以下のディレクトリーにあります。

- **Linux** **UNIX** `install_root/logs/manageprofiles/profile_name_augment_error.log`
- **Windows** `install_root¥logs¥wbi¥ update¥ profile_name_augment_error.log`

このログ・ファイルで「Configuration action succeeded」または「Configuration action failed」というテキストを探します。

注: 「Configuration action failed」は、複数出力されていることがあります。それぞれの障害を調査し修正します。プロファイルが作成されている場合は、以下のオプションで説明するログ・ファイルも確認してください。

注: インストール中に作成したプロファイルの状況を確認する場合は、以下のコマンドを実行してください。

- **Linux** **UNIX** `install_root/bin/logProfileErrors.sh`
- **Windows** `install_root¥bin¥logProfileErrors.bat`

3. 個々のプロファイル・テンプレート・アクション・ログ・ファイル。

これ以前のステップで説明したログ・ファイルで不適切な値が見つかった場合は、以下のディレクトリーにあるログ・ファイルを調べてください。

- **Linux** **UNIX** `install_root/logs/manageprofiles/profile_name` (Linux および UNIX システムの場合)
- **Windows** `install_root¥logs¥manageprofiles¥profile_name` (Windows システムの場合)

`profile_root` または `user_data_root` は、プロファイルのインストール・ロケーションを表します。

これらのログ・ファイルは一貫性のある命名規則に従っていませんが、通常は失敗した Apache Ant スクリプト名の後に `.log` が続く名前になっています。例えば、`profile_name_augment.log` ファイルに次のエントリーがあるものとします。

```
<messages>Result of executing
E:¥00536.15¥profileTemplates¥default.wbicore¥actions¥saveParamsWbiCore.ant
was:false</messages>
```

最初に、`install_root/logs/manageprofiles` ディレクトリーの `profile_name_augment.log` ファイル内で周囲のエントリーを調べます。周囲のエントリーから障害の原因を判別できない場合は、障害が発生している Ant スクリプトのエントリーに対応するログ・ファイルを探してください。この例では、`saveParamsWbiCore.ant` スクリプトによって作成されたログ・ファイルは `saveParamsWbiCore.ant.log` です。このファイルに目を通して、障害が発生した理由を詳しく調べます。

作成時の障害のリカバリー

プロファイル作成で障害が発生した理由を判別して、その障害の原因に対処した後、プロファイルの作成を再度実行することができます。

注: プロファイルを作成する場合は、最初に WebSphere Application Server プロファイルを作成し、次に WebSphere Process Server プロファイル・テンプレートを使用してこれを拡張して、WebSphere Process Server プロファイルを作成します。プロファイルの作成で障害が発生しても、必要とされる拡張の一部を含んでいないプロファイルとして存続可能です。

プロファイルが存在しているかどうかを判別するには、`install_root/bin/manageprofiles -listProfiles` コマンドを実行してください。作成時に使用したプロファイル名が存在しない場合は、そのプロファイルを再作成することができます。作成時に使用したプロファイル名が存在する場合は、そのプロファイルは作成されており、拡張時の障害が発生しています。拡張時の障害からのリカバリーのヒントについては、『拡張時の障害のリカバリー』を参照してください。

拡張時の障害のリカバリー

プロファイルの拡張で障害が発生した理由を判別し、その障害の原因に対処した後、以下の手順を実行すると、既存のプロファイルを再度拡張して、完全な WebSphere Process Server プロファイルを正常に作成することができます。

1. プロファイル管理ツールを開始して、プロファイルの新規作成ではなく既存プロファイルの拡張を選択します。
2. 処理を行ったプロファイルを選択して、そのプロファイルに正しい情報を入力します。

注: プロファイル管理ツールを初めて実行したときに、一部の拡張は正常に完了している場合があります。このため、最初にプロファイルを作成しようとしたときには表示されたパネルすべてが表示されない場合があります。これは、プロファイル管理ツールが残りのどの拡張を完了すべきかを検出して、必要なパネルのみを表示するためです。

Business Process Choreographer 構成のトラブルシューティング

Business Process Choreographer の構成に関連する問題の解決方法については、WebSphere Process Server for Multiplatforms バージョン 7.0 インフォメーション・センターにアクセスし、『**WebSphere Process Server のインストール**』>『**インストールおよび構成のトラブルシューティング**』>『**Business Process Choreographer 構成のトラブルシューティング**』のトピックを参照してください。この情報は *Business Process Choreographer PDF* でも検索できます。

第 11 章 WebSphere Process Server の構成

WebSphere Process Server をインストールしたら、追加の構成タスクを完了して、ランタイム環境を完全に準備する必要があります。

関連情報

 PDF 資料

WebSphere Process Server 資料 (PDF 形式)

 情報ロードマップ

IBM が提供する Business Process Management 情報ロードマップには、WebSphere Process Server、WebSphere ESB、およびその他の製品に関する情報がポートフォリオに編成されています。

 IBM Education Assistant

IBM Education Assistant により提供される WebSphere Process Server に関するマルチメディア教育モジュール。

 技術情報

WebSphere Process Server サポート > インストール。WebSphere Process Server 製品のインストールについて不明な点がある場合は、このリソースを参照して、製品のインストールからセットアップまで行うことができます。

 概要

製品ライブラリー Web ページの「Overview」タブ。このページを使用して、WebSphere ESB に関連した発表、データ・シート、およびその他の一般ライブラリー資料にアクセスします。

共通の構成

WebSphere Process Server を使用して作成可能な共通の構成がいくつかあります。

複数の異なるパターン をサポートできるスタンドアロン構成または Network Deployment 構成を作成できます。

スタンドアロン構成と Network Deployment 構成の違い

WebSphere Process Server を構成する際には、スタンドアロン構成を使用するか Network Deployment 構成を使用するかを選択できます。

スタンドアロン構成の場合は、プロファイル管理ツールまたは manageprofiles コマンド行ユーティリティーを使用して、プロファイルの作成時にすべてのコンポーネントを構成できます。

プロファイル管理ツールを使用してスタンドアロン構成を作成すると、単一のノード上に単一の JVM が暗黙的に作成されます。

Network Deployment 環境の場合は、デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成してから、(単一のサーバーではなく) 単一のクラスターまたは複数のクラスター上でコンポーネントを構成します。

管理コンソールを使用して、専用のコンソール・ページから Network Deployment 構成のコンポーネントを構成するか、またはデプロイメント環境ウィザードを使用することができます。さらに、個々の管理コマンドを含むスクリプトを使用して、Network Deployment 環境のコンポーネントを構成することもできます。

以下の表に、スタンドアロン構成と Network Deployment 構成の違いを具体的に説明します。

表 39. スタンドアロン構成と Network Deployment 構成の違い：

以下の表で、WebSphere Application Server for z/OS のスタンドアロン・セルと Network Deployment セルの違いを説明します。

	スタンドアロン・セル	Network Deployment セル
構成:	プロファイル管理ツールを使用して、各スタンドアロン・サーバー・ノードをセットアップする。管理コンソールまたはスクリプトを使用して、ノード内に追加サーバーをセットアップする。	プロファイル管理ツールを使用して、各デプロイメント・マネージャー・ノードをセットアップする。プロファイル管理ツールを使用して、アプリケーション・サーバー・ノードを Network Deployment セルに追加する。
管理上の分離:	各スタンドアロン・サーバー・ノードは、それぞれ個別の管理可能ドメインとなる。	セル内のすべてのノードが同じ管理可能ドメインに属し、デプロイメント・マネージャー・サーバーによって管理される。
運用上の分離:	サーバーの開始と停止を単独に実行できる。各サーバーには、単独の非共有 JNDI 名前空間がある。	サーバーの開始と停止を単独に実行できる。JNDI 名前空間はセル内のすべてのサーバー間で共有される。
クラスター化が可能かどうか	いいえ	はい

関連タスク

プロファイルの作成

新しい WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルまたは WebSphere Process Server プロファイルの作成は、プロファイル管理ツールのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) を使用して対話式に行うことも、コマンド行から `manageprofiles` コマンド行ユーティリティを使用して行うこともできます。

デプロイメント環境の作成

デプロイメント環境をセットアップするには、デプロイメント環境定義を作成してから、環境を生成する必要があります。

Network Deployment 構成の作成

Network Deployment 構成を作成するには、WebSphere Process Server をインストールし、適切なプロファイルを作成し、デプロイメント環境を構成します。

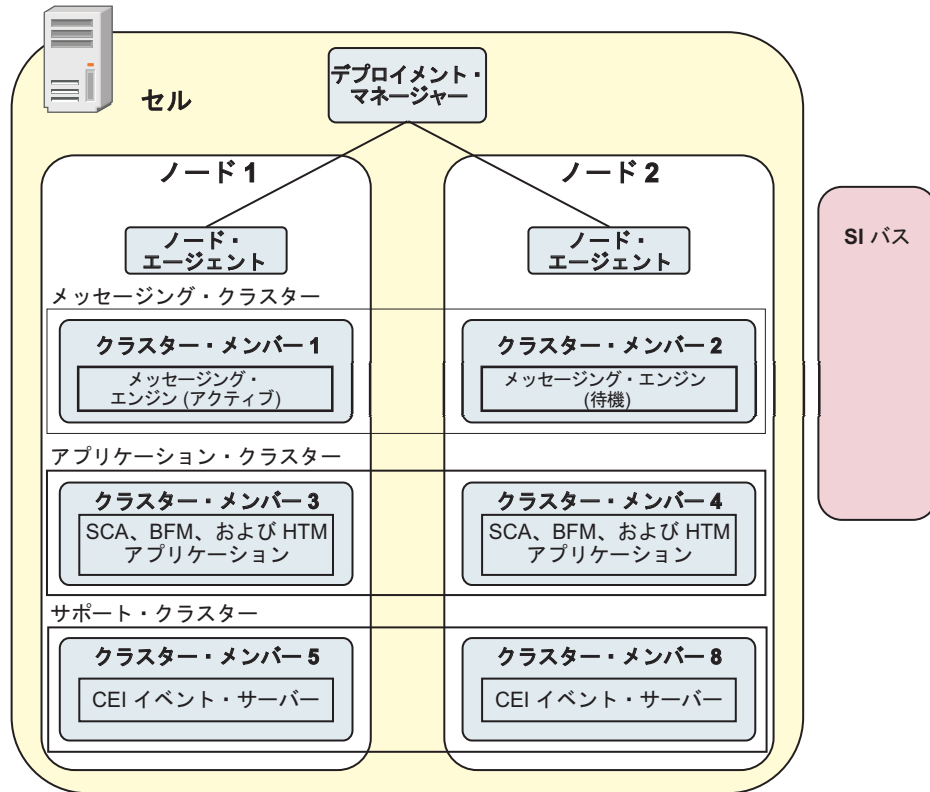
デプロイメント環境を構成するための手順には、作成しようとする構成のタイプと作成する方法に固有のオプションが、数多く含まれています。WebSphere Process Server では、Network Deployment 構成を作成する方法を柔軟に選択できるようになっています。

プロファイル作成時に決定した内容が、Network Deployment 構成作成のタスク・フロー (構成プロセスを通じた一連の手順とパス) に影響する可能性があります。

このトピックでは、Network Deployment 構成を作成するためのロードマップを示します。これは、Network Deployment 構成を作成するための唯一の方法というわけではありませんが、テストおよび検証がすでに実施された方法を表しています。このトピックで説明されているプロセスでは、「リモート・メッセージングおよびリモート・サポート」という提供されているパターン・タイプに基づくトポロジーを前提としています。

「リモート・メッセージングおよびリモート・サポート」は、Network Deployment 構成の標準のトポロジーです。このトポロジーは、一部の資料ではゴールド・トポロジーとも呼ばれています。「リモート・メッセージングおよびリモート・サポート」は、スケーラブル (変化するビジネス上の要求に適合するようにトポロジーを拡張可能) であるため、WebSphere Process Server の実稼働環境の推奨トポロジーです。また、WebSphere Process Server 内の個別の機能が、それぞれ 3 つのクラスター間で分割されるため、かなり容易にパフォーマンス上のボトルネックを特定してクラスター・サイズを調整することができます。

次の図に、Network Deployment 構成用「リモート・メッセージングおよびリモート・サポート」トポロジー・パターンの論理コンポーネントを示します。使用されている用語の定義は、図の後に示します。



図中の用語の定義を以下に示します。

セル セルは、WebSphere Process Server 分散ネットワーク内の 1 つ以上のノードの論理グループです。

セルは、構成概念の 1 つであり、管理者がノードを論理的に相互に関連付けるための手段です。管理者は、組織環境内で意味のある特定の基準に従って、セルを構成するノードを定義します。

デプロイメント・マネージャー

デプロイメント・マネージャーとは、他のサーバーの論理グループ (セル) の操作を管理するサーバーです。デプロイメント・マネージャーは、サーバーおよびクラスターを管理するための中央の場所になっています。

管理者は、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールを使用して、セル内のサーバーおよびクラスターを管理します。デプロイメント・マネージャーから実行されるアクティビティには、以下のものがあります。

- サーバーおよびクラスターの構成
- クラスターへのサーバーの追加
- サーバーおよびクラスターの開始および停止
- サーバーおよびクラスターへの Service Component Architecture (SCA) モジュールのデプロイ

いくつかの異なる方法で、インストール後にデプロイメント・マネージャーを作成できます。

ノード ノードは、管理対象サーバーの論理グループです。通常、ノードは、個別の IP ホスト・アドレスを持つ論理的または物理的なコンピューター・システムです。

ノードは、複数のコンピューターにまたがって存在することはできません。通常、ノード名は、コンピューターのホスト名と同じです。Network Deployment トポロジー内のノードは、管理対象ノードにすることも、非管理対象ノードにすることもできます。管理対象ノードには、構成およびサーバーを管理するノード・エージェント・プロセスがあります。非管理対象ノードには、ノード・エージェントがありません。

ノード・エージェント

ノード・エージェントは、管理要求をサーバーに経路指定する管理エージェントです。

ノード・エージェントは、Network Deployment 構成に関与するすべてのホスト・コンピューター・システムで実行されるサーバーです。

クラスター

クラスターは、まとめて管理され、ワークロード管理に関与するサーバーのグループです。

クラスターには、ノードまたは個々のアプリケーション・サーバーを組み込むことができます。

特定の目的のためにクラスターを作成できます。上記のトポロジー図には、3 つのクラスターがあり、それぞれに専用の機能およびアプリケーションがあります。「リモート・メッセージングおよびリモート・サポート」トポロジー・パターンには、少なくとも 3 つのクラスターが含まれます。

- アプリケーションは、すべてアプリケーション・クラスターにデプロイされます。

Business Process Choreographer がアプリケーション・クラスター内で構成されるため、各クラスター・メンバーには、ビジネス・プロセス・コンテナおよびヒューマン・タスク・コンテナがあります。

- メッセージング・クラスターは、以下の 4 つの必須 WebSphere Process Server パス (SI パス) すべてのメンバーになっています。
 - SCA.SYSTEM
 - SCA.APPLICATION
 - CEI
 - BPC
- サポート・クラスターは、以下のようなサポート・インフラストラクチャー・アプリケーションのすべてを構成するクラスターです。
 - Business Process Choreographer ツール (Business Process Choreographer Explorer および Explorer のレポート作成機能)
 - ビジネス・ルール・マネージャー
 - Common Event Infrastructure (CEI)
 - Business Space

クラスター・メンバー

オブジェクト (アプリケーション・サーバーなど) の同一構成のコピー。クラスター・メンバーは、例えば水平スケーリングおよび垂直スケーリングのサポートなど、ワークロード管理の目的で使用できます。

このトピックの説明では、Network Deployment 環境を作成するプロセスでの特定のパスの使用を前提とするだけでなく、プロファイル管理ツール (PMT) および「デプロイメント環境構成」ウィザードが提供する特定のオプションが選択されていることも前提としています。

以降のセクションでは、Network Deployment 環境を作成する構成プロセスでの特定のパスを示します。各セクションの説明で、どのパスを採用し、どのオプションを選択するかを明示的に示していますが、インフォメーション・センター内の、すべての使用可能な選択肢とオプションについて説明する既存のトピックへの参照も含まれています。インフォメーション・センター内の既存のトピックへのリンクは、このトピックの関連情報セクションにあります。

関連概念

150 ページの『プロファイル、ノード、サーバー、ホスト、およびセルの命名の考慮事項』

このトピックでは、プロファイル、ノード、サーバー、ホスト、およびセル (該当する場合) を命名する際に考慮しなければならない予約語および問題について説明します。

WebSphere Process Server のインストール - Network Deployment 構成の前提

このトピックで説明する Network Deployment 構成タスク・フローでは、インストールのタイプに関していくつかの前提事項があります。

始める前に

Network Deployment 構成は、「リモート・メッセージングおよびリモート・サポート」パターンに基づいています。インフォメーション・センターの『計画』セクションで、「リモート・メッセージングおよびリモート・サポート」トポロジーの説明を参照してください。

「リモート・メッセージングおよびリモート・サポート」トポロジーは、WebSphere Process Server インフォメーション・センターの外部のさまざまな情報リソースで「ゴールド・トポロジー」と呼ばれている場合があることに注意してください。

このタスクについて

WebSphere Process Server インストール手順は、『ソフトウェアのインストール』のセクションで詳細に説明されています。

ユーザーが、ソフトウェアをインストールするさまざまな方法について読んで認識しており、自分のニーズとスキル・セットに最適な方法を既に選択していることを前提とします。

また、ユーザーが、製品をインストールする前に手動で共通データベースは作成しておらず、プロファイルの作成時に共通データベースを作成する予定であることを前提とします。

手順

1. 『インストールの概要 (Installation overview)』で説明されているように、システム上にインストール・ファイルを配置する方法を決定します。
2. 『インストールの概要 (Installation overview)』のシナリオで説明されているように、選択した方法を使用して、システム上にファイルまたはインストール・イメージを配置します。
3. Installation Manager を使用してインストールを完了します。

次のタスク

WebSphere Process Server のインストール後は、プロファイル作成プロセスを計画した上で、Network Deployment 構成に適したプロファイルを作成する必要があります。

プロファイルの作成方法および Network Deployment 構成用共通データベースの作成方法の決定

WebSphere Process Server は、プロファイルの作成および WebSphere Process Server が使用する共通データベースの作成について、いくつかの異なる方法をサポートします。

デプロイメント・マネージャー・プロファイル構成を作成する方法としてサポートされるのは、以下の方法です。

- プロファイル管理ツールを使用して、以下のプロファイルを作成する。
 - 拡張デプロイメント・マネージャー・プロファイル
 - 標準的なデプロイメント・マネージャー・プロファイル
 - デプロイメント環境のデプロイメント・マネージャー・プロファイル
- 管理対象プロファイル・コマンドを使用して、デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成する。

Network Deployment 構成で共通データベースを作成する方法としてサポートされるのは、以下の方法です。

- 製品のインストール前に共通データベースを作成する。

組織において、DBA 特権を持つユーザーがデータベースを作成する必要がある場合は、プロファイルを作成または拡張する前に、そのユーザーが共通データベースを作成する必要があります。

ユーザーがスクリプトを使用してデータベースを作成および構成するためには、ユーザーまたはデータベース管理者が事前にスクリプトをカスタマイズしておく必要があります。

- データベース設計ツール (DDT) を使用してデータベース設計ファイルを作成する。

DDT では、ユーザー指定のプロパティ・ファイルまたは対話式のユーザー入力に基づいて設計ファイルが生成されます。生成された設計ファイルは、その後に DDT がデータベース・スクリプトを作成するのに使用されます。プロファイル作成時にデータベース設計をインポートすると、プロファイル作成プロセスのデータベース構成部分を簡略化することができます。詳しくは、インフォメーション・センターの『構成』セクション内の『データベース設計ツールを使用したデータベース設計ファイルの作成』を参照してください。

- 製品のインストール直後に共通データベースを作成する。

WebSphere Process Server では、共通データベースを作成するためのスクリプトを保持するディレクトリーが作成されます。WebSphere Process Server のインストール後に、そのディレクトリーに移動して、手動でスクリプトを実行することができます。

ユーザーがスクリプトを使用してデータベースを作成および構成するためには、ユーザーまたはデータベース管理者が事前にスクリプトをカスタマイズしておく必要があります。

- プロファイル作成の一部として共通データベースおよびデータベース表を作成する。

プロファイル管理ツール (PMT) を使用して、デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成する場合、ツールは、共通データベースを作成し、自動的にデータベース表を作成するスクリプトを実行することができます。

- プロファイル作成の一部として共通データベースを作成するが、データベース表を作成するスクリプトの実行は遅らせる。

プロファイル管理ツール (PMT) を使用して、デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成する場合、ツールによって共通データベースが作成されるが、自動的にデータベース表を作成するデータベース・スクリプトは実行されないように、パラメーターを設定することができます。

データベース・スクリプトの実行を遅らせることを選択した場合、PMT ツールはデータベース表を作成するスクリプトを実行せず、代わりに、必要なデータベース表を作成するためにユーザーまたはデータベース管理者が手動で実行する必要のあるスクリプトの生成のみを行います。

以下のセクションでは、プロファイル作成後までデータベース・スクリプトの実行を遅らせることを決定した場合の、プロファイル管理ツールを使用した拡張デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成について説明します。

Profile Management Tool を使用した拡張デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成

Profile Management Tool の「拡張」オプションを使用した WebSphere Process Server のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成と構成の方法について学習します。「拡張」オプションを選択すると、カスタマイズした構成設定でプロファイルが作成されます。

始める前に

システムにソフトウェアがインストールされていること。

制約事項:

- 64 ビット・アーキテクチャー (Linux on zSeries® プラットフォームは除く) 上の WebSphere Process Server インストール済み環境でプロファイルを作成または拡張するときは、プロファイル管理ツールを使用することはできません。その他の 64 ビット・アーキテクチャー上でプロファイルを作成するには、manageprofiles コマンド行ユーティリティーを使用できます。manageprofiles コマンド行ユーティリティーの使用について詳しくは、301 ページの『manageprofiles コマンド行ユーティリティーを使用したプロファイルの作成』を参照してください。32 ビットの WebSphere Process Server インストール済み環境を使用している場合は、これらのアーキテクチャー上でもプロファイル管理ツールを使用できます。
- **Vista** **Windows 7** **複数インスタンスを持つ非管理ユーザーの制約事項:**
WebSphere Process Server の複数インスタンスをルート・ユーザーとしてインストールし、それらのインスタンスのサブセットだけに非管理ユーザーのアクセス権限を与えた場合、プロファイル管理ツールはその非管理ユーザーに対して正しく機能しません。さらに、com.ibm.wsspi.profile.WSProfileException、つまりアクセス拒否メッセージが `install_root%bin%ProfileManagement%pmt.bat` ファイルに発生します。デフォルトでは、非管理ユーザーにはプログラム・ファイル・ディレクトリーに対するアクセス権限がありません。プログラム・ファイル・ディレクトリーは製品がデフォルトでインストールされる場所です。この問題を解決するには、非管理ユーザーが製品をインストールできるようにするか、他の製品インスタンスにアクセスする許可を得るかです。

Linux **UNIX** **Windows** プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、`java user.language` 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。次のコマンドを実行します。

- **Linux** **UNIX** `install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar`
- **Windows** `install_root%java%bin%java -Duser.language=locale install_root%bin%ProfileManagement%startup.jar`

例えば、Linux システム上でドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/  
bin/ProfileManagement/startup.jar
```

このタスクについて

このタスクでは、プロファイル管理ツールを使用した拡張デプロイメント環境プロファイルの作成方法について説明します。

手順

1. WebSphere Process Server プロファイル管理ツールを開始します。

以下のいずれかのコマンドを使用します。

- `Linux` `UNIX` `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh`
- `Windows` `install_root\bin\ProfileManagement\pmt.bat`

このツールを開始するためのその他の方法については、234 ページの『プロファイル管理ツールの開始』のトピックを参照してください。

「ようこそ」ページが表示されます。

2. 「ようこそ」ページで、「**プロファイル管理ツールの起動 (Launch Profile Management Tool)**」 ボタンまたは「**プロファイル管理ツール**」 タブをクリックします。

「プロファイル」タブが表示されます。

3. 「プロファイル」タブで、「**作成**」をクリックします。

「プロファイル」タブには、マシン上で作成されたプロファイルのリストが表示される場合があります。この手順では、既存のプロファイルを拡張するのではなく、新しいプロファイルを作成するものと想定しています。バージョン 7.0 の既存のプロファイルを拡張する場合は、356 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』のトピックを参照してください。

「環境の選択」ページが別ウィンドウで開きます。

4. 「環境の選択」ページで、「WebSphere Enterprise Service Bus」または「WebSphere Process Server」を展開し、作成するプロファイルのタイプを選択します。次に、「**次へ**」をクリックします。

WebSphere Application Server プロファイルもこのプロファイル管理ツールで作成できます。ただし、本書では、WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルまたは WebSphere Process Server プロファイルのみの作成を扱います。

「プロファイル作成オプション」ページが表示されます。

5. 「プロファイル作成オプション」ページで、「**拡張**」プロファイル作成の実行を選択し、「**次へ**」をクリックして「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページを表示します。

「**高度**」オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。

「**拡張**」オプションを選択することで、以下を実行できます。

- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- 共通データベースを構成します。
- 管理コンソールをデプロイします。
- 管理セキュリティーを使用可能にします。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権でサービスの作成が許可される場合は、サーバーの実行用のシステム・サービスを作成します。

- オプション: データベース設計ファイルを使用してデータベースを構成します。
6. 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで、作成するプロファイル環境に対して管理コンソールをデプロイするかどうかを選択した後、「次へ」をクリックします。

管理コンソールとは、サーバーを管理するための Web ベースのツールです。管理コンソールのデプロイを選択するには、「**管理コンソールのデプロイ (推奨)**」チェック・ボックスが選択されたままにしておきます。選択解除するには、チェック・ボックスのチェックを外します。

「プロファイル名およびロケーション」ページが表示されます。

7. 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
 - a. プロファイルに固有の名前とディレクトリー・パスを指定するか、またはデフォルト値を受け入れます。

作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。デフォルト名を使用しないことを選択した場合は、ディレクトリー名の長さ制限などのプロファイルの命名時に考慮する必要がある問題について、150 ページの『プロファイル、ノード、サーバー、ホスト、およびセルの命名の考慮事項』を参照してください。

指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトでは、このディレクトリーは以下のロケーションにあります。

- **Linux** **UNIX** `install_root/profiles/profile_name`

- **Windows** `install_root\profiles\profile_name`

ここで、`profile_name` は指定した名前です。以下の場合、エラー・メッセージが表示されます。

- 指定した `profile_name` が固有ではない。
 - 指定したディレクトリーが空ではない。
 - 使用しているユーザー ID に、このディレクトリーに対する十分な権限がない。
 - プロファイルを作成するための十分なスペースがない。
- b. 「**デフォルトにするプロファイル**」チェック・ボックスを選択して、作成するプロファイルをデフォルト・プロファイルにする (コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようにする) こともできます。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。

デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから実行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステ

ーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。詳しくは、158 ページの『複数プロファイル環境のプロファイル・コマンド』を参照してください。

- c. 「次へ」をクリックします。(「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このパネルで手動で名前を変更しなければならないことがあります。)

「ノード、ホスト、およびセルの名前」ページが表示されます。

8. 「ノード、ホスト、およびセルの名前」ページで、デプロイメント・マネージャーにノード、ホスト、およびセルの各名前を指定するか、またはデフォルト値を受け入れて「次へ」をクリックします。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。命名時に考慮する必要がある予約済みの用語やその他の問題については、150 ページの『プロファイル、ノード、サーバー、ホスト、およびセルの命名の考慮事項』を参照してください。

「管理セキュリティー」ページが表示されます。

9. オプションで、管理セキュリティーを有効にします。

管理セキュリティーをすぐに有効にすることも、後で管理コンソールから有効にすることもできます。管理セキュリティーをすぐに有効にするには、「**管理セキュリティーを使用可能にする**」チェック・ボックスを選択したままにし、管理コンソールにログオンするためのユーザー名およびパスワードを指定して、「次へ」をクリックします。管理セキュリティーを無効にするには、チェック・ボックスのチェックを外します。管理セキュリティーを後で管理コンソールから有効にするには、コンソールを開き、「**セキュリティー**」>「**ビジネス・インテグレーション・セキュリティー**」を選択してください。

「セキュリティー証明書 (第 1 部) (Security Certificate (Part 1))」ページが表示されます。

10. 「セキュリティー証明書 (第 1 部) (Security Certificate (Part 1))」ページで、デフォルトの個人証明書およびルート署名証明書を作成するか、個人証明書およびルート署名証明書を鍵ストア・ファイルからインポートして、「次へ」をクリックします。

両方の証明書を作成することも、両方の証明書をインポートすることも、一方の証明書を作成してもう一方の証明書をインポートすることもできます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。デフォルトの個人証明書またはルート署名証明書をインポートする場合は、パスとパスワードを指定し、インポートする証明書ごとに鍵ストア・タイプと鍵ストア別名を選択します。

「セキュリティー証明書 (第 2 部) (Security Certificate (Part 2))」ページが表示されます。

11. 「セキュリティ証明書 (第 2 部) (Security Certificate (Part 2))」 ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックします。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するか変更して、新しい証明書を作成できます。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower® 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。

インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。

証明書をインポートして、その証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認して、「次へ」をクリックします。

プロファイル管理ツールは、ほかの WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページ上から、管理コンソールをデプロイしないことを選択した場合、管理コンソール・ポートは「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」ページ上で使用できません。

以下の条件が満たされる場合、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーによって実行されたインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている場合。
- ポートが現在使用中の場合。

「ポート値の割り当て」ページにアクセスするときにはポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポート競合が疑われる場合、プロファイルの作成後に調査できます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

- **Linux** **UNIX** `profile_root/properties/portdef.props`
- **Windows** `profile_root\properties\portdef.props`

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、WebSphere Application Server Network Deployment インフォメーション・センターのトピック『Updating ports in an existing profile』を参照してください。このトピックで説明されている `ws_ant` スクリプトを使用して `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

次のステップは、ご使用のプラットフォーム、およびインストールを `root` (管理者) ユーザーで行っているか、非 `root` ユーザーで行っているかによって異なります。

インストール・タイプ	次のステップ
Linux または Windows プラットフォームで <code>root</code> または管理者グループ特権を持っている場合	「Linux または Windows サービスの定義 (Linux or Windows Service Definition)」ページが表示されます。ステップ 13 に進んでください。
それ以外のプラットフォームの場合、または Linux または Windows プラットフォームで非 <code>root</code> ユーザーとして実行している場合	「データベースの構成」ページが表示されます。ステップ 15 (192 ページ) に進んでください。

13. **Linux** **Windows** プロセスを Windows プラットフォーム上で Windows サービスとして実行するかどうか、または Linux プラットフォーム上で Linux サービスとして実行するかどうかを選択して、「次へ」をクリックします。

Windows Windows サービスをインストールする ID に管理者グループ特権が設定されている場合のみ、「Windows サービスの定義」ページが Windows プラットフォームに表示されます。プロファイルが Windows サービスとして構成されている場合、製品は、`startServer` または `startManager` コマンドによって開始されるプロセスに対応する Windows サービスを開始します。例えば、サーバーまたはデプロイメント・マネージャーを Windows サービスとして構成し、`startServer` または `startManager` コマンドを実行すると、`wasservice` コマンドは定義されたサービスを開始します。

重要: 指定のユーザー・アカウントとしてログオンする場合は、サービスを実行するユーザーのユーザー ID とパスワードを指定し、さらに開始タイプ (デフォルトは Manual) を指定する必要があります。ユーザー ID の名前にスペースを使用することはできません。また、この ID は管理者グループに属し、拡張ユーザー権限の「サービスとしてログオン」を持っている必要があります。ユーザー ID が管理者グループに属していて、まだ拡張ユーザー権限がない場合は、プロファイル管理ツールにより、ユーザー ID に拡張ユーザー権限が付与されます。

プロファイルの作成時に追加された Windows サービスをプロファイルの削除時に除去できます。

プロファイルを Windows サービスとして実行する場合の IPv6 に関する考慮事項

Windows サービスとして実行するように作成されたプロファイルは、このサービスがローカル・システムとして実行するように構成されている場合、IPv6 の使用時には開始できません。ユーザー固有の環境変数を作成して、IPv6 を使用可能にします。この環境変数はローカル・システム変数ではなくユーザー変数であるため、その特定のユーザーで実行される Windows サービスのみが、この環境変数にアクセスできます。新規プロファイルが Windows サービスとして実行するように作成および構成されている場合、デフォルトでは、サービスはローカル・システムとして実行するように設定されます。WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Bus の Windows サービスによって実行が試みられる場合、このサービスは IPv6 が指定されているユーザー環境変数にアクセスできないため、IPv4 として開始を試みます。この場合、サーバーは正常に始動しません。この問題を解決するには、プロファイルの作成時に、WebSphere Process Server or WebSphere Enterprise Bus の Windows サービスが、ローカル・システムの代わりに IPv6 が指定されている環境変数を定義したユーザー ID と同じユーザー ID で実行されることを指定します。

Linux 「Linux サービスの定義」 ページは、現在のオペレーティング・システムがサポート対象バージョンの Linux であり、現在のユーザーに適切な権限がある場合にのみ表示されます。

WebSphere Process Server によって、startManager または startManager コマンドで開始されたプロセス用の Linux サービスの開始が試みられます。例えば、サーバーまたはデプロイメント・マネージャーを Linux サービスとして構成し、startServer または startManager コマンドを実行すると、wasservice コマンドは定義されたサービスを開始します。

デフォルトでは、WebSphere Process Server は、Linux サービスとして実行するように選択されません。

このサービスを作成するためには、プロファイル管理ツールを実行するユーザーが root ユーザーでなければなりません。プロファイル管理ツールを root 以外のユーザー ID で実行している場合は、「Linux サービスの定義」 ページは表示されないため、サービスも作成されません。

サービスの実行に使用されるユーザー名を指定する必要があります。

Linux サービスを削除するためには、ユーザーが root ユーザーであるか、またはこのサービスを削除するための適切な特権を持っている必要があります。それ以外の場合は、root ユーザーがこのユーザーの代わりにサービスを削除するために実行できる除去スクリプトが作成されます。

14. オプション: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。このオプションは、拡張スタンドアロン・サーバーのプロファイルと拡張デプロイメント・マネージャーのプロファイルの両方で使用できます。
 - a. 「データベースを構成するときは、データベース設計ファイルを使用します」を選択します。
 - b. 「参照」をクリックします。
 - c. 設計ファイルの完全修飾パス名を指定します。
 - d. 「次へ」をクリックします。

設計ファイルを指定することを選択すると、プロファイル管理ツールのデータベース構成パネルはスキップされます。代わりに、データベースの構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。データベース構成用の設計ファイルの使用について詳しくは、510 ページの『データベース設計ツールを使用したデータベース設計ファイルの作成』を参照してください。

15. 「データベース構成」ページで、選択した製品コンポーネントで使用する共通データベースを構成します。

データベース設計ファイルをインポートしない場合、データベース構成パネルを使用してデータベースを構成する必要があります。

選択された WebSphere Process Server コンポーネントを操作するには、共通データベースと Common Event Infrastructure ローカル・データベースというデータベースが必要になります。「データベース構成」ページで指定した値を使用すると、プロファイル管理ツールは自動的に共通データベースおよびスタンドアロン・サーバー・プロファイル用の Common Event Infrastructure データベースをローカル・システム上に作成します。さらに、必要なテーブルもすべて作成されます。インストール済み環境で実際に作業するには、これらのデータベースを構成する必要があります。

以下の WebSphere Process Server コンポーネントは、共通データベースを使用します。

- Application Scheduler
- ビジネス・ルール・グループ
- メディエーション
- リカバリー
- リレーションシップ・サービス
- セレクター
- イベント順序付け (ロック・マネージャー)
- Enterprise Service Bus ロガー・メディエーション・プリミティブ
- メッセージング・エンジン (「メッセージング・エンジン (ME) でこのデータベースを使用する」を選択する場合)

Common Event Infrastructure コンポーネントは、Common Event Infrastructure データベースを使用します。

WebSphere Process Server 製品で使用される各種のデータベースおよびデータベース表について詳しくは、『データベースの選択』を参照してください。

重要: Derby Network Server または Derby Network Server 40 をデータベース製品として選択する場合、データベース・ホストがローカルの場合でも、サーバーがプロファイルの作成または拡張時に指定したホストとポートで稼働していることを確認してください。プロファイルを作成または拡張した後のみ、サーバーが実行中であることを確認できます。

- a. 「データベース製品の選択」フィールドで、使用するデータベース製品を選択するか、またはデフォルト値の Derby Embedded または Derby Embedded 40 (スタンドアロン・サーバー・プロファイル用)、あるいは Derby Network Server または Derby Network Server 40 (デプロイメント・マネージャー・プロファイル用) を受け入れます。

制約事項: Informix Dynamic Server、および Microsoft SQL Server は、デプロイメント環境構成を使用したデプロイメント・マネージャー上ではサポートされません。

- b. プロファイル作成または拡張プロセスで作成されるデータベース作成および構成用のスクリプトを、デフォルト・ロケーション以外の場所に格納するには、「生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーのオーバーライド」チェック・ボックスを選択して、「データベース・スクリプトの出力ディレクトリー」フィールドに新しいロケーションを指定します。プロファイル作成または拡張プロセスによって作成されるスクリプトをユーザーまたはデータベース管理者が手動で実行すると、新規データベースとそれに必要なテーブルを作成することができます (プロファイルの作成または拡張時にこれらを作成しなかった場合)。このプロセスでは、すべてのプロファイル・タイプに使用される共通データベース用のスクリプトと、スタンドアロン・サーバー・プロファイルに使用される Common Event Infrastructure データベース用のスクリプトが作成されます。

データベース用のデフォルト・ロケーションは以下のとおりです。

- Common Event Infrastructure データベースの場合:

```
- Linux UNIX install_root/profiles/profile  
name/dbscripts/CEI_ceiDbName
```

```
- Windows install_root%profiles%profile  
name%dbscripts%CEI_ceiDbName
```

- 共通データベースの場合:

```
- Linux UNIX install_root/profiles/profile  
name/dbscripts/CommonDB/dbType/dbName
```

```
- Windows install_root%profiles%profile  
name%dbscripts%CommonDB%dbType%dbName
```

「データベース・スクリプトの実行を遅延 (リモート・データベースを使用する場合は選択する必要がある)」を選択することにより、選択したデータベース製品におけるデータベースの自動的な作成と構成を行わないように設定できます。

- c. 共通データベース名を入力するか、またはデフォルト値を受け入れます。

独立補助ストレージ・プール (IASP: Independent Auxiliary Storage Pool) を使用する IBM i 上のデータベースの名前は、IASP という名前である可能性があります。

デフォルトの共通データベース名は、データベース製品に基づいて以下のよう異なります。

- *SYSBAS for DB2 for i5/OS (ツールボックス) および DB2 for iSeries® i (ツールボックス)
- WPRCSDB 他のすべてのデータベース製品用

既存のデータベースを使用する場合は、この名前がそのデータベースの名前と一致していなければなりません。新規データベースを作成する場合、指定した名前が既に別の WebSphere Process Server プロファイルに関連付けられていた場合は、異なるデータベース名を使用する必要があります。

注: この制限は、IBM i には適用されません。IBM i 上のすべてのプロファイルで同じデータベース名が使用されます。

注: Oracle データベース名 (dbName) は Oracle ID (SID) です。テーブルを作成する際は、このデータベース名が存在している必要があります。スタンドアロン・サーバー・プロファイルの作成時には、それを共通データベースと Common Event Infrastructure データベース間で共有することができます。新規プロファイルを作成する前に、すべての Oracle データベース・リソースを削除することをお勧めします。これは、Common Event Infrastructure データベースによってテーブル・スペースなどの固有のデータベース・リソースが作成されるため、そのデータベース・リソースが Oracle サーバーに既に存在すると障害が発生してしまうためです。

- d. 自動的にローカル・データベースが作成および構成されることも、プロファイルの作成または拡張時に既存のローカル・データベースに表が作成されることも望まない場合は、「データベース・スクリプトの実行を遅延 (リモート・データベースを使用する場合は選択する必要がある)」チェック・ボックスを選択します。このチェック・ボックスを選択しなかった場合は、ローカル・データベースが作成されます。

「データベース・スクリプトの実行を遅延 (リモート・データベースを使用する場合は選択する必要がある)」を選択した場合には、ユーザー自身またはデータベース管理者が、このページの「データベース・スクリプトの出力ディレクトリー」フィールドに指定されたロケーションにあるスクリプトを手動で実行する必要があります。

制約事項: 以下の構成の場合、「データベース・スクリプトの実行を遅延 (リモート・データベースを使用する場合は選択する必要がある)」オプションは選択できません。

- 任意のプロファイル・タイプに対して Derby Embedded、Derby Embedded 40、Derby Network Server、または Derby Network Server 40 製品を選択した場合。

- 「デプロイメント環境」オプションを使用して、デプロイメント・マネージャーを作成することを選択した場合。

WebSphere Process Server 製品で使用される各種のデータベースおよびデータベース表については、『データベースの選択』を参照してください。

重要: Derby Network Server または Derby Network Server 40 をデータベース製品として選択する場合、データベース・ホストがローカルの場合でも、サーバーがプロファイルの作成または拡張時に指定したホストとポートで稼働していることを確認してください。プロファイルを作成または拡張した後のみ、サーバーが実行中であることを確認できます。

手動によるデータベースの作成および構成手順については、以下のトピックを参照してください。

- 新規の共通データベースの作成、または既存のデータベース内のテーブルの作成については、492 ページの『プロファイルの作成後または拡張後の共通データベースとテーブルの作成』または 493 ページの『プロファイルの作成後または拡張後の共通データベースでのテーブルの作成』を参照してください。

重要: 以下のディレクトリーにある共通データベース・スクリプトは使用しないでください (変数の `db_type` は、サポートされるデータベース製品を表します)。

- **Linux** **UNIX** `install_root/dbscripts/CommonDB/db_type`
- **Windows** `install_root¥dbscripts¥CommonDB¥db_type`

これらのデフォルト・スクリプトは、プロファイル作成または拡張プロセスによって更新されていません。

制約事項: 以下の構成の場合、「データベース・スクリプトの実行を遅延 (リモート・データベースを使用する場合は選択する必要がある)」オプションは選択できません。

- 任意のプロファイル・タイプに対して Derby Embedded、Derby Embedded 40、Derby Network Server、または Derby Network Server 40 製品を選択した場合。
 - 「デプロイメント環境」オプションを使用して、デプロイメント・マネージャーを作成することを選択した場合。
- e. 「次へ」をクリックして、「データベース構成 (その 2)」ページを表示します。

そのページには、選択したデータベース製品に固有のフィールドが表示されます。そこで、データベース固有の情報の入力を求めるプロンプトが出されます。これに含まれるフィールドおよびデフォルト値は、選択したデータベース製品に応じて若干異なります。

「データベース構成」ページで、「データベース・スクリプトの実行を遅延」チェック・ボックスを選択して、新規データベースの作成または既存のデータベースへのテーブルの追加を先送りすることを選択する場合でも、こ

のページの入力を行う必要があります。「データベース構成 (その 2)」ページで選択した値は、前のページの「データベース・スクリプトの出力ディレクトリー」フィールドで指定したディレクトリー内 (別のロケーションを指定しなかった場合はこれらのスクリプトのデフォルト・ディレクトリー内) に格納されたデータベース構成スクリプトに追加されます。

制約事項: DB2 for z/OS V8 または V9、または Oracle を使用している場合は、新規データベースを作成できません。このような場合、共通データベースが存在していなければならず、スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合は、Common Event Infrastructure データベースも存在する必要があります。このいずれかのデータベースを選択した場合、警告メッセージが出されて、この制約事項について注意を促します。

「データベース構成 (その 2)」ページの入力が完了したら、「次へ」をクリックします。ツールにより、共通データベースへの有効な接続が存在することが確認されます。ツールでエラーが検出される場合は、データベースが稼働中であることを確認するか、接続を正常にするためにパラメーターを変更して、問題を訂正してから続行する必要があります。

Derby Embedded または Derby Embedded 40

以下の表に、Derby Embedded または Derby Embedded 40 をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (その 2)」ページで入力しておく必要があるフィールドを示します。

重要: データベース製品として Derby Embedded または Derby Embedded 40 を選択する場合は、プロファイルの作成または拡張が完了した後、データベース・ホストがローカルの場合でも、プロファイルの作成中に指定したホストおよびポート上でサーバーが稼働するようにしてください。

表 40. Derby Embedded または Derby Embedded 40 の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
スキーマ名 (Schema name)	データベース・スキーマ名を入力してください。デフォルトは APP です。

Derby Network Server または Derby Network Server 40

以下の表に、Derby Network Server または Derby Network Server 40 をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (その 2)」ページで入力しておく必要があるフィールドを示します。

重要: データベース製品として Derby Network Server または Derby Network Server 40 を選択した場合は、プロファイルの作成または拡張が完了した後、データベース・ホストがローカルの場合でも、プロファイルの作成中に指定したホストおよびポート上でサーバーが稼働するようにしてください。

表 41. Derby Network Server または Derby Network Server 40 の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 1527 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
スキーマ名 (Schema name)	データベース・スキーマ名を入力してください。デフォルトは APP です。

DB2 Universal Database

以下の表に、DB2 Universal Database をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (その 2)」ページで入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 42. DB2 Universal Database の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	デフォルト値 (Linux および UNIX プラットフォームの場合は <code>install_root/universalDriver_wbi/lib</code> 、Windows プラットフォームの場合は <code>install_root%universalDriver_wbi%lib</code>) を受け入れるか、またはシステム上で次のファイルが置かれている場所を参照します。 <ul style="list-style-type: none"> • db2jcc.jar • db2jcc_license_cu.jar または db2jcc_license_cisuz.jar 指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。

表 42. DB2 Universal Database の場合の必須のデータベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
サーバー・ポート	デフォルト値 50000 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
スキーマ名 (Schema name)	データベース・スキーマ名を入力してください。デフォルトは WPRCDB です。

DB2 データ・サーバー

以下の表に、DB2 データ・サーバーをデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (その 2)」ページで入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 43. DB2 データ・サーバーの場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリ)	デフォルト値 (Linux および UNIX プラットフォームの場合は <code>install_root/universalDriver_wbi/lib</code> 、Windows プラットフォームの場合は <code>install_root%universalDriver_wbi%lib</code>) を受け入れるか、またはシステム上で次のファイルが置かれている場所を参照します。 <ul style="list-style-type: none"> • <code>db2jcc.jar</code> • <code>db2jcc_license_cu.jar</code> または <code>db2jcc_license_cisuz.jar</code> 指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 <code>localhost</code> をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 50000 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
スキーマ名 (Schema name)	データベース・スキーマ名を入力してください。デフォルトは WPRCDB です。

DB2 for z/OS V8 および V9

以下の表に、DB2 for z/OS V8 および V9 をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (その 2)」ページで入力しておく必要があるフィールドを示します。これらのデータベースを使用して新規データベース

を作成することはできません。共通データベースが存在していなければならず、スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合は、Common Event Infrastructure データベースも存在する必要があります。

表 44. DB2 for z/OS V8 および V9 の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	以下のファイルが格納されているシステム上の場所を入力します。 <ul style="list-style-type: none"> • db2jcc.jar • db2jcc_license_cisuz.jar 指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	データベース・サーバーのホスト名を入力してください。
サーバー・ポート	デフォルト値 446 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
データベースの別名	データベースの別名を入力してください。
接続のロケーション	接続のロケーションを入力してください。
ストレージ・グループ名	ストレージ・グループ名を入力してください。

DB2 for i5/OS (ツールボックス) および DB2 for IBM i (ツールボックス)

以下の表に、DB2 for IBM i (ツールボックス) をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (その 2)」ページで入力しておく必要があるフィールドを示します。この選択は、DB2 for i5/OS (ツールボックス) の場合にも有効です。

表 45. DB2 for IBM i (ツールボックス) または DB2 for IBM i (ツールボックス) の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。

表 45. DB2 for IBM i (ツールボックス) または DB2 for IBM i (ツールボックス) の場合の必須のデータベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	デフォルト値 /QIBM/ProdData/HTTP/Public/jt400/lib を受け入れるか、またはシステム上で次のファイルが置かれている場所を参照します。 <ul style="list-style-type: none"> • jt400.jar 指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	データベース・サーバーのホスト名を入力してください。
データベース・コレクション名	デフォルト値 WPRCSDB をそのまま確定するか、正しいスキーマ名を入力します。指定したデータベース内で命名の競合を防止するために、スキーマ名を指定するときは、その先頭の 3 文字がデータベース内のその他のスキーマ名と重複しないようにしてください。

Informix Dynamic Server

以下の表に、Informix Dynamic Server をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (その 2)」ページで入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 46. Informix Dynamic Server の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベース・サーバーのインストール・ディレクトリー	Informix データベースを使用している場合、データベース・インストール・ディレクトリーを指示します。
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	以下のファイルが格納されているシステム上の場所を入力します。 <ul style="list-style-type: none"> • ifxjdbc.jar • ifxjdbcx.jar 指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。

表 46. Informix Dynamic Server の場合の必須のデータベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
サーバー・ポート	デフォルト値 1526 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
インスタンス名	正しいインスタンス名を入力してください。

Microsoft SQL Server (DataDirect) および Microsoft SQL Server (Microsoft)

以下の表に、Microsoft SQL Server (DataDirect) または Microsoft SQL Server (Microsoft) をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (その 2)」ページで入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 47. Microsoft SQL Server DataDirect および Microsoft SQL Server (Microsoft) の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
CEI データベース・ユーザー名	CEI データベース・ユーザー名を入力してください。
CEI データベース・パスワード	CEI データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
共通データベースのユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
共通データベースのパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	<p>以下のファイルが格納されているシステム上の場所を入力します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • sqlserver.jar • base.jar • util.jar <p>また、ファイル spy.jar が、JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーションに対する次の相対ロケーションで使用可能である必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • Linux UNIX ../spy/spy.jar • Windows ..%spy%spy.jar <p>指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。</p>
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
データベース・サーバー名	データベース・サーバー名を入力してください。

表 47. Microsoft SQL Server DataDirect および Microsoft SQL Server (Microsoft) の場合の必須のデータベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
サーバー・ポート	デフォルト値 1433 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
管理ユーザー名	データベースおよびユーザーの作成および除去の特権を持つユーザー ID を入力するか、デフォルト値「sa」を受け入れます。この ID は、前の画面で「データベース・スクリプトの実行の遅延」オプションを選択していない場合に必要になります。
パスワード	「管理ユーザー名」 ID ユーザーのパスワードを入力します。
パスワードの確認	パスワードを確認します。

Oracle

以下の表に、Oracle をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (その 2)」ページで入力しておく必要があるフィールドを示します。このデータベースを使用して新規データベースを作成することはできません。

重要: プロファイルを作成する前に、SYSDBA 特権のあるユーザー ID を取得している必要があります。

表 48. Oracle の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベース・サーバーのインストール・ディレクトリー	データベース・サーバーのインストール先を入力するか、または参照します。前の画面で、「データベース・スクリプトの実行の遅延」オプションを選択していない場合に必要になります。
Business Space データベースのユーザー名	Business Space データベースのユーザー ID。このオプションは、BSpace が使用可能な場合にのみ表示されます。
Business Space データベースのパスワード	Business Space データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
CEI データベース・ユーザー名	Common Event Infrastructure データベースのユーザー ID。
CEI データベース・パスワード	Common Event Infrastructure データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
共通データベースのユーザー名	共通データベースのユーザー ID。
パスワード	共通データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。

表 48. Oracle の場合の必須のデータベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	ファイル ojdbc6.jar が格納されているシステム上の場所を入力します。Oracle データベースにアクセスするには、ojdbc6.jar ドライバーをインストールする必要があります。 重要: Oracle 10g には、ojdbc6.jar ドライバーは含まれていません。このドライバーは Oracle の Web サイトからダウンロードできます。指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。
JDBC ドライバー・タイプ	OCI または Thin をクリックします。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 1521 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
システム管理者のユーザー名	データベースおよびユーザーの作成および除去の特権を持つユーザー ID を入力するか、デフォルト値「SYSUSER」を受け入れます。前の画面で、「データベース・スクリプトの実行の遅延」オプションを選択していない場合に必要になります。
パスワード	「管理ユーザー名」 ID ユーザーのパスワードを入力します。
パスワードの確認	パスワードを確認します。

最初の「データベース構成」画面で「メッセージング・エンジン (ME) でこのデータベースを使用する」を選択した場合、「データベース構成 (その 3)」ページが表示されます。以下の表に、入力する必要があるフィールドを示します。

表 49. Oracle をメッセージング・エンジンと共に使用するための必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
Business Process Choreographer メッセージング・エンジン	
ユーザー名	Business Process Choreographer メッセージング・エンジン・ユーザー ID を入力します。このオプションは、BPC が使用可能な場合にのみ表示されます。
パスワード	ユーザー ID のパスワードを入力します。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
CEI バス・メッセージング・エンジン	
ユーザー名	CEI バス・メッセージング・エンジン・ユーザー ID を入力します。

表 49. Oracle をメッセージング・エンジンと共に使用するための必須のデータベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
パスワード	ユーザー ID のパスワードを入力します。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
SCA アプリケーション・バス・メッセージング・エンジン	
ユーザー名	SCA アプリケーション・バス・メッセージング・エンジン・ユーザー ID を入力します。
パスワード	ユーザー ID のパスワードを入力します。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
SCA システム・バス・メッセージング・エンジン	
ユーザー名	SCA システム・バス・メッセージング・エンジン・ユーザー ID を入力します。
パスワード	ユーザー ID のパスワードを入力します。
パスワードの確認	パスワードを確認します。

- f. 「次へ」をクリックして、「プロファイルの要約」ページを表示します。
16. 「プロファイルの要約」ページで、「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
 17. 共通データベースを手動で構成する必要があるかどうかに応じて、以下のいずれかのタスクを実行し、プロファイル構成を完了します。
 - 手動で実行するスクリプトを作成することにより、データベースの構成は後で行われます。その場合は、以下のステップを実行します。
 - a. 「ファースト・ステップ・コンソールの起動」の横にあるチェック・ボックスをクリアし、「終了」をクリックしてプロファイル管理ツールを閉じます。また、別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページも閉じてください。
 - b. サイトの標準的なデータベース定義ツールと手順を使用して、プロファイル管理ツールにより生成されたスクリプトを編集して実行し、WPRCSDB データベース (または、システムで別の名前が設定されている場合はそれに相当するデータベース) を作成するか、または作成して構成する必要があります。

データベース・スクリプトのデフォルト・ロケーションは次のとおりです。

- Common Event Infrastructure データベースの場合:

- **Linux** **UNIX** `install_root/profiles/profile name/dbscripts/CEI_ceiDbName`

- **Windows** `install_root%profiles%profile name%dbscripts%CEI_ceiDbName`

- 共通データベースの場合:

- **Linux** **UNIX** `install_root/profiles/profile_name/dbscripts/CommonDB/dbType/dbName`
- **Windows** `install_root¥profiles¥profile_name¥dbscripts¥CommonDB¥dbType¥dbName`

新規の共通データベース作成または既存の共通データベースでのテーブル作成に関するタスクの説明については、『プロファイルの作成後または拡張後の共通データベースとテーブルの作成』も参照してください。

タスクの結果

デプロイメント・マネージャー・プロファイルが作成され、データベース構成スクリプトの実行により共通データベースとテーブルが作成されました。

次のタスク

デプロイメント・マネージャーの始動

デプロイメント・マネージャーの始動

デプロイメント・マネージャーはサーバー・プロセスです。デプロイメント・マネージャーの管理コンソールを使用してセルを管理する前に、そのデプロイメント・マネージャーを開始する必要があります。

始める前に

デプロイメント・マネージャー・プロファイルが作成済みであること。

このタスクについて

デプロイメント・マネージャーを開始および停止するには、以下のステップを実行します。

手順

1. 以下のいずれかのアクションを実行して、デプロイメント・マネージャーを開始します。
 - **Windows** 「スタート」メニューで「IBM WebSphere」 → 「Process Server 7.0」 → 「プロファイル」 → 「*profile_name*」 → 「デプロイメント・マネージャーの始動」の順に選択します。
 - ファースト・ステップ・コンソールで、「デプロイメント・マネージャーの始動」をクリックします。
 - `startManager` コマンドを使用します。
2. `install_root/profiles/profile_name/logs/server_name/startServer.log` ログ・ファイルに「サーバー *server_name* が e-business 用に開かれました。プロセス ID は *nnnn* です。」というメッセージが記録されていることを確認して、デプロイメント・マネージャーが正常に始動したことを確認します。

次のタスク

カスタム・プロファイルの作成

高度なカスタム・プロファイル (管理対象ノード) の作成

「拡張」オプションを選択すると、カスタマイズした構成設定でプロファイルが作成されます。

始める前に

デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成し、データベース構成スクリプトの実行により共通データベースとテーブルを作成済みであること。

デプロイメント・マネージャーが実行されていること。

このタスクについて

カスタム・プロファイルの構成中に、ポート、プロファイルのロケーション、プロファイル、ノード、ホスト、およびセル (該当する場合) の名前などの設定に、使用する環境の値を指定できます。ノードは、作成プロセス時に既存のデプロイメント・マネージャーに統合することも、後で `addNode` コマンドを使用して統合することもできます。

以下のステップを実行して、拡張カスタム・プロファイル (管理対象ノード) を作成します。

手順

1. WebSphere Process Server プロファイル管理ツールを開始します。

以下のいずれかのコマンドを使用します。

- `Linux` `UNIX` `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh`
- `Windows` `install_root%bin%ProfileManagement%pmt.bat`

「ようこそ」ページが表示されます。

2. 「ようこそ」ページで、「**プロファイル管理ツールの起動 (Launch Profile Management Tool)**」ボタンまたは「**プロファイル管理ツール**」タブをクリックします。

「プロファイル」タブが表示されます。

3. 「プロファイル」タブで、「**作成**」をクリックします。

「プロファイル」タブには、マシン上で作成されたプロファイルのリストが表示される場合があります。この手順では、既存のプロファイルを拡張するのではなく、新しいプロファイルを作成するものと想定しています。

「環境の選択」ページが別ウィンドウで開きます。

4. 「環境の選択」ページで、「**WebSphere Enterprise Service Bus**」または「**WebSphere Process Server**」を展開し、作成するプロファイルのタイプを選択します。その後、「**次へ**」をクリックします。

「プロファイル作成オプション」ページが表示されます。

5. 「プロファイル作成オプション」ページで、「**拡張**」プロファイル作成の実行を選択し、「**次へ**」をクリックして「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページを表示します。

「**高度**」オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。

「**拡張**」オプションを選択することで、以下を実行できます。

- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
 - 共通データベースを構成します。
 - 管理コンソールをデプロイします。
 - 管理セキュリティーを使用可能にします。
 - ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権でサービスの作成が許可される場合は、サーバーの実行用のシステム・サービスを作成します。
6. 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
 - a. プロファイルに固有の名前とディレクトリー・パスを指定するか、またはデフォルト値を受け入れます。

作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。

指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルト・ディレクトリーは、プラットフォームに依存しています。

- **Linux** **UNIX** `install_root/profiles/profile_name`
- **Windows** `install_root¥profiles¥profile_name`

ここで、`profile_name` は指定した名前です。以下の場合、エラー・メッセージが表示されます。

- 指定した `profile_name` が固有ではない。
 - 指定したディレクトリーが空ではない。
 - 使用しているユーザー ID に、このディレクトリーに対する十分な権限がない。
 - プロファイルを作成するための十分なスペースがない。
- b. 「**デフォルトにするプロファイル**」チェック・ボックスを選択して、作成するプロファイルをデフォルト・プロファイルにする (コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようにする) こともできます。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

マシンで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。

デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから実行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。マシン上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定

のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。詳しくは、158 ページの『複数プロファイル環境のプロファイル・コマンド』を参照してください。

プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出しますが、指定されたポートを使用する可能性がある他のアプリケーションのポートは検出しません。カスタム・プロファイルを統合すると、addNode コマンドは、競合しないポートを使用します。つまり、プロファイルを作成するにはデフォルトのポート割り当てを使用し、addNode コマンドでノードを統合する際に、競合しないポートを指定することができます。ポート割り当ては、サーバー上で固有でなければなりません。別のサーバーのサーバー・プロセスは、競合なしで同じポート割り当てを使用することができます。

- c. 「次へ」をクリックします。(「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このパネルで手動で名前を変更しなければならないことがあります。)

「ノード名およびホスト名」ページが表示されます。

7. 「ノード名およびホスト名」ページで、プロファイルにノード名およびホスト名を指定するか、またはデフォルト値を受け入れて「次へ」をクリックします。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。命名時に考慮する必要のある予約済みの用語やその他の問題については、150 ページの『プロファイル、ノード、サーバー、ホスト、およびセルの命名の考慮事項』を参照してください。

「フェデレーション (Federation)」ページが表示されます。

8. 「フェデレーション」ページで、「このノードを後でフェデレートする (Federate this node later)」チェック・ボックスを選択して、「次へ」をクリックします。

カスタム・プロファイルの作成後、addNode コマンドを使用してノードを統合します。

カスタム・プロファイル作成の一部としてノードを統合するかどうかの判断方法

重要:

以下の状況のいずれかに該当する場合は、プロファイルの拡張時にカスタム・ノードを統合しないでください。

- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がある。
- 別のプロファイルが統合されている (ノードの統合はシリアライズする必要があります)。
- デプロイメント・マネージャーが稼働していないか、実行しているかどうか不明。
- そのデプロイメント・マネージャーは、まだ WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャーに拡張されていない。

- デプロイメント・マネージャーが、作成するプロファイルと同じか、それより高いリリース・レベルではない。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっていない。
- デプロイメント・マネージャーが、優先 Java Management Extensions (JMX) コネクタとして、デフォルトでないリモート・メソッド呼び出し (RMI) を使用するように再構成されている。(優先コネクタ・タイプを確認するには、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールで「システム管理」>「デプロイメント・マネージャー」>「管理サービス」を選択します。)

カスタム・プロファイル作成の一部としてのノード統合に関連する処理

- プロファイル管理ツールによって、デプロイメント・マネージャーが存在し、通信が可能であること、および認証ユーザー ID とパスワードがそのデプロイメント・マネージャーに有効であること (デプロイメント・マネージャーがセキュリティーで保護されている場合) が検査されます。
- デプロイメント・マネージャーが実行中でないとき、またはほかの理由でデプロイメント・マネージャーを使用できないときに、カスタム・ノードを統合しようとする、警告ボックスが表示されて、続行できなくなります。この警告ボックスが表示されたら、「OK」をクリックしてこの警告パネルを終了し、「フェデレーション」ページで別の選択を行ってください。

「セキュリティー証明書 (第 1 部) (Security Certificate (Part 1))」ページが表示されます。

9. 「セキュリティー証明書 (第 1 部) (Security Certificate (Part 1))」ページで、デフォルトの個人証明書およびルート署名証明書を作成するか、個人証明書およびルート署名証明書を鍵ストア・ファイルからインポートして、「次へ」をクリックします。

両方の証明書を作成することも、両方の証明書をインポートすることも、一方の証明書を作成してもう一方の証明書をインポートすることもできます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。デフォルトの個人証明書またはルート署名証明書をインポートする場合は、パスとパスワードを指定し、インポートする証明書ごとに鍵ストア・タイプと鍵ストア別名を選択します。

「セキュリティー証明書 (第 2 部) (Security Certificate (Part 2))」ページが表示されます。

10. 証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックします。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するか変更して、新しい証明書を作成できます。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 など

の特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。

インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。

証明書をインポートして、その証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

次のステップは、プロファイル作成プロセスの一部としてプロファイルを統合することを選択したかどうかによって異なります。

カスタム・プロファイル作成の一部としてノードの統合を選択しなかった場合は、「データベース構成」ページが表示されます。

11. 「データベース構成」ページで、以下の手順を実行します。
 - a. データベース製品を確認します。このカスタム・プロファイルの統合先のデプロイメント・マネージャーで使用されているデータベースと一致するデータベースが表示されます。
 - b. データベースの JDBC ドライバー・クラス・パス・ファイルのロケーション (ディレクトリ) を指定します。Derby Network Server、Derby Network Server 40、または DB2 Universal Database の各デフォルト値を受け入れることができます。
 - c. 「次へ」をクリックします。

「プロファイルの要約」ページが表示されます。

12. 「プロファイルの要約」ページで、「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

プロファイルの作成が完了すると、「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページに「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に作成されました。」というメッセージが表示されます。

重要: プロファイルの作成中にエラーが検出された場合は、正常終了のメッセージの代わりに他のメッセージが表示される可能性があります。その例と意味は次のとおりです。

- 「プロファイル管理ツールによりプロファイルが作成されましたが、エラーが発生しました」: プロファイルの作成が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「プロファイル管理ツールでプロファイルを作成できません」: プロファイルの作成が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile complete)」ページには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。

13. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページの「ファースト・ステップ・コンソールを起動する」チェック・ボックスをクリアし、「終了」をクリックしてプロファイル管理ツールを閉じます。また、別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページも閉じてください。

次のタスク

実行したステップを繰り返して、ノード 2 に対して 2 番目のカスタム・プロファイルを作成します。

2 番目のカスタム・プロファイルの作成が完了したら、`addNode` コマンドを使用してノードを統合する必要があります。

ノードの統合

`addNode` コマンドを使用して、カスタム・ノードをデプロイメント・マネージャー・セルに統合できます。

始める前に

この手順を実行する前に、以下の前提条件を確認してください。

- WebSphere Process Server がインストール済みであり、WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャーと 2 つのカスタム・プロファイルが作成済みである。この手順では、カスタム・プロファイルの統合がその作成または拡張中に (プロファイル管理ツールまたは `manageprofiles` コマンド行ユーティリティーを使用して) 行われていないことが前提となっています。
- デプロイメント・マネージャーが稼働している。稼働していない場合は、ファースト・ステップ・コンソールから「デプロイメント・マネージャーの始動」を選択するか、または以下のコマンドを入力してデプロイメント・マネージャーを始動します。ここで、`profile_root` はデプロイメント・マネージャー・プロファイルのインストール場所を表します。

```
- Linux UNIX profile_root/bin/startManager.sh
```

```
- Windows profile_root%bin%startManager.bat
```

- デプロイメント・マネージャーが、WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャーに拡張されている。WebSphere Process Server プロファイルは WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャーを使用できませんが、WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルは WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャーを使用できます。
- デプロイメント・マネージャーのリリース・レベルが、作成または拡張されたカスタム・プロファイルと同じか、それより高い。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっている。デフォルト・プロトコルは SOAP です。
- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がない。

問題の回避: **Vista** **Windows 7** これらのオペレーティング・システムに製品をインストールする場合は、IPv6 を無効にしてマシンを再始動した後、管理コンソールを表示してログインを行う必要があります。IPv6 の無効化について詳しくは、『IPv6 for Microsoft® Windows®: Frequently Asked Questions』を参照してください。

このタスクについて

以下の説明に従って、addNode コマンドを使用して、カスタム・ノードの統合およびデプロイのプロセスを実行します。

前のタスクで作成したカスタム・ノード (プロファイル) のそれぞれについて、このコマンドを実行します。

手順

1. 統合するカスタム・プロファイルの bin ディレクトリーに移動します。コマンド・ウィンドウを開き、(コマンド行から) プラットフォームに応じて以下のディレクトリーのいずれかに移動します (ここで *profile_root* はカスタム・プロファイルのインストール・ロケーションを表します)。
 - **Linux** **UNIX** `profile_root/bin`
 - **Windows** `profile_root%bin`
2. addNode コマンドを実行します。

セキュリティが有効になっていない場合は、コマンド行から以下のいずれかのコマンドを発行します。

- **Linux** **UNIX** `./addNode.sh deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port`
- **Windows** `addNode.bat deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port`

セキュリティが使用可能である場合は、コマンド行から以下のいずれかのコマンドを発行します。

- **Linux** **UNIX** `./addNode.shdeployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port-usernameuserID_for_authentication-passwordpassword_for_authentication`
- **Windows** `addNode.batdeployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port-usernameuserID_for_authentication-passwordpassword_for_authentication`

出力ウィンドウが開きます。次のようなメッセージが表示されたら、カスタム・プロファイルは正常に統合されています。

```
ADMU00031: ノード DMNDID2Node03 は正常に統合されました。
(Node DMNDID2Node03 has been successfully federated.)
```

タスクの結果

これで、1 つのデプロイメント・マネージャーと 2 つのノードを持つセルの構成が完了しました。

次のタスク

これで、ご使用の ND 構成用のデプロイメント環境を作成する準備が整いました。

デプロイメント環境の作成

デプロイメント環境構成ウィザードを使用すると、「リモート・メッセージングおよびリモート・サポート」パターンに基づく Network Deployment パターンが作成されます。

始める前に

このタスクに必要なセキュリティー・ロール: セキュリティーおよびロール・ベースの許可が有効になっている場合、このタスクを実行するには、管理者またはオペレーターとして管理コンソールにログインする必要があります。

このタスクについて

このタスクは、特定のパターンに基づいたデプロイメント環境を作成し、「デプロイメント環境構成」ウィザードを使用します。

手順

1. 管理コンソールで「サーバー」 → 「デプロイメント環境」をクリックして、「デプロイメント環境」ページを表示します。
2. 「デプロイメント環境」ページで「新規」をクリックして、「デプロイメント環境構成」ウィザードを起動します。
 - a. 「パターンに基づくデプロイメント環境の作成」オプションが選択されています。「パターンに基づくデプロイメント環境の作成」はシステム・デフォルトであり、このトピックで説明するオプションです。

デプロイメント環境パターンを利用して、よく使用するビジネス・インテグレーション・トポロジーを記録します。パターンは、作成するデプロイメント環境のテンプレートを提供します。

注: パターンは、構成されたデプロイメント・マネージャーがサポートする製品と直接に関連しています。WebSphere Process Server は特定のパターン・セットをサポートします。その中の「リモート・メッセージングおよびリモート・サポート」パターンがシステム・デフォルトです。デプロイメント・マネージャーが WebSphere Process Server 以外の製品もサポートしている場合は、追加のパターンを適用できます。特定の製品に適用されるパターンについては、その製品固有の文書を参照してください。

WebSphere Process Server に組み込まれてサポートされているパターンのタイプについては、『計画』セクションの『トポロジー・タイプおよびデプロイメント環境パターン』を参照してください。

「カスタム・デプロイメント・トポロジーの詳細」ページを使用してカスタム・デプロイメント環境を構成する方法については、『カスタム・デプロイメント環境のレイアウト構成』を参照してください。

- b. 「**デプロイメント環境名**」フィールドに、デプロイメント環境の固有の名前を入力します。
- c. **オプション:** ウィザードですべての構成ステップを表示するには、「**詳細: すべてのステップを表示します**」を選択します。

「**ファースト・パス: 必要なステップのみを表示します**」を選択した場合は、ウィザードにはデフォルト値が割り当てられていないページのみが表示されます。「**ファースト・パス: 必要なステップのみを表示します**」は、デプロイメント環境構成でシステム提供のデフォルト値を受け入れることに同意する場合にのみ選択してください。

このトピックでは、「**詳細: すべてのステップを表示します**」を選択したものと想定します。

- d. 「**次へ**」をクリックして、「**デプロイメント環境フィーチャー (Deployment Environment Features)**」ページを表示します。
3. 「**デプロイメント環境フィーチャー**」ページでデプロイメント環境のフィーチャーを選択し、「**次へ**」をクリックして、互換性のあるフィーチャーのリストを表示するか、デプロイメント環境パターンのリストを表示します。フィーチャーはデプロイメント環境のランタイム処理機能を表します。

「**デプロイメント環境フィーチャー**」ページの使用可能なフィーチャーのリストは、デプロイメント・マネージャー・プロファイルに基づきます。デプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張して WebSphere Process Server と一緒に別の製品を組み込んだ場合 (WebSphere Business Monitor や WebSphere Business Services Fabric など)、「**デプロイメント環境フィーチャー**」ページにはこれらのフィーチャーもリストされます。

WebSphere Process Server のプロファイルをインストールして構成した場合、「**デプロイメント環境フィーチャー**」ページには以下が含まれます。

- **WESB.** WebSphere Enterprise Service Bus 用。メディエーションをサポートするデプロイメント環境を提供します。

- **WPS**。WebSphere Process Server 用。メディエーション、ビジネス・プロセス、ヒューマン・タスク、およびビジネス・ルールをサポートするデプロイメント環境を提供します。

デプロイメント環境フィーチャーのデフォルト値は、デプロイメント・マネージャーのランタイム機能に一致します。

4. 「互換性のあるデプロイメント環境フィーチャーの選択」 ページで必要に応じて追加のフィーチャーを選択し、「次へ」をクリックして、1 次フィーチャーおよび補助フィーチャーの選択に関連したパターンのリストを表示します。

注: 「互換性のあるデプロイメント環境フィーチャーの選択」 ページは、デプロイメント・マネージャーが他のビジネス・プロセス・マネジメント (BPM) フィーチャー (WebSphere Business Monitor など) で拡張されている場合にのみ表示されます。

フィーチャーと互換フィーチャーの関係を理解するには、『計画』セクションのデプロイメント環境に関する説明を参照してください。

5. 「デプロイメント環境パターンの選択 (Select the deployment environment pattern)」 ページで、選択したデプロイメント環境のパターンを選択し、「次へ」をクリックして「ノードの選択」 ページを表示します。

「デプロイメント環境パターン」 ページに表示されるパターンのリストは動的です。このリストは、以下の環境条件および構成に関する決定によってアクティブになるため、その内容はこれらの条件および決定に依存します。

- ソフトウェアをインストールしたプラットフォーム
- 「デプロイメント環境フィーチャーの選択」 ページおよび「互換性のあるデプロイメント環境フィーチャーの選択」 ページで行った選択

パターンからフィーチャーへについて詳しくは、『トポロジー・パターンおよびサポート対象の BPM 製品フィーチャー』を参照してください。

6. オプション: 「ノードの選択」 ページでこのデプロイメント環境に含めるノードを選択し、「次へ」をクリックして「クラスター」 ページを表示します。

デプロイメント環境用に少なくとも 1 つのノードを選択します。高可用性環境およびフェイルオーバー環境では、少なくとも 2 つのノードを選択します。スケーラビリティを実現するには、すべてのノードを選択します。

ノードを組み込むには、ノード名の隣にあるチェック・ボックスを選択します。「ノード・マッピング」を使用すると、選択したノードが別のノード名にマップされます。

7. オプション: 「クラスター」 ページで、デプロイメント環境のクラスター・タイプ (アプリケーション・デプロイメント・ターゲット、メッセージング・インフラストラクチャー、サポート・インフラストラクチャー) ごとに各ノードに必要な数のクラスター・メンバーを割り当てます。

デフォルトでは、機能ごとに各ノード上で 1 つのクラスター・メンバーが割り当てられます。この数を変更するには、各列の数値を置換します。それぞれの

クラスター・タイプで提供される各種のクラスター・ロールおよび機能について十分な知識がない場合は、『トポロジー・タイプおよびデプロイメント環境パターン』を参照してください。

ノードの値が 0 (ゼロ) の場合、選択したフィーチャーに関して、その選択した機能にノードが寄与しないことを意味します。

クラスター・メンバーを割り当てた後、「次へ」をクリックすると、デプロイメント環境のクラスター・タイプごとに「クラスター命名」ページを表示することができます。表示される「クラスター命名」サブステップは、選択したデプロイメント環境パターンによって異なります。

クラスター名およびクラスター・メンバー名のデフォルト値は、システムによって生成されます。

クラスター名またはクラスター・メンバー名をカスタマイズしない場合は、以下の手順で、ウィザード・ナビゲーション・ペインを使用して、直接、「REST サービス」ページに移動します。

それぞれのサブステップ・ページは、同じ構造であり、『クラスター名およびクラスター・メンバー名をカスタマイズします』で説明しています。

- a. オプション: クラスター名およびクラスター・メンバー名をカスタマイズします。

「クラスター命名」ページを使用して、クラスター・タイプのクラスター名またはクラスター・メンバー名をカスタマイズします。選択したパターンのクラスター・タイプごとに 1 つのサブステップ・ページがあります。例えば、「リモート・メッセージングおよびリモート・サポート」パターンを選択した場合は、3 つのサブステップがあります。すなわち、そのパターンのクラスター・タイプ (アプリケーション・デプロイメント・ターゲット、メッセージング・インフラストラクチャー、およびサポート・インフラストラクチャー) ごとに 1 つのサブステップがあります。

それぞれのサブステップ・ページの情報、以下のとおりです。

クラスター

クラスターの機能ロールを指定する読み取り専用フィールド。

値は、以下のようにクラスター・タイプによって異なります。

- アプリケーション・デプロイメントのターゲット
- サポート・インフラストラクチャー
- メッセージング・インフラストラクチャー

クラスター・タイプごとの機能ロールに関する情報については、トポロジーおよびデプロイメントの環境パターンを参照してください。

クラスター名

クラスター名のシステム生成デフォルト値が入ります。

デフォルト値は、<デプロイメント環境名>.<クラスター・タイプ名> という命名規則に従っています。ここで、クラスター・タイプ名は、以下のいずれかの値です。

- AppTarget

アプリケーション・デプロイメントのターゲットのロールを実行するクラスターの場合

- メッセージング

メッセージング・インフラストラクチャーのロールを実行するクラスターの場合

- サポート

サポート・インフラストラクチャーのロールを実行するクラスターの場合

- Web

サポート Web アプリケーションのロールを実行するクラスターの場合

注: このクラスター・タイプ名は、WebSphere Business Monitor が主なフィーチャーまたは製品である BPM 構成に適用されます。

クラスター・メンバー名

システム生成デフォルト値を受け入れるか、任意の名前を指定します。

クラスター・メンバー名のデフォルト値は、<クラスター名>.<ノード名>.<ノード番号シーケンス> という命名規則に従っています。

表に表示されるクラスター・メンバー名の数は、「クラスター」ページのクラスター・タイプ列およびノード行に入力したクラスター・メンバーの数と一致します。「クラスター」ページについては、前のステップを参照してください。

8. 「REST サービス」ページで、Representational State Transfer (REST) アプリケーション・プログラミング・インターフェース (API) のサービス・エンドポイントを構成します。

ウィジェットを Business Space で使用できるようにしたい場合は、それらのウィジェットについて REST サービス・エンドポイントを構成する必要があります。

- a. 「プロトコル」リストから「**https://**」または「**http://**」を選択することにより、すべての REST サービスのフル URL パスを構成します。
 - b. 「負荷分散環境でのホスト名または仮想ホスト」フィールドに名前を入力します。
 - c. 「ポート」フィールドに、クライアントがサーバーまたはクラスターと通信するために必要なポートを入力します。
 - d. REST サービス・エンドポイントの説明を変更する場合は、REST サービスの表の「説明」フィールドの項目を上書きします。その他のフィールドは読み取り専用です。
 - e. 「次へ」をクリックして、「データベース構成のインポート」ページに進みます。
9. オプション: 「データベース構成のインポート」ページで、「参照」をクリックしてデータベース設計文書に進むか、またはデータベース設計文書へのパスを

入力した後、「次へ」をクリックして、「データ・ソース」ページに進みます。設計文書は、データベース設計ツール (DDT) を使用して作成したデータベース設計に基づく設計文書にすることも、選択したパターンとフィーチャーに基づいて提供された設計文書にすることもできます。

注: プロファイルの作成時に作成された commonDB は、デプロイメント環境用にインポートされたデータベース設計文書によって変更されることはありません。

10. 条件付きオプション: 「データベース」ページでデプロイメント環境のデータ・ソースのデータベース・パラメーターを構成し、「次へ」をクリックして「セキュリティ」ページに移動します。

このページでは、このデプロイメント環境に組み込まれるコンポーネントのデータベース情報を定義します。該当するところには、ウィザードによってパラメーターのデフォルト情報が提供されていますが、その値を、環境の計画を立てたときに定義した値に一致するように変更します。

注: データベース設計文書をインポートしてある場合は、その文書に存在するデータ・ソース構成が「データベース」ページの情報に反映されます。

ファースト・パス・デプロイメント環境構成用にこのステップが表示されるかどうかは、条件に依存します。複数のデータベースが定義されている場合は、ファースト・パス・デプロイメント環境構成用にこのステップが表示されません。

DB2 for z/OS または Oracle データベース・プロバイダーを使用している場合には、このステップが常に表示されます。

このページに表示されるデフォルト・スキーマ名は、お客様のサイトの命名規則と矛盾したり、既存のスキーマと矛盾したりする場合があります。そのような場合は、スキーマ名の変更が必要になります。

Oracle データベースの考慮事項:

- Oracle の使用時にすべてのコンポーネントに対して 1 つの DBA ユーザー名とパスワードを指定したくない場合は、「**テーブルの作成**」をクリアし、コンポーネントごとに以前から存在する固有のユーザー名とパスワードを指定します。すべてのコンポーネントに対して 1 つの DBA ユーザー名とパスワードを指定できる場合は、「**テーブルの作成**」を選択し、必要なスキーマとユーザーを構成プロセスで作成できるようにします。

実稼働環境では、「**ユーザー名**」と「**スキーマ名**」に同じ値を設定し、「**テーブルの作成**」の選択は解除してください。実稼働環境では、必要なスキーマを手動で作成し、生成された SQL ファイルを使用してテーブルを作成します。

注: Business Space では、「**テーブルの作成**」を選択できません (このオプションは選択不可になっています)。Business Space 用の SQL ファイルは、手動で実行する必要があります。Business Space 用の SQL を手動で実行する場合の情報については、「*Business Space のデータベース表の構成*」を参照してください。

キー・パラメーター (データベース名、テーブル作成の有無、データ・ソースの実行時ユーザー名、デプロイメント環境のパスワードなど) は、すべて編集することができます。

特定のコンポーネントに使用するデータベースを選択できます。

DB2 for z/OS: DB2 for z/OS データベース・プロバイダーを使用している場合、「**テーブルの作成**」オプションは使用できません。

「デプロイメント環境構成」ウィザードでは実行できず、手動で実行する必要のあるステップは、「据え置かれた構成」ページにリスト表示されます。

11. 「セキュリティ」ページで、セキュア・コンポーネントへのアクセス時に WebSphere が使用する認証別名を構成します。

認証別名のユーザー名とパスワードは、このページで変更することができます。これらの別名を使用してセキュア・コンポーネントにアクセスしますが、データ・ソースにアクセスすることはできません。

12. 「Business Process Choreographer」ページで、Business Process Choreographer 構成のパラメーターを設定し、「次へ」をクリックして「システム Web アプリケーション (System web applications)」ページを表示します。このページでは、以下の値を指定します。

- セキュリティのロール
- 認証別名

13. オプション: 「システム Web アプリケーション (System web applications)」ページで、デプロイメント環境のコンポーネント・ベース Web アプリケーションのコンテキスト・ルートを設定するか、システム提供のコンテキスト・ルートのデフォルト値を受け入れます。「次へ」をクリックして、「要約」ページを表示します。

「システム Web アプリケーション」ページは、デプロイメント環境で「リモート・メッセージング、サポート、および Web アプリケーション」パターンを使用している場合に表示されます。「リモート・メッセージング、サポート、および Web アプリケーション」パターンが適用されるのは、デプロイメント環境が WebSphere Business Monitor を組み込むために拡張されたデプロイメント・マネージャー用のものである場合です。

テーブルには以下のコントロール情報が含まれています。

Web アプリケーション

Web アプリケーションの名前。

作成しているデプロイメント環境を構成するコンポーネントのなかには、Web アプリケーションが含まれるものがあります。「**Web アプリケーション**」列には、以下のコンポーネントが含まれます。

- Business Space
- Business Process Choreographer Explorer
- ビジネス・ルール・マネージャー

コンテキスト・ルート

コンポーネントのコンテキスト・ルートの現行値。

デフォルトでは、Web アプリケーションのデフォルトのコンテキスト・ルートが適用されます。「コンテキスト・ルート」フィールドの値に上書きして、コンテキスト・ルートを変更できます。

注: Business Space のコンテキスト・ルートは読み取り専用であるため、編集することはできません。

14. 「要約」ページの情報が正しいことを確認し、「終了して環境を生成」をクリックしてデプロイメント環境の構成を保存し、構成を完了します。構成を完了せずに終了するには、「終了」をクリックします。

「終了」をクリックすると、デプロイメント環境構成が保存されますが、生成はされません。

「取り消し」をクリックすると、デプロイメントの構成が取り消され、構成は保存されません。

- a. 据え置かれた構成ステップがないかどうかを確認します。

「デプロイメント環境」 → デプロイメント環境の名前 → 「据え置かれた構成」を選択します。

据え置かれた構成ステップが存在する場合は、デプロイメント環境を始動する前に、そのステップを処理する必要があります。

プロファイルの構成

プロファイルには、スタンドアロン・サーバー・プロファイル、デプロイメント・マネージャー・プロファイル (デプロイメント・マネージャー・サーバーを使用する管理プロファイル)、およびカスタム・プロファイル (管理対象ノード) の 3 種類があります。各プロファイルは、別々のファイル (コマンド、構成ファイル、およびログ・ファイル) を使用して、別々のランタイム環境を定義します。このセクションの各トピックでは、WebSphere Process Server のインストール後にこれらのプロファイルを使用するために実行が必要になる場合があるタスクについて、詳細に説明しています。

プロファイル

プロファイルでは、個別のコマンド・ファイル、構成ファイル、ログ・ファイルを持つ固有のランタイム環境を定義します。プロファイルでは、WebSphere Process Server システムにスタンドアロン・サーバー、デプロイメント・マネージャー、および管理対象ノードの 3 つのタイプの環境を定義します。

プロファイルを使用すると、WebSphere Process Server バイナリー・ファイルの複数のコピーをインストールしなくても、1 つのシステムに複数のランタイム環境を保持することができます。

プロファイル管理ツールまたは `manageprofiles` コマンド行ユーティリティを使用して、プロファイルを作成します。

注: 分散プラットフォームでは、各プロファイルには固有の名前があります。z/OS プラットフォームでは、すべてのプロファイルに「default」という名前が付けられます。

プロファイル・ディレクトリー

システム内の各プロファイルには、それぞれのファイルをすべて収容するための独自のディレクトリーがあります。プロファイルの作成時に、プロファイル・ディレクトリーの場所を指定します。デフォルトでは、この場所は WebSphere Process Server がインストールされたディレクトリーの profiles ディレクトリーになります。以下に例を示します。Dmgr01 プロファイルは C:\Program Files\IBM\WebSphere\ProcServer\profiles\Dmgr01 です。

ファースト・ステップ・コンソール

システム内のすべてのプロファイルには、ファースト・ステップ・コンソールがあります。このインターフェースにより、スタンドアロン・サーバー、デプロイメント・マネージャー、または管理対象ノードを把握できます。

デフォルト・プロファイル

WebSphere Process Server の 1 つのインストール環境内に作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、WebSphere Process Server がインストールされているディレクトリーの bin ディレクトリーから実行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。システム上にプロファイルが 1 つしかない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに対して作用します。プロファイルをもう 1 つ作成すると、そのプロファイルをデフォルトにすることができます。

注: デフォルト・プロファイルは、必ずしも「default」という名前のプロファイルではあるとは限りません。

プロファイルの拡張

WebSphere Application Server Network Deployment または WebSphere ESB 用に作成されたデプロイメント・マネージャー・プロファイル、カスタム・プロファイル、またはスタンドアロン・サーバー・プロファイルが既にある場合は、既存の機能のほかに WebSphere Process Server をサポートするように、そのプロファイルを拡張できます。プロファイルを拡張するには、最初に WebSphere Process Server をインストールします。次にプロファイル管理ツールまたは manageprofiles コマンド行ユーティリティーを使用します。

制約事項: プロファイルが、既にデプロイメント・マネージャーに統合済みの管理対象ノードを定義する場合は、そのプロファイルを拡張できません。

プロファイルの作成または拡張に関する前提条件

プロファイルの作成または拡張を実行する前に、一連の前提条件を満たしていることを確認する必要があります。

- WebSphere Process Server が既にインストールされている。インストールされていない場合は、47 ページの『第 3 章 ソフトウェアのインストール』にあるインストール手順を参照してください。
- 製品をインストールしたユーザー ID でない場合は、WebSphere Process Server インストール内の選択されたディレクトリーへの書き込み権限を持つ必要があります。それらの権限を取得する方法については、226 ページの『非 root ユーザー

に対するファイルとディレクトリーの書き込み権限の、プロファイル作成のための付与』を参照してください。プロファイルは、*install_root/profiles* 以外のディレクトリーに作成する必要があります。

- 作成または拡張するプロファイルのタイプがわかっている。プロファイルについて詳しくは、220 ページの『プロファイル』を参照してください。
- プロファイルを作成または拡張する場合は、以下の正しい手順に従う必要がある。
 - 既存のプロファイルを拡張するのではなく新しいプロファイルを作成する場合は、以下のトピックのいずれかを参照してください。
 - 対話式インターフェースを使用してプロファイルを作成する場合: 231 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』
 - `manageprofiles` コマンド行ユーティリティーを使用してプロファイルを作成する場合: 301 ページの『`manageprofiles` コマンド行ユーティリティーを使用したプロファイルの作成』
 - 既存の WebSphere Application Server、WebSphere Application Server Network Deployment、または WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルや WebSphere Process Server プロファイルに拡張する場合は、以下のトピックの 1 つを参照してください。
 - 対話式インターフェースを使用してプロファイルを拡張する場合: 356 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』
 - `manageprofiles` コマンド行ユーティリティーを使用してプロファイルを拡張する場合: 402 ページの『`manageprofiles` コマンド行ユーティリティーを使用したプロファイルの拡張』

重要: 拡張しようとしているプロファイルは、既に統合済みの管理対象ノードを定義できません。

- 64 ビット・アーキテクチャー (Linux on zSeries プラットフォームは除く) 上の WebSphere Process Server インストール済み環境でプロファイルを作成または拡張するときは、プロファイル管理ツールを使用することはできません。その他の 64 ビット・アーキテクチャー上でプロファイルを作成または拡張するには、`manageprofiles` コマンド行ユーティリティーを使用できます。 `manageprofiles` コマンド行ユーティリティーの使用について詳しくは、301 ページの『`manageprofiles` コマンド行ユーティリティーを使用したプロファイルの作成』および 402 ページの『`manageprofiles` コマンド行ユーティリティーを使用したプロファイルの拡張』を参照してください。 32 ビットの WebSphere Process Server インストール済み環境を使用している場合は、これらのアーキテクチャー上でもプロファイル管理ツールを使用できます。
- 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンする。
- プロファイル、ノード、ホスト、サーバー (該当する場合) およびセル (該当する場合) の名前を設定するときに検討しなければならない予約語や問題点について、150 ページの『プロファイル、ノード、サーバー、ホスト、およびセルの命名の考慮事項』の情報を確認する必要があります。
- 新しいプロファイルの作成または拡張に十分なディスク・スペースと一時スペースがある。スペース所要量については、<http://www.ibm.com/support/>

docview.wss?uid=swg27006205 にある WebSphere Process Server の詳細なシステム要件を参照し、WebSphere Process Server のバージョンのリンクを選択してください。

以下は、製品データベースに関連する前提条件です。

- プロファイルの作成と拡張のプロセスで、Common Event Infrastructure コンポーネントで使用するデータベースと、他の選択したコンポーネントで使用する共通データベースを構成しています。新しいデータベースとテーブルを作成する場合、またはユーザーやデータベース管理者 (DBA) が手動で実行する必要があるスクリプトを作成して実際のデータベース構成を先送りする場合のいずれでも、以下のトピックにリストされているデータベース詳細情報を知っている必要があります。
 - 345 ページの『Common Event Infrastructure データベース構成の manageprofiles パラメーター (データベース製品ごと)』
 - 333 ページの『共通データベース構成用の manageprofiles パラメーター (データベース製品ごと)』
- データベース製品として Oracle を使用する計画の場合は、プロファイルを作成する前に、SYSDBA 特権のあるユーザー ID を取得している必要があります。
- 共通データベース・リポジトリをリモート・サーバーで使用、または作成する場合は、プロファイルの作成または拡張を開始する前にこのリポジトリを作成する必要があります。ローカル・サーバーにリポジトリを作成することも、リモート・サーバーの既存のリポジトリを使用することも可能です。このデータベースを作成するために使用できるデフォルトのスクリプトの場所については、36 ページの『製品インストール前の共通データベースの手動作成』を参照してください。
- Common Event Infrastructure および共通データベースのリポジトリとして、リモート z/OS ワークステーション上の DB2 を使用する場合は、DBA が z/OS サーバー上に 3 つのデータベース (event、eventcat、および WPRCSDB) を作成し、それぞれに対して正しいストレージ・グループ (デフォルトは EVTST0) を作成する必要があります。DBA は、サイトの標準的なデータベース定義ツールや手順を使用できます。

CreateDB.sh を実行する前に、以下のバッファー・プールをこれらの DB2 コマンドで割り振る必要があります。

```
-ALTER BUFFERPOOL (BP1) VPSIZE(20000)
-ALTER BUFFERPOOL (BP2) VPSIZE(20000)
-ALTER BUFFERPOOL (BP3) VPSIZE(20000)
```

また、これらを使用する権限が以下のように付与されていることを確認する必要があります。

```
GRANT USE OF BUFFERPOOL BP1 TO PUBLIC;
GRANT USE OF BUFFERPOOL BP2 TO PUBLIC;
GRANT USE OF BUFFERPOOL BP3 TO PUBLIC;
```

- event データベースと eventcat データベース、および関連するストレージ・グループを作成する場合、DBA は『イベント・データベースの構成』とそのサブトピックを参照します。

- WPRCSDB データベースとそれに関連するストレージ・グループを作成する場合、DBA は、以下のディレクトリーにあるデフォルト・スクリプトを編集して実行してください。

- **Linux** **UNIX** `install_root/dbscripts/CommonDB/DB2zOSV8/` または `install_root/dbscripts/CommonDB/DB2zOSV9/`

- **Windows** `install_root%dbscripts%CommonDB%DB2zOSV8%` または `install_root%dbscripts%CommonDB%DB2zOSV9%`

- デプロイメント・マネージャー・プロファイル作成の一部であるデータベース構成パネルには、データベース管理者 (DBA) 特権が必要です。プロファイル管理ツールのデプロイメント環境機能を使用する計画の場合に、データベース製品として Derby ネットワーク・サーバー以外のデータベースを使用するときは、データベース構成パネルの「データベースで認証するユーザー名」フィールドで指定するユーザー ID は DBA 特権を持っている必要があります。

インストールまたはプロファイル作成手順中にデータベース作成を延期することを選択した場合でも、ユーザー ID には DBA 特権が必要です。データベース作成を延期することにしても、共通データベースを作成しないだけだからです。プロファイル管理ツールがデプロイメント環境 (クラスター・トポロジー) を構成するとき、共通データベースのほかに、Business Process Choreographer、Common Event Infrastructure、およびメッセージング・エンジンのバックエンド・データベース・サーバーに必要な表およびスキーマを作成します。これらのスキーマおよび表がデータベースのアクセス権エラーなしに作成できるように、ユーザー ID には DBA 特権が必要です。

ユーザー ID に DBA 特権がない場合は、以下のような予備手段を使用します。

1. プロファイルを作成せずに製品をインストールします。
2. プロファイル管理ツールを使用して、デプロイメント・マネージャーおよびカスタム・プロファイルを (すべてに対して拡張パスを使用して) 作成します。標準的な、またはデプロイメント環境のパスは使用しません。デプロイメント・マネージャー・プロファイル作成の間、データベース・スクリプトの実行を遅らせるオプションを選択します。
3. DBA で共通 DB を作成します。以下のサイトの情報で、データベース・オブジェクトを手動で作成するのに必要なスクリプトを提供しています。492 ページの『プロファイルの作成後または拡張後の共通データベースとテーブルの作成』
4. カスタム・プロファイルをデプロイメント・マネージャーに統合します。
5. 管理コンソールを使用して、必要なデプロイメント環境を作成します。詳しくは、527 ページの『パターンを使用したデプロイメント環境の作成』を参照してください。

- **Linux** **UNIX** DB2 Universal Database を使用する計画の場合:

db2profile スクリプトを実行して、DB2 コマンドの起動に使用され、プロファイル作成中に使用される必要な DB2 環境を設定する必要があります。db2profile スクリプトを /etc/profile ディレクトリーに追加します。

vi /etc/profile を実行し、以下の行を追加します。

```
export PATH=/opt/IBM/db2/V9.5/bin:$PATH
. /home/db2inst1/sqllib/db2profile
```

プロファイル作成中に使用されるユーザー ID を DB2 管理グループに追加する必要があります。例えば、root ユーザーでログインし、db2inst1 をユーザー ID として使用してデータベースを作成する場合、root を /etc/group 管理グループに追加します

vi /etc/group を実行し、以下の行を更新します。

```
dasadm:|:101:dasusr1,db2inst1,root
db2iadm:|:102;root
db2fadm:|:103;db2fenc1,root
```

プロファイル作成の典型的な例外:

db2profile スクリプトが実行されていない場合:

```
/opt/HJJ/wps4013/util/dbUtils/profileHelpers/commonDBUtility.ant:841:
  Execute failed:
java.io.IOException: Cannot run program "db2" (in directory "/opt/HJJ/
wps4013/profiles/Dmgr01/dbscripts/CommonDB/DB2/WPSDB1")
```

DB2 データベース・マネージャーが実行されていない場合:

```
SQL1032N No start database manager command was issued. SQLSTATE=57019
```

WebSphere Process Server をインストールし、プロファイルを作成中のユーザーが、DB2 管理グループに追加されていない場合:

```
SQL1092N "ROOT" does not have the authority to perform the requested command.
[exec]
```

When DB2 database manager is down or not running...

```
SQL1032N No start database manager command was issued. SQLSTATE=57019
```

- Derby Network Server を使用する予定の場合、プロファイルを作成または拡張する前に、Derby Network Server を開始する必要があります。

Derby Network Database の開始:

```
WAS_HOME/derby/bin/networkServer/startNetworkServer.sh|bat -h dbHostName
-p dbServerPort
```

例: startNetworkServer.sh -h myHost.ibm.com -p 1567

注: *profilePath/properties/commondb.properties* ファイルには、WebSphere Process Server プロファイル作成時に使用されたホスト名およびポート番号があります。

プロファイル作成中に Derby Network Server が実行されていない場合、Derby Network Server は自動的に開始されます。例えば、WebSphere Process Server で Derby Network Server が指定されたポートを listen していることが検出されない場合、Derby Network Server は自動的に開始されます。プロファイル作成が完了すると、Derby Network Server は自動的に停止します。

サーバーが開始されていない場合、データベースの使用を試行したコンポーネントは、次の例外を `systemout.log` に記録します。

```
WSVR0501E: コンポーネント null [class com.ibm.wbiserver.commondb.admin.CommonDBComponentImpl] の作成エラー。com.ibm.ws.exception.RuntimeWarning: データベースが構成済みでないか、使用できません。(WSVR0501E: Error creating component null [class com.ibm.wbiserver.commondb.admin.CommonDBComponentImpl]com.ibm.ws.exception.RuntimeWarning: Database is not configured or not available.)
```

```
CWSTM0004E: ビジネス・ルールおよびセクターの保持に使用され、JNDI 名が jdbc/WPSDB であるデータ・ソースへの接続が失敗しました。データ・ソースが作成されていないか、アクセスできません。
```

- Microsoft SQL Server 2005 をスタンドアロン・プロファイルとともに使用し、メッセージング・エンジン・テーブルを共通データベースに配置する場合は、以下のステップを実行する必要があります。
 1. スタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成する前に、4 つのスキーマを共通データベースに手動で追加します。4 つのスキーマとは、XXXSS00、XXXSA00、XXXCM00、および XXXBM00 です。XXX は、共通データベース名の最初の 3 文字です。
 2. プロファイル作成時に `dbCommonForME=true` パラメーターを渡します。以下のコマンドにより、上で定義したスキーマを使用する SQL Server 上のメッセージング・エンジンを構成します。このコマンドでは、共通データベース用に指定した `dbUserId` および `dbPassword` を使用します。

```
C:%WebSphereND%bin%manageprofiles.bat" -create -templatePath "C:%WebSphereND%profileTemplates%default.wbiserver" -dbHostName LNIDDBTUMSQL21 -dbServerPort 1433 -dbDelayConfig true -configureBspace true -ceiDbName EVENT -dbType MSSQLSERVER_Microsoft -dbUserId wpcdbadmin -dbJDBCClasspath "C:%Program Files%Microsoft SQL Server%JDBC%sqljdbc_1.2%enu" -dbName WPRCSDB -dbPassword qlwiddj23 -ceiDbServerName LNIDDBTUMSQL21 -dbCommonForME=true
```
- Network Deployment 環境を構成するには、技術情報の『General instructions for creating deployment environments with Microsoft SQL Server Enterprise 2005』を参照してください。

これらの前提条件について検討したら、このトピックにアクセスする前に参照していた元のトピックに戻ります。

非 root ユーザーに対するファイルとディレクトリーの書き込み権限の、プロファイル作成のための付与

製品のインストール・ユーザー (root または管理者の場合と非 root ユーザーの場合がある) は、該当する WebSphere Process Server のファイルとディレクトリーへの書き込み権限を非 root ユーザーに付与することができます。この権限付与を行うと、非 root ユーザーがプロファイルを作成できるようになります。製品インストーラーは、プロファイル作成の権限を持つユーザーのグループを作成することもでき、また個々のユーザーにプロファイル作成の権限を付与することもできます。以下の作業の例では、プロファイルの作成権限があるグループの作成方法を示しています。

この説明全体にわたり、「インストール・ユーザー」と「製品インストール・ユーザー」という用語は、WebSphere Process Server をインストールしたユーザー ID のことを指しています。

制約事項: WebSphere Process Server では、製品インストール・ユーザーから非 root ユーザーへの既存のプロファイルの所有権の変更はサポートされていません。このため、非 root ユーザーによる、別のユーザーによって所有されているプロファイルの拡張はサポートされません。

非 root ユーザーは、自分の環境を管理できるように、独自のプロファイルを作成します。通常、これらのユーザーは開発の目的で環境を管理します。



非 root ユーザーは、製品の `install_root/profiles` ディレクトリーではなく、自身の専用ディレクトリー構造にプロファイルを格納する必要があります。

制約事項: プロファイルを作成する非 root ユーザーには、操作性の制限があります。固有の名前とポート値を提案するプロファイル管理ツール内の仕組みは、非 root ユーザーには使用不可になります。さらに非 root ユーザーは、プロファイル管理ツールのフィールドのうち、プロファイル名、ノード名、セル名、ポート割り当ての各フィールドのデフォルト値も変更する必要があります。製品インストール・ユーザーは、各フィールドの値の範囲を非 root ユーザーに割り当てることができ、また非 root ユーザーが各自の割り当てられた値の範囲を遵守し、また自分の定義の整合性を維持するための責任を非 root ユーザーに割り当てることができます。

少なくとも 1 つのプロファイルを既に作成してある場合は、特定のディレクトリーおよびファイルが作成されています。このトピックでは、これらのディレクトリーおよびファイルを作成しますが、既に作成済みであるため、このトピックをスキップしてください。以前にプロファイルを作成したことがない場合は、必要なディレクトリーおよびファイルを作成するためのステップを完了する必要があります。ほとんどの場合、プロファイルは以前に作成されています。

製品インストール・ユーザーが適切な権限を付与するために実行する必要がある手順

インストール・ユーザーは、以下のステップを実行して、`profilers` グループを作成し、このグループにプロファイル作成のための適切な権限を付与することができます。

1. 製品インストール・ユーザーとして、WebSphere Process Server システムにログオンします。(製品インストール・ユーザーは、root または管理者の場合と非 root ユーザーの場合があります。)
2. オペレーティング・システム・コマンドを使用して、以下のステップを実行します。
 - プロファイルの作成を実行できるユーザーをすべて組み込むグループ (名前は `profiles`) を作成します。
 - プロファイルの作成を実行できるユーザー (名前は `user1`) を作成します。
 - ユーザー `product_installer` と `user1` を `profilers` グループに追加します。
3.   ログオフし、インストール・ユーザーとして再びログオンして、新しいグループを有効にします。

4. プロファイルが存在しない場合は、以下のディレクトリーをインストール・ユーザーとして作成します。

- **Linux** **UNIX** 次のように入力して、*install_root/logs/manageprofiles* ディレクトリーを作成します。

```
mkdir install_root/logs/manageprofiles
```

Windows Windows の資料の説明に従って、*install_root%logs%manageprofiles* ディレクトリーを作成します。この手順例の場合、ディレクトリーは次のとおりです。

```
install_root%logs%manageprofiles
```

- **Linux** **UNIX** 次のように入力して、*install_root/properties/fsdb* ディレクトリーを作成します。

```
mkdir install_root/properties/fsdb
```

Windows Windows の資料の説明に従って、*install_root%properties%fsdb* ディレクトリーを作成します。この手順例の場合、ディレクトリーは次のとおりです。

```
install_root%properties%fsdb
```

5. プロファイルが存在しない場合は、インストール・ユーザーとして、ご使用のオペレーティング・システムの方法に従って *profileRegistry.xml* ファイルを作成します。この例の場合、ファイル・パスは次のとおりです。

Linux **UNIX**

```
install_root/properties/profileRegistry.xml
```

Windows

```
install_root%properties%profileRegistry.xml
```

ご使用のオペレーティング・システムの説明に従って、次の情報を *profileRegistry.xml* ファイルに追加します。ファイルは、UTF-8 でエンコードする必要があります。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<profiles/>
```

6. 製品インストール・ユーザーとして、オペレーティング・システムのツールを使用して、ディレクトリーとファイルのアクセス許可を変更します。

Linux **UNIX**

次の例では、変数 *\$WASHOME* が WebSphere Process Server のルート・インストール・ディレクトリーの */opt/IBM/WebSphere/ProcServer* であると想定しています。

```
export WASHOME=/opt/IBM/WebSphere/ProcServer
echo $WASHOME
echo "Performing chgrp/chmod per WAS directions..."
chgrp profilers $WASHOME/logs/manageprofiles
chmod g+wr $WASHOME/logs/manageprofiles
chgrp profilers $WASHOME/properties
chmod g+wr $WASHOME/properties
chgrp profilers $WASHOME/properties/fsdb
```



```
chmod g+wr $WASHOME/properties/fsdb
chgrp profilers $WASHOME/properties/profileRegistry.xml
chmod g+wr $WASHOME/properties/profileRegistry.xml
chgrp -R profilers $WASHOME/profileTemplates
```

HP-UX 次のコマンドをさらに実行します。ここで *profile_template_name* は、default、dmgr、または managed です。

```
chmod -R g+wr $WASHOME/profileTemplates/profile_template_name/documents
```

HP-UX プロファイルの作成時にファイルがプロファイル・ディレクトリーにコピーされる際、ファイルの所有権は保持されます。プロファイル・ディレクトリーにコピーされたファイルがプロファイル作成プロセスの一環で変更できるように、プロファイル・ディレクトリーに対する書き込み権限を付与しました。プロファイルの作成を開始する前に、既に profileTemplates ディレクトリー構造に存在していたファイルは、プロファイルの作成時には変更されません。

Linux 以下の追加コマンドを発行します。

```
chgrp profilers $WASHOME/properties/Profiles.menu
chmod g+wr $WASHOME/properties/Profiles.menu
```

Windows 次の例では、変数 \$WASHOME が WebSphere Process Server のルート・インストール・ディレクトリーの C:\Program Files\IBM\WebSphere\ProcServer であると想定しています。Windows の資料の説明に従って、profilers グループに以下のディレクトリーとそれらのファイルに対する読み取り権限および書き込み権限を付与します。

```
@WASHOME\logs\manageprofiles
@WASHOME\properties
@WASHOME\properties\fsdb
@WASHOME\properties\profileRegistry.xml
```

非 root ユーザーに許可エラーが発生した場合は、追加ファイルの許可を変更することが必要になる場合があります。例えば、製品インストール・ユーザーが非 root ユーザーにプロファイルの削除の権限を与える場合、製品インストール・ユーザーは以下のファイルを削除することが必要になる場合があります。

Linux **UNIX** *install_root/properties/profileRegistry.xml_LOCK*

Windows *install_root\properties\profileRegistry.xml_LOCK*

このファイルを削除する権限を非 root ユーザーに付与するには、そのユーザーにこのファイルへの書き込み権限を付与します。それでも非 root ユーザーがこのプロファイルを削除できない場合は、製品インストール・ユーザーがこのプロファイルを削除することができます。

結果

インストール・ユーザーが profilers グループを作成し、特定のディレクトリーとファイルに対する適切な、プロファイル作成のための権限をこのグループに付与しました。非 root ユーザーがプロファイルの作成のために書き込む必要がある、

WebSphere Process Server のインストール・ルートに存在するディレクトリーとファイルはこれだけです。

次の作業

profilers グループに属している非 root ユーザーは、この非 root ユーザーが所有していて、書き込み権限を持っているディレクトリーにプロファイルを作成することができます。ただし、非 root ユーザーは、製品のインストール・ルート・ディレクトリーにプロファイルを作成することはできません。

root 以外の 1 つのユーザー ID で、複数のプロファイルを管理することができます。同じ root 以外のユーザー ID で、プロファイルがサーバーとノード・エージェントが含まれたプロファイルであるデプロイメント・マネージャー・プロファイルであるか、カスタム・プロファイルであるかに関係なく 1 つのプロファイル全体を管理することができます。グローバル・セキュリティーまたは管理セキュリティーが使用可能か使用不可かに関係なく、セル内のプロファイルごとに異なるユーザー ID を使用することができます。ユーザー ID には、root と root 以外のユーザー ID を混用することができます。例えば、root ユーザーでデプロイメント・マネージャー・プロファイルを管理する一方で、非 root ユーザーでサーバーとノード・エージェントが含まれたプロファイルを管理することができ、またこの逆も可能です。ただし、通常は 1 root ユーザーまたは 1 非 root ユーザーがセル内のすべてのプロファイルを管理することができます。

非 root ユーザーは、root ユーザーがプロファイルを管理するために使用するのと同じタスクを使用できます。

プロファイルの作成

新しい WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルまたは WebSphere Process Server プロファイルの作成は、プロファイル管理ツールのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) を使用して対話式に行うことも、コマンド行から manageprofiles コマンド行ユーティリティーを使用して行うこともできます。

始める前に

- 作成するプロファイルのタイプを選択します。プロファイルについて詳しくは、220 ページの『プロファイル』を参照してください。
- 221 ページの『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』のトピックで、プロファイルを作成または拡張するための前提条件のリストを調べます。

このタスクについて

デプロイメント・マネージャー、スタンドアロン・サーバー、またはカスタム・プロファイルの任意の組み合わせを作成できます。プロファイル管理ツールまたは manageprofiles コマンド行ユーティリティーを使用するたびに、プロファイルが 1 つ作成されます。

制約事項:

Linux on zSeries プラットフォームの場合を除き、64 ビット・アーキテクチャー上の WebSphere Process Server インストール済み環境では、プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成することはできません。その他の 64 ビット・アー

キテクチャー上でプロファイルを作成するには、`manageprofiles` コマンド行ユーティリティを使用できます。`manageprofiles` コマンド行ユーティリティの使用については、301 ページの『`manageprofiles` コマンド行ユーティリティを使用したプロファイルの作成』を参照してください。32 ビットの WebSphere Process Server インストール済み環境を使用している場合は、これらのアーキテクチャー上でもプロファイル管理ツールを使用できます。

手順

プロファイル管理ツールを作成して対話式にプロファイルを作成するか、`manageprofiles` コマンド行ユーティリティを使用してコマンド行からプロファイルを作成するかを決定します。

- プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するには、『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』のトピックを参照してください。
- `manageprofiles` コマンド行ユーティリティを使用してプロファイルを作成するには、301 ページの『`manageprofiles` コマンド行ユーティリティを使用したプロファイルの作成』のトピックを参照してください。

プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成

プロファイル管理ツールのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) を使用して、スタンドアロン・サーバー・プロファイル、デプロイメント・マネージャー・プロファイル、またはカスタム・プロファイルを作成します。

始める前に

- 221 ページの『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』で、プロファイルを作成または拡張するための前提条件リストを確認してください。
- **Solaris** Solaris オペレーティング・システム上の Motif グラフィカル・ユーザー・インターフェースでプロファイル管理ツールを使用する場合、プロファイル管理ツールのデフォルト・サイズが、すべてのメッセージおよびボタンを表示するには小さすぎる可能性があります。この問題を修正するには、`install_root/.Xdefaults` ファイルに以下の行を追加します。

```
Eclipse*spacing:0  
Eclipse*fontList:-misc-fixed-medium-r-normal-*--10-100-75-75-c-60-iso8859-1
```

行を追加したら、プロファイル管理ツールを開始する前に次のコマンドを実行します。

```
xrdb -load user_home/.Xdefaults
```

手順

1. WebSphere Process Server プロファイル管理ツールを開始します。

以下のいずれかのコマンドを使用します。

- **Linux** **UNIX** `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh`
- **Windows** `install_root¥bin¥ProfileManagement¥pmt.bat`

このツールを開始するためのその他の方法については、234 ページの『プロファイル管理ツールの開始』のトピックを参照してください。

「ようこそ」ページが表示されます。

2. 「ようこそ」ページで、「**プロファイル管理ツールの起動 (Launch Profile Management Tool)**」ボタンまたは「**プロファイル管理ツール**」タブをクリックします。

「プロファイル」タブが表示されます。

3. 「プロファイル」タブで、「**作成**」をクリックします。

「プロファイル」タブには、マシン上で作成されたプロファイルのリストが表示される場合があります。この手順では、既存のプロファイルを拡張するのではなく、新しいプロファイルを作成するものと想定しています。バージョン 7.0 の既存のプロファイルを拡張する場合は、356 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』のトピックを参照してください。

「環境の選択」ページが別ウィンドウで開きます。

4. 「環境の選択」ページで、「**WebSphere Enterprise Service Bus**」または「**WebSphere Process Server**」を展開し、作成するプロファイルのタイプを選択します。次に、「**次へ**」をクリックします。

WebSphere Application Server プロファイルもこのプロファイル管理ツールで作成できます。ただし、本書では、WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルまたは WebSphere Process Server プロファイルのみの作成を扱います。

「プロファイル作成オプション」ページが表示されます。

5. 「プロファイル作成オプション」ページで、実行するプロファイル作成のタイプとして「**標準**」、「**拡張**」、(デプロイメント・マネージャーまたはカスタム・プロファイルの場合は)「**デプロイメント環境**」のいずれかを選択し、「**次へ**」をクリックします。

「**標準的**」オプションでは、デフォルトの構成設定でプロファイルが作成されません。

「**高度**」オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。

「**デプロイメント環境**」オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。さらに、デプロイメント・マネージャーを作成してデプロイメント環境パターンを選択したり、1 つまたは複数のクラスターを選択して管理対象ノードに適用したりすることができます。

6. プロファイル管理ツールの次のページに進む前に、以下のいずれかのトピックに記載されている手順を行い、プロファイルを構成して作成を完了してください。

<p>選択したプロファイル作成のタイプ</p>	<p>選択したプロファイル・タイプ (スタンドアロン・サーバー、デプロイメント・マネージャー、またはカスタム) に基づいてプロファイルの作成を完了するための手順</p>
<p>標準的</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 235 ページの『標準的なスタンドアロン・サーバー・プロファイルの作成』 • 250 ページの『標準的なデプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成』 • 269 ページの『標準的なカスタム・プロファイル (管理対象ノード) の作成』
<p>高度</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 237 ページの『高度なスタンドアロン・サーバー・プロファイルの作成』 • 252 ページの『高度なデプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成』 • 272 ページの『高度なカスタム・プロファイル (管理対象ノード) の作成』
<p>デプロイメント環境 重要: 既存のデプロイメント・マネージャーやデプロイメント環境パターンがない場合は、最初のワークステーションでのプロファイル作成時に、260 ページの『デプロイメント環境のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成』の説明に従って作業する必要があります。後続のワークステーションでのプロファイル作成時には、279 ページの『デプロイメント環境のカスタム・プロファイル (管理対象ノード) の作成』の指示に従ってください。 注: Microsoft SQL Server (DataDirect) または Microsoft SQL Server (Microsoft) を使用している場合は、管理コンソールを使用して、Business Process Choreographer および Business Space 用に別のデータベース・タイプを構成します。 制約事項: デプロイメント・マネージャー・プロファイル作成の一部であるデータベース構成パネルには、データベース管理者 (DBA) 特権が必要です。プロファイル管理ツールのデプロイメント環境機能を使用する計画の場合に、データベース製品として Derby ネットワーク・サーバー以外のデータベースを使用するときは、データベース構成パネルの「データベースで認証するユーザー名」フィールドで指定するユーザー ID は DBA 特権を持っている必要があります。</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 260 ページの『デプロイメント環境のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成』 • 279 ページの『デプロイメント環境のカスタム・プロファイル (管理対象ノード) の作成』

タスクの結果

これで、指定したタイプの新規稼働環境 (スタンドアロン・サーバー、デプロイメント・マネージャー、またはカスタム) を定義するプロファイルを構成する準備ができました。

プロファイル管理ツールの開始:

プロファイル管理ツールを開始する前に、制約事項に注意し、特定の前提条件が満たされていることを確認してください。プロファイル管理ツールは、実行するときのプラットフォームに応じて、いくつかの方法で開始できます。

制約事項:

- 64 ビット・アーキテクチャー (Linux on zSeries プラットフォームは除く) 上の WebSphere Process Server インストール済み環境でプロファイルを作成または拡張するときは、プロファイル管理ツールを使用することはできません。その他の 64 ビット・アーキテクチャー上でプロファイルを作成するには、`manageprofiles` コマンド行ユーティリティーを使用できます。 `manageprofiles` コマンド行ユーティリティーの使用について詳しくは、301 ページの『`manageprofiles` コマンド行ユーティリティーを使用したプロファイルの作成』を参照してください。32 ビットの WebSphere Process Server インストール済み環境を使用している場合は、これらのアーキテクチャー上でもプロファイル管理ツールを使用できます。

- **Vista** **Windows 7** **複数インスタンスを持つ非管理ユーザーの制約事項:**
WebSphere Process Server の複数インスタンスをルート・ユーザーとしてインストールし、それらのインスタンスのサブセットだけに非管理ユーザーのアクセス権限を与えた場合、プロファイル管理ツールはその非管理ユーザーに対して正しく機能しません。さらに、`com.ibm.wsspi.profile.WSProfileException`、つまりアクセス拒否メッセージが `install_root%bin%ProfileManagement%pmt.bat` ファイルに発生します。デフォルトでは、非管理ユーザーにはプログラム・ファイル・ディレクトリーに対するアクセス権限がありません。プログラム・ファイル・ディレクトリーは製品がデフォルトでインストールされる場所です。この問題を解決するには、非管理ユーザーが製品をインストールできるようにするか、他の製品インスタンスにアクセスする許可を得るかです。

Linux **UNIX** **Windows** プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、`java user.language` 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。次のコマンドを実行します。

- **Linux** **UNIX** `install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar`
- **Windows** `install_root%java%bin%java -Duser.language=locale install_root%bin%ProfileManagement%startup.jar`

例えば、Linux システム上でドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/  
bin/ProfileManagement/startup.jar
```

すべてのプラットフォームでのプロファイル管理ツールの開始

任意のプラットフォームで、ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。ファースト・ステップ・コンソールを開始する方法については、69 ページの『ファースト・ステップ・コンソールの開始』を参照してください。

Linux および UNIX プラットフォームでのプロファイル管理ツールの開始

Linux **UNIX** このツールは、Linux および UNIX プラットフォーム上で、コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行して開始できます。

Linux Linux プラットフォームでは、オペレーティング・システムのメニューを使用して、プロファイル管理ツールを開始することもできます。例えば、
「`Linux_operating_system_menus_to_access_programs`」 > 「IBM WebSphere」 > 「`your_product`」 > 「プロファイル管理ツール」をクリックします。

Windows プラットフォームでのプロファイル管理ツールの開始

Windows Windows プラットフォームでは、以下の方法でプロファイル管理ツールを開始できます。

- Windows の「スタート」メニューを使用します。例えば、「スタート」 > 「プログラム」または「すべてのプログラム」 > 「IBM WebSphere」 > 「Process Server 7.0」 > 「プロファイル管理ツール」を選択します。
- `install_root%bin%ProfileManagement%pmt.bat` コマンドを実行します。

標準的なスタンドアロン・サーバー・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールの「標準 (Typical)」オプションを使用して、WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus のスタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成および構成する方法について説明します。「標準 (Typical)」オプションを選択すると、デフォルトの構成設定でプロファイルが作成されます。

始める前に

このトピックでは、プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成していて、231 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』の手順を実行していることを前提としています。すなわち、プロファイル管理ツールをすでに開始しており、スタンドアロン・サーバー・プロファイルの拡張を選択し、標準的なプロファイル拡張オプションを選択しているということです。

このタスクについて

この構成のタイプでは、プロファイル管理ツールは以下を実行します。

- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、サーバー、ホスト、セルの名前にデフォルト値を割り当てます。
- 管理コンソールをインストールします。

- デフォルト・アプリケーション (Snoop、Hello、および HitCount の各アプリケーションを含む) をインストールします。
- オプションで、管理セキュリティを有効にします。
- プロファイルの個人セキュリティ証明書を作成します。証明書には個人鍵と秘密鍵があり、各鍵のデフォルト値は WebAS です (このパスワードは変更する必要があります)。有効期間は 1 年です。
- 他の証明書に署名するためのルート署名セキュリティ証明書を作成します。証明書には個人鍵と秘密鍵があり、各鍵のデフォルト値は WebAS です (このパスワードは変更する必要があります)。有効期間は 15 年です。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権で許可される場合は、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
- Common Event Infrastructure および共通データベースの構成を Derby Embedded に設定します。
- Derby Embedded を使用して WebSphere が提供する Business Space を構成します。
- セキュリティを有効にする場合、プロファイルについてのサンプルの Business Process Choreographer 構成を作成します。セキュリティを有効にしない場合は、このサンプルの構成は作成されません。

制約事項: スタンドアロン・サーバー・プロファイルをデプロイメント・マネージャーに統合する予定がある場合、**標準的なオプション**を使用してプロファイルを作成しないでください。**標準的な**プロファイル作成で提供されるメッセージング・エンジン・ストレージおよびデータベース・タイプのデフォルト値は、デプロイメント環境のインストールには適していません。代わりに、**拡張オプション**を使用してプロファイルを作成してください。詳しくは、237 ページの『**高度な**スタンドアロン・サーバー・プロファイルの作成』を参照してください。

231 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』に記載されている手順に従って作業が完了していれば、「管理セキュリティ」ページが表示されます。

手順

1. オプションで、管理セキュリティを有効にします。

管理セキュリティをすぐに有効にすることも、後で管理コンソールから有効にすることもできます。管理セキュリティをすぐに有効にするには、「**管理セキュリティを使用可能にする**」チェック・ボックスを選択したままにし、管理コンソールにログオンするためのユーザー名およびパスワードを指定して、「**次へ**」をクリックします。管理セキュリティを無効にするには、チェック・ボックスのチェックを外します。管理セキュリティを後で管理コンソールから有効にするには、コンソールを開き、「**セキュリティ**」>「**ビジネス・インテグレーション・セキュリティ**」を選択してください。

重要: プロファイル管理ツールの機能で Business Process Choreographer サンプル構成を作成する場合、管理セキュリティを有効にする必要があります。

「プロファイルの要約」ページが表示されます。

2. 「プロファイルの要約」ページで、「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

プロファイルの作成が完了すると、「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページに「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に作成されました。」というメッセージが表示されます。

重要: プロファイルの作成中にエラーが検出された場合は、正常終了のメッセージの代わりに他のメッセージが表示される可能性があります。その例と意味は次のとおりです。

- 「プロファイル管理ツールによりプロファイルが作成されましたが、エラーが発生しました」: プロファイルの作成が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「プロファイル管理ツールでプロファイルを作成できません」: プロファイルの作成が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile complete)」ページには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。

3. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認し、「終了」をクリックして終了します。また、別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページも閉じてください。ファースト・ステップ・コンソールを使用して、サーバーを始動します。

タスクの結果

WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus のプロファイルが作成されました。プロファイル内のノードには、server1 (Linux、UNIX、および Windows プラットフォームの場合) という名前のサーバーがあり、複数の製品がインストールされている場合、サーバーの番号が増えていきます。

次のタスク

ファースト・ステップ・コンソールから「サーバーの起動」を選択してサーバーの作動をチェックします。出力ウィンドウが開きます。次のようなメッセージが表示される場合、サーバーは正常に作動しています。

```
ADMU3000I: サーバー server1 が e-ビジネス用にオープン。プロセス ID は 3348  
(Server server1 open for e-business; process id is 3348)
```

ファースト・ステップ・コンソールからインストール検査テスト (IVT) を実行するか、wbi_ivt コマンド行ユーティリティーを実行することで、サーバーの動作を確認することもできます。このテストは、デプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーのインストール環境が正常に動作していることが確認するものです。スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合はシステム正常性検査も実行され、レポートが生成されます。

高度なスタンドアロン・サーバー・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールの「拡張」オプションを使用して、WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus のスタンドアロン・サーバー・プ

ロファイルを作成および構成する方法について説明します。「**拡張**」オプションを選択すると、カスタマイズした構成設定でプロファイルが作成されます。

始める前に

このトピックでは、プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成している、231 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』の手順を実行していることを前提としています。すなわち、プロファイル管理ツールをすでに開始しており、スタンドアロン・サーバー・プロファイルの拡張を選択し、**高度な**プロファイル拡張オプションを選択しているということです。

このタスクについて

「**拡張**」オプションを選択することで、以下を実行できます。

- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、サーバー、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- Common Event Infrastructure を構成します。
- 共通データベースを構成します。
- 管理コンソールおよび WebSphere Application Server サンプル・アプリケーションをデプロイします。
- デフォルト・アプリケーション (Snoop、Hello、および HitCount の各サブレットを含む) をデプロイします。
- Web サーバー定義を作成します。
- 管理セキュリティーを使用可能にします。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権でサービスの作成が許可される場合は、サーバーの実行用のシステム・サービスを作成します。
- Derby Embedded または Derby Embedded 40 を使用して、WebSphere が提供する Business Space を構成します。
- ビジネス・ルール・マネージャーを構成し、Business Process Choreographer サンプル構成を作成します。
- データベース設計ファイルを使用してデータベースを構成します。

重要: プロファイルをデプロイメント・マネージャーに統合する予定がある場合、メッセージング・エンジン用にファイル・ストア・オプションまたは Common Event Infrastructure、Business Process Choreographer、あるいは共通データベース用に Derby Embedded または Derby Embedded 40 を選択しないでください。ファイル・ストア・オプションおよび Derby Embedded または Derby Embedded 40 データベースはデプロイメント環境構成では使用できません。

231 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』の手順に従うと、「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページが表示されます。

手順

1. 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで、作成するスタンドアロン・サーバー・プロファイル環境にデプロイするアプリケーションを選択して「**次へ**」をクリックします。

- 「**サンプル・アプリケーションのデプロイ**」: WebSphere Application Server サンプル・アプリケーションをインストールします。 WebSphereApplication Server のサンプル・アプリケーションは、実稼働環境へのデプロイメントが推奨されていません。

注: このチェック・ボックスを選択すると、WebSphere Process Server サンプルはデプロイされません。

- 「**管理コンソールのデプロイ (推奨)**」: サーバーを管理する Web ベースの管理コンソールをインストールします。
- 「**デフォルト・アプリケーションのデプロイ**」: Snoop、Hello、および HitCount の各サーブレットを含むデフォルト・アプリケーションをインストールします。

「プロファイル名およびロケーション」ページが表示されます。

2. 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
 - a. プロファイルに固有の名前とディレクトリー・パスを指定するか、またはデフォルト値を受け入れます。

作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。デフォルト名を使用しないことを選択した場合は、ディレクトリー名の長さ制限などのプロファイルの命名時に考慮する必要がある問題について、150 ページの『プロファイル、ノード、サーバー、ホスト、およびセルの命名の考慮事項』を参照してください。

指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルト・ディレクトリーは、プラットフォームに依存しています。

- **Linux** **UNIX** `install_root/profiles/profile_name`
- **Windows** `install_root¥profiles¥profile_name`

ここで、`profile_name` は指定した名前です。以下の場合は、エラー・メッセージが表示されます。

- 指定した `profile_name` が固有ではない。
 - 指定したディレクトリーが空ではない。
 - 使用しているユーザー ID に、このディレクトリーに対する十分な権限がない。
 - プロファイルを作成するための十分なスペースがない。
- b. 開発環境用に最適化された構成設定値でスタンドアロン・サーバーを作成するには、「**開発テンプレートを使用するサーバーの作成**」チェック・ボックスを選択します。開発テンプレートは起動時間を削減し、サーバーがパワーの面で劣るハードウェア上でも実行できるようにします。このオプションは実動サーバーには使用しないでください。
 - c. 「**デフォルトにするプロファイル**」チェック・ボックスを選択して、作成するプロファイルをデフォルト・プロファイルにする (コマンドが自動的にこ

のプロファイル进行处理するようにすることもできます。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。

デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの bin ディレクトリから実行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。詳しくは、158 ページの『複数プロファイル環境のプロファイル・コマンド』を参照してください。

- d. 「次へ」をクリックします。(「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このパネルで手動で名前を変更しなければならないことがあります。)

「ノード名およびホスト名」ページが表示されます。

3. 「ノード名およびホスト名」ページで、スタンドアロン・サーバー・プロファイルにノード、サーバー、ホスト、およびセルの名前を指定するか、またはデフォルト値を受け入れて「次へ」をクリックします。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。命名時に考慮する必要のある予約済みの用語やその他の問題については、150 ページの『プロファイル、ノード、サーバー、ホスト、およびセルの命名の考慮事項』を参照してください。

「管理セキュリティー」ページが表示されます。

4. オプションで、管理セキュリティーを有効にします。

管理セキュリティーをすぐに有効にすることも、後で管理コンソールから有効にすることもできます。管理セキュリティーをすぐに有効にするには、「**管理セキュリティーを使用可能にする**」チェック・ボックスを選択したままにし、管理コンソールにログオンするためのユーザー名およびパスワードを指定して、「次へ」をクリックします。管理セキュリティーを無効にするには、チェック・ボックスのチェックを外します。管理セキュリティーを後で管理コンソールから有効にするには、コンソールを開き、「**セキュリティー**」>「**ビジネス・インテグレーション・セキュリティー**」をクリックしてください。

重要: ステップ 10 (245 ページ) で Business Process Choreographer サンプル構成を作成することを計画する場合、管理セキュリティーを有効にする必要があります。

1 (238 ページ) のステップで WebSphere Application Server サンプル・アプリケーションを「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページからデプロイすることを選択した場合、サンプルを実行するためのアカウントが必要です。アカウントのパスワードを指定してください。アカウントのユーザー名は変更できません。

「セキュリティ証明書 (第 1 部) (Security Certificate (Part 1))」ページが表示されます。

5. 「セキュリティ証明書 (第 1 部) (Security Certificate (Part 1))」ページで、デフォルトの個人証明書およびルート署名証明書を作成するか、個人証明書およびルート署名証明書を鍵ストア・ファイルからインポートして、「次へ」をクリックします。

両方の証明書を作成することも、両方の証明書をインポートすることも、一方の証明書を作成してもう一方の証明書をインポートすることもできます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を `trust.p12` ファイルに追加します。デフォルトの個人証明書またはルート署名証明書をインポートする場合は、パスとパスワードを指定し、インポートする証明書ごとに鍵ストア・タイプと鍵ストア別名を選択します。

「セキュリティ証明書 (第 2 部) (Security Certificate (Part 2))」ページが表示されます。

6. 「セキュリティ証明書 (第 2 部) (Security Certificate (Part 2))」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックします。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するか変更して、新しい証明書を作成できます。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。

インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。

証明書をインポートして、その証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

7. プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認して、「次へ」をクリックします。

プロファイル管理ツールは、ほかの WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。ステップ 1 (238 ページ) の「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページ上で、管理コンソールをデプロイしないことを選択した場合、管理コンソール・ポートは「ポート値の割り当て」ページ上で使用できません。

以下の条件が満たされる場合、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーによって実行されたインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている場合。
- ポートが現在使用中の場合。

「ポート値の割り当て」ページにアクセスするときにはポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポート競合が疑われる場合、プロファイルの作成後に調査できます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

- **Linux** **UNIX** `profile_root/properties/portdef.props`
- **Windows** `profile_root\properties\portdef.props`

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、WebSphere Application Server Network Deployment インフォメーション・センターのトピック『Updating ports in an existing profile』を参照してください。このトピックで説明されている `ws_ant` スクリプトを使用して `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

次のステップは、ご使用のプラットフォーム、およびインストールを `root` (管理者) ユーザーで行っているか、非 `root` ユーザーで行っているかによって異なります。

インストールの内容	次のステップ
Linux または Windows プラットフォームで <code>root</code> または管理者グループ特権を持っている場合	「Linux または Windows サービスの定義 (Linux or Windows Service Definition)」ページが表示されます。ステップ 8 に進んでください。
それ以外のプラットフォームの場合、または Linux または Windows プラットフォームで非 <code>root</code> ユーザーとして実行している場合	「Web サーバー定義 (Web Server Definition)」ページが表示されます。ステップ 9 (244 ページ) に進んでください。

8. **Linux** **Windows** プロセスを Windows プラットフォーム上で Windows サービスとして実行するかどうか、または Linux プラットフォーム上で Linux サービスとして実行するかどうかを選択して、「次へ」をクリックします。

Windows Windows サービスをインストールする ID に管理者グループ特権が設定されている場合のみ、「Windows サービスの定義」ページが Windows プラットフォームに表示されます。プロファイルが Windows サービスとして構成されている場合、製品は、`startServer` または `startManager` コマンドによって開始されるプロセスに対応する Windows サービスを開始します。例えば、サーバーまたはデプロイメント・マネージャーを Windows サービスとして構成し、`startServer` または `startManager` コマンドを実行すると、`wasservice` コマンドは定義されたサービスを開始します。

重要: 指定のユーザー・アカウントとしてログオンする場合は、サービスを実行するユーザーのユーザー ID とパスワードを指定し、さらに開始タイプ (デフォルトは `Manual`) を指定する必要があります。ユーザー ID の名前にスペースを使用することはできません。また、この ID は管理者グループに属し、拡張ユーザー権限の「サービスとしてログオン」を持っている必要があります。ユーザー ID が管理者グループに属していて、まだ拡張ユーザー権限がない場合は、プロファイル管理ツールにより、ユーザー ID に拡張ユーザー権限が付与されます。

プロファイルの作成時に追加された Windows サービスをプロファイルの削除時に除去できます。

プロファイルを Windows サービスとして実行する場合の IPv6 に関する考慮事項

Windows サービスとして実行するように作成されたプロファイルは、このサービスがローカル・システムとして実行するように構成されている場合、IPv6 の使用時には開始できません。ユーザー固有の環境変数を作成して、IPv6 を使用可能にします。この環境変数はローカル・システム変数ではなくユーザー変数であるため、その特定のユーザーで実行される Windows サービスのみが、この環境変数にアクセスできます。新規プロファイルが Windows サービスとして実行するように作成および構成されている場合、デフォルトでは、サービスはローカル・システムとして実行するように設定されます。WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Bus の Windows サービスによって実行が試みられる場合、このサービスは IPv6 が指定されているユーザー環境変数にアクセスできないため、IPv4 として開始を試みます。この場合、サーバーは正常に始動しません。この問題を解決するには、プロファイルの作成時に、

WebSphere Process Server or WebSphere Enterprise Bus の Windows サービスが、ローカル・システムの代わりに IPv6 が指定されている環境変数を定義したユーザー ID と同じユーザー ID で実行されることを指定します。

Linux 「Linux サービスの定義」 ページは、現在のオペレーティング・システムがサポート対象バージョンの Linux であり、現在のユーザーに適切な権限がある場合にのみ表示されます。

WebSphere Process Server によって、startManager または startManager コマンドで開始されたプロセス用の Linux サービスの開始が試みられます。例えば、サーバーまたはデプロイメント・マネージャーを Linux サービスとして構成し、startServer または startManager コマンドを実行すると、wasservice コマンドは定義されたサービスを開始します。

デフォルトでは、WebSphere Process Server は、Linux サービスとして実行するように選択されません。

このサービスを作成するためには、プロファイル管理ツールを実行するユーザーが root ユーザーでなければなりません。プロファイル管理ツールを root 以外のユーザー ID で実行している場合は、「Linux サービスの定義」 ページは表示されないため、サービスも作成されません。

サービスの実行に使用されるユーザー名を指定する必要があります。

Linux サービスを削除するためには、ユーザーが root ユーザーであるか、またはこのサービスを削除するための適切な特権を持っている必要があります。それ以外の場合は、root ユーザーがこのユーザーの代わりにサービスを削除するために実行できる除去スクリプトが作成されます。

9. Web サーバー定義をすぐにプロファイルに組み込む場合は、以下のステップを実行します。
 - a. 「Web サーバー定義を作成する」 チェック・ボックスを選択します。
 - b. ページ上の Web サーバーの特性を指定して、「次へ」をクリックします。
 - c. 「第 2 部」 ページの Web サーバーの特性を指定して、「次へ」をクリックします。

Web サーバーを使用して、要求を WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Bus に送信する場合は、Web サーバー定義を組み込む必要があります。定義をすぐに組み込むことも、後で Web サーバーを WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Bus に対して定義することもできます。このプロファイルの作成中に Web サーバー定義を定義する場合は、プロファイルの作成後に Web サーバーとそのプラグインをインストールすることができます。ただし、「Web サーバー定義」 ページ上で指定したパスに対してこの両方をインストールする必要があります。このプロファイルの作成後に、Web サーバーを WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus に対して定義する場合は、Web サーバーを別のプロファイル内に定義する必要があります。

「Business Process Choreographer の構成」 ページが表示されます。

10. Business Process Choreographer サンプル構成を作成するかどうかを選択します。

制約事項: 実稼働環境でこのコンポーネントを使用するか、このスタンドアロン・サーバー・プロファイルをデプロイメント・マネージャーに統合する予定がある場合は、Business Process Choreographer サンプル構成を作成しないでください。サンプル構成は、開発専用です。実動の設定においてこのコンポーネントをセットアップする方法については、Business Process Choreographer の構成にあるトピックを参照してください。

サンプル構成を作成するには、「**サンプル Business Process Choreographer の構成**」チェック・ボックスを選択し、「次へ」をクリックします。

「Business Space の構成」ページが表示されます。

11. 「Business Space 構成」ページで、「**ビジネス・スペースの構成**」チェック・ボックスが選択された状態にして、WebSphere が提供する Business Space をセットアップします。これは、IBM WebSphere ビジネス・プロセス管理ポートフォリオでアプリケーション・ユーザー用に統合されたユーザー・エクスペリエンスです。Business Space 内のヒューマン・タスク管理ウィジェットと連携するように Lotus Webform Server を構成する場合は、「**Lotus Webform Server の構成 (Configure Lotus Webform Server)**」チェック・ボックスを選択し、Webform Server 変換プログラムおよびインストール・ルートを入力します。次に、「次へ」をクリックします。Business Space を構成すると、このプロファイル用のアプリケーションのビジネス・ユーザーの統合 GUI がセットアップされます。

重要: Business Space は、次のデータベース製品でサポートされています。Derby Embedded または Derby Embedded 40、Derby Network Server または Derby Network Server 40、DB2 Universal、DB2 for i5/OS (DB2 for IBM i)、DB2 for z/OS、Oracle、Microsoft SQL Server 2005 および 2008。

WebSphere Process Server で使用するデータベースが、サポートされる Business Space と一致しない場合は、Derby Embedded または Derby Embedded 40 データベースが Business Space の構成で選択されます。このプロファイルを 1 つのデプロイメント環境に後で統合することはできません。Derby Embedded または Derby Embedded 40 はデプロイメント環境でサポートされていないためです。

「ビジネス・ルール・マネージャーの構成」ページが表示されます。

12. ビジネス・ルール・マネージャーを構成してインストールするかどうか選択してから、「次へ」をクリックします。ビジネス・ルール・マネージャーは、ビジネス・アプリケーションの必要に合わせてビジネス・ルール・テンプレートをカスタマイズする Web アプリケーションです。
13. オプション: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。このオプションは、拡張スタンドアロン・サーバーのプロファイルと拡張デプロイメント・マネージャーのプロファイルの両方で使用できます。
 - a. 「データベースを構成するときは、データベース設計ファイルを使用します」を選択します。
 - b. 「参照」をクリックします。

- c. 設計ファイルの完全修飾パス名を指定します。
- d. 「次へ」をクリックします。

設計ファイルを指定することを選択すると、プロファイル管理ツールのデータベース構成パネルはスキップされます。代わりに、データベースの構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。データベース構成用の設計ファイルの使用について詳しくは、510 ページの『データベース設計ツールを使用したデータベース設計ファイルの作成』を参照してください。

- 14. 「データベース構成」ページで、選択された WebSphere Process Server と WebSphere Enterprise Bus コンポーネント内の Common Event Infrastructure コンポーネントで使用されるデータベースと、共通データベースの両方を構成します。

詳細については、286 ページの『プロファイル管理ツールを使用した共通データベースおよび Common Event Infrastructure データベースの構成』のトピックを参照してください。「データベース構成」情報ページと「データベース構成 (第 2 部)」ページの各フィールドを入力したら、このステップに戻ります。

「プロファイルの要約」ページが表示されます。

- 15. 「プロファイルの要約」ページで、「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

プロファイルの作成が完了すると、「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページに「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に作成されました。」というメッセージが表示されます。

重要: プロファイルの作成中にエラーが検出された場合は、正常終了のメッセージの代わりに他のメッセージが表示される可能性があります。その例と意味は次のとおりです。

- 「プロファイル管理ツールによりプロファイルが作成されましたが、エラーが発生しました」: プロファイルの作成が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「プロファイル管理ツールでプロファイルを作成できません」: プロファイルの作成が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile complete)」ページには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。

- 16. Common Event Infrastructure データベースと共通データベースを手動で構成する必要があるかどうかに応じて、以下のタスクのいずれかを実行し、スタンドアロン・サーバー・プロファイルの構成を完了します。
 - プロファイル管理ツールを使用した Common Event Infrastructure および共通データベースの構成が完了したら、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認し、「終了」をクリックして終了します。また、別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページも閉じてください。ファースト・ステップ・コンソールを使用して、サーバーを始動します。
 - 手動で実行するスクリプトを生成して実際のデータベース構成を先送りする場合は、以下のステップを実行します。

- a. 「ファースト・ステップ・コンソールの起動」の横にあるチェック・ボックスをクリアし、「終了」をクリックしてプロファイル管理ツールを閉じます。また、別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページも閉じてください。
- b. サイトの標準的なデータベース定義ツールおよび手順を使用して、プロファイル管理ツールにより生成されたスクリプトを編集および実行し、event、eventcat、および WPRCSDB の各データベース（システムで別の名前が設定されている場合はこれらに相当するデータベース）を作成するか、作成および構成します。これらのスクリプトの場所は、286 ページの『プロファイル管理ツールを使用した共通データベースおよび Common Event Infrastructure データベースの構成』トピックのステップ 2 (288 ページ) で指定しています。また、新規のデータベースまたは既存のデータベース内の新規テーブルを手動で作成することについて説明しているトピックも参照してください。
 - Common Event Infrastructure データベース: 『イベント・データベースの構成』とそのサブトピック。
 - 共通データベースの場合: 492 ページの『プロファイルの作成後または拡張後の共通データベースとテーブルの作成』または 493 ページの『プロファイルの作成後または拡張後の共通データベースでのテーブルの作成』。

データベースの構成時に、69 ページの『ファースト・ステップ・コンソールの開始』で説明されているように、プロファイルに関連付けられているファースト・ステップ・コンソールを開始します。

17. ご使用の環境で Business Process Choreographer コンポーネントを使用する予定がある場合、データベース管理者に Business Process Choreographer データベースの作成および構成を依頼する必要がある場合があります。

詳しくは、『Business Process Choreographer の構成』にある各トピックを参照してください。

タスクの結果

WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus のプロファイルが作成されました。デフォルトのサーバー名を使用した場合、プロファイル内のノードのサーバーは、server1 (Linux、UNIX、および Windows プラットフォームの場合) という名前になります。複数の製品がインストールされている場合、サーバーの番号が増えていきます。

次のタスク

ファースト・ステップ・コンソールから「サーバーの起動」を選択してサーバーの作動をチェックします。出力ウィンドウが開きます。次のようなメッセージが表示される場合、サーバーは正常に作動しています。

```
ADMU3000I: サーバー server1 が e-ビジネス用にオープン。プロセス ID は 3348  
(Server server1 open for e-business; process id is 3348)
```

ファースト・ステップ・コンソールからインストール検査テスト (IVT) を実行するか、wbi_ivt コマンド行ユーティリティを実行することで、サーバーの動作を確認することもできます。このテストは、デプロイメント・マネージャーまたはスタン

ドアロン・サーバーのインストール環境が正常に動作していることが確認するものです。スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合はシステム正常性検査も実行され、レポートが生成されます。

スタンドアロン・サーバー・プロファイルのデプロイメント・マネージャーへの統合:

addNode コマンドを使用して、スタンドアロン・サーバー・プロファイルをデプロイメント・マネージャー・セルに統合する方法を学習します。統合の後に、ノード・プロセス・エージェント・プロセスが作成されます。このノード・エージェントおよびサーバー・プロセスの両方とも、デプロイメント・マネージャーにより管理されます。スタンドアロン・サーバー・プロファイルを統合し、サーバー・アプリケーションをすべて組み込むと、統合動作によりデプロイメント・マネージャーにアプリケーションがインストールされます。スタンドアロン・サーバー・プロファイルは、他に統合されたプロファイルがない場合にのみ統合できます。

始める前に

以下の前提条件が満たされていることを確認します。

- WebSphere Process Server がインストール済みであり、WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャーが作成済みである。
- デプロイメント・マネージャーが、WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャーに拡張されている。WebSphere Process Server プロファイルは WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャーを使用できませんが、WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルは WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャーを使用できます。
- スタンドアロン・サーバー・プロファイルが WebSphere Process Server プロファイルである。
- スタンドアロン・サーバー・プロファイルが、メッセージング・エンジン用にファイル・ストアも Derby Embedded データ・ストアも使用していない。プロファイル管理ツールで「標準的」オプションを使用してプロファイルを作成した場合、プロファイルはこれらのオプションを使用します。このプロファイルをデプロイメント・マネージャーに統合することはできません。
- スタンドアロン・サーバーが、リモート・アクセスをサポートするデータベース・ドライバー (Derby Network または Java toolbox JDBC など) を使用している。
- デプロイメント・マネージャーが稼働している。稼働していない場合は、ファースト・ステップ・コンソールから「**デプロイメント・マネージャーの始動**」を選択するか、または以下のコマンドを入力してデプロイメント・マネージャーを始動します。ここで、*profile_root* はデプロイメント・マネージャー・プロファイルのインストール場所を表します。

```
- Linux UNIX profile_root/bin/startManager.sh
```

```
- Windows profile_root%bin%startManager.bat
```

- スタンドアロン・サーバーが実行されていません。実行されている場合は、ファースト・ステップ・コンソールで「**サーバーの停止**」を選択するか、次のコマンドを入力して、停止します。ここで、*profile_root* は、スタンドアロン・サーバー・プロファイルのインストール・ロケーションです。

- `Linux` `UNIX` `profile_root/bin/stopServer.sh`

- `Windows` `profile_root%bin%stopServer.bat`

- デプロイメント・マネージャーのリリース・レベルが、作成または拡張されたプロファイルと同じか、それより高い。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっている。デフォルト・プロトコルは SOAP です。
- デプロイメント・マネージャーにほかのノードが統合されていません。

デプロイメント・マネージャーが実行されていないとき、または他の理由で使用できないときにスタンドアロン・サーバー・プロファイルを統合すると、プロファイルの統合に失敗し、そのプロファイルが使用不可になります。そのため、同じプロファイル名で別のプロファイルを作成する前に、このスタンドアロン・サーバー・プロファイル・ディレクトリーをプロファイル・リポジトリーの外に移動させる必要があります。

このタスクについて

このタスクを実行する必要があるのは、既存のスタンドアロン・サーバー・プロファイルがあり、Network Deployment が提供する機能 (中央管理またはクラスタリング) をそのサーバーに追加する必要がある場合です。この機能は、既存のスタンドアロン・サーバー・プロファイルに拡張のパスを提供します。ただし、このデプロイメント環境を使用する場合、単一のクラスタ構成に制限されます。単一クラスタ・パターンの説明については、『単一クラスタ・トポロジー』を参照してください。

このタスクは、各セルごとに 1 回、そのセルに統合された最初のプロファイルに対してのみ実行します。統合されたノードがそのセルに既にある場合は、このタスクを実行しないでください。既存のスタンドアロン・サーバー・プロファイルがない環境を作成する場合は、カスタム・プロファイルを使用して環境を作成します。カスタム・プロファイルの作成について詳しくは、230 ページの『プロファイルの作成』を参照してください。

手順

1. 統合するスタンドアロン・サーバー・プロファイルの bin ディレクトリーに移動します。 コマンド・ウィンドウを開き、プラットフォームに応じて以下のいずれかのディレクトリーに移動します。ここで、`profile_root` は、スタンドアロン・サーバー・プロファイルのインストール・ロケーションを表します。

• `Linux` `UNIX` `profile_root/bin`

• `Windows` `profile_root%bin`

2. `addNode` コマンドを実行します。

セキュリティが無効である場合は、以下のいずれかのコマンドを発行します。ポート・パラメーターはオプションで、デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成時にデフォルト・ポート番号を使用した場合は省略できます。

• `Linux` `UNIX` `./addNode.sh deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port -includeapps -includebuses`

- **Windows** `addNode.bat deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port -includeapps -includebuses`

セキュリティーが有効である場合は、以下のいずれかのコマンドを発行します。

- **Linux** **UNIX** `./addNode.sh deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port -username userID_for_authentication -password password_for_authentication -localusername localuserID_for_authentication -localpassword localpassword_for_authentication -includeapps -includebuses`
- **Windows** `addNode.bat deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port -username userID_for_authentication -password password_for_authentication -localusername localuserID_for_authentication -localpassword localpassword_for_authentication -includeapps -includebuses`

出力ウィンドウが開きます。次のようなメッセージが表示された場合、スタンドアロン・サーバー・プロファイルは正常に統合されています。

ADMU0003I: ノード DMNDID2Node02 は正常に統合されました。
(Node DMNDID2Node02 has been successfully federated.)

タスクの結果

スタンドアロン・サーバー・プロファイルはデプロイメント・マネージャーに統合されました。 `addNode` コマンドとそのパラメーターについて詳しくは、WebSphere Application Server Network Deployment インフォメーション・センターのトピック『`wsadmin` スクリプトを使用した `addNode` コマンドの実行 (Using `wsadmin` scripting to run the `addNode` command)』を参照してください。

標準的なデプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールの「**標準 (Typical)**」オプションを使用して、WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成および構成する方法について説明します。「**標準 (Typical)**」オプションを選択すると、デフォルトの構成設定でプロファイルが作成されます。

始める前に

このトピックでは、プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成して、231 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』の手順を実行していることを前提としています。すなわち、プロファイル管理ツールをすでに開始しており、デプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張を選択し、**標準的な**プロファイル拡張オプションを選択しているということです。

このタスクについて

この構成のタイプでは、プロファイル管理ツールは以下を実行します。

- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セルの名前にデフォルト値を割り当てます。
- 管理コンソールをインストールします。
- オプションで、管理セキュリティーを有効にします。

- プロファイルの個人セキュリティ証明書を作成します。証明書には個人鍵と秘密鍵があり、各鍵のデフォルト値は WebAS です (このパスワードは変更する必要があります)。有効期間は 1 年です。
- 他の証明書に署名するためのルート署名セキュリティ証明書を作成します。証明書には個人鍵と秘密鍵があり、各鍵のデフォルト値は WebAS です (このパスワードは変更する必要があります)。有効期間は 15 年です。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権で許可される場合は、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
- 共通データベース構成を Derby Network Server に設定します。

231 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』に記載されている手順に従って作業が完了していれば、「管理セキュリティ」ページが表示されます。

手順

1. オプションで、管理セキュリティを有効にします。

管理セキュリティをすぐに有効にすることも、後で管理コンソールから有効にすることもできます。管理セキュリティをすぐに有効にするには、「**管理セキュリティを使用可能にする**」チェック・ボックスを選択したままにし、管理コンソールにログオンするためのユーザー名およびパスワードを指定して、「**次へ**」をクリックします。管理セキュリティを無効にするには、チェック・ボックスのチェックを外します。管理セキュリティを後で管理コンソールから有効にするには、コンソールを開き、「**セキュリティ**」>「**ビジネス・インテグレーション・セキュリティ**」をクリックしてください。

「プロファイルの要約」ページが表示されます。

2. 「プロファイルの要約」ページで、「**作成**」をクリックしてプロファイルを作成するか、「**戻る**」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

プロファイルの作成が完了すると、「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページに「**プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に作成されました。**」というメッセージが表示されます。

重要: プロファイルの作成中にエラーが検出された場合は、正常終了のメッセージの代わりに他のメッセージが表示される可能性があります。その例と意味は次のとおりです。

- 「**プロファイル管理ツールによりプロファイルが作成されましたが、エラーが発生しました**」: プロファイルの作成が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「**プロファイル管理ツールでプロファイルを作成できません**」: プロファイルの作成が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile complete)」ページには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。

3. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、「**ファースト・ステップ・コンソールの起動**」が選択されていることを確認し、「**終了**」をクリックして終了

します。また、別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページも閉じてください。ファースト・ステップ・コンソールを使用して、サーバーを始動します。

4. ご使用の環境で Business Process Choreographer コンポーネントを使用する場合、それを構成する必要があります。データベース管理者に Business Process Choreographer データベースを作成し、構成してもらうことが必要になる場合があります。

詳しくは、『Business Process Choreographer の構成』にある各トピックを参照してください。

タスクの結果

WebSphere Process Server または Websphere Enterprise Service Bus のプロファイルの作成。

プロファイルで定義されたノードには、名前が Dmgr というデプロイメント・マネージャーがあります。

次のタスク

ファースト・ステップ・コンソールから「**デプロイメント・マネージャーの始動**」を選択して、サーバーが作動することを確認します。出力ウィンドウが開きます。次のようなメッセージが表示される場合、デプロイメント・マネージャーは正常に作動しています。

```
ADMU3000I: サーバー dmgr が e-ビジネス用にオープン。プロセス ID は 3072  
(Server dmgr open for e-business; process id is 3072)
```

デプロイメント環境の場合には、別のデータベースを作成して構成し、カスタム・プロファイルを作成してそれをご使用のデプロイメント・マネージャーに統合し、サーバーを作成し、ワークロード管理機能が必要な場合はクラスターを作成し、さらに、計画したインストール環境に固有のその他のタスクを実行する必要があります。計画した環境では、実行が必要なタスク、およびその実行順序を指示します。

インストールの計画について詳しくは、「**インストールの計画、バージョン 7.0**」PDF の各トピックを参照してください。WebSphere Process Server で必要とされるデータベースの詳細情報については、「*WebSphere Process Server for Multiplatforms* バージョン 7.0 のインストールおよび構成」PDF 内の『*WebSphere Process Server* の構成』>『データベースの構成』の各トピックを参照してください。または、WebSphere Process Server オンライン・インフォメーション・センターの各トピックを参照してください。

高度なデプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールの「**拡張**」オプションを使用して、WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成および構成する方法について説明します。「**拡張**」オプションを選択すると、カスタマイズした構成設定でプロファイルが作成されます。

始める前に

このトピックでは、プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成して、231 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』の手順を実行していることを前提としています。すなわち、プロファイル管理ツールをすでに開始しており、デプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張を選択し、**高度な**プロファイル拡張オプションを選択しているということです。

このタスクについて

「**拡張**」オプションを選択することで、以下を実行できます。

- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- 共通データベースを構成します。
- 管理コンソールをデプロイします。
- 管理セキュリティーを使用可能にします。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権でサービスの作成が許可される場合は、サーバーの実行用のシステム・サービスを作成します。
- データベース設計ファイルを使用してデータベースを構成します。

231 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』の手順に従うと、「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページが表示されます。

手順

1. 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで、作成するプロファイル環境に対して管理コンソールをデプロイするかどうかを選択した後、「次へ」をクリックします。

管理コンソールとは、サーバーを管理するための Web ベースのツールです。管理コンソールのデプロイを選択するには、「**管理コンソールのデプロイ (推奨)**」チェック・ボックスが選択されたままにしておきます。選択解除するには、チェック・ボックスのチェックを外します。

「プロファイル名およびロケーション」ページが表示されます。

2. 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
 - a. プロファイルに固有の名前とディレクトリー・パスを指定するか、またはデフォルト値を受け入れます。

作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。デフォルト名を使用しないことを選択した場合は、ディレクトリー名の長さ制限などのプロファイルの命名時に考慮する必要がある問題について、150 ページの『プロファイル、ノード、サーバー、ホスト、およびセルの命名の考慮事項』を参照してください。

指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトでは、このディレクトリーは以下のロケーションにあります。

- **Linux** **UNIX** `install_root/profiles/profile_name`
- **Windows** `install_root¥profiles¥profile_name`

ここで、`profile_name` は指定した名前です。以下の場合、エラー・メッセージが表示されます。

- 指定した `profile_name` が固有ではない。
 - 指定したディレクトリーが空ではない。
 - 使用しているユーザー ID に、このディレクトリーに対する十分な権限がない。
 - プロファイルを作成するための十分なスペースがない。
- b. 「デフォルトにするプロファイル」チェック・ボックスを選択して、作成するプロファイルをデフォルト・プロファイルにする (コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようにする) こともできます。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。

デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから実行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。詳しくは、158 ページの『複数プロファイル環境のプロファイル・コマンド』を参照してください。

- c. 「次へ」をクリックします。(「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このパネルで手動で名前を変更しなければならないことがあります。)

「ノード、ホスト、およびセルの名前」ページが表示されます。

3. 「ノード、ホスト、およびセルの名前」ページで、デプロイメント・マネージャーにノード、ホスト、およびセルの各名前を指定するか、またはデフォルト値を受け入れて「次へ」をクリックします。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。命名時に考慮する必要がある予約済みの用語やその他の問題については、150 ページの『プロファイル、ノード、サーバー、ホスト、およびセルの命名の考慮事項』を参照してください。

「管理セキュリティー」ページが表示されます。

4. オプションで、管理セキュリティーを有効にします。

管理セキュリティーをすぐに有効にすることも、後で管理コンソールから有効にすることもできます。管理セキュリティーをすぐに有効にするには、「管理

「セキュリティを使用可能にする」チェック・ボックスを選択したままにし、管理コンソールにログオンするためのユーザー名およびパスワードを指定して、「次へ」をクリックします。管理セキュリティを無効にするには、チェック・ボックスのチェックを外します。管理セキュリティを後で管理コンソールから有効にするには、コンソールを開き、「セキュリティ」>「ビジネス・インテグレーション・セキュリティ」を選択してください。

「セキュリティ証明書 (第 1 部) (Security Certificate (Part 1))」ページが表示されます。

5. 「セキュリティ証明書 (第 1 部) (Security Certificate (Part 1))」ページで、デフォルトの個人証明書およびルート署名証明書を作成するか、個人証明書およびルート署名証明書を鍵ストア・ファイルからインポートして、「次へ」をクリックします。

両方の証明書を作成することも、両方の証明書をインポートすることも、一方の証明書を作成してもう一方の証明書をインポートすることもできます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を `trust.p12` ファイルに追加します。デフォルトの個人証明書またはルート署名証明書をインポートする場合は、パスとパスワードを指定し、インポートする証明書ごとに鍵ストア・タイプと鍵ストア別名を選択します。

「セキュリティ証明書 (第 2 部) (Security Certificate (Part 2))」ページが表示されます。

6. 「セキュリティ証明書 (第 2 部) (Security Certificate (Part 2))」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックします。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するか変更して、新しい証明書を作成できます。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、`WebAS` です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルト

トで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。

- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。

インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。

証明書をインポートして、その証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

7. プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認して、「次へ」をクリックします。

プロファイル管理ツールは、ほかの WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。ステップ 1 (253 ページ) の「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページ上で、管理コンソールをデプロイしないことを選択した場合、管理コンソール・ポートは「ポート値の割り当て」ページ上で使用できません。

以下の条件が満たされる場合、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーによって実行されたインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている場合。
- ポートが現在使用中の場合。

「ポート値の割り当て」ページにアクセスするときにはポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポート競合が疑われる場合、プロファイルの作成後に調査できます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

- `Linux` `UNIX` `profile_root/properties/portdef.props`
- `Windows` `profile_root\properties\portdef.props`

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、WebSphere Application Server Network Deployment インフォメーション・センターのトピック『Updating ports in an existing profile』を参照してください。このトピックで説明されている `ws_ant` スクリプトを使用して `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

次のステップは、ご使用のプラットフォーム、およびインストールを root (管理者) ユーザーで行っているか、非 root ユーザーで行っているかによって異なります。

インストール・タイプ	次のステップ
Linux または Windows プラットフォームで root または管理者グループ特権を持っている場合	「Linux または Windows サービスの定義 (Linux or Windows Service Definition)」ページが表示されます。ステップに 8 に進みません。
それ以外のプラットフォームの場合、または Linux または Windows プラットフォームで非 root ユーザーとして実行している場合	「データベースの構成」ページが表示されます。ステップ 10 (258 ページ) に進んでください。

8. **Linux** **Windows** プロセスを Windows プラットフォーム上で Windows サービスとして実行するかどうか、または Linux プラットフォーム上で Linux サービスとして実行するかどうかを選択して、「次へ」をクリックします。

Windows Windows サービスをインストールする ID に管理者グループ特権が設定されている場合のみ、「Windows サービスの定義」ページが Windows プラットフォームに表示されます。プロファイルが Windows サービスとして構成されている場合、製品は、startServer または startManager コマンドによって開始されるプロセスに対応する Windows サービスを開始します。例えば、サーバーまたはデプロイメント・マネージャーを Windows サービスとして構成し、startServer または startManager コマンドを実行すると、wasservice コマンドは定義されたサービスを開始します。

重要: 指定のユーザー・アカウントとしてログオンする場合は、サービスを実行するユーザーのユーザー ID とパスワードを指定し、さらに開始タイプ (デフォルトは Manual) を指定する必要があります。ユーザー ID の名前にスペースを使用することはできません。また、この ID は管理者グループに属し、拡張ユーザー権限の「サービスとしてログオン」を持っている必要があります。ユーザー ID が管理者グループに属していて、まだ拡張ユーザー権限がない場合は、プロファイル管理ツールにより、ユーザー ID に拡張ユーザー権限が付与されます。

プロファイルの作成時に追加された Windows サービスをプロファイルの削除時に除去できます。

プロファイルを Windows サービスとして実行する場合の IPv6 に関する考慮事項

Windows サービスとして実行するように作成されたプロファイルは、このサービスがローカル・システムとして実行するように構成されている場合、IPv6 の使用時には開始できません。ユーザー固有の環境変数を作成して、IPv6 を使用可能にします。この環境変数はローカル・システム変数ではなくユーザー変数であるため、その特定のユーザーで実行される Windows サービスのみが、この環境変数にアクセスできます。新規プロファイルが Windows サービスとして実行するように作成および構成されている場合、デフォルトでは、サービスはローカル・システムとして実行するように設定されます。WebSphere Process

Server または WebSphere Enterprise Bus の Windows サービスによって実行が試みられる場合、このサービスは IPv6 が指定されているユーザー環境変数にアクセスできないため、IPv4 として開始を試みます。この場合、サーバーは正常に始動しません。この問題を解決するには、プロファイルの作成時に、WebSphere Process Server or WebSphere Enterprise Bus の Windows サービスが、ローカル・システムの代わりに IPv6 が指定されている環境変数を定義したユーザー ID と同じユーザー ID で実行されることを指定します。

Linux 「Linux サービスの定義」ページは、現在のオペレーティング・システムがサポート対象バージョンの Linux であり、現在のユーザーに適切な権限がある場合にのみ表示されます。

WebSphere Process Server によって、startManager または startManager コマンドで開始されたプロセス用の Linux サービスの開始が試みられます。例えば、サーバーまたはデプロイメント・マネージャーを Linux サービスとして構成し、startServer または startManager コマンドを実行すると、wasservice コマンドは定義されたサービスを開始します。

デフォルトでは、WebSphere Process Server は、Linux サービスとして実行するように選択されません。

このサービスを作成するためには、プロファイル管理ツールを実行するユーザーが root ユーザーでなければなりません。プロファイル管理ツールを root 以外のユーザー ID で実行している場合は、「Linux サービスの定義」ページは表示されないため、サービスも作成されません。

サービスの実行に使用されるユーザー名を指定する必要があります。

Linux サービスを削除するためには、ユーザーが root ユーザーであるか、またはこのサービスを削除するための適切な特権を持っている必要があります。それ以外の場合は、root ユーザーがこのユーザーの代わりにサービスを削除するために実行できる除去スクリプトが作成されます。

9. オプション: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。このオプションは、拡張スタンドアロン・サーバーのプロファイルと拡張デプロイメント・マネージャーのプロファイルの両方で使用できます。
 - a. 「データベースを構成するときは、データベース設計ファイルを使用します」を選択します。
 - b. 「参照」をクリックします。
 - c. 設計ファイルの完全修飾パス名を指定します。
 - d. 「次へ」をクリックします。

設計ファイルを指定することを選択すると、プロファイル管理ツールのデータベース構成パネルはスキップされます。代わりに、データベースの構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。データベース構成用の設計ファイルの使用について詳しくは、510 ページの『データベース設計ツールを使用したデータベース設計ファイルの作成』を参照してください。

10. 「データベース構成」ページで、選択した製品コンポーネントで使用する共通データベースを構成します。

詳細については、286 ページの『プロファイル管理ツールを使用した共通データベースおよび Common Event Infrastructure データベースの構成』のトピックを参照してください。「データベース構成」ページと「データベース構成 (第 2 部)」ページの各フィールドへの入力を完了したら、このステップに戻ります。「プロファイルの要約」ページが表示されます。

11. 「プロファイルの要約」ページで、「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

プロファイルの作成が完了すると、「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページに「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に作成されました。」というメッセージが表示されます。

重要: プロファイルの作成中にエラーが検出された場合は、正常終了のメッセージの代わりに他のメッセージが表示される可能性があります。その例と意味は次のとおりです。

- 「プロファイル管理ツールによりプロファイルが作成されましたが、エラーが発生しました」: プロファイルの作成が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「プロファイル管理ツールでプロファイルを作成できません」: プロファイルの作成が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile complete)」ページには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。

12. 共通データベースを手動で構成する必要があるかどうかに応じて、以下のいずれかのタスクを実行し、プロファイル構成を完了します。

- プロファイル管理ツールを使用した共通データベースの構成が完了したら、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認し、「終了」をクリックして終了します。また、別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページも閉じてください。ファースト・ステップ・コンソールを使用して、デプロイメント・マネージャーを開始します。
- 手動で実行するスクリプトを生成して実際のデータベース構成を先送りする場合は、以下のステップを実行します。
 - a. 「ファースト・ステップ・コンソールの起動」の横にあるチェック・ボックスをクリアし、「終了」をクリックしてプロファイル管理ツールを閉じます。また、別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページも閉じてください。
 - b. サイトの標準的なデータベース定義ツールと手順を使用して、プロファイル管理ツールにより生成されたスクリプトを編集して実行し、WPRCSDB データベース (または、システムで別の名前が設定されている場合はそれに相当するデータベース) を作成するか、または作成して構成する必要があります。このスクリプトの場所は、286 ページの『プロファイル管理ツールを使用した共通データベースおよび Common Event Infrastructure データベースの構成』トピックのステップ 2 (288 ページ) で指定しました。また、492 ページの『プロファイルの作成後または拡張後の共通データベースとテーブルの作成』または 493 ページの『プロファイルの作成後または拡張後の共通データベースでのテーブルの作成』にある、新規の共通データベースまたはテーブルを既存の共通データベースに手動で作成する方

法について説明している各トピックも参照してください。各データベースの構成が完了したら、69ページの『ファースト・ステップ・コンソールの開始』で説明されているように、プロファイルに関連付けられているファースト・ステップ・コンソールを開始します。

タスクの結果

WebSphere Process Server プロファイルを作成しました。

次のタスク

ファースト・ステップ・コンソールから「**デプロイメント・マネージャーの始動**」を選択して、サーバーが作動することを確認します。出力ウィンドウが開きます。次のようなメッセージが表示される場合、デプロイメント・マネージャーは正常に作動しています。

```
ADMU3000I: サーバー dmgr が e-ビジネス用にオープン。プロセス ID は 3072  
(Server dmgr open for e-business; process id is 3072)
```

デプロイメント環境の場合には、別のデータベースを作成して構成し、カスタム・プロファイルを作成してそれをご使用のデプロイメント・マネージャーに統合し、サーバーを作成し、ワークロード管理機能が必要な場合はクラスターを作成し、さらに、計画したインストール環境に固有のその他のタスクを実行する必要があります。計画した環境では、実行が必要なタスク、およびその実行順序を指示します。

インストールの計画について詳しくは、「[インストールの計画、バージョン 7.0](#)」PDF の各トピックを参照してください。WebSphere Process Server で必要とされるデータベースの詳細情報については、「[WebSphere Process Server for Multiplatforms バージョン 7.0 のインストールおよび構成](#)」PDF 内の『[WebSphere Process Server の構成](#)』>『[データベースの構成](#)』の各トピックを参照してください。または、WebSphere Process Server オンライン・インフォメーション・センターの各トピックを参照してください。

デプロイメント環境のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールの「**デプロイメント環境**」オプションを使用して、WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成および構成する方法について説明します。「**デプロイメント環境**」オプションを選択すると、カスタマイズした構成値を使用してプロファイルを構成し、提供されたパターンに基づいて新しいデプロイメント環境で使用することができます。

始める前に

このトピックでは、プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成していて、231ページの『[プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成](#)』の手順を実行していることを前提としています。すなわち、プロファイル管理ツールをすでに開始しており、デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成を選択し、「**デプロイメント環境**」プロファイル作成オプションを選択しているということです。

このタスクについて

「**デプロイメント環境**」プロファイル作成のオプションを選択して、ご使用のデプロイメント環境に対して、完全に構成されたプロファイルをセットアップします。このオプションは、WebSphere Process Server が動作するために必要なすべてのコンポーネントを構成してインストールします。以下のコンポーネントがこのオプションの一環として構成されます。

- Business Process Choreographer
- Common Event Infrastructure
- ビジネス・ルール・マネージャー
- Service Component Architecture

この構成のタイプでは、以下を実行できます。

- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- 共通データベースを構成します。
- 管理コンソールをデプロイします。
- 管理セキュリティーを使用可能にします。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権でサービスの作成が許可される場合は、サーバーの実行用のシステム・サービスを作成します。
- 使用するデプロイメント環境パターンを選択します。

231 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』の手順を実行すると、「プロファイル名およびロケーション」ページが表示されます。

手順

1. 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
 - プロファイルに固有の名前とディレクトリー・パスを指定するか、またはデフォルト値を受け入れます。

作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。

指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトでは、このディレクトリーは以下のロケーションにあります。

- **Linux** **UNIX** `install_root/profiles/profile_name`
- **Windows** `install_root¥profiles¥profile_name`

ここで、`profile_name` は指定した名前です。以下の場合は、エラー・メッセージが表示されます。

- 指定した `profile_name` が固有ではない。
- 指定したディレクトリーが空ではない。
- 使用しているユーザー ID に、このディレクトリーに対する十分な権限がない。

- プロファイルを作成するための十分なスペースがない。
- 「**デフォルトにするプロファイル**」チェック・ボックスを選択して、作成するプロファイルをデフォルト・プロファイルにする (コマンドが自動的にこのプロファイル処理するようにする) こともできます。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。

デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの bin ディレクトリーから実行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。詳しくは、158 ページの『複数プロファイル環境のプロファイル・コマンド』を参照してください。

- 「**次へ**」をクリックします。(「**戻る**」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このパネルで手動で名前を変更しなければならないことがあります。)

「ノード、ホスト、およびセルの名前」ページが表示されます。

2. 「ノード、ホスト、およびセルの名前」ページで、デプロイメント・マネージャーにノード、ホスト、およびセルの各名前を指定するか、またはデフォルト値を受け入れて「**次へ**」をクリックします。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。ノード、ホスト、セルの名前を設定するときに検討しなければならない予約語や問題点については、150 ページの『プロファイル、ノード、サーバー、ホスト、およびセルの命名の考慮事項』を参照してください。

「管理セキュリティー」ページが表示されます。

3. 管理セキュリティーを有効にし、管理コンソールにログオンするためのユーザー名およびパスワードを提供し、「**次へ**」をクリックします。

重要: 「デプロイメント環境プロファイル作成」を実行している場合は、管理セキュリティーが必要です。

「セキュリティー証明書 (第 1 部) (Security Certificate (Part 1))」ページが表示されます。

4. 「セキュリティー証明書 (第 1 部) (Security Certificate (Part 1))」ページで、デフォルトの個人証明書およびルート署名証明書を作成するか、個人証明書およびルート署名証明書を鍵ストア・ファイルからインポートして、「**次へ**」をクリックします。

両方の証明書を作成することも、両方の証明書をインポートすることも、一方の証明書を作成してもう一方の証明書をインポートすることもできます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場

合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を `trust.p12` ファイルに追加します。デフォルトの個人証明書またはルート署名証明書をインポートする場合は、パスとパスワードを指定し、インポートする証明書ごとに鍵ストア・タイプと鍵ストア別名を選択します。

「セキュリティ証明書 (第 2 部) (Security Certificate (Part 2))」ページが表示されます。

5. 「セキュリティ証明書 (第 2 部) (Security Certificate (Part 2))」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックします。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するか変更して、新しい証明書を作成できます。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、`WebAS` です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、`DataPower` 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの `Lightweight Third-Party Authentication (LTPA)` 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。

インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。

証明書をインポートして、その証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

6. プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認して、「次へ」をクリックします。

プロファイル管理ツールは、ほかの WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。

以下の条件が満たされる場合、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーによって実行されたインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている場合。
- ポートが現在使用中の場合。

「ポート値の割り当て」ページにアクセスするときポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポート競合が疑われる場合、プロファイルの作成後に調査できます。以下のファイル調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

- **Linux** **UNIX** `profile_root/properties/portdef.props`
- **Windows** `profile_root\properties\portdef.props`

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、WebSphere Application Server Network Deployment インフォメーション・センターのトピック『Updating ports in an existing profile』を参照してください。このトピックで説明されている `ws_ant` スクリプトを使用して `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

次のステップは、ご使用のプラットフォーム、およびインストールを `root` (管理者) ユーザーで行っているか、非 `root` ユーザーで行っているかによって異なります。

インストール・タイプ	次のステップ
Linux または Windows プラットフォームで <code>root</code> または管理者グループ特権を持っている場合	「Linux または Windows サービスの定義 (Linux or Windows Service Definition)」ページが表示されます。ステップに 7 に進みます。
それ以外のプラットフォームの場合、または Linux または Windows プラットフォームで非 <code>root</code> ユーザーとして実行している場合	「デプロイメント環境構成」ページが表示されます。ステップ 8 (266 ページ) に進んでください。

7. **Linux** **Windows** プロセスを Windows プラットフォーム上で Windows サービスとして実行するかどうか、または Linux プラットフォーム上で Linux サービスとして実行するかどうかを選択して、「次へ」をクリックします。

Windows Windows サービスをインストールする ID に管理者グループ特権が設定されている場合のみ、「Windows サービスの定義」ページが Windows プラットフォームに表示されます。プロファイルが Windows サービスとして構成されている場合、製品は、`startServer` または `startManager` コマンドによって開始されるプロセスに対応する Windows サービスを開始します。例えば、サ

ーバーまたはデプロイメント・マネージャーを Windows サービスとして構成し、startServer または startManager コマンドを実行すると、wasservice コマンドは定義されたサービスを開始します。

重要: 指定のユーザー・アカウントとしてログオンする場合は、サービスを実行するユーザーのユーザー ID とパスワードを指定し、さらに開始タイプ (デフォルトは Manual) を指定する必要があります。ユーザー ID の名前にスペースを使用することはできません。また、この ID は管理者グループに属し、拡張ユーザー権限の「サービスとしてログオン」を持っている必要があります。ユーザー ID が管理者グループに属していて、まだ拡張ユーザー権限がない場合は、プロファイル管理ツールにより、ユーザー ID に拡張ユーザー権限が付与されます。

プロファイルの作成時に追加された Windows サービスをプロファイルの削除時に除去できます。

プロファイルを Windows サービスとして実行する場合の IPv6 に関する考慮事項

Windows サービスとして実行するように作成されたプロファイルは、このサービスがローカル・システムとして実行するように構成されている場合、IPv6 の使用時には開始できません。ユーザー固有の環境変数を作成して、IPv6 を使用可能にします。この環境変数はローカル・システム変数ではなくユーザー変数であるため、その特定のユーザーで実行される Windows サービスのみが、この環境変数にアクセスできます。新規プロファイルが Windows サービスとして実行するように作成および構成されている場合、デフォルトでは、サービスはローカル・システムとして実行するように設定されます。WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Bus の Windows サービスによって実行が試みられる場合、このサービスは IPv6 が指定されているユーザー環境変数にアクセスできないため、IPv4 として開始を試みます。この場合、サーバーは正常に始動しません。この問題を解決するには、プロファイルの作成時に、WebSphere Process Server or WebSphere Enterprise Bus の Windows サービスが、ローカル・システムの代わりに IPv6 が指定されている環境変数を定義したユーザー ID と同じユーザー ID で実行されることを指定します。

Linux 「Linux サービスの定義」ページは、現在のオペレーティング・システムがサポート対象バージョンの Linux であり、現在のユーザーに適切な権限がある場合にのみ表示されます。

WebSphere Process Server によって、startManager または startManager コマンドで開始されたプロセス用の Linux サービスの開始が試みられます。例えば、サーバーまたはデプロイメント・マネージャーを Linux サービスとして構成し、startServer または startManager コマンドを実行すると、wasservice コマンドは定義されたサービスを開始します。

デフォルトでは、WebSphere Process Server は、Linux サービスとして実行するように選択されません。

このサービスを作成するためには、プロファイル管理ツールを実行するユーザーが root ユーザーでなければなりません。プロファイル管理ツールを root 以

外のユーザー ID で実行している場合は、「Linux サービスの定義」ページは表示されないため、サービスも作成されません。

サービスの実行に使用されるユーザー名を指定する必要があります。

Linux サービスを削除するためには、ユーザーが root ユーザーであるか、またはこのサービスを削除するための適切な特権を持っている必要があります。それ以外の場合は、root ユーザーがこのユーザーの代わりにサービスを削除するために実行できる除去スクリプトが作成されます。

8. 「デプロイメント環境構成」ページで、デプロイメント環境に対して、このデプロイメント・マネージャー・プロファイルで使用するパターンをクリックします。

以下のパターンのいずれかの隣にあるラジオ・ボタンを選択して、「次へ」をクリックします。

- **リモート・メッセージングおよびリモート・サポート:** アプリケーション・デプロイメント用に 1 つのクラスター、メッセージング・インフラストラクチャー用に 1 つのリモート・クラスター、および Common Event Infrastructure とその他のサポート・アプリケーション用に 1 つのリモート・クラスターを定義します。このパターンでは、大半のビジネス統合のニーズに適合するセットアップが構成されます。迷う場合は、このパターンを選択してください。
- **リモート・メッセージング:** アプリケーション・デプロイメント用に 1 つのクラスター、およびメッセージング・インフラストラクチャー用に 1 つのリモート・クラスターを定義します。Common Event Infrastructure とその他のサポート・アプリケーションが、アプリケーション・デプロイメント・ターゲット・クラスター上に構成されます。
- **単一クラスター:** アプリケーション・デプロイメント用に 1 つのクラスターを定義します。サポート・アプリケーションを持つメッセージング・インフラストラクチャーと Common Event Infrastructure の両方がアプリケーション・デプロイメント・クラスター上に構成されます。

詳しくは、以下のトピックを参照してください。

- **トポロジー・タイプおよびデプロイメント環境パターン。** デプロイメント環境パターンは、デプロイメント環境に含まれるコンポーネントとリソースの制約と要件を指定します。デプロイメント環境パターンは、お客様がデプロイメント環境を最も簡単な方法で作成できるよう支援することを目的とし、大半のビジネス要件を満たせるように設計されています。
- **IBM が提供するデプロイメント環境パターンの機能。** 堅固なデプロイメント環境を設計するためには、各クラスターが特定の IBM 提供のデプロイメント環境パターンまたはカスタム・デプロイメント環境に提供できる機能について理解しておく必要があります。この知識は、ニーズに最も合うデプロイメント環境パターンを正しく判別するのに役立ちます。

「データベースの構成」ページが表示されます。

9. 「データベース構成」ページで、Common Event Infrastructure データベース、システム・バスのメッセージング・データベース、およびすべての Business

Process Choreographer 関連のデータベースを含む、すべての WebSphere Process Server コンポーネントによって使用される共通データベースを構成します。

これらのコンポーネントに対して共通データベース以外のデータベースを使用する場合は、以下のオプションがあります。

- このデプロイメント環境プロファイルの作成を取り消し、代わりに管理コンソールを使用してデプロイメント環境を作成します。詳しくは、『デプロイメント環境の作成』を参照してください。
- 同じデータベース・ベンダーによって作成された異なるデータベース製品を使用する場合でも、このプロファイルの作成を続行し、後で管理コンソールでデータベース構成を変更できます。JDBC ドライバーとデータ・ソースの構成について詳しくは、WebSphere Server Network Deployment のインフォメーション・センターにある『JDBC プロバイダーおよびデータ・ソースの構成』を参照してください。

詳細については、トピック 286 ページの『プロファイル管理ツールを使用した共通データベースおよび Common Event Infrastructure データベースの構成』を参照してください。「データベース構成」情報ページと「データベース構成 (第 2 部)」情報ページの各フィールドの入力を完了したら、このステップに戻ります。プロファイル管理ツールによりデータベース構成の選択が検証され、誤りがある場合はメッセージが表示されます。例えば、存在するデータベース名を入力して新規データベースを作成した場合は、エラー・メッセージにより、そのデータベースが存在することが通知されます。

制約事項:

デプロイメント環境のデプロイメント・マネージャー・プロファイル作成の一部であるデータベース構成パネルには、データベース管理者特権が必要です。デプロイメント環境機能を使用する場合に、データベース製品として Derby ネットワーク・サーバー以外のデータベースを使用するときは、データベース構成パネルの「データベースで認証するユーザー名」フィールドで指定するユーザー ID は DBA 特権を持っている必要があります。

共通データベースを構成したら、「プロファイルの要約」ページが表示されます。

10. 「プロファイルの要約」ページで、「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

プロファイルの作成が完了すると、「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページに「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に作成されました。」というメッセージが表示されます。

重要: プロファイルの作成中にエラーが検出された場合は、正常終了のメッセージの代わりに他のメッセージが表示される可能性があります。その例と意味は次のとおりです。

- 「プロファイル管理ツールによりプロファイルが作成されましたが、エラーが発生しました」: プロファイルの作成が完了したが、エラーが生成されたことを示します。

- 「プロファイル管理ツールでプロファイルを作成できません」：プロファイルの作成が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile complete)」ページには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。

11. 共通データベースを手動で構成する必要があるかどうかに応じて、以下のいずれかのタスクを実行し、プロファイル構成を完了します。

- プロファイル管理ツールを使用した共通データベースの構成が完了したら、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認し、「終了」をクリックして終了します。また、別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページも閉じてください。ファースト・ステップ・コンソールを使用して、サーバーを始動します。
- 手動で実行するスクリプトを生成してデータベース構成を先送りする場合は、以下のステップを実行します。
 - a. 「ファースト・ステップ・コンソールの起動」の横にあるチェック・ボックスをクリアし、「終了」をクリックしてプロファイル管理ツールを閉じます。また、別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページも閉じてください。
 - b. サイトの標準的なデータベース定義ツールと手順を使用して、プロファイル管理ツールにより生成されたスクリプトを編集して実行し、WPRCSDB データベース（または、システムで別の名前が設定されている場合はそれに相当するデータベース）を作成するか、または作成して構成する必要があります。このスクリプトの場所は、286 ページの『プロファイル管理ツールを使用した共通データベースおよび Common Event Infrastructure データベースの構成』トピックのステップ 2 (288 ページ) で指定しました。492 ページの『プロファイルの作成後または拡張後の共通データベースとテーブルの作成』または 493 ページの『プロファイルの作成後または拡張後の共通データベースでのテーブルの作成』にある、新規の共通データベースまたはテーブルを既存の共通データベースに手動で作成する方法について説明している各トピックも参照してください。各データベースの構成が完了したら、69 ページの『ファースト・ステップ・コンソールの開始』で説明されているように、プロファイルに関連付けられているファースト・ステップ・コンソールを開始します。

タスクの結果

WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Bus のプロファイルが作成されました。

プロファイル内のノードには、名前が dmgr であるデプロイメント・マネージャーがあります。

次のタスク

デプロイメント・マネージャーを開始する前に、データベースがローカルに配置されている場合でも、データベース・インスタンスが実行されていることを確認します。次に、ファースト・ステップ・コンソールから「デプロイメント・マネージャ

一の始動」を選択して、サーバーが作動することを確認します。出力ウィンドウが開きます。次のようなメッセージが表示される場合、デプロイメント・マネージャーは正常に作動しています。

```
ADMU3000I: サーバー dmgr が e-ビジネス用にオープン。プロセス ID は 3072  
(Server dmgr open for e-business; process id is 3072)
```

デプロイメント環境内にあるカスタム・ノードを構成して、デプロイメント環境パターンを完了させます。

インストールの計画について詳しくは、「インストールの計画、バージョン 7.0」PDF の各トピックを参照してください。WebSphere Process Server で必要とされるデータベースの詳細情報については、「*WebSphere Process Server for Multiplatforms* バージョン 7.0 のインストールおよび構成」PDF 内の『*WebSphere Process Server* の構成』>『データベースの構成』の各トピックを参照してください。または、WebSphere Process Server オンライン・インフォメーション・センターの各トピックを参照してください。

関連タスク

526 ページの『デプロイメント環境のセットアップ』

デプロイメント環境をセットアップするには、デプロイメント環境定義を作成してから、環境を生成する必要があります。

標準的なカスタム・プロファイル (管理対象ノード) の作成:

プロファイル管理ツールの「標準 (Typical)」オプションを使用して、WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus のカスタム・プロファイルを作成および構成する方法について説明します。「標準 (Typical)」オプションを選択すると、デフォルトの構成設定でプロファイルが作成されます。

始める前に

このトピックでは、プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成していて、231 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』の手順を実行していることを前提としています。すなわち、プロファイル管理ツールをすでに開始しており、カスタム・プロファイルの拡張を選択し、標準的なプロファイル拡張オプションを選択しているということです。

このタスクについて

この構成のタイプでは、プロファイル管理ツールは以下のタスクを実行します。

- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホストの名前にデフォルト値を割り当てます。
- プロファイルの個人セキュリティ証明書を作成します。証明書には個人鍵と秘密鍵があり、各鍵のデフォルト値は WebAS です (このパスワードは変更する必要があります)。有効期間は 1 年です。
- 他の証明書に署名するためのルート署名セキュリティ証明書を作成します。証明書には個人鍵と秘密鍵があり、各鍵のデフォルト値は WebAS です (このパスワードは変更する必要があります)。有効期間は 15 年です。

ノードは、作成プロセス時に既存のデプロイメント・マネージャーに統合することができますし、後で addNode コマンドを使用して統合することもできます。プロフ

ファイルを作成プロセス時に統合することを決定した場合は、このツールによって共通データベースの構成がデプロイメント・マネージャーと同じデータベースに設定されます。統合しないことを決定した場合は、データベースは未構成のままになります。

231 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』の手順に従うと、「フェデレーション」ページが表示されます。

手順

1. 「フェデレーション」ページで、ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合をプロファイルの作成の一部としてここで実行するか、またはプロファイルの作成とは別に後で実行するかを選択します。
 - プロファイル作成の一部としてノードを統合することを選択した場合は、デプロイメント・マネージャーのホスト名または IP アドレスと SOAP ポート、および認証ユーザー ID とパスワード (デプロイメント・マネージャー上で管理セキュリティが使用可能になっている場合) を指定します。「**後でこのノードを統合する**」チェック・ボックスをクリアしたままにしておきます。次に、「**次へ**」をクリックします。

プロファイル管理ツールによって、デプロイメント・マネージャーが存在し、通信が可能であること、および認証ユーザー ID とパスワードがそのデプロイメント・マネージャーに有効であること (デプロイメント・マネージャーがセキュリティで保護されている場合) が検査されます。

重要: 以下の条件すべてに該当する場合にのみ、プロファイルの作成時にカスタム・ノードを統合してください。

- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がない。
- 他のノードは統合されていない (ノードの統合はシリアルライズする必要があります)。
- デプロイメント・マネージャーが稼働している。
- デプロイメント・マネージャーが WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャーである。WebSphere Process Server プロファイルは WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャーを使用できませんが、WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルは WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャーを使用できます。
- デプロイメント・マネージャーが、作成するプロファイルと同じか、それより高いリリース・レベルである。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっている。デフォルト・プロトコルは SOAP です。(優先コネクタ・タイプを確認するには、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールで「**システム管理**」>「**デプロイメント・マネージャー**」>「**管理サービス**」をクリックします。)

デプロイメント・マネージャーが実行中でないとき、またはほかの理由でデプロイメント・マネージャーを使用できないときに、カスタム・ノードを統合しようとする、警告ボックスが表示されて、続行できなくなります。この警告

ボックスが表示されたら、「OK」をクリックしてこの警告パネルを終了し、「フェデレーション」ページで別の選択を行ってください。

- ノードを後で統合することを選択してプロファイルの作成とは別に行う場合は、「後でこのノードを統合する」チェック・ボックスを選択して、「次へ」をクリックします。

addNode コマンドを使用してノードを統合する方法については、278 ページの『カスタム・ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合』を参照してください。addNode コマンドとそのパラメーターについては、WebSphere Application Server Network Deployment インフォメーション・センターのトピック『wsadmin スクリプトを使用した addNode コマンドの実行 (Using wsadmin scripting to run the addNode command)』を参照してください。

「プロファイルの要約」ページが表示されます。

2. 「プロファイルの要約」ページで、「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

プロファイルの作成が完了すると、「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページに「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に作成されました。」というメッセージが表示されます。

重要: プロファイルの作成中にエラーが検出された場合は、正常終了のメッセージの代わりに他のメッセージが表示される可能性があります。その例と意味は次のとおりです。

- 「プロファイル管理ツールによりプロファイルが作成されましたが、エラーが発生しました」: プロファイルの作成が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「プロファイル管理ツールでプロファイルを作成できません」: プロファイルの作成が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile complete)」ページには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。

3. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認し、「終了」をクリックして終了します。また、別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページも閉じてください。ファースト・ステップ・コンソールを使用して、製品資料にアクセスします。

タスクの結果

WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus のプロファイルが作成されました。

次のタスク

プロファイルの作成中にプロファイルを統合しなかった場合、ここで統合します。プロファイル内のノードを統合し、デプロイメント・マネージャーを使用してそのノードをカスタマイズするまでは、そのノードは空です。

高度なカスタム・プロファイル (管理対象ノード) の作成:

プロファイル管理ツールの「**拡張**」オプションを使用して、 WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus のカスタム・プロファイルを作成および構成する方法について説明します。「**拡張**」オプションを選択すると、カスタマイズした構成設定でプロファイルが作成されます。

始める前に

このトピックでは、プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成して、 231 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』の手順を実行していることを前提としています。すなわち、プロファイル管理ツールをすでに開始しており、カスタム・プロファイルの拡張を選択し、**高度な**プロファイル拡張オプションを選択しているということです。

このタスクについて

カスタム・プロファイルの構成中に、ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホストの名前などの設定に独自の値を指定することができます。ノードは、作成プロセス時に既存のデプロイメント・マネージャーに統合することができますし、後で `addNode` コマンドを使用して統合することもできます。

231 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』の手順を実行すると、「プロファイル名およびロケーション」ページが表示されます。

手順

1. 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
 - a. プロファイルに固有の名前とディレクトリー・パスを指定するか、またはデフォルト値を受け入れます。

作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。

指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルト・ディレクトリーは、プラットフォームに依存しています。

- **Linux** **UNIX** `install_root/profiles/profile_name`
- **Windows** `install_root¥profiles¥profile_name`

ここで、`profile_name` は指定した名前です。以下の場合は、エラー・メッセージが表示されます。

- 指定した `profile_name` が固有ではない。
- 指定したディレクトリーが空ではない。
- 使用しているユーザー ID に、このディレクトリーに対する十分な権限がない。
- プロファイルを作成するための十分なスペースがない。

- b. 「デフォルトにするプロファイル」チェック・ボックスを選択して、作成するプロファイルをデフォルト・プロファイルにする (コマンドが自動的にこのプロファイル処理するようにする) こともできます。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

マシンで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。

デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの bin ディレクトリーから実行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。マシン上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。詳しくは、158 ページの『複数プロファイル環境のプロファイル・コマンド』を参照してください。

プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出しますが、指定されたポートを使用する可能性がある他のアプリケーションのポートは検出しません。カスタム・プロファイルを統合すると、addNode コマンドは、競合しないポートを使用します。つまり、プロファイルを作成する際にはデフォルトのポート割り当てを使用し、addNode コマンドでノードを統合する際に、競合しないポートを指定することができます。ポート割り当ては、サーバー上で固有でなければなりません。別のサーバーのサーバー・プロセスは、競合なしで同じポート割り当てを使用することができます。

- c. 「次へ」をクリックします。(「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このパネルで手動で名前を変更しなければならないことがあります。)

「ノード名およびホスト名」ページが表示されます。

2. 「ノード名およびホスト名」ページで、プロファイルにノード名およびホスト名を指定するか、またはデフォルト値を受け入れて「次へ」をクリックします。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。命名時に考慮する必要のある予約済みの用語やその他の問題については、150 ページの『プロファイル、ノード、サーバー、ホスト、およびセルの命名の考慮事項』を参照してください。

「フェデレーション (Federation)」ページが表示されます。

3. 「フェデレーション」ページで、ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合をプロファイルの作成の一部としてここで実行するか、またはプロファイルの作成とは別に後で実行するかを選択します。
 - プロファイル作成の一部としてノードを統合することを選択した場合は、デプロイメント・マネージャーのホスト名または IP アドレスと SOAP ポート、および認証ユーザー ID とパスワード (デプロイメント・マネージャー上で管理セキュリティが使用可能になっている場合) を指定します。「後でこのノードを統合する」チェック・ボックスをクリアしたままにしておきます。次に、「次へ」をクリックします。

プロファイル管理ツールによって、デプロイメント・マネージャーが存在し、通信が可能であること、および認証ユーザー ID とパスワードがそのデプロイメント・マネージャーに有効であること (デプロイメント・マネージャーがセキュリティで保護されている場合) が検査されます。

重要:

以下の状況のいずれかに該当する場合は、プロファイルの拡張時にカスタム・ノードを統合しないでください。

- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がある。
- 別のプロファイルが統合されている (ノードの統合はシリアル化する必要があります)。
- デプロイメント・マネージャーが稼働していないか、実行しているかどうか不明。
- そのデプロイメント・マネージャーは、まだ WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャーに拡張されていない。
- デプロイメント・マネージャーが、作成するプロファイルと同じか、それより高いリリース・レベルではない。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっていない。
- デプロイメント・マネージャーが、デフォルトではないリモート・メソッド呼び出し (RMI) を優先 Java Management Extensions (JMX) コネクタとして使用するよう再構成されている。(優先コネクタ・タイプを確認するには、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールで「システム管理」>「デプロイメント・マネージャー」>「管理サービス」を選択します。)

デプロイメント・マネージャーが実行中でないとき、またはほかの理由でデプロイメント・マネージャーを使用できないときに、カスタム・ノードを統合しようとする、警告ボックスが表示されて、続行できなくなります。この警告ボックスが表示されたら、「OK」をクリックしてこの警告パネルを終了し、「フェデレーション」ページで別の選択を行ってください。

- ノードを後で統合することを選択してプロファイルの作成とは別に行う場合は、「後でこのノードを統合する」チェック・ボックスを選択して、「次へ」をクリックします。

addNode コマンドを使用してノードを統合する方法については、278 ページの『カスタム・ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合』を参照してください。addNode コマンドとそのパラメーターについては、WebSphere Application Server Network Deployment インフォメーション・センターのトピック『wsadmin スクリプトを使用した addNode コマンドの実行 (Using wsadmin scripting to run the addNode command)』を参照してください。

「セキュリティ証明書 (第 1 部) (Security Certificate (Part 1))」ページが表示されます。

4. 「セキュリティー証明書 (第 1 部) (Security Certificate (Part 1))」 ページで、デフォルトの個人証明書およびルート署名証明書を作成するか、個人証明書およびルート署名証明書を鍵ストア・ファイルからインポートして、「次へ」をクリックします。

両方の証明書を作成することも、両方の証明書をインポートすることも、一方の証明書を作成してもう一方の証明書をインポートすることもできます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を `trust.p12` ファイルに追加します。デフォルトの個人証明書またはルート署名証明書をインポートする場合は、パスとパスワードを指定し、インポートする証明書ごとに鍵ストア・タイプと鍵ストア別名を選択します。

「セキュリティー証明書 (第 2 部) (Security Certificate (Part 2))」 ページが表示されます。

5. 証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックします。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するか変更して、新しい証明書を作成できます。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。

インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。

証明書をインポートして、その証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

次のステップは、プロファイル作成プロセスの一部としてプロファイルを統合することを選択したかどうかによって異なります。

アクション	次のステップ
プロファイル作成の一環としてプロファイルを統合してある	「ポート値割り当て (Port Values Assignment)」ページが表示されます。ステップ 6 に進んでください。
プロファイル作成の一環としてプロファイルを統合していない	「データベースの構成」ページが表示されません。ステップ 7 に進んでください。

6. プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認して、「次へ」をクリックします。

プロファイル管理ツールは、ほかの WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。

以下の条件が満たされる場合、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーによって実行されたインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている場合。
- ポートが現在使用中の場合。

「ポート値の割り当て」ページにアクセスするときにはポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポート競合が疑われる場合、プロファイルの作成後に調査できます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

- **Linux** **UNIX** `profile_root/properties/portdef.props`
- **Windows** `profile_root%properties%portdef.props`

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、WebSphere Application Server Network Deployment インフォメーション・センターのトピック『Updating ports in an existing profile』を参照してください。このトピックで説明されている `ws_ant` スクリプトを使用して `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

「データベースの構成」ページが表示されます。

7. 「データベース構成」ページで、以下の手順を実行します。

- a. データベース製品を確認します。このカスタム・プロファイルの統合先のデプロイメント・マネージャーで使用されているデータベースと一致するデータベースが表示されます。
- b. データベースの JDBC ドライバー・クラス・パス・ファイルのロケーション (ディレクトリー) を指定します。Derby Network Server、Derby Network Server 40、または DB2 Universal Database の各デフォルト値を受け入れることができます。
- c. 「次へ」をクリックします。

「プロファイルの要約」ページが表示されます。

8. 「プロファイルの要約」ページで、「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

プロファイルの作成が完了すると、「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページに「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に作成されました。」というメッセージが表示されます。

重要: プロファイルの作成中にエラーが検出された場合は、正常終了のメッセージの代わりに他のメッセージが表示される可能性があります。その例と意味は次のとおりです。

- 「プロファイル管理ツールによりプロファイルが作成されましたが、エラーが発生しました」: プロファイルの作成が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「プロファイル管理ツールでプロファイルを作成できません」: プロファイルの作成が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile complete)」ページには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。

9. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認し、「終了」をクリックして終了します。また、別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページも閉じてください。ファースト・ステップ・コンソールを使用して、製品資料にアクセスします。

タスクの結果

WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus のプロファイルが作成されました。

次のタスク

プロファイル内のノードを統合し、管理コンソールを使用してそのノードをカスタマイズするまでは、そのノードは空です。

デプロイメント環境で、データベースを作成して構成し、他のカスタム・プロファイルを作成してそれをご使用のデプロイメント・マネージャーに統合し、サーバーを作成し、ワークロード管理機能が必要な場合はクラスターを作成し、さらに計画したインストール環境に固有のその他のタスクを実行する必要があります。計画した環境では、実行が必要なタスク、およびその実行順序を指示します。

インストールの計画について詳しくは、「インストールの計画、バージョン 7.0」PDF の各トピックを参照してください。WebSphere Process Server で必要とされるデータベースの詳細情報については、「*WebSphere Process Server for Multiplatforms* バージョン 7.0 のインストールおよび構成」PDF 内の『*WebSphere Process Server* の構成』>『データベースの構成』の各トピックを参照してください。または、WebSphere Process Server オンライン・インフォメーション・センターの各トピックを参照してください。

カスタム・ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合:

addNode コマンドを使用して、カスタム・ノードをデプロイメント・マネージャー・セルに統合できます。以下の説明に従って、カスタム・ノードの統合およびデプロイのプロセスを実行します。

始める前に

この手順を実行する前に、以下の前提条件を確認してください。

- WebSphere Process Server がインストール済みであること、および WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャーとカスタム・プロファイルが作成済みである。この手順では、カスタム・プロファイルの統合がその作成または拡張中に (プロファイル管理ツールまたは manageprofiles コマンド行ユーティリティーを使用して) 行われていないことが前提となっています。
- デプロイメント・マネージャーが稼働している。稼働していない場合は、ファースト・ステップ・コンソールから「**デプロイメント・マネージャーの始動**」を選択するか、または以下のコマンドを入力してデプロイメント・マネージャーを始動します。ここで、*profile_root* はデプロイメント・マネージャー・プロファイルのインストール場所を表します。

- **Linux** **UNIX** *profile_root/bin/startManager.sh*

- **Windows** *profile_root¥bin¥startManager.bat*

- デプロイメント・マネージャーが、WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャーに拡張されている。WebSphere Process Server プロファイルは WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャーを使用できませんが、WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルは WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャーを使用できます。
- デプロイメント・マネージャーのリリース・レベルが、作成または拡張されたカスタム・プロファイルと同じか、それより高い。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっている。デフォルト・プロトコルは SOAP です。
- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がない。

このタスクについて

カスタム・ノードをデプロイメント・マネージャーが管理できるように、カスタム・ノードを統合します。addNode コマンドを使用し、カスタム・プロファイルをデプロイメント・マネージャー・セルに統合します。

手順

1. 統合するカスタム・プロファイルの `bin` ディレクトリーに移動します。 コマンド・ウィンドウを開き、(コマンド行から) プラットフォームに応じて以下のディレクトリーのいずれかに移動します (ここで `profile_root` はカスタム・プロファイルのインストール・ロケーションを表します)。

- `Linux` `UNIX` `profile_root/bin`
- `Windows` `profile_root\bin`

2. `addNode` コマンドを実行します。

セキュリティーが有効になっていない場合は、コマンド行から以下のいずれかのコマンドを発行します。

- `Linux` `UNIX` `./addNode.shdeployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port`
- `Windows` `addNode.batdeployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port`

セキュリティーが使用可能である場合は、コマンド行から以下のいずれかのコマンドを発行します。

- `Linux` `UNIX` `./addNode.shdeployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port-usernameuserID_for_authentication-passwordpassword_for_authentication`
- `Windows` `addNode.batdeployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port-usernameuserID_for_authentication-passwordpassword_for_authentication`

出力ウィンドウが開きます。次のようなメッセージが表示されたら、カスタム・プロファイルは正常に統合されています。

```
ADMU0003I: ノード DMNDID2Node03 は正常に統合されました。  
(Node DMNDID2Node03 has been successfully federated.)
```

タスクの結果

カスタム・プロファイルはデプロイメント・マネージャーに統合されました。`addNode` コマンドとそのパラメーターについては、WebSphere Application Server Network Deployment インフォメーション・センターのトピック『`wsadmin` スクリプトを使用した `addNode` コマンドの実行 (Using `wsadmin` scripting to run the `addNode` command)』を参照してください。

次のタスク

カスタム・プロファイルを統合したら、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールに移動して空のノードをカスタマイズするか、新規のサーバーを作成します。

デプロイメント環境のカスタム・プロファイル (管理対象ノード) の作成:

プロファイル管理ツールの「デプロイメント環境」オプションを使用して、WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus のカスタム・プ

ロファイルを作成および構成する方法について説明します。「**デプロイメント環境**」オプションを選択すると、カスタマイズした構成値を使用してプロファイルを作成し、既存のデプロイメント環境パターンで使用することができます。

始める前に

このトピックでは、プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成して、231 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』の手順を実行していることを前提としています。すなわち、プロファイル管理ツールをすでに開始しており、カスタム・プロファイルの作成を選択し、「**デプロイメント環境**」プロファイル作成オプションを選択しているということです。

このタスクについて

「**デプロイメント環境**」プロファイル作成のオプションを選択して、ご使用のデプロイメント環境に対して、完全に構成されたプロファイルをセットアップします。このオプションは、WebSphere Process Server が動作するために必要なすべてのコンポーネントを構成してインストールします。以下のコンポーネントがこのオプションの一環として構成されます。

- Business Process Choreographer
- Common Event Infrastructure
- Business Rules Manager
- Service Component Architecture

この構成のタイプでは、以下のタスクを実行できます。

- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホストの名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- デプロイメント環境パターンが既に定義されている既存のデプロイメント・マネージャーにノードを統合する方法を指定します。
- そのデプロイメント環境に定義するクラスター、および共通データベースの構成用の独自の値を指定します。

231 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』の手順を実行すると、「プロファイル名およびロケーション」ページが表示されます。

手順

1. 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
 - a. プロファイルに固有の名前とディレクトリー・パスを指定するか、またはデフォルト値を受け入れます。

作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。

指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルト・ディレクトリーは、プラットフォームに依存しています。

- `Linux` `UNIX` `install_root/profiles/profile_name`

- **Windows** `install_root\profiles\profile_name`

ここで、`profile_name` は指定した名前です。以下の場合は、エラー・メッセージが表示されます。

- 指定した `profile_name` が固有ではない。
 - 指定したディレクトリーが空ではない。
 - 使用しているユーザー ID に、このディレクトリーに対する十分な権限がない。
 - プロファイルを作成するための十分なスペースがない。
- b. 「**デフォルトにするプロファイル**」チェック・ボックスを選択して、作成するプロファイルをデフォルト・プロファイルにする (コマンドが自動的にこのプロファイル进行处理するようにする) こともできます。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。

デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから実行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。詳しくは、158 ページの『複数プロファイル環境のプロファイル・コマンド』を参照してください。

プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出しますが、指定されたポートを使用する可能性がある他のアプリケーションのポートは検出しません。カスタム・プロファイルを統合すると、`addNode` コマンドは、競合しないポートを使用します。つまり、プロファイルを作成する際にはデフォルトのポート割り当てを使用することができ、ノードを統合する際に、`addNode` コマンドが競合しないポートを指定するようにすることができます。ポート割り当ては、サーバー上で固有でなければなりません。別のサーバーのサーバー・プロセスは、競合なしで同じポート割り当てを使用することができます。

- c. 「**次へ**」をクリックします。(「**戻る**」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このパネルで手動で名前を変更しなければならないことがあります。)

「ノード名およびホスト名」ページが表示されます。

2. 「ノード名およびホスト名」ページで、プロファイルにノード名およびホスト名を指定するか、またはデフォルト値を受け入れて「**次へ**」をクリックします。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。命名時に考慮する必要のある予約済みの用語やその他の問題については、150 ページの『プロファイル、ノード、サーバー、ホスト、およびセルの命名の考慮事項』を参照してください。

「フェデレーション (Federation)」ページが表示されます。

3. 「フェデレーション」 ページで、プロファイルの作成の一部として、ここでノードをデプロイメント・マネージャーに統合する必要があります。「**後でこのノードを統合する**」チェック・ボックスは、このタイプのプロファイルの作成用の「フェデレーション」 ページ上には表示されません。 デプロイメント・マネージャーのホスト名または IP アドレスと SOAP ポート、および認証ユーザー ID とパスワードを指定します。次に、「**次へ**」 をクリックします。

デプロイメント・マネージャーの SOAP ポート番号を調べるには、このカスタム・プロファイルに関連付けられているデプロイメント・マネージャーの `dmgr_profile_root/logs` ディレクトリーに移動します。このディレクトリーで、`AboutThisProfile.txt` ファイルを開き、「デプロイメント・マネージャーの SOAP コネクター・ポート:」 という項目の値を調べます。

プロファイル管理ツールによって、デプロイメント・マネージャーが存在し、通信が可能であること、および認証ユーザー ID とパスワードがそのデプロイメント・マネージャーに有効であることが検査されます。また、有効なデプロイメント環境がデプロイメント・マネージャー上に定義されていることも検査され、パターンとデータベース・タイプがデプロイメント・マネージャーから取得されます。

デプロイメント・マネージャーが実行中でないとき、またはほかの理由でデプロイメント・マネージャーを使用できないときに、カスタム・ノードを統合しようとする、警告ボックスが表示されて、続行できなくなります。この警告ボックスが表示される場合、システムに必要な変更を行って問題を修正し、「**次へ**」 をクリックします。

「セキュリティ証明書 (第 1 部) (Security Certificate (Part 1))」 ページが表示されます。

4. 「セキュリティ証明書 (第 1 部) (Security Certificate (Part 1))」 ページで、デフォルトの個人証明書およびルート署名証明書を作成するか、個人証明書およびルート署名証明書を鍵ストア・ファイルからインポートして、「**次へ**」 をクリックします。

両方の証明書を作成することも、両方の証明書をインポートすることも、一方の証明書を作成してもう一方の証明書をインポートすることもできます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を `trust.p12` ファイルに追加します。デフォルトの個人証明書またはルート署名証明書をインポートする場合は、パスとパスワードを指定し、インポートする証明書ごとに鍵ストア・タイプと鍵ストア別名を選択します。

「セキュリティ証明書 (第 2 部) (Security Certificate (Part 2))」 ページが表示されます。

5. 「セキュリティ証明書 (第 2 部) (Security Certificate (Part 2))」 ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「**次へ**」 をクリックします。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するか変更して、新しい証明書を作成できます。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効

で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。

インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。

証明書をインポートして、その証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

6. プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認して、「次へ」をクリックします。

プロファイル管理ツールは、ほかの WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。

以下の条件が満たされる場合、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーによって実行されたインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている場合。
- ポートが現在使用中の場合。

「ポート値の割り当て」ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行わ

れる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポート競合が疑われる場合、プロファイルの作成後に調査できます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

- **Linux** **UNIX** `profile_root/properties/portdef.props`
- **Windows** `profile_root\properties\portdef.props`

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、WebSphere Application Server Network Deployment インフォメーション・センターのトピック『Updating ports in an existing profile』を参照してください。このトピックで説明されている `ws_ant` スクリプトを使用して `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

「デプロイメント環境構成」ページが表示されます。

7. 「デプロイメント環境構成」ページで、少なくとも 1 つのクラスターを選択し、このノードをデプロイメント環境パターンに割り当て、「次へ」をクリックします。デプロイメント・マネージャーで前に定義されたデプロイメント環境パターンに基づいて、以下のクラスターが 1 つから 3 つ、ページに表示されます。

表 50. 既存のデプロイメント・マネージャー上のデプロイメント環境パターンによって提供されるクラスター

デプロイメント・マネージャーのデプロイメント環境パターン	提供されるクラスター
リモート・メッセージングおよびリモート・サポート	<ul style="list-style-type: none"> • アプリケーション・デプロイメントのターゲット: ユーザー・アプリケーションをデプロイする必要があるクラスター 1 つで構成されます。 • メッセージング・インフラストラクチャー: メッセージング・エンジンが配置されるクラスター 1 つで構成されます。 • サポート・インフラストラクチャー: ご使用のシステムの管理に使用される Common Event Infrastructure サーバーおよびその他のインフラストラクチャー・サービスをホスティングするクラスター 1 つで構成されます。

表 50. 既存のデプロイメント・マネージャー上のデプロイメント環境パターンによって提供されるクラスター (続き)

デプロイメント・マネージャーのデプロイメント環境パターン	提供されるクラスター
リモート・メッセージング	<ul style="list-style-type: none"> • アプリケーション・デプロイメントのターゲット: ユーザー・アプリケーションをデプロイする必要があるクラスター 1 つで構成されます。リモート・メッセージングのデプロイメント環境パターンを使用すると、アプリケーション・デプロイメントのターゲット・クラスターは、サポート・インフラストラクチャー・クラスターの機能も果たします。 • メッセージング・インフラストラクチャー: バス・メンバーが配置されている 1 つのクラスターから構成されます。
単一クラスター	<ul style="list-style-type: none"> • アプリケーション・デプロイメントのターゲット: ユーザー・アプリケーションをデプロイする必要があるクラスター 1 つで構成されます。単一クラスターのデプロイメント環境パターンを使用すると、アプリケーション・デプロイメントのターゲット・クラスターは、メッセージング・インフラストラクチャー・クラスターおよびサポート・インフラストラクチャー・クラスターの機能も果たします。

詳しくは、以下のトピックを参照してください。

- **トポロジー・タイプおよびデプロイメント環境パターン。** デプロイメント環境パターンは、デプロイメント環境に含まれるコンポーネントとリソースの制約と要件を指定します。 デプロイメント環境パターンは、お客様がデプロイメント環境を最も簡単な方法で作成できるように支援することを目的とし、大半のビジネス要件を満たせるように設計されています。
- **IBM が提供するデプロイメント環境パターンの機能。** 堅固なデプロイメント環境を設計するためには、各クラスターが特定の IBM 提供のデプロイメント環境パターンまたはカスタム・デプロイメント環境で提供できる機能について理解しておく必要があります。この知識は、ニーズに最も合うデプロイメント環境パターンを正しく判別するのに役立ちます。

「データベースの構成」ページが表示されます。

8. 「データベース構成」ページで、以下の手順を実行します。

- a. データベース製品を確認します。このカスタム・プロファイルの統合先のデプロイメント・マネージャーで使用されているデータベースと一致するデータベースが表示されます。

注: Derby Network Server、DB2 for i5/OS (ツールボックス)、および DB2 for IBM i (ツールボックス) には、ローカルとリモートの両方でアクセスできます。

- b. データベースの JDBC ドライバー・クラス・パス・ファイルのロケーション (ディレクトリ) を指定します。Derby Network Server および DB2 Universal Database の各デフォルト値を受け入れることができます。
- c. 「次へ」をクリックします。

「プロファイルの要約」ページが表示されます。

9. 「プロファイルの要約」ページで、「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

プロファイルの作成が完了すると、「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページに「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に作成されました。」というメッセージが表示されます。

重要: プロファイルの作成中にエラーが検出された場合は、正常終了のメッセージの代わりに他のメッセージが表示される可能性があります。その例と意味は次のとおりです。

- 「プロファイル管理ツールによりプロファイルが作成されましたが、エラーが発生しました」: プロファイルの作成が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「プロファイル管理ツールでプロファイルを作成できません」: プロファイルの作成が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile complete)」ページには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。

10. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認し、「終了」をクリックして終了します。また、別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページも閉じてください。ファースト・ステップ・コンソールを使用して、製品資料にアクセスします。

タスクの結果

WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus のプロファイルが作成されました。

次のタスク

デプロイメント・マネージャーを使用して、ノードをカスタマイズします。割り当てられていないクラスター・メンバーがある場合は、カスタム・ノードをさらに追加することができます。

関連タスク

526 ページの『デプロイメント環境のセットアップ』

デプロイメント環境をセットアップするには、デプロイメント環境定義を作成してから、環境を生成する必要があります。

プロファイル管理ツールを使用した共通データベースおよび Common Event Infrastructure データベースの構成:

選択された WebSphere Process Server コンポーネントを操作するには、共通 データベースと Common Event Infrastructure ローカル・データベースというデータベースが必要になります。「データベース構成」ページで指定した値を使用すると、プロファイル管理ツールは自動的に共通データベースおよびスタンドアロン・サーバー・プロファイル用の Common Event Infrastructure データベースをローカル・システム上に作成します。さらに、必要なテーブルもすべて作成されます。インストール済み環境で実際に作業するには、これらのデータベースを構成する必要があります。

始める前に

この手順では、プロファイル管理ツールをすでに開始しており、「高度なプロファイル作成」または「デプロイメント環境プロファイル作成」あるいは「高度なプロファイル拡張」または「デプロイメント環境プロファイル拡張」オプションによって、プロファイルの作成または拡張を選択済みであることを前提とします。以下のうちいずれか 1 つのトピックの手順を実行します。

- 237 ページの『高度なスタンドアロン・サーバー・プロファイルの作成』
- 363 ページの『高度なスタンドアロン・サーバー・プロファイルの拡張』
- 252 ページの『高度なデプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成』
- 373 ページの『高度なデプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張』
- 260 ページの『デプロイメント環境のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成』

このトピックでは、「データベース構成」ページで実行する必要がある手順のステップを示します。

このタスクについて

以下の WebSphere Process Server コンポーネントは、共通データベースを使用します。

- Application Scheduler
- ビジネス・ルール・グループ
- メディエーション
- リカバリー
- リレーションシップ・サービス
- セレクター
- イベント順序付け (ロック・マネージャー)
- Enterprise Service Bus ロガー・メディエーション・プリミティブ
- メッセージング・エンジン (ステップ 6 (290 ページ) で説明されている「メッセージング・エンジン (ME) ではこのデータベースを使用します。」チェック・ボックスを選択した場合)

Common Event Infrastructure コンポーネントは、Common Event Infrastructure データベースを使用します。

WebSphere Process Server 製品で使用される各種のデータベースおよびデータベース表について詳しくは、『データベースの選択』を参照してください。

重要: Derby Network Server または Derby Network Server 40 をデータベース製品として選択する場合、データベース・ホストがローカルの場合でも、サーバーがプ

ロファイルの作成または拡張時に指定したホストとポートで稼働していることを確認してください。プロファイルを作成または拡張した後のみ、サーバーが実行中であることを確認できます。

手順

1. 「**データベース製品の選択**」フィールドで、使用するデータベース製品を選択するか、またはデフォルト値の Derby Embedded または Derby Embedded 40 (スタンドアロン・サーバー・プロファイル用)、あるいは Derby Network Server または Derby Network Server 40 (デプロイメント・マネージャー・プロファイル用) を受け入れます。

制約事項: Informix Dynamic Server、および Microsoft SQL Server は、デプロイメント環境構成を使用したデプロイメント・マネージャー上ではサポートされません。

2. プロファイル作成または拡張プロセスで作成されるデータベース作成および構成用のスクリプトを、デフォルト・ロケーション以外の場所に格納するには、「**生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーのオーバーライド**」チェック・ボックスを選択して、「**データベース・スクリプトの出力ディレクトリー**」フィールドに新しいロケーションを指定します。プロファイル作成または拡張プロセスによって作成されるスクリプトをユーザーまたはデータベース管理者が手動で実行すると、新規データベースとそれに必要なテーブルを作成することができます (プロファイルの作成または拡張時にこれらを作成しなかった場合)。このプロセスでは、すべてのプロファイル・タイプに使用される共通データベース用のスクリプトと、スタンドアロン・サーバー・プロファイルに使用される Common Event Infrastructure データベース用のスクリプトが作成されます。

データベース用のデフォルト・ロケーションは以下のとおりです。

- Common Event Infrastructure データベースの場合:

```
- Linux UNIX install_root/profiles/profile  
name/dbscripts/CEI_ceiDbName
```

```
- Windows install_root%profiles%profile name%dbscripts%CEI_ceiDbName
```

- 共通データベースの場合:

```
- Linux UNIX install_root/profiles/profile  
name/dbscripts/CommonDB/dbType/dbName
```

```
- Windows install_root%profiles%profile  
name%dbscripts%CommonDB%dbType%dbName
```

選択したデータベース製品に対し、このページ内の「**データベース・スクリプトの実行を遅延 (リモート・データベースを使用する場合は選択する必要がある)**」チェック・ボックスを選択して、データベースの自動作成と自動構成を実行しないようにすることができます (ステップ 5 (290 ページ) の説明を参照)。

3. 共通データベース名を入力するか、またはデフォルト値を受け入れます。

独立補助ストレージ・プール (IASP: Independent Auxiliary Storage Pool) を使用する IBM i 上のデータベースの名前は、IASP という名前である可能性があります。

デフォルトの共通データベース名は、データベース製品に基づいて以下のように異なります。

- *SYSBAS for DB2 for i5/OS (ツールボックス) および DB2 for IBM i (ツールボックス)
- WPRCSDB 他のすべてのデータベース製品用

既存のデータベースを使用する場合は、この名前がそのデータベースの名前と一致していなければなりません。新規データベースを作成する場合、指定した名前が既に別の WebSphere Process Server プロファイルに関連付けられていた場合は、異なるデータベース名を使用する必要があります。

注: この制限は、IBM i には適用されません。IBM i 上のすべてのプロファイルで同じデータベース名が使用されます。

注: Oracle データベース名 (dbName) は Oracle ID (SID) です。テーブルを作成する際は、このデータベース名が存在している必要があります。スタンドアロン・サーバー・プロファイルの作成時には、それを共通データベースと Common Event Infrastructure データベース間で共有することができます。新規プロファイルを作成する前に、すべての Oracle データベース・リソースを削除することをお勧めします。これは、Common Event Infrastructure データベースによってテーブル・スペースなどの固有のデータベース・リソースが作成されるため、そのデータベース・リソースが Oracle サーバーに既に存在すると障害が発生してしまうためです。

4. スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合のみ: Common Event

Infrastructure データベース名を入力するか、またはデフォルト値を受け入れます。

制約事項: このフィールドが表示されるのは、スタンドアロン・サーバー・プロファイルの作成時または拡張時のみです。

独立補助ストレージ・プール (IASP: Independent Auxiliary Storage Pool) を使用する IBM i 上のデータベースの名前は、IASP という名前である可能性があります。

デフォルトの Common Event Infrastructure データベース名は、データベース製品に基づいて以下のように異なります。

- *SYSBAS for DB2, i5/OS (ツールボックス)、および DB2 for IBM i (ツールボックス)
- orcl Oracle 用
- EVENT: 他のすべてのデータベース製品用。

既存のデータベースを使用する場合は、この名前がそのデータベースの名前と一致していなければなりません。新規データベースを作成する場合、指定した名前が既に別の WebSphere Process Server プロファイルに関連付けられていた場合は、異なるデータベース名を使用する必要があります。

注: この制限は、IBM i には適用されません。IBM i 上のすべてのプロファイルで同じデータベース名が使用されます。

- 自動的にローカル・データベースが作成および構成されることも、プロファイルの作成または拡張時に既存のローカル・データベースに表が作成されることも望まない場合は、「データベース・スクリプトの実行を遅延 (リモート・データベースを使用する場合は選択する必要がある)」チェック・ボックスを選択します。このチェック・ボックスを選択しなかった場合は、ローカル・データベースが作成されます。このオプションを選択した場合は、ユーザーまたはデータベース管理者が、このページ上の「データベース・スクリプトの出力ディレクトリー」フィールドで指定された場所に格納されているスクリプトを手動で実行する必要があります。

手動によるデータベースの作成および構成手順については、以下のトピックを参照してください。

- 新規の共通データベースの作成、または既存のデータベース内のテーブルの作成については、492 ページの『プロファイルの作成後または拡張後の共通データベースとテーブルの作成』または 493 ページの『プロファイルの作成後または拡張後の共通データベースでのテーブルの作成』を参照してください。
- スタンドアロン・サーバー・プロファイルのみの場合:** 新規の Common Event Infrastructure データベースの作成については、『データベース構成スクリプトの手動実行』を参照してください。

重要: 以下のディレクトリーにある共通データベース・スクリプトは使用しないでください (変数の `db_type` は、サポートされるデータベース製品を表します)。

- `Linux` `UNIX` `install_root/dbscripts/CommonDB/db_type`
- `Windows` `install_root¥dbscripts¥CommonDB¥db_type`

これらのデフォルト・スクリプトは、プロファイル作成または拡張プロセスによって更新されていません。

制約事項: 以下の構成の場合、「データベース・スクリプトの実行を遅延 (リモート・データベースを使用する場合は選択する必要がある)」オプションは選択できません。

- 任意のプロファイル・タイプに対して Derby Embedded、Derby Embedded 40、Derby Network Server、または Derby Network Server 40 製品を選択した場合。
- 「デプロイメント環境」オプションを使用して、デプロイメント・マネージャーを作成することを選択した場合。

次のステップは、スタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成または拡張する場合とデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成または拡張する場合とで異なります。

作成または拡張するプロファイルのタイプ	次のステップ
スタンドアロン・サーバー	ステップ 6 に進んでください。
デプロイメント・マネージャー	ステップ 8 (291 ページ) に進んでください。

- スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合のみ:** メッセージング・エンジンでファイル・ストアを使用するには、「メッセージング・エンジン (ME) では

ファイル・ストアを使用します。(Use a file store for Messaging Engines (MEs))」チェック・ボックスを選択します。このチェック・ボックスを選択すると、メッセージング・エンジンがファイル・ストア上に作成および構成されず (Common Event Infrastructure のメッセージング・エンジンを除きます。このメッセージング・エンジンでは、このオプションを選択しても、Derby Embedded または Derby Embedded 40 のローカル・データベースが使用されます)。このチェック・ボックスを選択せず、7 のステップで説明されている「メッセージング・エンジン (ME) でこのデータベースを使用する」チェック・ボックスも選択しない場合は、メッセージング・エンジンは、デフォルトの Derby Embedded または Derby Embedded 40 データベース上に作成および構成されます。Derby Embedded または Derby Embedded 40 データベースは、リモート・ワークステーション上に作成することはできません。ファイル・ストアについて詳しくは、WebSphere Application Server Network Deployment インフォメーション・センターの『ファイル・ストアの管理』を参照してください。

7. **スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合のみ:** 「メッセージング・エンジン (ME) ではこのデータベースを使用します」チェック・ボックスを選択して、メッセージング・エンジンで共通データベースを使用します。このチェック・ボックスを選択せず、6 (290 ページ) のステップで説明されている「メッセージング・エンジン (ME) でこのファイル・ストアを使用する」チェック・ボックスも選択しない場合は、メッセージング・エンジンは、デフォルトの Derby Embedded または Derby Embedded 40 データベース上に作成および構成されず。Derby Embedded または Derby Embedded 40 データベースは、リモート・ワークステーション上に作成することはできません。データ・ストアについて詳しくは、WebSphere Application Server Network Deployment インフォメーション・センターの『データ・ストアの管理』を参照してください。

制約事項: このオプションは、Derby Embedded または Derby Embedded 40 製品を選んだ場合は選択できません。

制約事項: 共通データベースは、Informix 上のメッセージング・エンジンの構成には使用できません。共通データベースが Informix の場合は、スタンドアロン・プロファイルの作成に「メッセージング・エンジン (ME) ではこのデータベースを使用します」オプションを選択しないでください。

8. 「次へ」をクリックします。次のステップは、作成または拡張するプロファイルのタイプ、および選択したデータベース製品によって異なります。

作成または拡張するプロファイルのタイプ	次のステップ
Derby Embedded または Derby Embedded 40 のデフォルト値を選択済みのスタンドアロン・サーバー・プロファイル。	「プロファイルの要約」ページが表示されず。トピック 237 ページの『高度なスタンドアロン・サーバー・プロファイルの作成』のステップ 15 (246 ページ) またはトピック 363 ページの『高度なスタンドアロン・サーバー・プロファイルの拡張』のステップ 9 (367 ページ) に戻ります。

作成または拡張するプロファイルのタイプ	次のステップ
<p>Derby Embedded または Derby Embedded 40 以外のデータベース製品が選択されたスタンドアロン・サーバー・プロファイル。</p> <p>選択したデータベース製品のデプロイメント・マネージャー・プロファイル。</p>	<p>「データベース構成 (第 2 部)」ページが、選択したデータベース製品に固有のフィールドを伴って表示されます。このページでの入力方法については、『「データベース構成 (その 2)」ページ』のトピックを参照してください。このページの情報入力が完了したら、「次へ」をクリックします。ツールにより、共通データベース用の有効な接続が存在することが確認されます。データベース接続が存在していない場合は、続行する前に、データベースを始動するか、指定したパラメータを変更して、この問題を修正する必要があります。「プロファイルの要約」ページが表示されます。このパネルへのアクセス元のトピックに応じて、以下のいずれかの手順に戻ります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 237 ページの『高度なスタンドアロン・サーバー・プロファイルの作成』トピックのステップ 15 (246 ページ) • 363 ページの『高度なスタンドアロン・サーバー・プロファイルの拡張』トピックのステップ 9 (367 ページ) • 252 ページの『高度なデプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成』トピックのステップ 11 (259 ページ) • 373 ページの『高度なデプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張』トピックのステップ 5 (375 ページ) • 260 ページの『デプロイメント環境のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成』トピックのステップ 10 (267 ページ)

「データベース構成 (その 2)」ページ:

プロファイル管理ツールの「データベース構成」ページでデータベース製品を選択すると、「データベース構成 (その 2)」ページという後続のページにより、データベース固有の情報を入力するよう求められます。これに含まれるフィールドおよびデフォルト値は、選択したデータベース製品に応じて若干異なります。

「データベース構成」ページで、「データベース・スクリプトの実行を遅延」チェック・ボックスを選択して、新規データベースの作成または既存のデータベースへのテーブルの追加を先送りすることを選択する場合でも、このページの入力を行う必要があります。「データベース構成 (その 2)」ページで選択した値は、前のページの「データベース・スクリプトの出力ディレクトリー」フィールドで指定したディレクトリー内 (別のロケーションを指定しなかった場合はこれらのスクリプトのデフォルト・ディレクトリー内) に格納されたデータベース構成スクリプトに追加されます。

制約事項: DB2 for z/OS V8 または V9、または Oracle を使用している場合は、新規データベースを作成できません。このような場合、共通データベースが存在していなければならない、スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合は、Common Event Infrastructure データベースも存在する必要があります。このいずれかのデータベースを選択した場合、警告メッセージが出されて、この制約事項について注意を促します。

「データベース構成 (その 2)」ページに入力する方法を調べるには、ご使用のデータベース製品へのリンクを以下のリストから選択します。

- 『Derby Embedded または Derby Embedded 40』
- 294 ページの 『Derby Network Server または Derby Network Server 40』
- 294 ページの 『DB2 Universal Database』
- 295 ページの 『DB2 データ・サーバー』
- 296 ページの 『DB2 for z/OS V8 および V9』
- 297 ページの 『DB2 for i5/OS (ツールボックス) および DB2 for IBM i (ツールボックス)』
- 297 ページの 『Informix Dynamic Server』
- 298 ページの 『Microsoft SQL Server (DataDirect) および Microsoft SQL Server (Microsoft)』
- 299 ページの 『Oracle』

「データベース構成 (その 2)」ページの入力が完了したら、「次へ」をクリックします。ツールにより、共通データベースへの有効な接続が存在することが確認されます。ツールでエラーが検出される場合は、データベースが稼働中であることを確認するか、接続を正常にするためにパラメーターを変更して、問題を訂正してから続行する必要があります。

「プロファイルの要約」ページが表示されます。このパネルへのアクセス元のトピックに応じて、以下のいずれかの手順に戻ります。

- 237 ページの 『高度なスタンドアロン・サーバー・プロファイルの作成』トピックのステップ 15 (246 ページ)
- 363 ページの 『高度なスタンドアロン・サーバー・プロファイルの拡張』トピックのステップ 9 (367 ページ)
- 252 ページの 『高度なデプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成』トピックのステップ 11 (259 ページ)
- 373 ページの 『高度なデプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張』トピックのステップ 5 (375 ページ)
- 260 ページの 『デプロイメント環境のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成』トピックのステップ 10 (267 ページ)

Derby Embedded または Derby Embedded 40

294 ページの表 51 に、Derby Embedded または Derby Embedded 40 をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (その 2)」ページで入力しておく必要があるフィールドを示します。

重要: データベース製品として Derby Embedded または Derby Embedded 40 を選択する場合は、プロファイルの作成または拡張が完了した後、データベース・ホストがローカルの場合でも、プロファイルの作成中に指定したホストおよびポート上でサーバーが稼働するようにしてください。

表 51. Derby Embedded または Derby Embedded 40 の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
スキーマ名 (Schema name)	データベース・スキーマ名を入力してください。デフォルトは APP です。

Derby Network Server または Derby Network Server 40

表 52 に、Derby Network Server または Derby Network Server 40 をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (その 2)」ページで入力しておく必要があるフィールドを示します。

重要: データベース製品として Derby Network Server または Derby Network Server 40 を選択した場合は、プロファイルの作成または拡張が完了した後、データベース・ホストがローカルの場合でも、プロファイルの作成中に指定したホストおよびポート上でサーバーが稼働するようにしてください。

表 52. Derby Network Server または Derby Network Server 40 の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 1527 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
スキーマ名 (Schema name)	データベース・スキーマ名を入力してください。デフォルトは APP です。

DB2 Universal Database

表 53 に、DB2 Universal Database をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (その 2)」ページで入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 53. DB2 Universal Database の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。

表 53. DB2 Universal Database の場合の必須のデータベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	<p>デフォルト値 (Linux および UNIX プラットフォームの場合は <code>install_root/universalDriver_wbi/lib</code>、Windows プラットフォームの場合は <code>install_root¥universalDriver_wbi¥lib</code>) を受け入れるか、またはシステム上で次のファイルが置かれている場所を参照します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • <code>db2jcc.jar</code> • <code>db2jcc_license_cu.jar</code> または <code>db2jcc_license_cisuz.jar</code> <p>指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。</p>
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 <code>localhost</code> をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 <code>50000</code> をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
スキーマ名 (Schema name)	データベース・スキーマ名を入力してください。デフォルトは <code>WPRCDB</code> です。

DB2 データ・サーバー

表 54 に、DB2 データ・サーバーをデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (その 2)」ページで入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 54. DB2 データ・サーバーの場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。

表 54. DB2 データ・サーバーの場合の必須のデータベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	<p>デフォルト値 (Linux および UNIX プラットフォームの場合は <code>install_root/universalDriver_wbi/lib</code>、Windows プラットフォームの場合は <code>install_root%universalDriver_wbi%lib</code>) を受け入れるか、またはシステム上で次のファイルが置かれている場所を参照します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • <code>db2jcc.jar</code> • <code>db2jcc_license_cu.jar</code> または <code>db2jcc_license_cisuz.jar</code> <p>指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。</p>
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	<p>デフォルト値 <code>localhost</code> をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。</p>
サーバー・ポート	<p>デフォルト値 <code>50000</code> をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。</p>
スキーマ名 (Schema name)	<p>データベース・スキーマ名を入力してください。デフォルトは <code>WPRCDB</code> です。</p>

DB2 for z/OS V8 および V9

表 55 に、DB2 for z/OS V8 および V9 をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (その 2)」ページで入力しておく必要があるフィールドを示します。これらのデータベースを使用して新規データベースを作成することはできません。共通データベースが存在していなければならず、スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合は、Common Event Infrastructure データベースも存在する必要があります。

表 55. DB2 for z/OS V8 および V9 の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	<p>データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。</p>
データベース認証用のパスワード	<p>データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</p>
パスワードの確認	<p>パスワードを確認します。</p>
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	<p>以下のファイルが格納されているシステム上の場所を入力します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • <code>db2jcc.jar</code> • <code>db2jcc_license_cisuz.jar</code> <p>指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。</p>

表 55. DB2 for z/OS V8 および V9 の場合の必須のデータベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	データベース・サーバーのホスト名を入力してください。
サーバー・ポート	デフォルト値 446 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
データベースの別名	データベースの別名を入力してください。
接続のロケーション	接続のロケーションを入力してください。
ストレージ・グループ名	ストレージ・グループ名を入力してください。

DB2 for i5/OS (ツールボックス) および DB2 for IBM i (ツールボックス)

表 56 に、DB2 for IBM i (ツールボックス) をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (その 2)」ページで入力しておく必要があるフィールドを示します。この選択は、DB2 for i5/OS (ツールボックス) の場合にも有効です。

表 56. DB2 for IBM i (ツールボックス) または DB2 for IBM i (ツールボックス) の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	デフォルト値 /QIBM/ProdData/HTTP/Public/jt400/lib を受け入れるか、またはシステム上で次のファイルが置かれている場所を参照します。 <ul style="list-style-type: none"> • jt400.jar 指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	データベース・サーバーのホスト名を入力してください。
データベース・コレクション名	デフォルト値 WPRCSDB をそのまま確定するか、正しいスキーマ名を入力します。指定したデータベース内で命名の競合を防止するために、スキーマ名を指定するときは、その先頭の 3 文字がデータベース内のその他のスキーマ名と重複しないようにしてください。

Informix Dynamic Server

298 ページの表 57 に、Informix Dynamic Server をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (その 2)」ページで入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 57. Informix Dynamic Server の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベース・サーバーのインストール・ディレクトリー	Informix データベースを使用している場合、データベース・インストール・ディレクトリーを指示します。
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	以下のファイルが格納されているシステム上の場所を入力します。 <ul style="list-style-type: none"> • ifxjdbc.jar • ifxjdbcx.jar 指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 1526 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
インスタンス名	正しいインスタンス名を入力してください。

Microsoft SQL Server (DataDirect) および Microsoft SQL Server (Microsoft)

表 58 に、Microsoft SQL Server (DataDirect) または Microsoft SQL Server (Microsoft) をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (その 2)」ページで入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 58. Microsoft SQL Server DataDirect および Microsoft SQL Server (Microsoft) の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
CEI データベース・ユーザー名	CEI データベース・ユーザー名を入力してください。
CEI データベース・パスワード	CEI データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
共通データベースのユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
共通データベースのパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。

表 58. Microsoft SQL Server DataDirect および Microsoft SQL Server (Microsoft) の場合の必須のデータベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	<p>以下のファイルが格納されているシステム上の場所を入力します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • sqlserver.jar • base.jar • util.jar <p>また、ファイル spy.jar が、JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーションに対する次の相対ロケーションで使用可能である必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • Linux UNIX ../spy/spy.jar • Windows ..%spy%spy.jar <p>指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。</p>
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
データベース・サーバー名	データベース・サーバー名を入力してください。
サーバー・ポート	デフォルト値 1433 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
管理ユーザー名	データベースおよびユーザーの作成および除去の特権を持つユーザー ID を入力するか、デフォルト値「sa」を受け入れます。この ID は、前の画面で「データベース・スクリプトの実行の遅延」オプションを選択していない場合に必要になります。
パスワード	「管理ユーザー名」 ID ユーザーのパスワードを入力します。
パスワードの確認	パスワードを確認します。

Oracle

300 ページの表 59 に、Oracle をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (その 2)」ページで入力しておく必要があるフィールドを示します。このデータベースを使用して新規データベースを作成することはできません。

重要: プロファイルを作成する前に、SYSDBA 特権のあるユーザー ID を取得している必要があります。

表 59. Oracle の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベース・サーバーのインストール・ディレクトリー	データベース・サーバーのインストール先を入力するか、または参照します。前の画面で、「データベース・スクリプトの実行の遅延」オプションを選択していない場合に必要になります。
Business Space データベースのユーザー名	Business Space データベースのユーザー ID。このオプションは、BSpace が使用可能な場合にのみ表示されます。
Business Space データベースのパスワード	Business Space データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
CEI データベース・ユーザー名	Common Event Infrastructure データベースのユーザー ID。
CEI データベース・パスワード	Common Event Infrastructure データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
共通データベースのユーザー名	共通データベースのユーザー ID。
パスワード	共通データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	ファイル ojdbc6.jar が格納されているシステム上の場所を入力します。Oracle データベースにアクセスするには、ojdbc6.jar ドライバーをインストールする必要があります。 重要: Oracle 10g には、ojdbc6.jar ドライバーは含まれていません。このドライバーは Oracle の Web サイトからダウンロードできます。指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。
JDBC ドライバー・タイプ	OCI または Thin をクリックします。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 1521 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
システム管理者のユーザー名	データベースおよびユーザーの作成および除去の特権を持つユーザー ID を入力するか、デフォルト値「SYSUSER」を受け入れます。前の画面で、「データベース・スクリプトの実行の遅延」オプションを選択していない場合に必要になります。
パスワード	「管理ユーザー名」 ID ユーザーのパスワードを入力します。
パスワードの確認	パスワードを確認します。

最初の「データベース構成」画面で「メッセージング・エンジン (ME) でこのデータベースを使用する」を選択した場合、「データベース構成 (その 3)」ページが表示されます。表 60 に、入力する必要があるフィールドを示します。

表 60. Oracle をメッセージング・エンジンと共に使用するための必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
Business Process Choreographer メッセージング・エンジン	
ユーザー名	Business Process Choreographer メッセージング・エンジン・ユーザー ID を入力します。このオプションは、BPC が使用可能な場合にのみ表示されます。
パスワード	ユーザー ID のパスワードを入力します。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
CEI バス・メッセージング・エンジン	
ユーザー名	CEI バス・メッセージング・エンジン・ユーザー ID を入力します。
パスワード	ユーザー ID のパスワードを入力します。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
SCA アプリケーション・バス・メッセージング・エンジン	
ユーザー名	SCA アプリケーション・バス・メッセージング・エンジン・ユーザー ID を入力します。
パスワード	ユーザー ID のパスワードを入力します。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
SCA システム・バス・メッセージング・エンジン	
ユーザー名	SCA システム・バス・メッセージング・エンジン・ユーザー ID を入力します。
パスワード	ユーザー ID のパスワードを入力します。
パスワードの確認	パスワードを確認します。

manageprofiles コマンド行ユーティリティーを使用したプロファイルの作成

manageprofiles コマンド行ユーティリティーおよびプロパティー・ファイルを使用してコマンド行からプロファイルを作成する方法について説明します。

始める前に

manageprofiles コマンド行ユーティリティーについて詳しくは、444 ページの『manageprofiles コマンド行ユーティリティー』を参照してください。

manageprofiles コマンド行ユーティリティーを実行する前に、次のタスクを完了したか確認します。

- 221 ページの『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』で、プロファイルを作成または拡張するための前提条件を確認している。
- 304 ページの『manageprofiles コマンド行ユーティリティによる Derby または DB2 データベースのプロファイルの作成 - 例』または 317 ページの『例: manageprofiles コマンド行ユーティリティと Oracle データベースを使用したプロファイルの作成』に記載されているプロファイル作成コマンドの例を確認している。
- 同じプロファイルで manageprofiles コマンド行ユーティリティを実行していないことを検査している。エラー・メッセージが表示された場合は、別のプロファイル作成操作や拡張操作が進行中かどうかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

この作業に必要なセキュリティのロール: 226 ページの『非 root ユーザーに対するファイルとディレクトリーの書き込み権限の、プロファイル作成のための付与』を参照してください。

注: i5/OS プラットフォームの場合: `user_data_root/profiles` ディレクトリーで、読み取り、書き込み、およびコマンドを実行するためのオペレーティング・システムの許可が必要です。

manageprofiles コマンド行ユーティリティを使用してプロファイルを作成するには、以下のステップを実行します。

手順

1. 作成するプロファイルの種類を決定します。これにより、新しいプロファイルに使用するテンプレートが決まります (**-templatePath** オプションを使用)。以下のテンプレートを使用できます。
 - `default.wbiserver`: WebSphere Process Server スタンドアロン・サーバー・プロファイル用で、スタンドアロン・サーバーを定義します。
 - `dmgr.wbiserver`: WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーを定義します。デプロイメント・マネージャーは、1 つ以上のワークステーション上にあるサーバーの論理グループに、1 つの管理インターフェースを提供します。
 - `managed.wbiserver`: WebSphere Process Server カスタム・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーにフェデレートされた場合、管理対象ノードを定義します。デプロイメント環境を必要とするソリューションを使用する場合は、ランタイム環境に 1 つ以上の管理対象ノードが必要になります。カスタム・プロファイルには、作動可能にするためにデプロイメント・マネージャー・セル内に統合する必要のある空のノードが含まれています。カスタム・プロファイルを統合すると、カスタム・プロファイルが管理対象ノードに変更されます。統合先のデプロイメント・マネージャーのリリース・レベルが、作成しているカスタム・プロファイルのリリース・レベル以上でない場合は、ノードを統合しないでください。また、WebSphere Process Server プロファイルの場合は WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャーを使用できませんが、WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルでは、WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャーを使用できます。
 - `default.esbserver`: WebSphere Enterprise Service Bus スタンドアロン・サーバー・プロファイル用で、スタンドアロン・サーバーを定義します。

- `dmgr.esbserver`: WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャー・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーを定義します。
- `managed.esbserver`: WebSphere Enterprise Service Bus カスタム・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーにフェデレートされた場合、管理対象ノードを定義します。統合先のデプロイメント・マネージャーのリリース・レベルが、作成しているカスタム・プロファイルのリリース・レベル以上でない場合は、ノードを統合しないでください。 WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルは、WebSphere Enterprise Service Bus または WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャー使用できます。

各プロファイルのテンプレートは、`install_root/profileTemplates` ディレクトリ内にあります。

2. 304 ページの『`manageprofiles` コマンド行ユーティリティによる Derby または DB2 データベースのプロファイルの作成 - 例』または 317 ページの『例: `manageprofiles` コマンド行ユーティリティと Oracle データベースを使用したプロファイルの作成』に記載されているプロファイル作成の例を検討して、ご使用のプロファイルのタイプにどのパラメーターが必要であるかを判断します。
3. プロファイルに提供する値を決定します。これを行うには、446 ページの『`manageprofiles` パラメーター』のトピックのデフォルト値を検討して、これらがプロファイルに必要なものかどうかを確認します。

注: `samplesPassword` パラメーターを指定せずに `manageprofiles` コマンド行ユーティリティを使用して WebSphere Process Server にプロファイルを作成した場合は、`INSTCONFPARTIALSUCCESS` メッセージが返されます。これは以下の基準が満たされたときに起こります。

- WebSphere Process Server または WebSphere Application Server のインストール中にサンプルをインストールした。
 - `manageprofiles` コマンド行ユーティリティを使用してプロファイルを作成している。
 - `manageprofiles` コマンド行ユーティリティに `samplesPassword` パラメーターが指定されていない。
4. コマンド行からファイルを実行します。これらは単純な例です。より複雑な例については、304 ページの『`manageprofiles` コマンド行ユーティリティによる Derby または DB2 データベースのプロファイルの作成 - 例』または 317 ページの『例: `manageprofiles` コマンド行ユーティリティと Oracle データベースを使用したプロファイルの作成』を参照してください。

- **i5/OS プラットフォームの場合:**`manageprofiles -create -templatePath install_root/profileTemplates/default.wbiserver`

- **Linux** **UNIX** `manageprofiles.sh -create -templatePath install_root/profileTemplates/default.wbiserver`

- **Windows** `manageprofiles.bat -create -templatePath install_root%profileTemplates%default.wbiserver`

応答ファイルを作成した場合は、**-response** パラメーターを使用して `-response myResponseFile` とします。

以下の例に、作成操作のための応答ファイルを示します。

```

create
profileName=testResponseFileCreate
profilePath=profile_root
templatePath=install_root/profileTemplates/default.wbiserver
nodeName=myNodeName
cellName=myCellName
hostName=myHostName
omitAction=myOptionalAction1, myOptionalAction2

```

コマンドにより、実行につれて状況が表示されます。完了するまで待ってください。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

次のタスク

「INSTCONFSUCCESS: プロファイルの作成は正常に終了しました。」というメッセージが表示された場合は、プロファイルの作成が正常に完了したことが分かります。また、以下のログ・ファイルを確認できます。

- **i5/OS プラットフォームの場合:** `user_data_root/profileRegistry/logs/manageprofiles/profile_name_create.log`
- **Linux** **UNIX** `install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log`
- **Windows** `install_root¥logs¥manageprofiles¥profile_name_create.log`

インストール検査テスト (IVT) ツールを実行して、プロファイルが正常に作成されたことを確認する。このためには、以下のコマンドを実行します。

- **i5/OS プラットフォームの場合:** `profile_root/bin/wbi_ivt`
- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォーム: `profile_root/bin/wbi_ivt.sh`
- **Windows** **Windows** プラットフォーム: `profile_root¥bin¥wbi_ivt.bat`

manageprofiles コマンド行ユーティリティーによる **Derby** または **DB2** データベースのプロファイルの作成 - 例:

インストール済み環境で **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、スタンドアロン・サーバー、デプロイメント・マネージャー、およびカスタム・プロファイルを作成するのに役立つプロファイル作成コマンドの例。

スタンドアロン・サーバーのプロファイル

以下のコマンド例は、Windows サーバー上で `my_WPSSA_profile` と呼ばれる WebSphere Process Server スタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成します。305 ページの表 61 および 306 ページの表 62 のパラメーターは以下を指定します。

- **DB2 Universal** データベース製品は共通データベースおよび **Common Event Infrastructure** データベースの両方に使用でき、これらは両方ともローカル・ホストに既に存在すると想定されています。どちらのデータベースも後で構成するように設定されています (コマンド・パラメーター値を **-dbDelayConfig "false"** および **-dbDelayConfig "true"** にすると、構成スクリプトは作成されますが実行さ

れないことが指定されます)。データベース関連の `manageprofiles` パラメーターの完全なリストは、トピック 333 ページの『共通データベース構成用の `manageprofiles` パラメーター (データベース製品ごと)』および 345 ページの『Common Event Infrastructure データベース構成の `manageprofiles` パラメーター (データベース製品ごと)』を参照してください。

- Windows サービスは手動で開始するように設定されます。
- サンプルの Business Process Choreographer 実装環境は作成されません。
- ビジネス・ルール・マネージャーは構成されます。
- WebSphere が提供する Business Spaceは構成されません。
- プロファイル作成プロセスにより、ポート値 (データベース関連のポートは除く) が自動的に設定されます。このプロセスでは、新規プロファイルが他のプロファイルに対して検証され、ポートの競合が存在しないことが確認されます。

ヒント: `manageprofiles` コマンド行ユーティリティーが指定するポート値をオーバーライドするには、`-portsFile` パラメーターを使用します。すべての有効な `manageprofiles` パラメーターのリストについては、446 ページの『`manageprofiles` パラメーター』を参照してください。

- 管理セキュリティは使用可能になります。

表 61 は、スタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成するために使用する `manageprofiles` コマンド行ユーティリティー・パラメーターと値の例を示したものです。

表 61. 指定される `manageprofiles` コマンド行ユーティリティー・パラメーター





パラメーター	値
<code>-create</code>	N/A
<code>-templatePath</code>	" <i>install_root</i> ¥profileTemplates¥default.wbiserver" (完全修飾されていることが必要)
<code>-profileName</code>	" <i>my_WPSSA_profile</i> "
<code>-enableAdminSecurity</code>	"true"
<code>-adminPassword</code>	" <i>admin_pwd</i> "
<code>-adminUserName</code>	" <i>admin_id</i> "
<code>-dbServerPort</code>	"50000"
<code>-ceiDbName</code>	"event"
<code>-dbDelayConfig</code>	"false"
<code>-dbHostName</code>	"localhost"
<code>-ceiDbAlreadyConfigured</code>	"false"
<code>-configureBPC</code>	"false"
<code>-dbType</code>	"DB2_Universal" または "DB2_DataServer"
<code>-dbName</code>	"WPRCSDB"
<code>-dbCreateNew</code>	"false"
<code>-dbDelayConfig</code>	"true"
<code>-dbUserId</code>	" <i>db_id</i> "
<code>-dbPassword</code>	" <i>db_pwd</i> "

表 61. 指定される *manageprofiles* コマンド行ユーティリティー・パラメーター (続き)

パラメーター	値
-dbDriverType	"4"
-dbHostName	"localhost"
-dbServerPort	"50000"
-dbCommonForME	"false"
-fileStoreForME	"false" (-dbCommonForME が true の場合、true は不可)
-configureBSpace	"false"
-configureBRM	"true"

表 62 は、通常では変更する必要のない *manageprofiles* コマンド行ユーティリティー・パラメーターとデフォルト値を示したものです。

表 62. デフォルトの *manageprofiles* コマンド行ユーティリティー・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
-profilePath	"install_root¥profiles¥my_WPSSA_profile"
-hostName	"host_name"
-nodeName	"host_nameNodenode_number"
-cellName	"host_nameNodenode_numbercell_numberCell"
 -winserviceCheck	"true"
 -winserviceAccountType	"localsystem"
 -winserviceStartupType	"manual"
 -winserviceUserName	"Administrator"
-dbOutputscriptDir	"install_root¥profiles¥my_WPSSA_profile ¥dbscripts¥CEI_event"
-dbJDBCClasspath	"install_root¥universalDriver_wbi¥lib"
-dbJDBCClasspath	"install_root¥universalDriver_wbi¥lib"
-dbOutputScriptDir	"install_root¥profiles¥my_WPSSA_profile ¥dbscripts¥CommonDB¥DB2¥WPRCSDB"

WebSphere Enterprise Service Bus の例

以下は、*my_WESBSA_profile* と呼ばれる WebSphere Enterprise Service Bus スタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成する類似した例です。以下のような違いがあります。

- Derby Embedded または Derby Embedded 40 データベース製品は、共通データベースと Common Event Infrastructure データベースの両方に使用されます。これらのデータベースは、プロファイル作成プロセスの実行時にローカル・ホスト上で作成および構成されるように設定されています。





307 ページの表 63 は、*manageprofiles* コマンド行ユーティリティー・パラメーターと値の例を示したものです。

表 63. 指定される *manageprofiles* コマンド行ユーティリティ・パラメーター

パラメーター	値
-create	N/A
-templatePath	"install_root ¥profileTemplates¥default.esbserver" (完全修飾 されていることが必要)
-profileName	"my_WESBSA_profile"
-enableAdminSecurity	"true"
-adminPassword	"admin_pwd"
-adminUserName	"admin_id"
-ceiDbName	"event"
-dbDelayConfig	"true"
-ceiDbAlreadyConfigured	"false"
-dbType	"DERBY_EMBEDDED" "DERBY_EMBEDDED40"
-dbName	"WPRCSDB"
-dbCreateNew	"true"
-dbDelayConfig	"false"
-dbCommonForME	"false"
-fileStoreForME	"false" (-dbCommonForME が true の場合、 true は不可)
-configureBSpace	"false"

表 64 は、通常では変更する必要のない *manageprofiles* コマンド行ユーティリティ・パラメーターとデフォルト値を示したものです。

表 64. デフォルトの *manageprofiles* コマンド行ユーティリティ・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
-profilePath	"install_root¥profiles¥ my_WESBSA_profile"
-hostName	"host_name"
-nodeName	"host_nameNodenode_number"
-cellName	"host_nameNodenode_numbercell_numberCell"
 -winserviceStartupType	"manual"
 -winserviceCheck	"true"
 -winserviceAccountType	"localsystem"
 -winserviceUserName	"Administrator"
-dbOutputScriptDir	"install_root¥profiles¥my_WESBSA_profile ¥dbscripts¥CommonDB¥Derby¥WPRCSDB"

デプロイメント・マネージャー・プロファイル (デプロイメント環境のセットアップなし)

以下のコマンド例は、Windows サーバー上で *my_WPSDMGR_profile* と呼ばれるデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成します。

表 65 および 309 ページの表 66 のパラメーターは以下を指定します。

- DB2 Universal データベース製品は共通データベース用に使用されますが、これはリモート・ホスト上に存在すると想定されています。このデータベースは後で構成するように設定されています (**-dbDelayConfig "true"** コマンドのパラメーター値により構成スクリプトは作成されますが、実行されません)。データベース関連の *manageprofiles* パラメーターの完全なリストは、トピック 333 ページの『共通データベース構成用の *manageprofiles* パラメーター (データベース製品ごと)』を参照してください。
- Windows サービスは手動で開始するように設定されます。
- プロファイル作成プロセスにより、ポート値 (データベース関連のポートは除く) が自動的に設定されます。このプロセスでは、新規プロファイルが他のプロファイルに対して検証され、ポートの競合が存在しないことが確認されます。

ヒント: *manageprofiles* コマンド行ユーティリティーが指定するポート値をオーバーライドするには、**-portsFile** パラメーターを使用します。すべての有効な *manageprofiles* パラメーターのリストについては、446 ページの『*manageprofiles* パラメーター』を参照してください。

- 管理セキュリティは使用可能になります。

表 65 は、デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成するために使用する *manageprofiles* コマンド行ユーティリティー・パラメーターと値の例を示したものです。

表 65. 指定される *manageprofiles* コマンド行ユーティリティー・パラメーター





パラメーター	値
-create	N/A
-templatePath	"install_root ¥profileTemplates¥dmgr.wbiserver" (完全修飾されていることが必要)
-profileName	"my_WPSDMGR_profile"
-enableAdminSecurity	"true"
-adminPassword	"admin_pwd"
-adminUserName	"admin_id"
-ndtopology	"false"
-dbType	"DB2_Universal" または "DB2_DataServer"
-dbName	"WPRCSDB"
-dbCreateNew	"false"
-dbDelayConfig	"true"
-dbUserId	"db_id"
-dbPassword	"db_pwd"
-dbDriverType	"4"

表 65. 指定される *manageprofiles* コマンド行ユーティリティ・パラメーター (続き)

パラメーター	値
-dbHostName	"remote_host_name"
-dbServerPort	"50000"

表 66 は、通常では変更する必要のない *manageprofiles* コマンド行ユーティリティ・パラメーターとデフォルト値を示したものです。

表 66. デフォルトの *manageprofiles* コマンド行ユーティリティ・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
-profilePath	"install_root¥profiles¥ my_WPSDMGR_profile"
-hostName	"host_name"
-nodeName	"host_nameCellManagernode_number"
-cellName	"host_nameCellcell_number"
 -winserviceCheck	"true"
 -winserviceAccountType	"localsystem"
 -winserviceStartupType	"manual"
 -winserviceUserName	"Administrator"
-dbJDBCClasspath	"install_root¥universalDriver_wbi¥lib"
-dbOutputScriptDir	"install_root¥profiles¥my_WPSDMGR_profile ¥dbscripts¥CommonDB¥DB2¥WPRCSDB"

WebSphere Enterprise Service Bus の例

以下は、*my_WESBDMGR_profile* と呼ばれる WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成する類似した例です。異なる点は、Derby Network Server または Derby Network Server 40 データベース製品は共通データベースに使用でき、これはプロファイル作成プロセス中にローカル・ホストで作成および構成されるように設定されることです。

表 67 は、デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成するために使用する *manageprofiles* コマンド行ユーティリティ・パラメーターと値の例を示したものです。

表 67. 指定される *manageprofiles* コマンド行ユーティリティ・パラメーター





パラメーター	値
-create	N/A
-templatePath	"install_root ¥profileTemplates¥dmgr.esbserver" (完全修飾されていることが必要)
-profileName	"my_WESBDMGR_profile"
-enableAdminSecurity	"true"
-adminPassword	"admin_pwd"
-adminUserName	"admin_id"
-ndtopology	"false"

表 67. 指定される *manageprofiles* コマンド行ユーティリティ・パラメーター (続き)

パラメーター	値
-dbType	"DERBY_NETWORKSERVER" "DERBY_NETWORKSERVER40"
-dbName	"WPRCSDB"
-dbCreateNew	"true"
-dbDelayConfig	"false"
-dbUserId	"db_id"
-dbPassword	"db_pwd"
-dbHostName	"localhost"
-dbServerPort	"1528"

表 68 は、通常では変更する必要のない *manageprofiles* コマンド行ユーティリティ・パラメーターとデフォルト値を示したものです。

表 68. デフォルトの *manageprofiles* コマンド行ユーティリティ・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
-profilePath	"install_root¥profiles¥ my_WESBDMGR_profile"
-hostName	"host_name"
-nodeName	"host_nameCellManagernode_number"
-cellName	"host_nameCellcell_number"
 -winserviceCheck	"true"
 -winserviceAccountType	"localsystem"
 -winserviceStartupType	"manual"
 -winserviceUserName	"Administrator"
-dbOutputScriptDir	"install_root¥profiles¥my_WESBDMGR_profile ¥dbscripts¥CommonDB¥Derby¥WPRCSDB"

カスタム・プロファイル (デプロイメント環境のセットアップなし)

以下のコマンド例は、Windows サーバー上で *my_WPSCUSTOM_profile* と呼ばれるカスタム・プロファイルを作成します。

この例は、上で作成されたデプロイメント・マネージャー・プロファイルと一緒に動作するように設定されています。

311 ページの表 69 および 311 ページの表 70 のパラメーターは以下を指定します。

- DB2 Universal データベース製品は共通データベース用に使用されますが、これは既に存在すると想定されています。カスタム・プロファイルの作成では、カスタム・プロファイルの統合先のデプロイメント・マネージャーによって使用されるデータベースを指し示す必要があります。
- 管理セキュリティは、カスタム・プロファイルの統合先となるデプロイメント・マネージャーで使用可能になります。

すべての有効な `manageprofiles` パラメーターのリストについては、446 ページの『`manageprofiles` パラメーター』を参照してください。

表 69 は、カスタム・プロファイルを作成するために使用する `manageprofiles` コマンド行ユーティリティー・パラメーターと値の例を示したものです。

表 69. 指定される `manageprofiles` コマンド行ユーティリティー・パラメーター

パラメーター	値
<code>-create</code>	N/A
<code>-templatePath</code>	" <code>install_root</code> <code>¥profileTemplates¥managed.wbiserver</code> " (完全修飾されていることが必要)
<code>-profileName</code>	" <code>my_WPSCUSTOM_profile</code> "
<code>-dmgrHost</code>	" <code>remote_host</code> "
<code>-dmgrPort</code>	"8882" (<code>-dmgrPort</code> の値を見つけるには、このカスタム・プロファイルに関連付けられたデプロイメント・マネージャーの <code>dmgr_profile_root¥logs</code> ディレクトリーに移動します。このディレクトリーで <code>AboutThisProfile.txt</code> ファイルを開き、「Deployment manager SOAP connector port:」の項目から値を見つけます。)
<code>-dmgrAdminPassword</code>	" <code>admin_pwd</code> "
<code>-dmgrAdminUserName</code>	" <code>admin_id</code> "
<code>-ndtopology</code>	"false"
<code>-dbType</code>	"DB2_Universal" または "DB2_DataServer"
<code>-dbJDBCClasspath</code>	" <code>install_root¥universalDriver_wbi¥lib</code> "

表 70 は、通常では変更する必要のない `manageprofiles` コマンド行ユーティリティー・パラメーターとデフォルト値を示したものです。

表 70. デフォルトの `manageprofiles` コマンド行ユーティリティー・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
<code>-profilePath</code>	" <code>install_root¥profiles¥</code> <code>my_WPSCUSTOM_profile</code> "
<code>-hostName</code>	" <code>host_name</code> "
<code>-nodeName</code>	" <code>host_nameNodenode_number</code> "

WebSphere Enterprise Service Bus の例

以下は、`my_WESBCUSTOM_profile` と呼ばれる WebSphere Enterprise Service Bus カスタム・プロファイルを作成する類似した例です。異なる点は、Derby Network Server または Derby Network Server 40 データベース製品が、カスタム・プロファイルの統合先となるデプロイメント・マネージャー上の共通データベースに使用されることです。この例は、上で作成された WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャー・プロファイルと一緒に動作するように設定されています。

表 71 は、カスタム・プロファイルを作成するために使用する `manageprofiles` コマンド行ユーティリティー・パラメーターと値の例を示したものです。

表 71. 指定される `manageprofiles` コマンド行ユーティリティー・パラメーター

パラメーター	値
<code>-create</code>	N/A
<code>-templatePath</code>	" <i>install_root</i> ¥profileTemplates¥managed.esbserver" (完全修飾されていることが必要)
<code>-profileName</code>	" <i>my_WESBCUSTOM_profile</i> "
<code>-dmgrHost</code>	" <i>remote_host</i> "
<code>-dmgrPort</code>	"8885" (-dmgrPort の値を見つけるには、このカスタム・プロファイルに関連付けられたデプロイメント・マネージャーの <i>dmgr_profile_root</i> ¥logs ディレクトリーに移動します。このディレクトリーで AboutThisProfile.txt ファイルを開き、「Deployment manager SOAP connector port:」の項目から値を見つけます。)
<code>-dmgrAdminPassword</code>	" <i>admin_pwd</i> "
<code>-dmgrAdminUserName</code>	" <i>admin_id</i> "
<code>-ndtopology</code>	"false"
<code>-dbType</code>	"DERBY_NETWORKSERVER" "DERBY_NETWORKSERVER40"
<code>-dbJDBCClasspath</code>	" <i>install_root</i> ¥derby¥lib"

表 72 は、通常では変更する必要のない `manageprofiles` コマンド行ユーティリティー・パラメーターとデフォルト値を示したものです。

表 72. デフォルトの `manageprofiles` コマンド行ユーティリティー・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
<code>-profilePath</code>	" <i>install_root</i> ¥profiles¥ <i>my_WESBCUSTOM_profile</i> "
<code>-hostName</code>	" <i>host_name</i> "
<code>-nodeName</code>	" <i>host_nameNodenode_number</i> "

デプロイメント・マネージャー・プロファイル (デプロイメント環境のセットアップあり)

以下のコマンド例は、Windows サーバー上で `my_WPSDMGR_DE_profile` と呼ばれるデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成します。

313 ページの表 73 および 314 ページの表 74 のパラメーターは以下を指定します。

- プロファイル作成プロセスはデプロイメント環境を自動的に構成します (`-ndtopology "true"` および `-topologyPattern "Reference"` のパラメーターによって指定されます)。

- Derby Network Server または Derby Network Server 40 データベース製品は、共通データベースに使用されます。このデータベースは、プロファイル作成プロセスの実行時にローカル・ホスト上で作成および構成されるように設定されています。データベース関連の `manageprofiles` パラメーターの完全なリストは、トピック 333 ページの『共通データベース構成用の `manageprofiles` パラメーター (データベース製品ごと)』を参照してください。
- Windows サービスは手動で開始するように設定されます。
- プロファイル作成プロセスにより、ポート値 (データベース関連のポートは除く) が自動的に設定されます。このプロセスでは、新規プロファイルが他のプロファイルに対して検証され、ポートの競合が存在しないことが確認されます。

ヒント: `manageprofiles` コマンド行ユーティリティーが指定するポート値をオーバーライドするには、`-portsFile` パラメーターを使用します。すべての有効な `manageprofiles` パラメーターのリストについては、446 ページの『`manageprofiles` パラメーター』を参照してください。

- 管理セキュリティは使用可能になります。

表 73 は、デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成するために使用する `manageprofiles` コマンド行ユーティリティー・パラメーターと値の例を示したものです。

表 73. 指定される `manageprofiles` コマンド行ユーティリティー・パラメーター

パラメーター	値
<code>-create</code>	N/A
<code>-templatePath</code>	" <i>install_root</i> %profileTemplates%dmgr.wbiserver" (完全修飾されていることが必要)
<code>-profileName</code>	" <i>my_WPSDMGR_DE_profile</i> "
<code>-enableAdminSecurity</code>	"true"
<code>-adminPassword</code>	" <i>admin_pwd</i> "
<code>-adminUserName</code>	" <i>admin_id</i> "
<code>-ndtopology</code>	"true"
<code>-topologyPattern</code>	"Reference"
<code>-dbType</code>	"DERBY_NETWORKSERVER" "DERBY_NETWORKSERVER40"
<code>-dbName</code>	"WPRCSDB"
<code>-dbCreateNew</code>	"true"
<code>-dbDelayConfig</code>	"false"
<code>-dbUserId</code>	" <i>db_id</i> "
<code>-dbPassword</code>	" <i>db_pwd</i> "
<code>-dbHostName</code>	"localhost"
<code>-dbServerPort</code>	"1529"

314 ページの表 74 は、通常では変更する必要のない `manageprofiles` コマンド行ユーティリティー・パラメーターとデフォルト値を示したものです。

表 74. デフォルトの *manageprofiles* コマンド行ユーティリティ・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
-profilePath	"install_root\profiles\my_WPSDMGR_DE_profile"
-hostName	"host_name"
-nodeName	"host_nameCellManagernode_number"
-cellName	"host_nameCellcell_number"
Windows -winserviceCheck	"true"
Windows -winserviceAccountType	"localsystem"
Windows -winserviceStartupType	"manual"
Windows -winserviceUserName	"Administrator"
-dbOutputScriptDir	"install_root\profiles\my_WPSDMGR_DE_profile\scripts\CommonDB\Derby\WPRCSDB"

WebSphere Enterprise Service Bus の例

以下は、*my_WESBDMGR_DE_profile* と呼ばれる WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成する類似した例です。

表 75 は、デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成するために使用する *manageprofiles* コマンド行ユーティリティ・パラメーターと値の例を示したものです。

表 75. 指定される *manageprofiles* コマンド行ユーティリティ・パラメーター

パラメーター	値
-create	N/A
-templatePath	"install_root \profileTemplates\dmgr.esbserver" (完全修飾されていることが必要)
-profileName	"my_WESBDMGR_DE_profile"
-enableAdminSecurity	"true"
-adminPassword	"admin_pwd"
-adminUserName	"admin_id"
-ndtopology	"true"
-topologyPattern	"Reference"
-dbType	"DERBY_NETWORKSERVER" "DERBY_NETWORKSERVER40"
-dbName	"WPRCSDB"
-dbCreateNew	"true"
-dbDelayConfig	"false"
-dbUserId	"db_id"
-dbPassword	"db_pwd"
-dbHostName	"localhost"

表 75. 指定される *manageprofiles* コマンド行ユーティリティ・パラメーター (続き)

パラメーター	値
-dbServerPort	"1530"

表 76 は、通常では変更する必要のない *manageprofiles* コマンド行ユーティリティ・パラメーターとデフォルト値を示したものです。

表 76. デフォルトの *manageprofiles* コマンド行ユーティリティ・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
-profilePath	"install_root¥profiles¥ my_WESBDMGR_DE_profile"
-hostName	"host_name"
-nodeName	"host_nameCellManagernode_number"
-cellName	"host_nameCellcell_number"
Windows -winserviceCheck	"true"
Windows -winserviceAccountType	"localsystem"
Windows -winserviceStartupType	"manual"
Windows -winserviceUserName	"Administrator"
-dbOutputScriptDir	"install_root¥profiles¥ my_WESBDMGR_DE_profile ¥dbscripts¥CommonDB¥Derby¥WPRCSDB"

カスタム・プロファイル (デプロイメント環境のセットアップあり)

以下のコマンド例は、Windows サーバー上で *my_WPSCUSTOM_DE_profile* と呼ばれるカスタム・プロファイルを作成します。この例は、上で作成されたデプロイメント環境用の デプロイメント・マネージャー・プロファイルと一緒に動作するように設定されています。

316 ページの表 77 および 316 ページの表 78 のパラメーターは以下を指定します。

- プロファイル作成プロセスはプロファイルをデプロイメント環境に自動的に割り当てます (**-ndtopology "true"** および **-topologyRole ADT Messaging Support** のパラメーターによって指定されます)。
- Derby Network Server または Derby Network Server 40 データベース製品は共通データベース用に使用されますが、これは既に存在すると想定されています。カスタム・プロファイルの作成では、カスタム・プロファイルの統合先のデプロイメント・マネージャーによって使用されるデータベースを指し示す必要があります。データベース関連の *manageprofiles* パラメーターの完全なリストは、トピック 333 ページの『共通データベース構成用の *manageprofiles* パラメーター (データベース製品ごと)』を参照してください。
- 管理セキュリティは、カスタム・プロファイルの統合先となるデプロイメント・マネージャーで使用可能になります。

すべての有効な `manageprofiles` パラメーターのリストについては、446 ページの『`manageprofiles` パラメーター』を参照してください。

表 77 は、カスタム・プロファイルを作成するために使用する `manageprofiles` コマンド行ユーティリティー・パラメーターと値の例を示したものです。

表 77. 指定される `manageprofiles` コマンド行ユーティリティー・パラメーター

パラメーター	値
<code>-create</code>	N/A
<code>-templatePath</code>	" <i>install_root</i> ¥profileTemplates¥managed.wbiserver" (完全修飾されていることが必要)
<code>-profileName</code>	" <i>my_WPSCUSTOM_DE_profile</i> "
<code>-dmgrHost</code>	" <i>remote_host</i> "
<code>-dmgrPort</code>	"8890" (-dmgrPort の値を見つけるには、このカスタム・プロファイルに関連付けられたデプロイメント・マネージャーの <i>dmgr_profile_root</i> ¥logs ディレクトリーに移動します。このディレクトリーで AboutThisProfile.txt ファイルを開き、「Deployment manager SOAP connector port:」の項目から値を見つけます。)
<code>-dmgrAdminPassword</code>	" <i>admin_pwd</i> "
<code>-dmgrAdminUserName</code>	" <i>admin_id</i> "
<code>-ndtopology</code>	"true"
<code>-topologyRole</code>	"ADT Support Messaging"
<code>-dbType</code>	"DERBY_NETWORKSERVER" "DERBY_NETWORKSERVER40"
<code>-dbJDBCClasspath</code>	" <i>install_root</i> ¥derby¥lib"

表 78 は、通常では変更する必要のない `manageprofiles` コマンド行ユーティリティー・パラメーターとデフォルト値を示したものです。

表 78. デフォルトの `manageprofiles` コマンド行ユーティリティー・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
<code>-profilePath</code>	" <i>install_root</i> ¥profiles¥ <i>my_WPSCUSTOM_DE_profile</i> "
<code>-hostName</code>	" <i>host_name</i> "
<code>-nodeName</code>	" <i>host_nameNodenode_number</i> "

WebSphere Enterprise Service Bus の例

以下は、`my_WESBCUSTOM_DE_profile` と呼ばれる WebSphere Enterprise Service Bus カスタム・プロファイルを作成する類似した例です。この例は、上で作成されたデプロイメント環境用の WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャー・プロファイルと一緒に動作するように設定されています。

表 79 は、カスタム・プロファイルを作成するために使用する `manageprofiles` コマンド行ユーティリティ・パラメーターと値の例を示したものです。

表 79. 指定される `manageprofiles` コマンド行ユーティリティ・パラメーター

パラメーター	値
<code>-create</code>	N/A
<code>-templatePath</code>	<code>"install_root %profileTemplates%managed.esbserver"</code> (完全修飾されていることが必要)
<code>-profileName</code>	<code>"my_WESBCUSTOM_DE_profile"</code>
<code>-dmgrHost</code>	<code>"remote_host"</code>
<code>-dmgrPort</code>	"8897" (<code>-dmgrPort</code> の値を見つけるには、このカスタム・プロファイルに関連付けられたデプロイメント・マネージャーの <code>dmgr_profile_root%logs</code> ディレクトリーに移動します。このディレクトリーで <code>AboutThisProfile.txt</code> ファイルを開き、「Deployment manager SOAP connector port:」の項目から値を見つけます。)
<code>-dmgrAdminPassword</code>	<code>"admin_pwd"</code>
<code>-dmgrAdminUserName</code>	<code>"admin_id"</code>
<code>-ndtopology</code>	<code>"true"</code>
<code>-topologyRole</code>	<code>"ADT Support Messaging"</code>
<code>-dbType</code>	<code>"DERBY_NETWORKSERVER" "DERBY_NETWORKSERVER40"</code>
<code>-dbJDBCClasspath</code>	<code>"install_root%derby%lib"</code>

表 80 は、通常では変更する必要のない `manageprofiles` コマンド行ユーティリティ・パラメーターとデフォルト値を示したものです。

表 80. デフォルトの `manageprofiles` コマンド行ユーティリティ・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
<code>-profilePath</code>	<code>"install_root%profiles% my_WESBCUSTOM_DE_profile"</code>
<code>-hostName</code>	<code>"host_name"</code>
<code>-nodeName</code>	<code>"host_nameNodenode_number"</code>

例: `manageprofiles` コマンド行ユーティリティと Oracle データベースを使用したプロファイルの作成:

Oracle データベースを備えたインストール済み環境で `manageprofiles` コマンド行ユーティリティを使用した、スタンドアロン・サーバーおよびデプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成に役立つプロファイル作成コマンド実例。

スタンドアロン・サーバーのプロファイル

以下のコマンド例は、Windows サーバー上で *my_WPSSA_profile* と呼ばれる WebSphere Process Server スタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成します。

319 ページの表 81、319 ページの表 82、および 320 ページの表 83 のパラメーターは以下の機能を指定します。

- Oracle データベース製品は共通データベースおよび Common Event Infrastructure データベースの両方に使用でき、これらは両方ともローカル・ホストに既に存在すると想定されています。両方のデータベースは後で構成するように設定されています (**-dbDelayConfig "true"** のコマンド・パラメーター値は、構成スクリプトは作成されますが実行されないことを指定します)。データベース関連の **manageprofiles** パラメーターの完全なリストは、トピック 333 ページの『共通データベース構成用の **manageprofiles** パラメーター (データベース製品ごと)』および 345 ページの『Common Event Infrastructure データベース構成の **manageprofiles** パラメーター (データベース製品ごと)』を参照してください。
- Windows サービスは手動で開始するように設定されます。
- サンプルの Business Process Choreographer 構成が作成されます。
- ビジネス・ルール・マネージャーは構成されません。
- WebSphere が提供する Business Space は構成されます。
- プロファイル作成プロセスにより、ポート値 (データベース関連のポートは除く) が自動的に設定されます。このプロセスでは、新規プロファイルが他のプロファイルに対して検証され、ポートの競合が存在しないことが確認されます。

ヒント: **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーが指定するポート値をオーバーライドするには、**-portsFile** パラメーターを使用します。すべての有効な **manageprofiles** パラメーターのリストについては、446 ページの『**manageprofiles** パラメーター』を参照してください。

- 管理セキュリティは使用可能になります。

使用可能なオプションは 2 つあります。

- オプション: スキーマ・ユーザー ID および表のすべてをプロファイル作成の一環として作成する場合、Oracle データベースで SYSDBA 特権のあるユーザー ID を提供する必要があります。この ID はスキーマとテーブルを作成するのに使用されますが、構成のどこにも保持されません。
- オプション: SYSDBA ユーザー ID を提供しない場合、スクリプトをエクスポートし、手動で実行することができます。

これらのオプションの両方について、各コンポーネントに対して固有のスキーマ・ユーザー ID を選択できます。

319 ページの表 81 は、スタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成するために使用する **manageprofiles** コマンド行ユーティリティー・パラメーターと値の例を示したものです。

表 81. 指定される *manageprofiles* コマンド行ユーティリティー・パラメーター

パラメーター	値
-create	N/A
-templatePath	"install_root ¥profileTemplates¥default.wbiserver" (完全修飾 されていることが必要)
-profileName	"my_WPSSA_profile"
-enableAdminSecurity	"true"
-adminPassword	"admin_pwd"
-adminUserName	"admin_id"
-configureBPC	"true"
-dbType	"ORACLE"
-dbName	"WPRCSDB"
-ceiDbName	"EVENT"
-dbDelayConfig	"true"
-fileStoreForME	"false" (-dbCommonForME が true の場合、 true は不可)
-dbCommonForME	"true"
-dbPassword	"db_pwd"
-dbDriverType	"oracle_thin"
-dbJDBCClasspath	"oracle_library_directory"
-dbServerPort	"1521"
-configureBSpace	"true"
-configureBRM	"false"

表 82 は、通常では変更する必要のない *manageprofiles* コマンド行ユーティリティー・パラメーターとデフォルト値を示したものです。

表 82. デフォルトの *manageprofiles* コマンド行ユーティリティー・パラメーター





パラメーター	デフォルト値
-profilePath	"install_root¥profiles¥ my_WPSSA_profile"
-hostName	"host_name"
-nodeName	"host_nameNodenode_number"
-cellName	"host_nameNodenode_numbercell_numberCell"
 -winserviceCheck	"true"
 -winserviceAccountType	"localsystem"
 -winserviceStartupType	"manual"
 -winserviceUserName	"Administrator"
-dbOutputscriptDir	"install_root¥profiles¥my_WPSSA_profile¥ dbscripts¥"
-dbHostName	"local_host_name"

表 83 に示すのは、プロファイル管理ツールを通じて表示されない追加の `manageprofiles` コマンド行ユーティリティー・パラメーターで、ユーザー自身の Oracle 用ユーザー名およびパスワードの組み合わせを選択するように指定することが可能です。

表 83. Oracle 用追加 `manageprofiles` コマンド行ユーティリティー・パラメーター

パラメーター	値	注釈
-dbSysUserId	" <i>sys_user_id</i> "	この ID は SYSDBA 特権を持つ必要があります。Oracle の内部ユーザー 'sys' は使用しないでください。 このパラメーターは、プロファイル作成中 (<code>dbDelayConfig = "FALSE"</code> のとき)、データベースおよびそのオブジェクトを構成する場合に必要です。
-dbSysPassword	" <i>sys_pwd</i> "	このパラメーターは、プロファイル作成中 (<code>dbDelayConfig = "FALSE"</code> のとき)、データベースおよびそのオブジェクトを構成する場合に必要です。
-dbCommonUserId	" <i>common_db_userID</i> " (共通 DB オブジェクトの作成に使用)	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、このユーザーは Oracle データベース名に基づいて自動的に作成されます (SID)。例: SID が ORCL の場合、 <code>dbCommonUserId</code> は ORCCOMM。
-dbCommonPassword	" <i>common_db_pwd</i> "	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。 「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、 <code>dbCommonPassword</code> は <code>dbPassword</code> に設定されません。例: <code>dbCommonPassword = dbPassword</code>
-dbBspaceUserId	" <i>bpace_db_userID</i> " (Business Space の構成に使用)	このパラメーターは、ユーザー独自の Business Space スキーマが必要な場合に必要です。指定されない場合、デフォルト値 (<code>IBMBUSSP</code>) が設定されます。
-dbBspacePassword	" <i>bpace_db_pwd</i> " (Business Space の構成に使用)	このパラメーターは、独自の Business Space パスワードが必要な場合に必要です。それ以外の場合は、 <code>dbBspacePassword = "YouNameIt"</code> でなければ <code>dbBspacePassword = dbPassword</code> (存在する場合)、そうでなければ <code>dbBspacePassword = IBMBUSSP</code> 、という順序でデフォルト値が設定されます。

表 83. Oracle 用追加 `manageprofiles` コマンド行ユーティリティー・パラメーター (続き)

パラメーター	値	注釈
-dbCeiUserId	" <i>cei_userid</i> " (CEI オブジェクトの作成に使用)	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。 「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、このユーザーは Oracle データベース名に基づいて自動的に作成されます (SID)。例: SID が ORCL の場合、dbCeiUserId は ORCCEID。
-dbCeiPassword	" <i>cei_db_pwd</i> "	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。 「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、dbCeiPassword は dbPassword に設定されます。例: dbCeiPassword = dbPassword
	下のすべてのパラメーターは、-dbCommonForME = "true" の場合のみ有効です。	
-dbBPCMeUserId	" <i>bpc_me_userid</i> " (BPC ME オブジェクトの作成に使用) (-configureBPC = "true" の場合のみ有効)	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。 「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、このユーザーは Oracle データベース名に基づいて自動的に作成されます (SID)。例: SID が ORCL の場合、dbBPCMeUserId は ORCBM00。
-dbBPCMePassword	" <i>bpc_me_pwd</i> " (-configureBPC = "true" の場合にのみ有効)	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。 「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、dbCeiPassword は dbPassword に設定されます。例: dbBPCMePassword = dbPassword
-dbCeiMeUserId	" <i>cei_me_userid</i> " (CEI ME オブジェクトの作成に使用)	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。 「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、このユーザーは Oracle データベース名に基づいて自動的に作成されます (SID)。例: SID が ORCL の場合、dbCeiMeId は ORCCM00。

表 83. Oracle 用追加 *manageprofiles* コマンド行ユーティリティー・パラメーター (続き)

パラメーター	値	注釈
-dbCeiMePassword	" <i>cei_me_pwd</i> "	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。 「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、dbCeiPassword は dbPassword に設定されます。例: dbCeiMePassword = dbPassword
-dbAppMeUserId	" <i>app_me_userID</i> " (SCAAPP ME オブジェクトの作成に使用)	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。 「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、このユーザーは Oracle データベース名に基づいて自動的に作成されます (SID)。例: SID が ORCL の場合、dbAppMeId は ORCSA00。
-dbAppMePassword	" <i>app_me_pwd</i> "	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。 「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、dbCeiPassword は dbPassword に設定されます。例: dbAppMePassword = dbPassword
-dbSysMeUserId	" <i>sys_me_userID</i> " (SCASYS ME オブジェクトの作成に使用)	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。 「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、このユーザーは Oracle データベース名に基づいて自動的に作成されます (SID)。例: SID が ORCL の場合、dbSysMeUserId は ORCSS00。
-dbSysMePassword	" <i>sys_me_pwd</i> "	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。 「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、dbCeiPassword は dbPassword に設定されます。例: dbAppMePassword = dbPassword

WebSphere Enterprise Service Bus の例

以下は、*my_WESBSA_profile* と呼ばれる WebSphere Enterprise Service Bus スタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成する類似した例です。違いは、データベースを直ちに構成するように設定されていることです (-dbDelayConfig "false" のコマンド・パラメーター値は、構成スクリプトが実行されることを指定します)。

表 84 は、manageprofiles コマンド行ユーティリティー・パラメーターと値の例を示したものです。

表 84. 指定される manageprofiles コマンド行ユーティリティー・パラメーター

パラメーター	値
-create	N/A
-templatePath	"install_root ¥profileTemplates¥default.esbserver" (完全修飾 されていることが必要)
-profileName	"my_WESBSA_profile"
-enableAdminSecurity	"true"
-adminPassword	"admin_pwd"
-adminUserName	"admin_id"
-dbType	"ORACLE"
-dbUserId	"cei_id"
-dbUserPw	"cei_pwd"
-dbName	"WPRCSDB"
-ceiDbName	"EVENT"
-dbDelayConfig	"false"
-fileStoreForME	"false" (-dbCommonForME が true の場合、 true は不可)
-dbCommonForME	"true"
-dbLocation	"oracle_install_directory"
-dbPassword	"db_pwd"
-dbDriverType	"oracle_thin"
-dbJDBCClasspath	"oracle_library_directory"
-dbServerPort	"1521"
-dbSysUserId	"sys_user_id"
-dbSysPassword	"sys_pwd"
-configureBspace	"true"

表 85 は、通常では変更する必要のない manageprofiles コマンド行ユーティリティー・パラメーターとデフォルト値を示したものです。

表 85. デフォルトの manageprofiles コマンド行ユーティリティー・パラメーター




パラメーター	デフォルト値
-profilePath	"install_root¥profiles¥ my_WESBSA_profile"
-hostName	"host_name"
-nodeName	"host_nameNodenode_number"
-cellName	"host_nameNodenode_numbercell_numberCell"
 -winserviceStartupType	"manual"
 -winserviceCheck	"true"
 -winserviceAccountType	"localsystem"

表 85. デフォルトの *manageprofiles* コマンド行ユーティリティ・パラメーター (続き)

パラメーター	デフォルト値
Windows -winserviceUserName	"Administrator"
-dbOutputScriptDir	"install_root¥profiles¥my_WESBSA_profile¥dbscripts¥"
-dbHostName	"local_host_name"

表 86 に示すのは、プロファイル管理ツールを通じて表示されない追加の *manageprofiles* コマンド行ユーティリティ・パラメーターで、ユーザー自身の Oracle 用ユーザー名およびパスワードの組み合わせを選択するように指定することが可能です。

表 86. Oracle 用追加 *manageprofiles* コマンド行ユーティリティ・パラメーター

パラメーター	デフォルト値	注釈
-dbCommonUserId	"common_db_userID" (共通 DB オブジェクトの作成に使用)	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、このユーザーは Oracle データベース名に基づいて自動的に作成されます (SID)。例: SID が ORCL の場合、dbCommonUserId は ORCCOMM。
-dbCommonPassword	"common_db_pwd"	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。 「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、dbCommonPassword は dbPassword に設定されます。例: dbCommonPassword = dbPassword
-dbBspaceUserId	"bspace_db_userID" (Business Space の構成に使用)	このパラメーターは、ユーザー独自の Business Space スキーマが必要な場合に必要です。指定されない場合、デフォルト値 (IBMBUSSP) が設定されます。
-dbBspacePassword	"bspace_db_pwd" (Business Space の構成に使用)	このパラメーターは、独自の Business Space パスワードが必要な場合に必要です。それ以外の場合は、dbBspacePassword = "YouNameIt" でなければ dbBspacePassword = dbPassword (存在する場合)、そうでなければ dbBspacePassword = IBMBUSSP、という順序でデフォルト値が設定されます。

表 86. Oracle 用追加 *manageprofiles* コマンド行ユーティリティー・パラメーター (続き)

パラメーター	デフォルト値	注釈
-dbCeiUserId	"cei_userID" (CEI オブジェクトの作成に使用)	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。 「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、このユーザーは Oracle データベース名に基づいて自動的に作成されます (SID)。例: SID が ORCL の場合、dbCeiUserId は ORCCEID。
-dbCeiPassword	"cei_db_pwd"	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。 「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、dbCeiPassword は dbPassword に設定されます。例: dbCeiPassword = dbPassword
	下のすべてのパラメーターは、-dbCommonForME = "true" の場合のみ有効です。	
-dbCeiMeUserId	"cei_me_userID" (CEI ME オブジェクトの作成に使用)	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。 「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、このユーザーは Oracle データベース名に基づいて自動的に作成されます (SID)。例: SID が ORCL の場合、dbCeiMeId は ORCCM00。
-dbCeiMePassword	"cei_me_pwd"	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。 「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、dbCeiMePassword は dbPassword に設定されます。例: dbCeiMePassword = dbPassword

表 86. Oracle 用追加 *manageprofiles* コマンド行ユーティリティー・パラメーター (続き)

パラメーター	デフォルト値	注釈
-dbAppMeUserId	" <i>app_me_userID</i> " (SCAAPP ME オブジェクトの作成に使用)	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。 「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、このユーザーは Oracle データベース名に基づいて自動的に作成されます (SID)。例: SID が ORCL の場合、dbAppMeId は ORCSA00。
-dbAppMePassword	" <i>app_me_pwd</i> "	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。 「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、dbCeIPassword は dbPassword に設定されます。例: dbAppMePassword = dbPassword
-dbSysMeUserId	" <i>sys_me_userID</i> " (SCASYS ME オブジェクトの作成に使用)	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。 「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、このユーザーは Oracle データベース名に基づいて自動的に作成されます (SID)。例: SID が ORCL の場合、dbSysMeUserId は ORCSS00。
-dbSysMePassword	" <i>sys_me_pwd</i> "	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。 「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、dbCeIPassword は dbPassword に設定されます。例: dbAppMePassword = dbPassword

デプロイメント・マネージャー・プロファイル (デプロイメント環境のセットアップなし)

以下のコマンド例は、Windows サーバー上で *my_WPSDMGR_profile* と呼ばれるデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成します。

表 87 および 328 ページの表 88 のパラメーターは以下を指定します。

- Oracle データベース製品は共通データベース用に使用されますが、これはリモート・ホスト上に存在すると想定されています。このデータベースは後で構成するように設定されています (**-dbDelayConfig "true"** コマンドのパラメーター値により構成スクリプトは作成されますが、実行されません)。データベース関連の `manageprofiles` パラメーターの完全なリストは、トピック 333 ページの『共通データベース構成用の `manageprofiles` パラメーター (データベース製品ごと)』を参照してください。
- Windows サービスは手動で開始するように設定されます。
- プロファイル作成プロセスにより、ポート値 (データベース関連のポートは除く) が自動的に設定されます。このプロセスでは、新規プロファイルが他のプロファイルに対して検証され、ポートの競合が存在しないことが確認されます。

ヒント: `manageprofiles` コマンド行ユーティリティーが指定するポート値をオーバーライドするには、**-portsFile** パラメーターを使用します。すべての有効な `manageprofiles` パラメーターのリストについては、446 ページの『`manageprofiles` パラメーター』を参照してください。

- 管理セキュリティは使用可能になります。

表 87 は、デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成するために使用する `manageprofiles` コマンド行ユーティリティー・パラメーターと値の例を示したものです。

表 87. 指定される `manageprofiles` コマンド行ユーティリティー・パラメーター

パラメーター	値
<code>-create</code>	N/A
<code>-templatePath</code>	" <i>install_root</i> %profileTemplates%dmgr.wbiserver" (完全修飾されていることが必要)
<code>-profileName</code>	" <i>my_WPSDMGR_profile</i> "
<code>-enableAdminSecurity</code>	"true"
<code>-adminPassword</code>	" <i>admin_pwd</i> "
<code>-adminUserName</code>	" <i>admin_id</i> "
<code>-ndtopology</code>	"false"
<code>-dbType</code>	"ORACLE"
<code>-dbName</code>	"WPRCSDB"
<code>-dbDelayConfig</code>	"true"
<code>-dbPassword</code>	" <i>db_pwd</i> "
<code>-dbDriverType</code>	"oracle_thin"
<code>-dbHostName</code>	" <i>remote_host_name</i> "
<code>-dbJDBCClasspath</code>	" <i>oracle_library_directory</i> "
<code>-dbServerPort</code>	"1521"

328 ページの表 88 は、通常では変更する必要のない `manageprofiles` コマンド行ユーティリティー・パラメーターとデフォルト値を示したものです。

表 88. デフォルトの *manageprofiles* コマンド行ユーティリティ・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
-profilePath	"install_root¥profiles¥ my_WPSDMGR_profile"
-hostName	"host_name"
-nodeName	"host_nameCellManagernode_number"
-cellName	"host_nameCellcell_number"
Windows -winserviceCheck	"true"
Windows -winserviceAccountType	"localsystem"
Windows -winserviceStartupType	"manual"
Windows -winserviceUserName	"Administrator"
-dbOutputScriptDir	"install_root¥profiles¥my_WPSDMGR_profile¥dbscripts¥"

表 89 に示すのは、プロファイル管理ツールを通じて表示されない追加の *manageprofiles* コマンド行ユーティリティ・パラメーターで、ユーザー自身の Oracle 用ユーザー名およびパスワードの組み合わせを選択するように指定することが可能です。

表 89. Oracle 用追加 *manageprofiles* コマンド行ユーティリティ・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
-dbSysUserId	"sys_userID" (SCASYS ME オブジェクトの作成に使用)
-dbSysPassword	"sys_pwd"
-dbCommonUserId	"common_db_userID" (共通 DB オブジェクトの作成に使用)
-dbCommonPassword	"common_db_pwd"

WebSphere Enterprise Service Bus の例

以下は、*my_WESBDMGR_profile* と呼ばれる WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成する類似した例です。違いは、データベースを直ちに構成するように設定されていることです (**-dbDelayConfig "false"** のコマンド・パラメーター値は、構成スクリプトが実行されることを指定します)。

表 90 は、デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成するために使用する *manageprofiles* コマンド行ユーティリティ・パラメーターと値の例を示したものです。

表 90. 指定される *manageprofiles* コマンド行ユーティリティ・パラメーター





パラメーター	値
-create	N/A
-templatePath	"install_root ¥profileTemplates¥dmgr.esbserver" (完全修飾されていることが必要)

表 90. 指定される *manageprofiles* コマンド行ユーティリティ・パラメーター (続き)

パラメーター	値
-profileName	"my_WESBDMGR_profile"
-enableAdminSecurity	"true"
-adminPassword	"admin_pwd"
-adminUserName	"admin_id"
-ndtopology	"false"
-dbType	"ORACLE"
-dbName	"WPRCSDB"
-dbDelayConfig	"false"
-dbLocation	"oracle_install_directory"
-dbPassword	"db_pwd"
-dbDriverType	"oracle_thin"
-dbHostName	"localhost"
-dbJDBCClasspath	"oracle_library_directory"
-dbServerPort	"1521"
-dbSysUserId	"sys_user_id"
-dbSysPassword	"sys_pwd"

表 91 は、通常では変更する必要のない *manageprofiles* コマンド行ユーティリティ・パラメーターとデフォルト値を示したものです。

表 91. デフォルトの *manageprofiles* コマンド行ユーティリティ・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
-profilePath	"install_root¥profiles¥ my_WESBDMGR_profile"
-hostName	"host_name"
-nodeName	"host_nameCellManagernode_number"
-cellName	"host_nameCellcell_number"
 -winserviceCheck	"true"
 -winserviceAccountType	"localsystem"
 -winserviceStartupType	"manual"
 -winserviceUserName	"Administrator"
-dbOutputScriptDir	"install_root¥profiles¥ my_WESBDMGR_profile¥dbscripts¥"

330 ページの表 92 に示すのは、プロファイル管理ツールを通じて表示されない追加の *manageprofiles* コマンド行ユーティリティ・パラメーターで、ユーザー自身の Oracle 用ユーザー名およびパスワードの組み合わせを選択するように指定することが可能です。

表 92. Oracle 用追加 *manageprofiles* コマンド行ユーティリティー・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
-dbCommonUserId	"common_db_userID" (共通 DB オブジェクトの作成に使用)
-dbCommonPassword	"common_db_pwd"

デプロイメント・マネージャー・プロファイル (デプロイメント環境のセットアップあり)

以下のコマンド例は、Windows サーバー上で *my_WPSDMGR_DE_profile* と呼ばれるデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成します。

331 ページの表 93 および 331 ページの表 94 のパラメーターは以下を指定します。

- プロファイル作成プロセスはデプロイメント環境を自動的に構成します (-ndtopology "true" および -topologyPattern "Reference" のパラメーターによって指定されます)。
- Oracle データベース製品は共通データベース用に使用されますが、これはリモート・ホスト上に存在すると想定されています。データベースは、デプロイメント環境設定の一部として構成されるように設定されています (-dbDelayConfig "true" コマンド・パラメーターは、デプロイメント環境設定では無効です)。データベース関連の *manageprofiles* パラメーターの完全なリストは、トピック 333 ページの『共通データベース構成用の *manageprofiles* パラメーター (データベース製品ごと)』を参照してください。
- Windows サービスは手動で開始するように設定されます。
- プロファイル作成プロセスにより、ポート値 (データベース関連のポートは除く) が自動的に設定されます。このプロセスでは、新規プロファイルが他のプロファイルに対して検証され、ポートの競合が存在しないことが確認されます。

ヒント: *manageprofiles* コマンド行ユーティリティーが指定するポート値をオーバーライドするには、-portsFile パラメーターを使用します。すべての有効な *manageprofiles* パラメーターのリストについては、446 ページの『*manageprofiles* パラメーター』を参照してください。

- 管理セキュリティは使用可能になります。

使用可能なオプションは 2 つあります。

- オプション: スキーマ・ユーザー ID および表のすべてをプロファイル作成の一環として作成する場合、Oracle データベースで SYSDBA 特権のあるユーザー ID を提供する必要があります。この ID はスキーマとテーブルを作成するのに使用されますが、構成のどこにも保持されません。
- オプション: SYSDBA ユーザー ID を提供しない場合、スクリプトをエクスポートし、手動で実行することができます。

これらのオプションの両方に対し、各コンポーネントに対して固有のスキーマ・ユーザー ID を選択できます。


表 93 は、デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成するために使用する `manageprofiles` コマンド行ユーティリティ・パラメーターと値の例を示したものです。

表 93. 指定される `manageprofiles` コマンド行ユーティリティ・パラメーター

パラメーター	値
<code>-create</code>	N/A
<code>-templatePath</code>	" <i>install_root</i> %profileTemplates%dmgr.wbiserver" (完全修飾されていることが必要)
<code>-profileName</code>	" <i>my_WPSDMGR_DE_profile</i> "
<code>-enableAdminSecurity</code>	"true"
<code>-adminPassword</code>	" <i>admin_pwd</i> "
<code>-adminUserName</code>	" <i>admin_id</i> "
<code>-ndtopology</code>	"true"
<code>-topologyPattern</code>	"Reference"
<code>-dbType</code>	"ORACLE"
<code>-dbName</code>	"WPRCSDB"
<code>-dbUserId</code>	" <i>sys_user_id</i> " (デプロイメント環境では SYSDBA ユーザー ID である必要あり)
<code>-dbPassword</code>	" <i>sys_pwd</i> "
<code>-dbDriverType</code>	"oracle_thin"
<code>-dbHostName</code>	" <i>remote_host_name</i> "
<code>-dbJDBCClasspath</code>	" <i>oracle_library_directory</i> "
<code>-dbServerPort</code>	"1521"

表 94 は、通常では変更する必要のない `manageprofiles` コマンド行ユーティリティ・パラメーターとデフォルト値を示したものです。

表 94. デフォルトの `manageprofiles` コマンド行ユーティリティ・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
<code>-profilePath</code>	" <i>install_root</i> %profiles% <i>my_WPSDMGR_DE_profile</i> "
<code>-hostName</code>	" <i>host_name</i> "
<code>-nodeName</code>	" <i>host_name</i> CellManagernode_number"
<code>-cellName</code>	" <i>host_name</i> Cellcell_number"
 <code>-winserviceCheck</code>	"true"
 <code>-winserviceAccountType</code>	"localsystem"
 <code>-winserviceStartupType</code>	"manual"
 <code>-winserviceUserName</code>	"Administrator"
<code>-dbDelayConfig</code>	"false" (true はデプロイメント環境では無効)
<code>-dbOutputScriptDir</code>	" <i>install_root</i> %profiles% <i>my_WPSDMGR_DE_profile</i> %dbscripts%"

WebSphere Enterprise Service Bus の例

以下は、*my_WESBDMGR_DE_profile* と呼ばれる WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成する類似した例です。

表 95 は、デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成するために使用する *manageprofiles* コマンド行ユーティリティー・パラメーターと値の例を示したものです。

表 95. 指定される *manageprofiles* コマンド行ユーティリティー・パラメーター

パラメーター	値
-create	N/A
-templatePath	"install_root %profileTemplates%dmgr.esbserver" (完全修飾されていることが必要)
-profileName	"my_WESBDMGR_DE_profile"
-enableAdminSecurity	"true"
-adminPassword	"admin_pwd"
-adminUserName	"admin_id"
-ndtopology	"true"
-topologyPattern	"Reference"
-dbType	"ORACLE"
-dbName	"WPRCSDB"
-dbUserId	"sys_user_id" (デプロイメント環境では SYSDBA ユーザー ID である必要あり)
-dbPassword	"sys_pwd"
-dbDriverType	"oracle_thin"
-dbHostName	"remote_host_name"
-dbJDBCClasspath	"oracle_library_directory"
-dbServerPort	"1521"

表 96 は、通常では変更する必要のない *manageprofiles* コマンド行ユーティリティー・パラメーターとデフォルト値を示したものです。

表 96. デフォルトの *manageprofiles* コマンド行ユーティリティー・パラメーター





パラメーター	デフォルト値
-profilePath	"install_root%profiles% my_WESBDMGR_DE_profile"
-hostName	"host_name"
-nodeName	"host_nameCellManagernode_number"
-cellName	"host_nameCellcell_number"
 -winserviceCheck	"true"
 -winserviceAccountType	"localsystem"
 -winserviceStartupType	"manual"
 -winserviceUserName	"Administrator"

表 96. デフォルトの *manageprofiles* コマンド行ユーティリティー・パラメーター (続き)

パラメーター	デフォルト値
-dbDelayConfig	"false" (true はデプロイメント環境では無効)
-dbOutputScriptDir	"install_root\profiles\ my_WESBDMGR_DE_profile\dbscripts"

共通データベース構成用の *manageprofiles* パラメーター (データベース製品ごと):

共通データベースを構成するには、特定の *manageprofiles* コマンド行ユーティリティー・パラメーターを使用します。指定するパラメーターは、使用中のデータベース製品と、作成するプロファイルの型によって異なることがあります。

このトピックの表には、サポートされるあらゆるデータベース製品を使用して共通データベースを構成するために使用可能な *manageprofiles* パラメーターが示されています。共通データベース構成に関連付けられたパラメーターには、一般的に接頭部「-db」が付いています (例えば **-dbType**、および **-dbDelayConfig**)。また、これらのパラメーターがプロファイル管理ツールで表示される際の、相当するフィールド名も示します。

manageprofiles パラメーターの完全なリスト (デフォルト値を含む) については、446 ページの『*manageprofiles* パラメーター』というトピックを参照してください。いろいろなタイプのプロファイルを作成または拡張するために使用する *manageprofiles* コマンドの例は、トピック 304 ページの『*manageprofiles* コマンド行ユーティリティーによる Derby または DB2 データベースのプロファイルの作成 - 例』および 405 ページの『*manageprofiles* コマンド行ユーティリティーによる Derby または DB2 データベースのプロファイルの拡張 - 例』で見ることができます。

データベース構成に使用できるパラメーターを表示するには、以下のリストからデータベース製品を選択してください。

- 334 ページの『Derby Embedded または Derby Embedded 40 の場合』
- 334 ページの『Derby Network Server または Derby Network Server 40 の場合』
- 336 ページの『DB2 Universal の場合』
- 337 ページの『DB2 データ・サーバー』
- 338 ページの『DB2 for IBM i (ツールボックス) および DB2 for i5/OS (ツールボックス) の場合』
- 339 ページの『DB2 for z/OS v8 および DB2 for z/OS v9 の場合』
- 341 ページの『Oracle』
- 342 ページの『Informix Dynamic Server の場合』
- 343 ページの『Microsoft SQL Server の場合』

カスタム・プロファイルで使用できるパラメーターは、**-dbType** と **-dbJDBCClasspath** だけです。これは、カスタム・プロファイルの統合先のデプロイメント・マネージャーで使用される共通データベースのタイプおよびドライバーの場所を識別するだけだからです。

Derby Embedded または Derby Embedded 40 の場合

表 97 には、Derby Embedded または Derby Embedded 40 でスタンドアロン・サーバー・プロファイルによって使用される共通データベースを構成するために使用可能な `manageprofiles` パラメーターが示されています。

表 97. 共通データベースの構成に使用できる `manageprofiles` パラメーター (Derby Embedded または Derby Embedded 40 を使用)

パラメーター	プロファイル管理ツールの「データベース構成」ページに表示される関連フィールド
スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合	
-cdbSchemaName 両方が指定されている場合、dbSchemaName よりも優先される新しいパラメーターです。-dbSchemaName 注: V7 では推奨されていません。	スキーマ名 (Schema name)
-dbCommonForME (Derby Embedded 40 の場合のみ)	メッセージング・エンジン (ME) でこのデータベースを使用する
-dbCreateNew (常に true である必要があります)	N/A
-dbDelayConfig (Derby Embedded 40 の場合のみ)	データベース・スクリプトの実行を遅延 (リモート・データベースを使用する場合は選択する必要がある)
-dbName	共通データベース名
-dbOutputScriptDir	データベース・スクリプトの出力ディレクトリー 注: 「生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーをオーバーライドする」オプションを選択した場合のみ使用可能です。この値は絶対パスでなければなりません。相対パスを設定した場合、SQL スクリプトはエクスポートまたは実行されず、その結果、サーバー始動時に多数の例外が発生することになります。
-dbType	データベース製品の選択
-fileStoreForME (スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合のみ)	メッセージング・エンジン (ME) でこのファイル・ストアを使用する
N/A	生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーをオーバーライドする

Derby Network Server または Derby Network Server 40 の場合

335 ページの表 98 には、Derby Network Server または Derby Network Server 40 でスタンドアロン・サーバー、デプロイメント・マネージャー、またはカスタム・プロファイルによって使用される共通データベースを構成するために使用可能な `manageprofiles` パラメーターが示されています。

表 98. 共通データベースの構成に使用できる *manageprofiles* パラメーター (*Derby Network Server* または *Derby Network Server 40* を使用)

パラメーター	プロファイル管理ツールの「データベース構成」ページに表示される関連フィールド
カスタム・プロファイル用	
-dbType	デプロイメント・マネージャーで使用するデータベース製品の選択
-dbJDBCClasspath	JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)
スタンドアロン・サーバー・プロファイルまたはデプロイメント・マネージャー・プロファイル用	
-cdbSchemaName 両方が指定されている場合、dbSchemaNameよりも優先される新しいパラメーターです。-dbSchemaName 注: V7 では推奨されていません。	スキーマ名 (Schema name)
-dbCommonForME (スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合のみ)	メッセージング・エンジン (ME) でこのデータベースを使用する
-dbCreateNew (常に true である必要があります)	N/A
-dbDelayConfig (Derby Network Server 40 の場合のみ)	データベース・スクリプトの実行を遅延 (リモート・データベースを使用する場合は選択する必要がある)
-dbHostName	データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)
-dbName	共通データベース名
-dbOutputScriptDir	データベース・スクリプトの出力ディレクトリー 注: 「生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーをオーバーライドする」オプションを選択した場合のみ使用可能です。この値は絶対パスでなければなりません。相対パスを設定した場合、SQL スクリプトはエクスポートまたは実行されず、その結果、サーバー始動時に多数の例外が発生することになります。
-dbPassword	データベース認証用のパスワード
-dbServerPort	サーバー・ポート
-dbType	データベース製品の選択
-dbUserId	データベースで認証するユーザー名
-fileStoreForME (スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合のみ)	メッセージング・エンジン (ME) でこのファイル・ストアを使用する
N/A	生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーをオーバーライドする

DB2 Universal の場合

表 99 には、DB2 Universal でスタンドアロン・サーバー、デプロイメント・マネージャー、またはカスタム・プロファイルによって使用される共通データベースを構成するために使用可能な `manageprofiles` パラメーターが示されています。

表 99. 共通データベースの構成に使用できる `manageprofiles` パラメーター (DB2 Universal を使用)

パラメーター	プロファイル管理ツールの「データベース構成」ページに表示される関連フィールド
カスタム・プロファイル用	
-dbJDBCClasspath	JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)
-dbType	デプロイメント・マネージャーで使用するデータベース製品の選択
スタンドアロン・サーバー・プロファイルまたはデプロイメント・マネージャー・プロファイル用	
-cdbSchemaName 両方が指定されている場合、dbSchemaName よりも優先される新しいパラメーターです。-dbSchemaName 注: V7 では推奨されていません。	スキーマ名 (Schema name)
-dbCommonForME (スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合のみ)	メッセージング・エンジン (ME) でこのデータベースを使用する
-dbCreateNew	N/A
-dbDelayConfig	データベース・スクリプトの実行を遅延 (リモート・データベースを使用する場合は選択する必要がある)
-dbDriverType	N/A
-dbHostName	データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)
-dbJDBCClasspath	JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)
-dbName	共通データベース名
-dbOutputScriptDir	データベース・スクリプトの出力ディレクトリー 注: 「生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーをオーバーライドする」オプションを選択した場合のみ使用可能です。この値は絶対パスでなければなりません。相対パスを設定した場合、SQL スクリプトはエクスポートまたは実行されず、その結果、サーバー始動時に多数の例外が発生することになります。
-dbPassword	データベース認証用のパスワード
-dbServerPort	サーバー・ポート

表 99. 共通データベースの構成に使用できる *manageprofiles* パラメーター (DB2 Universal を使用) (続き)

パラメーター	プロファイル管理ツールの「データベース構成」ページに表示される関連フィールド
-dbType	データベース製品の選択
-dbUserId	データベースで認証するユーザー名
-fileStoreForME (スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合のみ)	メッセージング・エンジン (ME) でこのファイル・ストアを使用する
N/A	生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーをオーバーライドする

DB2 データ・サーバー

表 100 には、DB2 Universal でスタンドアロン・サーバー、デプロイメント・マネージャー、またはカスタム・プロファイルによって使用される共通データベースを構成するために使用可能な *manageprofiles* パラメーターが示されています。

表 100. 共通データベースの構成に使用できる *manageprofiles* パラメーター (DB2 データ・サーバーを使用)

パラメーター	プロファイル管理ツールの「データベース構成」ページに表示される関連フィールド
カスタム・プロファイル用	
-dbJDBCClasspath	JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)
-dbType	デプロイメント・マネージャーで使用するデータベース製品の選択
スタンドアロン・サーバー・プロファイルまたはデプロイメント・マネージャー・プロファイル用	
-cdbSchemaName 両方が指定されている場合、dbSchemaName よりも優先される新しいパラメーターです。-dbSchemaName 注: V7 では推奨されていません。	スキーマ名 (Schema name)
-dbCommonForME (スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合のみ)	メッセージング・エンジン (ME) でこのデータベースを使用する
-dbCreateNew	N/A
-dbDelayConfig	データベース・スクリプトの実行を遅延 (リモート・データベースを使用する場合は選択する必要がある)
-dbHostName	データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)
-dbJDBCClasspath	JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)
-dbName	共通データベース名

表 100. 共通データベースの構成に使用できる *manageprofiles* パラメーター (DB2 データ・サーバーを使用) (続き)

パラメーター	プロファイル管理ツールの「データベース構成」ページに表示される関連フィールド
-dbOutputScriptDir	データベース・スクリプトの出力ディレクトリー 注: 「生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーをオーバーライドする」オプションを選択した場合のみ使用可能です。この値は絶対パスでなければなりません。相対パスを設定した場合、SQL スクリプトはエクスポートまたは実行されず、その結果、サーバー始動時に多数の例外が発生することになります。
-dbPassword	データベース認証用のパスワード
-dbServerPort	サーバー・ポート
-dbType	データベース製品の選択
-dbUserId	データベースで認証するユーザー名
-fileStoreForME (スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合のみ)	メッセージング・エンジン (ME) でこのファイル・ストアを使用する
N/A	生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーをオーバーライドする

DB2 for IBM i (ツールボックス) および DB2 for i5/OS (ツールボックス) の場合

表 101 には、i5/OS または IBM i オペレーティング・システムに提供されたデータベース上で、スタンドアロン・サーバー、デプロイメント・マネージャー、またはカスタム・プロファイルによって使用される共通データベースを構成するために使用可能な *manageprofiles* パラメーターが示されています。

表 101. i5/OS または IBM i オペレーティング・システムに提供されたデータベースを使用した共通データベースの構成のために使用可能な *manageprofiles* パラメーター

パラメーター	プロファイル管理ツールの「データベース構成」ページに表示される関連フィールド
カスタム・プロファイル用	
-dbJDBCClasspath	JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)
-dbType	デプロイメント・マネージャーで使用するデータベース製品の選択
スタンドアロン・サーバー・プロファイルまたはデプロイメント・マネージャー・プロファイル用	
-dbCommonForME (スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合のみ)	メッセージング・エンジン (ME) でこのデータベースを使用する
-dbCreateNew (常に true である必要があります)	N/A

表 101. i5/OS または IBM i オペレーティング・システムに提供されたデータベースを使用した共通データベースの構成のために使用可能な *manageprofiles* パラメーター (続き)

パラメーター	プロファイル管理ツールの「データベース構成」ページに表示される関連フィールド
-dbDelayConfig	データベース・スクリプトの実行を遅延 (リモート・データベースを使用する場合は選択する必要がある)
-dbHostName (ツールボックス・ドライバーの場合、リモート・データベース・ホスト名を指定する必要があります)	データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)
-dbJDBCClasspath	JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)
-dbName	共通データベース名
-dbOutputScriptDir	データベース・スクリプトの出力ディレクトリー 注: 「生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーをオーバーライドする」オプションを選択した場合のみ使用可能です。この値は絶対パスでなければなりません。相対パスを設定した場合、SQL スクリプトはエクスポートまたは実行されず、その結果、サーバー始動時に多数の例外が発生することになります。
-dbPassword	データベース認証用のパスワード
-cdbSchemaName 両方が指定されている場合、dbSchemaName よりも優先される新しいパラメーターです。-dbSchemaName 注: V7 では推奨されていません。	データベース・コレクション名
-dbType	データベース製品の選択
-dbUserId	データベースで認証するユーザー名
-fileStoreForME (スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合のみ)	メッセージング・エンジン (ME) でこのファイル・ストアを使用する
N/A	生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーをオーバーライドする

DB2 for z/OS v8 および DB2 for z/OS v9 の場合

表 102 には、DB2 for z/OS v8 または DB2 for z/OS v9 でスタンドアロン・サーバー、デプロイメント・マネージャー、またはカスタム・プロファイルによって使用される共通データベースを構成するために使用可能な *manageprofiles* パラメーターが示されています。

表 102. DB2 for z/OS v8 または DB2 for z/OS v9 を使用した共通データベースの構成のために使用可能な *manageprofiles* パラメーター

パラメーター	プロファイル管理ツールの「データベース構成」ページに表示される関連フィールド
カスタム・プロファイル用	

表 102. DB2 for z/OS v8 または DB2 for z/OS v9 を使用した共通データベースの構成のために使用可能な *manageprofiles* パラメーター (続き)

パラメーター	プロファイル管理ツールの「データベース構成」ページに表示される関連フィールド
-dbJDBCClasspath	JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)
-dbType	デプロイメント・マネージャーで使用するデータベース製品の選択
スタンドアロン・サーバー・プロファイルまたはデプロイメント・マネージャー・プロファイル用	
-dbCommonForME (スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合のみ)	メッセージング・エンジン (ME) でこのデータベースを使用する
-dbConnectionLocation	接続のロケーション
-dbCreateNew (常に false である必要があります)	N/A
-dbDelayConfig	データベース・スクリプトの実行を遅延 (リモート・データベースを使用する場合は選択する必要がある)
-dbHostName	データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)
-dbJDBCClasspath	JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)
-dbName	共通データベース名
-dbOutputScriptDir	データベース・スクリプトの出力ディレクトリー 注: 「生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーをオーバーライドする」オプションを選択した場合のみ使用可能です。この値は絶対パスでなければなりません。相対パスを設定した場合、SQL スクリプトはエクスポートまたは実行されず、その結果、サーバー始動時に多数の例外が発生することになります。
-dbPassword	データベース認証用のパスワード
-cdbSchemaName 両方が指定されている場合、dbSchemaName よりも優先される新しいパラメーターです。-dbSchemaName 注: V7 では推奨されていません。	データベースの別名
-dbServerPort	サーバー・ポート
-dbStorageGroup	ストレージ・グループ名
-dbType	データベース製品の選択
-dbUserId	データベースで認証するユーザー名
-fileStoreForME (スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合のみ)	メッセージング・エンジン (ME) でこのファイル・ストアを使用する

表 102. DB2 for z/OS v8 または DB2 for z/OS v9 を使用した共通データベースの構成のために使用可能な *manageprofiles* パラメーター (続き)

パラメーター	プロファイル管理ツールの「データベース構成」ページに表示される関連フィールド
N/A	生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーをオーバーライドする

Oracle

表 103 には、Oracle でスタンドアロン・サーバー、デプロイメント・マネージャー、またはカスタム・プロファイルによって使用される共通データベースを構成するために使用可能な *manageprofiles* パラメーターが示されています。

表 103. 共通データベースの構成に使用できる *manageprofiles* パラメーター (Oracle を使用)

パラメーター	プロファイル管理ツールの「データベース構成」ページに表示される関連フィールド
カスタム・プロファイル用	
-dbJDBCClasspath	JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー) Oracle データベースにアクセスするには、ojdbc6.jar ドライバーをインストールする必要があります。 注: Oracle 10g には、ojdbc6.jar ドライバーは含まれていません。このドライバーは Oracle の Web サイトからダウンロードできます。
-dbType	デプロイメント・マネージャーで使用するデータベース製品の選択
スタンドアロン・サーバー・プロファイルまたはデプロイメント・マネージャー・プロファイル用	
-dbCommonForME (スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合のみ)	メッセージング・エンジン (ME) でこのデータベースを使用する
-dbCreateNew (常に false である必要があります)	N/A
-dbDelayConfig	データベース・スクリプトの実行を遅延 (リモート・データベースを使用する場合は選択する必要がある)
-dbDriverType	JDBC ドライバー・タイプ
-dbHostName	データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)
-dbJDBCClasspath	JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)
-dbName	共通データベース名

表 103. 共通データベースの構成に使用できる *manageprofiles* パラメーター (Oracle を使用)
(続き)

パラメーター	プロファイル管理ツールの「データベース構成」ページに表示される関連フィールド
-dbOutputScriptDir	データベース・スクリプトの出力ディレクトリー 注: 「生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーをオーバーライドする」オプションを選択した場合のみ使用可能です。この値は絶対パスでなければなりません。相対パスを設定した場合、SQL スクリプトはエクスポートまたは実行されず、その結果、サーバー始動時に多数の例外が発生することになります。
-dbPassword	共通データベースのパスワード
-dbServerPort	サーバー・ポート
-dbType	データベース製品の選択
-dbUserId	共通データベースのユーザー名
-fileStoreForME (スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合のみ)	メッセージング・エンジン (ME) でこのファイル・ストアを使用する
-dbLocation (-dbDelayConfig が true に設定されている場合のみ必要)	データベース・サーバーのインストール・ディレクトリー
-dbSysPassword	パスワード
-dbSysUserId	システム管理者のユーザー名
N/A	生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーをオーバーライドする

Informix Dynamic Server の場合

表 104 には、Informix Dynamic Server でスタンドアロン・サーバー、デプロイメント・マネージャー、またはカスタム・プロファイルによって使用される共通データベースを構成するために使用可能な *manageprofiles* パラメーターが示されています。

表 104. 共通データベースの構成に使用できる *manageprofiles* パラメーター (Informix Dynamic Server を使用)

パラメーター	プロファイル管理ツールの「データベース構成」ページに表示される関連フィールド
カスタム・プロファイル用	
-dbJDBCClasspath	JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)
-dbType	デプロイメント・マネージャーで使用するデータベース製品の選択
スタンドアロン・サーバー・プロファイルまたはデプロイメント・マネージャー・プロファイル用	

表 104. 共通データベースの構成に使用できる *manageprofiles* パラメーター (*Informix Dynamic Server* を使用) (続き)

パラメーター	プロファイル管理ツールの「データベース構成」ページに表示される関連フィールド
-dbCommonForME (スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合のみ)	メッセージング・エンジン (ME) でこのデータベースを使用する
-dbCreateNew	N/A
-dbDelayConfig	データベース・スクリプトの実行を遅延 (リモート・データベースを使用する場合は選択する必要がある)
-dbHostName	データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)
-dbInstance (-dbDelayConfig が false に設定されている場合のみ必要)	インスタンス名
-dbJDBCClasspath	JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)
-dbLocation (-dbDelayConfig が false に設定されている場合のみ必要)	データベース・サーバーのインストール・ディレクトリー
-dbName	共通データベース名
-dbOutputScriptDir	データベース・スクリプトの出力ディレクトリー 注: 「生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーをオーバーライドする」オプションを選択した場合のみ使用可能です。この値は絶対パスでなければなりません。相対パスを設定した場合、SQL スクリプトはエクスポートまたは実行されず、その結果、サーバー始動時に多数の例外が発生することになります。
-dbPassword	データベース認証用のパスワード
-dbServerPort	サーバー・ポート
-dbProviderType	IBM DB2 JDBC Universal ドライバーを使用した Informix または IBM JCC ドライバーを使用した Informix に必須
-dbType	データベース製品の選択
-dbUserId	データベースで認証するユーザー名
-fileStoreForME (スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合のみ)	メッセージング・エンジン (ME) でこのファイル・ストアを使用する
N/A	生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーをオーバーライドする

Microsoft SQL Server の場合

344 ページの表 105 には、または でスタンドアロン・サーバー、デプロイメント・マネージャー、またはカスタム・プロファイルによって使用される共通データベースを構成するために使用可能な *manageprofiles* パラメーターが示されています。このデータベース用の JDBC ドライバーとしては、DataDirect Connect JDBC (XA) 3.5 ビルド 37 (タイプ 4)、IBM WebSphere embedded Connect JDBC (XA)

3.5 ビルド 37 (タイプ 4)、および Microsoft SQL Server JDBC Driver バージョン 1.2 の 3 つがあります。「データベース構成」ページに表示されるドライバー名は、Microsoft SQL Server (DataDirect) および Microsoft SQL Server (Microsoft) です。

注: Microsoft SQL Server JDBC Driver バージョン 1.2 に対するサポートは、WebSphere Process Server バージョン 6.2.0.1 で追加されました。

Microsoft SQL Server 2005 をスタンドアロン・プロファイルとともに使用し、メッセージング・エンジン・テーブルを共通データベースに配置する場合は、以下のステップを実行する必要があります。

1. スタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成する前に、4 つのスキーマを共通データベースに手動で追加します。4 つのスキーマとは、XXXSS00、XXXSA00、XXXCM00、および XXXBM00 です。XXX は、共通データベース名の最初の 3 文字です。
2. プロファイル作成時に dbCommonForME=true パラメーターを渡します。以下のコマンドにより、上で定義したスキーマを使用する SQL Server 上のメッセージング・エンジンを構成します。このコマンドでは、共通データベース用に指定した dbUserId および dbPassword を使用します。

```
C:¥WebSphereND¥bin¥manageprofiles.bat" -create -templatePath "C:¥WebSphereND¥profileTemplates¥default.wbiserver" -dbHostName LNIDDBTUMSQL21 -dbServerPort 1433 -dbDelayConfig true -configureBSpace true -ceiDbName EVENT -dbType MSSQLSERVER_Microsoft -dbUserId wpcdbadmin -dbJDBCClasspath "C:¥Program Files¥Microsoft SQL Server¥JDBC¥sqljdbc_1.2¥enu" -dbName WPRCSDB -dbPassword qlwiddj23 -ceiDbServerName LNIDDBTUMSQL21 -dbCommonForME=true
```

表 105. Microsoft SQL Server を使用した Common データベースの構成のために使用可能な manageprofiles パラメーター

パラメーター	プロファイル管理ツールの「データベース構成」ページに表示される関連フィールド
カスタム・プロファイル用	
-dbJDBCClasspath	JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)
-dbType	デプロイメント・マネージャーで使用するデータベース製品の選択
スタンドアロン・サーバー・プロファイルまたはデプロイメント・マネージャー・プロファイル用	
-dbCommonForME (スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合のみ)	メッセージング・エンジン (ME) でこのデータベースを使用する
-dbCreateNew	N/A
-dbDelayConfig	データベース・スクリプトの実行を遅延 (リモート・データベースを使用する場合は選択する必要がある)
-dbHostName	データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)

表 105. Microsoft SQL Server を使用した Common データベースの構成のために使用可能な manageprofiles パラメーター (続き)

パラメーター	プロファイル管理ツールの「データベース構成」ページに表示される関連フィールド
-dbJDBCClasspath	JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)
-dbName	共通データベース名
-dbOutputScriptDir	データベース・スクリプトの出力ディレクトリー 注: 「生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーをオーバーライドする」オプションを選択した場合のみ使用可能です。この値は絶対パスでなければなりません。相対パスを設定した場合、SQL スクリプトはエクスポートまたは実行されず、その結果、サーバー始動時に多数の例外が発生することになります。
-dbPassword	データベース認証用のパスワード
-dbServerPort	サーバー・ポート
-dbType	データベース製品の選択
-dbUserId	共通データベースのユーザー名
-fileStoreForME (スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合のみ)	メッセージング・エンジン (ME) でこのファイル・ストアを使用する
-dbServerName	データベース・サーバー名
-saPassword	管理ユーザー・パスワード
-saUser	管理ユーザー名
N/A	生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーをオーバーライドする

Common Event Infrastructure データベース構成の manageprofiles パラメーター (データベース製品ごと):

スタンドアロン・サーバー・プロファイルによって使用される Common Event Infrastructure データベースを構成するには、特定の manageprofiles コマンド行ユーティリティー・パラメーターを使用します。指定するパラメーターは、使用中のデータベース製品によって異なることがあります。

このトピックの表には、サポートされるあらゆるデータベース製品を使用して Common Event Infrastructure データベースを構成するために使用可能な manageprofiles パラメーターが示されています。また、これらのパラメーターがプロファイル管理ツールで表示される際の、相当するフィールド名も示します。manageprofiles コマンド行ユーティリティーを使用して Common Event Infrastructure データベースを構成するのは、スタンドアロン・サーバー・プロファイルについてのみです。デプロイメント・マネージャー・プロファイルによって使用するこのデータベースを構成するには、管理コンソールまたはスクリプトを介して行う必要があります。詳しくは、イベント・データベースの構成を参照してください。

manageprofiles パラメーターの完全なリスト (デフォルト値を含む) については、446 ページの『manageprofiles パラメーター』というトピックを参照してください。

いろいろなタイプのプロファイルを作成または拡張するために使用する `manageprofiles` コマンドの例は、トピック 304 ページの『`manageprofiles` コマンド行ユーティリティーによる Derby または DB2 データベースのプロファイルの作成 - 例』および 405 ページの『`manageprofiles` コマンド行ユーティリティーによる Derby または DB2 データベースのプロファイルの拡張 - 例』で見ることができます。

データベース構成に使用できるパラメーターを表示するには、以下のリストからデータベース製品を選択してください。

- 『Derby Embedded または Derby Embedded 40 の場合』
- 347 ページの『Derby Network Server または Derby Network Server 40 の場合』
- 347 ページの『DB2 Universal の場合』
- 348 ページの『DB2 データ・サーバー』
- 349 ページの『DB2 for IBM i (ツールボックス) および DB2 for i5/OS (ツールボックス) の場合』
- 350 ページの『DB2 for z/OS v8 および DB2 for z/OS v9 の場合』
- 351 ページの『Oracle』
- 352 ページの『Informix Dynamic Server の場合』
- 353 ページの『Microsoft SQL Server の場合』

Derby Embedded または Derby Embedded 40 の場合

表 106 には、Derby Embedded または Derby Embedded 40 でスタンドアロン・サーバー・プロファイルによって使用される Common Event Infrastructure データベースを構成するために使用可能な `manageprofiles` パラメーターが示されています。

表 106. Derby Embedded または Derby Embedded 40 を使用した Common Event Infrastructure データベースの構成のために使用可能な `manageprofiles` パラメーター

パラメーター	プロファイル管理ツールの「データベース構成」ページに表示される関連フィールド
<code>-dbDelayConfig</code> (Derby Embedded 40 の場合のみ)	データベース・スクリプトの実行を遅延 (リモート・データベースを使用する場合は選択する必要がある)
<code>-ceiDbName</code>	Common Event Infrastructure データベース名
<code>-dbType</code>	データベース製品の選択
<code>-dbOutputScriptDir</code>	データベース・スクリプトの出力ディレクトリー 注: 「生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーをオーバーライドする」オプションを選択した場合のみ使用可能です。この値は絶対パスでなければなりません。相対パスを設定した場合、SQL スクリプトはエクスポートまたは実行されず、その結果、サーバー始動時に多数の例外が発生することになります。
<code>-ceiOverrideDataSource</code>	N/A (コマンド行のみ)
N/A	生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーをオーバーライドする

Derby Network Server または Derby Network Server 40 の場合

表 107 には、Derby Network Server または Derby Network Server 40 でスタンドアロン・サーバー・プロファイルによって使用される Common Event Infrastructure データベースを構成するために使用可能な `manageprofiles` パラメーターが示されています。

表 107. *Derby Network Server* または *Derby Network Server 40* を使用した *Common Event Infrastructure* データベースの構成のために使用可能な `manageprofiles` パラメーター

パラメーター	プロファイル管理ツールの「データベース構成」ページに表示される関連フィールド
<code>-dbDelayConfig</code> (Derby Network Server 40 の場合のみ)	データベース・スクリプトの実行を遅延 (リモート・データベースを使用する場合は選択する必要がある)
<code>-dbHostName</code>	データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)
<code>-ceiDbName</code>	Common Event Infrastructure データベース名
<code>-dbPassword</code>	データベース認証用のパスワード
<code>-dbServerPort</code>	サーバー・ポート
<code>-dbType</code>	データベース製品の選択
<code>-dbUserId</code>	データベースで認証するユーザー名
<code>-dbOutputScriptDir</code>	データベース・スクリプトの出力ディレクトリー 注: 「生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーをオーバーライドする」オプションを選択した場合のみ使用可能です。この値は絶対パスでなければなりません。相対パスを設定した場合、SQL スクリプトはエクスポートまたは実行されず、その結果、サーバー始動時に多数の例外が発生することになります。
<code>-ceiOverrideDataSource</code>	N/A (コマンド行のみ)
N/A	生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーをオーバーライドする

DB2 Universal の場合

表 108 には、DB2 Universal でスタンドアロン・サーバー・プロファイルによって使用される Common Event Infrastructure データベースを構成するために使用可能な `manageprofiles` パラメーターが示されています。

表 108. *DB2 Universal* を使用した *Common Event Infrastructure* データベースの構成のために使用可能な `manageprofiles` パラメーター

パラメーター	プロファイル管理ツールの「データベース構成」ページに表示される関連フィールド
<code>-dbDelayConfig</code>	データベース・スクリプトの実行を遅延 (リモート・データベースを使用する場合は選択する必要がある)

表 108. DB2 Universal を使用した Common Event Infrastructure データベースの構成のために使用可能な *manageprofiles* パラメーター (続き)

パラメーター	プロファイル管理ツールの「データベース構成」ページに表示される関連フィールド
-dbHostName	データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)
-ceiDbName	Common Event Infrastructure データベース名
-dbPassword	データベース認証用のパスワード
-dbServerPort	サーバー・ポート
-dbType	データベース製品の選択
-dbUserId	データベースで認証するユーザー名
-dbJDBCClasspath	JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)
-dbOutputScriptDir	データベース・スクリプトの出力ディレクトリー 注: 「生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーをオーバーライドする」オプションを選択した場合のみ使用可能です。この値は絶対パスでなければなりません。相対パスを設定した場合、SQL スクリプトはエクスポートまたは実行されず、その結果、サーバー始動時に多数の例外が発生することになります。
-ceiOverrideDataSource	N/A (コマンド行のみ)
N/A	生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーをオーバーライドする

DB2 データ・サーバー

表 109 には、DB2 データ・サーバーでスタンドアロン・サーバー・プロファイルによって使用される Common Event Infrastructure データベースを構成するために使用可能な *manageprofiles* パラメーターが示されています。

表 109. DB2 データ・サーバーを使用した Common Event Infrastructure データベースの構成に使用できる *manageprofiles* パラメーター

パラメーター	プロファイル管理ツールの「データベース構成」ページに表示される関連フィールド
-dbDelayConfig	データベース・スクリプトの実行を遅延 (リモート・データベースを使用する場合は選択する必要がある)
-dbHostName	データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)
-ceiDbName	Common Event Infrastructure データベース名
-dbPassword	データベース認証用のパスワード
-dbServerPort	サーバー・ポート
-dbType	データベース製品の選択
-dbUserId	データベースで認証するユーザー名

表 109. DB2 データ・サーバーを使用した *Common Event Infrastructure* データベースの構成に使用できる *manageprofiles* パラメーター (続き)

パラメーター	プロファイル管理ツールの「データベース構成」ページに表示される関連フィールド
-dbJDBCClasspath	JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)
-dbOutputScriptDir	データベース・スクリプトの出力ディレクトリー 注: 「生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーをオーバーライドする」オプションを選択した場合のみ使用可能です。この値は絶対パスでなければなりません。相対パスを設定した場合、SQL スクリプトはエクスポートまたは実行されず、その結果、サーバー始動時に多数の例外が発生することになります。
-ceiOverrideDataSource	N/A (コマンド行のみ)
N/A	生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーをオーバーライドする

DB2 for IBM i (ツールボックス) および DB2 for i5/OS (ツールボックス) の場合

表 110 には、i5/OS または IBM i オペレーティング・システムに提供されたデータベース上で、スタンドアロン・サーバー・プロファイルによって使用される *Common Event Infrastructure* データベースを構成するために使用可能な *manageprofiles* パラメーターが示されています。

表 110. i5/OS または IBM i オペレーティング・システムに提供されたデータベースを使用した *Common Event Infrastructure* データベースの構成のために使用可能な *manageprofiles* パラメーター

パラメーター	プロファイル管理ツールの「データベース構成」ページに表示される関連フィールド
-ceiDbAlreadyConfigured	N/A (コマンド行のみ)
-ceiOverrideDataSource	N/A (コマンド行のみ)
-dbDelayConfig	データベース・スクリプトの実行を遅延 (リモート・データベースを使用する場合は選択する必要がある)
-dbHostName	データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)
-ceiDbName	<i>Common Event Infrastructure</i> データベース名
-dbPassword	データベース認証用のパスワード
-dbType	データベース製品の選択
-dbUserId	データベースで認証するユーザー名
-dbJDBCClasspath	JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)

表 110. i5/OS または IBM i オペレーティング・システムに提供されたデータベースを使用した Common Event Infrastructure データベースの構成のために使用可能な manageprofiles パラメーター (続き)

パラメーター	プロファイル管理ツールの「データベース構成」ページに表示される関連フィールド
-dbOutputScriptDir	データベース・スクリプトの出力ディレクトリー 注: 「生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーをオーバーライドする」オプションを選択した場合のみ使用可能です。この値は絶対パスでなければなりません。相対パスを設定した場合、SQL スクリプトはエクスポートまたは実行されず、その結果、サーバー始動時に多数の例外が発生することになります。
-cdbSchemaName 両方が指定されている場合、dbSchemaName よりも優先される新しいパラメーターです。-dbSchemaName 注: V7 では推奨されていません。	データベース・コレクション名
N/A	生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーをオーバーライドする

DB2 for z/OS v8 および DB2 for z/OS v9 の場合

表 111 には、DB2 for z/OS v8 または DB2 for z/OS v9 でスタンドアロン・サーバー・プロファイルによって使用される Common Event Infrastructure データベースを構成するために使用可能な manageprofiles パラメーターが示されています。

表 111. DB2 for z/OS v8 または DB2 for z/OS v9 を使用した Common Event Infrastructure データベースの構成のために使用可能な manageprofiles パラメーター

パラメーター	プロファイル管理ツールの「データベース構成」ページに表示される関連フィールド
-ceiBufferPool4k	N/A (コマンド行のみ)
-ceiBufferPool8k	N/A (コマンド行のみ)
-ceiBufferPool16k	N/A (コマンド行のみ)
-ceiDbName	Common Event Infrastructure データベース名
-ceiDiskSizeInMB	N/A (コマンド行のみ)
-ceiOverrideDataSource	N/A (コマンド行のみ)
-dbConnectionLocation	接続のロケーション
-dbDelayConfig	データベース・スクリプトの実行を遅延 (リモート・データベースを使用する場合は選択する必要がある)
-dbHostName	データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)
-dbJDBCClasspath	JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)

表 111. DB2 for z/OS v8 または DB2 for z/OS v9 を使用した Common Event Infrastructure データベースの構成のために使用可能な manageprofiles パラメーター (続き)

パラメーター	プロファイル管理ツールの「データベース構成」ページに表示される関連フィールド
-dbOutputScriptDir	データベース・スクリプトの出力ディレクトリー 注: 「生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーをオーバーライドする」オプションを選択した場合のみ使用可能です。この値は絶対パスでなければなりません。相対パスを設定した場合、SQL スクリプトはエクスポートまたは実行されず、その結果、サーバー始動時に多数の例外が発生することになります。
-dbPassword	データベース認証用のパスワード
-cdbSchemaName 両方が指定されている場合、dbSchemaName よりも優先される新しいパラメーターです。-dbSchemaName 注: V7 では推奨されていません。	データベースの別名
-dbStorageGroup	ストレージ・グループ名
-dbType	データベース製品の選択
-dbUserId	データベースで認証するユーザー名
N/A	生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーをオーバーライドする

Oracle

表 112 には、Oracle でスタンドアロン・サーバー・プロファイルによって使用される Common Event Infrastructure データベースを構成するために使用可能な manageprofiles パラメーターが示されています。

表 112. Oracle を使用した Common Event Infrastructure データベースの構成のために使用可能な manageprofiles パラメーター

パラメーター	プロファイル管理ツールの「データベース構成」ページに表示される関連フィールド
-dbDelayConfig	データベース・スクリプトの実行を遅延 (リモート・データベースを使用する場合は選択する必要がある)
-dbHostName	データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)
-ceiDbName	Common Event Infrastructure データベース名
-dbPassword	データベース認証用のパスワード
-dbServerPort	サーバー・ポート
-dbType	データベース製品の選択
-dbSysPassword	パスワード
-dbSysUserId	システム管理者のユーザー名

表 112. Oracle を使用した Common Event Infrastructure データベースの構成のために使用可能な manageprofiles パラメーター (続き)

パラメーター	プロファイル管理ツールの「データベース構成」ページに表示される関連フィールド
-dbUserId	共通データベースのユーザー名
-ceiInstancePrefix 注: 6.2 では、Informix、Oracle、Microsoft SQL Server 以外のすべてのデータベースで推奨されません。	N/A (コマンド行のみ)
-dbJDBCClasspath	JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー) Oracle データベースにアクセスするには、ojdbc6.jar ドライバーをインストールする必要があります。 注: Oracle 10g には、ojdbc6.jar ドライバーは含まれていません。このドライバーは Oracle の Web サイトからダウンロードできます。
-dbLocation (-dbDelayConfig が true に設定されている場合のみ必要)	データベース・サーバーのインストール・ディレクトリー
-dbOutputScriptDir	データベース・スクリプトの出力ディレクトリー 注: 「生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーをオーバーライドする」オプションを選択した場合のみ使用可能です。この値は絶対パスでなければなりません。相対パスを設定した場合、SQL スクリプトはエクスポートまたは実行されず、その結果、サーバー始動時に多数の例外が発生することになります。
-ceiOverrideDataSource	N/A (コマンド行のみ)
N/A	生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーをオーバーライドする

Informix Dynamic Server の場合

表 113 には、Informix Dynamic Server でスタンドアロン・サーバー・プロファイルによって使用される Common Event Infrastructure データベースを構成するために使用可能な manageprofiles パラメーターが示されています。

表 113. Informix Dynamic Server を使用した Common Event Infrastructure データベースの構成のために使用可能な manageprofiles パラメーター

パラメーター	プロファイル管理ツールの「データベース構成」ページに表示される関連フィールド
-dbDelayConfig	データベース・スクリプトの実行を遅延 (リモート・データベースを使用する場合は選択する必要がある)
-dbHostName	データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)

表 113. Informix Dynamic Server を使用した Common Event Infrastructure データベースの構成のために使用可能な *manageprofiles* パラメーター (続き)

パラメーター	プロファイル管理ツールの「データベース構成」ページに表示される関連フィールド
-dbLocation (-dbDelayConfig が false に設定されている場合のみ必要)	データベース・サーバーのインストール・ディレクトリー
-ceiDbName	Common Event Infrastructure データベース名
-dbPassword	データベース認証用のパスワード
-dbServerPort	サーバー・ポート
-dbType	データベース製品の選択
-dbInstance	インスタンス名
-dbUserId	データベースで認証するユーザー名
-ceiInstancePrefix 注: 6.2 では、Informix、Oracle、Microsoft SQL Server 以外のすべてのデータベースで推奨されません。	N/A (コマンド行のみ)
-dbJDBCClasspath	JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)
-dbOutputScriptDir	データベース・スクリプトの出力ディレクトリー 注: 「生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーをオーバーライドする」オプションを選択した場合のみ使用可能です。この値は絶対パスでなければなりません。相対パスを設定した場合、SQL スクリプトはエクスポートまたは実行されず、その結果、サーバー始動時に多数の例外が発生することになります。
-ceiOverrideDataSource	N/A (コマンド行のみ)
N/A	生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーをオーバーライドする

Microsoft SQL Server の場合

354 ページの表 114 には、 または でスタンドアロン・サーバー、デプロイメント・マネージャー、またはカスタム・プロファイルによって使用される共通データベースを構成するために使用可能な *manageprofiles* パラメーターが示されています。このデータベース用の JDBC ドライバーとしては、DataDirect Connect JDBC (XA) 3.5 ビルド 37 (タイプ 4)、IBM WebSphere embedded Connect JDBC (XA) 3.5 ビルド 37 (タイプ 4)、および Microsoft SQL Server JDBC Driver バージョン 1.2 の 3 つがあります。「データベース構成」ページに表示されるドライバー名は、Microsoft SQL Server (DataDirect) および Microsoft SQL Server (Microsoft) です。

注: Microsoft SQL Server JDBC Driver バージョン 1.2 に対するサポートは、WebSphere Process Server バージョン 6.2.0.1 で追加されました。

表 114. Microsoft SQL Server を使用した Common Event Infrastructure データベースの構成のために使用可能な `manageprofiles` パラメーター

パラメーター	プロファイル管理ツールの「データベース構成」ページに表示される関連フィールド
<code>-dbDelayConfig</code>	データベース・スクリプトの実行を遅延 (リモート・データベースを使用する場合は選択する必要がある)
<code>-dbHostName</code>	データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)
<code>-ceiDbInstallDir</code> (<code>-dbDelayConfig</code> が true に設定されている場合のみ必要)	N/A (コマンド行のみ)
<code>-ceiDbName</code>	Common Event Infrastructure データベース名
<code>-dbPassword</code>	データベース認証用のパスワード
<code>-dbServerPort</code>	サーバー・ポート
<code>-dbType</code>	データベース製品の選択
<code>-dbInstance</code> (<code>-dbDelayConfig</code> が true に設定されている場合のみ必要)	インスタンス名
<code>-ceiDbPassword</code> 注: 6.2 では、Microsoft SQL Server クライアント以外のすべてのデータベースで推奨されません。	N/A (コマンド行のみ)
<code>-ceiDbUser</code> 注: 6.2 では、Microsoft SQL Server クライアント以外のすべてのデータベースで推奨されません。	N/A (コマンド行のみ)
<code>-ceiInstancePrefix</code> 注: 6.2 では、Informix、Oracle、Microsoft SQL Server 以外のすべてのデータベースで推奨されません。	N/A (コマンド行のみ)
<code>-dbOutputScriptDir</code>	データベース・スクリプトの出力ディレクトリー 注: 「生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーをオーバーライドする」オプションを選択した場合のみ使用可能です。この値は絶対パスでなければなりません。相対パスを設定した場合、SQL スクリプトはエクスポートまたは実行されず、その結果、サーバー始動時に多数の例外が発生することになります。
<code>-ceiOverrideDataSource</code>	N/A (コマンド行のみ)
<code>-ceiSaPassword</code> 注: 6.2 では、Microsoft SQL Server クライアント以外のすべてのデータベースで推奨されません。	管理ユーザー・パスワード
<code>-ceiSaUser</code> 注: 6.2 では、Microsoft SQL Server クライアント以外のすべてのデータベースで推奨されません。	管理ユーザー名

表 114. Microsoft SQL Server を使用した Common Event Infrastructure データベースの構成のために使用可能な manageprofiles パラメーター (続き)

パラメーター	プロファイル管理ツールの「データベース構成」ページに表示される関連フィールド
N/A	生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーをオーバーライドする

プロファイルの拡張

既存の WebSphere Application Server バージョン 7.0 または WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 7.0 のプロファイルを拡張して、WebSphere Enterprise Service Bus または WebSphere Process Server 用のサポートを追加することができます。あるいは、WebSphere Enterprise Service Bus バージョン 7.0 プロファイルを拡張して、WebSphere Process Server 用のサポートを追加することができます。このトピックの説明に従ってプロファイルを拡張します。プロファイルの拡張は、プロファイル管理ツールのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) を使用して対話式に行うことも、manageprofiles コマンド行ユーティリティーを使用してコマンド行から行うこともできます。

始める前に

- 221 ページの『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』のトピックで、プロファイルを作成または拡張するための前提条件のリストを調べます。
- プロファイルが以下の特性を保有していることを確認してください。
 - WebSphere Process Server のインストール済み環境を持つシステム上に存在していること。
 - デプロイメント・マネージャーに統合されていないこと。プロファイル管理ツールまたは manageprofiles コマンド行ユーティリティーを使用して、統合済みのプロファイルを拡張することはできません。
 - 稼働中のサーバーがないこと。

このタスクについて

ご使用のシステムに WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment のプロファイルが既に存在している場合は、それらのプロファイルで定義されている稼働環境で WebSphere ESB または WebSphere Process Server の機能を使用できるようになります。同様に、WebSphere Enterprise Service Bus のプロファイルが既に存在している場合は、それらで WebSphere Process Server の機能を使用できるようになります。

制約事項:

- 「デプロイメント環境」プロファイル拡張オプションを使用して、デプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張することはできません。
- 64 ビット・アーキテクチャー (Linux on zSeries プラットフォームは除く) 上の WebSphere Process Server インストール済み環境でプロファイルを拡張するときは、プロファイル管理ツールを使用することはできません。他の 64 ビット・アーキテクチャーでプロファイルを拡張するときは、manageprofiles コマンド行ユーティリティーを使用できます。manageprofiles コマンド行ユーティリティーの使用

について詳しくは、402 ページの『manageprofiles コマンド行ユーティリティを使用したプロファイルの拡張』を参照してください。32 ビットの WebSphere Process Server インストール済み環境を使用している場合は、これらのアーキテクチャー上でもプロファイル管理ツールを使用できます。

手順

プロファイルの拡張を、プロファイル管理ツールを使用して対話式に行うのか、manageprofiles コマンド行ユーティリティを使用してコマンド行から行うのかを決定します。

- プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを拡張するには、『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』のトピックを参照してください。
- manageprofiles コマンド行ユーティリティを使用してプロファイルを拡張するには、402 ページの『manageprofiles コマンド行ユーティリティを使用したプロファイルの拡張』のトピックを参照してください。

プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張

プロファイル管理ツールを使用して、WebSphere Application Server バージョン 7.0、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 7.0、または WebSphere Enterprise Service Bus バージョン 7.0 のプロファイルを WebSphere Process Server プロファイルに拡張します。

始める前に

以下の前提条件が満たされていることを確認します。

- 拡張後のプロファイル・タイプ (スタンドアロン・サーバー、デプロイメント・マネージャー、またはカスタム) が、拡張前のプロファイルのタイプと同じである。
- 221 ページの『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』で、プロファイルを作成または拡張するための前提条件リストを確認している。
- 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンした。
- スタンドアロン・サーバーまたはカスタム・プロファイルを拡張する場合は、デプロイメント・マネージャーに統合されていないことを確認した。
- **Solaris** Solaris オペレーティング・システム上の Motif グラフィカル・ユーザー・インターフェースでプロファイル管理ツールを使用する場合、プロファイル管理ツールのデフォルト・サイズが、ツールのすべてのメッセージおよびボタンを表示するには小さすぎる可能性があります。この問題を修正するには、`install_root/.Xdefaults` ファイルに以下の行を追加します。

```
Eclipse*spacing:0  
Eclipse*fontList:-misc-fixed-medium-r-normal-*-10-100-75-75-c-60-iso8859-1
```

行を追加したら、プロファイル管理ツールを開始する前に次のコマンドを実行します。

```
xrdb -load user_home/.Xdefaults
```


手順

1. WebSphere Process Server プロファイル管理ツールを開始します。

以下のいずれかのコマンドを使用します。

- **Linux** **UNIX** `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh`
- **Windows** `install_root¥bin¥ProfileManagement¥pmt.bat`

このツールを開始するためのその他の方法については、234 ページの『プロファイル管理ツールの開始』のトピックを参照してください。

「ようこそ」ページが表示されます。

2. 「ようこそ」ページで、「**プロファイル管理ツールの起動 (Launch Profile Management Tool)**」ボタンまたは「**プロファイル管理ツール**」タブをクリックします。

「プロファイル」タブが表示されます。

3. 「プロファイル」タブで、拡張するプロファイルを強調表示し、「**拡張**」をクリックします。

システムに存在するプロファイルが「プロファイル」タブにリストされます。この手順では、既存のプロファイルを拡張するものと想定しています。プロファイルを新しく作成する場合は、231 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』のトピックを参照してください。

制約事項:

- WebSphere Application Server、WebSphere Application Server Network Deployment、または WebSphere Enterprise Service Bus バージョン 6.2 のプロファイルを WebSphere Process Server バージョン 7.0 のプロファイルに拡張することはできません。
- セル・スタンドアロン・サーバー、管理エージェント、管理ジョブ・マネージャー、またはセキュア・プロキシのプロファイルは拡張できません。
- WebSphere Application Server プロファイルまたは WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルを拡張した場合は、WebSphere Process Server がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンから行う必要があります。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「**拡張**」ボタンは選択できません。

「拡張の選択 (Augment Selection)」ページが別ウィンドウで開きます。

4. 「拡張の選択 (Augment Selection)」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。次に、「**次へ**」をクリックします。

「プロファイル拡張オプション」ページが表示されます。

5. 「プロファイル拡張オプション」ページで、実行するプロファイル拡張のタイプとして「**標準**」、「**拡張**」、(カスタム・プロファイルの場合は)「**デプロイメント環境**」のいずれかを選択し、「**次へ**」をクリックします。

「標準的」オプションでは、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されません。

「高度」オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。

「デプロイメント環境」オプションでは、カスタム・プロファイルに独自の構成値を指定し、1 つまたは複数のクラスターを選択して管理対象ノードに適用することができます。

制約事項: 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「戻る」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
 - 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合されたプロファイルは拡張できません。「戻る」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
 - 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「戻る」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
6. プロファイル管理ツールの次のページに進む前に、以下のいずれかのトピックに記載されている手順を行って、プロファイルの拡張を構成および完了してください。

選択したプロファイル拡張のタイプ	選択したプロファイル・タイプ (スタンドアロン・サーバー、デプロイメント・マネージャー、またはカスタム) に基づいてプロファイルの拡張を完了するための手順
標準的	<ul style="list-style-type: none">• 360 ページの『標準的なスタンドアロン・サーバー・プロファイルの拡張』• 371 ページの『標準的なデプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張』• 377 ページの『標準的なカスタム・プロファイル (管理対象ノード) の拡張』
高度	<ul style="list-style-type: none">• 363 ページの『高度なスタンドアロン・サーバー・プロファイルの拡張』• 373 ページの『高度なデプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張』• 379 ページの『高度なカスタム・プロファイル (管理対象ノード) の拡張』
デプロイメント環境	<ul style="list-style-type: none">• 384 ページの『デプロイメント環境のカスタム・プロファイル (管理対象ノード) の拡張』

タスクの結果

これで、指定したタイプ (スタンドアロン・サーバー、デプロイメント・マネージャー、またはカスタム) で拡張された稼働環境を定義するプロファイルの構成準備ができました。

プロファイル管理ツールの開始:

プロファイル管理ツールを開始する前に、制約事項に注意し、特定の前提条件が満たされていることを確認してください。プロファイル管理ツールは、実行するときのプラットフォームに応じて、いくつかの方法で開始できます。

制約事項:

- 64 ビット・アーキテクチャー (Linux on zSeries プラットフォームは除く) 上の WebSphere Process Server インストール済み環境でプロファイルを作成または拡張するときは、プロファイル管理ツールを使用することはできません。その他の 64 ビット・アーキテクチャー上でプロファイルを作成するには、`manageprofiles` コマンド行ユーティリティを使用できます。 `manageprofiles` コマンド行ユーティリティの使用について詳しくは、301 ページの『`manageprofiles` コマンド行ユーティリティを使用したプロファイルの作成』を参照してください。 32 ビットの WebSphere Process Server インストール済み環境を使用している場合は、これらのアーキテクチャー上でもプロファイル管理ツールを使用できます。

- **Vista** **Windows 7** **複数インスタンスを持つ非管理ユーザーの制約事項:**
WebSphere Process Server の複数インスタンスをルート・ユーザーとしてインストールし、それらのインスタンスのサブセットだけに非管理ユーザーのアクセス権限を与えた場合、プロファイル管理ツールはその非管理ユーザーに対して正しく機能しません。さらに、`com.ibm.wsspi.profile.WSProfileException`、つまりアクセス拒否メッセージが `install_root%bin%ProfileManagement%pmt.bat` ファイルに発生します。デフォルトでは、非管理ユーザーにはプログラム・ファイル・ディレクトリーに対するアクセス権限がありません。プログラム・ファイル・ディレクトリーは製品がデフォルトでインストールされる場所です。この問題を解決するには、非管理ユーザーが製品をインストールできるようにするか、他の製品インスタンスにアクセスする許可を得るかです。

Linux **UNIX** **Windows** プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、`java user.language` 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。次のコマンドを実行します。

- **Linux** **UNIX** `install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar`
- **Windows** `install_root%java%bin%java -Duser.language=locale install_root%bin%ProfileManagement%startup.jar`

例えば、Linux システム上でドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/ %  
bin/ProfileManagement/startup.jar
```

すべてのプラットフォームでのプロファイル管理ツールの開始

任意のプラットフォームで、ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。ファースト・ステップ・コンソールを開始する方法につ

いては、69 ページの『ファースト・ステップ・コンソールの開始』を参照してください。

Linux および UNIX プラットフォームでのプロファイル管理ツールの開始

Linux **UNIX** このツールは、Linux および UNIX プラットフォーム上で、コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行して開始できます。

Linux Linux プラットフォームでは、オペレーティング・システムのメニューを使用して、プロファイル管理ツールを開始することもできます。例えば、`「Linux_operating_system_menus_to_access_programs」` > `「IBM WebSphere」` > `「your_product」` > `「プロファイル管理ツール」` をクリックします。

Windows プラットフォームでのプロファイル管理ツールの開始

Windows Windows プラットフォームでは、以下の方法でプロファイル管理ツールを開始できます。

- Windows の「スタート」メニューを使用します。例えば、「スタート」>「プログラム」または「すべてのプログラム」>「IBM WebSphere」>「Process Server 7.0」>「プロファイル管理ツール」を選択します。
- `install_root¥bin¥ProfileManagement¥pmt.bat` コマンドを実行します。

標準的なスタンドアロン・サーバー・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールの「標準 (Typical)」オプションを使用して、WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus のスタンドアロン・サーバー・プロファイルを拡張および構成する方法について説明します。「標準 (Typical)」オプションを選択すると、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

始める前に

このトピックでは、ユーザーがプロファイル管理ツールを使用してプロファイルを拡張し、356 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』の手順に従っていることを前提としています。すなわち、プロファイル管理ツールをすでに開始しており、スタンドアロン・サーバー・プロファイルの拡張を選択し、「標準 (Typical)」プロファイル拡張オプションを選択しているということです。

このタスクについて

この構成のタイプでは、プロファイル管理ツールは以下のタスクを実行します。

- 管理コンソールをデプロイするためのオプションを表示します。
- 拡張するプロファイルでセキュリティが有効になっている場合は、作成する WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルで管理セキュリティを有効にできます。
- Common Event Infrastructure および共通データベース構成を Derby Embedded に設定します (拡張するプロファイルでまだ構成されていない場合)。

- 拡張するプロファイルでセキュリティーが有効になっている場合は、Derby Embedded を使用して WebSphere が提供する Business Space を構成します (まだ構成されていない場合)。
- 拡張するプロファイルでセキュリティーが有効になっている場合は、プロファイル用の Business Process Choreographer サンプル構成を作成します。

制約事項: スタンドアロン・サーバー・プロファイルをデプロイメント・マネージャーに統合する予定がある場合、標準的なオプションを使用してプロファイルを作成しないでください。「標準 (Typical)」のプロファイル拡張で提供されるメッセージング・エンジン・ストレージおよびデータベース・タイプのデフォルト値は、デプロイメント環境のインストールには適していません。代わりに、「拡張」オプションを使用してプロファイルを拡張してください。詳しくは、363 ページの『高度なスタンドアロン・サーバー・プロファイルの拡張』を参照してください。

356 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』の手順に従うと、「管理セキュリティー」ページ、「プロファイル要約」ページ、「データベース・セキュリティー (Database Security)」ページが表示されます。

手順

1. プロファイル管理ツールに表示されるページは、セキュリティーが有効になっているか、そのプロファイルでデータベースが構成されているかどうかによって異なります。

プロファイルのセキュリティーおよびデータベースの状態	最初のステップ
<ul style="list-style-type: none"> • 拡張中のプロファイルの管理セキュリティーは有効になっている。 	「管理セキュリティー」ページが表示されます。ステップ 2 に進んでください。
<ul style="list-style-type: none"> • 拡張中のプロファイルの管理セキュリティーは有効になっていない。 • データベースをまだ構成していない。 	「プロファイルの要約」ページが表示されません。ステップ 3 (362 ページ) に進んでください。
<ul style="list-style-type: none"> • 拡張中のプロファイルの管理セキュリティーは有効になっていない。 • データベースを既に構成している。 	パスワード・ページで、データベースの構成に使用するデータベース・ユーザー名およびパスワードが要求されます。情報を入力して「次へ」をクリックします。「プロファイルの要約」ページが表示されます。ステップ 3 (362 ページ) に進んでください。

2. 管理セキュリティーを使用可能にします。

このページが表示される場合、拡張中のプロファイルでセキュリティーが有効になっています。そのプロファイルの管理ユーザー ID およびパスワードを再入力する必要があります。

拡張するプロファイルで WebSphere Application Server サンプル・アプリケーションがデプロイされている場合は、実行するアカウントが必要です。アカウントのパスワードを指定してください。アカウントのユーザー名は変更できません。

重要: プロファイル管理ツールにより Business Process Choreographer サンプル構成を作成する場合は、拡張するプロファイルでセキュリティーが有効になっている必要があります。

「プロファイルの要約」ページが表示されます。

3. 「プロファイルの要約」ページで、「**拡張**」をクリックしてプロファイルを拡張するか、「**戻る**」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

プロファイルの拡張が完了すると、「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページに「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に拡張されました。」というメッセージが表示されます。

重要: プロファイルの拡張中にエラーが検出された場合は、正常終了のメッセージの代わりに他のメッセージが表示される可能性があります。その例と意味は次のとおりです。

- 「プロファイル管理ツールでプロファイルが拡張されましたが、エラーが発生しました」：プロファイルの拡張が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「プロファイル管理ツールでプロファイルを拡張できません」：プロファイルの拡張が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile complete)」ページには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。

4. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、「**ファースト・ステップ・コンソールの起動**」が選択されていることを確認し、「**終了**」をクリックして終了します。また、別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページも閉じてください。ファースト・ステップ・コンソールを使用して、サーバーを始動します。

タスクの結果

以下のいずれかの作業が完了しました。

- WebSphere Application Server、WebSphere Application Server Network Deployment、または WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルの WebSphere Process Server プロファイルへの拡張。
- WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルの WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルへの拡張。

プロファイル内のノードのサーバーは、server1 (Linux、UNIX、および Windows プラットフォームの場合) という名前になります。複数の製品がインストールされている場合、サーバーの番号が増えていきます。

次のタスク

ファースト・ステップ・コンソールから「**サーバーの起動**」を選択してサーバーの作動をチェックします。出力ウィンドウが開きます。次のようなメッセージが表示される場合、サーバーは正常に作動しています。

ADMU3000I: サーバー server1 が e-ビジネス用にオープン。プロセス ID は 3348
(Server server1 open for e-business; process id is 3348)

ファースト・ステップ・コンソールからインストール検査テスト (IVT) を実行するか、wbi_ivt コマンド行ユーティリティを実行することで、サーバーの動作を確認することもできます。このテストは、デプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーのインストール環境が正常に動作していることが確認するものです。スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合はシステム正常性検査も実行され、レポートが生成されます。

高度なスタンドアロン・サーバー・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールの「**拡張**」オプションを使用して、WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus のスタンドアロン・サーバー・プロファイルを拡張および構成する方法について説明します。「**拡張**」オプションを選択すると、カスタマイズした構成設定でプロファイルが拡張されます。

始める前に

このトピックでは、ユーザーがプロファイル管理ツールを使用してプロファイルを拡張し、356 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』の手順に従っていることを前提としています。すなわち、プロファイル管理ツールをすでに開始しており、スタンドアロン・サーバー・プロファイルの拡張を選択し、「**拡張**」プロファイル拡張オプションを選択しているということです。

このタスクについて

「**拡張**」オプションを選択することで、以下のタスクを実行できます。

- Common Event Infrastructure を構成します。
- 共通データベースを構成します。
- 拡張するプロファイルでセキュリティーが有効になっている場合は、作成している WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルで管理セキュリティーを有効にします。
- 拡張するプロファイルでセキュリティーが有効になっている場合は、Derby Embedded を使用して WebSphere が提供する Business Space を構成します。
- ビジネス・ルール・マネージャーを構成します。
- 拡張するプロファイルでセキュリティーが有効になっている場合は、Business Process Choreographer サンプル構成を作成します。
- データベース設計ファイルを使用してデータベースを構成します。

重要: このトピックの手順では、拡張スタンドアロン・サーバー・プロファイルを構成するための、プロファイル管理ツールで使用可能なすべてのページの概要を示しています。特定のコンポーネント (共通データベースや Business Space など) が、拡張しようとしているプロファイルで既に構成されている場合は、それらのコンポーネントの構成ページは表示されません。

重要: プロファイルをデプロイメント・マネージャーに統合する予定がある場合、メッセージング・エンジン用にファイル・ストア・オプションまたは Common Event Infrastructure、Business Process Choreographer、あるいは共通データベース用に Derby Embedded または Derby Embedded 40 を選択しないでください。ファイ

ル・ストア・オプションおよび Derby Embedded または Derby Embedded 40 データベースはデプロイメント環境構成では使用できません。

356 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』の順に従うと、「管理セキュリティ」ページ、「Business Process Choreographer の構成」ページ、または「Business Space の構成」ページのいずれかが表示されます。

手順

1. プロファイル管理ツールに表示されるページは、拡張するプロファイルでセキュリティが有効になっているかどうか、および拡張先のプロファイル・タイプによって異なります。

拡張先のプロファイル・タイプと拡張する既存のプロファイルのセキュリティ状況	最初のステップ
<ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus プロファイル • 拡張中のプロファイルでセキュリティが有効になっている。 	「管理セキュリティ」ページが表示されず。ステップ 2 に進んでください。
<ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Process Server プロファイル • 拡張中のプロファイルでセキュリティが有効になっていない。 	「Business Process Choreographer の構成」ページが表示されます。ステップ 3 に進んでください。
<ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Enterprise Service Bus プロファイル • 拡張中のプロファイルでセキュリティが有効になっていない。 	「Business Space の構成」ページが表示されます。ステップ 4 (365 ページ) に進んでください。

2. 管理セキュリティを使用可能にします。

このページが表示される場合、拡張中のプロファイルでセキュリティが有効になっています。そのプロファイルの管理ユーザー ID およびパスワードを再入力する必要があります。

拡張するプロファイルで WebSphere Application Server サンプル・アプリケーションがデプロイされている場合は、実行するアカウントが必要です。アカウントのパスワードを指定してください。アカウントのユーザー名は変更できません。

「Business Process Choreographer の構成」ページが表示されます。

3. Business Process Choreographer サンプル構成を作成するかどうかを選択します。

制約事項: 実稼働環境でこのコンポーネントを使用するか、このスタンドアロン・サーバー・プロファイルをデプロイメント・マネージャーに統合する予定がある場合は、Business Process Choreographer サンプル構成を作成しないでください。サンプル構成は、開発専用です。実動の設定においてこのコンポーネントをセットアップする方法については、Business Process Choreographer の構成にあるトピックを参照してください。

サンプル構成を作成するには、「**サンプル Business Process Choreographer の構成**」チェック・ボックスを選択し、「次へ」をクリックします。

「Business Space の構成」ページが表示されます。

4. 「Business Space の構成」ページで、「**ビジネス・スペースの構成**」チェック・ボックスを選択して、WebSphere が提供する Business Space をセットアップします。これは、IBM WebSphere ビジネス・プロセス管理ポータルでアプリケーション・ユーザー用に統合されたユーザー・エクスペリエンスです。Business Space 内のヒューマン・タスク管理ウィジェットと連携するように Lotus Webform Server を構成する場合は、「**Lotus Webform Server の構成 (Configure Lotus Webform Server)**」チェック・ボックスを選択し、Webform Server 変換プログラムおよびインストール・ルートを入力します。次に、「次へ」をクリックします。Business Space を構成すると、このプロファイルで稼働しているアプリケーションのビジネス・ユーザー用に統合 GUI がセットアップされます。

重要: Business Space は、次のデータベース製品でサポートされています。Derby Embedded または Derby Embedded 40、Derby Network Server または Derby Network Server 40、DB2 Universal、DB2 for i5/OS (DB2 for IBM i)、DB2 for z/OS、Oracle、Microsoft SQL Server 2005 および 2008。

WebSphere Process Server で使用するデータベースが、サポートされる Business Space と一致しない場合は、Derby Embedded データベースが Business Space の構成で選択されます。このプロファイルを 1 つのデプロイメント環境に後で統合することはできません。Derby Embedded はデプロイメント環境でサポートされていないためです。

「ビジネス・ルール・マネージャーの構成」ページが表示されます。

5. ビジネス・ルール・マネージャーを構成してインストールするかどうか選択してから、「次へ」をクリックします。ビジネス・ルール・マネージャーは、ビジネス・アプリケーションの必要に合わせてビジネス・ルール・テンプレートをカスタマイズする Web アプリケーションです。

次のステップは、システム上で複数のサーバーが定義されているかどうか、定義されていない場合は、システム上でデータベースが構成されているかどうかによって異なります。

条件	次のステップ
<ul style="list-style-type: none"> • システム上で複数のサーバーが定義されている。 	「Application Scheduler の構成」ページが表示されます。ステップ 6 (366 ページ) に進んでください。
<ul style="list-style-type: none"> • システム上で複数のサーバーが定義されていない。 • システム上でデータベースが定義されていない。 	「データベース設計」ページが表示されます。ステップ 7 (366 ページ) に進んでください。

条件	次のステップ
<ul style="list-style-type: none"> システム上で複数のサーバーが定義されていない。 システム上でデータベースが定義されている。 	パスワード・ページで、データベースの構成に使用するデータベース・ユーザー名およびパスワードが要求されます。情報を入力して「次へ」をクリックします。「プロファイルの要約」ページが表示されます。ステップ 9 (367 ページ) に進んでください。

6. プロファイルに複数のサーバーが定義されているときの詳細プロファイル拡張の場合: 「Application Scheduler の構成」ページで、ドロップダウン・リストからサーバーを選択して、「次へ」をクリックします。次のステップは、データベースがシステムで既に定義されているかどうかによって異なります。

データベースの条件	次のステップ
<ul style="list-style-type: none"> システム上でデータベースが定義されていない。 	「データベース設計」ページが表示されません。ステップ 7 に進んでください。
<ul style="list-style-type: none"> システム上でデータベースが定義されている。 	パスワード・ページで、データベースの構成に使用するデータベース・ユーザー名およびパスワードが要求されます。情報を入力して「次へ」をクリックします。「プロファイルの要約」ページが表示されます。ステップ 9 (367 ページ) に進んでください。

7. オプション: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。このオプションは、拡張スタンドアロン・サーバーのプロファイルと拡張デプロイメント・マネージャーのプロファイルの両方で使用できます。

- 「データベースを構成するときは、データベース設計ファイルを使用します」を選択します。
- 「参照」をクリックします。
- 設計ファイルの完全修飾パス名を指定します。
- 「次へ」をクリックします。

設計ファイルを指定することを選択すると、プロファイル管理ツールのデータベース構成パネルはスキップされます。代わりに、データベースの構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。データベース構成用の設計ファイルの使用について詳しくは、510 ページの『データベース設計ツールを使用したデータベース設計ファイルの作成』を参照してください。

8. 「データベース構成」ページで、選択された WebSphere Process Server と WebSphere Enterprise Bus コンポーネント内の Common Event Infrastructure コンポーネントで使用されるデータベースと、共通データベースの両方を構成します。

詳細については、286 ページの『プロファイル管理ツールを使用した共通データベースおよび Common Event Infrastructure データベースの構成』のトピックを参照してください。「データベース構成」情報ページと「データベース構成 (第 2 部)」ページの各フィールドを入力したら、このステップに戻ります。

「プロファイルの要約」ページが表示されます。

9. 「プロファイルの要約」 ページで、「**拡張**」をクリックしてプロファイルを拡張するか、「**戻る**」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

プロファイルの拡張が完了すると、「プロファイル完了 (Profile Complete)」 ページに「**プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に拡張されました。**」というメッセージが表示されます。

重要: プロファイルの拡張中にエラーが検出された場合は、正常終了のメッセージの代わりに他のメッセージが表示される可能性があります。その例と意味は次のとおりです。

- 「**プロファイル管理ツールでプロファイルが拡張されましたが、エラーが発生しました**」: プロファイルの拡張が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「**プロファイル管理ツールでプロファイルを拡張できません**」: プロファイルの拡張が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile complete)」 ページには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。

10. **Common Event Infrastructure** データベースと共通データベースを手動で構成する必要があるかどうかに応じて、以下のタスクのいずれかを実行し、スタンドアロン・サーバー・プロファイルの構成を完了します。

- プロファイル管理ツールを使用した **Common Event Infrastructure** および共通データベースの構成が完了したら、「**ファースト・ステップ・コンソールの起動**」が選択されていることを確認し、「**終了**」をクリックして終了します。また、別のウィンドウで開いている「プロファイル」 ページも閉じてください。ファースト・ステップ・コンソールを使用して、サーバーを始動します。
- 手動で実行するスクリプトを生成して実際のデータベース構成を先送りする場合は、以下のステップを実行します。
 - a. 「**ファースト・ステップ・コンソールの起動**」の横にあるチェック・ボックスをクリアし、「**終了**」をクリックしてプロファイル管理ツールを閉じます。また、別のウィンドウで開いている「プロファイル」 ページも閉じてください。
 - b. サイトの標準的なデータベース定義ツールおよび手順を使用して、プロファイル管理ツールにより生成されたスクリプトを編集および実行し、**event**、**eventcat**、および **WPRCSDB** の各データベース (システムで別の名前が設定されている場合はこれらに相当するデータベース) を作成するか、作成および構成します。これらのスクリプトの場所は、286 ページの『プロファイル管理ツールを使用した共通データベースおよび **Common Event Infrastructure** データベースの構成』トピックのステップ 2 (288 ページ) で指定しています。また、新規のデータベースまたは既存のデータベース内の新規テーブルを手動で作成することについて説明しているトピックも参照してください。
 - **Common Event Infrastructure** データベース: 『イベント・データベースの構成』とそのサブトピック。

- 共通データベースの場合: 492 ページの『プロファイルの作成後または拡張後の共通データベースとテーブルの作成』または 493 ページの『プロファイルの作成後または拡張後の共通データベースでのテーブルの作成』。

データベースの構成時に、69 ページの『ファースト・ステップ・コンソールの開始』で説明されているように、プロファイルに関連付けられているファースト・ステップ・コンソールを開始します。

11. ご使用の環境で Business Process Choreographer コンポーネントを使用する予定がある場合、データベース管理者に Business Process Choreographer データベースの作成および構成を依頼する必要がある場合があります。

詳しくは、『Business Process Choreographer の構成』にある各トピックを参照してください。

タスクの結果

以下のいずれかの作業が完了しました。

- WebSphere Application Server、WebSphere Application Server Network Deployment、または WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルの WebSphere Process Server プロファイルへの拡張。
- WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルの WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルへの拡張。

デフォルトのサーバー名を使用した場合、プロファイル内のノードのサーバーは、server1 (Linux、UNIX、および Windows プラットフォームの場合) という名前になり、複数の製品がインストールされている場合は、サーバーの番号が増えていきます。

次のタスク

ファースト・ステップ・コンソールから「サーバーの起動」を選択してサーバーの作動をチェックします。出力ウィンドウが開きます。次のようなメッセージが表示される場合、サーバーは正常に作動しています。

```
ADMU3000I: サーバー server1 が e-ビジネス用にオープン。プロセス ID は 3348  
(Server server1 open for e-business; process id is 3348)
```

ファースト・ステップ・コンソールからインストール検査テスト (IVT) を実行するか、wbi_ivt コマンド行ユーティリティを実行することで、サーバーの動作を確認することもできます。このテストは、デプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーのインストール環境が正常に動作していることが確認するものです。スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合はシステム正常性検査も実行され、レポートが生成されます。

スタンドアロン・サーバー・プロファイルのデプロイメント・マネージャーへの統合:

addNode コマンドを使用して、スタンドアロン・サーバー・プロファイルをデプロイメント・マネージャー・セルに統合する方法を学習します。統合の後に、ノード・プロセス・エージェント・プロセスが作成されます。このノード・エージェン

トおよびサーバー・プロセスの両方とも、デプロイメント・マネージャーにより管理されます。スタンドアロン・サーバー・プロファイルを統合し、サーバー・アプリケーションをすべて組み込むと、統合動作によりデプロイメント・マネージャーにアプリケーションがインストールされます。スタンドアロン・サーバー・プロファイルは、他に統合されたプロファイルがない場合にのみ統合できます。

始める前に

以下の前提条件が満たされていることを確認します。

- WebSphere Process Server がインストール済みであり、WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャーが作成済みである。
- デプロイメント・マネージャーが、WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャーに拡張されている。WebSphere Process Server プロファイルは WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャーを使用できませんが、WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルは WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャーを使用できます。
- スタンドアロン・サーバー・プロファイルが WebSphere Process Server プロファイルである。
- スタンドアロン・サーバー・プロファイルが、メッセージング・エンジン用にファイル・ストアも Derby Embedded データ・ストアも使用していない。プロファイル管理ツールで「標準的」オプションを使用してプロファイルを作成した場合、プロファイルはこれらのオプションを使用します。このプロファイルをデプロイメント・マネージャーに統合することはできません。
- スタンドアロン・サーバーが、リモート・アクセスをサポートするデータベース・ドライバー (Derby Network または Java toolbox JDBC など) を使用している。
- デプロイメント・マネージャーが稼働している。稼働していない場合は、ファースト・ステップ・コンソールから「**デプロイメント・マネージャーの始動**」を選択するか、または以下のコマンドを入力してデプロイメント・マネージャーを始動します。ここで、*profile_root* はデプロイメント・マネージャー・プロファイルのインストール場所を表します。
 - **Linux** **UNIX** `profile_root/bin/startManager.sh`
 - **Windows** `profile_root%bin%startManager.bat`
- スタンドアロン・サーバーが実行されていません。実行されている場合は、ファースト・ステップ・コンソールで「**サーバーの停止**」を選択するか、次のコマンドを入力して、停止します。ここで、*profile_root* は、スタンドアロン・サーバー・プロファイルのインストール・ロケーションです。
 - **Linux** **UNIX** `profile_root/bin/stopServer.sh`
 - **Windows** `profile_root%bin%stopServer.bat`
- デプロイメント・マネージャーのリリース・レベルが、作成または拡張されたプロファイルと同じか、それより高い。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっている。デフォルト・プロトコルは SOAP です。
- デプロイメント・マネージャーにほかのノードが統合されていません。

デプロイメント・マネージャーが実行されていないとき、または他の理由で使用できないときにスタンドアロン・サーバー・プロファイルを統合すると、プロファイルの統合に失敗し、そのプロファイルが使用不可になります。そのため、同じプロファイル名で別のプロファイルを作成する前に、このスタンドアロン・サーバー・プロファイル・ディレクトリーをプロファイル・リポジトリーの外に移動させる必要があります。

このタスクについて

このタスクを実行する必要があるのは、既存のスタンドアロン・サーバー・プロファイルがあり、Network Deployment が提供する機能 (中央管理またはクラスタリング) をそのサーバーに追加する必要がある場合です。この機能は、既存のスタンドアロン・サーバー・プロファイルに拡張のパスを提供します。ただし、このデプロイメント環境を使用する場合、単一のクラスタ構成に制限されます。単一クラスタ・パターンの説明については、『単一クラスタ・トポロジー』を参照してください。

このタスクは、各セルごとに 1 回、そのセルに統合された最初のプロファイルに対してのみ実行します。統合されたノードがそのセルに既にある場合は、このタスクを実行しないでください。既存のスタンドアロン・サーバー・プロファイルがない環境を作成する場合は、カスタム・プロファイルを使用して環境を作成します。カスタム・プロファイルの作成について詳しくは、230 ページの『プロファイルの作成』を参照してください。

手順

1. 統合するスタンドアロン・サーバー・プロファイルの bin ディレクトリーに移動します。 コマンド・ウィンドウを開き、プラットフォームに応じて以下のいずれかのディレクトリーに移動します。ここで、*profile_root* は、スタンドアロン・サーバー・プロファイルのインストール・ロケーションを表します。

- **Linux** **UNIX** `profile_root/bin`
- **Windows** `profile_root\bin`

2. addNode コマンドを実行します。

セキュリティーが無効である場合は、以下のいずれかのコマンドを発行します。ポート・パラメーターはオプションで、デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成時にデフォルト・ポート番号を使用した場合は省略できます。

- **Linux** **UNIX** `./addNode.sh deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port -includeapps -includebuses`
- **Windows** `addNode.bat deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port -includeapps -includebuses`

セキュリティーが有効である場合は、以下のいずれかのコマンドを発行します。

- **Linux** **UNIX** `./addNode.sh deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port -username userID_for_authentication -password password_for_authentication -localusername localuserID_for_authentication -localpassword localpassword_for_authentication -includeapps -includebuses`

- **Windows** addNode.bat deployment_manager_host
deployment_manager_SOAP_port -username userID_for_authentication -password
password_for_authentication -localusername localuserID_for_authentication
-localpassword localpassword_for_authentication -includeapps -includebuses

出力ウィンドウが開きます。次のようなメッセージが表示された場合、スタンドアロン・サーバー・プロファイルは正常に統合されています。

ADMU00031: ノード DMNDID2Node02 は正常に統合されました。
(Node DMNDID2Node02 has been successfully federated.)

タスクの結果

スタンドアロン・サーバー・プロファイルはデプロイメント・マネージャーに統合されました。 addNode コマンドとそのパラメーターについて詳しくは、WebSphere Application Server Network Deployment インフォメーション・センターのトピック『wsadmin スクリプトを使用した addNode コマンドの実行 (Using wsadmin scripting to run the addNode command)』を参照してください。

標準的なデプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールの「**標準 (Typical)**」オプションを使用して、WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張および構成する方法について説明します。「**標準 (Typical)**」オプションを選択すると、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

始める前に

このトピックでは、ユーザーがプロファイル管理ツールを使用してプロファイルを拡張し、356 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』の手順に従っていることを前提としています。すなわち、プロファイル管理ツールをすでに開始しており、デプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張を選択し、「**標準 (Typical)**」のプロファイル拡張オプションを選択しているということです。

このタスクについて

この構成のタイプでは、プロファイル管理ツールは以下のタスクを実行します。

- 拡張するプロファイルでセキュリティーが有効になっている場合は、作成する WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルで管理セキュリティーを有効にできます。
- 共通データベース構成を Derby Network Server に設定します (拡張するプロファイルでまだ構成されていない場合)。

356 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』の手順に従うと、「管理セキュリティー」ページ、「プロファイル要約」ページ、「データベース・セキュリティー (Database Security)」ページが表示されます。

手順

1. プロファイル管理ツールに表示されるページは、プロファイルで管理セキュリティーが有効になっているかどうかによって異なります。

プロファイルのセキュリティーおよびデータベースの状態	最初のステップ
<ul style="list-style-type: none"> 拡張中のプロファイルの管理セキュリティーは有効になっている。 	「管理セキュリティー」ページが表示されず。ステップ 2 に進んでください。
<ul style="list-style-type: none"> 拡張中のプロファイルの管理セキュリティーは有効になっていない。 データベースをまだ構成していない。 	「プロファイルの要約」ページが表示されず。ステップ 3 に進んでください。
<ul style="list-style-type: none"> 拡張中のプロファイルの管理セキュリティーは有効になっていない。 データベースを既に構成している。 	パスワード・ページで、データベースの構成に使用するデータベース・ユーザー名およびパスワードが要求されます。情報を入力して「次へ」をクリックします。「プロファイルの要約」ページが表示されます。ステップ 3 に進んでください。

2. 管理セキュリティーを使用可能にします。

このページが表示される場合、拡張中のプロファイルでセキュリティーが有効になっています。そのプロファイルの管理ユーザー ID およびパスワードを再入力する必要があります。

「プロファイルの要約」ページが表示されます。

3. 「プロファイルの要約」ページで、「**拡張**」をクリックしてプロファイルを拡張するか、「**戻る**」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

プロファイルの拡張が完了すると、「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページに「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に拡張されました。」というメッセージが表示されます。

重要: プロファイルの拡張中にエラーが検出された場合は、正常終了のメッセージの代わりに他のメッセージが表示される可能性があります。その例と意味は次のとおりです。

- 「**プロファイル管理ツールでプロファイルが拡張されましたが、エラーが発生しました**」: プロファイルの拡張が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「**プロファイル管理ツールでプロファイルを拡張できません**」: プロファイルの拡張が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile complete)」ページには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。

4. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、「**ファースト・ステップ・コンソールの起動**」が選択されていることを確認し、「**終了**」をクリックして終了します。また、別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページも閉じてください。ファースト・ステップ・コンソールを使用して、サーバーを始動します。

5. ご使用の環境で Business Process Choreographer コンポーネントを使用する場合、それを構成する必要があります。データベース管理者に Business Process Choreographer データベースを作成し、構成してもらうことが必要になる場合があります。

詳しくは、『Business Process Choreographer の構成』にある各トピックを参照してください。

タスクの結果

以下のいずれかの作業が完了しました。

- WebSphere Application Server、WebSphere Application Server Network Deployment、または WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルの WebSphere Process Server プロファイルへの拡張。
- WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルの WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルへの拡張。

プロファイルで定義されたノードには、名前が Dmgr というデプロイメント・マネージャーがあります。

次のタスク

ファースト・ステップ・コンソールから「**デプロイメント・マネージャーの始動**」を選択して、サーバーが作動することを確認します。出力ウィンドウが開きます。次のようなメッセージが表示される場合、デプロイメント・マネージャーは正常に作動しています。

```
ADMU3000I: サーバー dmgr が e-ビジネス用にオープン。プロセス ID は 3072  
(Server dmgr open for e-business; process id is 3072)
```

デプロイメント環境の場合には、別のデータベースを作成して構成し、カスタム・プロファイルを作成してそれをご使用のデプロイメント・マネージャーに統合し、サーバーを作成し、ワークロード管理機能が必要な場合はクラスターを作成し、さらに、計画したインストール環境に固有のその他のタスクを実行する必要があります。計画した環境では、実行が必要なタスク、およびその実行順序を指示します。

インストールの計画について詳しくは、「[インストールの計画、バージョン 7.0](#)」PDF の各トピックを参照してください。WebSphere Process Server で必要とされるデータベースの詳細情報については、「[WebSphere Process Server for Multiplatforms バージョン 7.0 のインストールおよび構成](#)」PDF 内の『[WebSphere Process Server の構成](#)』>『[データベースの構成](#)』の各トピックを参照してください。または、WebSphere Process Server オンライン・インフォメーション・センターの各トピックを参照してください。

高度なデプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールの「**拡張**」オプションを使用して、WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張および構成する方法について説明します。「**拡張**」オプションを選択すると、カスタマイズした構成設定でプロファイルが拡張されます。

始める前に

このトピックでは、ユーザーがプロファイル管理ツールを使用してプロファイルを拡張し、356 ページの『[プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張](#)』の手順に従っていることを前提としています。すなわち、プロファイル管理ツール

をすでに開始しており、デプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張を選択し、「拡張」のプロファイル拡張オプションを選択しているということです。

このタスクについて

「拡張」オプションを選択することで、以下のタスクを実行できます。

- 共通データベースを構成します。
- データベース設計ファイルを使用してデータベースを構成します。
- 拡張するプロファイルでセキュリティーが有効になっている場合は、作成している WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルで管理セキュリティーを有効にします。

重要: このトピックの手順では、拡張デプロイメント・マネージャー・プロファイルを構成するための、プロファイル管理ツールで使用可能なすべてのページの概要を示しています。特定のコンポーネント (共通データベースなど) が、拡張しようとしているプロファイルで既に構成されている場合は、そのコンポーネントの構成ページは表示されません。

356 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』の手順に従うと、「管理セキュリティー」ページ、「データベース設計」ページ、または「データベース・セキュリティー (Database Security)」ページのいずれかが表示されます。

手順

1. プロファイル管理ツールに表示されるページは、プロファイルで管理セキュリティーが有効になっているかどうか、また共通データベースが既に構成されているかどうかによって異なります。

プロファイルのセキュリティーおよびデータベースの状態	最初のステップ
<ul style="list-style-type: none"> • 拡張中のプロファイルの管理セキュリティーは有効になっている。 	「管理セキュリティー」ページが表示されません。ステップ 2 に進んでください。
<ul style="list-style-type: none"> • 拡張中のプロファイルの管理セキュリティーは有効になっていない。 • 共通データベースをまだ構成していない。 	「データベース設計」ページが表示されません。ステップ 3 (375 ページ) に進んでください。
<ul style="list-style-type: none"> • 拡張中のプロファイルの管理セキュリティーは有効になっていない。 • 共通データベースを既に構成している。 	パスワード・ページで、データベースの構成で使用するデータベース・ユーザー名およびパスワードが要求されます。情報を入力して「次へ」をクリックします。「プロファイルの要約」ページが表示されます。ステップ 5 (375 ページ) に進んでください。

2. 管理セキュリティーを使用可能にします。

「管理セキュリティー」ページが表示される場合、拡張中のプロファイルでセキュリティーが有効になっています。そのプロファイルの管理ユーザー ID およびパスワードを再入力する必要があります。

「データベースの構成」ページが表示されます。

3. オプション: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。このオプションは、拡張スタンドアロン・サーバーのプロファイルと拡張デプロイメント・マネージャーのプロファイルの両方で使用できます。
 - a. 「データベースを構成するときは、データベース設計ファイルを使用します」を選択します。
 - b. 「参照」をクリックします。
 - c. 設計ファイルの完全修飾パス名を指定します。
 - d. 「次へ」をクリックします。

設計ファイルを指定することを選択すると、プロファイル管理ツールのデータベース構成パネルはスキップされます。代わりに、データベースの構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。データベース構成用の設計ファイルの使用について詳しくは、510 ページの『データベース設計ツールを使用したデータベース設計ファイルの作成』を参照してください。

4. 「データベース構成」ページで、選択した製品コンポーネントで使用する共通データベースを構成します。

詳細については、286 ページの『プロファイル管理ツールを使用した共通データベースおよび Common Event Infrastructure データベースの構成』のトピックを参照してください。「データベース構成」ページと「データベース構成 (第 2 部)」ページの各フィールドへの入力を完了したら、このステップに戻ります。「プロファイルの要約」ページが表示されます。

5. 「プロファイルの要約」ページで、「拡張」をクリックしてプロファイルを拡張するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

プロファイルの拡張が完了すると、「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページに「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に拡張されました。」というメッセージが表示されます。

重要: プロファイルの拡張中にエラーが検出された場合は、正常終了のメッセージの代わりに他のメッセージが表示される可能性があります。その例と意味は次のとおりです。

- 「プロファイル管理ツールでプロファイルが拡張されましたが、エラーが発生しました」: プロファイルの拡張が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「プロファイル管理ツールでプロファイルを拡張できません」: プロファイルの拡張が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile complete)」ページには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。

6. 共通データベースを手動で構成する必要があるかどうかに応じて、以下のいずれかのタスクを実行し、プロファイル構成を完了します。
 - プロファイル管理ツールを使用した共通データベースの構成が完了したら、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認し、「終了」をクリックして終了します。また、別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページも閉じてください。ファースト・ステップ・コンソールを使用して、デプロイメント・マネージャーを開始します。

- 手動で実行するスクリプトを生成して実際のデータベース構成を先送りする場合は、以下のステップを実行します。
 - a. 「ファースト・ステップ・コンソールの起動」の横にあるチェック・ボックスをクリアし、「終了」をクリックしてプロファイル管理ツールを閉じます。また、別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページも閉じてください。
 - b. サイトの標準的なデータベース定義ツールと手順を使用して、プロファイル管理ツールにより生成されたスクリプトを編集して実行し、WPCRSDB データベース（または、システムで別の名前が設定されている場合はそれに相当するデータベース）を作成するか、または作成して構成する必要があります。このスクリプトの場所は、286 ページの『プロファイル管理ツールを使用した共通データベースおよび Common Event Infrastructure データベースの構成』トピックのステップ 2 (288 ページ) で指定しました。また、492 ページの『プロファイルの作成後または拡張後の共通データベースとテーブルの作成』または 493 ページの『プロファイルの作成後または拡張後の共通データベースでのテーブルの作成』にある、新規の共通データベースまたはテーブルを既存の共通データベースに手動で作成する方法について説明している各トピックも参照してください。各データベースの構成が完了したら、69 ページの『ファースト・ステップ・コンソールの開始』で説明されているように、プロファイルに関連付けられているファースト・ステップ・コンソールを開始します。

タスクの結果

以下のいずれかの作業が完了しました。

- WebSphere Application Server、WebSphere Application Server Network Deployment、または Websphere ESB プロファイルの WebSphere Process Server プロファイルへの拡張。
- WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルの Websphere ESB プロファイルへの拡張。

次のタスク

ファースト・ステップ・コンソールから「デプロイメント・マネージャーの始動」を選択して、サーバーが作動することを確認します。出力ウィンドウが開きます。次のようなメッセージが表示される場合、デプロイメント・マネージャーは正常に作動しています。

```
ADMU3000I: サーバー dmgr が e-ビジネス用にオープン。プロセス ID は 3072
(Server dmgr open for e-business; process id is 3072)
```

デプロイメント環境の場合には、別のデータベースを作成して構成し、カスタム・プロファイルを作成してそれをご使用のデプロイメント・マネージャーに統合し、サーバーを作成し、ワークロード管理機能が必要な場合はクラスターを作成し、さらに、計画したインストール環境に固有のその他のタスクを実行する必要があります。計画した環境では、実行が必要なタスク、およびその実行順序を指示します。

インストールの計画について詳しくは、「インストールの計画、バージョン 7.0」PDF の各トピックを参照してください。WebSphere Process Server で必要とされるデータベースの詳細情報については、「*WebSphere Process Server for Multiplatforms*

バージョン 7.0 のインストールおよび構成」 PDF 内の『WebSphere Process Server の構成』 > 『データベースの構成』の各トピックを参照してください。または、WebSphere Process Server オンライン・インフォメーション・センターの各トピックを参照してください。

標準的なカスタム・プロファイル (管理対象ノード) の拡張:

プロファイル管理ツールの「標準 (Typical)」オプションを使用して、WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus のカスタム・プロファイルを拡張および構成する方法について説明します。「標準 (Typical)」オプションを選択すると、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

始める前に

このトピックでは、ユーザーがプロファイル管理ツールを使用してプロファイルを拡張し、356 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』の手順に従っていることを前提としています。すなわち、プロファイル管理ツールをすでに開始しており、カスタム・プロファイルの拡張を選択し、「標準 (Typical)」のプロファイル拡張オプションを選択しているということです。

このタスクについて

この構成のタイプでは、拡張プロセス時に既存のデプロイメント・マネージャーにノードを統合するか、後で `addNode` コマンドを使用して統合するかを選択できます。拡張プロセス時にプロファイルを統合することを決定した場合は、このツールによって共通データベースの構成がデプロイメント・マネージャーと同じデータベースに設定されます。統合しないことを決定した場合は、データベースは未構成のままになります。

356 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』の手順に従うと、「フェデレーション」ページが表示されます。

手順

1. 「フェデレーション」ページで、ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合をプロファイルの拡張の一部としてここで実行するか、またはプロファイルの拡張とは別に後で実行するかを選択します。
 - プロファイル拡張の一部としてノードを統合することを選択した場合は、デプロイメント・マネージャーのホスト名または IP アドレスと SOAP ポート、および認証ユーザー ID とパスワード (デプロイメント・マネージャー上で管理セキュリティが使用可能になっている場合) を指定します。「後でこのノードを統合する」チェック・ボックスを選択解除されたままにしておきます。次に、「次へ」をクリックします。

プロファイル管理ツールによって、デプロイメント・マネージャーが存在し、通信が可能であること、および認証ユーザー ID とパスワードがそのデプロイメント・マネージャーに有効であること (デプロイメント・マネージャーがセキュリティで保護されている場合) が検査されます。

重要: 以下の条件すべてに該当する場合にのみ、プロファイルの拡張時にカスタム・ノードを統合してください。

- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がない。
- 他のノードは統合されていない (ノードの統合はシリアルライズする必要があります)。
- デプロイメント・マネージャーが稼働している。
- デプロイメント・マネージャーが WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャーである。WebSphere Process Server プロファイルは WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャーを使用できませんが、WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルは WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャーを使用できます。
- デプロイメント・マネージャーが、拡張するカスタム・プロファイルと同じか、それより高いリリース・レベルである。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっている。デフォルト・プロトコルは SOAP です。(優先コネクタ・タイプを確認するには、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールで「システム管理」>「デプロイメント・マネージャー」>「管理サービス」をクリックします。)

デプロイメント・マネージャーが実行中でないとき、またはほかの理由でデプロイメント・マネージャーを使用できないときに、カスタム・ノードを統合しようとする、警告ボックスが表示されて、続行できなくなります。この警告ボックスが表示されたら、「OK」をクリックしてこの警告パネルを終了し、「フェデレーション」ページで別の選択を行ってください。

- プロファイルの拡張とは別に、後でノードを統合することを選択する場合は、「後でこのノードを統合する」チェック・ボックスを選択して、「次へ」をクリックします。

addNode コマンドを使用してノードを統合する方法については、278 ページの『カスタム・ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合』を参照してください。このコマンドについては、WebSphere Application Server Network Deployment インフォメーション・センターのトピック『wsadmin スクリプトを使用する addNode コマンドの実行』を参照してください。

「プロファイルの要約」ページが表示されます。

2. 「プロファイルの要約」ページで、「**拡張**」をクリックしてプロファイルを拡張するか、「**戻る**」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

プロファイルの拡張が完了すると、「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページに「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に拡張されました。」というメッセージが表示されます。

重要: プロファイルの拡張中にエラーが検出された場合は、正常終了のメッセージの代わりに他のメッセージが表示される可能性があります。その例と意味は次のとおりです。

- 「プロファイル管理ツールでプロファイルが拡張されましたが、エラーが発生しました」：プロファイルの拡張が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「プロファイル管理ツールでプロファイルを拡張できません」：プロファイルの拡張が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile complete)」ページには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。

3. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認し、「終了」をクリックして終了します。また、別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページも閉じてください。ファースト・ステップ・コンソールを使用して、製品資料にアクセスします。

タスクの結果

以下のいずれかの作業が完了しました。

- WebSphere Application Server、WebSphere Application Server Network Deployment、または WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルの WebSphere Process Server プロファイルへの拡張。
- WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルの WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルへの拡張。

次のタスク

プロファイルの拡張中にプロファイルを統合しなかった場合、ここで統合します。プロファイル内のノードを統合し、デプロイメント・マネージャーを使用してそのノードをカスタマイズするまでは、そのノードは空です。

高度なカスタム・プロファイル (管理対象ノード) の拡張:

プロファイル管理ツールの「拡張」オプションを使用して、WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus のカスタム・プロファイルを拡張および構成する方法について説明します。「拡張」オプションを選択すると、カスタマイズした構成設定でプロファイルが拡張されます。

始める前に

このトピックでは、ユーザーがプロファイル管理ツールを使用してプロファイルを拡張し、356 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』の手順に従っていることを前提としています。すなわち、プロファイル管理ツールをすでに開始しており、カスタム・プロファイルの拡張を選択し、高度なプロファイル拡張オプションを選択しているということです。

このタスクについて

カスタム・プロファイルの拡張中、拡張プロセス時にノードを既存のデプロイメント・マネージャーに統合するか、後で addNode コマンドを使用して統合するかを選択できます。

356 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』に記載されている手順に従って作業が完了していれば、「フェデレーション」ページが表示されます。

手順

1. 「フェデレーション」ページで、ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合をプロファイルの拡張の一部としてここで実行するか、またはプロファイルの拡張とは別に後で実行するかを選択します。

- プロファイル拡張の一部としてノードを統合することを選択した場合は、デプロイメント・マネージャーのホスト名または IP アドレスと SOAP ポート、および認証ユーザー ID とパスワード (デプロイメント・マネージャー上で管理セキュリティが使用可能になっている場合) を指定します。「**後でこのノードを統合する**」チェック・ボックスを選択解除されたままにしておきます。次に、「次へ」をクリックします。

プロファイル管理ツールによって、デプロイメント・マネージャーが存在し、通信が可能であること、および認証ユーザー ID とパスワードがそのデプロイメント・マネージャーに有効であること (デプロイメント・マネージャーがセキュリティで保護されている場合) が検査されます。

重要:

以下の状況のいずれかに該当する場合は、プロファイルの拡張時にカスタム・ノードを統合しないでください。

- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がある。
- 別のプロファイルが統合されている (ノードの統合はシリアルライズする必要があります)。
- デプロイメント・マネージャーが稼働していないか、実行しているかどうか不明。
- そのデプロイメント・マネージャーは、まだ WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャーに拡張されていない。
- デプロイメント・マネージャーが、作成または拡張するカスタム・プロファイルより低いリリース・レベルである。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっていない。
- デプロイメント・マネージャーが、デフォルトではないリモート・メソッド呼び出し (RMI) を優先 Java Management Extensions (JMX) コネクターとして使用するよう再構成されている。(優先コネクター・タイプを確認するには、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールで「システム管理」>「デプロイメント・マネージャー」>「管理サービス」を選択します。)

デプロイメント・マネージャーが実行中でないとき、またはほかの理由でデプロイメント・マネージャーを使用できないときに、カスタム・ノードを統合しようとする、警告ボックスが表示されて、続行できなくなります。この警告ボックスが表示されたら、「OK」をクリックしてこの警告パネルを終了し、「フェデレーション」ページで別の選択を行ってください。

- プロファイルの拡張とは別に、後でノードを統合することを選択する場合は、「**後でこのノードを統合する**」チェック・ボックスを選択して、「**次へ**」をクリックします。

addNode コマンドを使用してノードを統合する方法については、278 ページの『カスタム・ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合』を参照してください。このコマンドについては、WebSphere Application Server Network Deployment インフォメーション・センターのトピック『wsadmin スクリプトを使用する addNode コマンドの実行』を参照してください。

「データベースの構成」ページが表示されます。

2. 「データベース構成」ページで、以下の手順を実行します。
 - a. データベース製品を確認します。このカスタム・プロファイルの統合先のデプロイメント・マネージャーで使用されているデータベースと一致するデータベースが表示されます。
 - b. データベースの JDBC ドライバー・クラス・パス・ファイルのロケーション (ディレクトリー) を指定します。Derby Network Server、Derby Network Server 40、または DB2 Universal Database の各デフォルト値を受け入れることができます。
 - c. 「**次へ**」をクリックします。

「プロファイルの要約」ページが表示されます。

3. 「プロファイルの要約」ページで、「**拡張**」をクリックしてプロファイルを拡張するか、「**戻る**」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

プロファイルの拡張が完了すると、「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページに「**プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に拡張されました。**」というメッセージが表示されます。

重要: プロファイルの拡張中にエラーが検出された場合は、正常終了のメッセージの代わりに他のメッセージが表示される可能性があります。その例と意味は次のとおりです。

- 「**プロファイル管理ツールでプロファイルが拡張されましたが、エラーが発生しました**」: プロファイルの拡張が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「**プロファイル管理ツールでプロファイルを拡張できません**」: プロファイルの拡張が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile complete)」ページには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。

4. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、「**ファースト・ステップ・コンソールの起動**」が選択されていることを確認し、「**終了**」をクリックして終了します。また、別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページも閉じてください。ファースト・ステップ・コンソールを使用して、製品資料にアクセスします。

タスクの結果

以下のいずれかの作業が完了しました。

- WebSphere Application Server、WebSphere Application Server Network Deployment、または WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルの WebSphere Process Server プロファイルへの拡張。
- WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルの WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルへの拡張。

次のタスク

プロファイル内のノードを統合し、管理コンソールを使用してそのノードをカスタマイズするまでは、そのノードは空です。

デプロイメント環境で、データベースを作成して構成し、他のカスタム・プロファイルを作成してそれをご使用のデプロイメント・マネージャーに統合し、サーバーを作成し、ワークロード管理機能が必要な場合はクラスターを作成し、さらに計画したインストール環境に固有のその他のタスクを実行する必要があります。計画した環境では、実行が必要なタスク、およびその実行順序を指示します。

インストールの計画について詳しくは、「インストールの計画、バージョン 7.0」PDF の各トピックを参照してください。WebSphere Process Server で必要とされるデータベースの詳細情報については、「*WebSphere Process Server for Multiplatforms* バージョン 7.0 のインストールおよび構成」PDF 内の『*WebSphere Process Server* の構成』>『データベースの構成』の各トピックを参照してください。または、WebSphere Process Server オンライン・インフォメーション・センターの各トピックを参照してください。

カスタム・ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合:

addNode コマンドを使用して、カスタム・ノードをデプロイメント・マネージャー・セルに統合できます。以下の説明に従って、カスタム・ノードの統合およびデプロイのプロセスを実行します。

始める前に

この手順を実行する前に、以下の前提条件を確認してください。

- WebSphere Process Server がインストール済みであること、および WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャーとカスタム・プロファイルが作成済みである。この手順では、カスタム・プロファイルの統合がその作成または拡張中に (プロファイル管理ツールまたは manageprofiles コマンド行ユーティリティを使用して) 行われていないことが前提となっています。
- デプロイメント・マネージャーが稼働している。稼働していない場合は、ファースト・ステップ・コンソールから「**デプロイメント・マネージャーの始動**」を選択するか、または以下のコマンドを入力してデプロイメント・マネージャーを始動します。ここで、*profile_root* はデプロイメント・マネージャー・プロファイルのインストール場所を表します。

```
- Linux UNIX profile_root/bin/startManager.sh
- Windows profile_root¥bin¥startManager.bat
```

- デプロイメント・マネージャーが、WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャーに拡張されている。WebSphere Process Server プロファイルは WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャーを使用できませんが、WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルは WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャーを使用できます。
- デプロイメント・マネージャーのリリース・レベルが、作成または拡張されたカスタム・プロファイルと同じか、それより高い。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっている。デフォルト・プロトコルは SOAP です。
- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がない。

このタスクについて

カスタム・ノードをデプロイメント・マネージャーが管理できるように、カスタム・ノードを統合します。addNode コマンドを使用し、カスタム・プロファイルをデプロイメント・マネージャー・セルに統合します。

手順

1. 統合するカスタム・プロファイルの bin ディレクトリーに移動します。コマンド・ウィンドウを開き、(コマンド行から) プラットフォームに応じて以下のディレクトリーのいずれかに移動します (ここで *profile_root* はカスタム・プロファイルのインストール・ロケーションを表します)。

- **Linux** **UNIX** `profile_root/bin`
- **Windows** `profile_root\bin`

2. addNode コマンドを実行します。

セキュリティーが有効になっていない場合は、コマンド行から以下のいずれかのコマンドを発行します。

- **Linux** **UNIX** `./addNode.sh deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port`
- **Windows** `addNode.bat deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port`

セキュリティーが使用可能である場合は、コマンド行から以下のいずれかのコマンドを発行します。

- **Linux** **UNIX** `./addNode.sh deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port-username userID_for_authentication-password password_for_authentication`
- **Windows** `addNode.bat deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port-username userID_for_authentication-password password_for_authentication`

出力ウィンドウが開きます。次のようなメッセージが表示されたら、カスタム・プロファイルは正常に統合されています。

ADMU00031: ノード DMNDID2Node03 は正常に統合されました。
(Node DMNDID2Node03 has been successfully federated.)

タスクの結果

カスタム・プロファイルはデプロイメント・マネージャーに統合されました。
addNode コマンドとそのパラメーターについては、WebSphere Application Server Network Deployment インフォメーション・センターのトピック『wsadmin スクリプトを使用した addNode コマンドの実行 (Using wsadmin scripting to run the addNode command)』を参照してください。

次のタスク

カスタム・プロファイルを統合したら、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールに移動して空のノードをカスタマイズするか、新規のサーバーを作成します。

デプロイメント環境のカスタム・プロファイル (管理対象ノード) の拡張:

プロファイル管理ツールの「**デプロイメント環境**」オプションを使用して、WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus のカスタム・プロファイルを拡張および構成する方法について説明します。「**デプロイメント環境**」オプションを選択すると、カスタマイズした構成値を使用してプロファイルを構成し、既存のデプロイメント環境パターンで使用することができます。

始める前に

このトピックでは、ユーザーがプロファイル管理ツールを使用してプロファイルを拡張し、356 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』の手順に従っていることを前提としています。すなわち、プロファイル管理ツールをすでに開始しており、カスタム・プロファイルの拡張を選択し、「**デプロイメント環境**」プロファイル拡張オプションを選択しているということです。

このタスクについて

「**デプロイメント環境**」プロファイル拡張オプションを選択して、デプロイメント環境に合わせて完全に構成されたプロファイルを設定アップします。このオプションは、WebSphere Process Server が動作するために必要なすべてのコンポーネントを構成してインストールします。以下のコンポーネントがこのオプションの一環として構成されます。

- Business Process Choreographer
- Common Event Infrastructure
- ビジネス・ルール・マネージャー
- Service Component Architecture

この構成のタイプでは、以下のタスクを実行できます。

- デプロイメント環境パターンが既に定義されている既存のデプロイメント・マネージャーにノードを統合します。
- そのデプロイメント環境に定義するクラスター、および共通データベースの構成用の独自の値を指定します。

356 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』に記載されている手順に従って作業が完了していれば、「フェデレーション」ページが表示されます。

手順

1. 「フェデレーション」ページで、プロファイルの拡張の一部として、ここでノードをデプロイメント・マネージャーに統合する必要があります。「**後でこのノードを統合する**」チェック・ボックスは、このタイプのプロファイルの拡張用の「フェデレーション」ページ上には表示されません。デプロイメント・マネージャーのホスト名または IP アドレスと SOAP ポート、および認証ユーザー ID とパスワードを指定します。次に、「次へ」をクリックします。

デプロイメント・マネージャーの SOAP ポート番号を調べるには、このカスタム・プロファイルに関連付けられているデプロイメント・マネージャーの `dmgr_profile_root/logs` ディレクトリーに移動します。このディレクトリーで、`AboutThisProfile.txt` ファイルを開き、「デプロイメント・マネージャーの SOAP コネクター・ポート:」という項目の値を調べます。

プロファイル管理ツールによって、デプロイメント・マネージャーが存在し、通信が可能であること、および認証ユーザー ID とパスワードがそのデプロイメント・マネージャーに有効であることが検査されます。また、有効なデプロイメント環境がデプロイメント・マネージャー上に定義されていることも検査され、パターンとデータベース・タイプがデプロイメント・マネージャーから取得されず。

デプロイメント・マネージャーが実行中でないとき、またはほかの理由でデプロイメント・マネージャーを使用できないときに、カスタム・ノードを統合しようとする、警告ボックスが表示されて、続行できなくなります。この警告ボックスが表示されたら、「OK」をクリックしてこの警告パネルを終了し、プロファイルの拡張を取り消し、システムに必要な変更を行ってください。

「デプロイメント環境構成」ページが表示されます。

2. 「デプロイメント環境構成」ページで、少なくとも 1 つのクラスターを選択し、このノードをデプロイメント環境パターンに割り当て、「次へ」をクリックします。デプロイメント・マネージャーで前に定義されたデプロイメント環境パターンに基づいて、以下のクラスターが 1 つから 3 つ、ページに表示されず。

表 115. 既存のデプロイメント・マネージャー上のデプロイメント環境パターンによって提供されるクラスター

デプロイメント・マネージャーのデプロイメント環境パターン	提供されるクラスター
リモート・メッセージングおよびリモート・サポート	<ul style="list-style-type: none"> • アプリケーション・デプロイメントのターゲット: ユーザー・アプリケーションをデプロイする必要があるクラスター 1 つで構成されます。 • メッセージング・インフラストラクチャー: メッセージング・エンジンが配置されるクラスター 1 つで構成されます。 • サポート・インフラストラクチャー: ご使用のシステムの管理に使用される Common Event Infrastructure サーバーおよびその他のインフラストラクチャー・サービスをホスティングするクラスター 1 つで構成されます。
リモート・メッセージング	<ul style="list-style-type: none"> • アプリケーション・デプロイメントのターゲット: ユーザー・アプリケーションをデプロイする必要があるクラスター 1 つで構成されます。リモート・メッセージングのデプロイメント環境パターンを使用すると、アプリケーション・デプロイメントのターゲット・クラスターは、サポート・インフラストラクチャー・クラスターの機能も果たします。 • メッセージング・インフラストラクチャー: バス・メンバーが配置されている 1 つのクラスターから構成されます。
単一クラスター	<ul style="list-style-type: none"> • アプリケーション・デプロイメントのターゲット: ユーザー・アプリケーションをデプロイする必要があるクラスター 1 つで構成されます。単一クラスターのデプロイメント環境パターンを使用すると、アプリケーション・デプロイメントのターゲット・クラスターは、メッセージング・インフラストラクチャー・クラスターおよびサポート・インフラストラクチャー・クラスターの機能も果たします。

詳しくは、以下のトピックを参照してください。

- **トポロジー・タイプおよびデプロイメント環境パターン。** デプロイメント環境パターンは、デプロイメント環境に含まれるコンポーネントとリソースの制約と要件を指定します。 デプロイメント環境パターンは、お客様がデプロイメント環境を最も簡単な方法で作成できるように支援することを目的とし、大半のビジネス要件を満たせるように設計されています。
- **IBM が提供するデプロイメント環境パターンの機能。** 堅固なデプロイメント環境を設計するためには、各クラスターが特定の IBM 提供のデプロイメント

環境パターンまたはカスタム・デプロイメント環境に提供できる機能について理解しておく必要があります。この知識は、ニーズに最も合うデプロイメント環境パターンを正しく判別するのに役立ちます。

「データベースの構成」ページが表示されます。

3. 「データベース構成」ページで、以下の手順を実行します。
 - a. データベース製品を確認します。このカスタム・プロファイルの統合先のデプロイメント・マネージャーで使用されているデータベースと一致するデータベースが表示されます。

注: Derby Network Server、Derby Network Server 40、DB2 for i5/OS (ツールボックス)、および DB2 for IBM i (ツールボックス) には、ローカルとリモートの両方でアクセスできます。

- b. データベースの JDBC ドライバー・クラス・パス・ファイルのロケーション (ディレクトリ) を指定します。Derby Network Server、Derby Network Server 40、および DB2 Universal Database の各デフォルト値を受け入れることができます。
 - c. 「次へ」をクリックします。

「プロファイルの要約」ページが表示されます。

4. 「プロファイルの要約」ページで、「**拡張**」をクリックしてプロファイルを拡張するか、「**戻る**」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

プロファイルの拡張が完了すると、「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページに「**プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に拡張されました。**」というメッセージが表示されます。

重要: プロファイルの拡張中にエラーが検出された場合は、正常終了のメッセージの代わりに他のメッセージが表示される可能性があります。その例と意味は次のとおりです。

- 「**プロファイル管理ツールでプロファイルが拡張されましたが、エラーが発生しました**」: プロファイルの拡張が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「**プロファイル管理ツールでプロファイルを拡張できません**」: プロファイルの拡張が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile complete)」ページには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。

5. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、「**ファースト・ステップ・コンソールの起動**」が選択されていることを確認し、「**終了**」をクリックして終了します。また、別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページも閉じてください。ファースト・ステップ・コンソールを使用して、製品資料にアクセスします。

タスクの結果

以下のいずれかの作業が完了しました。

- WebSphere Application Server、WebSphere Application Server Network Deployment、または WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルの WebSphere Process Server プロファイルへの拡張。
- WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルの WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルへの拡張。

次のタスク

デプロイメント・マネージャーを使用して、ノードをカスタマイズします。割り当てられていないクラスター・メンバーがある場合は、カスタム・ノードをさらに追加することができます。

プロファイル管理ツールを使用した共通データベースおよび Common Event Infrastructure データベースの構成:

選択された WebSphere Process Server コンポーネントを操作するには、共通 データベースと Common Event Infrastructure ローカル・データベースというデータベースが必要になります。「データベース構成」ページで指定した値を使用すると、プロファイル管理ツールは自動的に共通データベースおよびスタンドアロン・サーバー・プロファイル用の Common Event Infrastructure データベースをローカル・システム上に作成します。さらに、必要なテーブルもすべて作成されます。インストール済み環境で実際に作業するには、これらのデータベースを構成する必要があります。

始める前に

この手順では、プロファイル管理ツールをすでに開始しており、「高度なプロファイル作成」または「デプロイメント環境プロファイル作成」あるいは「高度なプロファイル拡張」または「デプロイメント環境プロファイル拡張」オプションによって、プロファイルの作成または拡張を選択済みであることを前提とします。以下のうちいずれか 1 つのトピックの手順を実行します。

- 237 ページの『高度なスタンドアロン・サーバー・プロファイルの作成』
- 363 ページの『高度なスタンドアロン・サーバー・プロファイルの拡張』
- 252 ページの『高度なデプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成』
- 373 ページの『高度なデプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張』
- 260 ページの『デプロイメント環境のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成』

このトピックでは、「データベース構成」ページで実行する必要がある手順のステップを示します。

このタスクについて

以下の WebSphere Process Server コンポーネントは、共通データベースを使用しません。

- Application Scheduler
- ビジネス・ルール・グループ
- メディエーション
- リカバリー

- リレーションシップ・サービス
- セレクター
- イベント順序付け (ロック・マネージャー)
- Enterprise Service Bus ロガー・メディエーション・プリミティブ
- メッセージング・エンジン (ステップ 6 (290 ページ) で説明されている「メッセージング・エンジン (ME) ではこのデータベースを使用します。」チェック・ボックスを選択した場合)

Common Event Infrastructure コンポーネントは、Common Event Infrastructure データベースを使用します。

WebSphere Process Server 製品で使用される各種のデータベースおよびデータベース表について詳しくは、『データベースの選択』を参照してください。

重要: Derby Network Server または Derby Network Server 40 をデータベース製品として選択する場合、データベース・ホストがローカルの場合でも、サーバーがプロファイルの作成または拡張時に指定したホストとポートで稼働していることを確認してください。プロファイルを作成または拡張した後のみ、サーバーが実行中であることを確認できます。

手順

1. 「データベース製品の選択」フィールドで、使用するデータベース製品を選択するか、またはデフォルト値の Derby Embedded または Derby Embedded 40 (スタンドアロン・サーバー・プロファイル用)、あるいは Derby Network Server または Derby Network Server 40 (デプロイメント・マネージャー・プロファイル用) を受け入れます。

制約事項: Informix Dynamic Server、および Microsoft SQL Server は、デプロイメント環境構成を使用したデプロイメント・マネージャー上ではサポートされません。

2. プロファイル作成または拡張プロセスで作成されるデータベース作成および構成用のスクリプトを、デフォルト・ロケーション以外の場所に格納するには、「生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーのオーバーライド」チェック・ボックスを選択して、「データベース・スクリプトの出力ディレクトリー」フィールドに新しいロケーションを指定します。プロファイル作成または拡張プロセスによって作成されるスクリプトをユーザーまたはデータベース管理者が手動で実行すると、新規データベースとそれに必要なテーブルを作成することができます (プロファイルの作成または拡張時にこれらを作成しなかった場合)。このプロセスでは、すべてのプロファイル・タイプに使用される共通データベース用のスクリプトと、スタンドアロン・サーバー・プロファイルに使用される Common Event Infrastructure データベース用のスクリプトが作成されます。

データベース用のデフォルト・ロケーションは以下のとおりです。

- Common Event Infrastructure データベースの場合:

```
- Linux UNIX install_root/profiles/profile
name/dbscripts/CEI_ceiDbName
```

```
- Windows install_root%profiles%profile name%dbscripts%CEI_ceiDbName
```

- 共通データベースの場合:

- Linux UNIX `install_root/profiles/profile
name/dbscripts/CommonDB/dbType/dbName`
- Windows `install_root%profiles%profile
name%dbscripts%CommonDB%dbType%dbName`

選択したデータベース製品に対し、このページ内の「データベース・スクリプトの実行を遅延 (リモート・データベースを使用する場合は選択する必要がある)」チェック・ボックスを選択して、データベースの自動作成と自動構成を実行しないようにすることができます (ステップ 5 (290 ページ) の説明を参照)。

3. 共通データベース名を入力するか、またはデフォルト値を受け入れます。

独立補助ストレージ・プール (IASP: Independent Auxiliary Storage Pool) を使用する IBM i 上のデータベースの名前は、IASP という名前である可能性があります。

デフォルトの共通データベース名は、データベース製品に基づいて以下のように異なります。

- *SYSBAS for DB2 for i5/OS (ツールボックス) および DB2 for IBM i (ツールボックス)
- WPCRSDB 他のすべてのデータベース製品用

既存のデータベースを使用する場合は、この名前がそのデータベースの名前と一致していなければなりません。新規データベースを作成する場合、指定した名前が既に別の WebSphere Process Server プロファイルに関連付けられていた場合は、異なるデータベース名を使用する必要があります。

注: この制限は、IBM i には適用されません。IBM i 上のすべてのプロファイルで同じデータベース名が使用されます。

注: Oracle データベース名 (dbName) は Oracle ID (SID) です。テーブルを作成する際は、このデータベース名が存在している必要があります。スタンドアロン・サーバー・プロファイルの作成時には、それを共通データベースと Common Event Infrastructure データベース間で共有することができます。新規プロファイルを作成する前に、すべての Oracle データベース・リソースを削除することをお勧めします。これは、Common Event Infrastructure データベースによってテーブル・スペースなどの固有のデータベース・リソースが作成されるため、そのデータベース・リソースが Oracle サーバーに既に存在すると障害が発生してしまうためです。

4. **スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合のみ:** Common Event Infrastructure データベース名を入力するか、またはデフォルト値を受け入れます。

制約事項: このフィールドが表示されるのは、スタンドアロン・サーバー・プロファイルの作成時または拡張時のみです。

独立補助ストレージ・プール (IASP: Independent Auxiliary Storage Pool) を使用する IBM i 上のデータベースの名前は、IASP という名前である可能性があります。

デフォルトの Common Event Infrastructure データベース名は、データベース製品に基づいて以下のように異なります。

- *SYSBAS for DB2、i5/OS (ツールボックス)、および DB2 for IBM i (ツールボックス)
- orcl Oracle 用
- EVENT: 他のすべてのデータベース製品用。

既存のデータベースを使用する場合は、この名前がそのデータベースの名前と一致していなければなりません。新規データベースを作成する場合、指定した名前が既に別の WebSphere Process Server プロファイルに関連付けられていた場合は、異なるデータベース名を使用する必要があります。

注: この制限は、IBM i には適用されません。IBM i 上のすべてのプロファイルで同じデータベース名が使用されます。

5. 自動的にローカル・データベースが作成および構成されることも、プロファイルの作成または拡張時に既存のローカル・データベースに表が作成されることも望まない場合は、「データベース・スクリプトの実行を遅延 (リモート・データベースを使用する場合は選択する必要がある)」チェック・ボックスを選択します。このチェック・ボックスを選択しなかった場合は、ローカル・データベースが作成されます。このオプションを選択した場合は、ユーザーまたはデータベース管理者が、このページ上の「データベース・スクリプトの出力ディレクトリー」フィールドで指定された場所に格納されているスクリプトを手動で実行する必要があります。

手動によるデータベースの作成および構成手順については、以下のトピックを参照してください。

- 新規の共通データベースの作成、または既存のデータベース内のテーブルの作成については、492 ページの『プロファイルの作成後または拡張後の共通データベースとテーブルの作成』または 493 ページの『プロファイルの作成後または拡張後の共通データベースでのテーブルの作成』を参照してください。
- **スタンドアロン・サーバー・プロファイルのみの場合:** 新規の Common Event Infrastructure データベースの作成については、『データベース構成スクリプトの手動実行』を参照してください。

重要: 以下のディレクトリーにある共通データベース・スクリプトは使用しないでください (変数の `db_type` は、サポートされるデータベース製品を表します)。

- **Linux** **UNIX** `install_root/dbscripts/CommonDB/db_type`
- **Windows** `install_root¥dbscripts¥CommonDB¥db_type`

これらのデフォルト・スクリプトは、プロファイル作成または拡張プロセスによって更新されていません。

制約事項: 以下の構成の場合、「データベース・スクリプトの実行を遅延 (リモート・データベースを使用する場合は選択する必要がある)」オプションは選択できません。

- 任意のプロファイル・タイプに対して Derby Embedded、Derby Embedded 40、Derby Network Server、または Derby Network Server 40 製品を選択した場合。
- 「デプロイメント環境」オプションを使用して、デプロイメント・マネージャーを作成することを選択した場合。

次のステップは、スタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成または拡張する場合とデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成または拡張する場合とで異なります。

作成または拡張するプロファイルのタイプ	次のステップ
スタンドアロン・サーバー	ステップ 6 (290 ページ) に進んでください。
デプロイメント・マネージャー	ステップ 8 (291 ページ) に進んでください。

6. **スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合のみ:** メッセージング・エンジンでファイル・ストアを使用するには、「**メッセージング・エンジン (ME) ではファイル・ストアを使用します。(Use a file store for Messaging Engines (MEs))**」チェック・ボックスを選択します。このチェック・ボックスを選択すると、メッセージング・エンジンがファイル・ストア上に作成および構成されます (Common Event Infrastructure のメッセージング・エンジンを除きます。このメッセージング・エンジンでは、このオプションを選択しても、Derby Embedded または Derby Embedded 40 のローカル・データベースが使用されます)。このチェック・ボックスを選択せず、7 (291 ページ) のステップで説明されている「**メッセージング・エンジン (ME) でこのデータベースを使用する**」チェック・ボックスも選択しない場合は、メッセージング・エンジンは、デフォルトの Derby Embedded または Derby Embedded 40 データベース上に作成および構成されます。Derby Embedded または Derby Embedded 40 データベースは、リモート・ワークステーション上に作成することはできません。ファイル・ストアについては、WebSphere Application Server Network Deployment インフォメーション・センターの『ファイル・ストアの管理』を参照してください。
7. **スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合のみ:** 「**メッセージング・エンジン (ME) ではこのデータベースを使用します**」チェック・ボックスを選択して、メッセージング・エンジンで共通データベースを使用します。このチェック・ボックスを選択せず、6 (290 ページ) のステップで説明されている「**メッセージング・エンジン (ME) でこのファイル・ストアを使用する**」チェック・ボックスも選択しない場合は、メッセージング・エンジンは、デフォルトの Derby Embedded または Derby Embedded 40 データベース上に作成および構成されます。Derby Embedded または Derby Embedded 40 データベースは、リモート・ワークステーション上に作成することはできません。データ・ストアについては、WebSphere Application Server Network Deployment インフォメーション・センターの『データ・ストアの管理』を参照してください。

制約事項: このオプションは、Derby Embedded または Derby Embedded 40 製品を選んだ場合は選択できません。

制約事項: 共通データベースは、Informix 上のメッセージング・エンジンの構成には使用できません。共通データベースが Informix の場合は、スタンドアロン・プロファイルの作成に「**メッセージング・エンジン (ME) ではこのデータベースを使用します**」オプションを選択しないでください。

8. 「次へ」をクリックします。次のステップは、作成または拡張するプロファイルのタイプ、および選択したデータベース製品によって異なります。

作成または拡張するプロファイルのタイプ	次のステップ
<p>Derby Embedded または Derby Embedded 40 のデフォルト値を選択済みのスタンドアロン・サーバー・プロファイル。</p>	<p>「プロファイルの要約」ページが表示されます。トピック 237 ページの『高度なスタンドアロン・サーバー・プロファイルの作成』のステップ 15 (246 ページ) またはトピック 363 ページの『高度なスタンドアロン・サーバー・プロファイルの拡張』のステップ 9 (367 ページ) に戻ります。</p>
<p>Derby Embedded または Derby Embedded 40 以外のデータベース製品が選択されたスタンドアロン・サーバー・プロファイル。</p> <p>選択したデータベース製品のデプロイメント・マネージャー・プロファイル。</p>	<p>「データベース構成 (第 2 部)」ページが、選択したデータベース製品に固有のフィールドを伴って表示されます。このページでの入力方法については、292 ページの『「データベース構成 (その 2)」ページ』のトピックを参照してください。このページの情報入力が完了したら、「次へ」をクリックします。ツールにより、共通データベース用の有効な接続が存在することが確認されます。データベース接続が存在していない場合は、続行する前に、データベースを始動するか、指定したパラメーターを変更して、この問題を修正する必要があります。「プロファイルの要約」ページが表示されます。このパネルへのアクセス元のトピックに応じて、以下のいずれかの手順に戻ります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 237 ページの『高度なスタンドアロン・サーバー・プロファイルの作成』トピックのステップ 15 (246 ページ) • 363 ページの『高度なスタンドアロン・サーバー・プロファイルの拡張』トピックのステップ 9 (367 ページ) • 252 ページの『高度なデプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成』トピックのステップ 11 (259 ページ) • 373 ページの『高度なデプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張』トピックのステップ 5 (375 ページ) • 260 ページの『デプロイメント環境のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成』トピックのステップ 10 (267 ページ)

「データベース構成 (その 2)」ページ:

プロファイル管理ツールの「データベース構成」ページでデータベース製品を選択すると、「データベース構成 (その 2)」ページという後続のページにより、データベース固有の情報を入力するよう求められます。これに含まれるフィールドおよびデフォルト値は、選択したデータベース製品に応じて若干異なります。

「データベース構成」ページで、「データベース・スクリプトの実行を遅延」チェック・ボックスを選択して、新規データベースの作成または既存のデータベースへのテーブルの追加を先送りすることを選択する場合でも、このページの入力を行う必要があります。「データベース構成 (その 2)」ページで選択した値は、前のページの「データベース・スクリプトの出力ディレクトリー」フィールドで指定したディレクトリー内 (別のロケーションを指定しなかった場合はこれらのスクリプトのデフォルト・ディレクトリー内) に格納されたデータベース構成スクリプトに追加されます。

制約事項: DB2 for z/OS V8 または V9、または Oracle を使用している場合は、新規データベースを作成できません。このような場合、共通データベースが存在していなければならない、スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合は、Common Event Infrastructure データベースも存在する必要があります。このいずれかのデータベースを選択した場合、警告メッセージが出されて、この制約事項について注意を促します。

「データベース構成 (その 2)」ページに入力する方法を調べるには、ご使用のデータベース製品へのリンクを以下のリストから選択します。

- 293 ページの『Derby Embedded または Derby Embedded 40』
- 294 ページの『Derby Network Server または Derby Network Server 40』
- 294 ページの『DB2 Universal Database』
- 295 ページの『DB2 データ・サーバー』
- 296 ページの『DB2 for z/OS V8 および V9』
- 297 ページの『DB2 for i5/OS (ツールボックス) および DB2 for IBM i (ツールボックス)』
- 297 ページの『Informix Dynamic Server』
- 298 ページの『Microsoft SQL Server (DataDirect) および Microsoft SQL Server (Microsoft)』
- 299 ページの『Oracle』

「データベース構成 (その 2)」ページの入力が完了したら、「次へ」をクリックします。ツールにより、共通データベースへの有効な接続が存在することが確認されます。ツールでエラーが検出される場合は、データベースが稼働中であることを確認するか、接続を正常にするためにパラメーターを変更して、問題を訂正してから続行する必要があります。

「プロファイルの要約」ページが表示されます。このパネルへのアクセス元のトピックに応じて、以下のいずれかの手順に戻ります。

- 237 ページの『高度なスタンドアロン・サーバー・プロファイルの作成』トピックのステップ 15 (246 ページ)
- 363 ページの『高度なスタンドアロン・サーバー・プロファイルの拡張』トピックのステップ 9 (367 ページ)
- 252 ページの『高度なデプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成』トピックのステップ 11 (259 ページ)
- 373 ページの『高度なデプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張』トピックのステップ 5 (375 ページ)

- 260 ページの『デプロイメント環境のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成』トピックのステップ 10 (267 ページ)

Derby Embedded または Derby Embedded 40

294 ページの表 51 に、Derby Embedded または Derby Embedded 40 をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (その 2)」ページで入力しておく必要があるフィールドを示します。

重要: データベース製品として Derby Embedded または Derby Embedded 40 を選択する場合は、プロファイルの作成または拡張が完了した後、データベース・ホストがローカルの場合でも、プロファイルの作成中に指定したホストおよびポート上でサーバーが稼働するようにしてください。

表 116. Derby Embedded または Derby Embedded 40 の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
スキーマ名 (Schema name)	データベース・スキーマ名を入力してください。デフォルトは APP です。

Derby Network Server または Derby Network Server 40

294 ページの表 52 に、Derby Network Server または Derby Network Server 40 をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (その 2)」ページで入力しておく必要があるフィールドを示します。

重要: データベース製品として Derby Network Server または Derby Network Server 40 を選択した場合は、プロファイルの作成または拡張が完了した後、データベース・ホストがローカルの場合でも、プロファイルの作成中に指定したホストおよびポート上でサーバーが稼働するようにしてください。

表 117. Derby Network Server または Derby Network Server 40 の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 1527 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
スキーマ名 (Schema name)	データベース・スキーマ名を入力してください。デフォルトは APP です。

DB2 Universal Database

294 ページの表 53 に、DB2 Universal Database をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (その 2)」ページで入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 118. DB2 Universal Database の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	デフォルト値 (Linux および UNIX プラットフォームの場合は <code>install_root/universalDriver_wbi/lib</code> 、Windows プラットフォームの場合は <code>install_root%universalDriver_wbi%lib</code>) を受け入れるか、またはシステム上で次のファイルが置かれている場所を参照します。 <ul style="list-style-type: none">• <code>db2jcc.jar</code>• <code>db2jcc_license_cu.jar</code> または <code>db2jcc_license_cisuz.jar</code> 指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 <code>localhost</code> をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 <code>50000</code> をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
スキーマ名 (Schema name)	データベース・スキーマ名を入力してください。デフォルトは <code>WPRCDB</code> です。

DB2 データ・サーバー

295 ページの表 54 に、DB2 データ・サーバーをデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (その 2)」ページで入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 119. DB2 データ・サーバーの場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。

表 119. DB2 データ・サーバーの場合の必須のデータベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	<p>デフォルト値 (Linux および UNIX プラットフォームの場合は <code>install_root/universalDriver_wbi/lib</code>、Windows プラットフォームの場合は <code>install_root%universalDriver_wbi%lib</code>) を受け入れるか、またはシステム上で次のファイルが置かれている場所を参照します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • <code>db2jcc.jar</code> • <code>db2jcc_license_cu.jar</code> または <code>db2jcc_license_cisuz.jar</code> <p>指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。</p>
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	<p>デフォルト値 <code>localhost</code> をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。</p>
サーバー・ポート	<p>デフォルト値 <code>50000</code> をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。</p>
スキーマ名 (Schema name)	<p>データベース・スキーマ名を入力してください。デフォルトは <code>WPRCDB</code> です。</p>

DB2 for z/OS V8 および V9

296 ページの表 55 に、DB2 for z/OS V8 および V9 をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (その 2)」ページで入力しておく必要があるフィールドを示します。これらのデータベースを使用して新規データベースを作成することはできません。共通データベースが存在していなければならず、スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合は、Common Event Infrastructure データベースも存在する必要があります。

表 120. DB2 for z/OS V8 および V9 の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	<p>データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。</p>
データベース認証用のパスワード	<p>データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</p>
パスワードの確認	<p>パスワードを確認します。</p>
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	<p>以下のファイルが格納されているシステム上の場所を入力します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • <code>db2jcc.jar</code> • <code>db2jcc_license_cisuz.jar</code> <p>指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。</p>

表 120. DB2 for z/OS V8 および V9 の場合の必須のデータベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	データベース・サーバーのホスト名を入力してください。
サーバー・ポート	デフォルト値 446 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
データベースの別名	データベースの別名を入力してください。
接続のロケーション	接続のロケーションを入力してください。
ストレージ・グループ名	ストレージ・グループ名を入力してください。

DB2 for i5/OS (ツールボックス) および DB2 for IBM i (ツールボックス)

297 ページの表 56 に、DB2 for IBM i (ツールボックス) をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (その 2)」ページで入力しておく必要があるフィールドを示します。この選択は、DB2 for i5/OS (ツールボックス) の場合にも有効です。

表 121. DB2 for IBM i (ツールボックス) または DB2 for IBM i (ツールボックス) の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	デフォルト値 /QIBM/ProdData/HTTP/Public/jt400/lib を受け入れるか、またはシステム上で次のファイルが置かれている場所を参照します。 <ul style="list-style-type: none"> • jt400.jar 指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	データベース・サーバーのホスト名を入力してください。
データベース・コレクション名	デフォルト値 WPRCSDB をそのまま確定するか、正しいスキーマ名を入力します。指定したデータベース内で命名の競合を防止するために、スキーマ名を指定するときは、その先頭の 3 文字がデータベース内のその他のスキーマ名と重複しないようにしてください。

Informix Dynamic Server

298 ページの表 57 に、Informix Dynamic Server をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (その 2)」ページで入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 122. Informix Dynamic Server の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベース・サーバーのインストール・ディレクトリー	Informix データベースを使用している場合、データベース・インストール・ディレクトリーを指示します。
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	以下のファイルが格納されているシステム上の場所を入力します。 <ul style="list-style-type: none"> • ifxjdbc.jar • ifxjdbcx.jar 指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 1526 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
インスタンス名	正しいインスタンス名を入力してください。

Microsoft SQL Server (DataDirect) および Microsoft SQL Server (Microsoft)

298 ページの表 58 に、Microsoft SQL Server (DataDirect) または Microsoft SQL Server (Microsoft) をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (その 2)」ページで入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 123. Microsoft SQL Server DataDirect および Microsoft SQL Server (Microsoft) の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
CEI データベース・ユーザー名	CEI データベース・ユーザー名を入力してください。
CEI データベース・パスワード	CEI データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
共通データベースのユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。

表 123. Microsoft SQL Server DataDirect および Microsoft SQL Server (Microsoft) の場合の
 必須のデータベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
共通データベースのパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	<p>以下のファイルが格納されているシステム上の場所を入力します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • sqlserver.jar • base.jar • util.jar <p>また、ファイル spy.jar が、JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーションに対する次の相対ロケーションで使用可能である必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • Linux UNIX ../spy/spy.jar • Windows ..¥spy¥spy.jar <p>指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。</p>
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
データベース・サーバー名	データベース・サーバー名を入力してください。
サーバー・ポート	デフォルト値 1433 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
管理ユーザー名	データベースおよびユーザーの作成および除去の特権を持つユーザー ID を入力するか、デフォルト値「sa」を受け入れます。この ID は、前の画面で「データベース・スクリプトの実行の遅延」オプションを選択していない場合に必要になります。
パスワード	「管理ユーザー名」 ID ユーザーのパスワードを入力します。
パスワードの確認	パスワードを確認します。

Oracle

300 ページの表 59 に、Oracle をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (その 2)」ページで入力しておく必要があるフィールドを示します。このデータベースを使用して新規データベースを作成することはできません。

重要: プロファイルを作成する前に、SYSDBA 特権のあるユーザー ID を取得している必要があります。

表 124. Oracle の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベース・サーバーのインストール・ディレクトリー	データベース・サーバーのインストール先を入力するか、または参照します。前の画面で、「データベース・スクリプトの実行の遅延」オプションを選択していない場合に必要になります。
Business Space データベースのユーザー名	Business Space データベースのユーザー ID。このオプションは、BSpace が使用可能な場合にのみ表示されます。
Business Space データベースのパスワード	Business Space データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
CEI データベース・ユーザー名	Common Event Infrastructure データベースのユーザー ID。
CEI データベース・パスワード	Common Event Infrastructure データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
共通データベースのユーザー名	共通データベースのユーザー ID。
パスワード	共通データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	ファイル ojdbc6.jar が格納されているシステム上の場所を入力します。Oracle データベースにアクセスするには、ojdbc6.jar ドライバーをインストールする必要があります。 重要: Oracle 10g には、ojdbc6.jar ドライバーは含まれていません。このドライバーは Oracle の Web サイトからダウンロードできます。指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。
JDBC ドライバー・タイプ	OCI または Thin をクリックします。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 1521 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
システム管理者のユーザー名	データベースおよびユーザーの作成および除去の特権を持つユーザー ID を入力するか、デフォルト値「SYSUSER」を受け入れます。前の画面で、「データベース・スクリプトの実行の遅延」オプションを選択していない場合に必要になります。
パスワード	「管理ユーザー名」 ID ユーザーのパスワードを入力します。
パスワードの確認	パスワードを確認します。

最初の「データベース構成」画面で「メッセージング・エンジン (ME) でこのデータベースを使用する」を選択した場合、「データベース構成 (その 3)」ページが表示されます。301 ページの表 60 に、入力する必要があるフィールドを示します。

表 125. Oracle をメッセージング・エンジンと共に使用するための必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
Business Process Choreographer メッセージング・エンジン	
ユーザー名	Business Process Choreographer メッセージング・エンジン・ユーザー ID を入力します。このオプションは、BPC が使用可能な場合にのみ表示されます。
パスワード	ユーザー ID のパスワードを入力します。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
CEI バス・メッセージング・エンジン	
ユーザー名	CEI バス・メッセージング・エンジン・ユーザー ID を入力します。
パスワード	ユーザー ID のパスワードを入力します。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
SCA アプリケーション・バス・メッセージング・エンジン	
ユーザー名	SCA アプリケーション・バス・メッセージング・エンジン・ユーザー ID を入力します。
パスワード	ユーザー ID のパスワードを入力します。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
SCA システム・バス・メッセージング・エンジン	
ユーザー名	SCA システム・バス・メッセージング・エンジン・ユーザー ID を入力します。
パスワード	ユーザー ID のパスワードを入力します。
パスワードの確認	パスワードを確認します。

manageprofiles コマンド行ユーティリティーを使用したプロファイルの拡張

拡張は、拡張テンプレートで既存のプロファイルを変更する機能です。既存の WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment のプロファイルを、WebSphere Enterprise Service Bus または WebSphere Process Server のプロファイルに拡張できます。あるいは、WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルを WebSphere Process Server プロファイルに拡張することもできます。プロファイルは、コマンド行から manageprofiles コマンド行ユーティリティーを使用して拡張することができます。

始める前に

この手順を実行する前に、以下の作業が完了していることを確認してください。

- 221 ページの『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』で、プロファイルを作成または拡張するための前提条件リストを確認している。
- 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンした。
- スタンドアロン・サーバーまたはカスタム・プロファイルを拡張する場合は、それがデプロイメント・マネージャーにすでに統合されているかどうかを次の手順で判別します。
 - 拡張するプロファイルが既にデプロイメント・マネージャーに統合されている場合は、これを `manageprofiles` コマンド行ユーティリティを使用して拡張することはできません。
 - 拡張しようとするプロファイルがまだデプロイメント・マネージャーに統合されていない場合は、後から `addNode` コマンドを介してそのノードを統合するとき、拡張を正常に完了するためには、統合先のデプロイメント・マネージャーが以下の状態になっている必要があります。
 - 実行されていない必要があります。
 - 拡張するプロファイルのリリースと同レベルか、それよりも上位レベルでなければなりません。 WebSphere Process Server プロファイルは WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャーを使用できませんが、WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルは WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャーを使用できます。 WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルは、WebSphere Enterprise Service Bus または WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャー使用できます。
 - 使用可能な JMX 管理ポートが必要です。デフォルト・プロトコルは SOAP です。
 - インストールした製品に応じて、事前に WebSphere Process Server プロファイルに拡張しておかなければなりません。
- プロファイル拡張コマンドの例を 405 ページの『`manageprofiles` コマンド行ユーティリティによる Derby または DB2 データベースのプロファイルの拡張 - 例』または 412 ページの『`manageprofiles` コマンド行ユーティリティによる Oracle データベースのプロファイルの拡張 - 例』で確認している。
- 同じプロファイルで `manageprofiles` コマンド行ユーティリティを実行していないことを検査している。エラー・メッセージが表示された場合は、別のプロファイル作成操作や拡張操作が進行中かどうかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

この作業に必要なセキュリティのロール: 226 ページの『非 root ユーザーに対するファイルとディレクトリーの書き込み権限の、プロファイル作成のための付与』を参照してください。

`manageprofiles` コマンド行ユーティリティを使用してプロファイルを拡張するには、以下のステップを実行します。

手順

1. 既存のプロファイルの作成に使用された WebSphere Application Server テンプレート (`deployment manager`、`stand-alone` または `managed`) を判別します。プロファイルの作成に使用したテンプレートは、`install_root/properties/`

profileRegistry.xml のプロファイル・レジストリーを表示して判別できます。このファイルは変更しないでください。テンプレートを確認するだけにしてください。

2. 拡張先のテンプレートを探します。既存の WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルを、WebSphere Process Server または WebSphere ESB プロファイルに拡張できます。既存の WebSphere ESB プロファイルを WebSphere Process Server プロファイルに拡張できます。使用可能なプロファイル・テンプレートは次のとおりです。
 - default.wbiserver: WebSphere Process Server スタンドアロン・サーバー・プロファイル用で、スタンドアロン・サーバーを定義します。
 - dmgr.wbiserver: WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーを定義します。デプロイメント・マネージャーは、1 つ以上のワークステーション上にあるサーバーの論理グループに、1 つの管理インターフェースを提供します。
 - managed.wbiserver: WebSphere Process Server カスタム・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーにフェデレートされた場合、管理対象ノードを定義します。デプロイメント環境を必要とするソリューションを使用する場合は、ランタイム環境に 1 つ以上の管理対象ノードが必要になります。カスタム・プロファイルには、作動可能にするためにデプロイメント・マネージャー・セル内に統合する必要のある空のノードが含まれています。カスタム・プロファイルを統合すると、カスタム・プロファイルが管理対象ノードに変更されます。
 - default.esbserver: WebSphere Enterprise Service Bus スタンドアロン・サーバー・プロファイル用で、スタンドアロン・サーバーを定義します。
 - dmgr.esbserver: WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャー・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーを定義します。
 - managed.esbserver: WebSphere Enterprise Service Bus カスタム・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーにフェデレートされた場合、管理対象ノードを定義します。

拡張テンプレートを使用して既存のプロファイルに変更を加える場合は、augment パラメーターを使用します。augment パラメーターを使用すると、manageprofiles コマンド行ユーティリティは **-templatePath** パラメーターのテンプレートを使用して、**-profileName** パラメーターで指定されているプロファイルを更新または拡張します。使用できる拡張テンプレートは、どの IBM 製品のどのバージョンが環境にインストールされているかによって決まります。**-templatePath** パラメーターには必ず完全修飾ファイル・パスを指定してください。理由は、**-templatePath** パラメーターに相対ファイル・パスを指定すると、指定したプロファイルが完全に拡張されないためです。

注: `install_dir/profileTemplates` ディレクトリー内のファイルは手動で変更しないでください。

3. コマンド行からファイルを実行します。**-profilePath** パラメーターは使用しないでください。これらは単純な例です。より複雑な例については、405 ページの『manageprofiles コマンド行ユーティリティによる Derby または DB2 データ

ベースのプロファイルの拡張 - 例』または 412 ページの『manageprofiles コマンド行ユーティリティによる Oracle データベースのプロファイルの拡張 - 例』を参照してください。

- **Linux** **UNIX** `manageprofiles.sh -augment -templatePath install_root/profileTemplates/default.wbiserver -profileName MyProfileName`
- **Windows** `manageprofiles.bat -augment -templatePath install_root%profileTemplates%default.wbiserver -profileName MyProfileName`

応答ファイルを作成した場合は、**-response** パラメーターを使用して `-response myResponseFile` とします。

以下の例は拡張操作のための応答ファイルを示します。

```
augment
profileName=testResponseFileAugment
templatePath=install_root/profileTemplates/default.wbiserver

nodeName=myNodeName
cellName=myCellName
hostName=myHostName
omitAction=myOptionalAction1, myOptionalAction2
```

コマンドにより、実行につれて状況が表示されます。完了するまで待ってください。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

次のタスク

プロファイルの拡張が正常に終了したことは、「INSTCONFSUCCESS: プロファイルの拡張は正常に終了しました。」というメッセージまたは次のログ・ファイルで確認できます。

- **Linux** **UNIX** `install_root/logs/manageprofiles/profile_name_augment.log`
- **Windows** `install_root%logs%manageprofiles%profile_name_augment.log`
- **i5/OS プラットフォームの場合:** `user_data_root/profileRegistry/logs/manageprofiles/profile_name_augment.log`

インストール検査テスト (IVT) ツールを実行して、プロファイルが正常に拡張されたことを確認します。このためには、以下のコマンドを実行します。

- **i5/OS プラットフォームの場合:** `profile_root/bin/wbi_ivt`
- **Linux** **UNIX** **Linux および UNIX プラットフォーム:** `profile_root/bin/wbi_ivt.sh`
- **Windows** **Windows プラットフォーム:** `profile_root%bin%wbi_ivt.bat`

manageprofiles コマンド行ユーティリティによる **Derby** または **DB2** データベースのプロファイルの拡張 - 例:

インストール済み環境で `manageprofiles` コマンド行ユーティリティーを使用して、スタンドアロン・サーバー、デプロイメント・マネージャー、およびカスタム・プロファイルの拡張に役立つプロファイル拡張コマンドの例

スタンドアロン・サーバーのプロファイル

以下のコマンド例は、Windows サーバー上で WebSphere Process Server の機能を持つ、*AppServ04* と呼ばれる WebSphere Application Server スタンドアロン・サーバー・プロファイルを拡張します。表 126 および 407 ページの表 127 のパラメーターは以下を指定します。

- Derby Embedded または Derby Embedded 40 データベース製品は共通データベースおよび Common Event Infrastructure データベースの両方に使用でき、これらはプロファイル拡張プロセス中にローカル・ホストで作成および構成されるように設定されます。データベース関連の `manageprofiles` パラメーターの完全なリストは、トピック 333 ページの『共通データベース構成用の `manageprofiles` パラメーター (データベース製品ごと)』および 345 ページの『Common Event Infrastructure データベース構成の `manageprofiles` パラメーター (データベース製品ごと)』を参照してください。
- サンプルの Business Process Choreographer 実装環境は作成されません。
- ビジネス・ルール・マネージャーは構成されません。
- WebSphere が提供する Business Spaceは構成されません。
- 管理セキュリティはプロファイル作成プロセス中に使用可能になっていますが、プロセス拡張中に再指定されます。

表 126 は、スタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成するために使用する `manageprofiles` コマンド行ユーティリティー・パラメーターと値の例を示したものです。

表 126. 指定される `manageprofiles` コマンド行ユーティリティー・パラメーター

パラメーター	値
<code>-augment</code>	N/A
<code>-templatePath</code>	" <i>install_root</i> ¥profileTemplates¥default.wbiserver" (完全修飾されていることが必要)
<code>-profileName</code>	" <i>AppServ04</i> "
<code>-adminPassword</code>	" <i>admin_pwd</i> "
<code>-adminUserName</code>	" <i>admin_id</i> "
<code>-dbType</code>	"DERBY_EMBEDDED" "DERBY_EMBEDDED40"
<code>-dbUserId</code>	" <i>cei_id</i> "
<code>-dbPassword</code>	" <i>cei_pwd</i> "
<code>-ceiDbName</code>	"event"
<code>-dbDelayConfig</code>	"true"
<code>-ceiDbAlreadyConfigured</code>	"false"
<code>-configureBPC</code>	"false"
<code>-dbName</code>	"WPRCSDB"

表 126. 指定される *manageprofiles* コマンド行ユーティリティー・パラメーター (続き)

パラメーター	値
-dbCreateNew	"true"
-dbCommonForME	"false"
-fileStoreForME	"false" (-dbCommonForME が true の場合、true は不可)
-configureBSPACE	"false"
-configureBRM	"false"

表 127 は、通常では変更する必要のない *manageprofiles* コマンド行ユーティリティー・パラメーターとデフォルト値を示したものです。

表 127. デフォルトの *manageprofiles* コマンド行ユーティリティー・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
-dbOutputScriptDir	"install_root¥profiles¥AppServ04¥dbscripts¥CommonDB¥Derby¥WPRCSDB"
-dbOutputscriptDir	"install_root¥profiles¥AppServ04¥dbscripts¥CEI_event"

WebSphere Enterprise Service Bus の例

以下は、WebSphere Enterprise Service Bus の機能を持つ *AppServ03* と呼ばれる WebSphere Application Server スタンドアロン・サーバー・プロファイルを拡張する類似した例です。

表 128 は、スタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成するために使用する *manageprofiles* コマンド行ユーティリティー・パラメーターと値の例を示したものです。

表 128. 指定される *manageprofiles* コマンド行ユーティリティー・パラメーター

パラメーター	値
-augment	N/A
-templatePath	"install_root¥profileTemplates¥default.esbserver" (完全修飾されていることが必要)
-profileName	"AppServ03"
-adminPassword	"admin_pwd"
-adminUserName	"admin_id"
-dbType	"DERBY_EMBEDDED" "DERBY_EMBEDDED40"
-dbUserId	"cei_id"
-dbPassword	"cei_pwd"
-ceiDbName	"event"
-dbDelayConfig	"true"
-ceiDbAlreadyConfigured	"false"
-dbName	"WPRCSDB"

表 128. 指定される *manageprofiles* コマンド行ユーティリティー・パラメーター (続き)

パラメーター	値
-dbCreateNew	"true"
-dbCommonForME	"false"
-fileStoreForME	"false" (-dbCommonForME が true の場合、true は不可)
-configureBSPACE	"false"

表 129 は、通常では変更する必要のない *manageprofiles* コマンド行ユーティリティー・パラメーターとデフォルト値を示したものです。

表 129. デフォルトの *manageprofiles* コマンド行ユーティリティー・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
-dbOutputScriptDir	"install_root\profiles\%AppServ03\%dbscripts \%CommonDB\%Derby\%WPRCSDB"
-dbOutputscriptDir	"install_root\profiles\%AppServ03\%dbscripts \%CEI_event"

デプロイメント・マネージャー・プロファイル (デプロイメント環境のセットアップなし)

以下のコマンド例は、Windows サーバー上で WebSphere Process Server の機能を持つ、*Dmgr02* と呼ばれる WebSphere Application Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張します。表 130 および 409 ページの表 131 のパラメーターは以下を指定します。

- Derby Network Server または Derby Network Server 40 データベース製品は共通データベースに使用できます。これはプロファイル拡張プロセス中にローカル・ホストで作成および構成されるように設定されます。データベース関連の *manageprofiles* パラメーターの完全なリストは、トピック 333 ページの『共通データベース構成用の *manageprofiles* パラメーター (データベース製品ごと)』を参照してください。
- 管理セキュリティはプロファイル作成プロセス中に使用可能になっていますが、プロセス拡張中に再指定されます。

表 130 は、デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成するために使用する *manageprofiles* コマンド行ユーティリティー・パラメーターと値の例を示したものです。

表 130. 指定される *manageprofiles* コマンド行ユーティリティー・パラメーター

パラメーター	値
-augment	N/A
-templatePath	"install_root \profileTemplates\%dmgr.wbiserver" (完全修飾されていることが必要)
-profileName	"Dmgr02"
-adminPassword	"admin_pwd"
-adminUserName	"admin_id"

表 130. 指定される *manageprofiles* コマンド行ユーティリティー・パラメーター (続き)

パラメーター	値
-ndtopology	"false" (デプロイメント環境の構成はプロファイル拡張中はサポートされません)
-dbType	"DERBY_NETWORKSERVER" "DERBY_NETWORKSERVER40"
-dbName	"WPRCSDB"
-dbCreateNew	"true"
-dbDelayConfig	"false"
-dbHostName	"localhost"
-dbUserId	"db_id"
-dbPassword	"db_pwd"
-dbServerPort	"1528"

表 131 は、通常では変更する必要のない *manageprofiles* コマンド行ユーティリティー・パラメーターとデフォルト値を示したものです。

表 131. デフォルトの *manageprofiles* コマンド行ユーティリティー・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
-dbOutputScriptDir	"install_root¥profiles¥Dmgr02¥dbscripts ¥CommonDB¥Derby¥WPRCSDB"

WebSphere Enterprise Service Bus の例

以下は、WebSphere Enterprise Service Bus 機能を持つ *Dmgr04* と呼ばれる WebSphere Application Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張する類似した例です。

表 132 は、デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成するために使用する *manageprofiles* コマンド行ユーティリティー・パラメーターと値の例を示したものです。

表 132. 指定される *manageprofiles* コマンド行ユーティリティー・パラメーター

パラメーター	値
-augment	N/A
-templatePath	"install_root ¥profileTemplates¥dmgr.esbserver" (完全修飾されていることが必要)
-profileName	"Dmgr04"
-adminPassword	"admin_pwd"
-adminUserName	"admin_id"
-ndtopology	"false" (デプロイメント環境の構成はプロファイル拡張中はサポートされません)
-dbType	"DERBY_NETWORKSERVER" "DERBY_NETWORKSERVER40"
-dbName	"WPRCSDB"
-dbCreateNew	"true"

表 132. 指定される *manageprofiles* コマンド行ユーティリティー・パラメーター (続き)

パラメーター	値
-dbDelayConfig	"false"
-dbHostName	"localhost"
-dbUserId	"db_id"
-dbPassword	"db_pwd"
-dbServerPort	"1529"

表 133 は、通常では変更する必要のない *manageprofiles* コマンド行ユーティリティー・パラメーターとデフォルト値を示したものです。

表 133. デフォルトの *manageprofiles* コマンド行ユーティリティー・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
-dbOutputScriptDir	"install_root¥profiles¥Dmgr04¥dbscripts ¥CommonDB¥Derby¥WPRCSDB"

カスタム・プロファイル (デプロイメント環境のセットアップなし)

以下のコマンド例は、Windows サーバー上で WebSphere Process Server の機能を持つ、*Custom21* と呼ばれる WebSphere Application Server カスタム・プロファイルを拡張します。この例は、上で作成されたデプロイメント・マネージャー・プロファイルと一緒に動作するように設定されています。

表 134 のパラメーターは以下を指定します。

- Derby Network Server または Derby Network Server 40 データベース製品は共通データベース用に使用されます。これは既に存在すると想定されています。カスタム・プロファイルの作成では、カスタム・プロファイルの統合先のデプロイメント・マネージャーによって使用されるデータベースを指し示す必要があります。データベース関連の *manageprofiles* パラメーターの完全なリストは、トピック 333 ページの『共通データベース構成用の *manageprofiles* パラメーター (データベース製品ごと)』を参照してください。
- 管理セキュリティは、カスタム・プロファイルの統合先のデプロイメント・マネージャー上で有効になります。

すべての有効な *manageprofiles* パラメーターのリストについては、446 ページの『*manageprofiles* パラメーター』を参照してください。

表 134 は、カスタム・プロファイルを作成するために使用する *manageprofiles* コマンド行ユーティリティー・パラメーターと値の例を示したものです。

表 134. 指定される *manageprofiles* コマンド行ユーティリティー・パラメーター

パラメーター	値
-augment	N/A
-templatePath	"install_root ¥profileTemplates¥managed.wbiserver" (完全修飾されていることが必要)
-profileName	"Custom21"

表 134. 指定される *manageprofiles* コマンド行ユーティリティー・パラメーター (続き)

パラメーター	値
-dmgrHost	"localhost"
-dmgrPort	"8903" (-dmgrPort の値を見つけるには、このカスタム・プロファイルに関連付けられたデプロイメント・マネージャーの <i>dmgr_profile_root</i> ¥logs ディレクトリーに移動します。このディレクトリーで AboutThisProfile.txt ファイルを開き、「Deployment manager SOAP connector port:」の項目から値を見つけます。)
-dmgrAdminPassword	"admin_pwd"
-dmgrAdminUserName	"admin_id"
-ndtopology	"false"
-dbType	"DERBY_NETWORKSERVER" "DERBY_NETWORKSERVER40"
-dbJDBCClasspath	"install_root¥derby¥lib"

WebSphere Enterprise Service Bus の例

以下は、WebSphere Enterprise Service Bus の機能を持つ、*Custom05* と呼ばれる WebSphere Application Server カスタム・プロファイルを拡張する類似した例です。

表 135 は、カスタム・プロファイルを作成するために使用する *manageprofiles* コマンド行ユーティリティー・パラメーターと値の例を示したものです。

表 135. 指定される *manageprofiles* コマンド行ユーティリティー・パラメーター

パラメーター	値
-augment	N/A
-templatePath	"install_root ¥profileTemplates¥managed.esbserver" (完全修飾されていることが必要)
-profileName	"Custom05"
-dmgrHost	"localhost"
-dmgrPort	"8902" (-dmgrPort の値を見つけるには、このカスタム・プロファイルに関連付けられたデプロイメント・マネージャーの <i>dmgr_profile_root</i> ¥logs ディレクトリーに移動します。このディレクトリーで AboutThisProfile.txt ファイルを開き、「Deployment manager SOAP connector port:」の項目から値を見つけます。)
-dmgrAdminPassword	"admin_pwd"
-dmgrAdminUserName	"admin_id"
-ndtopology	"false"
-dbType	"DERBY_NETWORKSERVER" "DERBY_NETWORKSERVER40"

表 135. 指定される *manageprofiles* コマンド行ユーティリティ・パラメーター (続き)

パラメーター	値
-dbJDBCClasspath	"install_root¥derby¥lib"

manageprofiles コマンド行ユーティリティによる Oracle データベースのプロファイルの拡張 - 例:

インストール済み環境で *manageprofiles* コマンド行ユーティリティを使用した、スタンドアロン・サーバーおよびデプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張に役立つプロファイル拡張コマンドの例。

スタンドアロン・サーバーのプロファイル

以下のコマンド例は、Windows サーバー上で WebSphere Process Server の機能を持つ、*AppServ04* と呼ばれる WebSphere Application Server スタンドアロン・サーバー・プロファイルを拡張します。表 136、413 ページの表 137、および 413 ページの表 138 のパラメーターは以下を指定します。

- Oracle データベース製品は共通データベースおよび Common Event Infrastructure データベースの両方に使用でき、これらは両方ともローカル・ホストに既に存在すると想定されています。両方のデータベースは後で構成するように設定されています (**-dbDelayConfig "true"** のコマンド・パラメーター値は、構成スクリプトは作成されますが実行されないことを指定します)。データベース関連の *manageprofiles* パラメーターの完全なリストは、トピック 333 ページの『共通データベース構成用の *manageprofiles* パラメーター (データベース製品ごと)』および 345 ページの『Common Event Infrastructure データベース構成の *manageprofiles* パラメーター (データベース製品ごと)』を参照してください。
- サンプルの Business Process Choreographer 構成が作成されます。
- ビジネス・ルール・マネージャーは構成されません。
- WebSphere が提供する Business Spaceは構成されません。
- 管理セキュリティはプロファイル作成プロセス中に使用可能になっていますが、プロセス拡張中に再指定されます。

表 136 は、スタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成するために使用する *manageprofiles* コマンド行ユーティリティ・パラメーターと値の例を示したものです。

表 136. 指定される *manageprofiles* コマンド行ユーティリティ・パラメーター

パラメーター	値
-augment	N/A
-templatePath	"install_root ¥profileTemplates¥default.wbiserver" (完全修飾されていることが必要)
-profileName	"AppServ04"
-adminPassword	"admin_pwd"
-adminUserName	"admin_id"
-configureBPC	"true"
-dbType	"ORACLE"

表 136. 指定される *manageprofiles* コマンド行ユーティリティ・パラメーター (続き)

パラメーター	値
-dbName	"WPRCSDB"
-ceiDbName	"EVENT"
-dbDelayConfig	"true"
-fileStoreForME	"false" (-dbCommonForME が true の場合、true は不可)
-dbCommonForME	"true"
-dbPassword	"db_pwd"
-dbDriverType	"oracle_thin"
-dbJDBCClasspath	"oracle_library_directory"
-dbServerPort	"1521"
-configureBspace	"false"
-configureBRM	"false"

表 137 は、通常では変更する必要のない *manageprofiles* コマンド行ユーティリティ・パラメーターとデフォルト値を示したものです。

表 137. デフォルトの *manageprofiles* コマンド行ユーティリティ・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
-dbOutputScriptDir	"install_root%\profiles¥AppServ04¥dbscripts¥"
-dbHostName	"local_host_name"

表 138 に示すのは、プロファイル管理ツールを通じて表示されない追加の *manageprofiles* コマンド行ユーティリティ・パラメーターで、ユーザー自身の Oracle 用ユーザー名およびパスワードの組み合わせを選択するように指定することが可能です。

表 138. Oracle 用追加 *manageprofiles* コマンド行ユーティリティ・パラメーター

パラメーター	デフォルト値	注釈
-dbSysUserId	"sys_user_id"	この ID は SYSDBA 特権を持つ必要があります。Oracle の内部ユーザー 'sys' は使用しないでください。 このパラメーターは、プロファイル作成中 (dbDelayConfig = "FALSE" のとき)、データベースおよびそのオブジェクトを構成する場合に必要です。
-dbSysPassword	"sys_pwd"	このパラメーターは、プロファイル作成中 (dbDelayConfig = "FALSE" のとき)、データベースおよびそのオブジェクトを構成する場合に必要です。
-dbCommonUserId	"common_db_userID" (共通 DB オブジェクトの作成に使用)	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、このユーザーは Oracle データベース名に基づいて自動的に作成されます (SID)。例: SID が ORCL の場合、dbCommonUserId は ORCCOMM。

表 138. Oracle 用追加 *manageprofiles* コマンド行ユーティリティ・パラメーター (続き)

パラメーター	デフォルト値	注釈
-dbCommonPassword	"common_db_pwd"	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。 「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、dbCommonPassword は dbPassword に設定されます。例: dbCommonPassword = dbPassword
-dbBspaceUserId	"bspace_db_userID" (Business Space の構成に使用)	このパラメーターは、ユーザー独自の Business Space スキーマが必要な場合に必要です。指定されない場合、デフォルト値 (IBMBUSSP) が設定されます。
-dbBspacePassword	"bspace_db_pwd" (Business Space の構成に使用)	このパラメーターは、独自の Business Space パスワードが必要な場合に必要です。それ以外の場合は、dbBspacePassword = "YouNameIt" でなければ dbBspacePassword = dbPassword (存在する場合)、そうでなければ dbBspacePassword = IBMBUSSP、という順序でデフォルト値が設定されます。
-dbCeiUserId	"cei_userID" (CEI オブジェクトの作成に使用)	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。 「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、このユーザーは Oracle データベース名に基づいて自動的に作成されます (SID)。例: SID が ORCL の場合、dbCeiUserId は ORCCEID。
-dbCeiPassword	"cei_db_pwd"	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。 「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、dbCeiPassword は dbPassword に設定されます。例: dbCeiPassword = dbPassword
	下のすべてのパラメーターは、-dbCommonForME = "true" の場合のみ有効です。	
-dbBPCMeUserId	"bpc_me_userID" (BPC ME オブジェクトの作成に使用) (-configureBPC = "true" の場合のみ有効)	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。 「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、このユーザーは Oracle データベース名に基づいて自動的に作成されます (SID)。例: SID が ORCL の場合、dbBPCMeUserId は ORCBM00。

表 138. Oracle 用追加 *manageprofiles* コマンド行ユーティリティ・パラメーター (続き)

パラメーター	デフォルト値	注釈
-dbBPCMePassword	"bpc_me_pwd" (-configureBPC = "true" の場合にのみ有効)	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。 「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、dbCeiPassword は dbPassword に設定されます。例: dbBPCMePassword = dbPassword
-dbCeiMeUserId	"cei_me_userID" (CEI ME オブジェクトの作成に使用)	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。 「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、このユーザーは Oracle データベース名に基づいて自動的に作成されます (SID)。例: SID が ORCL の場合、dbCeiMeId は ORCCM00。
-dbCeiMePassword	"cei_me_pwd"	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。 「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、dbCeiPassword は dbPassword に設定されます。例: dbCeiMePassword = dbPassword
-dbAppMeUserId	"app_me_userID" (SCAAPP ME オブジェクトの作成に使用)	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。 「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、このユーザーは Oracle データベース名に基づいて自動的に作成されます (SID)。例: SID が ORCL の場合、dbAppMeId は ORCSA00。
-dbAppMePassword	"app_me_pwd"	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。 「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、dbCeiPassword は dbPassword に設定されます。例: dbAppMePassword = dbPassword

表 138. Oracle 用追加 *manageprofiles* コマンド行ユーティリティ・パラメーター (続き)

パラメーター	デフォルト値	注釈
-dbSysMeUserId	"sys_me_userID" (SCASYS ME オブジェクトの作成に使用)	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。 「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、このユーザーは Oracle データベース名に基づいて自動的に作成されます (SID)。例: SID が ORCL の場合、dbSysMeUserId は ORCSS00。
-dbSysMePassword	"sys_me_pwd"	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。 「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、dbCeiPassword は dbPassword に設定されます。例: dbAppMePassword = dbPassword

WebSphere Enterprise Service Bus の例

以下は、WebSphere Enterprise Service Bus の機能を持つ *AppServ03* と呼ばれる WebSphere Application Server スタンドアロン・サーバー・プロファイルを拡張する類似した例です。違いは、データベースを直ちに構成するように設定されていることです (-dbDelayConfig "false" のコマンド・パラメーター値は、構成スクリプトが実行されることを指定します)。

表 139 は、スタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成するために使用する *manageprofiles* コマンド行ユーティリティ・パラメーターと値の例を示したものです。

表 139. 指定される *manageprofiles* コマンド行ユーティリティ・パラメーター

パラメーター	値
-augment	N/A
-templatePath	"install_root ¥profileTemplates¥default.esbserver" (完全修飾されていることが必要)
-profileName	"AppServ03"
-adminPassword	"admin_pwd"
-adminUserName	"admin_id"
-dbType	"ORACLE"
-dbName	"WPRCSDB"
-ceiDbName	"EVENT"
-dbDelayConfig	"false"
-fileStoreForME	"false" (-dbCommonForME が true の場合、true は不可)
-dbCommonForME	"true"

表 139. 指定される *manageprofiles* コマンド行ユーティリティ・パラメーター (続き)

パラメーター	値
-dbLocation	"oracle_install_directory"
-dbPassword	"db_pwd"
-dbDriverType	"oracle_thin"
-dbJDBCClasspath	"oracle_library_directory"
-dbServerPort	"1521"
-dbSysUserId	"sys_user_id"
-dbSysPassword	"sys_pwd"
-configureBSpace	"false"

表 140 は、通常では変更する必要のない *manageprofiles* コマンド行ユーティリティ・パラメーターとデフォルト値を示したものです。

表 140. デフォルトの *manageprofiles* コマンド行ユーティリティ・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
-dbOutputScriptDir	"install_root¥profiles¥AppServ03¥dbscripts¥"
-dbHostName	"local_host_name"

表 141 に示すのは、プロファイル管理ツールを通じて表示されない追加の *manageprofiles* コマンド行ユーティリティ・パラメーターで、ユーザー自身の Oracle 用ユーザー名およびパスワードの組み合わせを選択するように指定することが可能です。

表 141. Oracle 用追加 *manageprofiles* コマンド行ユーティリティ・パラメーター

パラメーター	デフォルト値	注釈
-dbCommonUserId	"common_db_userID" (共通 DB オブジェクトの作成に使用)	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、このユーザーは Oracle データベース名に基づいて自動的に作成されます (SID)。例: SID が ORCL の場合、dbCommonUserId は ORCCOMM。
-dbCommonPassword	"common_db_pwd"	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。 「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、dbCommonPassword は dbPassword に設定されます。例: dbCommonPassword = dbPassword
-dbBSpaceUserId	"bspace_db_userID" (Business Space の構成に使用)	このパラメーターは、ユーザー独自の Business Space スキーマが必要な場合に必要です。指定されない場合、デフォルト値 (IBMBUSSP) が設定されます。

表 141. Oracle 用追加 *manageprofiles* コマンド行ユーティリティ・パラメーター (続き)

パラメーター	デフォルト値	注釈
-dbBspacePassword	" <i>bospace_db_pwd</i> " (Business Space の構成に使用)	このパラメーターは、独自の Business Space パスワードが必要な場合に必要です。それ以外の場合は、dbBspacePassword = "YouNameIt" でなければ dbBspacePassword = dbPassword (存在する場合)、そうでなければ dbBspacePassword = IBMBUSSP、という順序でデフォルト値が設定されます。
-dbCeiUserId	" <i>cei_userID</i> " (CEI オブジェクトの作成に使用)	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。 「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、このユーザーは Oracle データベース名に基づいて自動的に作成されます (SID)。例: SID が ORCL の場合、dbCeiUserId は ORCCEID。
-dbCeiPassword	" <i>cei_db_pwd</i> "	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。 「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、dbCeiPassword は dbPassword に設定されます。例: dbCeiPassword = dbPassword
	下のすべてのパラメーターは、-dbCommonForME = "true" の場合のみ有効です。	
-dbCeiMeUserId	" <i>cei_me_userID</i> " (CEI ME オブジェクトの作成に使用)	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。 「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、このユーザーは Oracle データベース名に基づいて自動的に作成されます (SID)。例: SID が ORCL の場合、dbCeiMeId は ORCCM00。
-dbCeiMePassword	" <i>cei_me_pwd</i> "	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。 「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、dbCeiPassword は dbPassword に設定されます。例: dbCeiMePassword = dbPassword

表 141. Oracle 用追加 *manageprofiles* コマンド行ユーティリティ・パラメーター (続き)

パラメーター	デフォルト値	注釈
-dbAppMeUserId	" <i>app_me_userID</i> " (SCAAPP ME オブジェクトの作成に使用)	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。 「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、このユーザーは Oracle データベース名に基づいて自動的に作成されます (SID)。例: SID が ORCL の場合、dbAppMeId は ORCSA00。
-dbAppMePassword	" <i>app_me_pwd</i> "	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。 「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、dbCeiPassword は dbPassword に設定されます。例: dbAppMePassword = dbPassword
-dbSysMeUserId	" <i>sys_me_userID</i> " (SCASYS ME オブジェクトの作成に使用)	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。 「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、このユーザーは Oracle データベース名に基づいて自動的に作成されます (SID)。例: SID が ORCL の場合、dbSysMeUserId は ORCSS00。
-dbSysMePassword	" <i>sys_me_pwd</i> "	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。 「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、dbCeiPassword は dbPassword に設定されます。例: dbAppMePassword = dbPassword

デプロイメント・マネージャー・プロファイル (デプロイメント環境のセットアップなし)

以下のコマンド例は、Windows サーバー上で WebSphere Process Server の機能を持つ、*Dmgr02* と呼ばれる WebSphere Application Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張します。420 ページの表 142 および 420 ページの表 143 のパラメーターは以下を指定します。

- Oracle データベース製品は共通データベース用に使用されますが、これはリモート・ホスト上に存在すると想定されています。データベースは後で構成するように設定されています (-dbDelayConfig "true" のコマンド・パラメーター値は、構成スクリプトは作成されますが実行されないことを指定します)。データベース関連

の `manageprofiles` パラメーターの完全なリストは、トピック 333 ページの『共通データベース構成用の `manageprofiles` パラメーター (データベース製品ごと)』を参照してください。

- 管理セキュリティはプロファイル作成プロセス中に使用可能になっていますが、プロセス拡張中に再指定されます。

表 142 は、デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成するために使用する `manageprofiles` コマンド行ユーティリティー・パラメーターと値の例を示したものです。

表 142. 指定される `manageprofiles` コマンド行ユーティリティー・パラメーター

パラメーター	値
<code>-augment</code>	N/A
<code>-templatePath</code>	" <code>install_root</code> ¥profileTemplates¥dmgr.wbiserver" (完全修飾されていることが必要)
<code>-profileName</code>	" <code>Dmgr02</code> "
<code>-adminPassword</code>	" <code>admin_pwd</code> "
<code>-adminUserName</code>	" <code>admin_id</code> "
<code>-ndtopology</code>	"false" (デプロイメント環境の構成はプロファイル拡張中はサポートされません)
<code>-dbType</code>	"ORACLE"
<code>-dbName</code>	"WPRCSDB"
<code>-dbDelayConfig</code>	"true"
<code>-dbPassword</code>	" <code>db_pwd</code> "
<code>-dbDriverType</code>	"oracle_thin"
<code>-dbHostName</code>	" <code>remote_host_name</code> "
<code>-dbJDBCClasspath</code>	" <code>oracle_library_directory</code> "
<code>-dbServerPort</code>	"1521"

表 143 は、通常では変更する必要のない `manageprofiles` コマンド行ユーティリティー・パラメーターとデフォルト値を示したものです。

表 143. デフォルトの `manageprofiles` コマンド行ユーティリティー・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
<code>-dbOutputScriptDir</code>	" <code>install_root</code> ¥profiles¥Dmgr02¥dbscripts¥"

WebSphere Enterprise Service Bus の例

以下は、WebSphere Enterprise Service Bus 機能を持つ `Dmgr04` と呼ばれる WebSphere Application Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張する類似した例です。違いは、データベースを直ちに構成するように設定されていることです (`-dbDelayConfig "false"` のコマンド・パラメーター値は、構成スクリプトが実行されることを指定します)。

表 144 は、デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成するために使用する `manageprofiles` コマンド行ユーティリティー・パラメーターと値の例を示したものです。

表 144. 指定される `manageprofiles` コマンド行ユーティリティー・パラメーター

パラメーター	値
<code>-augment</code>	N/A
<code>-templatePath</code>	" <i>install_root</i> %profileTemplates%dmgr.esbserver" (完全修飾されていることが必要)
<code>-profileName</code>	"Dmgr04"
<code>-adminPassword</code>	"admin_pwd"
<code>-adminUserName</code>	"admin_id"
<code>-ndtopology</code>	"false" (デプロイメント環境の構成はプロファイル拡張中はサポートされません)
<code>-dbType</code>	"ORACLE"
<code>-dbName</code>	"WPRCSDB"
<code>-dbDelayConfig</code>	"false"
<code>-dbLocation</code>	"oracle_install_directory"
<code>-dbPassword</code>	"db_pwd"
<code>-dbDriverType</code>	"oracle_thin"
<code>-dbHostName</code>	"remote_host_name"
<code>-dbJDBCClasspath</code>	"oracle_library_directory"
<code>-dbServerPort</code>	"1521"
<code>-dbSysUserId</code>	"sys_user_id"
<code>-dbSysPassword</code>	"sys_pwd"

表 145 は、通常では変更する必要のない `manageprofiles` コマンド行ユーティリティー・パラメーターとデフォルト値を示したものです。

表 145. デフォルトの `manageprofiles` コマンド行ユーティリティー・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
<code>-dbOutputScriptDir</code>	" <i>install_root</i> %profiles%Dmgr04%dbscripts%"

共通データベース構成用の `manageprofiles` パラメーター (データベース製品ごと):

共通データベースを構成するには、特定の `manageprofiles` コマンド行ユーティリティー・パラメーターを使用します。指定するパラメーターは、使用中のデータベース製品と、作成するプロファイルの型によって異なることがあります。

このトピックの表には、サポートされるあらゆるデータベース製品を使用して共通データベースを構成するために使用可能な `manageprofiles` パラメーターが示されています。共通データベース構成に関連付けられたパラメーターには、一般的に接頭部「**-db**」が付いています (例えば **-dbType**、および **-dbDelayConfig**)。また、これらのパラメーターがプロファイル管理ツールで表示される際の、相当するフィールド名も示します。

manageprofiles パラメーターの完全なリスト (デフォルト値を含む) については、446 ページの『manageprofiles パラメーター』というトピックを参照してください。いろいろなタイプのプロファイルを作成または拡張するために使用する manageprofiles コマンドの例は、トピック 304 ページの『manageprofiles コマンド行ユーティリティーによる Derby または DB2 データベースのプロファイルの作成 - 例』および 405 ページの『manageprofiles コマンド行ユーティリティーによる Derby または DB2 データベースのプロファイルの拡張 - 例』で見ることができます。

データベース構成に使用できるパラメーターを表示するには、以下のリストからデータベース製品を選択してください。

- 334 ページの『Derby Embedded または Derby Embedded 40 の場合』
- 334 ページの『Derby Network Server または Derby Network Server 40 の場合』
- 336 ページの『DB2 Universal の場合』
- 337 ページの『DB2 データ・サーバー』
- 338 ページの『DB2 for IBM i (ツールボックス) および DB2 for i5/OS (ツールボックス) の場合』
- 339 ページの『DB2 for z/OS v8 および DB2 for z/OS v9 の場合』
- 341 ページの『Oracle』
- 342 ページの『Informix Dynamic Server の場合』
- 343 ページの『Microsoft SQL Server の場合』

カスタム・プロファイルで使用できるパラメーターは、**-dbType** と **-dbJDBCClasspath** だけです。これは、カスタム・プロファイルの統合先のデプロイメント・マネージャーで使用される共通データベースのタイプおよびドライバの場所を識別するだけだからです。

Derby Embedded または Derby Embedded 40 の場合

334 ページの表 97 には、Derby Embedded または Derby Embedded 40 でスタンドアロン・サーバー・プロファイルによって使用される共通データベースを構成するために使用可能な manageprofiles パラメーターが示されています。

表 146. 共通データベースの構成に使用できる manageprofiles パラメーター (Derby Embedded または Derby Embedded 40 を使用)

パラメーター	プロファイル管理ツールの「データベース構成」ページに表示される関連フィールド
スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合	
-cdbSchemaName 両方が指定されている場合、dbSchemaName よりも優先される新しいパラメーターです。-dbSchemaName 注: V7 では推奨されていません。	スキーマ名 (Schema name)
-dbCommonForME (Derby Embedded 40 の場合のみ)	メッセージング・エンジン (ME) でこのデータベースを使用する
-dbCreateNew (常に true である必要があります)	N/A

表 146. 共通データベースの構成に使用できる *manageprofiles* パラメーター (Derby Embedded または Derby Embedded 40 を使用) (続き)

パラメーター	プロファイル管理ツールの「データベース構成」ページに表示される関連フィールド
-dbDelayConfig (Derby Embedded 40 の場合のみ)	データベース・スクリプトの実行を遅延 (リモート・データベースを使用する場合は選択する必要がある)
-dbName	共通データベース名
-dbOutputScriptDir	データベース・スクリプトの出力ディレクトリー 注: 「生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーをオーバーライドする」オプションを選択した場合のみ使用可能です。この値は絶対パスでなければなりません。相対パスを設定した場合、SQL スクリプトはエクスポートまたは実行されず、その結果、サーバー始動時に多数の例外が発生することになります。
-dbType	データベース製品の選択
-fileStoreForME (スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合のみ)	メッセージング・エンジン (ME) でこのファイル・ストアを使用する
N/A	生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーをオーバーライドする

Derby Network Server または Derby Network Server 40 の場合

335 ページの表 98 には、Derby Network Server または Derby Network Server 40 でスタンドアロン・サーバー、デプロイメント・マネージャー、またはカスタム・プロファイルによって使用される共通データベースを構成するために使用可能な *manageprofiles* パラメーターが示されています。

表 147. 共通データベースの構成に使用できる *manageprofiles* パラメーター (Derby Network Server または Derby Network Server 40 を使用)

パラメーター	プロファイル管理ツールの「データベース構成」ページに表示される関連フィールド
カスタム・プロファイル用	
-dbType	デプロイメント・マネージャーで使用するデータベース製品の選択
-dbJDBCClasspath	JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)
スタンドアロン・サーバー・プロファイルまたはデプロイメント・マネージャー・プロファイル用	

表 147. 共通データベースの構成に使用できる *manageprofiles* パラメーター (Derby Network Server または Derby Network Server 40 を使用) (続き)

パラメーター	プロファイル管理ツールの「データベース構成」ページに表示される関連フィールド
-cdbSchemaName 両方が指定されている場合、dbSchemaName よりも優先される新しいパラメーターです。-dbSchemaName 注: V7 では推奨されていません。	スキーマ名 (Schema name)
-dbCommonForME (スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合のみ)	メッセージング・エンジン (ME) でこのデータベースを使用する
-dbCreateNew (常に true である必要があります)	N/A
-dbDelayConfig (Derby Network Server 40 の場合のみ)	データベース・スクリプトの実行を遅延 (リモート・データベースを使用する場合は選択する必要がある)
-dbHostName	データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)
-dbName	共通データベース名
-dbOutputScriptDir	データベース・スクリプトの出力ディレクトリー 注: 「生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーをオーバーライドする」オプションを選択した場合のみ使用可能です。この値は絶対パスでなければなりません。相対パスを設定した場合、SQL スクリプトはエクスポートまたは実行されず、その結果、サーバー始動時に多数の例外が発生することになります。
-dbPassword	データベース認証用のパスワード
-dbServerPort	サーバー・ポート
-dbType	データベース製品の選択
-dbUserId	データベースで認証するユーザー名
-fileStoreForME (スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合のみ)	メッセージング・エンジン (ME) でこのファイル・ストアを使用する
N/A	生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーをオーバーライドする

DB2 Universal の場合

336 ページの表 99 には、DB2 Universal でスタンドアロン・サーバー、デプロイメント・マネージャー、またはカスタム・プロファイルによって使用される共通データベースを構成するために使用可能な *manageprofiles* パラメーターが示されています。

表 148. 共通データベースの構成に使用できる *manageprofiles* パラメーター (DB2 Universal を使用)

パラメーター	プロファイル管理ツールの「データベース構成」ページに表示される関連フィールド
カスタム・プロファイル用	
-dbJDBCClasspath	JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)
-dbType	デプロイメント・マネージャーで使用するデータベース製品の選択
スタンドアロン・サーバー・プロファイルまたはデプロイメント・マネージャー・プロファイル用	
-cdbSchemaName 両方が指定されている場合、dbSchemaName よりも優先される新しいパラメーターです。-dbSchemaName 注: V7 では推奨されていません。	スキーマ名 (Schema name)
-dbCommonForME (スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合のみ)	メッセージング・エンジン (ME) でこのデータベースを使用する
-dbCreateNew	N/A
-dbDelayConfig	データベース・スクリプトの実行を遅延 (リモート・データベースを使用する場合は選択する必要がある)
-dbDriverType	N/A
-dbHostName	データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)
-dbJDBCClasspath	JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)
-dbName	共通データベース名
-dbOutputScriptDir	データベース・スクリプトの出力ディレクトリー 注: 「生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーをオーバーライドする」オプションを選択した場合のみ使用可能です。この値は絶対パスでなければなりません。相対パスを設定した場合、SQL スクリプトはエクスポートまたは実行されず、その結果、サーバー始動時に多数の例外が発生することになります。
-dbPassword	データベース認証用のパスワード
-dbServerPort	サーバー・ポート
-dbType	データベース製品の選択
-dbUserId	データベースで認証するユーザー名
-fileStoreForME (スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合のみ)	メッセージング・エンジン (ME) でこのファイル・ストアを使用する

表 148. 共通データベースの構成に使用できる *manageprofiles* パラメーター (DB2 Universal を使用) (続き)

パラメーター	プロファイル管理ツールの「データベース構成」ページに表示される関連フィールド
N/A	生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーをオーバーライドする

DB2 データ・サーバー

337 ページの表 100 には、DB2 Universal でスタンドアロン・サーバー、デプロイメント・マネージャー、またはカスタム・プロファイルによって使用される共通データベースを構成するために使用可能な *manageprofiles* パラメーターが示されています。

表 149. 共通データベースの構成に使用できる *manageprofiles* パラメーター (DB2 データ・サーバーを使用)

パラメーター	プロファイル管理ツールの「データベース構成」ページに表示される関連フィールド
カスタム・プロファイル用	
-dbJDBCClasspath	JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)
-dbType	デプロイメント・マネージャーで使用するデータベース製品の選択
スタンドアロン・サーバー・プロファイルまたはデプロイメント・マネージャー・プロファイル用	
-cdbSchemaName 両方が指定されている場合、dbSchemaName よりも優先される新しいパラメーターです。-dbSchemaName 注: V7 では推奨されていません。	スキーマ名 (Schema name)
-dbCommonForME (スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合のみ)	メッセージング・エンジン (ME) でこのデータベースを使用する
-dbCreateNew	N/A
-dbDelayConfig	データベース・スクリプトの実行を遅延 (リモート・データベースを使用する場合は選択する必要がある)
-dbHostName	データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)
-dbJDBCClasspath	JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)
-dbName	共通データベース名

表 149. 共通データベースの構成に使用できる *manageprofiles* パラメーター (DB2 データ・サーバーを使用) (続き)

パラメーター	プロファイル管理ツールの「データベース構成」ページに表示される関連フィールド
-dbOutputScriptDir	データベース・スクリプトの出力ディレクトリー 注: 「生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーをオーバーライドする」オプションを選択した場合のみ使用可能です。この値は絶対パスでなければなりません。相対パスを設定した場合、SQL スクリプトはエクスポートまたは実行されず、その結果、サーバー始動時に多数の例外が発生することになります。
-dbPassword	データベース認証用のパスワード
-dbServerPort	サーバー・ポート
-dbType	データベース製品の選択
-dbUserId	データベースで認証するユーザー名
-fileStoreForME (スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合のみ)	メッセージング・エンジン (ME) でこのファイル・ストアを使用する
N/A	生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーをオーバーライドする

DB2 for IBM i (ツールボックス) および DB2 for i5/OS (ツールボックス) の場合

338 ページの表 101 には、i5/OS または IBM i オペレーティング・システムに提供されたデータベース上で、スタンドアロン・サーバー、デプロイメント・マネージャー、またはカスタム・プロファイルによって使用される共通データベースを構成するために使用可能な *manageprofiles* パラメーターが示されています。

表 150. i5/OS または IBM i オペレーティング・システムに提供されたデータベースを使用した共通データベースの構成のために使用可能な *manageprofiles* パラメーター

パラメーター	プロファイル管理ツールの「データベース構成」ページに表示される関連フィールド
カスタム・プロファイル用	
-dbJDBCClasspath	JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)
-dbType	デプロイメント・マネージャーで使用するデータベース製品の選択
スタンドアロン・サーバー・プロファイルまたはデプロイメント・マネージャー・プロファイル用	
-dbCommonForME (スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合のみ)	メッセージング・エンジン (ME) でこのデータベースを使用する
-dbCreateNew (常に true である必要があります)	N/A

表 150. i5/OS または IBM i オペレーティング・システムに提供されたデータベースを使用した共通データベースの構成のために使用可能な *manageprofiles* パラメーター (続き)

パラメーター	プロファイル管理ツールの「データベース構成」ページに表示される関連フィールド
-dbDelayConfig	データベース・スクリプトの実行を遅延 (リモート・データベースを使用する場合は選択する必要がある)
-dbHostName (ツールボックス・ドライバーの場合、リモート・データベース・ホスト名を指定する必要があります)	データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)
-dbJDBCClasspath	JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)
-dbName	共通データベース名
-dbOutputScriptDir	データベース・スクリプトの出力ディレクトリー 注: 「生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーをオーバーライドする」オプションを選択した場合のみ使用可能です。この値は絶対パスでなければなりません。相対パスを設定した場合、SQL スクリプトはエクスポートまたは実行されず、その結果、サーバー始動時に多数の例外が発生することになります。
-dbPassword	データベース認証用のパスワード
-cdbSchemaName 両方が指定されている場合、dbSchemaName よりも優先される新しいパラメーターです。-dbSchemaName 注: V7 では推奨されていません。	データベース・コレクション名
-dbType	データベース製品の選択
-dbUserId	データベースで認証するユーザー名
-fileStoreForME (スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合のみ)	メッセージング・エンジン (ME) でこのファイル・ストアを使用する
N/A	生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーをオーバーライドする

DB2 for z/OS v8 および DB2 for z/OS v9 の場合

339 ページの表 102 には、DB2 for z/OS v8 または DB2 for z/OS v9 でスタンドアロン・サーバー、デプロイメント・マネージャー、またはカスタム・プロファイルによって使用される共通データベースを構成するために使用可能な *manageprofiles* パラメーターが示されています。

表 151. DB2 for z/OS v8 または DB2 for z/OS v9 を使用した共通データベースの構成のために使用可能な *manageprofiles* パラメーター

パラメーター	プロファイル管理ツールの「データベース構成」ページに表示される関連フィールド
カスタム・プロファイル用	

表 151. DB2 for z/OS v8 または DB2 for z/OS v9 を使用した共通データベースの構成のために使用可能な *manageprofiles* パラメーター (続き)

パラメーター	プロファイル管理ツールの「データベース構成」ページに表示される関連フィールド
-dbJDBCClasspath	JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)
-dbType	デプロイメント・マネージャーで使用するデータベース製品の選択
スタンドアロン・サーバー・プロファイルまたはデプロイメント・マネージャー・プロファイル用	
-dbCommonForME (スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合のみ)	メッセージング・エンジン (ME) でこのデータベースを使用する
-dbConnectionLocation	接続のロケーション
-dbCreateNew (常に false である必要があります)	N/A
-dbDelayConfig	データベース・スクリプトの実行を遅延 (リモート・データベースを使用する場合は選択する必要がある)
-dbHostName	データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)
-dbJDBCClasspath	JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)
-dbName	共通データベース名
-dbOutputScriptDir	データベース・スクリプトの出力ディレクトリー 注: 「生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーをオーバーライドする」オプションを選択した場合のみ使用可能です。この値は絶対パスでなければなりません。相対パスを設定した場合、SQL スクリプトはエクスポートまたは実行されず、その結果、サーバー始動時に多数の例外が発生することになります。
-dbPassword	データベース認証用のパスワード
-cdbSchemaName 両方が指定されている場合、dbSchemaName よりも優先される新しいパラメーターです。-dbSchemaName 注: V7 では推奨されていません。	データベースの別名
-dbServerPort	サーバー・ポート
-dbStorageGroup	ストレージ・グループ名
-dbType	データベース製品の選択
-dbUserId	データベースで認証するユーザー名
-fileStoreForME (スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合のみ)	メッセージング・エンジン (ME) でこのファイル・ストアを使用する

表 151. DB2 for z/OS v8 または DB2 for z/OS v9 を使用した共通データベースの構成のために使用可能な *manageprofiles* パラメーター (続き)

パラメーター	プロファイル管理ツールの「データベース構成」ページに表示される関連フィールド
N/A	生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーをオーバーライドする

Oracle

341 ページの表 103 には、Oracle でスタンドアロン・サーバー、デプロイメント・マネージャー、またはカスタム・プロファイルによって使用される共通データベースを構成するために使用可能な *manageprofiles* パラメーターが示されています。

表 152. 共通データベースの構成に使用できる *manageprofiles* パラメーター (Oracle を使用)

パラメーター	プロファイル管理ツールの「データベース構成」ページに表示される関連フィールド
カスタム・プロファイル用	
-dbJDBCClasspath	JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー) Oracle データベースにアクセスするには、ojdbc6.jar ドライバーをインストールする必要があります。 注: Oracle 10g には、ojdbc6.jar ドライバーは含まれていません。このドライバーは Oracle の Web サイトからダウンロードできます。
-dbType	デプロイメント・マネージャーで使用するデータベース製品の選択
スタンドアロン・サーバー・プロファイルまたはデプロイメント・マネージャー・プロファイル用	
-dbCommonForME (スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合のみ)	メッセージング・エンジン (ME) でこのデータベースを使用する
-dbCreateNew (常に false である必要があります)	N/A
-dbDelayConfig	データベース・スクリプトの実行を遅延 (リモート・データベースを使用する場合は選択する必要がある)
-dbDriverType	JDBC ドライバー・タイプ
-dbHostName	データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)
-dbJDBCClasspath	JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)
-dbName	共通データベース名

表 152. 共通データベースの構成に使用できる *manageprofiles* パラメーター (Oracle を使用)
(続き)

パラメーター	プロファイル管理ツールの「データベース構成」ページに表示される関連フィールド
-dbOutputScriptDir	データベース・スクリプトの出力ディレクトリー 注: 「生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーをオーバーライドする」オプションを選択した場合のみ使用可能です。この値は絶対パスでなければなりません。相対パスを設定した場合、SQL スクリプトはエクスポートまたは実行されず、その結果、サーバー始動時に多数の例外が発生することになります。
-dbPassword	共通データベースのパスワード
-dbServerPort	サーバー・ポート
-dbType	データベース製品の選択
-dbUserId	共通データベースのユーザー名
-fileStoreForME (スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合のみ)	メッセージング・エンジン (ME) でこのファイル・ストアを使用する
-dbLocation (-dbDelayConfig が true に設定されている場合のみ必要)	データベース・サーバーのインストール・ディレクトリー
-dbSysPassword	パスワード
-dbSysUserId	システム管理者のユーザー名
N/A	生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーをオーバーライドする

Informix Dynamic Server の場合

342 ページの表 104 には、Informix Dynamic Server でスタンドアロン・サーバー、デプロイメント・マネージャー、またはカスタム・プロファイルによって使用される共通データベースを構成するために使用可能な *manageprofiles* パラメーターが示されています。

表 153. 共通データベースの構成に使用できる *manageprofiles* パラメーター (Informix Dynamic Server を使用)

パラメーター	プロファイル管理ツールの「データベース構成」ページに表示される関連フィールド
カスタム・プロファイル用	
-dbJDBCClasspath	JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)
-dbType	デプロイメント・マネージャーで使用するデータベース製品の選択
スタンドアロン・サーバー・プロファイルまたはデプロイメント・マネージャー・プロファイル用	

表 153. 共通データベースの構成に使用できる *manageprofiles* パラメーター (*Informix Dynamic Server* を使用) (続き)

パラメーター	プロファイル管理ツールの「データベース構成」ページに表示される関連フィールド
-dbCommonForME (スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合のみ)	メッセージング・エンジン (ME) でこのデータベースを使用する
-dbCreateNew	N/A
-dbDelayConfig	データベース・スクリプトの実行を遅延 (リモート・データベースを使用する場合は選択する必要がある)
-dbHostName	データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)
-dbInstance (-dbDelayConfig が false に設定されている場合のみ必要)	インスタンス名
-dbJDBCClasspath	JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)
-dbLocation (-dbDelayConfig が false に設定されている場合のみ必要)	データベース・サーバーのインストール・ディレクトリー
-dbName	共通データベース名
-dbOutputScriptDir	データベース・スクリプトの出力ディレクトリー 注: 「生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーをオーバーライドする」オプションを選択した場合のみ使用可能です。この値は絶対パスでなければなりません。相対パスを設定した場合、SQL スクリプトはエクスポートまたは実行されず、その結果、サーバー始動時に多数の例外が発生することになります。
-dbPassword	データベース認証用のパスワード
-dbServerPort	サーバー・ポート
-dbProviderType	IBM DB2 JDBC Universal ドライバーを使用した Informix または IBM JCC ドライバーを使用した Informix に必須
-dbType	データベース製品の選択
-dbUserId	データベースで認証するユーザー名
-fileStoreForME (スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合のみ)	メッセージング・エンジン (ME) でこのファイル・ストアを使用する
N/A	生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーをオーバーライドする

Microsoft SQL Server の場合

344 ページの表 105 には、または でスタンドアロン・サーバー、デプロイメント・マネージャー、またはカスタム・プロファイルによって使用される共通データベースを構成するために使用可能な *manageprofiles* パラメーターが示されています。このデータベース用の JDBC ドライバーとしては、DataDirect Connect JDBC (XA) 3.5 ビルド 37 (タイプ 4)、IBM WebSphere embedded Connect JDBC (XA)

3.5 ビルド 37 (タイプ 4)、および Microsoft SQL Server JDBC Driver バージョン 1.2 の 3 つがあります。「データベース構成」ページに表示されるドライバー名は、Microsoft SQL Server (DataDirect) および Microsoft SQL Server (Microsoft) です。

注: Microsoft SQL Server JDBC Driver バージョン 1.2 に対するサポートは、WebSphere Process Server バージョン 6.2.0.1 で追加されました。

Microsoft SQL Server 2005 をスタンドアロン・プロファイルとともに使用し、メッセージング・エンジン・テーブルを共通データベースに配置する場合は、以下のステップを実行する必要があります。

1. スタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成する前に、4 つのスキーマを共通データベースに手動で追加します。4 つのスキーマとは、XXXSS00、XXXSA00、XXXCM00、および XXXBM00 です。XXX は、共通データベース名の最初の 3 文字です。
2. プロファイル作成時に dbCommonForME=true パラメーターを渡します。以下のコマンドにより、上で定義したスキーマを使用する SQL Server 上のメッセージング・エンジンを構成します。このコマンドでは、共通データベース用に指定した dbUserId および dbPassword を使用します。

```
C:%WebSphereND%bin%manageprofiles.bat" -create -templatePath "C:%WebSphereND%
profileTemplates%default.wbiserver" -dbHostName LNIDDBTUMSQL21 -
dbServerPort 1433 -dbDelayConfig
true -configureBSpace true -ceiDbName EVENT -dbType MSSQLSERVER_Microsoft -
dbUserId
wpcdbadmin -
dbJDBCClasspath "C:%Program Files%Microsoft SQL Server%JDBC%sqljdbc_1.2%enu"
-dbName WPRCSDB -dbPassword qlwiddj23 -ceiDbServerName LNIDDBTUMSQL21
-dbCommonForME=true
```

表 154. Microsoft SQL Server を使用した Common データベースの構成のために使用可能な manageprofiles パラメーター

パラメーター	プロファイル管理ツールの「データベース構成」ページに表示される関連フィールド
カスタム・プロファイル用	
-dbJDBCClasspath	JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)
-dbType	デプロイメント・マネージャーで使用するデータベース製品の選択
スタンドアロン・サーバー・プロファイルまたはデプロイメント・マネージャー・プロファイル用	
-dbCommonForME (スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合のみ)	メッセージング・エンジン (ME) でこのデータベースを使用する
-dbCreateNew	N/A
-dbDelayConfig	データベース・スクリプトの実行を遅延 (リモート・データベースを使用する場合は選択する必要がある)
-dbHostName	データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)

表 154. Microsoft SQL Server を使用した Common データベースの構成のために使用可能な manageprofiles パラメーター (続き)

パラメーター	プロファイル管理ツールの「データベース構成」ページに表示される関連フィールド
-dbJDBCClasspath	JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)
-dbName	共通データベース名
-dbOutputScriptDir	データベース・スクリプトの出力ディレクトリー 注: 「生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーをオーバーライドする」オプションを選択した場合のみ使用可能です。この値は絶対パスでなければなりません。相対パスを設定した場合、SQL スクリプトはエクスポートまたは実行されず、その結果、サーバー始動時に多数の例外が発生することになります。
-dbPassword	データベース認証用のパスワード
-dbServerPort	サーバー・ポート
-dbType	データベース製品の選択
-dbUserId	共通データベースのユーザー名
-fileStoreForME (スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合のみ)	メッセージング・エンジン (ME) でこのファイル・ストアを使用する
-dbServerName	データベース・サーバー名
-saPassword	管理ユーザー・パスワード
-saUser	管理ユーザー名
N/A	生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーをオーバーライドする

Common Event Infrastructure データベース構成の manageprofiles パラメーター (データベース製品ごと):

スタンドアロン・サーバー・プロファイルによって使用される Common Event Infrastructure データベースを構成するには、特定の manageprofiles コマンド行ユーティリティー・パラメーターを使用します。指定するパラメーターは、使用中のデータベース製品によって異なることがあります。

このトピックの表には、サポートされるあらゆるデータベース製品を使用して Common Event Infrastructure データベースを構成するために使用可能な manageprofiles パラメーターが示されています。また、これらのパラメーターがプロファイル管理ツールで表示される際の、相当するフィールド名も示します。manageprofiles コマンド行ユーティリティーを使用して Common Event Infrastructure データベースを構成するのは、スタンドアロン・サーバー・プロファイルについてのみです。デプロイメント・マネージャー・プロファイルによって使用するこのデータベースを構成するには、管理コンソールまたはスクリプトを介して行う必要があります。詳しくは、イベント・データベースの構成を参照してください。

manageprofiles パラメーターの完全なリスト (デフォルト値を含む) については、446 ページの『manageprofiles パラメーター』というトピックを参照してください。

いろいろなタイプのプロファイルを作成または拡張するために使用する `manageprofiles` コマンドの例は、トピック 304 ページの『`manageprofiles` コマンド行ユーティリティーによる Derby または DB2 データベースのプロファイルの作成 - 例』および 405 ページの『`manageprofiles` コマンド行ユーティリティーによる Derby または DB2 データベースのプロファイルの拡張 - 例』で見ることができます。

データベース構成に使用できるパラメーターを表示するには、以下のリストからデータベース製品を選択してください。

- 346 ページの『Derby Embedded または Derby Embedded 40 の場合』
- 347 ページの『Derby Network Server または Derby Network Server 40 の場合』
- 347 ページの『DB2 Universal の場合』
- 348 ページの『DB2 データ・サーバー』
- 349 ページの『DB2 for IBM i (ツールボックス) および DB2 for i5/OS (ツールボックス) の場合』
- 350 ページの『DB2 for z/OS v8 および DB2 for z/OS v9 の場合』
- 351 ページの『Oracle』
- 352 ページの『Informix Dynamic Server の場合』
- 353 ページの『Microsoft SQL Server の場合』

Derby Embedded または Derby Embedded 40 の場合

346 ページの表 106 には、Derby Embedded または Derby Embedded 40 でスタンドアロン・サーバー・プロファイルによって使用される Common Event Infrastructure データベースを構成するために使用可能な `manageprofiles` パラメーターが示されています。

表 155. Derby Embedded または Derby Embedded 40 を使用した Common Event Infrastructure データベースの構成のために使用可能な `manageprofiles` パラメーター

パラメーター	プロファイル管理ツールの「データベース構成」ページに表示される関連フィールド
<code>-dbDelayConfig</code> (Derby Embedded 40 の場合のみ)	データベース・スクリプトの実行を遅延 (リモート・データベースを使用する場合は選択する必要がある)
<code>-ceiDbName</code>	Common Event Infrastructure データベース名
<code>-dbType</code>	データベース製品の選択
<code>-dbOutputScriptDir</code>	データベース・スクリプトの出力ディレクトリー 注: 「生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーをオーバーライドする」オプションを選択した場合のみ使用可能です。この値は絶対パスでなければなりません。相対パスを設定した場合、SQL スクリプトはエクスポートまたは実行されず、その結果、サーバー始動時に多数の例外が発生することになります。
<code>-ceiOverrideDataSource</code>	N/A (コマンド行のみ)
N/A	生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーをオーバーライドする

Derby Network Server または Derby Network Server 40 の場合

347 ページの表 107 には、Derby Network Server または Derby Network Server 40 でスタンドアロン・サーバー・プロファイルによって使用される Common Event Infrastructure データベースを構成するために使用可能な manageprofiles パラメーターが示されています。

表 156. Derby Network Server または Derby Network Server 40 を使用した Common Event Infrastructure データベースの構成のために使用可能な manageprofiles パラメーター

パラメーター	プロファイル管理ツールの「データベース構成」ページに表示される関連フィールド
-dbDelayConfig (Derby Network Server 40 の場合のみ)	データベース・スクリプトの実行を遅延 (リモート・データベースを使用する場合は選択する必要がある)
-dbHostName	データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)
-ceiDbName	Common Event Infrastructure データベース名
-dbPassword	データベース認証用のパスワード
-dbServerPort	サーバー・ポート
-dbType	データベース製品の選択
-dbUserId	データベースで認証するユーザー名
-dbOutputScriptDir	データベース・スクリプトの出力ディレクトリー 注: 「生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーをオーバーライドする」オプションを選択した場合のみ使用可能です。この値は絶対パスでなければなりません。相対パスを設定した場合、SQL スクリプトはエクスポートまたは実行されず、その結果、サーバー始動時に多数の例外が発生することになります。
-ceiOverrideDataSource	N/A (コマンド行のみ)
N/A	生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーをオーバーライドする

DB2 Universal の場合

347 ページの表 108 には、DB2 Universal でスタンドアロン・サーバー・プロファイルによって使用される Common Event Infrastructure データベースを構成するために使用可能な manageprofiles パラメーターが示されています。

表 157. DB2 Universal を使用した Common Event Infrastructure データベースの構成のために使用可能な manageprofiles パラメーター

パラメーター	プロファイル管理ツールの「データベース構成」ページに表示される関連フィールド
-dbDelayConfig	データベース・スクリプトの実行を遅延 (リモート・データベースを使用する場合は選択する必要がある)

表 157. DB2 Universal を使用した Common Event Infrastructure データベースの構成のために使用可能な manageprofiles パラメーター (続き)

パラメーター	プロファイル管理ツールの「データベース構成」ページに表示される関連フィールド
-dbHostName	データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)
-ceiDbName	Common Event Infrastructure データベース名
-dbPassword	データベース認証用のパスワード
-dbServerPort	サーバー・ポート
-dbType	データベース製品の選択
-dbUserId	データベースで認証するユーザー名
-dbJDBCClasspath	JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)
-dbOutputScriptDir	データベース・スクリプトの出力ディレクトリー 注: 「生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーをオーバーライドする」オプションを選択した場合のみ使用可能です。この値は絶対パスでなければなりません。相対パスを設定した場合、SQL スクリプトはエクスポートまたは実行されず、その結果、サーバー始動時に多数の例外が発生することになります。
-ceiOverrideDataSource	N/A (コマンド行のみ)
N/A	生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーをオーバーライドする

DB2 データ・サーバー

348 ページの表 109 には、DB2 データ・サーバーでスタンドアロン・サーバー・プロファイルによって使用される Common Event Infrastructure データベースを構成するために使用可能な manageprofiles パラメーターが示されています。

表 158. DB2 データ・サーバーを使用した Common Event Infrastructure データベースの構成に使用できる manageprofiles パラメーター

パラメーター	プロファイル管理ツールの「データベース構成」ページに表示される関連フィールド
-dbDelayConfig	データベース・スクリプトの実行を遅延 (リモート・データベースを使用する場合は選択する必要がある)
-dbHostName	データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)
-ceiDbName	Common Event Infrastructure データベース名
-dbPassword	データベース認証用のパスワード
-dbServerPort	サーバー・ポート
-dbType	データベース製品の選択
-dbUserId	データベースで認証するユーザー名

表 158. DB2 データ・サーバーを使用した *Common Event Infrastructure* データベースの構成に使用できる *manageprofiles* パラメーター (続き)

パラメーター	プロファイル管理ツールの「データベース構成」ページに表示される関連フィールド
-dbJDBCClasspath	JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)
-dbOutputScriptDir	データベース・スクリプトの出力ディレクトリー 注: 「生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーをオーバーライドする」オプションを選択した場合のみ使用可能です。この値は絶対パスでなければなりません。相対パスを設定した場合、SQL スクリプトはエクスポートまたは実行されず、その結果、サーバー始動時に多数の例外が発生することになります。
-ceiOverrideDataSource	N/A (コマンド行のみ)
N/A	生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーをオーバーライドする

DB2 for IBM i (ツールボックス) および DB2 for i5/OS (ツールボックス) の場合

349 ページの表 110 には、i5/OS または IBM i オペレーティング・システムに提供されたデータベース上で、スタンドアロン・サーバー・プロファイルによって使用される *Common Event Infrastructure* データベースを構成するために使用可能な *manageprofiles* パラメーターが示されています。

表 159. i5/OS または IBM i オペレーティング・システムに提供されたデータベースを使用した *Common Event Infrastructure* データベースの構成のために使用可能な *manageprofiles* パラメーター

パラメーター	プロファイル管理ツールの「データベース構成」ページに表示される関連フィールド
-ceiDbAlreadyConfigured	N/A (コマンド行のみ)
-ceiOverrideDataSource	N/A (コマンド行のみ)
-dbDelayConfig	データベース・スクリプトの実行を遅延 (リモート・データベースを使用する場合は選択する必要がある)
-dbHostName	データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)
-ceiDbName	Common Event Infrastructure データベース名
-dbPassword	データベース認証用のパスワード
-dbType	データベース製品の選択
-dbUserId	データベースで認証するユーザー名
-dbJDBCClasspath	JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)

表 159. i5/OS または IBM i オペレーティング・システムに提供されたデータベースを使用した Common Event Infrastructure データベースの構成のために使用可能な manageprofiles パラメーター (続き)

パラメーター	プロファイル管理ツールの「データベース構成」ページに表示される関連フィールド
-dbOutputScriptDir	データベース・スクリプトの出力ディレクトリー 注: 「生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーをオーバーライドする」オプションを選択した場合のみ使用可能です。この値は絶対パスでなければなりません。相対パスを設定した場合、SQL スクリプトはエクスポートまたは実行されず、その結果、サーバー始動時に多数の例外が発生することになります。
-cdbSchemaName 両方が指定されている場合、dbSchemaName よりも優先される新しいパラメーターです。-dbSchemaName 注: V7 では推奨されていません。	データベース・コレクション名
N/A	生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーをオーバーライドする

DB2 for z/OS v8 および DB2 for z/OS v9 の場合

350 ページの表 111 には、DB2 for z/OS v8 または DB2 for z/OS v9 でスタンドアロン・サーバー・プロファイルによって使用される Common Event Infrastructure データベースを構成するために使用可能な manageprofiles パラメーターが示されています。

表 160. DB2 for z/OS v8 または DB2 for z/OS v9 を使用した Common Event Infrastructure データベースの構成のために使用可能な manageprofiles パラメーター

パラメーター	プロファイル管理ツールの「データベース構成」ページに表示される関連フィールド
-ceiBufferPool4k	N/A (コマンド行のみ)
-ceiBufferPool8k	N/A (コマンド行のみ)
-ceiBufferPool16k	N/A (コマンド行のみ)
-ceiDbName	Common Event Infrastructure データベース名
-ceiDiskSizeInMB	N/A (コマンド行のみ)
-ceiOverrideDataSource	N/A (コマンド行のみ)
-dbConnectionLocation	接続のロケーション
-dbDelayConfig	データベース・スクリプトの実行を遅延 (リモート・データベースを使用する場合は選択する必要がある)
-dbHostName	データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)
-dbJDBCClasspath	JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)

表 160. DB2 for z/OS v8 または DB2 for z/OS v9 を使用した Common Event Infrastructure データベースの構成のために使用可能な manageprofiles パラメーター (続き)

パラメーター	プロファイル管理ツールの「データベース構成」ページに表示される関連フィールド
-dbOutputScriptDir	データベース・スクリプトの出力ディレクトリー 注: 「生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーをオーバーライドする」オプションを選択した場合のみ使用可能です。この値は絶対パスでなければなりません。相対パスを設定した場合、SQL スクリプトはエクスポートまたは実行されず、その結果、サーバー始動時に多数の例外が発生することになります。
-dbPassword	データベース認証用のパスワード
-cdbSchemaName 両方が指定されている場合、dbSchemaName よりも優先される新しいパラメーターです。-dbSchemaName 注: V7 では推奨されていません。	データベースの別名
-dbStorageGroup	ストレージ・グループ名
-dbType	データベース製品の選択
-dbUserId	データベースで認証するユーザー名
N/A	生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーをオーバーライドする

Oracle

351 ページの表 112 には、Oracle でスタンドアロン・サーバー・プロファイルによって使用される Common Event Infrastructure データベースを構成するために使用可能な manageprofiles パラメーターが示されています。

表 161. Oracle を使用した Common Event Infrastructure データベースの構成のために使用可能な manageprofiles パラメーター

パラメーター	プロファイル管理ツールの「データベース構成」ページに表示される関連フィールド
-dbDelayConfig	データベース・スクリプトの実行を遅延 (リモート・データベースを使用する場合は選択する必要がある)
-dbHostName	データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)
-ceiDbName	Common Event Infrastructure データベース名
-dbPassword	データベース認証用のパスワード
-dbServerPort	サーバー・ポート
-dbType	データベース製品の選択
-dbSysPassword	パスワード
-dbSysUserId	システム管理者のユーザー名

表 161. Oracle を使用した Common Event Infrastructure データベースの構成のために使用可能な *manageprofiles* パラメーター (続き)

パラメーター	プロファイル管理ツールの「データベース構成」ページに表示される関連フィールド
-dbUserId	共通データベースのユーザー名
-ceiInstancePrefix 注: 6.2 では、Informix、Oracle、Microsoft SQL Server 以外のすべてのデータベースで推奨されません。	N/A (コマンド行のみ)
-dbJDBCClasspath	JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー) Oracle データベースにアクセスするには、ojdbc6.jar ドライバーをインストールする必要があります。 注: Oracle 10g には、ojdbc6.jar ドライバーは含まれていません。このドライバーは Oracle の Web サイトからダウンロードできます。
-dbLocation (-dbDelayConfig が true に設定されている場合のみ必要)	データベース・サーバーのインストール・ディレクトリー
-dbOutputScriptDir	データベース・スクリプトの出力ディレクトリー 注: 「生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーをオーバーライドする」オプションを選択した場合のみ使用可能です。この値は絶対パスでなければなりません。相対パスを設定した場合、SQL スクリプトはエクスポートまたは実行されず、その結果、サーバー始動時に多数の例外が発生することになります。
-ceiOverrideDataSource	N/A (コマンド行のみ)
N/A	生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーをオーバーライドする

Informix Dynamic Server の場合

352 ページの表 113 には、Informix Dynamic Server でスタンドアロン・サーバー・プロファイルによって使用される Common Event Infrastructure データベースを構成するために使用可能な *manageprofiles* パラメーターが示されています。

表 162. Informix Dynamic Server を使用した Common Event Infrastructure データベースの構成のために使用可能な *manageprofiles* パラメーター

パラメーター	プロファイル管理ツールの「データベース構成」ページに表示される関連フィールド
-dbDelayConfig	データベース・スクリプトの実行を遅延 (リモート・データベースを使用する場合は選択する必要がある)
-dbHostName	データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)

表 162. Informix Dynamic Server を使用した Common Event Infrastructure データベースの構成のために使用可能な *manageprofiles* パラメーター (続き)

パラメーター	プロファイル管理ツールの「データベース構成」ページに表示される関連フィールド
-dbLocation (-dbDelayConfig が false に設定されている場合のみ必要)	データベース・サーバーのインストール・ディレクトリー
-ceiDbName	Common Event Infrastructure データベース名
-dbPassword	データベース認証用のパスワード
-dbServerPort	サーバー・ポート
-dbType	データベース製品の選択
-dbInstance	インスタンス名
-dbUserId	データベースで認証するユーザー名
-ceiInstancePrefix 注: 6.2 では、Informix、Oracle、Microsoft SQL Server 以外のすべてのデータベースで推奨されません。	N/A (コマンド行のみ)
-dbJDBCClasspath	JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)
-dbOutputScriptDir	データベース・スクリプトの出力ディレクトリー 注: 「生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーをオーバーライドする」オプションを選択した場合のみ使用可能です。この値は絶対パスでなければなりません。相対パスを設定した場合、SQL スクリプトはエクスポートまたは実行されず、その結果、サーバー始動時に多数の例外が発生することになります。
-ceiOverrideDataSource	N/A (コマンド行のみ)
N/A	生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーをオーバーライドする

Microsoft SQL Server の場合

354 ページの表 114 には、または でスタンドアロン・サーバー、デプロイメント・マネージャー、またはカスタム・プロファイルによって使用される共通データベースを構成するために使用可能な *manageprofiles* パラメーターが示されています。このデータベース用の JDBC ドライバーとしては、DataDirect Connect JDBC (XA) 3.5 ビルド 37 (タイプ 4)、IBM WebSphere embedded Connect JDBC (XA) 3.5 ビルド 37 (タイプ 4)、および Microsoft SQL Server JDBC Driver バージョン 1.2 の 3 つがあります。「データベース構成」ページに表示されるドライバー名は、Microsoft SQL Server (DataDirect) および Microsoft SQL Server (Microsoft) です。

注: Microsoft SQL Server JDBC Driver バージョン 1.2 に対するサポートは、WebSphere Process Server バージョン 6.2.0.1 で追加されました。

表 163. Microsoft SQL Server を使用した Common Event Infrastructure データベースの構成のために使用可能な *manageprofiles* パラメーター

パラメーター	プロファイル管理ツールの「データベース構成」ページに表示される関連フィールド
-dbDelayConfig	データベース・スクリプトの実行を遅延 (リモート・データベースを使用する場合は選択する必要がある)
-dbHostName	データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)
-ceiDbInstallDir (-dbDelayConfig が true に設定されている場合のみ必要)	N/A (コマンド行のみ)
-ceiDbName	Common Event Infrastructure データベース名
-dbPassword	データベース認証用のパスワード
-dbServerPort	サーバー・ポート
-dbType	データベース製品の選択
-dbInstance (-dbDelayConfig が true に設定されている場合のみ必要)	インスタンス名
-ceiDbPassword 注: 6.2 では、Microsoft SQL Server クライアント以外のすべてのデータベースで推奨されません。	N/A (コマンド行のみ)
-ceiDbUser 注: 6.2 では、Microsoft SQL Server クライアント以外のすべてのデータベースで推奨されません。	N/A (コマンド行のみ)
-ceiInstancePrefix 注: 6.2 では、Informix、Oracle、Microsoft SQL Server 以外のすべてのデータベースで推奨されません。	N/A (コマンド行のみ)
-dbOutputScriptDir	データベース・スクリプトの出力ディレクトリー 注: 「生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーをオーバーライドする」オプションを選択した場合のみ使用可能です。この値は絶対パスでなければなりません。相対パスを設定した場合、SQL スクリプトはエクスポートまたは実行されず、その結果、サーバー始動時に多数の例外が発生することになります。
-ceiOverrideDataSource	N/A (コマンド行のみ)
-ceiSaPassword 注: 6.2 では、Microsoft SQL Server クライアント以外のすべてのデータベースで推奨されません。	管理ユーザー・パスワード
-ceiSaUser 注: 6.2 では、Microsoft SQL Server クライアント以外のすべてのデータベースで推奨されません。	管理ユーザー名

表 163. Microsoft SQL Server を使用した Common Event Infrastructure データベースの構成のために使用可能な `manageprofiles` パラメーター (続き)

パラメーター	プロファイル管理ツールの「データベース構成」ページに表示される関連フィールド
N/A	生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーをオーバーライドする

manageprofiles コマンド行ユーティリティー

`manageprofiles` コマンド行ユーティリティーはプロファイルを作成します。プロファイルとは、デプロイメント・マネージャー、管理対象ノード、またはスタンドアロン・サーバーのランタイム環境を定義する一連のファイルのことです。

プロファイルはランタイム環境を定義し、サーバー・プロセスが実行中に変更できるすべてのファイルを含んでいます。

`manageprofiles` コマンド行ユーティリティーとそのグラフィカル・ユーザー・インターフェースであるプロファイル管理ツールは、プロファイルを作成する唯一の方法、すなわちランタイム環境を作成する唯一の方法です。 `manageprofiles` コマンド行ユーティリティーでは、プロファイルの拡張および削除も可能です。

コマンド・ファイルは、`install_root/bin` ディレクトリー内にあります。コマンド・ファイルとは、Linux および UNIX プラットフォームの場合は `manageprofiles.sh`、Windows プラットフォームの場合は `manageprofiles.bat` という名前のスクリプトです。

`manageprofiles` コマンド行ユーティリティーは、それが作成、削除、または拡張するそれぞれのプロファイルのログを作成します。ログは以下のディレクトリーにあり、プラットフォームによって異なります。

- Linux UNIX `install_root/logs/manageprofiles`
- Windows `install_root¥logs¥manageprofiles`

ファイルは以下のように命名されます。

- `profile_name_create.log`
- `profile_name_augment.log`
- `profile_name_delete.log`

各プロファイルのテンプレートは、`install_root/profileTemplates` ディレクトリー内にあります。このディレクトリー内に、各プロファイル・タイプに対応するさまざまなディレクトリーがあります。各ディレクトリーは、`manageprofiles` コマンド行ユーティリティーを `-templatePath` オプションを指定して使用するときに指定するパスになります。インストール・ルートの外部にプロファイル・テンプレートがあれば、そのプロファイル・テンプレートを指定することもできます。WebSphere Process Server では、以下のテンプレートを使用してください。

- `default.wbiserver`: WebSphere Process Server スタンドアロン・サーバー・プロファイル用で、スタンドアロン・サーバーを定義します。
- `dmgr.wbiserver`: WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーを定義します。

- `managed.wbiserver`: WebSphere Process Server カスタム・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーにフェデレートされた場合、管理対象ノードを定義します。
- `default.esbserver`: WebSphere Enterprise Service Bus スタンドアロン・サーバー・プロファイル用で、スタンドアロン・サーバーを定義します。
- `dmgr.esbserver`: WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャー・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーを定義します。
- `managed.esbserver`: WebSphere Enterprise Service Bus カスタム・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーにフェデレートされた場合、管理対象ノードを定義します。

構文

`manageprofiles` コマンド行ユーティリティは、以下の作業を実行するために使用します。

- プロファイルを作成する (**-create** パラメーター)

301 ページの『`manageprofiles` コマンド行ユーティリティを使用したプロファイルの作成』の手順を実行します。

- プロファイルを拡張する (**-augment** パラメーター)

402 ページの『`manageprofiles` コマンド行ユーティリティを使用したプロファイルの拡張』の手順を実行します。

注: 拡張解除 (**-unaugment** パラメーター) したプロファイルの使用はサポートされません。

- プロファイルを削除する (**-delete** パラメーター)

477 ページの『`manageprofiles` コマンド行ユーティリティを使用したプロファイルの削除』の手順を実行します。

- すべてのプロファイルを削除する (**-deleteAll** パラメーター)
- すべてのプロファイルをリストする (**-listProfiles** パラメーター)
- 既存のプロファイルの名前から既存のプロファイルの名前を取得する (**-getName** パラメーター)
- 既存のプロファイルのパスから既存のプロファイルの名前を取得する (**-getPath** パラメーター)
- プロファイル・レジストリーを検証する (**-validateRegistry** パラメーター)
- プロファイル・レジストリーを検証して更新する (**-validateAndUpdateRegistry** パラメーター)
- デフォルト・プロファイル名を取得する (**-getDefaultName** パラメーター)
- デフォルト・プロファイル名を設定する (**-setDefaultName** パラメーター)
- プロファイルをバックアップする (**-backupProfile** パラメーター)
- プロファイルをリストアする (**-restoreProfile** パラメーター)
- `manageprofiles` コマンド行ユーティリティの実行に必要な情報を含む応答ファイルを使用する (**-response** パラメーター)

manageprofiles コマンド行ユーティリティで実行する各タスクの必須パラメーターなどの詳細なヘルプを参照するには、**-help** パラメーターを使用します。Windows オペレーティング・システムで manageprofiles コマンド行ユーティリティの **-augment** パラメーターと一緒に help パラメーターを使用した例は、manageprofiles.bat -augment -help となります。出力によって、どのパラメーターが必須でどのパラメーターがオプションかが指定されます。

パラメーター

manageprofiles コマンド行ユーティリティで実行する操作によっては、『manageprofiles パラメーター』で説明している 1 つ以上のパラメーターを指定する必要があります。プロファイル管理ツールは、必須パラメーターが指定されていること、およびこれらのパラメーターの入力値が有効であることを検査します。コマンド行はパラメーター名の大/小文字を検証しないため、パラメーターの名前は必ず大/小文字を正しく区別して入力してください。大/小文字を正しく区別せずにパラメーターを入力すると、誤った結果になることがあります。

コマンドの出力

このコマンドでは、完了時に以下のいずれかのメッセージが表示されます。(正確な言い回しは、プロファイルを作成、削除、または拡張した場合で異なります。)

- INSTCONFSUCCESS: プロファイルが正常に作成されました。
- INSTCONFFAILED: プロファイルを作成できませんでした。
- INSTCONFPARTIALSUCCESS: 一部の重要でないインストール後構成アクションが正常に実行されませんでした。

ステートメントは 2 回以上表示されることもあります。例えば、INSTCONFSUCCESS 行はコマンド行に 3 回表示されます。詳しくは、『インストールとプロファイル作成のログ・ファイル』を参照してください。

manageprofiles パラメーター

WebSphere Process Server の manageprofiles コマンド行ユーティリティでは、以下のパラメーターを使用してください。

manageprofiles コマンド・ファイルは、*install_root/bin* ディレクトリーにあります。コマンド・ファイルとは、Linux および UNIX プラットフォームの場合は manageprofiles.sh、Windows プラットフォームの場合は manageprofiles.bat という名前のスクリプトです。

manageprofiles コマンド行ユーティリティの使用を開始する前に、プロファイルの作成と拡張に関するすべての前提条件を理解しておく必要があります。前提条件について詳しくは、221 ページの『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』を参照してください。プロファイルの作成および拡張について詳しくは、301 ページの『manageprofiles コマンド行ユーティリティを使用したプロファイルの作成』および 402 ページの『manageprofiles コマンド行ユーティリティを使用したプロファイルの拡張』を参照してください。

重要: WebSphere Process Server プロファイルを作成する場合は、WebSphere Process Server のインフォメーション・センターで文書化されているパラメーターのみを使用してください。

注: すべてのパラメーターの大文字小文字が区別されます。

以下のオプションは、`manageprofiles` コマンド行ユーティリティに使用できます。

-adminUserName *adminUser_ID*

管理セキュリティに使用されるユーザー ID を指定します。管理セキュリティが有効になっている既存のプロファイルを拡張する場合は、このパラメーターが必要です。

-adminPassword *adminPassword*

`-adminUserName` パラメーターで指定されている管理セキュリティ・ユーザー ID のパスワードを指定します。管理セキュリティが有効になっている既存のプロファイルを拡張する場合は、このパラメーターが必要です。

-appSchedulerServerName

WebSphere Process Server Application Scheduler の実行が構成されているサーバーの名前。このパラメーターは、プロファイルに複数のサーバーが定義されている場合、プロファイルの拡張に対して有効です。

-augment

拡張テンプレートを使用して既存のプロファイルに変更を加える場合は、`augment` パラメーターを使用します。`augment` パラメーターを使用すると、`manageprofiles` コマンド行ユーティリティは **-templatePath** パラメーターのテンプレートを使用して、**-profileName** パラメーターで指定されているプロファイルを更新または拡張します。使用できる拡張テンプレートは、どの IBM 製品のどのバージョンが環境にインストールされているかによって決まります。

注: `install_dir/profileTemplates` ディレクトリー内のファイルは手動で変更しないでください。例えば、プロファイルの作成中にポートを変更する場合は、プロファイル・テンプレート・ディレクトリー内のファイルを変更するのではなく、プロファイル管理ツールを使用するか、または `manageprofiles` コマンド行ユーティリティで `-startingPort` または `-portsFile` 引数を使用します。

-templatePath の完全修飾ファイル・パスを指定します。以下に例を示します。

```
manageprofiles(.bat)(.sh) -augment -profileName profile_name  
-templatePath fully_qualified_template_path
```

-backupProfile

プロファイル・フォルダー、およびプロファイル・レジストリー・ファイルに含まれているプロファイル・メタデータのファイル・システム・バックアップを実行します。

このパラメーターは、WebSphere Process Server ではサポートされていません。

-backupFile *backupFile_name*

指定されたファイルにプロファイル・レジストリー・ファイルをバックアップします。`backupFile_name` には完全修飾ファイル・パスを指定する必要があります。

-cbeServerName

WebSphere Process Server Common Base Event ブラウザーの実行が構成されているサーバーの名前。

-cdbSchemaName

データベース・スキーマ名。このパラメーターは、Oracle、Informix、Microsoft

SQL サーバー (DataDirect)、および Microsoft SQL サーバーを除くすべてのデータベース・タイプに対して有効です。 dbSchemaName を設定すると、-cdbSchemaName パラメーターは DB2 for z/OS v8、DB2 for z/OS v9、および DB2 UDB for iSeries (ツールボックス) には適用されません。 デフォルトのスキーマ名は表 164 にリストされています。

表 164. デフォルトのスキーマ名

データベース	デフォルトのスキーマ名
Derby Embedded または Derby Embedded 40	APP
Derby Network Server または Derby Network Server 40	dbUserId
DB2 Universal	dbUserId
DB2 for z/OS v8、DB2 for z/OS v9	dbUserId
DB2 UDB for iSeries (ツールボックス)	dbUserId

注: 注: サポートされるデータベースに対して別のスキーマを指定できますが、Derby Embedded/Derby Embedded 40、Derby Network Server/Derby Network Server 40、DB2 Universal については、常にデフォルトのスキーマ名を使用してリカバリー・テーブルが作成されます。

-ceiBufferPool4k

Common Event Infrastructure の 4K バッファ・プールの名前を指定します。このバッファ・プールは、データベース DDL スクリプトが実行できるようになる前にアクティブである必要があります。

注: 6.2 では、DB2 for z/OS 以外のすべてのデータベースで推奨されません。

-ceiBufferPool8k

Common Event Infrastructure の 8K バッファ・プールの名前を指定します。このバッファ・プールは、データベース DDL スクリプトが実行できるようになる前にアクティブである必要があります。

注: 6.2 では、DB2 for z/OS 以外のすべてのデータベースで推奨されません。

-ceiBufferPool16k

Common Event Infrastructure の 16K バッファ・プールの名前を指定します。このバッファ・プールは、データベース DDL スクリプトが実行できるようになる前にアクティブである必要があります。

注: 6.2 では、DB2 for z/OS 以外のすべてのデータベースで推奨されません。

-ceiDbInstallDir

Common Event Infrastructure 用にデータベースがインストールされているディレクトリー。このパラメーターは、dbDelayConfig パラメーターで true を指定した場合にのみ必須になります。

-ceiDbName

作成される Common Event Infrastructure イベント・データベースの名前。DB2 データベース、Derby データベース、Informix データベース、および Microsoft SQL Server データベースの場合、デフォルト値は、指定がなければ event で

す。For DB2 for IBM i (DB2 for i5/OS) Toolbox データベースの場合、デフォルト値は、指定がなければ *SYSBAS です。

Oracle データベースの場合、テーブルを作成してテーブルにデータを取り込むには、Oracle システム ID (SID) が既に作成済みで、イベント・サービス・コマンドで使用可能になっている必要があります。デフォルト値は、指定がなければ orcl です。

-ceiDbnodeName

Common Event Infrastructure の DB2 ノード名 (8 文字以下にする必要があります)。このノードは既にカタログに入れられていて、DB2 サーバーと通信するよう構成済みである必要があります。現行のワークステーションが DB2 クライアントとして構成済みで、パラメーター **dbDelayConfig** が true に設定されている場合に、このパラメーターを設定する必要があります。

注: 6.2 では、DB2 クライアント以外のすべてのデータベースで推奨されません。

-ceiDbUser

注: 6.2 では、Microsoft SQL Server クライアント以外のすべてのデータベースで推奨されません。

Common Event Infrastructure イベント・データベースに使用するユーザー ID を指定します。

DB2 データベースの場合、デフォルト値は、指定がなければ db2inst1 です。DB2 for z/OS データベースの場合、データベースの作成および除去の特権を持つユーザー ID を指定します。このパラメーターは必須です。

For DB2 for IBM i (DB2 for i5/OS) Toolbox データベースの場合、データベースの作成および除去の特権を持つユーザー ID を指定します。このパラメーターは必須です。

Derby データベースの場合は、データ・ソースが Derby データベース認証に使用するユーザー ID です。このパラメーターは、WebSphere ドメイン・セキュリティを無効にしている場合はオプションであり、WebSphere ドメイン・セキュリティを有効にしている場合は必須です。

Informix データベースの場合、イベント・サービス・データベース表を所有する Informix データベース・スキーマのユーザー ID を指定します。WebSphere データ・ソースはこのユーザー ID を使用して Informix データベース接続を認証します。このパラメーターは必須です。

Oracle データベースの場合、イベント・サービス Oracle テーブルを所有する Oracle スキーマのユーザー ID を指定します。ユーザー ID はデータベースの作成中に作成され、WebSphere データ・ソースはこのユーザー ID を使用して Oracle データベース接続を認証します。デフォルト値は、指定がなければ ceiuser です。

Microsoft SQL Server データベースの場合、イベント・サービス・テーブルを所有する SQL Server のユーザー ID を指定します。デフォルト値は、指定がなければ ceiuser です。

-ceiDiskSizeInMB

Common Event Infrastructure イベント・データベース用に作成される MB 単位

のデータベースのサイズ。設定可能な最小値は 10 MB です。DB2 for z/OS の場合、デフォルト値は、指定がなければ 100 MB です。

注: 6.2 では、DB2 for z/OS 以外のすべてのデータベースで推奨されません。

-ceiInstancePrefix

Informix、Oracle、および Microsoft SQL Server データベースの場合、このコマンドは Common Event Infrastructure イベント・データベース・インスタンスの名前を使用して、ディレクトリー内のデータベース・ファイルを固有の名前でグループ化します。デフォルト値は、指定がなければ `ceiinst1` です。

注: 6.2 では、Informix、Oracle、Microsoft SQL Server 以外のすべてのデータベースで推奨されません。

-ceiOverrideDataSource

このパラメーターが `true` に設定されると、コマンドは指定された有効範囲の既存の Common Event Infrastructure サービス・データ・ソースを除去した後に、データ・ソースを新規作成します。このパラメーターが `false` に設定されている場合、指定された有効範囲と同じ有効範囲に別のイベント・サービス・データ・ソースが見つかり、このコマンドは、指定された有効範囲にはイベント・サービス・データ・ソースを作成しません。これが指定されていない場合のデフォルト値は `false` です。

-ceiSaUser

Common Event Infrastructure のテーブル、デバイス、およびキャッシュを作成するための特権を持つ Microsoft SQL Server ID。 `dbDelayConfig` パラメーターが `true` に設定されている場合、このパラメーターは必須です。

注: 6.2 では、Microsoft SQL Server クライアント以外のすべてのデータベースで推奨されません。

-ceiSaPassword

Common Event Infrastructure のテーブル、デバイス、およびキャッシュを作成するための特権を持つ Microsoft SQL Server ID のパスワード。 `ceiSaUser` パラメーターに値を指定したときにこのパラメーターは必須ですが、sa ユーザー ID がパスワードを持たない場合は除きます。

注: 6.2 では、Microsoft SQL Server クライアント以外のすべてのデータベースで推奨されません。

-cellName cell_name

Common Event Infrastructure のプロファイルのセル名を指定します。プロファイルごとに固有のセル名を使用します。このパラメーターは、プロファイルの作成にのみ使用します。既存のプロファイルを拡張する場合は、このパラメーターを指定しないでください。

このパラメーターのデフォルト値は、短縮ホスト名、定数のセル、および末尾の数字の組み合わせに基づいています。以下に例を示します。

```
if (DMgr)
  shortHostNameCellCellNumber
else
  shortHostNameNodeNodeNumberCell
```

ここで、*CellNumber* は 01 から始まる連続番号、*NodeNumber* は、ノード名の定義に使用したノード番号です。

このパラメーターの値には、スペースや、*、?、"、<、>、,、/、¥、| などの無効な文字を使用してはなりません。

-configureBPC true | false

Business Process Choreographer のサンプル構成を作成するかどうかを決定します。このパラメーターを true に設定する場合は、**-adminUserName** および **-adminPassword** パラメーターも設定する必要があります。さらに、このパラメーターが true に設定された場合は、**dbCommonForME** パラメーターと **fileStoreForME** パラメーターの値が使用されます。例えば Business Process Choreographer メッセージング・エンジンの場合、共通データベースにテーブルが作成されるか、あるいはファイル・ストアが使用されます。詳しくは、トポロジー、セットアップ、および構成パスの計画を参照してください。このパラメーターのデフォルトは **-enableAdminSecurity** パラメーターと同じ値です。

注: Business Process Choreographer のサンプル構成では、共通データベース (WPRCSDB) を使用しません。この構成では、必ず Derby データベースが使用されますが、このデータベースは Network Deployment 環境ではサポートされていません。このスタンドアロン・プロファイルを後で統合する予定である場合は、**-configureBPC** を true に設定しないでください。

注: Derby 以外のデータベースを使用すること、またはこのスタンドアロン・サーバーを後で統合することを予定している場合は、**-configureBPC** を false に設定してください。

-configureBRM true | false

ビジネス・ルール・マネージャーを構成します。デフォルト値は false です。

-configureBSpace true | false

WebSphere が提供する Business Spaceを構成します。これは、IBM Websphere Business Process Management ポートフォリオ全体にわたってアプリケーション・ユーザーに統合されたユーザー・エクスペリエンスを提供します。デフォルト値は true です。Business Space は、次のデータベース製品でサポートされています。Derby Embedded または Derby Embedded 40、Derby Network Server または Derby Network Server 40、DB2 Universal、DB2 Data Server、DB2 for IBM i (DB2 for i5/OS)、DB2 for z/OS、Oracle、Microsoft SQL Server 2005 および 2008。

重要: WebSphere Process Server に使用する共通データベースが、Business Space でサポートされているデータベースと一致しない場合、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーは Business Space 構成に Derby Embedded または Derby Embedded 40 データベースを使用します。このプロファイルを 1 つのデプロイメント環境に後で統合することはできません。Derby Embedded または Derby Embedded 40 はデプロイメント環境でサポートされていないためです。デプロイメント環境に対する Business Space の構成についての詳細は、『関連情報』の下にある『Business Space の構成』を参照してください。

-create

プロファイルを作成します。

プロファイルの作成に関する特定の情報については、`manageprofiles -create -templatePath fully_qualified_file_path_to_template -help` を指定します。使用可能なテンプレートは以下のとおりです。

- `default.wbiserver`: WebSphere Process Server スタンドアロン・サーバー・プロファイル用で、スタンドアロン・サーバーを定義します。
- `dmgr.wbiserver`: WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーを定義します。
- `managed.wbiserver`: WebSphere Process Server カスタム・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーにフェデレートされた場合、管理対象ノードを定義します。
- `default.esbserver`: WebSphere Enterprise Service Bus スタンドアロン・サーバー・プロファイル用で、スタンドアロン・サーバーを定義します。
- `dmgr.esbserver`: WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャー・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーを定義します。
- `managed.esbserver`: WebSphere Enterprise Service Bus カスタム・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーにフェデレートされた場合、管理対象ノードを定義します。

-dbAppMePassword *app_me_pwd*

このパラメーターは、プロファイル作成中にユーザー指定のユーザー名およびパスワードを入力した場合、および **dbType** に ORACLE を指定した場合には必須です。デフォルトは `dbPassword` です。

-dbAppMeUserId *app_me_userID*

このパラメーターは、プロファイル作成中にユーザー指定のユーザー名およびパスワードを入力した場合、および **dbType** に ORACLE を指定した場合には必須です。デフォルト・ユーザー名は、Oracle データベース名 (SID) の最初の 3 文字です。例: SID が ORCL の場合、`dbAppMeUserId` は ORCSA00。

-dbBPCMePassword *bpc_me_pwd*

-dbBPCMeUserID 用に指定されたユーザー ID のパスワード。

-dbBPCMeUserID *bpc_me_userID*

このパラメーターは、次の条件が満たされた場合に使用されます。

1. **dbType** = ORACLE
2. **dbCommonForME** = true
3. **configureBPC** = true

注: **configureBPC** = true は、スタンドアロンのプロファイルでのみ有効です。

上記の条件がどのように設定されるかにより、4 つのシナリオが考えられます。

- 上記 3 つの条件のいずれか 1 つでも満たされなかった場合、**-dbBPCMeUserID** パラメーターは必要ありません。例えば、**dbType** が ORACLE に設定されなかった場合、**dbCommonForME** が true に設定されなかった場合、あるいは **configureBPC** が true に設定されなかった場合、**-dbBPCMeUserID** は無視されます。
- 3 つの条件がすべて満たされ、かつ **-dbBPCMeUserID** パラメーターと **-dbBPCMePassword** パラメーターの両方が設定された場合、これらのパラメ

ーターは Oracle Business Process Choreographer メッセージング・エンジンの認証別名に使用されます。さらに、**-dbBPCMeUserID** は、Oracle Business Process Choreographer メッセージング・エンジンのスキーマ名に使用されま

- 3 つの条件がすべて満たされている状態で、**-dbBPCMeUserID** パラメーターと **-dbBPCMePassword** パラメーターのどちらか一方だけが設定された場合は、エラーが生成されます。
- 3 つの条件がすべて満たされ、**-dbBPCMeUserID** パラメーターと **-dbBPCMePassword** パラメーターのいずれも設定されなかった場合は、**dbSysMePassword** パラメーターを設定する必要があります。このパラメーターは、Oracle Business Process Choreographer メッセージング・エンジンの認証別名に使用されます。Oracle Business Process Choreographer メッセージング・エンジン・スキーマの名前の値が自動的に生成され、Business Process Choreographer メッセージング・エンジンの認証別名にも使用されます。
 - **dbUserId** パラメーターが設定された場合、このパラメーターの値は Oracle Business Process Choreographer メッセージング・エンジンの認証別名と Oracle Business Process Choreographer メッセージング・エンジンのスキーマ名の両方に使用されます。
 - **dbUserId** パラメーターを設定しなかった場合、このパラメーターの値が自動的に生成されます。

-dbCeiMePassword *cei_me_pwd*

このパラメーターは、プロファイル作成中にユーザー指定のユーザー名およびパスワードを入力した場合、および **dbType** に ORACLE を指定した場合には必須です。デフォルトは dbPassword です。

-dbCeiMeUserID *cei_me_userID*

このパラメーターは、プロファイル作成中にユーザー指定のユーザー名およびパスワードを入力した場合、および **dbType** に ORACLE を指定した場合には必須です。デフォルト・ユーザー名は、Oracle データベース名 (SID) の最初の 3 文字です。例: SID が ORCL の場合、dbCeiMeUserID は ORCCM00。

-dbCeiPassword *cei_db_pwd*

このパラメーターは、プロファイル作成中にユーザー指定のユーザー名およびパスワードを入力した場合、および **dbType** に ORACLE を指定した場合には必須です。デフォルトは dbPassword です。

-dbCeiUserId *cei_userID*

Oracle データベースの場合、CEI ユーザー ID を指定します。このパラメーターは、プロファイル作成中にユーザー指定のユーザー名およびパスワードを入力した場合、および **dbType** に ORACLE を指定した場合には必須です。デフォルト・ユーザー名は、Oracle データベース名 (SID) の最初の 3 文字です。例: SID が ORCL の場合、dbCeiUserId は ORCCEID。

-dbCommonForME

メッセージング・エンジン用の共通データベースを使用するかどうかを指示します。DB2 for z/OS データベースの場合、デフォルト値は true です。それ以外のすべてのデータベースの場合のデフォルト値は false です。このパラメーターが false に設定されている場合、メッセージング・エンジンは、デフォルトのデータ・ストアとして Derby データベースを使用します。

-dbCommonPassword

このパラメーターは、プロファイル作成中にユーザー指定のユーザー名およびパスワードを入力した場合、および **dbType** に ORACLE を指定した場合には必須です。デフォルトは dbPassword です。

-dbCommonUserId

このパラメーターは、プロファイル作成中にユーザー指定のユーザー名およびパスワードを入力した場合には必須です。デフォルト・ユーザー名は、Oracle データベース名 (SID) の最初の 3 文字です。例: SID が ORCL の場合、dbCommonUserId は ORCCOMM。

-dbConnectionLocation

DB2 for z/OS データベースの場所。

-dbCreateNew

データベースを作成するのか、再使用するのかを示します。有効な値は true または false です。デフォルト値は true です。

-dbDelayConfig

テーブルの作成をプロファイルの作成後まで延期するかどうかを示します。有効な値は true または false です。このパラメーターは、デフォルトでは false に設定されています。リモート・データベースを使用している場合にデータベース・スクリプトの実行を遅延するには、このパラメーターを true に設定します。

-dbDriverType

データベースのドライバー・タイプ。Oracle データベースの場合、有効な値は ORACLE_THIN または ORACLE_OCI です。DB2 データベースの場合、有効な値は 2 または 4 です。

-dbHostName

データベース・サーバーのホスト名または IP アドレス。デフォルト値は localhost です。

-dbInstance

Informix データベースのデータベース・インスタンス名。

-dbJDBCClasspath

JDBC ドライバー・ファイルのロケーション。Oracle データベースにアクセスするには、ojdbc6.jar ドライバーをインストールする必要があります。

注: Oracle 10g には、ojdbc6.jar ドライバーは含まれていません。ドライバーは、Oracle の Web サイトからダウンロードできます。

-dbLocation

Oracle データベースまたは Informix データベースを使用している場合は、ORACLE_HOME またはデータベース・インストール・ディレクトリー。パラメーター **dbDelayConfig** が false に設定されるとき、このパラメーターは必須です。

-dbName

データベースの名前。デフォルト設定では、Oracle データベースの場合は

orcl、IBM i データベースの場合は *SYSBAS、その他のすべてのサポート対象データベースの場合は WPRCSDB が設定されます。

-dbOutputScriptDir

エクスポートされたデータベース・スクリプトのロケーション。

注: 「生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーをオーバーライドする」オプションを選択した場合のみ使用可能です。この値は絶対パスでなければなりません。相対パスを設定した場合、SQL スクリプトはエクスポートまたは実行されず、その結果、サーバー始動時に多数の例外が発生することになります。

-dbPassword

データベース認証に必要なパスワード。このパラメーターは、Derby Embedded または Derby Embedded 40 を除くすべてのデータベースに必要です。

-dbProviderType *provider*

現在の dbType のプロバイダー・タイプを指定するオプション・パラメーター。現在、Informix dbType にのみ適用可能です。

-dbSchemaName

DB2 for z/OS v8、DB2 for z/OS v9、および DB2 UDB for iSeries (ツールボックス) 用のデータベース・スキーマ名。dbSchemaName と cdbSchemaName を両方とも設定した場合は、cdbSchemaName が優先します。このパラメーターは WebSphere Process Server V7 では推奨されていません。

-dbServerPort

データベース・サーバーのポート番号。使用しているデータベースに応じて、デフォルトのポート番号以外の別のポート番号を指定できます。

-dbStorageGroup

DB2 z/OS データベースのストレージ・グループ名。

-dbSysMePassword *sys_me_pwd*

このパラメーターは、プロファイル作成中にユーザー指定のユーザー名およびパスワードを入力した場合、および dbType に ORACLE を指定した場合には必須です。デフォルトは dbPassword です。

-dbSysMeUserID *sys_me_userID*

このパラメーターは、プロファイル作成中にユーザー指定のユーザー名およびパスワードを入力した場合、および dbType に ORACLE を指定した場合には必須です。デフォルト・ユーザー名は、Oracle データベース名 (SID) の最初の 3 文字です。例: SID が ORCL の場合、dbSysMeUserID は ORCSS00。

-dbSysPassword *sys_pwd*

dbDelayConfig を false に設定した場合、および ORACLE を dbType に指定した場合、このパラメーターは必須です。

-dbSysUserId *sys_user_id*

この ID は SYSDBA 特権を持つ必要があります。Oracle の内部ユーザー sys は使用しないでください。dbDelayConfig を false に設定した場合、および ORACLE を dbType に指定した場合、このパラメーターは必須です。

-dbType

データベース・タイプ。

WebSphere Process Server と併用しているデータベース製品のタイプとして、以下の値のいずれかを設定します。

- DERBY_EMBEDDED40 (Derby Embedded 40 JDBC プロバイダーを使用する Derby Embedded データベース)
- DERBY_NETWORKSERVER40 (Derby Network Server 40 JDBC プロバイダーを使用する Derby Network Server データベース)
- DB2_UNIVERSAL (DB2 Universal データベース)
- DB2_DATASERVER (DB2 Data Server データベース)
- DB2UDBOS390_V8_1 (DB2 for z/OS v8 データベース)
- DB2UDBOS390_V9_1 (DB2 for z/OS v9 データベース)
- DB2UDBISERIES_TOOLBOX (ツールボックス・ドライバーを使用する DB2 for IBM i または DB2 for i5/OS データベース)
- INFORMIX (Informix Dynamic Server データベース)
- MSSQLSERVER_DATADIRECT (DataDirect ドライバーを使用する Microsoft SQL Server データベース)
- MSSQLSERVER_MICROSOFT (Microsoft ドライバーを使用する Microsoft SQL Server データベース)

注: Microsoft SQL Server JDBC Driver バージョン 1.2 (Microsoft SQL Server (Microsoft) ドライバー) に対するサポートは、WebSphere Process Server バージョン 6.2.0.1 で追加されました。

- ORACLE (Oracle データベース)

-dbUserId

すべてのデータベース・タイプに対するユーザー ID。データベースの作成および除去の特権を持つユーザー ID を指定します。WebSphere データ・ソースは、この ID を使用してデータベース接続を認証します。

DB2 データベースの場合、データベース表を所有するデータベースのユーザー ID を指定します。デフォルト値は db2inst1 です。DB2 for z/OS データベースの場合、データベースの作成および除去の特権を持つユーザー ID を指定します。このパラメーターは必須です。

For DB2 for IBM i (DB2 for i5/OS) Toolbox データベースの場合、データベースの作成および除去の特権を持つユーザー ID を指定します。このパラメーターは必須です。

Derby データベースの場合は、データ・ソースが Derby データベース認証に使用するユーザー ID です。これは、Derby Network Server データベースにのみ適用されます。デフォルトは、セキュリティーが有効な場合は -adminUserName、有効でない場合は TEST です。

Derby Network Server データベースの場合、データベース表を所有する Derby のユーザー ID を指定します。CommonDB のデフォルトは、セキュリティーが有効な場合は adminUserName、有効でない場合は TEST です。

Informix データベースの場合、データベース表を所有する Informix データベースのユーザー ID を指定します。WebSphere データ・ソースはこのユーザー ID を使用して Informix データベース接続を認証します。このパラメーターは必須です。

Oracle データベースの場合、データベース表を所有する Oracle のユーザー ID を指定します。指定されたユーザー ID は、デプロイメント環境プロファイルの作成に使用されます。このユーザー ID には、SYSDBA 特権が設定されている必要があります。ユーザー ID はデータベースの作成中に作成され、WebSphere データ・ソースはこのユーザー ID を使用して Oracle データベース接続を認証します。デフォルト値は、ceiuser です (CEI に指定されていない場合)。

Microsoft SQL Server データベースの場合、データベース表を所有する SQL Server のユーザー ID を指定します。

-debug

manageprofiles コマンド行ユーティリティーが使用する Apache Ant ユーティリティーのデバッグ機能をオンにします。

-defaultPorts

プロファイルにデフォルトのポート値または基本ポート値を割り当てます。

-startingPort または -portsFile パラメーターを使用している場合は、このパラメーターを使用しないでください。

-startingPort パラメーター、-defaultPorts パラメーター、または -portsFile パラメーターのいずれも指定していない場合、manageprofiles コマンド行ユーティリティーは、プロファイルの作成中に、自動的に生成された推奨ポートのセットを使用します。この推奨ポート値は、デフォルト・ポートが使用可能かどうかに応じて、デフォルト・ポート値とは異なる場合があります。

注: 管理対象プロファイル・テンプレートを使用している場合は、このパラメーターを使用しないでください。

-delete

プロファイルを削除します。

プロファイルを削除してもプロファイル・ディレクトリーは削除されません。例えば、/usr/WebSphere/ProcServer/profiles/managedProfile ディレクトリーにプロファイルを作成した場合、このディレクトリーはプロファイルを削除した後も残ります。

このディレクトリーは削除しても、残しておいてもかまいません。ただし、*profile_root/logs* ディレクトリーには、プロファイルのアンインストールに関する情報が含まれています。例えば、アンインストール手順中の問題の原因を判別するために、*_nodeuninst.log* ファイルを保持することができます。

プロファイル・レジストリー内の、拡張テンプレートが登録されているプロファイルを削除すると、拡張解除アクションが自動的に実行されます。

-deleteAll

登録済みのすべてのプロファイルを削除します。

プロファイルを削除してもプロファイル・ディレクトリーは削除されません。/usr/WebSphere/ProcServer/profiles/managedProfile ディレクトリーにプロファイルを作成した場合、このディレクトリーはプロファイルを削除した後も残ります。

このディレクトリーは削除しても、残しておいてもかまいません。ただし、*profile_root/logs* ディレクトリーには、プロファイルのアンインストールに関

する情報が含まれています。例えば、アンインストール手順中の問題の原因を判別するために、`_nodeuninst.log` ファイルを保持することができます。

プロファイル・レジストリー内の、拡張テンプレートが登録されているプロファイルを削除すると、拡張解除アクションが自動的に実行されます。

-dmgrHost *dmgr_host_name*

デプロイメント・マネージャーが稼働しているワークステーションを示します。作成時または拡張時にカスタム・プロファイルを統合する場合に、このパラメーターと **dmgrPort** パラメーターを指定します。このパラメーターは、`managed.wbiserver` および `managed.esbserver` プロファイル・テンプレートと併用できます。

ホスト名には、長い DNS 名、短い DNS 名、またはデプロイメント・マネージャー・ワークステーションの IP アドレスを指定できます。

このオプション・パラメーターを指定すると `manageprofiles` コマンド行ユーティリティーは、カスタム・プロファイルを作成するときに、カスタム・ノードのデプロイメント・マネージャー・セルへの統合を試行するよう指示されます。このパラメーターは、デプロイメント・マネージャー・プロファイルまたはスタンドアロン・サーバー・プロファイルの作成時には無視されます。

デプロイメント・マネージャーが稼働していない場合にカスタム・ノードを統合すると、ログのインストール・インディケーターが完全な失敗を表す `INSTCONFFAILED` となります。結果として生成されるカスタム・プロファイルは使用不可になります。同じプロファイル名で別のカスタム・プロファイルを作成する前に、カスタム・プロファイル・ディレクトリーをプロファイル・リポジトリー (プロファイルのインストール・ルート・ディレクトリー) から移動させる必要があります。

セキュリティを使用可能に設定している場合、またはデフォルトの JMX コネクター・タイプを変更している場合は、`manageprofiles` コマンド行ユーティリティーによる統合はできません。代わりに、`addNode` コマンドを使用してください。

このパラメーターのデフォルト値は `localhost` です。このパラメーターの値は正しく形成されたホスト名でなければならず、スペースや、`*`、`?`、`"`、`<`、`>`、`,`、`/`、`¥`、`|` などの無効な文字を使用してはなりません。デプロイメント・マネージャーとの接続を `dmgrPort` パラメーターと併用できるようになっている必要もあります。

-dmgrPort *dmgr_port_number*

デプロイメント・マネージャーの SOAP ポートを示します。作成時または拡張時にカスタム・プロファイルを統合する場合に、このパラメーターと **dmgrHost** パラメーターを指定します。デプロイメント・マネージャーが稼働しており、アクセス可能である必要があります。

セキュリティを使用可能に設定している場合、またはデフォルトの JMX コネクター・タイプを変更している場合は、`manageprofiles` コマンド行ユーティリティーによる統合はできません。代わりに、`addNode` コマンドを使用してください。

このパラメーターのデフォルト値は 8879 です。指定するポートは正整数で、デプロイメント・マネージャーとの接続が `dmgrHost` パラメーターと併用できるようになっている必要があります。

-enableAdminSecurity true | false

管理セキュリティを使用可能にします。有効な値は、`true` または `false` です。デフォルト値は `false` です。デプロイメント環境のプロファイルを作成する場合は、このパラメーターを `true` に設定する必要があります。このパラメーターは、プロファイルを作成する場合にのみ使用してください。既存のプロファイルを拡張する場合は、このパラメーターを指定しないでください。

`enableAdminSecurity` が `true` に設定されている場合は、`-adminUserName` および `-adminPassword` パラメーターをこれらのパラメーターの値と一緒に指定する必要があります。アプリケーション・サーバーのインストール中にサンプルがインストールされた場合、管理セキュリティを使用可能にするプロファイルを作成するときに、`-samplesPassword` パラメーターも指定する必要があります。管理セキュリティが有効になっている場合に `-samplesPassword` パラメーターが指定されていないと、プロファイルは正常に作成されますが、サンプルを実行しようとすると、サーバーのシステム出力ログに例外と失敗が記録されます。

注: `enableAdminSecurity` を `true` に設定すると、`configureBPC` もデフォルトの `true` に設定されます。意図したとおりにセットアップが実行されるようにするため `configureBPC` パラメーターを明示的に `false` に設定する必要がある場合は、パラメーターの記述を確認してください。

Linux

-enableService true | false

Linux サービスの作成を有効にします。有効な値は、`true` または `false` です。このパラメーターのデフォルト値は `false` です。このパラメーターは、プロファイルを作成する場合にのみ使用してください。既存のプロファイルを拡張する場合は、このパラメーターを指定しないでください。

`manageprofiles` コマンド行ユーティリティの `-enableService` オプションを `true` に設定して実行すると、`root` ユーザーがコマンドを実行したときに Linux サービスがプロファイルと共に作成されます。非 `root` ユーザーが `manageprofiles` コマンド行ユーティリティを実行すると、プロファイルは作成されますが、Linux サービスは作成されません。非 `root` ユーザーは Linux サービスをセットアップするための十分な許可を持たないため、サービスは作成されません。INSTCONPARTIALSUCCESS の結果がプロファイル作成の終了時に表示され、現行ユーザーは Linux サービスをセットアップするための十分な許可がないことを示すメッセージがプロファイル作成ログ `install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log` に記載されます。

-federateLater true | false

管理対象プロファイルをプロファイルの作成中に統合するか、または `addNode` コマンドを使用して後で統合するかを示します。WebSphere Process Server プロファイルを作成する場合は、値を入力しないでください。デフォルトである `true` を使用してください。

-federateLaterProcServer true | false

管理対象プロファイルを `managed.wbiserver` テンプレートを使用して後で統合するかどうかを示します。有効な値は `true` または `false` です。 `dmgrHost`、

dmgrPort、**dmgrAdminUserName** および **dmgrAdminPassword** パラメーターが設定されていない場合、このパラメーターのデフォルト値は **true** です。

-federateLaterWESB true | false

管理対象プロファイルを `managed.wesbserver` テンプレートを使用して後で統合するかどうかを示します。有効な値は **true** または **false** です。 **dmgrHost**、**dmgrPort**、**dmgrAdminUserName** および **dmgrAdminPassword** パラメーターが設定されていない場合、このパラメーターのデフォルト値は **true** です。

-fileStoreForME true | false

true に設定すると、メッセージング・エンジンに対してファイル・ストア・データ・ストアが使用されます。このパラメーターのデフォルト値は **false** です。

注: **-dbCommonForME** パラメーターと **-fileStoreForME** パラメーターの両方を **true** に設定することはできません。そのように設定すると、妥当性検査エラーが発生します。

-getDefaultName

デフォルト・プロファイルの名前を返します。

-getName

指定した **-profilePath** パラメーターで登録されたプロファイルの名前を取得します。

-getPath

指定された名前のプロファイルのファイル・システム・ロケーションを取得します。 **-profileName** パラメーターが必要です。

-help

コマンド構文を表示します。

-hostName *host_name*

プロファイルを作成するホストの名前を指定します。既存のプロファイルを拡張する場合は、このパラメーターを指定しないでください。これは、最初の製品のインストール時に指定したホスト名と一致している必要があります。このパラメーターのデフォルト値は、長形式のドメイン・ネーム・システムです。このパラメーターは、プロファイルの作成にのみ必要です。このパラメーターの値は有効な IPv6 ホスト名でなければならず、スペースや、*、?、"、<、>、,、/、¥、| などの無効な文字を使用してはなりません。

-ignoreStack

拡張された特定のプロファイルの拡張を解除するための **-templatePath** パラメーターと併用されるオプション・パラメーター。

注: 拡張解除 (**-unaugment** パラメーター) したプロファイルの使用はサポートされません。

-importPersonalCertKS *keystore_path*

プロファイルの作成時に個人証明書をインポートするために使用する鍵ストア・ファイルへのパスを指定します。個人証明書は、サーバーのデフォルトの個人証明書です。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そうしないと、

manageprofiles ユーティリティは、個人証明書の公開鍵を trust.p12 ファイルに追加し、ルート署名証明書を作成します。

-importPersonalCertKS パラメーターと -personalCertDN パラメーターを同時に指定することはできません。個人証明書を作成またはインポートしない場合は、個人証明書がデフォルトで作成されます。

-importPersonal で始まるいずれかのパラメーターを指定する場合は、そのすべてを指定する必要があります。

-importPersonalCertKSType *keystore_type*

-importPersonalCertKS パラメーターで指定する鍵ストア・ファイルのタイプを指定します。値は、JCEKS、CMSKS、PKCS12、PKCS11、および JKS のいずれかです。ただし、このリストは、java.security ファイルのプロバイダーによって変わる場合があります。

-importPersonal で始まるいずれかのパラメーターを指定する場合は、そのすべてを指定する必要があります。

-importPersonalCertKSPassword *keystore_password*

-importPersonalCertKS パラメーターで指定する鍵ストア・ファイルのパスワードを指定します。

-importPersonal で始まるいずれかのパラメーターを指定する場合は、そのすべてを指定する必要があります。

-importPersonalCertKSAlias *keystore_alias*

-importPersonalCertKS パラメーターで指定する鍵ストア・ファイルに組み込まれている証明書の別名を指定します。証明書がサーバーのデフォルトの鍵ストア・ファイルに追加され、サーバーのデフォルトの個人証明書として使用されます。

-importPersonal で始まるいずれかのパラメーターを指定する場合は、そのすべてを指定する必要があります。

-importSigningCertKS *keystore_path*

プロファイルの作成時にルート証明書をインポートするために使用する鍵ストア・ファイルへのパスを指定します。ルート証明書は、サーバーのデフォルトのルート証明書として使用する証明書です。-importSigningCertKS パラメーターと -signingCertDN パラメーターを同時に指定することはできません。ルート署名証明書を明示的に作成またはインポートしない場合は、デフォルトでルート署名証明書が作成されます。

-importSigning で始まるいずれかのパラメーターを指定する場合は、そのすべてを指定する必要があります。

-importSigningCertKSType *keystore_path*

-importSigningCertKS パラメーターで指定する鍵ストア・ファイルのタイプを指定します。有効な値は、JCEKS、CMSKS、PKCS12、PKCS11、および JKS のいずれかです。ただし、このリストは、java.security ファイルのプロバイダーによって変わる場合があります。

-importSigning で始まるいずれかのパラメーターを指定する場合は、そのすべてを指定する必要があります。

-importSigningCertKSPassword *keystore_password*

-importSigningCertKS パラメーターで指定する鍵ストア・ファイルのパスワードを指定します。

-importSigning で始まるいずれかのパラメーターを指定する場合は、そのすべてを指定する必要があります。

-importSigningCertKSAlias *keystore_alias*

-importSigningCertKS パラメーターで指定する鍵ストア・ファイルに組み込まれている証明書の別名を指定します。証明書がサーバーのデフォルトのルート鍵ストアに追加され、サーバーのデフォルトのルート証明書として使用されます。

-importSigning で始まるいずれかのパラメーターを指定する場合は、そのすべてを指定する必要があります。

-isDefault

一緒に指定されている **-profileName** パラメーターで識別されるプロファイルが登録された場合には、そのプロファイルをデフォルト・プロファイルにすることを指定します。デフォルト・プロファイルを処理するコマンドを発行する場合には、このコマンドの **-profileName** 属性を使用する必要はありません。

-isDeveloperServer

サーバーを開発の目的にのみ使用するかどうかを指定します。このパラメーターは、アプリケーションをその実動アプリケーション・サーバーにデプロイする前に、実動サーバー以外のサーバーでアプリケーションをテストするためのプロファイルを作成する場合に役立ちます。このパラメーターは、WebSphere Process Server でプロファイルを作成する場合にのみ有効です。

WebSphere Process Server プロファイルの作成時に **-isDeveloperServer** を設定すると、事前に構成された VMM ファイル・リポジトリがインストールされます。このファイル・リポジトリには、Business Process Choreographer の要員分析をテストする目的で使用できる組織のサンプルが格納されており、そのままの状態ですぐに使用できます。

-keyStorePassword *keyStore_password*

プロファイルの作成中に作成されたすべての鍵ストア・ファイルで使用するパスワードを指定します。鍵ストア・ファイルは、デフォルトの個人証明書およびルート署名証明書用に作成されます。

-listAugments

プロファイル・レジストリーに含まれているプロファイルの登録済み拡張をリストします。 **-profileName** パラメーターと **-listAugments** パラメーターを一緒に指定する必要があります。

-listProfiles

定義済みのプロファイルをすべてリストします。

-ndtopology

プロファイルの作成にデプロイメント環境パスを使用するかどうかを示します。有効な値は true または false です。

-nodeName *node_name*

新しいプロファイルを使用して作成されるノードのノード名を指定します。既存のプロファイルを拡張する場合は、このパラメーターを指定しないでください。セル内、またはワークステーション上で固有な値を使用してください。同じ製品

のバイナリー・セットを共有する各プロファイルは、それぞれ固有のノード名を持つ必要があります。このパラメーターは、`default.wbiserver`、`dmgr.wbiserver`、および `managed.wbiserver` テンプレートを使用してプロファイルを作成する場合にのみ必要です。

Linux **UNIX** **Windows** このパラメーターのデフォルト値は、短縮ホスト名、プロファイル・タイプ、および末尾の番号に基づきます。以下に例を示します。

```
if (DMgr)
  shortHostNameCellManagerNodeNumber
else
  shortHostNameNodeNumber
```

ここで、`NodeNumber` は 01 から始まる連続番号です。

このパラメーターの値には、スペースや、*、?、"、<、>、,、/、¥、| などの無効な文字を使用してはなりません。

-omitAction *feature1 feature2... featureN*

プロファイルのフィーチャーを除外するオプション・パラメーター。

各プロファイル・テンプレートには、いくつかのオプション・フィーチャーが事前定義されています。`samplesInstallAndConfig` オプションは、選択されたサンプル・アプリケーションと一緒に製品がインストールされたときのみ利用可能です。以下のオプション・フィーチャーは、`-omitAction` パラメーターと併用して、以下のプロファイル・テンプレートに使用できます。

- **デフォルト** - アプリケーション・サーバー
 - `deployAdminConsole`
 - `samplesInstallAndConfig`
 - `defaultAppDeployAndConfig`
- **dmgr** - デプロイメント・マネージャー
 - `deployAdminConsole`

-personalCertDN *distinguished_name*

プロファイルの作成時に、作成する個人証明書の識別名を指定します。識別名は、引用符で囲んで指定します。このデフォルトの個人証明書は、サーバーの鍵ストア・ファイルにあります。 `-importPersonalCertKSType` パラメーターと `-personalCertDN` パラメーターを同時に指定することはできません。`-personalCertValidityPeriod` パラメーターおよび `-keyStorePassword` パラメーターを参照してください。

-personalCertValidityPeriod *validity_period*

デフォルトの個人証明書の有効期間を年数で指定するオプション・パラメーター。このパラメーターを `-personalCertDN` パラメーターと一緒に指定しない場合は、デフォルトの個人証明書の有効期間は 1 年になります。

-portsFile *file_path*

新規プロファイルのポート設定を定義しているファイルへのパスを指定するオプション・パラメーター。既存のプロファイルを拡張する場合は、このパラメーターを指定しないでください。

`-startingPort` または `-defaultPorts` パラメーターを使用している場合は、このパラメーターを使用しないでください。

-startingPort パラメーター、-defaultPorts パラメーター、または -portsFile パラメーターのいずれも指定していない場合、manageprofiles コマンド行ユーティリティーは、プロファイルの作成中に、自動的に生成された推奨ポートのセットを使用します。この推奨ポート値は、デフォルト・ポートが使用可能かどうかに応じて、デフォルト・ポート値とは異なる場合があります。

-profileName *profile_name*

プロファイルの名前を指定します。プロファイルの作成時には固有値を使用してください。

同じ製品のバイナリー・セットを共有する各プロファイルは、それぞれ固有の名前を持つ必要があります。デフォルトのプロファイル名は、プロファイル・タイプと末尾の番号に基づきます。以下に例を示します。

profileType ProfileNumber

ここで、*profileType* は、ProcSrv、Dmgr、または Custom などの値で、*ProfileNumber* は、固有のプロファイル名を作成する連続番号です。

このパラメーターの値には、スペースや、*、?、"、<、>、,、/、¥、| などの無効な文字を使用してはなりません。使用されていないプロファイル名を選択する必要があります。

-profilePath *profile_root*

プロファイルへの完全修飾パスを指定します。このパスは、インフォメーション・センターでは *profile_root* と表されます。

以下に例を示します。

`-profilePath profile_root`

このパラメーターは、プロファイルを作成する場合にのみ使用してください。既存のプロファイルを拡張する場合は、このパラメーターを設定しないでください。

Windows **Windows プラットフォーム:** 完全修飾パスにスペースが含まれている場合、値を引用符で囲みます。

デフォルト値は *install_root* ディレクトリー、*profiles* サブディレクトリー、およびファイルの名前に基づいています。

例えば、プロファイル作成のデフォルトは以下のようになります。

`WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileName`

ここで、`WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME` は、`install_root/properties` ディレクトリー内の `wasprofile.properties` ファイルで定義されています。

このパラメーターの値は、ターゲット・システムの有効なパスで、現在未使用のものである必要があります。

このディレクトリーへの書き込み権限が必要です。

-response *response_file*

コマンド行から `manageprofiles` コマンド行ユーティリティーを使用して、すべての API 関数にアクセスします。

コマンド行インターフェースは、プロパティ・ファイルの指定されたコマンドの入力引数を、キーと値という形式で含んでいる応答ファイルによって駆動できます。以下に、create 命令に対する応答ファイルの例を示します。

```
create
profileName=testResponseFileCreate
profilePath=profile_root
templatePath=install_root/profileTemplates/default
nodeName=myNodeName
cellName=myCellName
hostName=myHostName
omitAction=myOptionalAction1, myOptionalAction2
```

Windows **Windows プラットフォーム:** Windows オペレーティング・システムの PATH ステートメントでは、スラッシュ (/) または円記号 (¥) のいずれかが使用できます。パス記述で円記号を使用する場合は、そのパスを正しく把握するために、応答ファイルには二重の円記号が必要です。以下に、create 命令に対する応答ファイルで二重の円記号を使用している例を示します。

```
create
templatePath=C:¥¥WebSphere¥¥ProcServer¥¥profileTemplates¥¥default
```

各種のプロファイル・テンプレートおよびアクションについて、どの入力引数が必要であるかを判別するには、manageprofiles コマンド行ユーティリティに **-help** パラメーターを付けて使用してください。

-restoreProfile

プロファイル・バックアップをリストアします。**-backupFile** パラメーターと一緒に使用する必要があります。このパラメーターは、WebSphere Process Server ではサポートされていません。

-samplesPassword *samplesPassword*

サンプルに使用されるパスワードを作成します。パスワードは、アプリケーション・サーバーのインストール中にインストールした Web アプリケーションのサンプルに対するアクセスを制限するために使用されます。

-serverName *server_name*

サーバーの名前を指定します。このパラメーターを指定しない場合は、デフォルト・プロファイル用のデフォルトのサーバー名は **server1** になります。

-serverType **DMGR**

管理プロファイルのタイプを指定します。管理プロファイルに **DMGR** を指定します。このパラメーターは、管理プロファイルを作成する場合は必須です。

Linux

-serviceUserName *service_user_ID*

Linux サービスの作成中に使用されるユーザー ID を指定して、Linux サービスがこのユーザー ID で実行されるようにします。Linux サービスは、ユーザー ID がログオンするごとに実行されます。

-setDefaultName

既存のプロファイルの 1 つにデフォルト・プロファイルを設定します。**-profileName** パラメーターと併用する必要があります。以下に例を示します。

```
manageprofiles(.bat)(.sh) -setDefaultName -profileName profile_name
```

-signingCertDN *distinguished_name*

プロファイルの作成時に、作成するルート署名証明書の識別名を指定します。識別名は、引用符で囲んで指定します。このデフォルトの個人証明書は、サーバー

の鍵ストア・ファイルにあります。 `-importSigningCertKS` パラメーターと `-signingCertDN` パラメーターを同時に指定することはできません。ルート署名証明書を明示的に作成またはインポートしない場合は、デフォルトでルート署名証明書が作成されます。 `-signingCertValidityPeriod` パラメーターおよび `-keyStorePassword` を参照してください。

-signingCertValidityPeriod *validity_period*

ルート署名証明書の有効期間を年数で指定するオプション・パラメーター。このパラメーターを `-signingCertDN` パラメーターと一緒に指定しない場合は、ルート署名証明書の有効期間は 20 年になります。

-startingPort *startingPort*

プロファイルにすべてのポートを生成して割り当てるための開始ポート番号を指定します。

既存のプロファイルを拡張する場合は、このパラメーターを設定しないでください。ポート値は **-startingPort** から順に割り当てられ、使用中のポートは除外されます。システムは、ポートの競合を避けるために、現在使用中のポートを認識および解決して、ポート割り当てを決定します。

このパラメーターは、 **defaultPorts** パラメーターまたは **portsFile** パラメーターと併用しないでください。

-startingPort パラメーター、 **-defaultPorts** パラメーター、または **-portsFile** パラメーターのいずれも指定していない場合、 `manageprofiles` コマンド行ユーティリティーは、プロファイルの作成中に、自動的に生成された推奨ポートのセットを使用します。この推奨ポート値は、デフォルト・ポートが使用可能かどうかに応じて、デフォルト・ポート値とは異なる場合があります。

注: 管理対象プロファイル・テンプレートを使用している場合は、このパラメーターを使用しないでください。

-templatePath *template_path*

インストール・ルート・ディレクトリー内にあるテンプレート・ファイルへのディレクトリー・パスを指定します。 `profileTemplates` ディレクトリー内には、プロファイル・タイプおよびインストールされている製品のタイプに応じてさまざまなディレクトリーがあります。プロファイルのディレクトリーは、

-templatePath オプションの使用中に示したパスです。インストール・ルートの外部にプロファイル・テンプレートがある場合には、そのプロファイル・テンプレートを指定できます。

絶対パスを使用します。このパラメーターはディレクトリーとして存在し、有効なテンプレート・ディレクトリーを指している必要があります。 `WebSphere Process Server` では、以下のテンプレートを使用してください。

- `default.wbiserver`: `WebSphere Process Server` スタンドアロン・サーバー・プロファイル用で、スタンドアロン・サーバーを定義します。
- `dmgr.wbiserver`: `WebSphere Process Server` デプロイメント・マネージャー・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーを定義します。
- `managed.wbiserver`: `WebSphere Process Server` カスタム・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーにフェデレートされた場合、管理対象ノードを定義します。
- `default.esbserver`: `WebSphere Enterprise Service Bus` スタンドアロン・サーバー・プロファイル用で、スタンドアロン・サーバーを定義します。

- `dmgr.esbserver`: WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャー・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーを定義します。
- `managed.esbserver`: WebSphere Enterprise Service Bus カスタム・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーにフェデレートされた場合、管理対象ノードを定義します。

-topologyPattern

作成しているデプロイメント・マネージャーのデプロイメント環境パターンを決定します。有効な値は `CondensedSync`、`CondensedAsync`、または `Reference` です。

-topologyRole

作成済みのプロファイルを統合するときに、プロファイルがデプロイメント環境で果たす機能を示します。有効な値は、デプロイメント・ターゲットの場合は `ADT`、ホスト・メッセージングの場合は `Messaging`、またはサービスをサポートする場合は `Support` です。1 つの値を指定するか、または複数の値をそれぞれスペースで区切って指定できます。例えば、`ADT Messaging Support` または `Messaging` または `ADT Support` とします。

-unaugment

注: 拡張解除 (`-unaugment` パラメーター) したプロファイルの使用はサポートされません。

-unaugmentAll

特定の拡張テンプレートを使用して拡張されたすべてのプロファイルを拡張解除します。 `-unaugmentAll` パラメーターを使用する場合は、`-templatePath` パラメーターは必須です。

`-templatePath` パラメーターを使用する場合は、パラメーターの完全修飾ファイル・パスを指定します。オプションで、`-unaugmentDependents` パラメーターと `-unaugmentAll` パラメーターを一緒に指定し、拡張解除するプロファイルの前提条件であるすべてのプロファイルを拡張解除します。

注: プロファイル・テンプレートを使用して拡張したプロファイルがない場合に、このパラメーターを使用すると、エラーが発生する可能性があります。

`augment` パラメーターも参照してください。

-unaugmentDependents true|false

`true` に設定すると、このパラメーターは、`-unaugmentAll` パラメーターで拡張解除されるプロファイルの前提条件であるすべての拡張されたプロファイルを拡張解除します。このパラメーターのデフォルト値は `false` です。

オプションで、`-unaugmentDependents` パラメーターと `-unaugmentAll` パラメーターを一緒に指定します。

-validateAndUpdateRegistry

プロファイルがファイル・システムに存在しているかどうかを確認するために、プロファイル・レジストリー内にリストされているすべてのプロファイルをチェックします。欠落しているプロファイルはレジストリーから除去されます。レジストリーから削除された欠落プロファイルのリストを返します。

-validateRegistry

プロファイルがファイル・システムに存在しているかどうかを確認するために、

プロファイル・レジストリー内にリストされているすべてのプロファイルをチェックします。欠落しているプロファイルのリストを返します。

-validatePorts

ポートが予約されておらず、使用中でもないことを確認するために、ポートを検査することを指定します。このパラメーターは、使用されていないポートを識別する場合に役立ちます。ポートが使用中であることが判明した場合は、プロファイルの作成が停止して、エラー・メッセージが表示されます。このパラメーターは `create` コマンド行でいつでも使用できます。このパラメーターは `-portsFile` パラメーターと組み合わせて使用することをお勧めします。

-wbiddbDesign *design_file*

プロファイルの作成中に、BPC を除くすべてのコンポーネントに対して単一の設計ファイルを指定する際に使用されます。 *design_file* への完全修飾パスを指定する必要があります。

注: BPC は、共通データベース (WPRCSDB) を使用しません。 BPC は、常に Derby データベースを使用します。

注:

-webFormConfig true | false

IBM Lotus WebForm Server を使用してヒューマン・タスク管理ウィジェットを操作するように Business Space が構成されているかどうかを示します。このパラメーターのデフォルト値は `false` です。 Lotus WebForm Server を使用するように Business Space が構成されている場合は、 `true` になります。 Lotus WebForm Server を構成するには、 **webFormConfig** パラメーターと **webFormInstallRoot** パラメーターの両方が必要です。このパラメーターは、スタンドアロン・サーバーのプロファイルの場合のみ有効です。

注: これらのパラメーターを使用した WebForm 構成は、ローカルの WebForm Server をインストールする場合のみ有効です。

-webFormHTTP *URL*

Webform Server 変換プログラムの場所を指定します。場所のデフォルト URL は、 `http://localhost:8085/translator` です。このパラメーターは、 **-webFormConfig** パラメーターが `true` に設定されている場合のみ有効です。また、スタンドアロン・サーバーのプロファイルに対してのみ有効です。

-webFormInstallRoot *Webform_Server_install_root*

Lotus Webform Server がインストールされている場所の絶対パスを指定します。例えば、 Lotus Webform Server のインストール・ルートは、 `C:/IBM/LotusWebForms/3.5/WebFormServer` になります。このパラメーターは、 **-webFormConfig** パラメーターが `true` に設定されている場合のみ有効です。また、スタンドアロン・サーバーのプロファイルに対してのみ有効です。

-webServerCheck true | false

Web サーバー定義をセットアップするかどうかを示します。有効な値は、 `true` または `false` です。このパラメーターのデフォルト値は `false` です。このパラメーターは、プロファイルを作成する場合にのみ使用してください。既存のプロファイルを拡張する場合は、このパラメーターを指定しないでください。

-webServerHostname *webserver_host_name*

サーバーのホスト名。このパラメーターのデフォルト値は、ローカル・ワークステーションの長いホスト名です。このパラメーターは、プロファイルを作成する場合にのみ使用してください。既存のプロファイルを拡張する場合は、このパラメーターを指定しないでください。

-webServerInstallPath *webserver_installpath_name*

ローカルまたはリモートの Web サーバーのインストール・パス。このパラメーターは、プロファイルを作成する場合にのみ使用してください。既存のプロファイルを拡張する場合は、このパラメーターを指定しないでください。

このパラメーターのデフォルト値は、ローカル・ワークステーションのオペレーティング・システム、および webServerType パラメーターの値によって異なります。

以下に例を示します。 **AIX**

```
webServerType=IHS: webServerInstallPath defaulted to "/usr/IBM/HTTPServer"  
webServerType=IIS: webServerInstallPath defaulted to "n/a"  
webServerType=SUNJAVASYSTEM: webServerInstallPath defaulted to "/opt/sun/webserver"  
webServerType=DOMINO: webServerInstallPath defaulted to "?"  
webServerType=APACHE: webServerInstallPath defaulted to "?"  
webServerType=HTTPSERVER_ZOS: webServerInstallPath defaulted to "n/a"
```

HP-UX

```
webServerType=IHS: webServerInstallPath defaulted to "/opt/IBM/HTTPServer"  
webServerType=IIS: webServerInstallPath defaulted to "n/a"  
webServerType=SUNJAVASYSTEM: webServerInstallPath defaulted to "/opt/sun/webserver"  
webServerType=DOMINO: webServerInstallPath defaulted to ""  
webServerType=APACHE: webServerInstallPath defaulted to ""  
webServerType=HTTPSERVER_ZOS: webServerInstallPath defaulted to "n/a"
```

Linux

```
webServerType=IHS: webServerInstallPath defaulted to "/opt/IBM/HTTPServer"  
webServerType=IIS: webServerInstallPath defaulted to "n/a"  
webServerType=SUNJAVASYSTEM: webServerInstallPath defaulted to "/opt/sun/webserver"  
webServerType=DOMINO: webServerInstallPath defaulted to ""  
webServerType=APACHE: webServerInstallPath defaulted to ""  
webServerType=HTTPSERVER_ZOS: webServerInstallPath defaulted to "n/a"
```

Solaris

```
webServerType=IHS: webServerInstallPath defaulted to "/opt/IBM/HTTPServer"  
webServerType=IIS: webServerInstallPath defaulted to "n/a"  
webServerType=SUNJAVASYSTEM: webServerInstallPath defaulted to "/opt/sun/webserver"  
webServerType=DOMINO: webServerInstallPath defaulted to ""  
webServerType=APACHE: webServerInstallPath defaulted to ""  
webServerType=HTTPSERVER_ZOS: webServerInstallPath defaulted to "n/a"
```

Windows

```
webServerType=IHS: webServerInstallPath defaulted to "C:\Program Files\IBM\HTTPServer"  
webServerType=IIS: webServerInstallPath defaulted to "C:"  
webServerType=SUNJAVASYSTEM: webServerInstallPath defaulted to "C:"  
webServerType=DOMINO: webServerInstallPath defaulted to ""  
webServerType=APACHE: webServerInstallPath defaulted to ""  
webServerType=HTTPSERVER_ZOS: webServerInstallPath defaulted to "n/a"
```

-webServerName *webserver_name*

Web サーバーの名前。このパラメーターのデフォルト値は webserver1 です。

このパラメーターは、プロファイルを作成する場合にのみ使用してください。既存のプロファイルを拡張する場合は、このパラメーターを指定しないでください。

-webServerOS *webservice_operating_system*

Web サーバーが常駐しているオペレーティング・システム。有効な値は、windows、linux、solaris、aix、hpux、os390、および os400 です。このパラメーターは **webServerType** パラメーターと併用してください。

このパラメーターは、プロファイルを作成する場合にのみ使用してください。既存のプロファイルを拡張する場合は、このパラメーターを指定しないでください。

-webServerPluginPath *webservice_pluginpath*

Web サーバーが使用するプラグインへのパス。このパラメーターのデフォルト値は *install_root/plugins* です。このパラメーターは、プロファイルを作成する場合にのみ使用してください。既存のプロファイルを拡張する場合は、このパラメーターを指定しないでください。

-webServerPort *webservice_port*

Web サーバーにアクセスするときのポートを指定します。このパラメーターのデフォルト値は 80 です。このパラメーターは、プロファイルを作成する場合にのみ使用してください。既存のプロファイルを拡張する場合は、このパラメーターを指定しないでください。

-webServerType *webservice_type*

Web サーバーのタイプ。有効な値は、IHS、SUNJAVASYSTEM、IIS、DOMINO、APACHE、および HTTPSERVER_ZOS です。このパラメーターは **webServerOS** パラメーターと併用してください。このパラメーターは、プロファイルを作成する場合にのみ使用してください。既存のプロファイルを拡張する場合は、このパラメーターを指定しないでください。

Windows **-winserviceAccountType** *specifieduser | localsystem*

プロファイル用に作成された Windows サービスの所有者アカウントのタイプ。このパラメーターは、プロファイルを作成する場合にのみ使用してください。既存のプロファイルを拡張する場合は、このパラメーターを指定しないでください。

有効な値は、*specifieduser* または *localsystem* です。値を *localsystem* とした場合、プロファイルを作成するユーザーのローカル・アカウントで Windows サービスが実行されます。このパラメーターのデフォルト値は *system* です。

Windows **-winserviceCheck** *true | false*

この値は *true* または *false* のいずれかです。プロファイル内に作成されたサーバー・プロセス用の Windows サービスを作成するには、*true* を指定してください。Windows サービスを作成しないときは *false* を指定します。このパラメーターのデフォルト値は *false* です。

このパラメーターは、プロファイルを作成する場合にのみ使用してください。既存のプロファイルを拡張する場合は、このパラメーターを指定しないでください。

Windows **-winservicePassword** *winservice_password*

Windows サービスの所有者となる、指定されたユーザーまたはローカル・アカウントのパスワードを指定します。このパラメーターは、プロファイルを作成する場合にのみ使用してください。既存のプロファイルを拡張する場合は、このパラメーターを指定しないでください。

Windows **-winserviceStartupType** *manual | automatic | disabled*

Windows サービスの開始用に指定可能な値は、以下のとおりです。

- manual
- automatic
- disabled

このパラメーターのデフォルト値は `manual` です。

このパラメーターは、プロファイルを作成する場合にのみ使用してください。既存のプロファイルを拡張する場合は、このパラメーターを指定しないでください。

Windows **-winserviceUserName** *winservice_user_ID*

Windows サービスを作成できる ID であることを Windows オペレーティング・システムが確認できるよう、ユーザー ID を指定します。使用するユーザー ID は管理者グループに属していなければならない、次の拡張ユーザー権限を持つ必要があります。

- オペレーティング・システムの一部として振る舞う
- サービスとしてログオン

このパラメーターのデフォルト値は、現在のユーザー名です。このパラメーターの値には、スペースや、*、?、"、<、>、,、/、¥、| などの無効な文字を使用してはなりません。指定するユーザーは、Windows サービスを作成する適切な許可を持つ必要があります。選択したユーザー名の正しいパスワードを指定する必要があります。

このパラメーターは、プロファイルを作成する場合にのみ使用してください。既存のプロファイルを拡張する場合は、このパラメーターを指定しないでください。

IBM i でのリモート・データベース・サポートの構成

WebSphere Process Server は、IBM i システム上にリモートに存在する DB2 for i5/OS または DB2 for IBM i データベースを使用するように構成できます。製品リポジトリに IBM i のリモート・データベースを使用するようにした場合は、データベース製品として DB2 for i5/OS または DB2 for IBM i を使用する必要があります。

このタスクについて

データベースの構成は、スタンドアロン・サーバーまたはデプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成中に行います。カスタム・プロファイルを作成するときは、統合先であるデプロイメント・マネージャー・プロファイルに対して既に構成されているのと同じデータベース製品を指定する必要があります。

プロファイル管理ツールの一連のページで、manageprofiles コマンド行ユーティリティの実行に使用される引数を指定します。オプションで、最初にデータベース定義スクリプトのみを生成し、後で管理者にそれを実行させて DB2 コレクションおよび表を作成することができます。

以下のような多数のコンポーネントがデータベース接続を必要とします。

- 失敗イベント管理
- Common Event Infrastructure
- リレーションシップ
- リカバリー
- ビジネス・ルール
- Business Space
- セレクター
- ロック・マネージャー
- Application Scheduler
- サービス統合 (SI) バス (メッセージング・エンジン)
- エンタープライズ・サービス・バス (ESB) のメッセージ・ロガー

次のタスク

これで、リモート・データベースに接続するためのスタンドアロン・プロファイルまたはデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成することができます。

IBM i データベースおよびコレクション

分散プラットフォームとは異なり、IBM i システムまたは論理区画にはシステム共通の DB2 データベースが 1 つだけ存在します。DB2 for i5/OS または DB2 for IBM i (使用している IBM i オペレーティング・システムのバージョンによります) は、IBM i オペレーティング・システムと統合されており、インストールする必要がある別個の製品ではありません。

DB2 for i5/OS または DB2 for IBM i は、IBM i オペレーティング・システムと完全に統合されたりレシヨナル・データベースであるため、その使用および管理が容易になっています。

この製品には、トリガー、ストアード・プロシージャー、および動的ビットマップ索引付けなどの豊富な機能や特徴も用意されており、さまざまなタイプのアプリケーションにサービスを提供します。こうしたアプリケーションの範囲は、クライアント/サーバー・ソリューションに対応する従来のホスト・ベース・アプリケーションからビジネス・インテリジェンス・アプリケーションにまで及びます。

以下にデータベース階層を示します。

(単一データベース) > スキーマ名 > テーブル名

WebSphere Process Server が分散プラットフォームで実行されていても、IBM i ワークステーション上の共通データベースにアクセスしている異機種混合環境では、Toolbox for Java JDBC ドライバー・タイプ 4 を使用してください。

ツールボックス JDBC ドライバーのドライバー・ファイルは、jt400.jar という名前です。このファイルは、WebSphere Process Server のホスト・ワークステーション上で使用できなければなりません。分散ワークステーション用のドライバーは、以下の 2 つの方法のいずれかで取得できます。

- IBM i データベース・ワークステーションから分散ワークステーションのディレクトリーにドライバーをコピーします。ツールボックス JDBC ドライバー・ファイル jt400.jar は、IBM i 上の単一の固定の場所 (/QIBM/ProdData/Http/Public/jt400/lib/jt400.jar) にあります。
- jtopen Web サイトから分散ワークステーション上のディレクトリーにドライバーをダウンロードする。jtopen Web サイトの URL は、<http://sourceforge.net/projects/jt400> です。

リモート・データベースに接続するためのスタンドアロン・プロファイルの作成

プロファイル管理ツールにより、リモート IBM i サーバーの DB2 for i5/OS または DB2 for IBM i データベースを指定して構成された、1 つ以上の WebSphere Process Server スタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成できます。DB2 for i5/OS または DB2 for IBM i データベースをホスティングするリモート IBM i サーバーには、WebSphere Process Server がインストールされていません。

始める前に

ご使用の WebSphere Process Server インストール済み環境が Linux、UNIX、または Windows サーバーに存在し、データベースがリモート IBM i サーバーに存在する場合は、Toolbox for Java JDBC ドライバー (jt400.jar) を SourceForge.net の Web サイト (<https://sourceforge.net/projects/jt400>) から WebSphere Process Server をホスティングするサーバー上のローカル一時ディレクトリーにダウンロードする必要があります。

手順

1. 237 ページの『高度なスタンドアロン・サーバー・プロファイルの作成』の手順に従って、拡張スタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成します。Web サーバー定義またはサンプル Business Process Choreographer を作成しないでください。

注: プロファイル管理ツールを使用して Web サーバー定義を作成しないでください。IBM HTTP Server for IBM i の構成フォームおよび管理フォームを使用する必要があります。これらのフォームのどちらでも、Web サーバー定義および HTTP サーバー・インスタンスが作成されます。これにより、HTTP サーバーからこの Web サーバー定義への関連付けも正しく行われます。詳しくは、WebSphere Application Server Network Deployment インフォメーション・センターの『HTTP サーバー・インスタンスの構成』を参照してください。また、サンプル Business Process Choreographer を作成しないでください。作成した場合、DB2 for i5/OS または DB2 for IBM i データベースではなく、Derby データベースが作成されます。

2. 「データベース構成」ページで、以下の手順を実行します。

- a. 「データベース製品の選択」で、IBM i データベース製品のエントリーを選択します。このアクションにより、共通データベースおよび Common Event Infrastructure データベースの名前が *SYSBAS に設定されます。
- b. 「データベース・スクリプトの実行を遅延」を選択します。 プロファイル作成プロセスによってスクリプトが作成されます。ユーザーまたはデータベース管理者が、このスクリプトをリモート IBM i サーバーで手動で実行して、新規データベースとそれらに必要なテーブルを作成する必要があります。共通データベース用および Common Event Infrastructure データベース用のスクリプトが作成されます。データベース用のデフォルト・ロケーションは以下のとおりです。

• **Common Event Infrastructure データベースの場合:**

- Linux UNIX `install_root/profiles/profile name/dbscripts/
CEI_ceiDbName`
- Windows `install_root¥profiles¥profile name¥dbscripts¥CEI_ceiDbName`

• **共通データベースの場合:**

- Linux UNIX `install_root/profiles/profile name/dbscripts/
CommonDB/dbType/dbName`
- Windows `install_root¥profiles¥profile
name¥dbscripts¥CommonDB¥dbType¥dbName`

データベース作成および構成用のスクリプトを、デフォルト・ロケーション以外の場所に格納するには、「生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーのオーバーライド」チェック・ボックスを選択して、「データベース・スクリプトの出力ディレクトリー」フィールドに新しいロケーションを指定します。

- c. 「メッセージング・エンジン (ME) でこのデータベースを使用する」を選択します。
 - d. 「次へ」をクリックします。
3. 「データベース構成 (その 2)」パネルで、以下の手順を実行します。
 - a. リモート・データベースに対して認証を行うための有効なユーザー名とパスワードを入力します。
 - b. JDBC ドライバーのクラスパス・ファイル (jt400.jar) のロケーション (ディレクトリー) を入力します。
 - c. リモートの DB2 for i5/OS または DB2 for IBM i データベースが格納されている IBM i サーバーのデータベース・サーバー・ホスト名 (IP アドレスなど) を入力します。
 - d. データベース・コレクション名 (デフォルトは WPRCSDB) を入力します。この名前の最初の 3 文字は、リモート IBM i サーバー上でホスティングされているデータベースに対して固有である必要があります。
 - e. 「次へ」をクリックします。

4. プロファイル作成が完了したら、「プロファイルの要約」ページで「ファースト・ステップ・コンソールの起動」オプションをクリアし、「終了」をクリックします。また、別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページも閉じてください。
5. Common Event Infrastructure データベースと共通データベースの両方の DDL をリモート IBM i システムにエクスポートします。生成されたデータベース・スクリプト形式の DDL は、「データベース構成」ページで先に指定したロケーションにあります。さまざまな方法によって、スクリプトをデータベース管理者に提供できます。
6. 管理者は、Common Event Infrastructure データベース・スクリプトおよび共通データベース・スクリプトを実行して、データベース用のリモート DB2 データベース表をセットアップする必要があります。

タスクの結果

これで、リモート・データベースに接続するためのスタンドアロン・プロファイルが作成されました。

DB2 for i5/OS または DB2 for IBM i のテーブルおよびコレクションは、CEI、Business Process Choreographer、共通データベース、Service Integration Bus、および WebSphere Enterprise Service Bus Message Logger のリモート IBM i システム上に生成されています。

次のタスク

サーバーを始動します。スタンドアロン・サーバーの開始の説明を参照してください。

リモート・データベースに接続するためのデプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成

プロファイル管理ツールにより、リモート IBM i サーバーの DB2 for i5/OS または DB2 for IBM i データベースを指定して構成された、WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成できます。DB2 for i5/OS または DB2 for IBM i データベースをホスティングするリモート IBM i サーバーには、WebSphere Process Server がインストールされていません。

始める前に

ご使用の WebSphere Process Server インストール済み環境が Linux、UNIX、または Windows サーバーに存在し、データベースがリモート IBM i サーバーに存在する場合は、Toolbox for Java JDBC ドライバー (jt400.jar) を SourceForge.net の Web サイト (<https://sourceforge.net/projects/jt400>) から WebSphere Process Server をホスティングするサーバー上のローカル一時ディレクトリーにダウンロードする必要があります。

手順

1. 252 ページの『高度なデプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成』の手順に従って、拡張デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成します。

2. 「データベース構成」ページで、以下の手順を実行します。
 - a. 「データベース製品の選択」で、IBM i データベース製品のエントリーを選択します。このアクションにより、共通データベース名が *SYSBAS に設定されます。
 - b. 「データベース・スクリプトの実行を遅延」を選択します。 プロファイル作成プロセスによってスクリプトが作成されます。ユーザーまたはデータベース管理者が、このスクリプトをリモート IBM i サーバーで手動で実行して、共通データベースとそれに必要なテーブルを作成する必要があります。データベースのデフォルト・ロケーションは以下のとおりです。

- Linux UNIX `install_root/profiles/profile_name/dbscripts/CommonDB/dbType/dbName`

- Windows `install_root¥profiles¥profile_name¥dbscripts¥CommonDB¥dbType¥dbName`

データベース作成および構成用のスクリプトを、デフォルト・ロケーション以外の場所に格納するには、「生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーのオーバーライド」チェック・ボックスを選択して、「データベース・スクリプトの出力ディレクトリー」フィールドに新しいロケーションを指定します。

- c. 「次へ」をクリックします。
3. 「データベース構成 (その 2)」パネルで、以下の手順を実行します。
 - a. リモート・データベースに対して認証を行うための有効なユーザー名とパスワードを入力します。
 - b. JDBC ドライバーのクラスパス・ファイル (jt400.jar) のロケーション (ディレクトリー) を入力します。
 - c. リモートの DB2 for i5/OS または DB2 for IBM i データベースが格納されている IBM i サーバーのデータベース・サーバー・ホスト名 (IP アドレスなど) を入力します。
 - d. データベース・コレクション名 (デフォルトは WPRCSDB) を入力します。この名前の最初の 3 文字は、リモート IBM i サーバー上でホスティングされているデータベースに対して固有である必要があります。
 - e. 「次へ」をクリックします。
4. プロファイル作成が完了したら、「プロファイルの要約」ページで「ファースト・ステップ・コンソールの起動」オプションをクリアし、「終了」をクリックします。また、別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページも閉じてください。
5. 共通データベースの DDL をリモート IBM i システムにエクスポートします。生成されたデータベース・スクリプト形式の DDL は、「データベース構成」ページで先に指定したロケーションにあります。さまざまな方法によって、スクリプトをデータベース管理者に提供できます。
6. 管理者は、共通データベース・スクリプトを実行して、共通データベースをセットアップする必要があります。

タスクの結果

これで、リモート・データベースに接続するためのデプロイメント・マネージャー・プロファイルが作成されました。DB2 for i5/OS または DB2 for IBM i のテーブルおよびコレクションは、Business Process Choreographer、共通データベース、Service Integration Bus、および WebSphere Enterprise Service Bus Message Logger のリモート IBM i システム上に生成されています。

次のタスク

デプロイメント・マネージャーを始動します。

管理コンソールを使用して、Business Process Choreographer を構成します。

デプロイメント環境の場合には、別のデータベースを作成して構成し、カスタム・プロファイルを作成してそれをご使用のデプロイメント・マネージャーに統合し、サーバーを作成し、ワークロード管理機能が必要な場合はクラスターを作成し、さらに、計画したインストール環境に固有のその他のタスクを実行する必要があります。計画した環境では、実行が必要なタスク、およびその実行順序を指示します。

manageprofiles コマンド行ユーティリティーを使用したプロファイルの削除

manageprofiles コマンド行ユーティリティーを使用することによって、コマンド行からプロファイルを削除できます。

始める前に

manageprofiles コマンド行ユーティリティーについて詳しくは、444 ページの『manageprofiles コマンド行ユーティリティー』を参照してください。

手順

1. コマンド・プロンプトを開き、使用するオペレーティング・システムに基づいて以下のいずれかのコマンドを実行します。

- **Linux** **UNIX** `manageprofiles.sh -delete -profileName profile_name`
- **Windows** `manageprofiles.bat -delete -profileName profile_name`

変数 *profile_name* は削除するプロファイルの名前を示します。

2. 以下のログ・ファイルを調べて、プロファイルの削除が完了したことを確認します。

- **Linux** **UNIX** `install_root/logs/manageprofiles/
profile_name_delete.log`
- **Windows** `install_root%logs%manageprofiles%profile_name_delete.log`

データベースの構成

共通データベース、Common Event Infrastructure、Business Process Choreographer、エンタープライズ・サービス・バスのロガー・メディエーション、メッセージング・エンジン、セレクターおよびビジネス・ルール・グループ用のデータベース構成、およびリモート z/OS システム上の DB2 メッセージ・ロガー・データベースに関する情報を組み込みます。

データベース構成の計画を立てるには、使用するコンポーネントがわかっている必要があります。データベース表を必要とする WebSphere Process Server のコンポーネントと、それぞれのコンポーネントに関連付けられている表が保管されているデータベースのデフォルト名を、表 165 にまとめます。

注: これらの名前は、必要に応じて変更することもできます。

表 165. 個々のコンポーネントに必要なデータベース

サーバー・コンポーネント	データベース (デフォルト名)	注意
Business Process Choreographer	BPEDB	BPEDB は、Business Process Choreographer が構成されているサーバーまたはクラスターを始動する前に作成する必要があります。
Business Process Choreographer Explorer のレポート作成機能	OBSRVDB	Business Process Choreographer Explorer のレポート作成機能を使用すると、完了しているプロセスに関するレポートを作成できます。Business Process Choreographer Explorer レポートには別のデータベースを使用し、その名前はデフォルトの設定である OBSRVDB にすることができます。 注: BPEDB は、Business Process Choreographer が構成されているサーバーまたはクラスターを始動する前に作成する必要があります。 実稼働環境の場合は、専用のデータベースを用意することをお勧めします。例えば、BPEDB を Business Process Choreographer 用のデータベースとして使用し、OBSRVDB を Business Process Choreographer Explorer のレポート・データ作成用に使用します。

表 165. 個々のコンポーネントに必要なデータベース (続き)

サーバー・コンポーネント	データベース (デフォルト名)	注意
Business Space	WPRCSDB (共通データベース)	<p>スタンドアロン・プロファイルの場合、WebSphere Process Server の開始前に共通データベースを作成する必要があります。その他のプロファイルについては、管理コンソールを使用して Business Space を構成する必要があります。Business Space データベースの構成は、WebSphere が提供する Business Space を使用する場合には必須の作業です。これは、IBM WebSphere Business Process Management ポートフォリオ全体で、Web インターフェースを作成、管理、および統合するアプリケーション・ユーザーの共通インターフェースになります。</p>
Common Event Infrastructure	EVENT (イベントの格納)	<p>このデータベースは WebSphere Process Server の開始前に作成する必要はありませんが、イベントのモニターには必須です。</p>
リレーションシップ	WPRCSDB (共通データベース)	<p>WebSphere Process Server の開始前に、共通データベースを作成する必要があります。 注: WPRCSDB テーブルは、デプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーの始動時か、デプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーの始動前に構成する必要があります。</p>
メディエーション	WPRCSDB (共通データベース)	<p>WebSphere Process Server の開始前に、共通データベースを作成する必要があります。 注: WPRCSDB テーブルは、デプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーの始動時か、デプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーの始動前に構成する必要があります。</p>

表 165. 個々のコンポーネントに必要なデータベース (続き)

サーバー・コンポーネント	データベース (デフォルト名)	注意
リカバリー	WPRCSDB (共通データベース)	WebSphere Process Server の開始前に、共通データベースを作成する必要があります。 注: WPRCSDB テーブルは、デプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーの始動時か、デプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーの始動前に構成する必要があります。
Application Scheduler	WPRCSDB (共通データベース)	WebSphere Process Server の開始前に、共通データベースを作成する必要があります。 注: WPRCSDB テーブルは、デプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーの始動時か、デプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーの始動前に構成する必要があります。
セレクター/ビジネス・ルール	WPRCSDB (共通データベース)/リポジトリ DB	WebSphere Process Server の開始前に、共通データベースを作成する必要があります。 注: WPRCSDB テーブルは、デプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーの始動時か、デプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーの始動前に構成する必要があります。
SIBus	ユーザー作成	これらのテーブルは、メッセージング・エンジンの始動時か、メッセージング・エンジンの始動前に構成する必要があります。プロファイルの作成時には、スタンドアロン環境で SIBus によるファイル・ストアを使用できます。ただし、ネットワーク・デプロイメント環境では、SIBus によるファイル・ストアを使用できません。

表 165. 個々のコンポーネントに必要なデータベース (続き)

サーバー・コンポーネント	データベース (デフォルト名)	注意
エンタープライズ・サービス・バス	EsbLogMedDB	これらのテーブルは、デプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーの始動時か、デプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーの始動前に構成する必要があります。

必須のデータベース管理者タスクの識別

以下に、データベース管理者 (DBA) のアクションを必要とするデータベース作成タスクおよびデータベース構成タスクをすべてリストします。

データベースの選択

データベースの選択

データベース特権およびセキュリティー上の考慮事項

- 482 ページの『データベース特権』
- 必要なセキュリティー権限の明確化

Network Deployment 構成の作成

178 ページの『Network Deployment 構成の作成』

プロファイルの作成

- 221 ページの『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』
- 231 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』
- 260 ページの『デプロイメント環境のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成』

注: デプロイメント環境のデプロイメント・マネージャー・プロファイル作成の一部であるデータベース構成パネルには、データベース管理者特権が必要です。デプロイメント環境機能の使用を計画しており、データベース製品として Derby Network Server 以外のデータベースを使用する場合、データベース構成パネルの「データベースで認証するユーザー名」フィールドで指定するユーザー ID は DBA 特権を持っている必要があります。

データベース構成

- 286 ページの『プロファイル管理ツールを使用した共通データベースおよび Common Event Infrastructure データベースの構成』
- プロファイルを作成または拡張する前のデータベースおよびテーブルの作成
 - 36 ページの『製品インストール前の共通データベースの手動作成』
 - 510 ページの『データベース設計ツールを使用したデータベース設計ファイルの作成』

- 36 ページの『製品インストール前の共通データベースの手動作成』
- プロファイルを作成または拡張した後のデータベースおよびテーブルの作成
 - 493 ページの『プロファイルの作成後または拡張後の共通データベースでのテーブルの作成』
 - 492 ページの『プロファイルの作成後または拡張後の共通データベースとテーブルの作成』
 - 510 ページの『データベース設計ツールを使用したデータベース設計ファイルの作成』
- 498 ページの『メッセージング・エンジン・データベースの構成』

関連リンク

- 697 ページの『Common Event Infrastructure の構成』
- Business Process Choreographer の構成
- 572 ページの『Business Space の構成』
- WebSphere Business Monitor の構成
 - データベースの考慮事項
 - データベースのインストール
- 524 ページの『テーブルおよびスキーマの作成マトリックス』
- 497 ページの『リモート z/OS サーバー上の DB2 での Common Event Infrastructure リポジトリと共通データベース・リポジトリの作成』

データベース特権

データベース特権を使用して、サポートされる各データベース管理システムについて、データ・ストア・テーブルを作成またはアクセスするために必要な権限を判別します。

インストーラー、プロファイル管理ツールまたはスクリプトを使用してスキーマを作成するとき、テーブルを作成するための十分な権限を持ったユーザー ID が必要です。テーブルが作成されたら、アプリケーションはテーブルの情報を選択、挿入、更新、および削除するための十分な権限が必要です。

表 166 は、データ・ストアへのアクセスに必要なデータベース特権を示しています。

表 166. データベース特権

データベース管理システム	データ・ストア・テーブルの使用に必要な最小の特権	データ・ストア・テーブルの作成に必要な追加の特権
DB2	ユーザー ID はテーブルに対する SELECT、INSERT、UPDATE、および DELETE 特権が必要です。	ユーザー ID はデータベースに対する CREATETAB 権限、テーブル・スペースに対する USE 特権、およびスキーマに対する CREATEIN 特権が必要です。

表 166. データベース特権 (続き)

データベース管理システム	データ・ストア・テーブルの使用に必要な最小の特権	データ・ストア・テーブルの作成に必要な追加の特権
Oracle	<p>ユーザー ID はデータベースに接続するための SESSION 特権が必要です。同じユーザー ID がデータ・ストア・スキーマおよびデータベースに接続するコンポーネントを両方所有する場合、ユーザー ID はテーブルを扱うための十分な特権を持ちます。そうでない場合、ユーザー ID は、データ・ストアを構成するテーブルにおけるオブジェクトの SELECT、INSERT、UPDATE および DELETE 特権と、TRUNCATE TABLE ステートメントの使用を可能にするための DROP ANY TABLE システム特権が必要です。</p> <p>Oracle データベースの作成には UTF-8 文字セットを使用してください。この文字セットは、WebSphere Process Server でサポートされる他のカスタム文字セットをサポートしています。</p>	<p>ユーザー ID には、データ・ストア・スキーマ内でリレーショナル・テーブルおよび索引を作成するための十分な特権が必要です。またデータベースには、そのスキーマの所有者のデフォルト・テーブル・スペースにおけるスペース割り当て量も必要です。</p> <p>WebSphere Process Server および WebSphere Enterprise Service Bus コンポーネントに対する追加の Oracle データベース特権については、484 ページの表 167 を参照してください。</p>
SQL サーバー	<p>SQL サーバーおよび Windows の認証用に SQL サーバーを構成します。これによって、SQL サーバーのログイン ID およびパスワードに基づく認証が可能です。ユーザー ID はテーブルの所有者か、または TRUNCATE TABLE ステートメントを実行する十分な権限を持つグループのメンバーとすることが可能です。</p>	<p>ユーザー ID には CREATE TABLE ステートメント特権が必要です。</p>
Informix	<p>ユーザー ID はデータベースに対する CONNECT 特権を持つ必要があります。さらに、テーブルに対する SELECT、INSERT、UPDATE および DELETE 権限も必要です。</p>	<p>ユーザー ID はデータベースに対する RESOURCE 特権を持つ必要があります。</p>

表 166. データベース特権 (続き)

データベース管理システム	データ・ストア・テーブルの使用に必要な最小の特権	データ・ストア・テーブルの作成に必要な追加の特権
Derby	ユーザー認証が有効な場合、データベースにアクセスするようユーザー ID を許可する必要があります。	追加の特権は不要です。

表 167 では、WebSphere Process Server および WebSphere Enterprise Service Bus コンポーネントに対する追加の Oracle データベース特権について説明しています。

注: 以下のすべてのコンポーネントを 1 つの Oracle データベースに対して構成する場合は、コンポーネントごとに指定されているすべての特権のスーパーセットを作成できます。以下の 4 つのコンポーネントを多数のデータベースに対して構成する場合は、データベースごとに異なる特権を設定できます。

表 167. 追加の Oracle データベース特権

コンポーネント	構成特権	実行時特権
共通 DB	CREATE TABLE、CREATE INDEXTYPE、ALTER TABLE、INSERT、CREATE SEQUENCE、CREATE USER、ALTER USER、CREATE TABLESPACE	SELECT、UPDATE、DELETE、INSERT、CREATE VIEW、CREATE PROCEDURE
Business Process Choreographer	CREATE TABLE、ALTER TABLE、CREATE VIEW、CREATE TABLESPACE、CREATE USER、CREATE PROCEDURE	SELECT、UPDATE、DELETE、INSERT
Common Event Infrastructure (CEI)	CREATE TABLE、CREATE INDEXTYPE、ALTER TABLE、CREATE VIEW、ALTER SESSION、SELECT、UPDATE、DELETE、INSERT、CREATE TABLESPACE、CREATE PROFILE CREATE ROLE、CREATE PROCEDURE、CREATE TEMPORARY TABLESPACE	SELECT、UPDATE、DELETE、INSERT、CREATE PROCEDURE
メッセージング・エンジン	CREATE TABLE、CREATE INDEXTYPE	SELECT、UPDATE、DELETE、INSERT、DROP ANY TABLE

Oracle データベースと連携するように WebSphere Process Server を構成する場合のその他のサポート情報については、以下のチュートリアルを参照してください。

http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/dmndhelp/v7r0mx/topic/com.ibm.websphere.wps.doc/doc/tins_oracleincorp.html

コンポーネント固有のデータベース構成

このセクションのトピックには、WebSphere Process Server コンポーネント固有のデータベース構成情報が記載されています。

CommonDB データベースの構成

共通データベースの構成には、サポートされるデータベース・タイプ、スクリプトとその場所、プロファイル作成の構成アクション、インストール・パラメーター、作成されるテーブルとユーザー ID の特権のタイプに関する情報が含まれます。

WebSphere Process Server プロファイルの作成時に、オプションで共通データベースを作成できます。このデータベースは、各種コンポーネントのリポジトリとして機能します。

WebSphere Process Server の共通データベースは、以下の製品コンポーネントで使用します。

- リカバリー
- リレーションシップ・サービス
- メディエーション
- Application Scheduler
- カスタマイズ (セレクターとビジネス・ルール・グループ)
- EventSequencing (LockManager)
- Enterprise Service Bus (ESB) ロガー・メディエーション・プリミティブ

共通データベース は、WebSphere Process Server プロファイルの作成前、作成中、または作成後に作成できます。

- WebSphere Process Server の構成前にデータベース表を作成する場合は、以下のいずれかの方法を選択します。
 - WebSphere Process Server に用意されているデフォルトのスクリプトを編集して実行します。36 ページの『製品インストール前の共通データベースの手動作成』を参照してください。

注: デフォルトのスクリプトを使用できるのは、CommonDB テーブルおよび Business Process Choreographer テーブルの作成時のみです。

- データベース設計ツール (DDT) を使用して作成された設計ファイルを使用します。510 ページの『データベース設計ツールを使用したデータベース設計ファイルの作成』を参照してください。
- WebSphere Process Server の構成後にデータベース表を作成する場合は、以下のいずれかの方法を選択します。
 - プロファイル管理ツールを使用して、プロファイルの作成時にデータベース内のテーブルと連携するように WebSphere Process Server を構成します。データベース表の作成と構成は、プロファイルの作成時またはプロファイルの作成後に行うことができます。プロファイル管理ツールによって生成されるスクリプトは、後でデータベース表の作成および構成に使用できます。生成されるこれらのスクリプトは、使用可能な状態になっています。編集する必要はありません。

- データベース設計ツール (DDT) を使用して作成された設計ファイルを使用します。510 ページの『データベース設計ツールを使用したデータベース設計ファイルの作成』を参照してください。

サポートされているデータベース・タイプ

共通データベースでは、以下のデータベース製品を使用できます。

表 168. サポートされるデータベース製品

データベース・タイプ	考慮事項
Derby Embedded または Derby Embedded 40	スタンドアロン・プロファイルのデフォルト・データベース・タイプとして使用されます。
Derby Network Server または Derby Network Server 40	Network Deployment 環境のデフォルト・データベース・タイプとして使用されます。
DB2 Universal	Network Deployment 構成のデータベースとして使用されます。オプションで、スタンドアロン・サーバー構成でデータベースとして使用できます。
DB2 データ・サーバー	Network Deployment 構成のデータベースとして使用されます。オプションで、スタンドアロン・サーバー構成でデータベースとして使用できます。
DB2 for z/OS v8 DB2 for z/OS v9	重要: DB2 for z/OS v9 を使用するサーバー用にプロファイルを作成するときは、そのサーバーが DB2 データベースに接続できる必要があります。Network Deployment 構成のデータベースとして使用されます。オプションで、スタンドアロン・サーバー構成でデータベースとして使用できます。
DB2 UDB for iSeries (ツールボックス) DB2 for i5/OS (ツールボックス)	Network Deployment 環境のリモート・データベースとして、またはスタンドアロン・プロファイルのローカル・データベースとして使用されます。Network Deployment 構成のデータベースとして使用されます。オプションで、スタンドアロン・サーバー構成でデータベースとして使用できます。
Informix Dynamic Server	
Microsoft SQL Server (DataDirect)	
Microsoft SQL Server (Microsoft)	
Oracle	データベース、テーブルおよびスキーマを作成するための sysdba 特権が必要です。正しい sysdba 特権がない場合は、テーブルの作成中およびテーブルおよびスキーマへのアクセス中にエラーが発生することがあります。

ユーザー ID の特権

プロファイル管理ツールで指定するユーザー資格情報には、テーブル・スペース、テーブル、スキーマ、索引、およびストアド・プロシージャを作成するために必要な権限が必要です。「新規データベースの作成」オプションを使用する場合は、新規データベースを作成するために必要な特権がユーザー ID に与えられていなければなりません。詳しくは、『データベースのユーザーおよびスキーマ』および『データベース特権』を参照してください。

注: スクリプトを実行しているユーザーがテーブルを作成するための十分な権限を持っている場合は、スクリプト内で認証 ID を指定する必要はありません。

データベース管理サービス・インスタンス

セルあたり、共通データベース表のセットが 1 つあります。

プロファイル作成時の構成操作

共通データベースのインストールには以下の 4 つのオプションがあります。

- インストーラー
- プロファイル管理ツール
- サイレント・インストール
- スクリプト

これらのオプションのそれぞれに、さらにいくつかの選択項目があります。

インストーラー

ソフトウェアのインストール時にプロファイルを作成する場合は、「インストーラー」を使用します。インストール中にデータベース製品をインストールできますが、インストールできるデータベース製品のタイプは限られています。サポートされるが表 169 にない別のデータベース製品を使用する場合は、プロファイル管理ツールを使用してデプロイメント・マネージャーを作成する必要があります。

表 169. インストーラー・オプション

オプション	使用可能なデータベース
標準: スタンドアロン・プロファイル	Derby Embedded または Derby Embedded 40 のみ
標準: その他のすべてのプロファイル	Derby Network Server または Derby Network Server 40 のみ
カスタマイズ: スタンドアロン・プロファイル	<ul style="list-style-type: none">• Derby Network Server または Derby Network Server 40• DB2 Universal• DB2 データ・サーバー• Oracle

表 169. インストーラー・オプション (続き)

オプション	使用可能なデータベース
カスタマイズ: その他のすべてのプロファイル	<ul style="list-style-type: none"> • Derby Network Server または Derby Network Server 40 • DB2 Universal • DB2 データ・サーバー • Oracle

標準インストールでは、構成パラメーターのデフォルト値を使用します。これらのデフォルト値は変更できません。カスタマイズ・インストールを選択する場合は、固有の要件に合わせてデフォルト値を変更できます。詳しくは、『WebSphere Process Server のインストールおよびプロファイルの作成の対話式実行』を参照してください。

プロファイル管理ツール

プロファイル管理ツールを使用して、ソフトウェアのインストール後にプロファイルを作成します。プロファイル管理ツールを使用すると、プロファイルの作成前、作成中、または作成後にデータベースをインストールすることができます。詳しくは、『プロファイルの作成後または拡張後の共通データベースとテーブルの作成』を参照してください。データベース・スクリプトの場所については、『スクリプトおよびそのロケーション』を参照してください。

表 170 では、標準 (デフォルト) プロファイルおよびカスタマイズ・プロファイルでサポートされるデータベースをリストします。プロファイル管理ツールの標準インストールには、データベースおよび構成パラメーター用のデフォルト値があり、これを変更することはできません。プロファイル管理ツールのカスタマイズ・インストールでは、構成パラメーターを変更したり、サポートされるデータベースを選択したりすることができます。カスタマイズされたプロファイルの作成について詳しくは、『プロファイルの作成』を参照してください。

表 170. 「プロファイル管理ツール」オプション

オプション	使用可能なデータベース
標準: スタンドアロン・プロファイル	Derby Embedded または Derby Embedded 40 のみ
標準: その他のすべてのプロファイル	Derby Network Server または Derby Network Server 40 のみ
カスタマイズ: スタンドアロン・プロファイル	486 ページの『サポートされているデータベース・タイプ』のいずれか
カスタマイズ: その他のすべてのプロファイル	486 ページの『サポートされているデータベース・タイプ』のいずれか

プロファイル管理ツールでは、以下の前のバージョンから、既存のプロファイルを拡張することができます。

- WebSphere Process Server
- WebSphere Application Server
- WebSphere ESB

詳しくは、『既存のプロファイルの拡張』を参照してください。

サイレント・インストール

製品をサイレント・インストールする場合、テンプレート応答ファイルを編集して、共通データベース構成を指定できます。詳しくは、『サイレント・インストール』を参照してください。

スクリプト

デフォルト・プロファイルのスクリプトは、2つのロケーションで見つけることができます。デフォルト・スクリプト・セットの1つは、製品メディアの *media_root/dbscripts* ディレクトリーにあります。

もう1つのプロファイルのデフォルト・スクリプトは、WebSphere Process Server のインストール後に、*install_root/dbscripts/CommonDB/dbType* ディレクトリーに配置されます。

共通データベースは、WebSphere Process Server のインストール前かプロファイルの作成中に、スクリプトを使用して作成できます。詳しくは、『製品インストール前の共通データベースの手動作成』を参照してください。

プロファイルの作成中にスクリプトによってデータベースを構成する場合は、まず WebSphere Process Server をインストールし、データベースの作成を先送りするオプションを選択する必要があります。プロファイル作成により、データベースのパラメーターが収集され、デフォルトのスクリプトに追加されます。プロファイル作成の完了後、更新されたスクリプトは以下の場所に格納されます。

profile_root/dbscripts/CommonDB/dbType/dbName

これらのスクリプトを、共通データベースを作成するユーザーに渡すことができます。スクリプトは、そのままでも実行できますが、特定の要件を組み込むために編集することも可能です。データベースを作成する前に WebSphere Process Server を開始しようとする、エラー・メッセージが生成されます。

これらのスクリプトが実行するステップは、以下のとおりです。

- 必要な場合は (ローカル・データベースの場合にのみ有効)、プロファイル管理ツールのデータベース構成パネルでの選択内容に応じて、新規データベースを作成します。プロファイル管理ツールでサポートされないデータベース・コマンドについて詳しくは、491 ページの『制約事項』を参照してください。

注: データベースの作成をプロファイル作成の完了後に先送りすることもできますが、その場合でも、プロファイル管理ツールの「データベース構成」パネルに有効な情報を入力する必要があります。その情報に基づいて、WebSphere Process Server のデータ・ソースが作成されます。

- JDBC プロバイダーでデータ・ソースを作成します。

注: プロファイルの作成と同時にデータベースも作成する場合に、指定するデータベース・パラメーターに誤りがあると、プロファイル作成プロセス全体でエラーが生成されます。一方、データベースの作成を先送りすれば、プロファイルはエラーなしで作成されますが、生成されたデータベース・スクリプトにはエラーが含まれているため、データベースを作成する前にスクリプトを編集する必要があります。

注: セルのノードの場合、デプロイメント・マネージャー・プロファイルと同じデータベース・タイプを選択する必要があります。データ・ソースは、セル・レベルでのみ維持されます。

SQL スクリプト

SQL スクリプトにより、プロファイル作成の前後にデータベースを構成できます。テーブルは、デプロイメント・マネージャー・プロファイルで作成されるため、管理対象ノードの作成時に SQL スクリプトが実行されることはありません。

各共通データベース・クライアントの SQL スクリプトは、以下の場所にあります。

- 製品メディアの *media_root/dbscripts*
- WebSphere Process Server のインストール後の *install_root/dbscripts/CommonDB/dbType*

データベースの作成をプロファイルの作成後に先送りする場合は、以下の場所に更新されたスクリプトが格納されます。

profile_root/dbscripts/feature/dbType/dbName

SQL スクリプト命名規則

- コンポーネント固有のスクリプトの場合: *createTable_componentName.sql*。例えば、*createTable_Recovery.sql* などです。
- コンポーネントに依存しないスクリプトの場合: *createTable.sql*。

スクリプトの命名規則を表 171 にまとめます。

表 171. 共通データベース・スクリプトの命名規則

スクリプトのタイプ	スクリプト名
コンポーネント固有のスクリプト	<i>scriptName_componentName.sql</i>
コンポーネントに依存しないスクリプト	<i>scriptName.sql</i>

JDBC プロバイダー

データベース・タイプに応じて、新規 JDBC プロバイダーが作成されます。このプロバイダーは、スタンドアロン・プロファイルではノード・スコープ内に、Network Deployment 環境ではセル・レベルで作成されます。JDBC プロバイダーは、変数 *JDBC_DRIVER_PATH* を参照して、ローカル JDBC ドライバーを見つけます。変数は、正しいローカル・パスを指すため、セル・レベルおよび各ノード・レベルで指定されます。

データ・ソース名:

- WPS DataSource

データ・ソース JNDI 名:

- jdbc/WPSDB

制約事項

プロファイルの作成時にユーザーが使用できるデータベース・コマンドに関して、いくつかの制約事項があります。

以下のデータベース・タイプでは、「新規データベースの作成」が使用不可になります。

- DB2 for z/OS v8
- DB2 for z/OS v9
- Oracle

テーブル

共通データベース・スクリプトは、プロファイルの作成時に静的テーブルのみを作成します。各コンポーネントによって作成されるすべてのテーブルを以下の表にまとめます。

表 172. WebSphere Process Server の各コンポーネントによって作成されるテーブル

コンポーネント	テーブル名	スクリプト
リカバリー	FAILEDEVENTS FAILEDEVENTBOTYPES FAILEDEVENTMESSAGE	createTable_Recovery.sql
メディエーション	MEDIATION_TICKETS	createTable_mediation.sql
リレーションシップ	実行時に作成される動的テーブル	createTable_Relationship MetadataTable.sql
Application Scheduler	WSCH_LMGR WSCH_ LMPR WSCH_TASK WSCH_TREG	createTable_AppScheduler.sql
カスタマイズ (セレクター/ビジネス・ルール・グループ)	BYTESTORE BYTESTOREOVERFLOW APPTIMESTAMP	createTable_customization.sql
共通データベース	SchemaVersionInfo	createTable_CommonDB.sql
永続ロック・マネージャー	PERSISTENTLOCK	createTable_lockmanager.sql
ESB ロガー・メディエーション	MSGLOG	createTable_ESBLogger Mediation.sql

上記の SQL スクリプトはいずれも、各コンポーネントのスクリプトから `commonDBUtility.ant` を経由して実行されます (`configRecovery >commonDBUtility>execute createTable_Recovery.sql` など)。値 `delayConfig=true` が応答ファイルにある場合、SQL ファイルは作成されますが、実行されません。この場合、構成後に SQL を手動で実行する必要があります。

注: ESB ロガー・メディエーション・コンポーネントでは、各メッセージ・ロガー・プリミティブが異なるデータ・ソースおよび異なるデータベースを使用するように構成することができます。

スクリプトのエクスポート

スクリプトは、共通データベースを構成するためのプロファイル管理ツール・パネルで選択されたオプション用に作成されます。これらのスクリプトには、データバ

ース、テーブル、および索引の基本的な作成ステートメントのみが含まれています。データベース管理者は、これらのスクリプトを実行するために、データベースのネイティブ・コマンドを使用する必要があります。詳細については、『プロファイル管理ツールを使用した共通データベースの構成』を参照してください。

スクリプトは Windows オペレーティング・システムの場合は `configCommonDB.bat`、UNIX ベースのオペレーティング・システムの場合は `configCommonDB.sh` という名前です。

データベース・スクリプトは、以下のフォルダーにエクスポートされます。

`profile_root/dbscripts/CommonDB/dbType/dbName`

プロファイルの作成後または拡張後の共通データベースとテーブルの作成:

プロファイル管理ツールの「データベース構成」パネルで「データベース・スクリプトの実行を遅延 (リモート・データベースを使用する場合は選択する必要がある)」チェック・ボックスを選択して共通データベースとテーブルの作成を延期した場合は、インストール実行者またはデータベース管理者がデータベースとテーブルを手動で作成する必要があります。これらは、プロファイルの作成時または拡張時にプロファイル管理ツールによって生成されるスクリプトを使用すると作成できます。

始める前に

このトピックでは、プロファイル管理ツールを使用してスタンドアロン・サーバーまたはデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成または拡張したものと想定しています。また、プロファイル管理ツールの「データベース構成」パネルで「新規ローカル・データベースを作成する」ラジオ・ボタンを選択し、さらに「データベース・スクリプトの実行を遅延 (リモート・データベースを使用する場合は選択する必要がある)」チェック・ボックスを選択して、共通データベースおよびそのテーブルの作成を延期したことも前提としています。

このタスクについて

WebSphere Process Server のインストール済み環境では、共通データベースが機能することが不可欠であるため、プロファイル管理ツールによる共通データベースの自動作成を許可しなかった場合は、プロファイルの作成時または拡張時にプロファイル管理ツールによって生成されるスクリプトを使用して、インストール実行者またはデータベース管理者が、この段階でデータベースとテーブルを手動で作成する必要があります。

手順

1. i5/OS プラットフォームの場合は `configCommonDB` スクリプト、Linux および UNIX プラットフォームの場合は `configCommonDB.sh` スクリプト、Windows プラットフォームの場合は `configCommonDB.bat` スクリプトが含まれるディレクトリに移動します。これは、プロファイル管理ツールの「データベース構成」パネルの「データベース・スクリプト出力ディレクトリ」フィールドで指定したロケーションです。デフォルトのロケーションは以下のとおりです。

- **i5/OS プラットフォームの場合:** `profile_root/dbscripts/CommonDB/db_type/db_name`

- **Linux** **UNIX** `profile_root/dbscripts/CommonDB/db_type/db_name`
- **Windows** `profile_root¥dbscripts¥CommonDB¥db_type¥db_name`

変数 `db_type` はサポートされるデータベース製品を表し、`db_name` はデータベースの名前です。

新規のローカル・データベースを作成する場合は、**createDB** パラメーターを `configCommonDB` スクリプトに渡す必要があります。それ以外は、既存のデータベースが使用されます。以下に例を示します。

`configCommonDB.sh createDB` - 新規データベース内にテーブルを作成します。

`configCommonDB.sh` - 既存のデータベースを使用してテーブルを作成します。

重要: これらのスクリプトを実行するには、IBM i システムで *SECOFR 権限が必要になります。

2. このスクリプトを実行してデータベースおよび必要なテーブルを作成するには、標準のデータベース定義ツール、ネイティブ・コマンド、およびプロシージャを使用します。このスクリプトには、データベース、テーブル、および索引を作成するための基本的なステートメントのみが含まれています。

次のタスク

データベースの作成が正しく完了したら、そのデータベースのインストール先がローカルかどうかにかかわらず、サーバーまたはデプロイメント・マネージャーを始動する前に、データベースが稼働していることを必ず確認してください。次に、プロファイルのファースト・ステップ・コンソールからサーバーまたはデプロイメント・マネージャーを始動し、エラーがないことを確認してください。SystemOut.log ファイルと SystemErr.log ファイルでエラーを確認できます。それらのファイルは以下の場所にあります。

- `profile_root/logs/server_name` (スタンドアロン・プロファイル)
- `profile_root/logs/dmgr` (デプロイメント・マネージャー・プロファイル)

プロファイルの作成後または拡張後の共通データベースでのテーブルの作成:

プロファイル管理ツールの「データベース構成」パネルで「データベース・スクリプトの実行を遅延 (リモート・データベースを使用する場合は選択する必要がある)」チェック・ボックスを選択して既存の共通データベースに必要なテーブルの作成を延期した場合は、インストール実行者またはデータベース管理者がテーブルを手動で作成する必要があります。これらは、プロファイルの作成時または拡張時にプロファイル管理ツールによって生成されるスクリプトを使用すると作成できます。

始める前に

このトピックでは、プロファイル管理ツールを使用してスタンドアロン・サーバーまたはデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成または拡張したものと想定しています。また、プロファイル管理ツールの「データベース構成」パネルで「既存のデータベースを使用する」ラジオ・ボタンを選択し、さらに「データベース・スクリプトの実行を遅延 (リモート・データベースを使用する場合は選択する

必要がある)」チェック・ボックスを選択して、テーブルの作成を延期したことも前提としています。

このタスクについて

WebSphere Process Server のインストール済み環境では、共通データベースとテーブルが機能することが不可欠であるため、プロファイル管理ツールによるテーブルの自動作成を許可しなかった場合は、プロファイルの作成時または拡張時にプロファイル管理ツールによって生成されるスクリプトを使用して、インストール実行者またはデータベース管理者が、この段階でテーブルを手動で作成する必要があります。

手順

1. テーブル作成スクリプトが含まれるディレクトリーに移動します。i5/OS プラットフォームの場合は createDBTables、Linux および UNIX プラットフォームの場合は createDBTables.sh、Windows プラットフォームの場合は createDBTables.bat というスクリプトです。これは、プロファイル管理ツールの「データベース構成」パネルの「データベース・スクリプト出力ディレクトリー」フィールドで指定したロケーションです。デフォルトのロケーションは以下のとおりです。

- **i5/OS プラットフォームの場合:** `profile_root/dbscripts/CommonDB/db_type/db_name`

- **Linux** `profile_root/dbscripts/CommonDB/db_type/db_name`

- **Windows** `profile_root%dbscripts%CommonDB%db_type%db_name`

変数 `db_type` はサポートされるデータベース製品を表し、`db_name` はデータベースの名前です。

2. このスクリプトを実行して必要なテーブルを作成するには、標準のデータベース定義ツール、ネイティブ・コマンド、およびプロシージャを使用します。このスクリプトには、データベース、テーブル、および索引を作成するための基本的なステートメントのみが含まれています。

次のタスク

テーブルの作成が正しく完了したら、データベースのインストール先がローカルかどうかにかかわらず、サーバーまたはデプロイメント・マネージャーを始動する前に、データベースが稼働していることを必ず確認してください。次に、プロファイルのファースト・ステップ・コンソールからサーバーまたはデプロイメント・マネージャーを始動し、エラーがないことを確認してください。SystemOut.log ファイルと SystemErr.log ファイルでエラーを確認できます。それらのファイルは以下の場所にあります。

- `profile_root/logs/server_name` (スタンドアロン・プロファイル)

- `profile_root/logs/dmgr` (デプロイメント・マネージャー・プロファイル)

Common Event Infrastructure データベースの構成

Common Event Infrastructure データベース仕様には、サポートされるデータベースのタイプ、スクリプトの位置、プロファイル構成タイプ、および必要なユーザー ID の特権がリストされます。

Common Event Infrastructure データベースを使用して、WebSphere Process Server のモニター中に取り込まれたイベントを保管します。

Common Event Infrastructure データベースは、スタンドアロン・プロファイルに対してデフォルトで作成し、Network Deployment 環境内の Common Event Infrastructure サーバーのインスタンスごとに作成します。データベースを作成するには、インストール手順、プロファイル管理ツール、または管理コンソールを使用して作成できます。

注: WebSphere Process Server がこれらのテーブルを使用するよう構成する必要があります。これを行うには、プロファイル管理ツール (スタンドアロン・プロファイルのみ) または管理コンソール (デプロイメント環境) を使用します。697 ページの『Common Event Infrastructure の構成』を参照してください。

Common Event Infrastructure データベースは内部のデバイスであり、ユーザーと直接対話することはありません。Common Event Infrastructure データベースとのすべての対話は、サポートされている Common Event Infrastructure API を使用して実行する必要があります。

Common Event Infrastructure データベースの構成については、次の場所の『イベント・データベースの構成』のトピックを参照してください。

- *WebSphere Process Server for Multiplatforms* バージョン 6.1.2 *Common Event Infrastructure* PDF
- WebSphere Process Server for Multiplatforms オンライン・インフォメーション・センター (イベント・データベースの構成)

ユーザー ID の特権

プロファイル管理ツールで指定するユーザー資格情報には、テーブル・スペース、テーブル、スキーマ、索引、およびストアド・プロシージャを作成するために必要な権限が必要です。「新規データベースの作成」オプションを使用する場合は、新規データベースを作成するために必要な特権がユーザー ID に与えられていなければなりません。詳しくは、『データベースのユーザーおよびスキーマ』および『データベース特権』を参照してください。

注: スクリプトを実行しているユーザーがテーブルを作成するための十分な権限を持っている場合は、スクリプト内で認証 ID を指定する必要はありません。

データベース管理サービス・インスタンス

Common Event Infrastructure サーバーの各デプロイメント・ターゲットには、1 つのデータベースが備わっています。Common Event Infrastructure データベースは、スタンドアロン・サーバー構成に対してのみ作成されるため、サーバーごとに 1 つのデータベース管理サービス (DBMS) インスタンスのみが存在します。

プロファイル作成時の構成操作

Common Event Infrastructure の作成方法は、以下の環境のタイプによって異なります。

スタンドアロン環境

Common Event Infrastructure データベースの構成は、プロファイル作成の一環としてプロファイル・テンプレートの Apache Ant スクリプト `configCei.ant` によって実行されます。このスクリプトにより、目的の構成に必要なすべてのプロパティが含まれた Common Event Infrastructure の管理用タスクが呼び出されます。

スタンドアロン環境では、イベント・データベースとテーブルが作成され、スクリプトはデフォルトで `profile_root/dbscripts/CEI_event` にエクスポートされます。オプションの `outputScriptDir` パラメーターを使用した場合は、スクリプトのデフォルトの場所は `profile/databases/event/node/server/dbscripts/dbtype` です。

プロファイル管理ツールの場合、または `manageprofiles` コマンド行ユーティリティを使用した場合は、スタンドアロンの CEI 環境のデフォルトの場所は `profile_root/dbscripts/CEI_DBNAME` です。

Network Deployment 環境

Network Deployment 環境では、デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成または管理対象プロファイルの作成には、Common Event Infrastructure データベースの自動作成は組み込まれていません。Common Event Infrastructure データベースを作成するには、『イベント・データベースの構成』を参照してください。

Network Deployment の場合、管理コンソールによって Common Event Infrastructure サーバーを構成する必要があります。詳しくは、『Common Event Infrastructure の構成』を参照してください。

Common Event Infrastructure では、以下の操作に対して管理用タスク `configEventServiceDB` が提供されます。

- `createDB` パラメーターを `true` に設定することによるイベント・データベースとテーブルの作成
- `createDB` パラメーターを `false` に設定することによる SQL スクリプトのエクスポート

SQL スクリプト

Common Event Infrastructure では、以下の操作に対して管理用タスク `configEventService<DBTYPE>DB` が提供されます。

- `createDB` パラメーターを `true` に設定することによるイベント・データベースとテーブルの作成
- `createDB` パラメーターを `false` に設定することによる SQL スクリプトのエクスポート

スタンドアロン環境では、イベント・データベースとテーブルが作成され、スクリプトは `profile_root/dbscripts/CEI_event` ディレクトリーにエクスポートされます。

JDBC プロバイダー

Common Event Infrastructure 管理用タスクの `configEventServiceDBTYPEDB` により、JDBC プロバイダーとデータ・ソースが作成されます。形式は `profile_root/databases/event/deployment_environment/dbscripts/dbName` ディレクトリーであり、ここで `deployment_environment` はクラスターまたはサーバーのいずれかです。

コンポーネントの JNDI 名は以下のとおりです。

```
jndiName="jdbc/cei"
```

```
jndiName="jdbc/eventcatalog"
```

データ・ソース名は以下のとおりです。

- event
- eventcatalog

Common Event Infrastructure データベースのプロバイダーを作成するためのスクリプトは、以下の場所に格納されます。 `configuration_root/app_server_root/profiles/profilename/event/dsscripts/${dbtype}`

テーブル

多数のテーブルが作成されます。対象のデータベース製品で生成されるテーブルを確認するには、生成されるスクリプトを参照してください。

スクリプトのエクスポート

生成された SQL スクリプトを実行するためのシェル・スクリプトが以下のディレクトリーに作成されます。

```
configuration_root/app_server_root/profiles/profilename/event/dbscripts/dbtype
```

リモート z/OS サーバー上の DB2 での Common Event Infrastructure リポジトリーと共通データベース・リポジトリーの作成:

Common Event Infrastructure および共通データベースのリポジトリー用に DB2 をリモート z/OS ワークステーションで使用する場合は、ユーザーまたはデータベース管理者 (DBA) は、関連するデータベースおよび正しいストレージ・グループを z/OS ワークステーション上に作成する必要があります。

- Common Event Infrastructure リポジトリーを作成するには、『イベント・データベースの構成』およびそのサブトピックを参照してください。
- 共通データベース・リポジトリーを作成するには、標準的なデータベース定義ツールや手順を使用して、以下のディレクトリーに用意されているデフォルト・スクリプトを編集して実行します。

– **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォーム:

```
install_root/dbscripts/CommonDB/DB2zOSV8/
```

– **Windows** **Windows** プラットフォーム:

```
install_root¥dbscripts¥CommonDB¥DB2zOSV8¥
```

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
`install_root/dbscripts/CommonDB/DB2zOSV9/`
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合:
`install_root¥dbscripts¥CommonDB¥DB2zOSV9¥`

これらと同じスクリプトは、`media_root` または `extraction_root/dbscripts` ディレクトリーにも存在します。スクリプトの編集方法について詳しくは、40 ページの『z/OS 用の DB2 データベースの作成』を参照してください。

Business Process Choreographer データベースの構成

ビジネス・プロセスまたはヒューマン・タスク、あるいはその両方を含む任意のエンタープライズ・アプリケーションをインストールする前に、サーバーまたはクラスター上で Business Process Choreographer を構成する必要があります。

Business Process Choreographer データベースの構成方法について詳しくは、Business Process Choreographer の構成を参照してください。

メッセージング・エンジン・データベースの構成

このメッセージング・エンジン・データベースの仕様には、サポートされるデータベース・タイプ、スクリプトとそれらの場所、プロファイル作成のタイプ、および必要なユーザー ID の特権がリストされています。

メッセージング・エンジン・データベースは、運用情報を格納するために使用します。さらに、障害が発生した場合のリカバリーのためにメッセージング・エンジンが必要とする重要なオブジェクトも格納されます。

メッセージング・エンジン・データベースは、Service Component Architecture (SCA)、Business Process Choreographer および Common Event Infrastructure のメッセージ・エンジンによって使用されます。SCA のメッセージング・エンジンのデフォルトのデータベースの名前は SCADB、他のメッセージング・エンジンの場合は MEDB です。Derby Embedded または Derby Embedded 40 データベースについては、各メッセージング・エンジンに独自のデータベースまたはスキーマがあります。デフォルトのスキーマの名前は IBMWSSIB です。

注: すべてのデータベース・タイプで複数のスキーマがサポートされているとは限りません。詳しくは、データベースの文書を参照してください。

スタンドアロン環境では、管理コンソールの「サーバー」->「アプリケーション・サーバー」->「*server*」->「ビジネス・インテグレーション」->「Service Component Architecture」構成ページを使用して、SCA メッセージング・エンジンを構成できます。パターンに基づくネットワーク環境では、メッセージング・エンジンがインストール時に構成されます。ただし、カスタム・ネットワーク環境の場合は、メッセージング・エンジンを手動で構成する必要があります。詳しくは、『カスタム・デプロイメント環境のレイアウト構成』を参照してください。

メッセージング・エンジン・データベースについては、さまざまな面を制御できます。例えば、各メッセージング・エンジンごとにデータベースを作成することも、1

つのデータベースですべてのメッセージング・エンジンに対応することも可能です。各メッセージング・エンジンは、独自のデータベースまたはスキーマのいずれかを持つ必要があります。

サポートされているデータベース・タイプ

メッセージング・エンジン・データベースには、以下のデータベース製品を使用することができます。

表 173. サポートされるデータベース製品

データベース・タイプ	考慮事項
Derby Embedded または Derby Embedded 40	スタンドアロン・プロファイルのデフォルト・データベース・タイプとして使用されます。
Derby Network Server または Derby Network Server 40	Network Deployment 環境のデフォルト・データベース・タイプとして使用されます。
DB2 Universal	Network Deployment 構成のデータベースとして使用されます。オプションで、スタンドアロン・サーバー構成でデータベースとして使用できます。
DB2 データ・サーバー	Network Deployment 構成のデータベースとして使用されます。オプションで、スタンドアロン・サーバー構成でデータベースとして使用できます。
DB2 for z/OS v8 DB2 for z/OS v9	重要: DB2 for z/OS v9 を使用するサーバー用にプロファイルを作成するときは、そのサーバーが DB2 データベースに接続できる必要があります。Network Deployment 構成のデータベースとして使用されます。オプションで、スタンドアロン・サーバー構成でデータベースとして使用できます。
DB2 UDB for iSeries (ツールボックス) DB2 for i5/OS (ツールボックス)	Network Deployment 環境のリモート・データベースとして、またはスタンドアロン・プロファイルのローカル・データベースとして使用されます。Network Deployment 構成のデータベースとして使用されます。オプションで、スタンドアロン・サーバー構成でデータベースとして使用できます。
Informix Dynamic Server	
Microsoft SQL Server (DataDirect)	
Microsoft SQL Server (Microsoft)	
Oracle	データベース、テーブルおよびスキーマを作成するための sysdba 特権が必要です。正しい sysdba 特権がない場合は、テーブルの作成中およびテーブルおよびスキーマへのアクセス中にエラーが発生することがあります。

ユーザー ID の特権

プロファイル管理ツールで指定するユーザー資格情報には、テーブル・スペース、テーブル、スキーマ、索引、およびストアド・プロシージャを作成するために必要な権限が必要です。「新規データベースの作成」オプションを使用する場合は、新規データベースを作成するために必要な特権がユーザー ID に与えられていなければなりません。詳しくは、『データベースのユーザーおよびスキーマ』および『データベース特権』を参照してください。

注: スクリプトを実行しているユーザーがテーブルを作成するための十分な権限を持っている場合は、スクリプト内で認証 ID を指定する必要はありません。

Network Deployment 環境では、構成時に管理コンソールで指定したユーザー特権に関して必要な許可すべてを持っている必要があります。

注: DB2 バージョン 9.7 の場合は、ユーザーに必要な権限がユーザーの作成時に自動で付与されないため、新規作成したユーザーに適切な権限を手動で付与する必要があります。

データベース管理サービス (DBMS) インスタンス

各メッセージング・エンジンには、以下に示す独自のデータベースまたはスキーマがあります。

- Service Component Architecture システム・バスの各メッセージング・エンジンのホストとして使用するもの。
- Service Component Architecture アプリケーション・バスの各メッセージング・エンジンのホストとして使用するもの。
- Common Event Infrastructure バスの各メッセージング・エンジンのホストとして使用するもの。
- Business Process Choreographer バスの各メッセージング・エンジンのホストとして使用するもの。

メッセージング・エンジンがデータベースとの対話に使用する JDBC データ・ソースの命名規則は、以下のとおりです。

- システム・バス: `<node><server>|<cluster>-SCA.SYSTEM.<cell>.Bus`
- アプリケーション・バス: `<node><server>|<cluster>-SCA.APPLICATION.<cell>.Bus`
- Common Event Infrastructure: `<node><server>|<cluster>-CEI.cellName.BUS`
- Business Process Choreographer バス: `<node><server>.-BPC.<cell>.Bus`

Derby データベースの命名規則は、以下のとおりです。

- システム・バス: `install_root/profiles/profilename/databases/com.ibm.ws.sib/(<node>.<server>|<cluster>)-SCA.SYSTEM.<cell>.Bus`
- アプリケーション・バス: `install_root/profiles/profilename/databases/com.ibm.ws.sib/(<node>.<server>|<cluster>)-SCA.APPLICATION.<cell>.Bus`
- Common Event Infrastructure: `install_root/profiles/profilename/event/ DerbyEventBusDB/(<node>.<server>|<cluster>)-CEI.cellName.BUS`
- Business Process Choreographer バス: `install_root/profiles/profilename/databases/com.ibm.ws.sib/(<node>.<server>|<cluster>)-BPC.<cell>.Bus`

<cell> のデフォルトは、ほとんどの場合、セル名とすることができます。ただし、スタンドアロン・プロファイルが統合される場合 (これがセルの最初のノードの場合のみ許可されます) は、<cell> をそのスタンドアロン・プロファイルの名前にすることができます。このセル名は、SCA (BPC や CEI でなく) の独自のバス ID 名でオーバーライドできます。カスタマイズした名前を作成するには、スクリプト・クライアント (wsadmin) で [SCA] 管理タスクを使用します。管理コンソールを使用して、カスタマイズした名前を作成することはできません。

プロファイル作成時の構成操作

スタンドアロン・プロファイル

スタンドアロン・サーバー用のデフォルトのメッセージング・エンジン・データベースは Derby Embedded または Derby Embedded 40 です。メッセージング・エンジン・データベースにファイル・ストアを使用することも、サポートされる別のデータベースを使用することもできます。プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成時に、すべてのメッセージング・エンジンに対して共通データベースを使用することができます。

Network Deployment

メッセージング・エンジン・データベースは自動的に作成されません。

プロファイルが作成された後、ガイド付きアクティビティー (Network Deployment 環境の構成) を使用して、Service Component Architecture 用にサーバーまたはクラスターを構成できます。このガイド付きアクティビティーにアクセスするには、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールで、「ガイド付きアクティビティー (Guided Activities)」を展開して、「Network Deployment 環境の構成」をクリックします。

管理コンソールの「アプリケーション・サーバー」 > 「servername」 > 「Service Component Architecture」パネルで、サーバーの SCA 構成を表示できます。

プロファイルの作成時に、以下の管理用タスクが実行されます。

- リモート宛先の場所:
 - configSCAAsyncForServer、configSCAJMSForServer (remoteMELocation は true)
 - configSCAAsyncForCluster、configSCAJMSForCluster (remoteMELocation は true)
- ローカル宛先の場所:
 - configSCAAsyncForServer、configSCAJMSForServer
 - configSCAAsyncForCluster、configSCAJMSForCluster

これらのタスクの使用方法について詳しくは、「configSCAAsyncForCluster コマンド」および「configSCAAsyncForServer コマンド」から検索できます。

サーバーまたはクラスターに非同期の SCA 構成を実行すると、メッセージング・エンジンは SCA システム・バス用に作成されます。サーバーまたはクラスターに SCA 構成の JMS エレメントを実行すると、メッセージング・エンジンは SCA アプリケーション・バス用に作成されます。どちらのメッセージング・エンジンも、データベースまたはスキーマの作成が必要です。

Business Process Choreographer のメッセージング・エンジンは、Business Process Choreographer の構成時に作成されます。Business Process Choreographerは、パターン・デプロイメント環境の場合にのみ構成されます。詳しくは、『トポロジー、セットアップ、および構成パスの計画』を参照してください。

Common Event Infrastructure の場合、メッセージング・エンジンの構成には、deployEventService 管理用タスクを使用して、イベント・サーバーと Common Event Infrastructure バスを構成します。

SQL スクリプト

製品の一部として SQL スクリプトが作成されることはありません。必要な場合は、既存の基本 WebSphere Application Server のスクリプトを使用して、データベースとテーブルを作成することができます。MEDB は、まず手動で作成してから、管理コンソールの「アプリケーション・サーバー」>「servername」>「Service Component Architecture」パネルを使用して構成します。

JDBC プロバイダー

Service Component Architecture

JDBC プロバイダーの実装クラスが、拡張構成で選択されている実装クラスと一致しなければならない場合は、その JDBC プロバイダーが再利用されます。通常、同じデータベース・タイプを使用する場合は、実装クラスも一致します。一致する JDBC プロバイダーが resource.xml ファイル内で検出されない場合は、templates/system (プロファイル構成) にある jdbc-resource-provider-templates.xml ファイルで、一致する JDBC プロバイダーが検索されます。プロバイダーの突き合わせは、実装クラスについても行われます。

Business Process Choreographer

Business Process Choreographer は、Service Component Architecture メッセージング・エンジンの JDBC プロバイダーを再使用します。詳しくは、Business Process Choreographer の構成を参照してください。

Common Event Infrastructure

メッセージング・エンジン・データベースの JDBC プロバイダーの作成手順は、CEIDB データベースの場合の作成手順とよく似ています。

データ・ソース名:

- システム・バス: `_(node.server|cluster)-SCA.SYSTEM.cell.Bus/cel/cluster/server/node`
- アプリケーション・バス: `_(node.server|cluster)-SCA.APPLICATION.cell.Bus/cell/cluster/server/node`
- Common Event Infrastructure: `_(node.server| cluster-CEI.cellName.BUS/cluster/server/node`
- Business Process Choreographer: `_(node.server|cluster)-BPC.cell.Bus/cell/cluster/server/node`

データ・ソース JNDI 名:

- システム・バス: jdbc/com.ibm.ws.sib/(node.server|cluster)-SCA.SYSTEM.cell.Bus/cell/cluster/server/node
- アプリケーション・バス: jdbc/com.ibm.ws.sib/(node.server|cluster)-SCA.APPLICATION.cell.Bus/cell/cluster/server/node
- Common Event Infrastructure: Jdbc/ com.ibm.ws.sib /(node.server|cluster)-CEI.cellName.BUS/cluster/server/node
- Business Process Choreographer バス: jdbc/com.ibm.ws.sib/(node.server|cluster)-BPC.cell.Bus/cell/cluster/server/node

制約事項

既知の制約事項はありません。

テーブル

テーブルについては、WebSphere Application Server Network Deployment インフォメーション・センターの『データ・ストア』のトピックを参照してください。

スクリプトのエクスポート

WAS_INSTALL_ROOT/bin の **sibDDLGenerator** スクリプトを使用して、メッセージング・エンジン・データベース用の SQL スクリプトを作成できます。実稼働環境 (特に z/OS プラットフォームの場合) で使用するための SQL スクリプトを作成するには、**sibDDLGenerator** スクリプトを使用します。詳しくは、『sibDDLGenerator コマンド』を参照してください。

これらのスクリプトには、基本の create database/tablespace/table ステートメントしか含まれていません。データベース管理者は、対象のデータベースのニーズを満たすために、これらのスクリプトにさらなる調整が必要になる場合があります (特に z/OS の場合)。

データ・ストア接続が失われた場合のメッセージング・エンジンとサーバーの動作の構成

何らかの障害によって、または保守用にデータベースを停止したために、稼働しているメッセージング・エンジンとそのデータ・ストアとの接続が失われたときのシステムの動作を、メッセージング・エンジンのカスタム・プロパティーを通じて決定できます。

sib.msgstore.jdbcFailoverOnDBConnectionLoss カスタム・プロパティーを設定することにより、可用性が高い WebSphere Process Server 環境の自動リカバリー機能をさらに強化できます。

sib.msgstore.jdbcFailoverOnDBConnectionLossプロパティーの詳細については、このプロパティーの設定方法も含め、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『データ・ストア接続が失われた場合のメッセージング・エンジンおよびサーバーの動作の構成 (Configuring messaging engine and server behavior when a data store connection is lost)』を参照してください。

関連情報

 データ・ストア接続が失われた場合のメッセージング・エンジンとサーバーの動作の構成

エンタープライズ・サービス・バスのロガー・メディエーション・データベースの構成

このエンタープライズ・サービス・バスのロガー・メディエーション・データベースの仕様を使用して、サポートされるデータベース・タイプ、スクリプト名とそれらの場所、プロファイル作成の構成操作、スキーマのアップグレード、およびユーザー ID の特権に関する情報を調べてください。

エンタープライズ・サービス・バスのロガー・メディエーション・データベースは、WebSphere Process Server の MessageLogger メディエーション・プリミティブによって使用されます。メッセージ・ロガー・プリミティブによって、メッセージ情報が共通データベースに保管されます。共通データベースが、エンタープライズ・サービス・バスのロガー・メディエーション・データベース用のデフォルトですが、外部データベースを使用することもできます。プロファイルの拡張フェーズ時に、システムにより `ESB_MESSAGE_LOGGER_QUALIFIER` という変数が作成され、これが選択した共通データベースのスキーマ修飾子の値に設定されます。

データベースがスタンドアロン構成に対して自動的に作成されます。提供される一連の DDL ファイルにより、スタンドアロン・サーバー構成内または Network Deployment 環境で追加のデータベースを使用できます。

DB2 for z/OS データベースを使用したスタンドアロン構成の場合、または Network Deployment 構成の管理対象ノードまたはデプロイメント・マネージャーの場合は、WebSphere Process Server for z/OS 構成スクリプトの実行前に、Enterprise Service Bus データベースとストレージ・グループを作成する必要があります。

サポートされているデータベース・タイプ

エンタープライズ・サービス・バスのロガー・メディエーション・データベースには、以下のデータベース製品を使用することができます。

表 174. サポートされるデータベース製品

データベース・タイプ	考慮事項
Derby Embedded または Derby Embedded 40	スタンドアロン・プロファイルのデフォルト・データベース・タイプとして使用されません。
Derby Network Server または Derby Network Server 40	Network Deployment 環境のデフォルト・データベース・タイプとして使用されます。
DB2 Universal	Network Deployment 構成のデータベースとして使用されます。オプションで、スタンドアロン・サーバー構成でデータベースとして使用できます。

表 174. サポートされるデータベース製品 (続き)

データベース・タイプ	考慮事項
DB2 データ・サーバー	Network Deployment 構成のデータベースとして使用されます。オプションで、スタンドアロン・サーバー構成でデータベースとして使用できます。
DB2 for z/OS v8 DB2 for z/OS v9	重要: DB2 for z/OS v9 を使用するサーバー用にプロファイルを作成するときは、そのサーバーが DB2 データベースに接続できる必要があります。Network Deployment 構成のデータベースとして使用されます。オプションで、スタンドアロン・サーバー構成でデータベースとして使用できます。
DB2 UDB for iSeries (ツールボックス) DB2 for i5/OS (ツールボックス)	Network Deployment 環境のリモート・データベースとして、またはスタンドアロン・プロファイルのローカル・データベースとして使用されます。Network Deployment 構成のデータベースとして使用されます。オプションで、スタンドアロン・サーバー構成でデータベースとして使用できます。
Informix Dynamic Server	
Microsoft SQL Server (DataDirect)	
Microsoft SQL Server (Microsoft)	
Oracle	データベース、テーブルおよびスキーマを作成するための sysdba 特権が必要です。正しい sysdba 特権がない場合は、テーブルの作成中およびテーブルおよびスキーマへのアクセス中にエラーが発生することがあります。

ユーザー ID の特権

プロファイル管理ツールで指定するユーザー資格情報には、テーブル・スペース、テーブル、スキーマ、索引、およびストアド・プロシージャを作成するために必要な権限が必要です。「新規データベースの作成」オプションを使用する場合は、新規データベースを作成するために必要な特権がユーザー ID に与えられていなければなりません。詳しくは、『データベースのユーザーおよびスキーマ』および『データベース特権』を参照してください。

注: スクリプトを実行しているユーザーがテーブルを作成するための十分な権限を持っている場合は、スクリプト内で認証 ID を指定する必要はありません。

データベース管理サービス (DBMS) インスタンス

共通データベースは、スタンドアロン環境および Network Deployment 環境の両方でセル・スコープで使用されます。ただし、ユーザーは他のインスタンスに必要な数だけ手動で作成することができます (各メッセージ・ロガー・メディエーション・プリミティブは、別のデータ・ソース、つまり別のデータベースを使用するために構成できます)。

プロフィール作成時の構成操作

スタンドアロン・プロフィールとデプロイメント・マネージャー・プロフィールの場合、エンタープライズ・サービス・バスのロガー・プロフィールにより、共通データベース内にある **createTable** という共通データベース用スクリプトが実行されます。詳しくは、『共通データベースの仕様』を参照してください。

スタンドアロン・プロフィール

デフォルトのスタンドアロン環境では、Derby データベースが **EsbLogMedDB** という名前で自動的に作成されます。

Network Deployment 環境

デフォルトのエンタープライズ・サービス・バス・データベースは、**Network Deployment** プロファイルの作成時に自動的に選択されません。デフォルトのデータベース、またはサポートされるデータベースの 1 つのいずれかを選択する必要があります。

SQL スクリプト

SQL スクリプト **createTable_ESB.sql** が *install_root/dbscripts/CommonDB/DBTYPE* に置かれます。

スクリプト **createMessageLoggerResource.jacl** と **removeMessageLoggerResource.jacl** が *install_root/bin* にあり、要求したデータベース・タイプのテーブルの作成または削除に使用することができます。

JDBC プロバイダー

以下の共通データベースの JDBC プロバイダーとデータ・ソースがデフォルトで使用されます。

データ・ソース名:

- WPS DataSource

データ・ソース JNDI 名:

- jdbc/WPSDB

メッセージ・ロガー・メディエーションを構成して別のデータ・ソースを使用すると、独自のデータ・ソースを作成することができます。

制約事項

既知の制約事項はありません。

テーブル

エンタープライズ・サービス・バスのロガー・メディエーション・データベースでは、共通データベース内の **MSGLOG** テーブルが使用されます。共通データベースを使用しないことを選択できます。必要な場合は外部データベースを使用することもできます。

スクリプトのエクスポート

データベース・スクリプトは、`install_root/dbscripts/CommonDB/DBTYPE/dbName` にエクスポートされます。

スキーマのアップグレード・スクリプト

スキーマのアップグレードは、MSGLOG テーブルには含まれていません。WebSphere Process Server バージョン 6.1 にマイグレーションした場合、WebSphere Process Server では、前のリリースで使用されていた **MessageLogger** データベースが引き続き使用されます。このデータを WebSphere Process Server 共通データベースにマイグレーションするためのサポートはありません。

メッセージ情報用の単一の場所を維持する場合は、以下のことが実行できます。

- データを古いデータベースから新しいデータベースへ手動で移動する
- 古いデータベースを引き続き使用する
- `createMessageLoggerResource.jacl` スクリプトを使用してデータを移動する

セレクター/ビジネス・ルール・グループ・データベース構成

このセレクター/ビジネス・ルール・グループ・データベースの仕様を使用して、サポートされるデータベース・タイプ、スクリプトとそれらの場所、プロファイル作成の構成操作、制限事項、テーブル名、およびユーザー ID の特権に関する情報を調べてください。

セレクターやビジネス・ルールの成果物を含んだアプリケーションをインストールすると、それらの成果物は、サーバーによってデータベース表に格納されるので、ユーザーはアプリケーションを変更しなくてもそれらの成果物を動的に更新できます。セレクターとビジネス・ルール・グループのコンポーネントは、セレクターとビジネス・ルールの成果物を保持するためにデータベースを使用します。それらの成果物は、WebSphere Integration Developer で作成され、サーバーにインストールされます。管理コンソールからセレクターに変更を加えた場合や、ビジネス・ルール・マネージャーからビジネス・ルールに変更を加えた場合には、最新の情報に基づいてデータベースが更新されます。EAR に含まれている元の成果物は、アプリケーションのインストール後の更新に合わせて同期することはありません。

サポートされているデータベース・タイプ

セレクター/ビジネス・ルール・グループ・データベースには、以下のデータベース製品を使用することができます。

表 175. サポートされるデータベース製品

データベース・タイプ	考慮事項
Derby Embedded または Derby Embedded 40	スタンドアロン・プロファイルのデフォルト・データベース・タイプとして使用されます。
Derby Network Server または Derby Network Server 40	Network Deployment 環境のデフォルト・データベース・タイプとして使用されます。

表 175. サポートされるデータベース製品 (続き)

データベース・タイプ	考慮事項
DB2 Universal	Network Deployment 構成のデータベースとして使用されます。オプションで、スタンドアロン・サーバー構成でデータベースとして使用できます。
DB2 データ・サーバー	Network Deployment 構成のデータベースとして使用されます。オプションで、スタンドアロン・サーバー構成でデータベースとして使用できます。
DB2 for z/OS v8 DB2 for z/OS v9	重要: DB2 for z/OS v9 を使用するサーバー用にプロファイルを作成するときは、そのサーバーが DB2 データベースに接続できる必要があります。Network Deployment 構成のデータベースとして使用されます。オプションで、スタンドアロン・サーバー構成でデータベースとして使用できます。
DB2 UDB for iSeries (ツールボックス) DB2 for i5/OS (ツールボックス)	Network Deployment 環境のリモート・データベースとして、またはスタンドアロン・プロファイルのローカル・データベースとして使用されます。Network Deployment 構成のデータベースとして使用されます。オプションで、スタンドアロン・サーバー構成でデータベースとして使用できます。
Informix Dynamic Server	
Microsoft SQL Server (DataDirect)	
Microsoft SQL Server (Microsoft)	
Oracle	データベース、テーブルおよびスキーマを作成するための sysdba 特権が必要です。正しい sysdba 特権がない場合は、テーブルの作成中およびテーブルおよびスキーマへのアクセス中にエラーが発生することがあります。

ユーザー ID の特権

プロファイル管理ツールで指定するユーザー資格情報には、テーブル・スペース、テーブル、スキーマ、索引、およびストアド・プロシージャを作成するために必要な権限が必要です。「新規データベースの作成」オプションを使用する場合は、新規データベースを作成するために必要な特権がユーザー ID に与えられていなければなりません。詳しくは、『データベースのユーザーおよびスキーマ』および『データベース特権』を参照してください。

注: スクリプトを実行しているユーザーがテーブルを作成するための十分な権限を持っている場合は、スクリプト内で認証 ID を指定する必要はありません。

データベース管理サービス (DBMS) インスタンス

スタンドアロン・プロファイルまたは Network Deployment 構成 (サーバーまたはサーバー・クラスター) で使用できるデータベース・インスタンスは 1 つのみです。

スタンドアロン・プロファイル内またはセル内のサーバー用のすべてのセレクトターとビジネス・ルールでは、同じリポジトリが使用されます。別個のセレクトターやビジネス・ルールのために別個のデータベース・インスタンスを使用することはサポートされていません。

プロファイル作成時の構成操作

スタンドアロン・プロファイル

プロファイルの作成時に、共通データベースによって createTable が使用されて、ビジネス・ルールとセレクトターの各テーブルが作成されます。デフォルトの構成を選択した場合は、デフォルトのデータベースは Derby Embedded または Derby Embedded 40 です。ただし、Derby Embedded または Derby Embedded 40 では、一度に 1 つの Java 仮想マシンしかデータベースにアクセスできないため、複数のサーバーを使用することはできません。

デプロイメント・マネージャー・プロファイル

Network Deployment 構成の場合、セル用の共通データベースにセレクトターとビジネス・ルール・グループのコンポーネント用の適切なテーブルがセットアップされます。デプロイメント・マネージャー内またはカスタム・プロファイル内のサーバーのすべてのセレクトターとビジネス・ルールは、そのデータベースを使用します。

SQL スクリプト

SQL スクリプトの位置については、『共通データベース の仕様』を参照してください。

JDBC プロバイダー

セレクトターとビジネス・ルールでは、以下の共通データベースのデータ・ソースと JDBC プロバイダーが使用されます。

データ・ソース名:

- WPS DataSource

データ・ソース JNDI 名:

- jdbc/WPSDB

制約事項

セレクトターやビジネス・ルールを含んだアプリケーションをサーバーまたはセルからアンインストールしても、共通データベースまたは RepositoryDB データベースに格納されている成果物は除去されません。これらは、『ビジネス・ルールおよびセレクトター・データのリポジトリからの除去 (Removing business rule and selector data from the repository)』のトピックにある指示に従って、手動で除去する必要があります。

セレクトターまたはビジネス・ルールが含まれたアプリケーションをサーバーまたはセルからアンインストールしても、共通データベースに格納されている成果物は除去されません。これらは、インフォメーション・センターにある『リポジトリか

らのビジネス・ルールおよびセクター・データの除去』の指示に従って、手動で除去する必要があります。

テーブル

セクターとビジネス・ルールの成果物を保持するために、以下の 3 つのテーブルがあります。

- ByteStore
- ByteStoreOverflow
- AppTimestamp

スクリプトのエクスポート

スクリプトは、共通データベースのスクリプトと同じ場所にエクスポートされます。ただし、Derby Embedded または Derby Embedded 40 を使用する場合は例外であり、スクリプトはエクスポートされません。スクリプトの位置については、『共通データベース の仕様』を参照してください。

データベース設計ツールを使用したデータベース設計ファイルの作成

データベース設計ツール (DDT) を使用すると、WebSphere Process Server に必要なデータベース表の作成に使用する設計ファイルを生成できます。DDT では、ユーザー指定のプロパティ・ファイルまたは対話式のユーザー入力に基づいて設計ファイルが生成されます。生成された設計ファイルは、DDT がデータベース表の作成に使用されるデータベース・スクリプトを作成するのに使用します。また、プロファイル作成時やデプロイメント環境構成時の入力として設計ファイルを使用して、データベース構成プロパティを指定することもできます。

始める前に

すべてのデータベース要件およびスキーマ名のリストを用意する必要があります。221 ページの『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』を参照してください。

このタスクについて

以下のステップでは、DDT を使用して設計ファイルおよびデータベース・スクリプトを生成する方法について説明します。DDT の入力は、ユーザー指定のプロパティ・ファイルまたは対話式ユーザー入力のいずれかです。

DbDesignGenerator コマンドのオプションは以下のとおりです。

```
-? , -help
ヘルプ情報を表示します。

-e db_design_file_name
指定したデータベース設計ファイル (*.dbDesign、*.properties など) を編集します。

-v db_design_file | db_scripts_output_directory
db_design_file が指定されている場合は、データベースの仕様に基づいて、指定されたデータベース設計ファイルに対して検証が行われます。
db_scripts_output_directory が指定されている場合は、指定されたディレクトリ内のデータベース・スクリプトが検証されます。現在のところ、検証が可能なのは、
```

テンプレート dd1 生成プログラムから生成されたスクリプトのみです。

```
-g db_design_file [-d output_directory] [db_design_file2] [-d output_directory2] ...  
[db_design_fileN] [-d output_directoryN]
```

指定された設計ファイルからデータベース・スクリプトをバッチ・モードで生成します。生成されたスクリプトは、対応する出力ディレクトリーに格納されるか、出力ディレクトリーがない場合はデフォルトのロケーションに格納されます。

注: DDT は、Common Event Infrastructure 用のデータベース・スクリプトの生成をサポートしません。

注: 以下の制約事項は、Common Event Infrastructure コンポーネントのスタンドアロン・データベース設計に適用されます。

表 176. CEI コンポーネントのスタンドアロン・データベース設計の制約事項:

データベース・タイプ	CEI 制約事項
DB2 Distributed	データベース名は、commonDB 名と同じであってはなりません。CEI データベース設計を編集し、別の名前を選択してください。
SQL サーバー	<ul style="list-style-type: none">• dbServerName は空であってはなりません。CEI データベース設計を編集し、データベース・サーバー名を指定してください。• dbUser は、CommonDB ユーザー ID と同じにすることはできません。CEI データベース設計を編集し、別のユーザー ID を指定してください。• sysUser および sysPassword は空であってはなりません。CEI データベース設計を編集し、システム・ユーザー ID およびシステム・パスワードを指定してください。
Oracle	<ul style="list-style-type: none">• dbUser は、CommonDB ユーザー ID と同じにすることはできません。CEI データベース設計を編集し、別のユーザー ID を指定してください。• sysUser および sysPassword は空であってはなりません。CEI データベース設計を編集し、システム・ユーザー ID およびシステム・パスワードを指定してください。

手順

1. 以下のように **DbDesignGenerator** コマンドを使用して、設計ファイルおよびデータベース・スクリプトを生成します。このコマンドは、以下にあります。

```
install_root%util%dbUtils
```

```
/install_root/util/dbUtils
```

DbDesignGenerator.bat - for Windows

DbDesignGenerator.sh - for Unix and z/OS

以下のメインメニューに戻ります。

[通知] 対話モードで DbDesignGenerator を実行中...

[通知] 保存しないで終了する場合は「q」、直前のメニューに戻るには「-」、ヘルプを随時表示するには「?」を入力してください。

(Enter 'q' to quit without saving; '-' for back to previous menu; '?' for help at any time.)

[通知] 提供されたデフォルト値を受け入れるには、単に「Enter」キーを押します。[通知] 以下のいずれかの [設計オプション] を選んでください

(Please pick one of the following [design option(s)]):

- (1) スタンドアロン・プロファイルまたはデプロイメント環境のデータベース設計の作成
- (2) 単一コンポーネントのデータベース設計の作成 (例: BPC、CEI など)
- (3) 既存のデータベース設計の編集
- (4) データベース設計からのデータベース・スクリプトの生成
- (5) 終了 [q]

2. データベース・スクリプトを実行するステップについては、36 ページの『製品インストール前の共通データベースの手動作成』の 3 (37 ページ)を参照してください。

注: 使用例については、『データベース設計ツールの例』を参照してください。

関連タスク

545 ページの『コマンド行を使用したデプロイメント環境定義の作成』

wsadmin コマンドを使用して、デプロイメント環境定義を作成できます。

createDeploymentEnvDef を実行すると、デプロイメント環境の定義が提供されます。

データベース設計ツールの例

以下の例では、データベース設計ツールを使用して設計ファイルを生成する方法を、データベース・タイプ別に示します。

すべてのデータベース・タイプ

dbDesign ファイルを使用してスクリプトを生成するときに、以下の警告メッセージを受け取ります。CEI スクリプトは個別に生成する必要があります。

データベース・スクリプトを生成しますか?

(y/n) [デフォルト=y] :y

[警告] [WBI_CEI_EVENT] のデータベース・スクリプト生成が失敗しました。

原因: DDL プロバイダーが使用不可です。

([warning] database scripts generation failed for [WBI_CEI_EVENT] due to DDL provider is not available.)

以下のコンポーネントの SQL スクリプトは生成できません:

(You will not be able to generate SQL scripts for the component: CEI)

DERBY EMBEDDED

対話モードで DbDesignGenerator コマンドを使用するときに、wps.standalone をデータベース・パターンとして選択し、Derby Embedded をデフォルトのデータベースとして選択した場合は、Bspace.WBI_BSPACE のビジネス・スペース認証プロパティを手動で構成する必要があります。

注: wps.nd.topology をデータベース・パターンとして選択した場合は、Derby Embedded を選択することはできません。代わりに Derby Network Server を選択する必要があります。

[通知] 「未完了」のデータベース・コンポーネントの必須プロパティを編集してください。
[通知] 完了したデータベース・コンポーネントを編集して、既存のプロパティ値またはデフォルトのプロパティ値を変更できます。
(Completed database components can be edited to change existing or defaulted property values.)
[通知] まず「マスター」コンポーネントを設計してから親コンポーネントを設計してください。
他のコンポーネントはこれらのコンポーネントから値を継承する場合があります。
(Design the 'master' component first, and then any parent components, since other components may inherit values from them.)

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください
(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1) [CommonDB] WBI_CommonDB : [マスター] [状況 = 完了]
- (2) [BPCReporting] WBI_BPCEventCollector : [状況 = 完了]
- (3) [BPC] WBI_BPC : [状況 = 完了]
- (4) [BSpace] WBI_BSPACE : [状況 = 未完了]
- (5) [CEI] WBI_CEI_EVENT : [状況 = 完了]
- (6) [SibME] WBI_SCA_SYS_ME : [状況 = 完了]
- (7) [SibME] WBI_BPC_ME : [親 = WBI_SCA_SYS_ME] [状況 = 完了]
- (8) [SibME] WBI_CEI_ME : [親 = WBI_SCA_SYS_ME] [状況 = 完了]
- (9) [SibME] WBI_SCA_APP_ME : [親 = WBI_SCA_SYS_ME] [状況 = 完了]
- (10) [保存して終了]

データベース・コンポーネントの番号を入力してください
(Please enter the number for the database component) :4

[状況] 以下のように残り項目が 2 つあるため、WBI_BSPACE は未完了です
(WBI_BSPACE is not complete with 2 remaining item(s):)
[1] BSpace.WBI_BSPACE : authAlias : userId の必須プロパティ
「userName」は空です。
(required property 'userName' for userId is empty.)
[2] BSpace.WBI_BSPACE : authAlias : DB_PASSWORD の必須プロパティ
「password」は空です。
(required property 'password' for DB_PASSWORD
is empty.)

このデータベース・コンポーネントを編集しますか?(y/n) [default=y] :

b) 対話モードの DbDesignGenerator でユーザーが wps.nd.topology の生成を選択した場合、ユーザーは Derby Embedded をデフォルト・データベースとして選択することはできません。
(For DbDesignGenerator under interactive mode, when user selects to generate wps.nd.topology, user should not be able to select Derby Embedded as default db.)
(ただし、このオプションはまだ削除されていないため、これを選択しないようにユーザーに通知する必要があります)
((But this option hasn't been taken out just yet, so we should let the user know not to select it))

[状況] 以下のように残り項目が 1 つあるため、WBI_CommonDB は未完了です
(WBI_CommonDB is not complete with 1 remaining item(s):)
[1] CommonDB.WBI_CommonDB : : DbType キーが設定されていません
(DbType key is not set)。

このデータベース・コンポーネントを編集しますか?(y/n) [default=y] :

[通知] 以下のいずれかの [データベース・タイプ] を選んでください
(Please pick one of the following [database type(s)]):

- (1) DB2-distributed
- (2) DB2-iSeries
- (3) DB2-zOS-8

- (4)DB2-zOS-9
- (5)Derby-embedded
- (6)Derby-networkServer
- (7)Informix
- (8)Oracle
- (9)SQL Server

INFORMIX

wps.standalone または wps.nd.topology を選択した場合は、CommonDB を構成した後、BPCReporting とビジネス・スペースの両方を手動で構成する必要があります。これらのデータ・ソースでは Informix データベース・タイプがサポートされないためです。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください
(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1)[CommonDB] WBI_CommonDB : [マスター] [状況 = 完了]
- (2)[BPCReporting] WBI_BPCEventCollector : [状況 = 未完了]
- (3)[BPC] WBI_BPC : [状況 = 完了]
- (4)[Bspace] WBI_BSPACE : [状況 = 未完了]
- (5)[CEI] WBI_CEI_EVENT : [状況 = 完了]
- (6)[SibMe] WBI_BPC_ME : [parent = WBI_CommonDB] [状況 = 完了]
- (7)[SibMe] WBI_CEI_ME : [parent = WBI_CommonDB] [状況 = 完了]
- (8)[SibMe] WBI_SCA_APP_ME : [parent = WBI_CommonDB] [状況 = 完了]
- (9)[SibMe] WBI_SCA_SYS_ME : [parent = WBI_CommonDB] [状況 = 完了]
- (10)[保存して終了]

データベース・コンポーネントの番号を入力してください
(Please enter the number for the database component) :4

[状況] 以下のように残り項目が 1 つあるため、WBI_BSPACE は未完了です
(WBI_BSPACE is not complete with 1 remaining item(s)):
[1] Bspace.WBI_BSPACE : : DbType キーが設定されていません。
(DbType key is not set.)

このデータベース・コンポーネントを編集しますか?(y/n) [default=y] :

ORACLE

wps.standalone または wps.nd.topology を選択した場合は、CommonDB を構成した後、必須のデータベース認証に対してビジネス・スペースを手動で構成する必要があります。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください
(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1)[CommonDB] WBI_CommonDB : [マスター] [状況 = 完了]
- (2)[BPCReporting] WBI_BPCEventCollector : [状況 = 完了]
- (3)[BPC] WBI_BPC : [状況 = 完了]
- (4)[Bspace] WBI_BSPACE : [状況 = 未完了]
- (5)[CEI] WBI_CEI_EVENT : [状況 = 完了]
- (6)[SibMe] WBI_BPC_ME : [parent = WBI_CommonDB] [状況 = 完了]
- (7)[SibMe] WBI_CEI_ME : [parent = WBI_CommonDB] [状況 = 完了]
- (8)[SibMe] WBI_SCA_APP_ME : [parent = WBI_CommonDB] [状況 = 完了]
- (9)[SibMe] WBI_SCA_SYS_ME : [parent = WBI_CommonDB] [状況 = 完了]
- (10)[保存して終了]

データベース・コンポーネントの番号を入力してください
(Please enter the number for the database component) :4

[状況] 以下のように残り項目が 3 つあるため、WBI_BSPACE は未完了です
(WBI_BSPACE is not complete with 3 remaining item(s)):
[1] BSpace.WBI_BSPACE : databaseObjects : DB_USER の必須プロパティー
「databaseUser」は空です。
(required property 'databaseUser' for DB_USER is empty.)
[2] BSpace.WBI_BSPACE : authAlias : userId の必須プロパティー
「userName」は空です。
(required property 'userName' for userId is empty.)
[3] BSpace.WBI_BSPACE : authAlias : DB_PASSWORD の必須プロパティー
「password」は空です。
(required property 'password' for DB_PASSWORD is empty.)

このデータベース・コンポーネントを編集しますか?(y/n) [default=y] :

SQL サーバー

wps.standalone または wps.nd.topology を選択した場合は、CommonDB を構成した後、BPCReporting を手動で構成する必要があります。このデータ・ソースでは SQL Server がサポートされないためです。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください
(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1)[CommonDB] WBI_CommonDB : [マスター] [状況 = 完了]
- (2)[BPCReporting] WBI_BPCEventCollector : [状況 = 未完了]
- (3)[BPC] WBI_BPC : [状況 = 完了]
- (4)[BSpace] WBI_BSPACE : [状況 = 完了]
- (5)[CEI] WBI_CEI_EVENT : [状況 = 完了]
- (6)[SibMe] WBI_BPC_ME : [parent = WBI_CommonDB] [状況 = 完了]
- (7)[SibMe] WBI_CEI_ME : [parent = WBI_CommonDB] [状況 = 完了]
- (8)[SibMe] WBI_SCA_APP_ME : [parent = WBI_CommonDB] [状況 = 完了]
- (9)[SibMe] WBI_SCA_SYS_ME : [parent = WBI_CommonDB] [状況 = 完了]
- (10)[保存して終了]

データベース・コンポーネントの番号を入力してください
(Please enter the number for the database component) :2

[状況] 以下のように残り項目が 1 つあるため、WBI_BPCEventCollector は未完了です
(WBI_BPCEventCollector is not complete with 1 remaining item(s)):
[1] BPCReporting.WBI_BPCEventCollector : : DbType キーが設定されていません。
(DbType key is not set.)

このデータベース・コンポーネントを編集しますか?(y/n) [default=y] :

DB2-iSeries

wps.standalone または wps.nd.topology を選択した場合は、CommonDB を構成した後、OS400_TOOLBOX_JDBC_DRIVER_PATH パラメーターに対して BPCReporting、BPC、および CEI を手動で構成する必要があります。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください
(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1)[CommonDB] WBI_CommonDB : [マスター] [状況 = 完了]
- (2)[BPCReporting] WBI_BPCEventCollector : [状況 = 未完了]
- (3)[BPC] WBI_BPC : [状況 = 未完了]
- (4)[BSpace] WBI_BSPACE : [状況 = 完了]
- (5)[CEI] WBI_CEI_EVENT : [状況 = 未完了]
- (6)[SibMe] WBI_BPC_ME : [parent = WBI_CommonDB] [状況 = 完了]
- (7)[SibMe] WBI_CEI_ME : [parent = WBI_CommonDB] [状況 = 完了]
- (8)[SibMe] WBI_SCA_APP_ME : [parent = WBI_CommonDB] [状況 = 完了]
- (9)[SibMe] WBI_SCA_SYS_ME : [parent = WBI_CommonDB] [状況 = 完了]

(10)[保存して終了]

[状況] 以下のように残り項目が 1 つあるため、WBI_BPCEventCollector は未完了です
(WBI_BPCEventCollector is not complete with 1 remaining item(s)):
[1] BPCReporting.WBI_BPCEventCollector : variables :
OS400_TOOLBOX_JDBC_DRIVER_PATH の必須プロパティー
「os400toolbox_jdbc_driver_path」は空です。
(required property 'os400toolbox_jdbc_driver_path' for OS400_TOOLBOX_JDBC_DRIVER_PATH
is empty.)

[状況] 以下のように残り項目が 1 つあるため、WBI_BPC は未完了です
(WBI_BPC is not complete with 1 remaining item(s)):
[1] BPC.WBI_BPC : variables : OS400_TOOLBOX_JDBC_DRIVER_PATH の
必須プロパティー「os400toolbox_jdbc_driver_path」は空です。
(required property 'os400toolbox_jdbc_driver_path' for OS4
00_TOOLBOX_JDBC_DRIVER_PATH is empty.)

[状況] 以下のように残り項目が 1 つあるため、WBI_CEI_EVENT は未完了です
(WBI_CEI_EVENT is not complete with 1 remaining item(s)):
[1] CEI.WBI_CEI_EVENT : variables : OS400_TOOLBOX_JDBC_DRIVER_PATH の
必須プロパティー「os400toolbox_jdbc_driver_path」は空です。
(required property 'os400toolbox_jdbc_driver_path' f r
OS400_TOOLBOX_JDBC_DRIVER_PATH is empty.)

DB2-zOS8/zOS9

wps.standalone または wps.nd.topology を選択した場合は、CommonDB を構成し
た後、dbConnectionLocation パラメーターに対してビジネス・スペースを手動で構成
する必要があります。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください
(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1)[CommonDB] WBI_CommonDB : [マスター] [状況 = 完了]
- (2)[BPCReporting] WBI_BPCEventCollector : [状況 = 完了]
- (3)[BPC] WBI_BPC : [状況 = 完了]
- (4)[BSPACE] WBI_BSPACE : [状況 = 未完了]
- (5)[CEI] WBI_CEI_EVENT : [状況 = 完了]
- (6)[SibMe] WBI_BPC_ME : [parent = WBI_CommonDB] [状況 = 完了]
- (7)[SibMe] WBI_CEI_ME : [parent = WBI_CommonDB] [状況 = 完了]
- (8)[SibMe] WBI_SCA_APP_ME : [parent = WBI_CommonDB] [状況 = 完了]
- (9)[SibMe] WBI_SCA_SYS_ME : [parent = WBI_CommonDB] [状況 = 完了]
- (10)[保存して終了]

データベース・コンポーネントの番号を入力してください
(Please enter the number for the database component) :4

[状況] 以下のように残り項目が 1 つあるため、WBI_BSPACE は未完了です
(WBI_BSPACE is not complete with 1 remaining item(s)):
[1] BSPACE.WBI_BSPACE : databaseObjects : D B_CONNECTLOCATION の必須プロパティー
「dbConnectionLocation」は空です。
(required property 'dbConnectionLocation' for D B_CONNECTLOCATION
is empty.)

データベース設計ツールのトラブルシューティング

DDT トラブルシューティング情報には、データベース・スクリプトで発生する問題を診断するために使用できる診断情報および検証情報が含まれています。

必須プロパティが空であることを示すエラー

必須プロパティ `userName` および `password` が設定されていない場合は、以下のメッセージが返されます。

```
[状況] 以下のように残り項目が 2 つあるため、WBI_BSPACE は未完了です
(WBI_BSPACE is not complete with 2 remaining item(s):)
[ 1 ] BSpace.WBI_BSPACE : authAlias : userId の必須プロパティ「userName」は空です。
(required property 'userName' for userId is empty.)
[ 2 ] BSpace.WBI_BSPACE : authAlias : DB_PASSWORD の必須プロパティ
「password」は空です。
(required property 'password' for DB_PASSWORD is empty.)
```

既存のデータベース設計の妥当性検査を実行した場合の出力例

```
DbDesignGenerator.bat -v DB2-distributed-
...
[警告] 2 潜在的な問題がスクリプトで検出されました。問題の内容:
DB_USER @ line 46 in file configCommonDB.bat
DB_USER @ line 80 in file configCommonDB.sh
```

追加データベース構成情報

このセクションのトピックには、WebSphere Process Server の追加データベース構成情報が記載されています。

データベースのユーザーおよびスキーマ

WebSphere Process Server のインストール時に、データベースをインストールする際にデフォルトのスキーマ名およびユーザー ID 特権を使用することができます。ただし、データベース設計によっては、別のユーザー ID およびスキーマ名特権が必要になる場合があります。提供されている 3 つのシナリオを検討して、WebSphere Process Server のインストール時に別のスキーマ名およびユーザー ID 特権を構成するタイミングと方法を決定できます。

デフォルト構成用の単一ユーザー ID またはスキーマ名特権

データベースのデフォルト・インストールを選択した場合、WebSphere Process Server では、テーブルの作成と、テーブルの行の選択、挿入、更新、および削除を行うことが可能なユーザー ID またはスキーマ名が最低 1 つ必要です。データベースを作成するには、プロファイル管理ツールまたはインストーラーが使用できます。表 177 は、データベース・ベンダーとして DB2 を使用する場合のデフォルトのデータベース構成プロパティを示しています。デフォルトのデータベース構成プロパティは、データベース・ベンダーごとに異なります。

表 177. DB2 を使用する場合のデフォルトのユーザー ID およびスキーマ名特権

データベース表	DB2 を使用したデフォルト・データベース名	ユーザー ID またはスキーマ名
共通データベース表	WPRCSDB	WebSphere Process Server は、インストール中にユーザー ID を提供します

表 177. DB2 を使用する場合のデフォルトのユーザー ID およびスキーマ名特権 (続き)

データベース表	DB2 を使用したデフォルト・データベース名	ユーザー ID またはスキーマ名
Business Process Choreographer	BPEDB	WebSphere Process Server は、インストール中にユーザー ID を提供します
メッセージング・テーブル	MEDB	WebSphere Process Server は、インストール中にスキーマ名を提供します

複数のユーザー ID またはスキーマ名特権

データベース設計のプロパティが異なる場合、複数のユーザー ID およびスキーマ名特権が必要となる場合があります。提供されている 3 つのシナリオと表には、構成を適用して希望の設計を実現する方法が示されています。提供されている 3 つのシナリオに、ご使用の特定の設計が含まれていない場合でも、これらのシナリオを確認することは、特定の設計を実装するのに役立ちます。

シナリオ 1

このシナリオでは、ユーザー ID 特権と同じスキーマ名を使用しますが、デフォルトのスキーマ名またはユーザー ID 特権は使用しません。この単一のユーザー ID はすべてのデータベースにアクセス可能で、さらにすべての必要なテーブルを作成できます。以下にシナリオ 1 の特権の例を示します。

- スキーマ名: dog
- SCA.SYSTEM ME のスキーマ名: dogSYS
- SCA.APP ME のスキーマ名: dogAPP
- Event ME のスキーマ名: dogEvent
- BPC ME のスキーマ名: dogBPC
- スキーマを作成するためのユーザー ID: dog
- スキーマの選択、挿入、更新、削除を行うためのユーザー ID: dog

519 ページの表 178 は、データベース・ベンダーとして DB2 を使用して、スキーマ名およびユーザー ID 特権をセットアップする方法のリストです。別のデータベース・ベンダーを選択する場合、スキーマ名およびユーザー ID 特権をセットアップする方法については、そのベンダーの資料を参照してください。

表 178. シナリオ 1

データベース表	DB2 を使用したデータベース名	スキーマ名 (Schema name)	テーブルを作成するためのユーザー ID	行を選択、挿入、更新、および削除するためのユーザー ID
共通データベース表	この値は、以下で指定します。 <ul style="list-style-type: none"> インストール・ウィザード プロファイル管理ツール サイレント・インストール サイレント・プロファイル作成 	このスキーマ名は、行の選択、挿入、更新、および削除に使用されるユーザー ID と同じです。	この値は、行の選択、挿入、更新、および削除に使用されるユーザー ID と同じです。	この値は、以下で指定します。 <ul style="list-style-type: none"> インストール・ウィザード プロファイル管理ツール サイレント・インストール サイレント・プロファイル作成
Business Process Choreographer 表	この値は、以下で 2 回指定します。 <ol style="list-style-type: none"> テーブル作成スクリプト 以下のいずれかを使用したデプロイメント・ターゲットの構成時 <ul style="list-style-type: none"> 管理コンソール インストール・ウィザード bpeconfig.jacl 	このスキーマ名は、行の選択、挿入、更新、および削除に使用されるユーザー ID と同じです。	この値は、行の選択、挿入、更新、および削除に使用されるユーザー ID と同じです。	この値は、以下で 2 回指定します。 <ol style="list-style-type: none"> テーブル作成スクリプト 以下のいずれかを使用したデプロイメント・ターゲットの構成時 <ul style="list-style-type: none"> 管理コンソール インストール・ウィザード bpeconfig.jacl

シナリオ 2

このシナリオでは、同じスキーマ名とユーザー ID を使用して、スキーマの選択、挿入、更新、削除を行います。ただし、スキーマの作成には別のユーザー ID を使用します。以下にシナリオ 2 の特権の例を示します。

- スキーマ名: snow
- SCA.SYSTEM ME のスキーマ名: snowSYS
- SCA.APP ME のスキーマ名: snowAPP
- Event ME のスキーマ名: snowEvent
- BPC ME のスキーマ名: snowBPC
- スキーマを作成するためのユーザー ID: rock
- スキーマの選択、挿入、更新、削除を行うためのユーザー ID: snow

520 ページの表 179 は、データベース・ベンダーとして DB2 を使用して、スキーマ名およびユーザー ID 特権をセットアップする方法のリストです。別のデータベース・ベンダーを選択する場合、スキーマ名およびユーザー ID 特権をセットアップする方法については、そのベンダーの資料を参照してください。

表 179. シナリオ 2

データベース表	DB2 を使用したデータベース名	スキーマ名 (Schema name)	テーブルを作成するためのユーザー ID	行を選択、挿入、更新、および削除するためのユーザー ID
共通データベース表	<p>この値は、以下で 2 回指定します。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. テーブル作成スクリプト 2. 以下のいずれかを使用した WebSphere Process Server の構成時 <ul style="list-style-type: none"> • 管理コンソール • インストール・ウィザード • プロファイル管理ツール • サイレント・インストール • サイレント・プロファイル作成 • bpeconfig.jacl <p>注: 最初にインストーラーを実行する場合は、生成されるスクリプトに既に正しいスキーマ名およびユーザー ID の値が含まれているため、値を指定する回数は 1 回です。</p>	<p>テーブル作成スクリプトは、行の読み取りおよび書き込みが可能なスキーマ名を使用して変更する必要があります。</p>	<p>テーブル作成スクリプトは、テーブルの作成が可能なユーザー ID を使用して変更する必要があります。</p>	<p>ユーザー ID はプロファイルの作成中に、以下のいずれかを使用して指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • インストール・ウィザード • プロファイル管理ツール • サイレント・インストール • サイレント・プロファイル作成
Business Process Choreographer 表	<p>この値は、以下で 2 回指定します。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. テーブル作成スクリプト 2. 以下のいずれかを使用したデプロイメント・ターゲットの構成時 <ul style="list-style-type: none"> • 管理コンソール • インストール・ウィザード • bpeconfig.jacl 	<p>テーブル作成スクリプトは、行の読み取りおよび書き込みが可能なスキーマ名を使用して変更する必要があります。</p>	<p>テーブル作成スクリプトは、テーブルの作成が可能なユーザー ID を使用して変更する必要があります。</p>	<p>ユーザー ID はプロファイルの作成中に、以下のいずれかを使用して指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • インストール・ウィザード • プロファイル管理ツール • サイレント・インストール • サイレント・プロファイル作成

シナリオ 3

このシナリオでは、同じユーザー ID を使用してすべてのスキーマを作成します。ただし、各スキーマには、行を選択、挿入、更新、および削除するための別々のユーザー ID があります。以下にシナリオ 3 の特権の例を示します。

- スキーマ名: waterCom
- 共通テーブルのスキーマ名: waterCom
- SCA.SYSTEM ME のスキーマ名: waterSYSME
- SCA.APP ME のスキーマ名: waterAPPME
- Event ME のスキーマ名: waterEventME
- BPC ME のスキーマ名: waterBPCME
- BPC および HTM テーブルのスキーマ名: waterBPC
- ESBMessaging テーブルのスキーマ名: waterESB
- スキーマを作成するためのユーザー ID: milk
- スキーマの選択、挿入、更新、削除を行うためのユーザー ID:

スキーマ名 (Schema name)	スキーマの選択、挿入、更新、削除を行うためのユーザー ID
waterCom	waterCom
waterSYSME	waterSYSME
waterAPPME	waterAPPME
waterEventME	waterEventME
waterBPCME	waterBPCME
waterBPC	waterBPC
waterESB	waterESB

表 180 は、データベース・ベンダーとして DB2 を使用して、スキーマ名およびユーザー ID 特権をセットアップする方法のリストです。別のデータベース・ベンダーを選択する場合、スキーマ名およびユーザー ID 特権をセットアップする方法については、そのベンダーの資料を参照してください。

表 180. シナリオ 3

データベース表	DB2 を使用したデータベース名	スキーマ名 (Schema name)	テーブルを作成するためのユーザー ID	行を選択、挿入、更新、および削除するためのユーザー ID
共通データベース表	この値は、以下で指定します。 <ul style="list-style-type: none"> • インストール・ウィザード • プロファイル管理ツール • サイレント・インストール • サイレント・プロファイル作成 	このスキーマ名は、行の選択、挿入、更新、および削除に使用されるユーザー ID と同じです。	この値は、行の選択、挿入、更新、および削除に使用されるユーザー ID と同じです。	ユーザー ID はプロファイルの作成中に、以下のいずれかを使用して指定します。 <ul style="list-style-type: none"> • インストール・ウィザード • プロファイル管理ツール • サイレント・インストール • サイレント・プロファイル作成

表 180. シナリオ 3 (続き)

データベース表	DB2 を使用したデータベース名	スキーマ名 (Schema name)	テーブルを作成するためのユーザー ID	行を選択、挿入、更新、および削除するためのユーザー ID
Business Process Choreographer 表	この値は、以下で 2 回指定します。 1. テーブル作成スクリプト 2. 以下のいずれかを使用したデプロイメント・ターゲットの構成時 <ul style="list-style-type: none"> • 管理コンソール • インストール・ウィザード • bpeconfig.jacl 	テーブル作成スクリプトは、行の選択、挿入、更新、および削除に使用されるスキーマ名を使用して変更する必要があります。	この値は、行の選択、挿入、更新、および削除に使用されるユーザー ID と同じです。	この値は、以下で 2 回指定します。 1. テーブル作成スクリプト 2. 以下のいずれかを使用したデプロイメント・ターゲットの構成時 <ul style="list-style-type: none"> • 管理コンソール • インストール・ウィザード • bpeconfig.jacl
メッセージング・テーブル	この値は、各メッセージング・エンジンの定義を使用して指定します。	テーブル作成スクリプトは、行の選択、挿入、更新、および削除に使用されるスキーマ名を含める必要があります。	この値は、行の選択、挿入、更新、および削除に使用されるユーザー ID と同じです。	この値は、メッセージング・エンジンの作成中に指定します。メッセージング・エンジンの構成中に、テーブル作成オプションを選択します。

JDBC プロバイダー

JDBC プロバイダーを使用することにより、アプリケーションがリレーショナル・データベースと対話できます。

アプリケーションは、JDBC プロバイダーを使用してリレーショナル・データベースと対話します。JDBC プロバイダーには、特定のデータベースのタイプにアクセスするための特定の JDBC ドライバー実装クラスが用意されています。そのデータベースへの接続プールを作成するには、データ・ソースを JDBC プロバイダーに関連付けます。JDBC プロバイダーとデータ・ソース・オブジェクトを組み合わせることで実行できる機能は、非リレーショナル・データベースに接続するための Java EE コネクタ・アーキテクチャー (JCA) 接続ファクトリーの機能と同等になります。

標準的なスタンドアロン環境のセットアップと標準的なデプロイメント環境のセットアップの両方の例については、前のトピックを参照してください。

JDBC プロバイダーについて詳しくは、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『JDBC プロバイダー』を参照してください。

データ・ソース

データ・ソースは、アプリケーションとリレーショナル・データベースの間のリンクを提供します。

アプリケーションは、データ・ソースを使用して、リレーショナル・データベースへの接続を取得します。データ・ソースは、他の種類のエンタープライズ情報システム (EIS) に接続するための Java EE コネクタ・アーキテクチャ (JCA) 接続ファクトリーに類似しています。

データ・ソースは、JDBC プロバイダーに関連付けられています。JDBC プロバイダーは、特定のタイプのデータベースに対する JDBC 接続に必要なドライバー実装クラスを提供します。アプリケーション・コンポーネントは、データ・ソースを直接操作して、データベースに対する接続インスタンスを取得します。各データ・ソースに対応する接続プールによって、接続を管理できます。

さまざまな設定で複数のデータ・ソースを作成し、それらを同じ JDBC プロバイダーに関連付けることも可能です。例えば、同じデータベース・アプリケーション内でさまざまなデータベースにアクセスするために複数のデータ・ソースを使用する、といった状況が考えられます。WebSphere Process Server では、Sun Microsystems によって定義されている以下のいずれかまたは両方のデータ・ソース・インターフェースを実装するための JDBC プロバイダーが必要です。アプリケーションは、これらのインターフェースを使用して、1 フェーズまたは 2 フェーズのトランザクション・プロトコルで稼働できるようになります。

注: Business Process Choreographer データ・ソースは、Business Process Choreographer 構成ツールを使用して作成されます。Business Process Choreographer の構成を参照してください。

- **ConnectionPoolDataSource** - 2 フェーズ・コミット・トランザクション以外のローカル・トランザクションとグローバル・トランザクションにアプリケーションが参加することを可能にするデータ・ソース。接続プールのデータ・ソースがグローバル・トランザクションに関わる場合は、トランザクション・マネージャーがトランザクションのリカバリーを実施することはありません。複数のリソース・マネージャーが関わっている場合は、バックアップ・リカバリー・プロセスをアプリケーション側で用意する必要があります。
- **XADataSource** - 1 フェーズまたは 2 フェーズのトランザクション環境にアプリケーションが参加することを可能にするデータ・ソース。このデータ・ソースがグローバル・トランザクションに関わる場合は、WebSphere Application Server のトランザクション・マネージャーがトランザクションのリカバリーを実施します。

以下の表に、標準的なスタンドアロン環境のセットアップと標準的なデプロイメント環境のセットアップを示します。

表 181. 標準的なスタンドアロン環境のセットアップ

データ・ソース	コンポーネント	有効範囲	JNDI 名
WBI データ・ソース	CommonDB	ノード	jdbc/WPSDB
SCA アプリケーション・バス ME データ・ソース	SCA ME	サーバー	jdbc/com.ibm.ws.sib/nlNode01.server1-SCA.APPLICATION.localhostNode01Cell.Bus

表 181. 標準的なスタンドアロン環境のセットアップ (続き)

データ・ソース	コンポーネント	有効範囲	JNDI 名
Business Process Choreographer データ・ソース	BPC	サーバー	jdbc/BPEDB
Business Process Choreographer ME データ・ソース	BPC ME	サーバー	jdbc/com.ibm.ws.sib/nlNode01.server1-BPC.localhostNode01Cell.Bus
event	CEI	サーバー	jdbc/cei
CEI ME データ・ソース	CEI ME	サーバー	jdbc/com.ibm.ws.sib/nlNode01.server1-CEI.cellName.BUS

表 182. 標準的なデプロイメント環境のセットアップ

データ・ソース	コンポーネント	有効範囲	JNDI 名
WBI データ・ソース	CommonDB	セル	jdbc/WPSDB
SCA アプリケーション・バス ME データ・ソース	SCA ME	クラスター	jdbc/com.ibm.ws.sib/clusterone-SCA.APPLICATION.enduranceTestCell01.Bus
Business Process Choreographer データ・ソース	BPC	クラスター	jdbc/BPEDB
Business Process Choreographer ME データ・ソース	BPC ME	クラスター	jdbc/com.ibm.ws.sib/clusterone-BPC.enduranceTestCell01.Bus
event	CEI	クラスター	jdbc/cei
CEI ME データ・ソース	CEI ME	クラスター	jdbc/com.ibm.ws.sib/clusterone-CEI.cellName.BUS

データ・ソースについては、『データ・ソース』を参照してください。
WebSphere Application Server インフォメーション・センターの

テーブルおよびスキーマの作成マトリックス

テーブルおよびスキーマの作成マトリックスを使用して、「テーブルの作成」が使用可能になっている場合に、どのデータベース表とスキーマをデータベース・プロバイダーごとに自動的に作成するかを決定します。

目的

「リソース」 > 「JDBC」 > 「ビジネス・インテグレーション・データ・ソース (Business Integration Data Sources)」 > 「データ・ソース」で、「テーブルの作成」用のチェック・ボックスを選択して、コンポーネントによりデータ・ソースが初めてアクセスされた際にテーブルの作成を許可することができます。サイト・ポリシーによってテーブルの作成がデータベース管理者に限られている場合は、このチェ

ック・ボックスを選択解除し、メッセージ・ボックスでスクリプトを見つけてデータベース管理者に提供して実行を依頼します。下の各表は、「テーブルの作成」が使用可能になっている場合に、各種デプロイメント環境機能用のテーブルとスキーマが作成されることをデータベース・プロバイダーごとに示しています。「X」は、テーブルまたはスキーマが作成されることを示しています。

注: 共通データベース は、プロファイルの作成時に構成します。

注: Common Event Infrastructure 用の「テーブルの作成」フラグは、Common Event Infrastructure データベースが構成された後は使用不可になります。Common Event Infrastructure テーブルは、Common Event Infrastructure サーバーの構成中にしか作成することはできません。

表 183. データベース・プロバイダーごとのテーブルの作成

データベース・プロバイダー	メッセージング・エンジン	Business Process Choreographer	Business Process Choreographer レポート	Common Event Infrastructure	メディエーション・ロガー
Derby Embedded または Derby Embedded 40	X	X	X	X	
Derby Network Server または Derby Network Server 40	X	X	X	X	
DB2 Universal	X	X	X	X	
<ul style="list-style-type: none"> DB2 UDB for iSeries (ツールボックス) DB2 for i5/OS (ツールボックス) 	X	X	X	X	
<ul style="list-style-type: none"> DB2 for z/OS v8 DB2 for z/OS v9 					
Oracle	X	X	X	X	
<ul style="list-style-type: none"> Microsoft SQL Server (DataDirect) Microsoft SQL Server (Microsoft) 	X	X		X	
Informix Dynamic Server	X	X		X	

注: DB2 UDB for iSeries データベースがローカルでない場合は、Common Event Infrastructure ではスキーマの作成はサポートされません。データベース作成スクリプトが生成され、Common Event Infrastructure によって使用されます。

表 184. データベース・プロバイダーごとのスキーマの作成

データベース・プロバイダー	メッセージング・エンジン	Business Process Choreographer	Business Process Choreographer レポート	Common Event Infrastructure	メディエーション・ロガー
Derby Embedded または Derby Embedded 40	X	X	X	X	

表 184. データベース・プロバイダーごとのスキーマの作成 (続き)

データベース・プロバイダー	メッセージング・エンジン	Business Process Choreographer	Business Process Choreographer レポート	Common Event Infrastructure	メディエーション・ロガー
Derby Network Server または Derby Network Server 40	X	X	X	X	
DB2 Universal	X	X	X	X	
<ul style="list-style-type: none"> DB2 UDB for iSeries (ツールボックス) DB2 for i5/OS (ツールボックス) 	X	X	X	X	X
<ul style="list-style-type: none"> DB2 for z/OS v8 DB2 for z/OS v9 					
Oracle	X	X	X	X	
<ul style="list-style-type: none"> Microsoft SQL Server (DataDirect) Microsoft SQL Server (Microsoft) 					
Informix Dynamic Server					

注: DB2 UDB for iSeries データベースがローカルでない場合は、Common Event Infrastructure ではスキーマの作成はサポートされません。データベース作成スクリプトが生成され、Common Event Infrastructure によって使用されます。

デプロイメント環境のセットアップ

デプロイメント環境をセットアップするには、デプロイメント環境定義を作成してから、環境を生成する必要があります。

このタスクについて

デプロイメント環境は、「デプロイメント環境構成」ウィザードを使用するか、または `wsadmin` を使用したスクリプトによって作成できます。デプロイメント環境の作成が終わった後、デプロイメント環境のセットアップを完了する追加タスクを実行できます。

デプロイメント環境およびカスタム・デプロイメント環境は、プロファイルの作成時にプロファイル管理ツールを使用して作成することもできます。デプロイメント環境の作成方法の選択については、デプロイメント環境の計画を参照してください。

関連タスク

デプロイメント環境の計画

デプロイメント環境のセットアップには、物理サーバーの数から選択するパターンのタイプまで、あらゆる事柄に影響を与える多くの決定が関係しています。それぞれの決定はデプロイメント環境をセットアップする方法に影響を与えます。

260 ページの『デプロイメント環境のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成』

プロファイル管理ツールの「**デプロイメント環境**」オプションを使用して、WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成および構成する方法について説明します。

「**デプロイメント環境**」オプションを選択すると、カスタマイズした構成値を使用してプロファイルを構成し、提供されたパターンに基づいて新しいデプロイメント環境で使用することができます。

279 ページの『デプロイメント環境のカスタム・プロファイル (管理対象ノード) の作成』

プロファイル管理ツールの「**デプロイメント環境**」オプションを使用して、WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus のカスタム・プロファイルを作成および構成する方法について説明します。「**デプロイメント環境**」オプションを選択すると、カスタマイズした構成値を使用してプロファイルを構成し、既存のデプロイメント環境パターンで使用することができます。

デプロイメント環境の作成

デプロイメント環境を作成するには、デプロイメント環境定義を作成してから、環境を生成する必要があります。デプロイメント環境は、「デプロイメント環境構成」ウィザード、または `wsadmin` を使用して作成できます。

「デプロイメント環境構成」ウィザードは、デプロイメント環境を構成できるコンポーネントおよびクラスターを構成するための一連のパネルを表示します。「デプロイメント環境構成」ウィザードのパネルで情報を入力し終わってから、(「生成」ではなく)「終了」をクリックすると、デプロイメント環境定義が作成されます。

「デプロイメント環境構成」ウィザードで「生成」をクリックした場合に限り、環境が「構成」されます。「デプロイメント環境構成」ウィザードでデプロイメント環境定義を生成すると、システムは、生成された定義に含まれるデータに従って、すべてのクラスターおよびコンポーネントを構成します。

デプロイメント環境は、「デプロイメント環境構成」ウィザードで作成できるだけでなく、`wsadmin` スクリプトを使用して作成することもできます。「デプロイメント環境構成」ウィザードを使用する場合と同様に、`wsadmin` 関数でもデプロイメント環境を作成するには 2 つの段階があります。つまり、最初にデプロイメント環境定義を作成し、次にその定義からデプロイメント環境を生成します。

「デプロイメント環境構成」ウィザードを使用したデプロイメント環境の作成

デプロイメント環境は、「デプロイメント環境構成」ウィザードを使用によって作成できます。

パターンを使用したデプロイメント環境の作成:

デプロイメント・パターンを選択したら、「デプロイメント環境構成」ウィザードを使用して、そのパターンに基づいたデプロイメント環境を作成します。

始める前に

デプロイメント・マネージャーの管理コンソールで、「サーバー」>「デプロイメント環境」にナビゲートします。

この作業に必要なセキュリティー役割: セキュリティーおよびロール・ベースの許可が使用可能になっている場合、このタスクを実行するには、管理者またはコンフィギュレーターとして管理コンソールにログインする必要があります。

デプロイメント環境ウィザードを使用してデプロイメント環境を作成する手順には、パターンおよびフィーチャーを選択するステップが含まれています。したがって、『計画』のセクションに記載されているパターンおよびフィーチャーに関する情報を読んで理解していることを前提としています。

製品がインストール済みであり、デプロイメント・マネージャー・プロファイルおよび関連ノードが作成済みであることを前提とします。

さらに、「デプロイメント環境構成」ウィザードのステップの 1 つは、データベース設計文書のインポートを含みます。データベース設計文書は、選択されたデプロイメント環境フィーチャーのデータベース構成を定義します。WebSphere Process Server には、ユーザーの入力に基づいてデータベース設計文書を作成する応答式データベース設計ツール (DDT) が用意されています。データベース設計文書を使用して、DDT によってデータベース・スクリプトを作成することや、デプロイメント環境で使用されるデータベースを WebSphere Process Server デプロイメント環境ウィザードによって構成することができます。DDT およびデータベース構成全般について詳しくは、『データベースの構成』を参照してください。

このタスクについて

このタスクでは、「デプロイメント環境構成」ウィザードを使用して、特定のパターンに基づくデプロイメント環境を作成する手順について説明します。

注: ウィザードで作業中にエラーが発生した場合は、「戻る」をクリックして前に戻ることができます。

手順

1. 管理コンソールで「サーバー」 → 「デプロイメント環境」をクリックして、「デプロイメント環境」ページを表示します。
2. 「デプロイメント環境」ページで「新規」をクリックして、「デプロイメント環境構成」ウィザードを起動します。
 - a. 「パターンに基づくデプロイメント環境の作成」オプションが選択されています。「パターンに基づくデプロイメント環境の作成」はシステム・デフォルトであり、このトピックで説明するオプションです。

デプロイメント環境パターンを利用して、よく使用するビジネス・インテグレーション・トポロジーを記録します。パターンは、作成するデプロイメント環境のテンプレートを提供します。

注: パターンは、構成されたデプロイメント・マネージャーがサポートする製品と直接に関連しています。WebSphere Process Server は特定のパターン・セットをサポートします。その中の「リモート・メッセージングおよびリモート・サポート」パターンがシステム・デフォルトです。デプロイメント・マネージャーが WebSphere Process Server 以外の製品もサポートしている場合は、追加のパターンを適用できます。特定の製品に適用されるパターンについては、その製品固有の文書を参照してください。

WebSphere Process Server に組み込まれてサポートされているパターンのタイプについては、『計画』セクションの『トポロジー・タイプおよびデプロイメント環境パターン』を参照してください。

「カスタム・デプロイメント・トポロジーの詳細」ページを使用してカスタム・デプロイメント環境を構成する方法については、『カスタム・デプロイメント環境のレイアウト構成』を参照してください。

- b. 「**デプロイメント環境名**」フィールドに、デプロイメント環境の固有の名前を入力します。
- c. **オプション:** ウィザードですべての構成ステップを表示するには、「**詳細: すべてのステップを表示します**」を選択します。

「**ファースト・パス: 必要なステップのみを表示します**」を選択した場合は、ウィザードにはデフォルト値が割り当てられていないページのみが表示されます。「**ファースト・パス: 必要なステップのみを表示します**」は、デプロイメント環境構成でシステム提供のデフォルト値を受け入れることに同意する場合にのみ選択してください。

このトピックでは、「**詳細: すべてのステップを表示します**」を選択したものと想定します。

- d. 「**次へ**」をクリックして、「**デプロイメント環境フィーチャー (Deployment Environment Features)**」ページを表示します。
3. 「**デプロイメント環境フィーチャー**」ページでデプロイメント環境のフィーチャーを選択し、「**次へ**」をクリックして、互換性のあるフィーチャーのリストを表示するか、デプロイメント環境パターンのリストを表示します。フィーチャーはデプロイメント環境のランタイム処理機能を表します。

「**デプロイメント環境フィーチャー**」ページの使用可能なフィーチャーのリストは、デプロイメント・マネージャー・プロファイルに基づきます。デプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張して WebSphere Process Server と一緒に別の製品を組み込んだ場合 (WebSphere Business Monitor や WebSphere Business Services Fabric など)、「**デプロイメント環境フィーチャー**」ページにはこれらのフィーチャーもリストされます。

WebSphere Process Server のプロファイルをインストールして構成した場合、「**デプロイメント環境フィーチャー**」ページには以下が含まれます。

- **WESB.** WebSphere Enterprise Service Bus 用。メディエーションをサポートするデプロイメント環境を提供します。

- **WPS**。WebSphere Process Server 用。メディエーション、ビジネス・プロセス、ヒューマン・タスク、およびビジネス・ルールをサポートするデプロイメント環境を提供します。

デプロイメント環境フィーチャーのデフォルト値は、デプロイメント・マネージャーのランタイム機能に一致します。

4. 「互換性のあるデプロイメント環境フィーチャーの選択」 ページで必要に応じて追加のフィーチャーを選択し、「次へ」をクリックして、1 次フィーチャーおよび補助フィーチャーの選択に関連したパターンのリストを表示します。

注: 「互換性のあるデプロイメント環境フィーチャーの選択」 ページは、デプロイメント・マネージャーが他のビジネス・プロセス・マネジメント (BPM) フィーチャー (WebSphere Business Monitor など) で拡張されている場合にのみ表示されます。

フィーチャーと互換フィーチャーの関係を理解するには、『計画』セクションのデプロイメント環境に関する説明を参照してください。

5. 「デプロイメント環境パターンの選択 (Select the deployment environment pattern)」 ページで、選択したデプロイメント環境のパターンを選択し、「次へ」をクリックして「ノードの選択」 ページを表示します。

「デプロイメント環境パターン」 ページに表示されるパターンのリストは動的です。このリストは、以下の環境条件および構成に関する決定によってアクティブになるため、その内容はこれらの条件および決定に依存します。

- ソフトウェアをインストールしたプラットフォーム
- 「デプロイメント環境フィーチャーの選択」 ページおよび「互換性のあるデプロイメント環境フィーチャーの選択」 ページで行った選択

パターンからフィーチャーへの関係について詳しくは、『トポロジー・パターンおよびサポート対象の BPM 製品フィーチャー』を参照してください。

6. オプション: 「ノードの選択」 ページでこのデプロイメント環境に含めるノードを選択し、「次へ」をクリックして「クラスター」 ページを表示します。

デプロイメント環境用に少なくとも 1 つのノードを選択します。高可用性環境およびフェイルオーバー環境では、少なくとも 2 つのノードを選択します。スケーラビリティを実現するには、すべてのノードを選択します。

ノードを組み込むには、ノード名の隣にあるチェック・ボックスを選択します。「ノード・マッピング」を使用すると、選択したノードが別のノード名にマップされます。

7. オプション: 「クラスター」 ページで、デプロイメント環境のクラスター・タイプ (アプリケーション・デプロイメント・ターゲット、メッセージング・インフラストラクチャー、サポート・インフラストラクチャー) ごとに各ノードで必要な数のクラスター・メンバーを割り当てます。

デフォルトでは、機能ごとに各ノード上で 1 つのクラスター・メンバーが割り当てられます。この数を変更するには、各列の数値を置換します。それぞれの

クラスター・タイプで提供される各種のクラスター・ロールおよび機能について十分な知識がない場合は、『トポロジー・タイプおよびデプロイメント環境パターン』を参照してください。

ノードの値が 0 (ゼロ) の場合、選択したフィーチャーに関して、その選択した機能にノードが寄与しないことを意味します。

クラスター・メンバーを割り当てた後、「次へ」をクリックすると、デプロイメント環境のクラスター・タイプごとに「クラスター命名」ページを表示することができます。表示される「クラスター命名」サブステップは、選択したデプロイメント環境パターンによって異なります。

クラスター名およびクラスター・メンバー名のデフォルト値は、システムによって生成されます。

クラスター名またはクラスター・メンバー名をカスタマイズしない場合は、以下の手順で、ウィザード・ナビゲーション・ペインを使用して、直接、「REST サービス」ページに移動します。

それぞれのサブステップ・ページは、同じ構造であり、『クラスター名およびクラスター・メンバー名をカスタマイズします』で説明しています。

- a. オプション: クラスター名およびクラスター・メンバー名をカスタマイズします。

「クラスター命名」ページを使用して、クラスター・タイプのクラスター名またはクラスター・メンバー名をカスタマイズします。選択したパターンのクラスター・タイプごとに 1 つのサブステップ・ページがあります。例えば、「リモート・メッセージングおよびリモート・サポート」パターンを選択した場合は、3 つのサブステップがあります。すなわち、そのパターンのクラスター・タイプ (アプリケーション・デプロイメント・ターゲット、メッセージング・インフラストラクチャー、およびサポート・インフラストラクチャー) ごとに 1 つのサブステップがあります。

それぞれのサブステップ・ページの情報、以下のとおりです。

クラスター

クラスターの機能ロールを指定する読み取り専用フィールド。

値は、以下のようにクラスター・タイプによって異なります。

- アプリケーション・デプロイメントのターゲット
- サポート・インフラストラクチャー
- メッセージング・インフラストラクチャー

クラスター・タイプごとの機能ロールに関する情報については、トポロジーおよびデプロイメントの環境パターンを参照してください。

クラスター名

クラスター名のシステム生成デフォルト値が入ります。

デフォルト値は、<デプロイメント環境名>.<クラスター・タイプ名> という命名規則に従っています。ここで、クラスター・タイプ名は、以下のいずれかの値です。

- AppTarget

アプリケーション・デプロイメントのターゲットのロールを実行するクラスターの場合

- メッセージング

メッセージング・インフラストラクチャーのロールを実行するクラスターの場合

- サポート

サポート・インフラストラクチャーのロールを実行するクラスターの場合

- Web

サポート Web アプリケーションのロールを実行するクラスターの場合

注: このクラスター・タイプ名は、WebSphere Business Monitor が主なフィーチャーまたは製品である BPM 構成に適用されます。

クラスター・メンバー名

システム生成デフォルト値を受け入れるか、任意の名前を指定します。

クラスター・メンバー名のデフォルト値は、<クラスター名>.<ノード名>.<ノード番号シーケンス> という命名規則に従っています。

表に表示されるクラスター・メンバー名の数は、「クラスター」ページのクラスター・タイプ列およびノード行に入力したクラスター・メンバーの数と一致します。「クラスター」ページについては、前のステップを参照してください。

8. 「REST サービス」ページで、Representational State Transfer (REST) アプリケーション・プログラミング・インターフェース (API) のサービス・エンドポイントを構成します。

ウィジェットを Business Space で使用できるようにしたい場合は、それらのウィジェットについて REST サービス・エンドポイントを構成する必要があります。

- a. 「プロトコル」リストから「**https://**」または「**http://**」を選択することにより、すべての REST サービスのフル URL パスを構成します。
 - b. 「負荷分散環境でのホスト名または仮想ホスト」フィールドに名前を入力します。
 - c. 「ポート」フィールドに、クライアントがサーバーまたはクラスターと通信するために必要なポートを入力します。
 - d. REST サービス・エンドポイントの説明を変更する場合は、REST サービスの表の「説明」フィールドの項目を上書きします。その他のフィールドは読み取り専用です。
 - e. 「次へ」をクリックして、「データベース構成のインポート」ページに進みます。
9. オプション: 「データベース構成のインポート」ページで、「参照」をクリックしてデータベース設計文書に進むか、またはデータベース設計文書へのパスを

入力した後、「次へ」をクリックして、「データ・ソース」ページに進みます。設計文書は、データベース設計ツール (DDT) を使用して作成したデータベース設計に基づく設計文書にすることも、選択したパターンとフィーチャーに基づいて提供された設計文書にすることもできます。

注: プロファイルの作成時に作成された commonDB は、デプロイメント環境用にインポートされたデータベース設計文書によって変更されることはありません。

10. 条件付きオプション: 「データベース」ページでデプロイメント環境のデータ・ソースのデータベース・パラメーターを構成し、「次へ」をクリックして「セキュリティ」ページに移動します。

このページでは、このデプロイメント環境に組み込まれるコンポーネントのデータベース情報を定義します。該当するところには、ウィザードによってパラメーターのデフォルト情報が提供されていますが、その値を、環境の計画を立てたときに定義した値に一致するように変更します。

注: データベース設計文書をインポートしてある場合は、その文書に存在するデータ・ソース構成が「データベース」ページの情報に反映されます。

ファースト・パス・デプロイメント環境構成用にこのステップが表示されるかどうかは、条件に依存します。複数のデータベースが定義されている場合は、ファースト・パス・デプロイメント環境構成用にこのステップが表示されません。

DB2 for z/OS または Oracle データベース・プロバイダーを使用している場合には、このステップが常に表示されます。

このページに表示されるデフォルト・スキーマ名は、お客様のサイトの命名規則と矛盾したり、既存のスキーマと矛盾したりする場合があります。そのような場合は、スキーマ名の変更が必要になります。

Oracle データベースの考慮事項:

- Oracle の使用時にすべてのコンポーネントに対して 1 つの DBA ユーザー名とパスワードを指定したくない場合は、「**テーブルの作成**」をクリアし、コンポーネントごとに以前から存在する固有のユーザー名とパスワードを指定します。すべてのコンポーネントに対して 1 つの DBA ユーザー名とパスワードを指定できる場合は、「**テーブルの作成**」を選択し、必要なスキーマとユーザーを構成プロセスで作成できるようにします。

実稼働環境では、「**ユーザー名**」と「**スキーマ名**」に同じ値を設定し、「**テーブルの作成**」の選択は解除してください。実稼働環境では、必要なスキーマを手動で作成し、生成された SQL ファイルを使用してテーブルを作成します。

注: Business Space では、「**テーブルの作成**」を選択できません (このオプションは選択不可になっています)。Business Space 用の SQL ファイルは、手動で実行する必要があります。Business Space 用の SQL を手動で実行する場合の情報については、「*Business Space のデータベース表の構成*」を参照してください。

キー・パラメーター (データベース名、テーブル作成の有無、データ・ソースの実行時ユーザー名、デプロイメント環境のパスワードなど) は、すべて編集することができます。

特定のコンポーネントに使用するデータベースを選択できます。

DB2 for z/OS: DB2 for z/OS データベース・プロバイダーを使用している場合、「**テーブルの作成**」オプションは使用できません。

「デプロイメント環境構成」ウィザードでは実行できず、手動で実行する必要のあるステップは、「据え置かれた構成」ページにリスト表示されます。

11. 「セキュリティ」ページで、セキュア・コンポーネントへのアクセス時に WebSphere が使用する認証別名を構成します。

認証別名のユーザー名とパスワードは、このページで変更することができます。これらの別名を使用してセキュア・コンポーネントにアクセスしますが、データ・ソースにアクセスすることはできません。

12. 「Business Process Choreographer」ページで、Business Process Choreographer 構成のパラメーターを設定し、「次へ」をクリックして「システム Web アプリケーション (System web applications)」ページを表示します。このページでは、以下の値を指定します。

- セキュリティーのロール
- 認証別名

13. オプション: 「システム Web アプリケーション (System web applications)」ページで、デプロイメント環境のコンポーネント・ベース Web アプリケーションのコンテキスト・ルートを設定するか、システム提供のコンテキスト・ルートのデフォルト値を受け入れます。「次へ」をクリックして、「要約」ページを表示します。

「システム Web アプリケーション」ページは、デプロイメント環境で「リモート・メッセージング、サポート、および Web アプリケーション」パターンを使用している場合に表示されます。「リモート・メッセージング、サポート、および Web アプリケーション」パターンが適用されるのは、デプロイメント環境が WebSphere Business Monitor を組み込むために拡張されたデプロイメント・マネージャー用のものである場合です。

テーブルには以下のコントロール情報が含まれています。

Web アプリケーション

Web アプリケーションの名前。

作成しているデプロイメント環境を構成するコンポーネントのなかには、Web アプリケーションが含まれるものがあります。「**Web アプリケーション**」列には、以下のコンポーネントが含まれます。

- Business Space
- Business Process Choreographer Explorer
- ビジネス・ルール・マネージャー

コンテキスト・ルート

コンポーネントのコンテキスト・ルートの現行値。

デフォルトでは、Web アプリケーションのデフォルトのコンテキスト・ルートが適用されます。「コンテキスト・ルート」フィールドの値に上書きして、コンテキスト・ルートを変更できます。

注: Business Space のコンテキスト・ルートは読み取り専用であるため、編集することはできません。

14. 「要約」ページの情報が正しいことを確認し、「終了して環境を生成」をクリックしてデプロイメント環境の構成を保存し、構成を完了します。構成を完了せずに終了するには、「終了」をクリックします。

「終了」をクリックすると、デプロイメント環境構成が保存されますが、生成はされません。

「取り消し」をクリックすると、デプロイメントの構成が取り消され、構成は保存されません。

- a. 据え置かれた構成ステップがないかどうかを確認します。

「デプロイメント環境」 → デプロイメント環境の名前 → 「据え置かれた構成」を選択します。

据え置かれた構成ステップが存在する場合は、デプロイメント環境を始動する前に、そのステップを処理する必要があります。

タスクの結果

構成が完了すると、構成ファイルを調べて、変更を表示できます。

次のタスク

変更をマスター構成に保管または廃棄します。

関連概念

デプロイメント環境

デプロイメント環境とは、Service Component Architecture (SCA) の対話をホストするための環境を共同して提供する、構成済みのクラスター、サーバー、およびミドルウェアの集合のことです。例えば、デプロイメント環境には、メッセージの宛先用のホスト、ビジネス・イベントの処理プログラム、および管理プログラムが組み込まれている場合があります。


トポロジーおよびデプロイメントの環境パターン

トポロジーには、さまざまなレイアウトがあります。WebSphere Process Server をインストールして構成する前に、このセクションの情報を確認してください。トポロジーの概念を理解しておく、製品のインストールおよび構成方法について、知識に基づいた判断を行うのに役立ちます。

478 ページの『データベースの構成』

共通データベース、Common Event Infrastructure、Business Process Choreographer、エンタープライズ・サービス・バスのロガー・メディエーション、メッセージング・エンジン、セレクターおよびビジネス・ルール・グループ用のデータベース構成、およびリモート z/OS システム上の DB2 メッセージ・ロガー・データベースに関する情報を組み込みます。

関連タスク

 「デプロイメント環境構成」ウィザードの一部として Business Space を構成する

 Business Space のデータベース表の構成

 デプロイメント環境実装の汎用ステップ

デプロイメント環境を設計したら、設計を実現するための作業を行います。デプロイメント環境の実装に使用する方法にかかわらず、同じ汎用の手順を行います。

556 ページの『デプロイメント環境の据え置かれた構成の構成』

データベースとテーブルの作成を据え置く必要がある場合は、「据え置かれた構成」ページを使用してください。このページには、データベースとテーブルを作成するためのスクリプトを見つけて実行する方法の説明が示されています。

510 ページの『データベース設計ツールを使用したデータベース設計ファイルの作成』

データベース設計ツール (DDT) を使用すると、WebSphere Process Server に必要なデータベース表の作成に使用する設計ファイルを生成できます。DDT では、ユーザー指定のプロパティ・ファイルまたは対話式のユーザー入力に基づいて設計ファイルが生成されます。生成された設計ファイルは、DDT がデータベース表の作成に使用されるデータベース・スクリプトを作成するのに使用します。また、プロファイル作成時やデプロイメント環境構成時の入力として設計ファイルを使用して、データベース構成プロパティを指定することもできます。

543 ページの『カスタム・デプロイメント環境の構成』

カスタム・デプロイメント環境を構成するには、「カスタム・デプロイメント・トポロジーの詳細」ページを使用します。

545 ページの『コマンド行を使用したデプロイメント環境定義の作成』

wsadmin コマンドを使用して、デプロイメント環境定義を作成できます。
createDeploymentEnvDef を実行すると、デプロイメント環境の定義が提供されま
す。

関連情報



Business Process Choreographer の構成

カスタム・デプロイメント環境のレイアウト構成:

この概要では、カスタム・デプロイメント環境の構成における 2 つの主要な考慮事項について説明します。環境で使用するクラスターおよび単一サーバーの選択と、デプロイメント環境構成の指定です。これらの考慮事項を理解すれば、デプロイメント環境を効率的に計画および実装できます。

538 ページの『デプロイメント環境で使用するクラスターと単一サーバーの 選択』では、デプロイメント環境を構成するクラスターおよびサーバーを定義します。機能ごとにクラスターを作成するパターン・デプロイメント環境とは異なり、カスタム・デプロイメント環境では、機能を実行するために必要なクラスターとサーバーを追加します。

538 ページの『デプロイメント環境構成の 定義』では、クラスターとサーバーに構成する機能について説明します。これらの機能は、メッセージング、Common Event Infrastructure、またはアプリケーション・サポートです。

環境を生成してシステム内のデプロイメント環境の構成を完了する前に、構成に戻って変更を行うことができます。システム内にデプロイメント環境構成を生成すると、現在の構成を確認することができます。また、サーバーとクラスターを追加したり、さらに機能を構成したり、サーバーとクラスターをこのデプロイメント環境による管理から除去したりすることもできます。生成済みの機能構成を取り消すことや、デプロイメント環境の別のサーバーまたはクラスターにまだ必要なデプロイメント環境定義からサーバーまたはクラスターを除去することはできません。

すべてのカスタム・デプロイメント環境における要件

カスタム・デプロイメント環境レイアウトには、以下の制限があります。

- ユーザーがデプロイメント環境を生成して構成を完了すると、関連するコントロールがチェックされ、使用不可になります。これは、構成を元に戻すことができないことを意味しています。
- デプロイメント環境を生成後、コンポーネントのコントロールがチェックされず、使用不可にならない場合は、次の順番で関連する機能を構成する必要があります。関連するメッセージング・エンジンを構成して、Common Event Infrastructure (CEI) を構成し、次にアプリケーション・サポート (このトピックの以降で説明します) を構成します。
- システムに存在する構成は、トポロジー・レイアウト構成よりも優先されます。したがって、カスタム・トポロジーをエクスポートすると、トポロジーに含まれるサーバーの実際の構成が反映されます。

管理コンソールの「トポロジー・レイアウト」ページには、カスタム・トポロジーにおいて構成する必要のある 4 つのセクションがあります。

- クラスタおよび単一サーバーの選択
- メッセージング
- Common Event Infrastructure
- コンポーネント

以下のセクションで、カスタム・トポロジー・レイアウト構成を完了するためのその他の要件を説明しています。

デプロイメント環境で使用するクラスタと単一サーバーの選択

「トポロジー・レイアウト」ページの「クラスタおよび単一サーバーの選択」セクションを使用して、デプロイメント環境内のクラスタとサーバーを管理し、クラスタとサーバーが提供する機能を定義します。

「トポロジー・レイアウト」ページの「クラスタおよび単一サーバーの選択」セクションには、デプロイメント環境の一部として構成する、使用可能なクラスタおよびサーバーのリストが含まれています。機能構成のコラボレーション単位にクラスタとサーバーを割り当てます。各コラボレーション単位は、全体としてデプロイメント環境内で 1 つの機能を提供するクラスタおよびサーバーのグループを表します。デプロイメント環境からクラスタまたはサーバーを削除することもできます。ただし、除去できるクラスタおよびサーバーは、構成内の他のクラスタまたはサーバーで必要としなくなったもののみです。

デプロイメント環境構成の定義

「トポロジー・レイアウト」ページの「デプロイメント環境の構成の指定」セクションを使用して、デプロイメント環境の特定の機能に参加するクラスタまたはサーバーを定義します。

メッセージング

注: 分割されたメッセージング・エンジンはサポートされません。

選択したターゲットのメッセージング宛先を構成するには、「メッセージング」タブのフィールドを使用します。各テーブルはコラボレーション単位を表し、「メッセージング」セクションには複数のテーブルを含むことができます。それぞれのユニットのローカル構成のオプションには、ターゲット (クラスタ/サーバー) を 1 つのみ選択する必要があります。このユニットのその他のすべてのターゲットでは、リモート宛先が想定されます。アプリケーションがリモート宛先構成のターゲットにメッセージを送信する際、システムはメッセージをそのユニットのローカル・ターゲットにルーティングします。

メッセージング構成は、Service Component Architecture (SCA)、CEI、Business Process Choreographer システム・バスに適用されます。

トポロジー構成内のローカル宛先との競合を避けるために、以下のルールが適用されます。

- SCA システム・バスのメッセージング・エンジン構成により、ローカル宛先とリモート宛先のロケーションが決定されます。SCA アプリケーション構成、CEI バス構成および Business Process Choreographer バス構成は、SCA システム・バス構成に準拠します。

- 単位内の別のターゲット上でその他のバスのメッセージング・エンジンを探す場合、その単位内の別のターゲットでは、リモート宛先ロールが想定されます。CEI または Business Process Choreographer バスの構成が異なる場合、情報メッセージは指定されたバスのメッセージング・エンジンが SCA メッセージング・エンジンと同じターゲットに見つからないことを示します。
- リモートまたはローカル宛先が既に構成されており、指定のユニットの現在のバス設定と競合するターゲットを追加しようとした場合、システムはエラー・メッセージを生成します。

Common Event Infrastructure

CEI タブに CEI を構成します。「メッセージング」と同じです。CEI は複数のテーブルを保有でき、各テーブルが単位を表します。各テーブルで、CEI クラスターまたはサーバーを 1 つ選択します（「クラスター/サーバー」列）。これは、「サーバー」ラジオ・ボタンを選択すると、サーバーとして機能します。サーバーとして構成されていないすべてのターゲットでは、宛先ロールが想定されます。対応するターゲットでは、このターゲットで発行される Common Base Event が該当するコラボレーション単位のサーバーに送信されるように、Event Infrastructure エミッター・ファクトリーの Java Naming and Directory Interface (JNDI) 名が構成されています。

アプリケーション・サポート

「アプリケーション・サポート」タブには、特定のデプロイメント・ターゲットに対して構成可能なすべてのコンポーネントがリストされます。コンポーネントの機能を関連するコラボレーション単位内で構成します。例えば、Business Process Choreographer Event Collector をある単位内に構成して、同じ単位内に構成されている Business Process Choreographer Container によって発行された Common Base Event を収集します。各コンポーネント構成には、他のコンポーネント構成に対する要件と依存関係があります。依存関係は、チェック解除されて使用不可にされたコントロールによって表されます。これらのコントロールを使用可能にするには、まず依存するコントロールを構成する必要があります。

注: 依存コントロールは、「メッセージング」タブまたは「CEI」タブに構成されます。

540 ページの表 185 に、コンポーネント間の関係を示します。

表 185. デプロイメント環境のコンポーネントの関係

コンポーネント	目的	関連コンポーネント	考慮事項
サービス・コンポーネント・アーキテクチャ (SCA)	<p>SCA アプリケーション・サポートのためのデプロイメント・ターゲットを構成します。</p> <p>SCA システムおよびアプリケーションのバス・メンバーは、対応するメッセージング構成がローカルの場合はローカルに構成されます。それ以外の場合は、対応するメッセージング単位の指定に基づき、リモート宛先を使用してリモートに構成されます。</p>	メッセージング	メッセージング用のデプロイメント・ターゲットを構成していない場合は、SCA 構成は使用できません。
Business Process Choreographer Container	<p>ビジネス・フローとヒューマン・タスクの両方をサポートするためのデプロイメント・ターゲットを構成します。</p> <p>この構成は、Business Process Choreographer システム・バスのセットアップ用の SCA 構成に準拠します。</p>	<p>メッセージング</p> <p>Service Component Architecture</p> <p>Business Process Choreographer Explorer</p>	<p>デプロイメント・ターゲットがメッセージングに構成されていないか、またはデプロイメント・ターゲットが Service Component Architecture のサポートのために構成されていない場合は、Business Process Choreographer 構成は使用できません。</p> <p>1 つのコラボレーション単位により、1 つの Business Process Choreographer 構成がサポートされます。「アプリケーション・サポート」タブ上の必要な分の単位を追加します。</p> <p>コンテナを管理するために、Business Process Choreographer Explorer の構成を検討してください。</p>

表 185. デプロイメント環境のコンポーネントの関係 (続き)

コンポーネント	目的	関連コンポーネント	考慮事項
Business Process Choreographer Explorer	<p>選択したデプロイメント・ターゲットに Business Process Choreographer Explorer を構成します。</p> <p>Business Process Choreographer Explorer とは、同じコラボレーション単位内に構成されている Business Process Choreographer Container を管理する Web アプリケーションのことです。</p> <p>これには、以前は <i>Business Process Choreographer Observer</i> と呼ばれていたオプションのレポート作成機能 (Business Process Choreographer Explorer レポート作成) が組み込まれています。</p>	Business Process Choreographer Container	<p>Business Process Choreographer Explorer 構成は、同じコラボレーション単位内にある Business Process Choreographer Container 構成を選択すると使用可能になります。</p> <p>Web アプリケーションをサポートするためにデプロイメント・ターゲットを構成する必要があります。</p> <p>特定のデプロイメント・ターゲットに Business Process Choreographer Explorer を必要なだけ構成することができます。コンテナが構成されているコラボレーション単位にデプロイメント・ターゲットを追加し、Business Process Choreographer Explorer の構成コントロールをチェックします。</p>

表 185. デプロイメント環境のコンポーネントの関係 (続き)

コンポーネント	目的	関連コンポーネント	考慮事項
Business Process Choreographer Event Collector	<p>選択したデプロイメント・ターゲットに Business Process Choreographer Event Collector を構成します。</p> <p>Business Process Choreographer Event Collector は、同じコラボレーション単位内で構成されている Business Process Choreographer Container から発行される Common Base Event を収集します。監視されたコンテナに関する統計情報は、データベースに記録されます。</p>	<p>Business Process Choreographer Container Common Event Infrastructure</p>	<p>まず、Business Process Choreographer Event Collector に使用予定のデプロイメント・ターゲットに Common Event Infrastructure サーバを構成します。</p> <p>Business Process Choreographer Event Collector を使用可能にするには、同じコラボレーション単位内で Business Process Choreographer Container を構成する必要があります。</p> <p>特定の Business Process Choreographer Container を監視する必要があるかどうか不明な場合は、この機能を構成することができます。</p>
ビジネス・ルール・マネージャー	<p>選択したデプロイメント・ターゲットにビジネス・ルール・マネージャーを構成します。</p> <p>ビジネス・ルール・マネージャーを使用すれば、ビジネス・プロセスの動作が決定されるビジネス・ルールを構成することができます。</p>	<p>Service Component Architecture</p>	<p>同じデプロイメント・ターゲットで SCA サポートを構成すると、ビジネス・ルール・マネージャー構成コントロールが使用可能になります。</p> <p>ビジネス・ルール・マネージャーは、特定の 1 つのデプロイメント環境に 1 つしか構成できません。</p> <p>1 つのインスタンスでセル全体のビジネス・ルール構成を管理できるため、システムで構成する必要があるビジネス・ルール・マネージャーは 1 つのみです。</p>

カスタム・デプロイメント環境の構成:

カスタム・デプロイメント環境を構成するには、「カスタム・デプロイメント・トポロジーの詳細」ページを使用します。

始める前に

- デプロイメント環境が、このデプロイメント・マネージャー上に存在することを確認してください。

デプロイメント・マネージャーの管理コンソールに移動して、「サーバー」 → 「デプロイメント環境」 → 「*deployment_environment_name*」 → 「追加プロパティ」 → 「カスタム・デプロイメント・トポロジーの詳細」をクリックします。

この作業に必要なセキュリティ役割: セキュリティーとロール・ベースの許可が有効になっている場合、このタスクを実行するには、管理者またはコンフィギュレーターとしてログインする必要があります。

制約事項:

- システムに存在する構成は、デプロイメント環境の構成より優先されます。したがって、カスタム・デプロイメント環境をエクスポートすると、デプロイメント環境に含まれるサーバーの実際の構成が反映されます。
- コンポーネント・ユニットを構成する前にメッセージング・ユニットを構成する必要があります。チェック・ボックスが使用不可になっている場合、メッセージング・サポートがまだ構成されていません。

このタスクについて

カスタム・デプロイメント環境の場合、必要に応じてそれぞれの機能を構成する方法を決定できます。各機能は、クラスターまたは単一サーバーに対して構成します。カスタム・デプロイメント環境トポロジーの構成には、大きく分けて 3 つの領域があります。

- コンポーネント内通信をサポートするメッセージング。
- イベントおよびモニター機能を統合する Common Event Infrastructure。
- ビジネス・インテグレーションのサービス・コンポーネント (ビジネス・プロセスやヒューマン・タスクなど) をサポートするアプリケーション・サポート。

詳しくは、『カスタム・デプロイメント環境のレイアウト構成の概要』を参照してください。

手順

1. 「このデプロイメント環境で使用するクラスターとサーバーの選択」のリストから、クラスターまたはサーバーを選択します。
2. 「追加」をクリックします。下のテーブルにクラスターまたは単一サーバーが追加されます。
3. このデプロイメント環境に必要なクラスターとサーバーをすべて選択するまで、ステップ 1 と 2 を繰り返します。
4. 「メッセージング」タブを選択します。

- a. デプロイメント環境に必要な個別のメッセージング単位の数を決定し、「**新規単位の追加**」をクリックしてその数を追加します。

各単位に「メッセージング単位 x 」という名前が付けられます。この x は、単位の番号です。

- b. ステップ 2 (543 ページ) で作成されたテーブルからクラスターとサーバーを各単位に割り当てます。

単位に追加するクラスターまたはサーバーを選択してから、「**選択したものを単位に追加**」から単位を選択します。

- c. 各単位でどのデプロイメント・ターゲットがローカル・メッセージング・サポートをホストするかを決定し、単位内の該当デプロイメント・ターゲットを定義する行の「**ローカル・バス・メンバー**」をクリックし、ローカル・メッセージング・ホストを構成します。

その他のクラスターまたはサーバーはすべて、リモート・メッセージング宛先として自動的に構成されます。

5. 「**Common Events Infrastructure**」タブをクリックします。

- a. デプロイメント環境に必要な個別の Common Event Infrastructure 単位の数を決定し、「**新規単位の追加**」をクリックしてその数を追加します。

各単位に「Common Event Infrastructure 単位 x 」という名前が付けられます。この x は、単位の番号です。

- b. ステップ 2 (543 ページ) で作成されたテーブルからクラスターとサーバーを各単位に割り当てます。

単位に追加するクラスターまたはサーバーを選択してから、「**選択したものを単位に追加**」から単位を選択します。

- c. 各単位でどのデプロイメント・ターゲットが Common Event Infrastructure サーバーをホストするかを決定し、単位内の該当デプロイメント・ターゲットを定義する行の「**サーバー**」をクリックし、Common Event Infrastructure サーバーを構成します。

その他のクラスターまたはサーバーはすべて、リモート Common Event Infrastructure 宛先として自動的に構成されます。

6. 「**アプリケーション・サポート**」タブをクリックします。このタブには、指定のデプロイメント・ターゲットに対して構成可能なコンポーネントがすべて表示されます。

制約事項: このセクションでコンポーネントを構成する前に、各コンポーネントのメッセージング・ユニットを完全な状態にしておく必要があります。例えば、Service Component Architecture についてチェック・ボックスが使用不可の場合は、関連するメッセージング・ユニットが構成されていません。制限については、『カスタム・デプロイメント環境のレイアウト構成の概要』を参照してください。

- a. デプロイメント環境に必要な個別のアプリケーション・サポート単位の数を決定し、「**新規単位の追加**」をクリックしてその数を追加します。

必要な単位の数は、必要な Business Process Choreographer Container の数によって決まります。Business Process Choreographer Container が不要な場合は、Service Component Architecture アプリケーションには 1 つの単位で十分です。

各単位に「アプリケーション・サポート単位 x」という名前が付けられます。この x は、単位の番号です。

- b. ステップ 2 (543 ページ) で作成されたテーブルからクラスターとサーバーを各単位に割り当てます。

単位に追加するクラスターまたはサーバーを選択してから、「**選択したものを単位に追加**」から単位を選択します。

- c. ユニット内で、デプロイメント環境の各コンポーネントに属させるクラスターまたはサーバーを選択します。
- d. 各ユニットでデプロイメント環境に必要なすべてのコンポーネントが構成されるまで、ステップ 6b と 6c を繰り返します。

次のタスク

デプロイメント環境が完成するか、または既存のデプロイメント環境を編集した後、「カスタム・デプロイメント環境の構成 (Custom Deployment Environment Configuration)」ウィザードが開きます。情報を検討して、必要があれば変更を加えることができます。

関連概念



デプロイメント環境

デプロイメント環境とは、Service Component Architecture (SCA) の対話をホストするための環境を共同して提供する、構成済みのクラスター、サーバー、およびミドルウェアの集合のことです。例えば、デプロイメント環境には、メッセージの宛先用のホスト、ビジネス・イベントの処理プログラム、および管理プログラムが組み込まれている場合があります。



トポロジーおよびデプロイメントの環境パターン

トポロジーには、さまざまなレイアウトがあります。WebSphere Process Server をインストールして構成する前に、このセクションの情報を確認してください。トポロジーの概念を理解しておく、製品のインストールおよび構成方法について、知識に基づいた判断を行うのに役立ちます。

コマンド行を使用したデプロイメント環境の作成

wsadmin を使用して、デプロイメント環境を作成できます。

createDeploymentEnvDef および generateDeploymentEnv は、デプロイメント環境ウィザードを使用してデプロイメント環境を作成するのと同等のコマンド行を提供します。

コマンド行を使用したデプロイメント環境定義の作成:

wsadmin コマンドを使用して、デプロイメント環境定義を作成できます。

createDeploymentEnvDef を実行すると、デプロイメント環境の定義が提供されます。

始める前に

環境定義を作成する場合、デプロイメント環境定義の作成元のデプロイメント・マネージャーを起動しておく必要があります。

この作業に必要なセキュリティ役割: セキュリティーとロール・ベースの許可が有効になっている場合、管理者権限またはオペレーター権限を持つユーザー ID とパスワードを使用してこのタスクを実行する必要があります。

WebSphere Process Server は特定のパターンのセットをサポートしており、「リモート・メッセージングおよびリモート・サポート」は、Network Deployment 実稼働環境のために使用するパターンです。ご使用のデプロイメント・マネージャーが WebSphere Process Server 以外の製品もサポートする場合、それらの製品用のパターンも適用される可能性があります。特定の製品に適用されるパターンについては、その製品固有の文書を参照してください。パターンについて詳しくは、計画文書の『デプロイメント環境パターンの選択 (*Choosing your deployment environment pattern*)』を参照してください。

このタスクについて

このタスクは、wsadmin コマンドを使用して、特定のパターンに基づいたデプロイメント環境定義を作成します。

wsadmin コマンドを使用して、管理コンソールから作成する環境と同じデプロイメント環境を作成することができます。この機能により、管理タスクを実行してデプロイメント環境定義を作成することができます。この定義には、既存の構成に基づいてすべてのデフォルト値が設定されます。既存の構成は、プロファイル作成時に作成した構成です。このコマンドには、データベース設計文書をインポートするオプションのプロパティも含まれます。データベース設計文書は、作成しているトポロジー用のデータベース構成を保持しています。データベース設計文書について詳しくは、『データベースの構成』の『データベース設計ツールを使用したデータベース設計ファイルの作成』を参照してください。

デプロイメント環境定義には、デプロイメント環境を構成する、特定のコンポーネント、クラスター/ノード/サーバー構成、リソース、および関連構成パラメーターが記述されています。これは、デプロイメント環境構成のインスタンスと呼ばれることもあります。デプロイメント環境構成は、デプロイメント環境定義にエクスポートできます。デプロイメント環境定義をインポートして、ご使用のシステムに新しいデプロイメント環境構成を追加することができます。

手順

1. コマンド・ウィンドウをオープンします。

wsadmin コマンドは、<WPS>/profiles/<dmgr profile>/bin ディレクトリーか <WPS>/bin ディレクトリーのいずれかに格納されています。

2. コマンド・プロンプトから wsadmin コマンドを入力して wsadmin 環境に入ります。
3. createDeploymentEnvDef コマンドを使用して、特定のランタイムとパターンに関して固有の名前を持つデプロイメント環境定義を作成します。

注: 管理セキュリティが有効になっている場合は、ユーザー ID とパスワードの入力画面が表示されます (コマンド内で指定していない場合)。

例

この例では、管理セキュリティが有効な状態で、ホスト myDmgr 上に myDepEnv がある WebSphere Process Server ランタイムでの「リモート・メッセージングおよびリモート・サポート」パターンに関するデプロイメント環境定義を作成します。この例では、**wps.nd.topology.dbDesign** という名前のデータベース設計文書をインポートします。

```
wsadmin -connType SOAP -host myDmgr -port 8879
> $AdminTask createDeploymentEnvDef { -topologyName topOne
-topologyPattern RemoteMessagingAndSupport
-topologyRuntime WPS -dbDesign C:%dbDesigns%wps.nd.topology.dbDesign}
> $AdminConfig save
```

注: 管理セキュリティが無効になっている場合は、ユーザー ID とパスワードを指定する必要はありません。

関連タスク

527 ページの『パターンを使用したデプロイメント環境の作成』
デプロイメント・パターンを選択したら、「デプロイメント環境構成」ウィザードを使用して、そのパターンに基づいたデプロイメント環境を作成します。

デプロイメント環境パターンの選択

IBM 提供のいずれかのトポロジー・パターンを選択するか、独自のカスタム・デプロイメント環境を作成することによって、デプロイメント環境を構成できます。このトピック・セクションでは、IBM 提供の使用可能なトポロジー・パターンのリストを示して説明すると共に、トポロジーを選択する場合の考慮事項を示します。

510 ページの『データベース設計ツールを使用したデータベース設計ファイルの作成』

データベース設計ツール (DDT) を使用すると、WebSphere Process Server に必要なデータベース表の作成に使用する設計ファイルを生成できます。DDT では、ユーザー指定のプロパティ・ファイルまたは対話式のユーザー入力に基づいて設計ファイルが生成されます。生成された設計ファイルは、DDT がデータベース表の作成に使用されるデータベース・スクリプトを作成するのに使用します。また、プロファイル作成時やデプロイメント環境構成時の入力として設計ファイルを使用して、データベース構成プロパティを指定することもできます。

関連資料

createDeploymentEnvDef コマンド

関連情報

コマンドおよびスクリプト

コマンド行を使用したデプロイメント環境定義へのノードの追加:

wsadmin コマンドを使用して、デプロイメント環境定義にノードを追加することができます。

始める前に

このタスクでは、ノードがデプロイメント・マネージャーに統合されていることを前提としています。

トポロジーが既に構成されている場合、このコマンドを実行しても、デプロイメント環境定義にノードは追加されません。

ノードを追加する場合は、ノードの追加先となるデプロイメント・マネージャーを起動しておく必要があります。

この作業に必要なセキュリティ役割: セキュリティとロール・ベースの許可が有効になっている場合、管理者権限またはオペレーター権限を持つユーザー ID とパスワードを使用してこのタスクを実行する必要があります。

このタスクについて

このタスクでは、`wsadmin` コマンドを使用して、統合ノードをデプロイメント環境定義に追加します。

手順

1. コマンド・ウィンドウをオープンします。

`wsadmin` コマンドは、`<WPS>/profiles/<dmgr profile>/bin` ディレクトリーか `<WPS>/bin` ディレクトリーのいずれかに格納されています。

2. コマンド・プロンプトから `wsadmin` コマンドを入力して `wsadmin` 環境に入ります。
3. `addNodeToDeploymentEnvDef` コマンドを入力して、デプロイメント環境定義にノードを追加します。

注: 管理セキュリティが有効になっている場合は、ユーザー ID とパスワードの入力画面が表示されます (コマンド内で指定していない場合)。

例

この例では、管理セキュリティが有効な状態で、ノード (**MyNode**) をデプロイメント環境定義 (**myDepEnv**) に追加します。

重要: 単一クラスターのトポロジー・パターンにノードを追加する場合は、`-topologyRole` の値を **ADT** に設定する必要があります。デプロイメント環境のトポロジー・パターンは、`createDeploymentEnvDef` コマンドまたは「デプロイメント環境構成」ウィザードを使用してデプロイメント環境を作成するときに指定します。

```
wsadmin -connType SOAP -host myDmgr -port 8879 -user dmgrAdmin -password dmgrPass
> $AdminTask addNodeToDeploymentEnvDef {-topologyName myDepEnv -nodeRuntime WPS
-topologyRole Messaging -nodeName MyNode -serverCount 3}
```

注: 管理セキュリティが無効になっている場合は、ユーザー ID とパスワードを指定する必要はありません。

関連資料



addNodeToDeploymentEnvDef コマンド

addNodeToDeploymentEnvDef コマンドを使用して、既存のデプロイメント環境定義にノードを追加します。

コマンド行を使用したデプロイメント環境の生成:

wsadmin インターフェースを使用してデプロイメント環境を生成することができます。この機能により、スクリプトを使用して、デプロイメント・マネージャー上の複数のデプロイメント環境を無人で構成できます。

始める前に

デプロイメント環境を構成するデプロイメント・マネージャーでコマンドを入力する必要があります。

この作業に必要なセキュリティ役割: セキュリティおよびロール・ベースの許可が使用可能になっている場合、このタスクを実行するには、管理者またはコンフィギュレーターとして管理コンソールにログインする必要があります。

このタスクについて

デプロイメント・マネージャー上にデプロイメント環境をインポートまたは作成したあと、generateDeploymentEnv コマンドを使用してデプロイメント環境を構成できます。

手順

1. wsadmin 環境に入ります。
2. 構成するトポロジーごとに generateDeploymentEnv コマンドを入力します。

例

以下のコマンドは、ホスト myDmgr 上で eastEnvironment トポロジーおよび westEnvironment トポロジーを構成します。

```
wsadmin -connType SOAP -host myDmgr -port 8879
> $AdminTask generateDeploymentEnv -topologyName eastTopology
> $AdminTask generateDeploymentEnv -topologyName westTopology
> $AdminConfig save
```

注: 管理セキュリティが有効である場合、wsadmin コマンドの処理後にユーザー ID とパスワードの入力を求めるプロンプトが表示されます。


次のタスク

構成されたデプロイメント環境を保存します。コマンド行から、\$AdminConfig save と入力します。

関連情報

generateDeploymentEnvFromDef コマンド

コマンド行を使用したデプロイメント環境定義のインポート

 ノード・エージェントの管理

コマンド行からのデプロイメント環境定義の検証:

wsadmin コマンドを使用して、デプロイメント環境定義を検証することができます。

始める前に

このタスクでは、ノードがデプロイメント・マネージャーに統合されていることを前提としています。

デプロイメント環境定義の検証先のデプロイメント・マネージャーを起動しておく必要があります。

この作業に必要なセキュリティ役割: セキュリティーとロール・ベースの許可が有効になっている場合、管理者権限またはオペレーター権限を持つユーザー ID とパスワードを使用してこのタスクを実行する必要があります。

このタスクについて

このタスクは、wsadmin コマンドを使用して、デプロイメント環境定義を検証します。

手順

1. コマンド・ウィンドウをオープンします。

wsadmin コマンドは、<WPS>/profiles/<dmgr profile>/bin ディレクトリーか <WPS>/bin ディレクトリーのいずれかに格納されています。

2. コマンド・プロンプトから wsadmin コマンドを入力して wsadmin 環境に入ります。
3. validateDeploymentEnvDef コマンドを入力して、デプロイメント環境定義を検証します。

注: 管理セキュリティが有効になっている場合は、ユーザー ID とパスワードの入力画面が表示されます (コマンド内で指定していない場合)。

例

この例では、管理セキュリティが有効な状態で、デプロイメント環境定義 (**myDepEnv**) を検証します。

```
wsadmin -connType SOAP -host myDmgr -port 8879 -user dmgrAdmin -password -dmgrPass  
> $AdminTask validateDeploymentEnvDef { -topologyName topOne}
```

注: 管理セキュリティが無効になっている場合は、ユーザー ID とパスワードを指定する必要はありません。

関連資料

validateDeploymentEnvDef コマンド

関連情報

コマンドおよびスクリプト

コマンド行を使用したデプロイメント環境の状況表示:

wsadmin コマンドを使用して、デプロイメント環境の現在の状況を表示できます。

始める前に

状況を表示する場合、状況表示の対象となるデプロイメント・マネージャーに管理クライアントを接続する必要があります。

この作業に必要なセキュリティ役割: セキュリティとロール・ベースの許可が有効になっている場合、管理者権限またはオペレーター権限を持つユーザー ID とパスワードを使用してこのタスクを実行する必要があります。

このタスクについて

このタスクは、wsadmin コマンドを使用して、デプロイメント環境の現在の状況を表示します。

手順

1. コマンド・ウィンドウをオープンします。

wsadmin コマンドは、<WPS>/profiles/<dmgr profile>/bin ディレクトリーか <WPS>/bin ディレクトリーのいずれかに格納されています。

2. コマンド・プロンプトで wsadmin コマンドを入力して、コマンド環境に入ります。

注: 接続モードで実行する場合は、wsadmin を適切なデプロイメント・マネージャーに接続してください。

3. showDeploymentEnvStatus コマンドを使用して、デプロイメント環境の現在の状況を表示します。

注: 管理セキュリティが有効になっている場合は、ユーザー ID とパスワードの入力画面が表示されます (コマンド内で指定していない場合)。

次の表は、結果として返される状態をまとめたものです。

注: 表にリストされた状態には、構成済みのトポロジに対してのみ有効な状態も含まれています。その場合、構成済みのトポロジに対してのみ適用されることが説明欄に記載されています。

表 186. トポロジー・インスタンスの使用可能状況 (使用可能性が低い順から高い順)

状態	説明
未完了	<p>デプロイメント環境で欠落している要素はありませんが、不完全な部分があります。</p> <p>この状態は、デプロイメント環境に必須のロール、ノード、コンポーネント、または依存関係が欠落している可能性がある状態です。</p> <p>追加の詳細情報は、警告メッセージに含まれています。</p>
完了	この状態は、未構成 とも呼ばれます。これは、既知の構成が完了しているが、まだ生成されていない状態です。
構成済み (Configured)	これは、構成の同期がとれている状態です。
一部が構成済み (Partially configured)	これは、デプロイメント環境は生成されているが、据え置かれた構成が完了していない状態です。
不明	これは、デプロイメント環境の現在の状態をシステムが判別できない状態です。再同期操作は、この状態で実行することができます。
停止	この状態は、構成済みのトポロジーに対してのみ適用されます。トポロジー内のすべてのデプロイメント・ターゲットが停止している状態です。
実行中	この状態は、構成済みのトポロジーに対してのみ適用されます。デプロイメント環境が使用可能であり、すべての機能が実行中の状態です。
一部が開始済み	この状態は、構成済みのトポロジーに対してのみ適用されます。デプロイメント環境が使用可能になっているが、部分的に実行中の機能が 1 つ以上ある状態です。
始動中	この状態は、構成済みのトポロジーに対してのみ適用されます。デプロイメント環境が始動中の状態です。
一部が停止済み	この状態は、構成済みのトポロジーに対してのみ適用されます。デプロイメント環境が使用可能になっているが、停止した機能または部分的に停止した機能が 1 つ以上ある状態です。
停止中	この状態は、構成済みのトポロジーに対してのみ適用されます。デプロイメント環境が停止中の状態です。
使用不可	この状態は、構成済みのトポロジーに対してのみ適用されます。デプロイメント環境の状態は使用できません。

例

この例では、管理セキュリティが有効な状態で、ホスト (**myDmgr**) 上のデプロイメント環境 (**MyDepEnv**) の状況を表示します。

注: デプロイメント・マネージャーの `bin` フォルダから管理クライアントを実行する場合は、コマンドに `-host` パラメーターと `-port` パラメーターを指定する必要はありません。

```
wsadmin -connType SOAP -host myDmgr -port 8879 -user dmgradmin -password dmgrpass
> $AdminTask showDeploymentEnvStatus {-topologyName myDepEnv}
```

`-connType` パラメーターにより、使用する接続のタイプを指定します。デフォルトの引数は `SOAP` です。

注: デフォルトが SOAP であるため、使用する接続タイプが SOAP の場合は、明示的に指定する必要はありません。

-host パラメーターにより、SOAP または RMI 接続に使用するホストを指定します。-host のデフォルト値は、ローカル・ホストです。

注: ノードがローカル・ホストで稼働している場合は、-host を指定する必要はありません。

注: 管理セキュリティが無効になっている場合は、ユーザー ID とパスワードを指定する必要はありません。

関連情報

コマンドおよびスクリプト

showDeploymentEnvStatus コマンド

デプロイメント環境設定の編集

デプロイメント環境設定を編集および変更できます。

ホスト別名の構成

IBM HTTP Server または選択したサーバーを構成して、管理対象ノードとデプロイメント・マネージャー間の通信を可能にします。

始める前に

デプロイメント・マネージャーおよび関連ノードを作成および構成。

このタスクについて

管理対象ノードとデプロイメント・マネージャー間の相互通信が可能になる必要があります。そのために、デプロイメント・ターゲット・クラスター内の各ノードに対するホスト別名をデプロイメント・マネージャーに対して可視にする必要があります。ホスト別名には、DNS ホスト名およびポート番号が含まれます。デプロイメント・ターゲットで実行中のアプリケーションには、この別名を URL の一部として使用してアクセスします。

注: この手順は、AppCluster_member1 および AppCluster_member2 という 2 つのアプリケーション・クラスター・メンバーを使用します。説明内ではご使用のサーバー名と置換して理解してください。

手順

1. 管理コンソールから、「サーバー」 → 「サーバー・タイプ」 → 「WebSphere Application Server」 → 「AppCluster_member1」にナビゲートします。
2. 名前をクリックします。
3. 「通信」の見出しの下に「ポート」を展開し、WC_defaulthost にリストされているポート値をメモします。この値は後に使用する必要があります。
4. クラスター・メンバーごとにステップ 1 から 3 を繰り返します。追加のアプリケーション・クラスター・メンバーごとにこれを繰り返します。

完了すると、クラスター・メンバーとそれらのデフォルト・ホスト用のポート番号のリストが表示されます。

5. 管理コンソールから移動し、「環境」 → 「仮想ホスト」 → 「default_host」をクリックします。
6. 「追加プロパティ」で、「ホスト別名」をクリックします。
7. クラスター・メンバーに対するホスト名とポート値の正しい組み合わせのエントリーが表示されない場合、欠落しているエントリーをリストに追加します。
8. リストに新規エントリーを追加した場合、「保管」および「同期化」をクリックします。

次のタスク

テスト・アプリケーションをインストールして、インストール済み環境を検査します。

デプロイメント環境のデータ・ソースの構成

「データベース・プロバイダー構成」ページを使用して、ビジネス・インテグレーションのデータ・ソースを初めて構成します。

始める前に

- デプロイメント環境が、このデプロイメント・マネージャー上に存在することを確認してください。
- デプロイメント・マネージャーの管理コンソールに移動して、「サーバー」 → 「デプロイメント環境」 → 「deployment_environment_name」 → 「関連項目」 → 「データ・ソース」をクリックします。

この作業に必要なセキュリティ役割: セキュリティおよびロール・ベースの許可が使用可能になっている場合、このタスクを実行するには、管理者またはコンフィギュレーターとして管理コンソールにログインする必要があります。

このタスクについて

「データ・ソース」ページを使用して、デプロイメント環境に必要なすべてのデータ・ソースのコレクションを構成します。

データ・ソースを必要とするコンポーネントは、選択された「データベース・プロバイダー」に基づいて、すべての必須フィールドを決定します。これらの必須フィールドにはデータを入力する必要があります。コンポーネントは、残りのフィールドにデフォルト値を設定します。ユーザーは、デフォルト値を保持することもできますし、必要に応じてそれを変更することもできます。通常、コンポーネントは、「有効範囲」の値を決定します。

ビジネス・インテグレーションのデータ・ソースは、一度だけ構成できます。データ・ソースを構成して保存すると、一部のテキスト・ボックスが使用不可になり、値を変更できなくなります。ページ内のそれ以外のテキスト・ボックスは、すべて編集できます。

手順

1. 「データ・ソース」ページで、構成するデータ・ソースの横にあるチェック・ボックスを選択します。
2. このページに表示されない追加のデータ・ソース・フィールドを編集する必要がある場合は「プロバイダーの編集」をクリックします。

注: 「データ・ソース」列のデータ・ソース名をクリックするだけの方法も可能です。

3. 情報を入力します。サポートされているデータベース・タイプのリストについては、『データベース仕様書』を参照してください。
4. 「適用」または「OK」をクリックして、変更を保存します。

関連情報

データベースの構成

共通データベース、Common Event Infrastructure、Business Process Choreographer、エンタープライズ・サービス・バスのロガー・メディエーション、メッセージング・エンジン、セレクターおよびビジネス・ルール・グループ用のデータベース構成、およびリモート z/OS システム上の DB2 メッセージ・ロガー・データベースに関する情報を組み込みます。

共通データベースの仕様

共通データベースの構成には、サポートされるデータベース・タイプ、スクリプトとその場所、プロファイル作成の構成アクション、インストール・パラメーター、作成されるテーブルとユーザー ID の特権のタイプに関する情報が含まれます。

デプロイメント環境の認証別名の構成

1 つの管理コンソール・ページから、すべての認証別名を検討または編集できます。

始める前に

- デプロイメント環境が、このデプロイメント・マネージャー上に存在することを確認してください。

デプロイメント・マネージャーの管理コンソールに移動して、「サーバー」 → 「デプロイメント環境」 → 「*deployment_environment_name*」 → 「関連項目」 → 「認証別名」をクリックします。

この作業に必要なセキュリティー役割: セキュリティーおよびロール・ベースの許可が使用可能になっている場合、このタスクを実行するには、管理者またはコンフィギュレーターとして管理コンソールにログインする必要があります。

このタスクについて

この統合された認証別名リストから、以下を行うことができます。

- 指定のデプロイメント環境のすべての別名の検討
- *Alias_name* リンクを使用した認証構成ページへのアクセス

「リセット」ボタンは、選択された行を現在構成されている値にリセットします。*Alias_name* をクリックして、変更を行う認証構成ページにアクセスしてください。

手順

1. 変更する行を選択します。
2. 以下のいずれかを実行します。

オプション	説明
行の編集	「 <i>Alias_name</i> 」をクリックします。
行のリセット	「リセット」をクリックします。

行の編集では、「認証構成」ページが表示され、ここで変更を行うことができます。

3. 変更を保存するには、「OK」または「適用」をクリックします。

関連情報

認証

デプロイメント環境の据え置かれた構成の構成

データベースとテーブルの作成を据え置く必要がある場合は、「据え置かれた構成」ページを使用してください。このページには、データベースとテーブルを作成するためのスクリプトを見つけて実行する方法の説明が示されています。

始める前に

- デプロイメント環境が、このデプロイメント・マネージャー上に存在することを確認してください。

デプロイメント・マネージャーの管理コンソールに移動して、「サーバー」 → 「デプロイメント環境」 → 「*deployment_environment_name*」 → 「追加プロパティ」 → 「据え置かれた構成」をクリックします。

この作業に必要なセキュリティ役割: セキュリティおよびロール・ベースの許可が使用可能になっている場合、このタスクを実行するには、管理者またはコンフィギュレーターとして管理コンソールにログインする必要があります。

このタスクについて

デプロイメント環境の構成とは別に、データベース表またはスキーマを作成する必要がある場合に、この手順を使用します。

「据え置かれた構成」ページには、トポロジーのデータベースを正しく構成するために必要な構成ステップが示されています。通常、このページには、以下の内容が示されます。

- スクリプトの場所
- スクリプトの実行方法の説明

手順

1. 「据え置かれた構成」ページの指示を実行します。
2. 完了したら、「実行された構成」をクリックします。

次のタスク

据え置かれた構成をいつ誰が最後に実行したかを示すテキスト・ボックスが表示されます。表示された説明は、将来参照できるようにこのページに残ります。

関連タスク

527 ページの『パターンを使用したデプロイメント環境の作成』
デプロイメント・パターンを選択したら、「デプロイメント環境構成」ウィザードを使用して、そのパターンに基づいたデプロイメント環境を作成します。

デプロイメント環境の検証

実動アプリケーションを新しい環境に移動する前に、テストを行ってすべてのコンポーネントが正常に動作することを確認してください。

始める前に

『デプロイメント環境の実装』に記載されている説明に従って、デプロイメント環境の実装を完了します。

1. ソフトウェアをインストールする
2. デプロイメント・マネージャーをホストするノードを構成する
3. ノードを構成する
4. ノードをデプロイメント・マネージャーに統合する
5. デプロイメント環境に機能を提供するノードをクラスター化する

このタスクについて

デプロイメント環境の検証方法は、実装した環境が IBM 提供のデプロイメント環境であるかカスタム・デプロイメント環境であるかによって異なります。IBM 提供のデプロイメント環境は、管理コンソールで単一のパネルから管理できます。カスタム・デプロイメント環境は、管理コンソールで手動で作成し管理する必要があります。

手順

1. 検証するデプロイメント環境のタイプを識別します。

この情報は、元の計画に基づいて用意してください。

2. デプロイメント環境を開始します。

デプロイメント環境のタイプ	始動方法
IBM 提供のパターン	「システム管理」>「デプロイメント環境」>「デプロイメント環境構成」（『デプロイメント環境の開始と停止』の説明を参照してください）。

デプロイメント環境のタイプ	始動方法
カスタム	<p>「サーバー」>「クラスター」(『カスタム・デプロイメント環境の始動の検証 (Verifying a custom deployment environment starts)』を参照してください)。 注: デプロイメント環境に定義されているすべてのサーバーとクラスターを始動する必要があります。</p>

3. テスト・アプリケーションをインストールします。
4. ルーティング用のテスト・アプリケーションを構成します。
5. テスト・アプリケーションを開始します。
6. テスト・アプリケーションを実行し、その結果を検証します。

次のタスク

実動アプリケーションをインストールします。

アプリケーション・デプロイメント・ターゲット・クラスターの始動の確認

アプリケーション・デプロイメント・ターゲット・クラスターが始動可能なことを確認するには、デプロイメント環境のクラスターをすべて始動する必要があります。このセクションでは、3つのクラスターで構成されるデプロイメント環境についての事例を説明します。

始める前に

メッセージング・エンジン、Common Event Infrastructure (CEI) イベント・サーバー・アプリケーション、およびアプリケーション・デプロイメント・ターゲットのクラスターを作成して構成する必要があります。

このタスクについて

アプリケーション・デプロイメント・クラスターが始動可能なことを確認するには、各クラスターを順に始動します。

注:

- ここでは、トポロジーで3つのクラスターを構成しており、それぞれ MECluster、SupportCluster、AppCluster という名前になっているとして説明します。これらは実際のクラスター名に置き換えてください。また、デプロイメント環境に追加のクラスターがある場合は、該当するステップを繰り返してください。
- サーバーを初めて始動するときは、システムがデータベース表とスキーマを作成するため、2回目以降の始動時よりも時間がかかります。

手順

1. デプロイメント・マネージャーの管理コンソールで「サーバー」を展開し、「クラスター」を選択します。
2. クラスターを開始します。

- a. 「MECluster」の横にあるチェック・ボックスを選択します。
 - b. 「開始」を選択し、MECluster が始動して緑色の矢印が表示されるまで待ちます。
 - c. 「SupportCluster」の横にあるチェック・ボックスを選択します。
 - d. 「開始」を選択し、SupportCluster が始動して緑色の矢印がもう 1 つ表示されるまで待ちます。
 - e. 「AppCluster」の横にあるチェック・ボックスを選択します。
 - f. 「開始」を選択し、AppCluster が始動して緑色の矢印がもう 1 つ表示されるまで待ちます。
3. メッセージング・バスをクリックします。
 - a. すべてのクラスターが開始するまで待ちます。
 - b. 「サービス統合」 → 「バス」の順にクリックします。
 - c. バスごとに、メッセージング・エンジンが稼働していることを確認します。
 - 1) バス名を選択します。
 - 2) 「ローカル・トポロジ」をクリックしてバス・トポロジを表示します。
 - 3) メッセージング・エンジンの状況が表示されるまでバスを拡張します。
 4. クラスター・メンバーをホストするノードの profile ディレクトリーの logs サブディレクトリーにある、クラスター・メンバーの SystemOut.log および SystemErr.log ファイルを確認します。エラーがないことを確認し、「サーバー AppCluster_member1 が e-business 用に開かれています (Server AppCluster_member1 is open for e-business)」または「サーバー AppCluster_member2 が e-business 用に開かれています (Server AppCluster_member2 is open for e-business)」という行を探します。これらの行があれば、クラスターは正常に始動しています。エラーがある場合は、訂正してから続行してください。

次のタスク

エラーを訂正した後には、ホストの別名を構成します。

注: 構成エラーを訂正した後は、必ずクラスターを停止してから再始動して、構成の変更を有効にする必要があります。

トラブルシューティング・ヒント: ログを調べていると、メッセージング・エンジンが特定のバスを検出できなかったために起動に失敗したことを示すメッセージが見つかることがあります。このメッセージは、クラスターを再始動すると除去されます。

テスト・アプリケーションのインストール

テスト・アプリケーションをインストールして、デプロイメント環境を検査するプロセスを開始します。

始める前に

- 完全なデプロイメント環境を作成およびインストールする必要があります。
- デプロイメント・マネージャー管理コンソールにログインします。

このタスクについて

WebSphere Process Server で提供される BPCIVTApp (Business Process Choreographer インストール検査テスト) というアプリケーションを使用して、WebSphere Process Server 環境を正しくインストールおよび構成したことを確認します。最初に、アプリケーションをインストールする必要があります。

このアプリケーションのインストールの詳細については、『Business Process Choreographer の処理の検証』を参照してください。管理コンソールからアプリケーションをインストールする方法の詳細については、『コンソールでのアプリケーション・ファイルのインストール』を参照してください。

注: ビジネス・プロセスとヒューマン・タスクを使用可能にしていない場合は、BPCIVTApp を使用してデプロイメント環境をテストすることはできません。この場合は、ビジネス・ルールとセレクターを使用してデプロイメント環境を動作させる Service Component Architecture アプリケーションをインストールして、実行する必要があります。アプリケーションに合わせてデプロイメント環境をテストするようにプロセスを変更します。

手順

1. 管理コンソールから、「アプリケーション」 → 「新規アプリケーション (New Application)」 → 「新規エンタープライズ・アプリケーション (New Enterprise Application)」を選択します。
2. 「ローカル・ファイル・システム」が選択されていることを確認し、ファイル `bpcivt.ear` を参照します。このファイルは、`install_root/installableApps` ディレクトリにあります。
3. ファイル `bpcivt.ear` を選択し、「オープン」を選択します。
4. 以降のステップでは、デフォルト構成を使用することを想定しています。以降のパネルでは、「要約」ページが表示されるまで「次へ」を選択します。これらの各ステップでは、ほかのトピックで説明されているように、各種オプションを選択し、モジュールをサーバーにマップします。テスト用には、このモジュールをアプリケーション・デプロイメント・ターゲット・クラスターにマップします。

注: スタンドアロン・サーバーでは、モジュールをアプリケーション・ターゲット・クラスターにマップする必要はありません。

5. 「終了」を選択します。
6. 「保管」および「同期化」を選択します。

次のタスク

ルーティング用テスト・アプリケーションの構成:

以下の手順を使用して、ルーティング用のテスト・アプリケーションを構成します。

始める前に

テスト・アプリケーションをインストールする必要があります。

このタスクについて

最初にアプリケーションを構成してから、プラグイン構成ファイルを生成します。

注: 説明では、クラスター名 *AppCluster* および Web サーバー名 *Webserver1* を使用します。テスト・アプリケーションでヒューマン・タスクまたはビジネス・プロセスを使用する場合は、*Business Process Choreographer* をご使用のアプリケーション・クラスターに既に構成していることを確認してください。

モジュールの管理、モジュール設定、およびモジュールのマッピングについては、*WebSphere Application Server* インフォメーション・センターを参照してください。

手順

1. Web サーバーおよびデプロイメント・ターゲットを識別するために実行するアプリケーション (複数可) を以下のように構成します。
 - a. 管理コンソールから「アプリケーション」 → 「アプリケーション・タイプ」 → 「**WebSphere エンタープライズ・アプリケーション**」を選択します。
 - b. アプリケーションの名前を選択します。
 - c. 「**モジュールの管理 (Manage modules)**」を選択します。

このパネルで、各モジュールは、「サーバー」の下に示される 1 つ以上のターゲットにマップされていなければなりません。
 - d. 「クラスターおよびサーバー」の下の選択リストで、*Webserver1* (事前に構成した Web サーバー) および *AppCluster* (アプリケーション・デプロイメント・ターゲット) を選択します。
 - e. 「適用」を選択し、次に「OK」を選択します。
 - f. デプロイメント環境に対してすべての Web サーバーおよびデプロイメント・ターゲットを構成するまで、ステップ 1d から 1e を繰り返します。
 - g. 「保管」および「同期化」を選択します。
2. プラグイン構成ファイルを生成します。
 - a. 管理コンソールから「サーバー」 → 「サーバー・タイプ」 → 「**Web サーバー (Web servers)**」を選択します。
 - b. 名前 *Webserver1* の横にあるチェック・ボックスを選択します。
 - c. 「**プラグインの生成**」を選択します。プラグイン構成ファイルが作成され、その旨がウィンドウ上部のメッセージに示されます。
 - d. デプロイメント環境に対して必要な回数分、ステップ 2b および 2c を繰り返します。

次のタスク

デプロイメント・マネージャーおよびノード・エージェントを停止してから再始動します。次に、テスト・アプリケーションを開始します。

テスト・アプリケーションの開始:

この手順を使用して、テスト・アプリケーションを開始し、実装をテストします。

始める前に

ルーティング用のテスト・アプリケーションがインストールおよび構成されている必要があります。

このタスクについて

テスト・アプリケーションは、管理コンソールから開始します。

手順

1. 管理コンソールから「アプリケーション」 → 「アプリケーション・タイプ」 → 「WebSphere エンタープライズ・アプリケーション」を選択します。
2. アプリケーション名の横にあるチェック・ボックスを選択し、「開始」を選択します。緑色の矢印が表示されるまで待機します。この矢印はアプリケーションが正常に開始されたことを示します。

次のタスク

テスト・アプリケーションを開始した後、このアプリケーションを実行します。

注: アプリケーションが正常に開始されない場合、ログ・ファイルを参照して、問題を示すエラー・メッセージを検索します。

テスト・アプリケーションの実行:

この手順を使用して、テスト・アプリケーションを実行し、デプロイメント環境が正常に作動しているかどうかを判別します。

始める前に

テスト・アプリケーションを開始する必要があります。

このタスクについて

このアプリケーションが正常に実行された場合、デプロイメント環境は正常に作動しています。アプリケーション・デプロイメント・ターゲット・クラスターのその他のメンバーについても、同一の手順に従い、正常に機能していることを確認します。

手順

1. ブラウザー・ウィンドウに `http://hostname:portnumber/testapp` の形式で URL を入力します。ここで、*hostname* は、アプリケーションをインストールしたクラスター・メンバーをホスティングするシステムの完全修飾 DNS 名または IP アドレス、*portnumber* は、そのクラスター・メンバーのデフォルト・ホストに関連付けられているポート番号、*testapp* はテスト・アプリケーションの名前です。
2. 画面上のログ・メッセージを確認します。

テスト・アプリケーションにヒューマン・タスクが含まれている場合は、「Looking up the HumanTaskManager API EJB...」で始まるログ・メッセージが画面に表示されます。アプリケーションでは、タスクが作成および要求され、入

出力データが検査され、タスクが完了して削除されます。ログ・メッセージの終了付近で「合格」が表示され、アプリケーションが正常に実行されたことが示されます。

正常であることを示すためにアプリケーション内に組み込んだすべてのメッセージが表示されたことを確認してください。

次のタスク

その他のテスト・アプリケーションをインストールおよび開始します。

その他のアプリケーションのインストールおよびアクセス

管理コンソールまたは Business Process Choreographer Explorer からアプリケーションのインストールおよびアクセスを行い、デプロイメント環境をさらに検査します。

始める前に

デプロイメント環境が正常にインストールおよび構成されている必要があります。

このタスクについて

テスト・アプリケーションをインストールしたのと同様の方法で、その他のアプリケーションをインストールして開始できます。これらのアプリケーションにアクセスするには、管理コンソールまたは Business Process Choreographer Explorer を使用します。

手順

1. アプリケーションを見つけます。

管理コンソールで「アプリケーション」 → 「新規アプリケーション (New Application)」をクリックし、インストールするアプリケーションを見つけます。

2. アプリケーションをインストールします。
3. アプリケーションを開始します。
4. アプリケーションにアクセスします。

ブラウザ・ウィンドウにアプリケーションの URL を入力します。例えば、`http://hostname:portnumber/myapp` のように入力します。ここで、*hostname* は、アプリケーションがインストールされたクラスター・メンバーに対応するシステムの完全修飾 DNS 名 (または IP アドレス)、*portnumber* は、そのクラスター・メンバーの `default_host` に関連付けられたポート番号、*myapp* は、アクセスしたいアプリケーションの名前です。

Business Process Choreographer Explorer で以下のステップを実行します。

- a. ブラウザー・ウィンドウに `http://hostname:portnumber/bpc` の形式で URL を入力します。ここで、*hostname* は、アプリケーションをインストールした、クラスター・メンバーに対応するシステムの完全修飾 DNS 名 (または IP アドレス) であり、*portnumber* は、そのクラスター・メンバーの `default_host` に関連付けられているポート番号です。

「ユーザーのタスク」というラベルのページが表示されますが、リストにはタスクが表示されていません。

- b. 「ユーザーのプロセス・テンプレート」を選択します。インストールしたアプリケーションに対応するテンプレートがリストされています。
 - c. ページ上のインターフェース・コントロールを使用して、タスクを開始、処理、および完了します。Business Process Choreographer タスクの実行の詳細については、『ビジネス・プロセスおよびヒューマン・タスクの管理』を参照してください。
5. 必要に応じて、アプリケーションの記録を表示したり、エラーを確認するために、クラスター・メンバーの SystemOut.log ファイルを確認することができます。

サーバーまたはクラスターの SCA サポートの構成

「Service Component Architecture (SCA)」コンソール・ページを使用して、Network Deployment 環境内のサーバーまたはクラスターが、サーバー・アプリケーション、それらのアプリケーションに必要なメッセージング・エンジンおよび宛先、あるいはその両方をホストできるように設定します。

始める前に

SCA サポートを構成する前に、以下の点を確認します。

- スタンドアロン・サーバー・プロファイルを使用しているかどうか。使用している場合は SCA サポートが既に構成されているので、Service Component Architecture ページでこのサポートを除去することはできません。ただし、このページでデータベース・データ・ソースの一部のプロパティを変更することはできます。
- メッセージング・エンジンと宛先をホストする場所 (リモート・バス・メンバーまたはローカル・バス・メンバーを使用)。
- SCA システム・バスのみを構成する必要があるのか、それとも SCA アプリケーション・バスも構成する必要があるのか。アプリケーション・バスはデフォルトで構成されます。WebSphere Business Integration Adapters を使用する SCA アプリケーションをデプロイする場合は、アプリケーション・バスが必要です。

このタスクに必要なセキュリティ役割: 以下のタスクを実行するには、管理者またはコンフィギュレーターとしてログインしている必要があります。

このタスクについて

サービス・アプリケーションでは、自動的に作成されるサービス統合バスを 1 つ以上使用する必要があります。これらのバスでは、宛先のメッセージング・エンジンを構成済みでなければなりません。Network Deployment 構成の新規のサーバーとクラスターは、デフォルトでは SCA アプリケーションとそれらの宛先をホストするようには構成されません。

サーバーまたはクラスター上で SCA サポートを構成するには、以下のステップを実行します。

手順

1. 管理コンソール内から、スコープに応じて、以下のいずれかをクリックします。
 - 「サーバー」 → 「サーバー・タイプ」 → 「WebSphere Application Server」 → 「*server_name*」 → 「Service Component Architecture」
 - 「サーバー」 → 「クラスター」 → 「WebSphere Application Server クラスター」 → 「*cluster_name*」 → 「Service Component Architecture」
2. 「Service Component Architecture コンポーネントのサポート」をクリックします。
3. 「バス・メンバー・ロケーション」パネルで、SCA アプリケーションに必要な宛先とメッセージング・エンジンをホストする場所を指定します。オプションには、以下の 2 つがあります。
 - **ローカル**。SCA アプリケーション、宛先、およびメッセージング・エンジンを現行サーバーまたはクラスターでホストすることを指定します。
 - **リモート**。SCA アプリケーションを現行サーバーまたはクラスターでホストし、宛先およびメッセージング・エンジンをリモート・サーバーまたはクラスター（デプロイメント・ターゲット ともいう）でホストすることを指定します。
4. (リモート・バス・メンバーのみ) 前のステップで「リモート」を選択した場合は、ホスト・アプリケーションの宛先およびメッセージング・エンジンをホストするリモート・サーバーまたはクラスターを指定します。ドロップダウン・メニューから、既存のデプロイメント・ターゲット（既に SCA システム・バスのメンバーとして構成されているターゲット）を選択するか、または「新規」をクリックして、「デプロイメント・ターゲットのブラウズ」ページから新規サーバーまたはクラスターを選択します。

「デプロイメント・ターゲットのブラウズ」ページから新規サーバーまたはクラスターを選択する場合は、このトピックで説明する SCA の構成が完了すると、そのターゲットで必要なメッセージング・エンジンが自動的に構成されます。

5. 「システム・バス・メンバー」パネルの表で、システム・バス・データ・ソース構成を確認または変更します。
 - a. 「データベース名」、「スキーマ」、「テーブルの作成」、「ユーザー名」、「パスワード」、「サーバー」、および「プロバイダー」の各フィールドのデフォルト値を確認します。各フィールドと受け入れ可能な値の詳細については、オンライン・ヘルプを参照してください。
 - b. これらのフィールドにデフォルト値がない場合、またはデフォルト値が適切でない場合は、システム・バス・データ・ソースに対する適切な値を入力します。フィールドに値を直接入力するか、または「編集」をクリックしてデータ・ソースの詳細ページで値を編集します。
 - c. オプション: 「テスト接続」をクリックして、データ・ソースがデータベースに接続でき、正しく認証されることを確認します。
6. 「アプリケーション・バス・メンバー」パネルの表で、アプリケーション・バス・データ・ソース構成を確認または変更します。
 - a. 「WebSphere Business Integration Adapter コンポーネントの使用可能化」オプションが選択されていることを確認します。

注: アプリケーション・バスを使用しない場合は、「WebSphere Business Integration Adapter コンポーネントの使用可能化」オプションをクリアし、ステップ 7 に進みます。

- b. 「データベース名」、「スキーマ」、「テーブルの作成」、「ユーザー名」、「パスワード」、「サーバー」、および「プロバイダー」の各フィールドのデフォルト値を確認します。各フィールドと受け入れ可能な値の詳細については、オンライン・ヘルプを参照してください。
 - c. これらのフィールドにデフォルト値がない場合、またはデフォルト値が適切でない場合は、アプリケーション・バス・データ・ソースに対する適切な値を入力します。フィールドに値を直接入力するか、または「編集」をクリックしてデータ・ソースの詳細ページで値を編集します。
7. 「OK」をクリックすると、SCA 構成が完了します。
 8. 変更を保存します。必要に応じて、加えた変更を見直すこともできます。

サーバーおよびクラスターでの Service Component Architecture サポートに関する考慮事項

サーバーおよびクラスターでは、Service Component Architecture (SCA) アプリケーション、アプリケーション宛先、またはその両方をサポートできます。

SCA アプリケーション (サービス・アプリケーションとも呼ばれる) では、自動的に作成される 1 つ以上のサービス統合バスを使用する必要があります。各アプリケーションでは、一連のメッセージング・リソース (宛先 と呼ばれる) が使用されます。これらの宛先には構成されたメッセージング・エンジンが必要であり、またこれらの宛先はアプリケーションと同じサーバーまたはクラスター、あるいはリモート・サーバーまたはリモート・クラスター上でホストすることができます。一般にメッセージング・エンジンはデータベース・データ・ソースを使用します。スタンドアロン・サーバー・プロファイルでは、プロファイル作成時にファイル・ストアを使用するオプションが選択されている場合、データベース・データ・ソースの代わりにファイル・ストアが使用される点に注意してください。

Network Deployment 環境または管理対象ノード環境内の新規のサーバーとクラスターは、デフォルトでは SCA アプリケーションとそれらの宛先をホストするようには構成されません。

注: スタンドアロン・サーバーでは、SCA サポートが自動的に構成されます。この構成を使用不可にすることはできません。

このサポートを有効にするには、管理コンソールの「Service Component Architecture」ページを使用します。サーバーの場合、アプリケーション・クラス・ローダー・ポリシーが「複数」に設定されていることを確認します。

Network Deployment 環境または管理対象ノード環境内にあるサーバーまたはクラスターに対して、SCA サポートを使用可能にする前に、以下の可能な構成のいずれを実装するかを決定します。

- **リモート・バス・メンバーの構成:** サーバーまたはクラスターでは SCA アプリケーションがホストされますが、宛先はリモート・サーバーまたはリモート・ク

ラスタ上でホストされます。このシナリオでは、宛先をホストするために必要なメッセージング・エンジンを使って、リモート・サービス統合バス・メンバーを構成する必要があります。

リモート・メッセージングの使用には、サービス統合バスとそのメンバーの計画を立てて構成するための初期投資が必要になりますが、この構成はアプリケーション・クラスター内の複数のメンバーで再利用できます。メッセージは、すべてのメンバーに配布されます。また、フェイルオーバー・サポートを提供するように初期構成を構造化することもできます。

- **ローカル・バス・メンバーの構成:** サーバーまたはクラスターでは SCA アプリケーションおよびアプリケーション宛先の両方がホストされます。必要なメッセージング・エンジンは、サーバーまたはクラスター上のローカル・バス・メンバーを使用して構成されます。

計画の各トピックを参照して、ご使用の環境にいずれの構成が適しているかを判断してください。

関連情報

 [サーバーのクラス・ローダーの構成](#)

 [サービス統合バスについて](#)

 [メッセージング・エンジン](#)

管理コンソールでのすべての REST サービスの構成

すべての Representational State Transfer (REST) サービスを環境に合わせて構成するには、REST サービスの管理コンソール・ページを使用します。

始める前に

このタスクを実行する前に、WebSphere Business Process Management 製品をインストールしておく必要があります。

このタスクについて

REST サービスのデプロイメントは、スタンドアロン・サーバー・プロファイルで自動的に実行されます。他の構成タイプの場合は、管理コンソール・ページを使用すると、Business Space 内のすべての製品ウィジェットに関する REST サービスを構成することができます。「REST サービス」ページでは、現在の環境に対するすべてのサービスを表示したり、各サービスを個々に有効化/無効化したりすることができます。

手順

1. 「サービス」 → 「REST サービス」 → 「REST サービス」をクリックします。

「REST サービス」ページが開き、現在の環境内での REST サービスがすべて表示されます。

2. 「**スコープセクション**」で、すべてを指定して、現在の環境内の REST サービスをすべて表示するか、REST サービスが有効になっているサーバーまたはクラスターを選択します。
3. プロバイダーに対する REST サービスがリストされたテーブル内の各行で、個々の REST サービスを有効化する場合は「**使用可能**」チェック・ボックスを選択し、個々の REST サービスを無効化する場合は「**使用可能**」チェック・ボックスをクリアします。
4. 有効化する個々のサービスについて、「**説明**」列にわかりやすい説明を入力します。
5. 「**OK**」をクリックして、サービスへの変更をコミットします。

サービス・プロバイダーでの REST サービスの構成

サービス・プロバイダー内の Representational State Transfer (REST) サービスを構成するには、REST サービス・プロバイダー構成の管理コンソール・ページを使用します。

始める前に

このタスクを実行する前に、WebSphere Business Process Management 製品をインストールしておく必要があります。

このタスクについて

REST サービスのデプロイメントは、スタンドアロン・サーバー・プロファイルで自動的に実行されます。他の構成タイプの場合は、管理コンソール・ページを使用して、REST サービスを構成することができます。REST サービス・プロバイダー構成ページでは、選択したサービス・プロバイダーのすべてのサービスを表示したり、各サービスを個々に有効化/無効化したりすることができます。サーバーまたはクラスター (またはビジネス・プロセスまたはヒューマン・タスク・コンポーネント) を使用して REST サービスを管理する場合は、REST サービスの管理コンソール・ページを使用します。

手順

1. 「**サービス**」 → 「**REST サービス**」 → 「**REST サービス・プロバイダー**」 → をクリックします。

「REST サービス・プロバイダー (REST service providers)」ページが開き、REST サービス・プロバイダーがすべて表示されます。

2. プロバイダー・リンクをクリックし、そのプロバイダーによって管理される REST サービス・グループ用のサービスを構成します。

REST サービス・プロバイダーの構成ページが開き、そのプロバイダーでの REST サービスがすべて表示されます。

3. ランタイム環境で使用できるように構成するすべての REST サービスについて、リストから「**プロトコル**」を選択します。**https://** または **http://** を選択することによりフル URL パスを設定し、「**ホスト名または負荷分散環境の仮想ホスト (Host Name or Virtual Host in a Load-Balanced Environment)**」と「**ポート**」を入力します。完全修飾ホスト名を使用します。

REST 要求をアプリケーション・サーバーに直接送信する場合は、アプリケーション・サーバーのホスト名とポートを入力します。REST 要求を、1 台以上のアプリケーション・サーバーの前に配置されたプロキシ・サーバーまたは HTTP サーバーに送信する場合は、セットアップ済みのプロキシ・サーバーまたは HTTP サーバーのホスト名とポートを入力します。ブラウザと、Business Space および REST サービスの間に、ロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーがある環境では、プロトコル、ホスト、およびポートの指定内容が、Business Space にアクセスするためのブラウザ URL と一致していることを確認してください。

4. プロバイダーに対する REST サービスがリストされたテーブル内の各行で、個々の REST サービスを有効化する場合は「使用可能」チェック・ボックスを選択し、個々の REST サービスを無効化する場合は「使用可能」チェック・ボックスをクリアします。
5. 有効化する個々のサービスについて、「説明」列にわかりやすい説明を入力します。
6. 「OK」をクリックして、サービスへの変更をコミットします。

サーバー、クラスター、またはコンポーネント用の REST サービスの構成

サーバー、クラスター、またはコンポーネント用の Representational State Transfer (REST) サービスを構成するには、REST サービスの管理コンソール・ページを使用します。

始める前に

このタスクを実行する前に、WebSphere Business Process Management 製品をインストールしておく必要があります。

このタスクについて

REST サービスのデプロイメントは、スタンドアロン・サーバー・プロファイルで自動的に実行されます。他の構成タイプの場合は、REST サービスの管理コンソール・ページを使用すると、サーバー、クラスター、またはコンポーネント用のサービスを構成することができます。

手順

1. 次のいずれかをクリックします。
 - サーバー上のシステム REST サービスの場合、「サーバー」 → 「サーバー・タイプ」 → 「WebSphere Application Server」 → 「*name_of_server*」 → 「ビジネス・インテグレーション」 → 「REST サービス」をクリックします。
 - クラスター上のシステム REST サービスの場合、「サーバー」 → 「クラスター」 → 「WebSphere Application Server クラスター」 → 「*name_of_cluster*」 → 「ビジネス・インテグレーション」 → 「REST サービス」をクリックします。
 - サーバー上のビジネス・プロセス REST サービスの場合は、「サーバー」 → 「サーバー・タイプ」 → 「WebSphere Application Server」 →

- 「*name_of_server*」 → 「ビジネス・インテグレーション」 → 「Business Flow Manager」 → 「REST サービス」をクリックします。
- クラスター上のビジネス・プロセス REST サービスの場合は、「サーバー」 → 「クラスター」 → 「Websphere Application Server クラスター」 → 「*name_of_cluster*」 → 「ビジネス・インテグレーション」 → 「Business Flow Manager」 → 「REST サービス」をクリックします。
- サーバー上のヒューマン・タスク REST サービスの場合は、「サーバー」 → 「サーバー・タイプ」 → 「WebSphere Application Server」 → 「*name_of_server*」 → 「ビジネス・インテグレーション」 → 「Human Task Manager」 → 「REST サービス」をクリックします。
- クラスター上のヒューマン・タスク REST サービスの場合は、「サーバー」 → 「クラスター」 → 「Websphere Application Server クラスター」 → 「*name_of_cluster*」 → 「ビジネス・インテグレーション」 → 「Human Task Manager」 → 「REST サービス」をクリックします。

「REST サービス」ページが表示され、サーバーまたはクラスター (または Business Flow Manager または Human Task Manager コンポーネント) で使用するために構成できるデフォルトの REST サービスがすべて表示されます。REST サービスが既に構成されている場合は、メッセージが表示されます。

2. ランタイム環境で使用できるように構成するすべての REST サービスについて、リストから「プロトコル」を選択します。**https://** または **http://** を選択することによりフル URL パスを設定し、「**ホスト名または負荷分散環境の仮想ホスト (Host Name or Virtual Host in a Load-Balanced Environment)**」と「**ポート**」を入力します。完全修飾ホスト名を使用します。

REST 要求をアプリケーション・サーバーに直接送信する場合は、アプリケーション・サーバーのホスト名とポートを入力します。REST 要求を、1 台以上のアプリケーション・サーバーの前に配置されたプロキシ・サーバーまたは HTTP サーバーに送信する場合は、セットアップ済みのプロキシ・サーバーまたは HTTP サーバーのホスト名とポートを入力します。ブラウザと、Business Space および REST サービスの間に、ロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーがある環境では、プロトコル、ホスト、およびポートの指定内容が、Business Space にアクセスするためのブラウザ URL と一致していることを確認してください。

3. REST サービス・テーブル内の各行で、個々の REST サービスを有効化する場合は「**使用可能**」チェック・ボックスを選択し、個々の REST サービスを無効化する場合は「**使用可能**」チェック・ボックスをクリアします。
4. REST サービスの表で、それぞれの REST サービスの意味のある説明を「**説明**」フィールドに入力します。
5. 「**OK**」をクリックして、サービスへの変更をコミットします。

REST サービス構成を後で変更する場合は、「REST サービス」ページに戻るか、REST サービス・エンドポイントの構成を管理するための他の管理コンソール・ページを使用します。「REST サービス・プロバイダー」ページでは、構成するサービス・プロバイダーを選択できます。「**サービス**」 → 「**REST サービス**」からアクセスする「REST サービス」ページでは、現在の環境内での REST サービスをすべて構成することができます。

コマンド行を使用した REST サービスの構成

Representational State Transfer (REST) サービスをランタイム環境で使用するには、その前に構成を行う必要があります。REST サービスの管理コンソール・ページを使用しない場合は、`updateRESTGatewayService` コマンドを使用します。

始める前に

このタスクを実行する前に、WebSphere Business Process Management 製品をインストールしておく必要があります。

WebSphere Process Server で、Business Process Choreographer を構成済みの場合は、ヒューマン・タスク管理 REST サービスが既に構成されています。ただし、他の REST サービスのサービス・プロバイダーとなる REST サービス・ゲートウェイ・アプリケーションは、`updateRESTGatewayService` コマンドを使用して構成する必要があります。

手順

1. コマンド・ウィンドウをオープンします。

`wsadmin` コマンドは、スタンドアロン・サーバー環境の場合は `profile_root/bin` ディレクトリにあり、Network Deployment 環境の場合は `deployment_manager_profile_root/bin` ディレクトリにあります。

2. コマンド・プロンプトから `wsadmin` コマンドを入力して `wsadmin` 環境を開始します。
3. `updateRESTGatewayService` コマンドを使用して、クラスターまたはサーバーとノードを指定する REST サービスを構成します。 **-enable** パラメーターはオプションです。このパラメーターを指定しない場合は、デフォルト値の `true` に設定されます。
4. `save` コマンドを実行します。

例

次の例では、Jython を使用して、`updateRESTGatewayService` コマンドを実行し、変更を保存しています。クラスター上に REST サービスを構成します。

```
AdminTask.updateRESTGatewayService(['-clusterName  
cluster_name'])  
AdminConfig.save()
```

次の例では Jacl を使用しています。

```
$AdminTask updateRESTGatewayService {-clusterName  
cluster_name}  
$AdminConfig save
```

Business Process Choreographer の構成

Business Process Choreographer を構成する方法については、WebSphere Process Server for Multiplatforms バージョン 7.0 インフォメーション・センターにアクセスし、「**WebSphere Process Server の構成**」>「**Business Process Choreographer の構成**」にあるトピックを参照してください。この情報は *Business Process Choreographer* PDF でも検索できます。

Business Space の構成

WebSphere が提供する Business Space をインストールおよび構成して、アプリケーション・ユーザーが IBM WebSphere ビジネス・プロセス・マネジメント・ポートフォリオ全体で Web インターフェースを作成、管理、および統合するための共通インターフェースをセットアップします。

始める前に

製品ソフトウェアをインストールする必要があります。製品をインストールすると、Business Space のファイルは、構成したプロファイルに対応するインストール済み環境に組み込まれます。

ヒューマン・タスク管理ウィジェットを必要とする WebSphere Process Server ランタイム環境では、Business Process Choreographer を構成する必要があります。詳しくは、WebSphere Process Server の資料の『Business Process Choreographer の構成』を参照してください。

このタスクについて

Business Space は、ご使用の WebSphere 製品のサポートに適合するように、以下のデータベース製品でサポートされます。

- Derby Embedded (WebSphere Business Monitor、WebSphere Business Services Fabric、WebSphere Enterprise Service Bus、および WebSphere Process Server の場合)。
- Derby Network Server (WebSphere Business Monitor、WebSphere Enterprise Service Bus、および WebSphere Process Server の場合)
- DB2 Universal (WebSphere Business Compass、WebSphere Business Monitor、WebSphere Business Services Fabric、WebSphere Enterprise Service Bus、および WebSphere Process Server の場合)
- DB2 for IBM i (WebSphere Enterprise Service Bus および WebSphere Process Server の場合)
- DB2 for z/OS (WebSphere Business Monitor、WebSphere Business Services Fabric、WebSphere Enterprise Service Bus、および WebSphere Process Server 用)。
- Microsoft SQL Server Enterprise 2005 SP 2 および 2008 (WebSphere Business Services Fabric、WebSphere Enterprise Service Bus、および WebSphere Process Server の場合)。

- Oracle 11g (WebSphere Business Compass、WebSphere Business Monitor、WebSphere Business Services Fabric、WebSphere Enterprise Service Bus、および WebSphere Process Server の場合)

Monitor

Process Server / ESB

WebSphere Process

Server、WebSphere Enterprise Service Bus、またはWebSphere Business Monitor をインストールしてスタンドアロン・サーバー・プロファイルを標準的なオプションを指定して作成する場合、ビジネス・スペースのインストールと構成が Derby Embedded データベースを使用して自動的に行われます。スタンドアロン・サーバー・プロファイルを使用する場合、拡張オプションを持つプロファイル管理ツールを使用してBusiness Space を構成し、現在のランタイム環境で作業することができます詳しくは、『プロファイル管理ツールを使用したBusiness Space の構成』を参照してください。

いずれの製品の場合も、デプロイメント・マネージャーおよびカスタム・プロファイルを設定アップしている場合、Business Space を構成する最も簡単な方法は、デプロイメント環境構成ウィザードを使用する方法です。詳しくは、『「デプロイメント環境構成」ウィザードを使用したBusiness Space の構成』を参照してください。

スタンドアロン・サーバー環境を使用しているか、または「デプロイメント環境構成」ウィザードを使用してランタイム環境を構成している場合、Representational State Transfer (REST) サービス・エンドポイントは自動的に構成されて使用可能になります。その他の環境については、REST サービス管理コンソールのページを使用して REST サービスを構成します。ビジネス・スペースでウィジェットを使用可能にする場合は、それらのウィジェットに対する REST サービス・エンドポイントを構成する必要があります。REST エンドポイントは、ビジネス・スペースがウィジェットをエンドポイントに関連付け、ウィジェットがパレットに表示されて使用できるようにするために、登録する必要があります。

デプロイメント・マネージャーおよびカスタム・プロファイルを使用している場合は、管理コンソールを使用してBusiness Space を構成できます。

プロファイル管理ツールまたは管理コンソールで最初のセットアップ作業を行った後で、Business Space 用のデータベース表を構成する必要があります。詳しくは、『ビジネス・スペースのデータベース表の構成』を参照してください。

Business Space を構成するためにどのツールを使用するかに関わらず、Business Space がご使用の環境のセキュリティーを伴って機能することを確認する必要があります。詳しくは、『Business Space のセキュリティーのセットアップ』を参照してください。

Business Space は Lotus Mashups テクノロジーを基盤としてビルドされています。Lotus Mashups のよくある質問および一般的なトラブルシューティング情報については、<http://www.lotus.com/ldd/mashupswiki.nsf/xpViewCategories.xsp?lookupName=Troubleshooting&SessionID=CDFG4HK6EQ> を参照してください。

次のタスク

ビジネス・スペースをインストールおよび構成した後に、ランタイム環境のユーザーは、URL: `http://host:port/BusinessSpace` からそれを開くことができます。ここで *host* はサーバーが実行されているホストの名前であり、*port* はサーバーのポート番号です。

プロファイル管理ツールを使用したBusiness Space の構成

プロファイル管理ツールを使用して、WebSphere が提供する Business Space を構成できます。

このタスクについて

製品のインストール後に、プロファイル管理ツールを開始できます。また、製品のインストール後に `manageprofiles` コマンド行ユーティリティのパラメーター `-configureBSpace` を使用することにより、コマンド行からプロファイル管理ツールの機能を使用することができます。いずれの場合も、Business Space は、共通データベース用に指定されたデータベース製品と同じデータベース製品と共にインストールされます。Business Space でサポートされていないデータベースを選択した場合、プロファイル管理ツールは Derby Embedded データベースで Business Space を構成します。

Process Server / ESB プロファイル管理ツールは、WebSphere Process Server for z/OS および WebSphere Enterprise Service Bus for z/OS では使用できません。これらの製品では、管理コンソールを使用して Business Space を構成します。

いずれの製品の場合も、デプロイメント・マネージャーおよびカスタム・プロファイルに対しては、管理コンソールまたはデプロイメント環境構成ウィザードを使用できます。『管理コンソールを使用したBusiness Space の構成』または『デプロイメント環境構成ウィザードを使用したBusiness Space の構成』を参照してください。プロファイル管理ツールを使用して、「**デプロイメント環境**」プロファイル作成オプションを指定してデプロイメント・マネージャーおよびカスタム・プロファイル (管理対象ノード) を作成する場合、Business Space はご使用のデプロイメント環境で自動的に構成されますが、データベース表を構成するためのスクリプトは手動で実行する必要があります。

スタンドアロン・サーバー・プロファイルで拡張構成を行う場合は、管理コンソールのページを使用して Business Space を構成する必要があります。例えば、プロファイル用に選択したデータベース (WebSphere Business Monitor データベース、WebSphere Business Compass データベース、または WebSphere Process Server 共通データベース) とは異なるデータ・ソースを指定する場合は、管理コンソールを使用して Business Space を構成する必要があります。

管理コンソールを使用する必要がある拡張構成オプションを使用することにした場合は、必ず以下のステップを実行してください。

- プロファイル管理ツールを使用してスタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成する場合は、「**詳細プロファイル作成**」オプションを使用して「**ビジネス・スペースの構成**」チェック・ボックスをクリアします。この操作により、後から管理コンソールを使用して Business Space を構成することができます。

- 『管理コンソールを使用したBusiness Space の構成』を参照してください。

スタンドアロン・サーバーを構成する場合は、ステップ 1 を実行します。デプロイメント環境を構成する場合は、ステップ 2 を実行します。

手順

1. スタンドアロン・サーバーの場合は、プロファイル管理ツールを開始し、「**スタンドアロン・サーバー・プロファイル (Stand-alone server profile)**」オプションを選択して、以下のステップを実行します。
 - a. 「プロファイル作成オプション」ページで、以下のいずれかのステップを実行します。
 - Derby Embedded データベースを使用したBusiness Space のデフォルトのインストールと構成をそのまま使用する場合は、「**標準プロファイル作成**」オプションを選択します。
 - 作成しているプロファイルの拡張オプションを構成する場合は、「**拡張**」オプションを選択します。「Business Space の構成」ページで、「**ビジネス・スペースの構成**」チェック・ボックスが選択されていることを確認します。Business Space 内のヒューマン・タスク管理ウィジェットとともに動作するよう Lotus Webform Server を構成する場合、「**Lotus Webform Server の構成 (Configure Lotus Webform Server)**」チェック・ボックスを選択し、Webform Server Translator およびインストールのルートを入力します。

Business Space は、ご使用の製品のデータ・ソースを使用して構成されます。プロファイル管理ツールと IBM WebSphere Dynamic Process Edition を使用している場合、Business Space は WebSphere Process Server のデータ・ソースを使用して構成されます。
 - b. プロファイルのホスト名を指定するときには、完全修飾ホスト名を使用してください。
 - c. 「データベース設計」ページでは、Business Space のデータベース構成情報を含め、製品のすべてのデータベース構成が含まれる、データベース設計ツールを使用して作成したデータベース設計ファイルを使用するオプションを選択できます。
 - d. プロファイル管理ツールを使用して、プロファイルを作成します。Business Space がインストールされました。これは、共通データベース用に指定したデータベース製品と同じデータベース製品用に構成されます (または、データベース製品がサポートされていない場合は、Derby Embedded データベース用に構成されます)。
 - e. データベースがリモートにある場合、プロファイル管理ツールの実行後にデータベース表を構成する必要があります。『Business Space のデータベース表の構成』を参照してください。
2. デプロイメント環境の場合は、プロファイル管理ツールを開始し、「**デプロイメント・マネージャー・プロファイル**」または「**カスタム・プロファイル**」オプションを選択して、以下のステップを実行します。

- a. 「プロファイル作成オプション」 ページで、「**デプロイメント環境**」 オプションを選択し、カスタマイズ済みの構成値を使用して各プロファイルを構成し、提供されたパターンに基づいてデプロイメント環境でそのプロファイルを使用します。
- b. プロファイル管理ツールのステップを実行して、デプロイメント・マネージャー・プロファイルおよびカスタム・プロファイル (管理対象ノード) を作成します。
- c. すべてのカスタム・ノードを統合した後に、データベース表を構成するためのスクリプトを手動で実行します。『Business Space のデータベース表の構成』を参照してください。

次のタスク

注: 製品データベースが Oracle データベースの場合、Business Space は、プロファイル管理ツールまたは `manageprofiles` コマンド行ユーティリティーで、デフォルトのスキーマ `IBMBUSSP` とプロファイル作成時に入力したデフォルトのパスワードを使用して、同じデータベースを使用するように構成されます。`IBMBUSSP` ユーザー名に別のパスワードを使用する場合は、管理コンソールを使用して、JDBC リソースを以下のように更新する必要があります。データ・ソース `jdbc/mashupsDS` を探します。Business Space スキーマ名のパスワードと同じようになるように、認証別名の値を変更します。変更内容を保存して、サーバーを再始動します。

Business Space を使用する前に、チームが使用する Business Space とウィジェットで使用する必要のあるセキュリティーをセットアップしてください。詳しくは、『Business Space のセキュリティーのセットアップ』を参照してください。

注: Business Space は、プロキシ・コンポーネントを使用して REST サービスに接続します。REST サービスの反応がない場合、REST サービス・サーバーのパフォーマンスに基づいて、Business Space から REST サービスへの接続タイムアウト設定を更新する必要があります。REST サービス接続がタイムアウトになる場合は、以下の設定を更新します。デフォルトで、`socket-timeout` 値は 30 秒に設定されています。この値を状況に適した値に変更します。

1. ファイル `profile_root/BusinessSpace/node_name/server_name/mm.runtime.prof/config/proxy-config.xml`を開きます。
2. `socket-timeout` の `proxy:value` を変更します。時間はミリ秒で指定します。

```
<proxy:meta-data>
  <proxy:name>socket-timeout</proxy:name>
  <proxy:value>30000</proxy:value>
</proxy:meta-data>
```
3. `wsadmin` スクリプト・クライアントを使用して、`updateBlobConfig` コマンドを実行します。その際には、**-serverName** および **-nodeName** パラメーター (スタンドアロン・サーバーの場合)、または **-clusterName** パラメーター (クラスタの場合) を指定すると共に、**-propertyFileName** パラメーターに `proxy-config.xml` ファイルのパスを値として指定し、**-prefix** パラメーターに値 `Mashups_` を指定します。
4. 管理コンソールから `mm_was_node_server` アプリケーションを再始動するか、サーバー・アプリケーション全体を再始動します。

「デプロイメント環境構成」ウィザードの一部としてBusiness Space を構成する

Business Space の構成や、Business Space のウィジェット用の Representational State Transfer (REST) サービス構成は、「デプロイメント環境構成」ウィザードに自動的に組み込まれます。どの REST サービスを構成するかを選択することができます。

始める前に

タスクを開始する前に、以下のタスクを完了しておく必要があります。

- 製品をインストールします。
- プロファイルを作成します。このとき、必ずプロファイルの完全修飾ホスト名を指定してください。
- Business Space 用に機密保護機能のある環境をセットアップする場合は、セキュリティを使用可能にします。

このタスクについて

デプロイメント・マネージャーおよびカスタム・プロファイルをセットアップしている場合、これがBusiness Space を構成するための最も簡単な方法です。

手順

1. 管理コンソールで、「サーバー」 → 「デプロイメント環境」 → 「新規」をクリックします。デプロイメント環境の作成プロセスがウィザードの一連のページで示されます。
2. 新規デプロイメント環境を定義するか、デプロイメント環境定義が記述されたファイルをインポートします。IBM 提供のパターンに基づいてデプロイメント環境を作成することができます。カスタムのデプロイメント環境を作成することもできます。
3. 「デプロイメント環境パターン」ページで、任意のデプロイメント環境パターンを選択します。
4. 「ノードの選択」ページで、デプロイメント環境に参加するノードを指定します。
5. 「クラスター」ページで、特定のデプロイメント環境機能に割り当てる各ノードのクラスター・メンバー数を指定します。
6. 「データベース」ページで、表にリストされるコンポーネントの 1 つである Business Space のデータ・ソースを構成します。説明の編集、接続のテスト、プロバイダーに対して使用するデータベース製品をそれぞれ設定することができます。Business Space の場合は、このページの「テーブルの作成」チェック・ボックスを選択することはできません。Business Space では、データベース表を手動で構成する必要があります。データベース製品リストには、各コンポーネントでサポートされるすべてのデータベースが表示されます。
7. 「セキュリティ」ページで、セキュア・コンポーネントへのアクセス時に WebSphere が使用する認証別名を構成します。認証別名のユーザー名とパスワードは、このページで変更することができます。これらの別名を使用してセキュア・コンポーネントにアクセスしますが、データ・ソースにアクセスすることはできません。

8. WebSphere Process Server 構成の場合は、アプリケーション・デプロイメント・ターゲットの構成に必要な情報を指定して、Business Process Choreographer コンポーネントのデプロイメントをサポートします。このデプロイメント環境の Business Process Choreographer の構成に使用されるコンテキスト・ルート、セキュリティー、および Human Task Manager メール・セッションの値を指定します。
9. WebSphere Process Server 構成の場合は、クラスターまたはサーバーで稼働するようにビジネス・ルール・マネージャーを構成します。
10. REST サービス・ページで、ランタイム環境用の Business Space で使用できるようにするウィジェットのサービスを構成します。
 - クライアントがサーバーまたはクラスターと通信するために必要なポート番号とホストまたは仮想ホストを入力します。
 - ホスト・フィールドとポート・フィールドを空のままにした場合、それらの値は、個々のクラスター・メンバーのホストとその HTTP ポートの値へとデフォルト設定されます。負荷分散環境の場合は、後でこれらのデフォルト値を、環境の仮想ホスト名およびポートへと変更する必要があります。必ず完全修飾ホスト名を指定してください。
 - 必要に応じて、ウィジェットの説明を設定します。
11. 次のページで、「終了」または「終了して環境を生成」をクリックします。
12. デプロイメント環境またはクラスターを始動する前に、Business Space のデータベース表を構成するスクリプトを実行します。詳しくは、『Business Space のデータベース表の構成』を参照してください。

次のタスク

Business Space は、プロキシ・コンポーネントを使用して REST サービスに接続します。REST サービスの反応がない場合、REST サービス・サーバーのパフォーマンスに基づいて、Business Space から REST サービスへの接続タイムアウト設定を更新する必要があります。REST サービス接続がタイムアウトになる場合は、以下の設定を更新します。デフォルトで、socket-timeout 値は 30 秒に設定されています。この値を状況に適した値に変更します。

1. ファイル `profile_root/BusinessSpace/node_name/server_name/mm.runtime.prof/config/proxy-config.xml`を開きます。
2. socket-timeout の proxy:value を変更します。時間はミリ秒で指定します。


```
<proxy:meta-data>
  <proxy:name>socket-timeout</proxy:name>
  <proxy:value>30000</proxy:value>
</proxy:meta-data>
```
3. wsadmin スクリプト・クライアントを使用して、updateBlobConfig コマンドを実行します。その際には、**-serverName** および **-nodeName** パラメーター (スタンドアロン・サーバーの場合)、または **-clusterName** パラメーター (クラスターの場合) を指定すると共に、**-propertyFileName** パラメーターに proxy-config.xml ファイルのパスを値として指定し、**-prefix** パラメーターに値 Mashups_ を指定します。
4. 管理コンソールから mm_was_node_server アプリケーションを再始動するか、サーバー・アプリケーション全体を再始動します。

ネットワーク・デプロイメント環境のためのビジネス・スペースの構成

分散環境またはネットワーク・デプロイメント環境を使用している場合は、管理コンソールまたは管理コマンドを使用して Business Space を構成します。

このタスクについて

デプロイメント・マネージャーおよびカスタム・プロファイルを使用している場合、Representational State Transfer (REST) エンドポイントを構成し、Business Space を構成し、REST エンドポイントを登録し、データベース表を構成する必要があります。

REST サービスの構成

スタンドアロン・サーバー環境を使用しているか、または「デプロイメント環境構成」ウィザードを使用してランタイム環境を構成している場合、Representational State Transfer (REST) サービスは自動的に構成されて使用可能になります。その他の環境については、管理コンソールを使用して REST サービスを構成します。

このタスクについて

ビジネス・スペースでウィジェットを使用可能にする場合は、それらのウィジェットに対する REST サービスを構成する必要があります。後で、REST エンドポイントを登録して、ビジネス・スペースがウィジェットをエンドポイントに関連付け、ウィジェットがパレットに表示されて使用できるようにする必要があります。

特定のサーバーまたはクラスターに対してすべての REST サービスを構成することができます。または、個々のサービスを選択して構成することもできます。個々のサービスの構成は、あるサービス・プロバイダーについてのすべてのサービスを表示したり、あるいは環境のすべてのサービスを表示したりすることによって管理できます。

管理コンソールでのすべての REST サービスの構成:

すべての Representational State Transfer (REST) サービスを環境に合わせて構成するには、REST サービスの管理コンソール・ページを使用します。

始める前に

このタスクを実行する前に、WebSphere Business Process Management 製品をインストールしておく必要があります。

このタスクについて

REST サービスのデプロイメントは、スタンドアロン・サーバー・プロファイルで自動的に実行されます。他の構成タイプの場合は、管理コンソール・ページを使用すると、Business Space 内のすべての製品ウィジェットに関する REST サービスを構成することができます。「REST サービス」ページでは、現在の環境に対するすべてのサービスを表示したり、各サービスを個々に有効化/無効化したりすることができます。

また、REST エンドポイントはBusiness Space に登録する必要があります。すると、Business Space がウィジェットをこれらのエンドポイントに関連付け、ウィジェットがパレットに表示されて使用できるようになります。

同じ REST サービス・エンドポイントの複数のインスタンスを構成する場合は、エンドポイント・ファイルとウィジェット・メタデータ・ファイルを手動で編集する必要があります。詳しくは、『複数のエンドポイント用にBusiness Space ウィジェットを使用可能にする』を参照してください。

手順

1. 「サービス」 → 「REST サービス」 → 「REST サービス」をクリックします。

「REST サービス」ページが開き、現在の環境内での REST サービスがすべて表示されます。
2. 「スコープセクション」で、すべてを指定して、現在の環境内の REST サービスをすべて表示するか、REST サービスが有効になっているサーバーまたはクラスターを選択します。
3. プロバイダーに対する REST サービスがリストされたテーブル内の各行で、個々の REST サービスを有効化する場合は「使用可能」チェック・ボックスを選択し、個々の REST サービスを無効化する場合は「使用可能」チェック・ボックスをクリアします。
4. 有効化する個々のサービスについて、「説明」列にわかりやすい説明を入力します。
5. 「OK」をクリックして、サービスへの変更をコミットします。

次のタスク

- Business Space を構成します。
- データベース表を構成します (リモート・データベースまたはネットワーク・デプロイメント環境を使用する場合)。
- REST サービス・エンドポイントを登録します。
- サービス・エンドポイントのインスタンスが複数ある場合 (例えば 2 つのクラスターで作業を分割しており、ウィジェットで各クラスターのデータを表示する場合など)、追加のクラスターごとに手動で追加のウィジェットを使用可能にする必要があります。
- Business Space のセキュリティーをセットアップします。

サービス・プロバイダーでの REST サービスの構成:

サービス・プロバイダー内の Representational State Transfer (REST) サービスを構成するには、REST サービス・プロバイダー構成の管理コンソール・ページを使用します。

始める前に

このタスクを実行する前に、WebSphere Business Process Management 製品をインストールしておく必要があります。

このタスクについて

REST サービスのデプロイメントは、スタンドアロン・サーバー・プロファイルで自動的に実行されます。他のタイプの構成では、管理コンソールでBusiness Space内の製品のすべてのウィジェットに対して REST サービスを構成することができます。管理コンソールの「REST サービス・プロバイダー構成」ページでは、選択されたサービス・プロバイダーのすべてのサービスを表示し、各サービスを個別に使用可能または使用不可に設定できます。このページでは、サービス・プロバイダーについてのすべてのサービスを処理することで個々のサービス構成を管理できます。サーバーまたはクラスター（あるいはビジネス・プロセスまたはヒューマン・タスク・コンポーネント）ごとに REST サービスを管理したい場合は、管理コンソールの「REST サービス」ページを使用してください。

また、REST エンドポイントはBusiness Space に登録する必要があります。すると、Business Space がウィジェットをこれらのエンドポイントに関連付け、ウィジェットがパレットに表示されて使用できるようになります。

同じ REST サービス・エンドポイントの複数のインスタンスを構成する場合は、エンドポイント・ファイルとウィジェット・メタデータ・ファイルを手動で編集する必要があります。詳しくは、『Business Space ウィジェットが複数のエンドポイントを処理できるようにする』を参照してください。

手順

1. 「サービス」 → 「REST サービス」 → 「REST サービス・プロバイダー」 → をクリックします。

「REST サービス・プロバイダー (REST service providers)」ページが開き、REST サービス・プロバイダーがすべて表示されます。

2. プロバイダー・リンクをクリックし、そのプロバイダーによって管理される REST サービス・グループ用のサービスを構成します。

REST サービス・プロバイダーの構成ページが開き、そのプロバイダーでの REST サービスがすべて表示されます。

3. Business Space で使用するすべての REST サービスについての**プロトコル**をリストから選択します。「**https://**」または「**http://**」のいずれかを選択してから、「**負荷分散環境でのホスト名または仮想ホスト**」フィールドと「**ポート**」フィールドに入力して、絶対 URL パスを構成します。完全修飾ホスト名を使用しません。

REST 要求をアプリケーション・サーバーに直接送信する場合は、アプリケーション・サーバーのホスト名とポートを入力します。REST 要求を、1 台以上のアプリケーション・サーバーの前に配置されたプロキシ・サーバーまたは HTTP サーバーに送信する場合は、セットアップ済みのプロキシ・サーバーまたは HTTP サーバーのホスト名とポートを入力します。ブラウザと、Business Space および REST サービスの間に、ロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーがある環境では、プロトコル、ホスト、およびポートの指定内容が、Business Space にアクセスするためのブラウザ URL と一致していることを確認してください。

4. プロバイダーに対する REST サービスがリストされたテーブル内の各行で、個々の REST サービスを有効化する場合は「**使用可能**」チェック・ボックスを選択し、個々の REST サービスを無効化する場合は「**使用可能**」チェック・ボックスをクリアします。
5. 有効化する個々のサービスについて、「**説明**」列にわかりやすい説明を入力します。
6. 「**OK**」をクリックして、サービスへの変更をコミットします。

次のタスク

- Business Space を構成します。
- データベース表を構成します (リモート・データベースまたはネットワーク・デプロイメント環境を使用する場合)。
- REST サービス・エンドポイントを登録します。
- サービス・エンドポイントのインスタンスが複数ある場合 (例えば 2 つのクラスターで作業を分割しており、ウィジェットで各クラスターのデータを表示する場合)、追加のクラスターごとに手動で追加のウィジェットを使用可能にする必要があります。
- Business Space のセキュリティーをセットアップします。

サーバー、クラスター、またはコンポーネント用の REST サービスの構成:

サーバー、クラスター、またはコンポーネント用の Representational State Transfer (REST) サービスを構成するには、REST サービスの管理コンソール・ページを使用します。

始める前に

このタスクを実行する前に、WebSphere Business Process Management 製品をインストールしておく必要があります。

このタスクについて

REST サービスのデプロイメントは、スタンドアロン・サーバー・プロファイルで自動的に実行されます。他の構成タイプの場合は、REST サービスの管理コンソール・ページを使用すると、サーバー、クラスター、またはコンポーネント用のサービスを構成することができます。

また、REST エンドポイントは Business Space に登録する必要があります。すると、Business Space がウィジェットをこれらのエンドポイントに関連付け、ウィジェットがパレットに表示されて使用できるようになります。

同じ REST サービス・エンドポイントの複数のインスタンスを構成する場合は、エンドポイント・ファイルとウィジェット・メタデータ・ファイルを手動で編集する必要があります。詳しくは、『Business Space ウィジェットが複数のエンドポイントを処理できるようにする』を参照してください。

手順

1. 次のいずれかをクリックします。

- サーバー上の REST サービスの場合、「サーバー」 → 「サーバー・タイプ」 → 「WebSphere Application Server」 → 「name_of_server」 → 「ビジネス・インテグレーション」 → 「REST サービス」をクリックします。
- クラスター上の REST サービスの場合、「サーバー」 → 「クラスター」 → 「Websphere Application Server クラスター (WebSphere application server clusters)」 → 「name_of_cluster」 → 「ビジネス・インテグレーション」 → 「REST サービス」をクリックします。
- サーバー上のビジネス・プロセス REST サービスの場合は、「サーバー」 → 「サーバー・タイプ」 → 「WebSphere Application Server」 → 「name_of_server」 → 「ビジネス・インテグレーション」 → 「Business Flow Manager」 → 「REST サービス」をクリックします。
- クラスター上のビジネス・プロセス REST サービスの場合は、「サーバー」 → 「クラスター」 → 「Websphere Application Server クラスター」 → 「name_of_cluster」 → 「ビジネス・インテグレーション」 → 「Business Flow Manager」 → 「REST サービス」をクリックします。
- サーバー上のヒューマン・タスク REST サービスの場合は、「サーバー」 → 「サーバー・タイプ」 → 「WebSphere Application Server」 → 「name_of_server」 → 「ビジネス・インテグレーション」 → 「Human Task Manager」 → 「REST サービス」をクリックします。
- クラスター上のヒューマン・タスク REST サービスの場合は、「サーバー」 → 「クラスター」 → 「Websphere Application Server クラスター」 → 「name_of_cluster」 → 「ビジネス・インテグレーション」 → 「Human Task Manager」 → 「REST サービス」をクリックします。

「REST サービス」ページが表示され、ご使用の製品またはコンポーネント (Business Flow Manager または Human Task Manager) とともに使用する Business Space ウィジェット用に構成できるすべてのデフォルト REST サービスが表示されます。REST サービスが既に構成されている場合は、メッセージが表示されます。

2. Business Space で使用するすべての REST サービスについてのプロトコルをリストから選択します。「https://」または「http://」のいずれかを選択してから、「負荷分散環境でのホスト名または仮想ホスト」フィールドと「ポート」フィールドに入力して、絶対 URL パスを構成します。完全修飾ホスト名を使用します。

REST 要求をアプリケーション・サーバーに直接送信する場合は、アプリケーション・サーバーのホスト名とポートを入力します。REST 要求を、1 台以上のアプリケーション・サーバーの前に配置されたプロキシ・サーバーまたは HTTP サーバーに送信する場合は、セットアップ済みのプロキシ・サーバーまたは HTTP サーバーのホスト名とポートを入力します。ブラウザーと、Business Space および REST サービスの間に、ロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーがある環境では、プロトコル、ホスト、およびポートの指定内容が、Business Space にアクセスするためのブラウザー URL と一致していることを確認してください。

3. REST サービス・テーブル内の各行で、個々の REST サービスを有効化する場合は「使用可能」チェック・ボックスを選択し、個々の REST サービスを無効化する場合は「使用可能」チェック・ボックスをクリアします。

4. REST サービスの表で、それぞれの REST サービスの意味のある説明を「説明」フィールドに入力します。
5. 「OK」をクリックして、サービスへの変更をコミットします。

REST サービス構成を後で変更する場合は、「REST サービス」ページに戻るか、REST サービス・エンドポイントの構成を管理するための他の管理コンソール・ページを使用します。「REST サービス・プロバイダー」ページでは、構成するサービス・プロバイダーを選択できます。「サービス」→「REST サービス」からアクセスする「REST サービス」ページでは、現在の環境内での REST サービスをすべて構成することができます。

次のタスク

- Business Space を構成します。
- データベース表を構成します (リモート・データベースまたはネットワーク・デプロイメント環境を使用する場合)。
- REST サービス・エンドポイントを登録します。
- サービス・エンドポイントのインスタンスが複数ある場合 (例えば 2 つのクラスターで作業を分割しており、ウィジェットで各クラスターのデータを表示する場合)、追加のクラスターごとに手動で追加のウィジェットを使用可能にする必要があります。
- Business Space のセキュリティーをセットアップします。

コマンド行を使用した REST サービスの構成:

ご使用の製品で必要となるすべてのウィジェットは、WebSphere が提供する Business Space と共にインストールされます。チームが Business Space 内でウィジェットを使用するには、その前にウィジェットの Representational State Transfer (REST) サービスを構成し、使用可能にして、Business Space に登録しておく必要があります。REST サービス管理コンソールのページを使用しない場合、updateRESTGatewayService コマンドを使用します。

始める前に

このタスクを実行する前に、WebSphere Business Process Management 製品をインストールしておく必要があります。

WebSphere Process Server で、Business Process Choreographer を構成済みの場合は、ヒューマン・タスク管理 REST サービスが既に構成されています。ただし、他の REST サービスのサービス・プロバイダーとなる REST サービス・ゲートウェイ・アプリケーションは、updateRESTGatewayService コマンドを使用して構成する必要があります。

このタスクについて

REST サービスのデプロイメントは、スタンドアロン・サーバー・プロファイルで自動的に実行されます。他のタイプの構成では、REST サービス管理コンソールのページまたは updateRESTGatewayService コマンドによって、Business Space 内の製品のすべてのウィジェットに対して REST アプリケーション・プログラミング・インターフェース (API) のサービスを構成することができます。

また、REST エンドポイントは Business Space に登録する必要があります。すると、Business Space がウィジェットをこれらのエンドポイントに関連付け、ウィジェットがパレットに表示されて使用できるようになります。

同じ REST サービス・エンドポイントの複数のインスタンスを構成する場合は、エンドポイント・ファイルとウィジェット・メタデータ・ファイルを手動で編集する必要があります。詳しくは、『複数のエンドポイント用に Business Space ウィジェットを使用可能にする』を参照してください。

手順

1. コマンド・ウィンドウをオープンします。

`wsadmin` コマンドは、スタンドアロン・サーバー環境の場合は `profile_root/bin` ディレクトリにあり、Network Deployment 環境の場合は `deployment_manager_profile_root/bin` ディレクトリにあります。

2. コマンド・プロンプトから `wsadmin` コマンドを入力して `wsadmin` 環境を開始します。
3. `updateRESTGatewayService` コマンドを使用して、クラスターまたはサーバーとノードを指定する REST サービスを構成します。 `-enable` パラメーターはオプションです。このパラメーターを指定しない場合は、デフォルト値の `true` に設定されます。
4. `save` コマンドを実行します。

例

次の例では、`Jython` を使用して、`updateRESTGatewayService` コマンドを実行し、変更を保存しています。クラスター上に REST サービスを構成します。

```
AdminTask.updateRESTGatewayService(['-clusterName  
cluster_name'])  
AdminConfig.save()
```

`Jacl` を使用した例を以下に示します。

```
$AdminTask updateRESTGatewayService {-clusterName  
cluster_name}  
$AdminConfig save
```

次のタスク

- Business Space を構成します。
- データベース表を構成します (リモート・データベースまたはネットワーク・デプロイメント環境を使用する場合)。
- REST サービス・エンドポイントを登録します。
- サービス・エンドポイントのインスタンスが複数ある場合 (例えば 2 つのクラスターで作業を分割しており、ウィジェットで各クラスターのデータを表示する場合など)、追加のクラスターごとに手動で追加のウィジェットを使用可能にする必要があります。
- Business Space のセキュリティーをセットアップします。

管理コンソールでの Business Space の構成および REST エンドポイントの登録

管理コンソールを使用して、WebSphere が提供する Business Space をインストールして構成することができます。

始める前に

タスクを開始する前に、以下のタスクを完了しておく必要があります。

- 製品ソフトウェアをインストールしてプロファイルを作成します。製品をインストールすると、Business Space のファイルは、セットアップしたプロファイルに対応するインストール済み環境に組み込まれます。プロファイルで明示的に Business Space を構成するまでは、プロファイルは Business Space 用に構成されません。
- ヒューマン・タスク管理ウィジェットを必要とする WebSphere Process Server ランタイム環境の Business Process Choreographer を構成します。詳しくは、WebSphere Process Server の資料の『Business Process Choreographer の構成』を参照してください。
- Business Space 用に機密保護機能のある環境をセットアップする場合は、セキュリティを使用可能にします。
- Representational State Transfer (REST) サービスを構成します。スタンドアロン・サーバー環境を使用しているか、または「デプロイメント環境構成」ウィザードを使用してランタイム環境を構成している場合、REST サービス・エンドポイントは自動的に構成されて使用可能になります。その他の環境については、REST サービス管理コンソールのページを使用して REST サービスを構成します。Business Space でウィジェットを使用可能にする場合は、それらのウィジェットに対する REST サービスを構成する必要があります。「ビジネス・スペース構成」管理コンソール・ページで REST エンドポイントを登録して、Business Space がウィジェットをエンドポイントに関連付け、ウィジェットがパレットに表示されて使用できるようにします。
- 製品のデータ・ソース以外のデータ・ソースを使用して、サーバーまたはクラスターに Business Space を構成する場合は、管理コンソールを使用して Business Space を構成する前に、jdbc/mashupDS の正しい JNDI 名を指定して、サーバーまたはクラスター・スコープにデータ・ソースを作成します。
- Oracle の場合、製品データベースで使用されるものとは別のスキーマを Business Space テーブルに使用するには、「Business Space 構成」ページを開く前に、以下のステップを実行してデータ・ソースを手動で作成します。
 - データベース製品ソフトウェアを使用してスキーマを作成します。
 - 管理コンソールを使用して JDBC プロバイダーを構成します。
 - 管理コンソールを使用して、JNDI 名が jdbc/mashupDS のデータ・ソースを、ご使用の環境に応じてサーバー・スコープまたはクラスター・スコープで作成します。
 - 管理コンソールを使用して認証別名を作成します。作成したスキーマにユーザー名を設定し、使用する Oracle のセットアップに応じて認証を設定します。
 - データ・ソースの認証別名を設定します。

このタスクについて

デプロイメント環境やその他の拡張プロファイル構成を使用する場合は、管理コンソールを使用して、Business Space をランタイム環境で稼働するよう設定する必要があります。Business Space は、セットアップしたプロファイルで稼働するアプリケーションのビジネス・ユーザー向けの、ブラウザー・ベースのグラフィカル・ユーザー・インターフェースです。Business Space では、管理者およびアプリケーション・ユーザーは、WebSphere Business Process Management ポートフォリオの製品からコンテンツをカスタマイズできます。

手順

1. 管理コンソールが稼働していることを確認します。
2. ナビゲーション・ペインで、「サーバー」 → 「サーバー・タイプ (Server Types)」 → 「WebSphere アプリケーション・サーバー (WebSphere application servers)」または「サーバー」 → 「クラスター」 → 「WebSphere Application Server クラスター (WebSphere application server clusters)」をクリックします。
3. サーバー・ターゲットまたはクラスター・ターゲットの名前を選択します。
4. 「構成」ページで、「ビジネス・インテグレーション」の下の「ビジネス・スペース構成」をクリックします。「Business Space の構成」ページが表示されます。既にBusiness Space が構成されている場合は、このページが表示されてもフィールドを編集することはできません。
5. 「ビジネス・スペース・サービスのインストール」チェック・ボックスを選択します。
6. 「データベース・スキーマ名」のボックスに、Business Space データベースで使用するデータベース・スキーマの名前を入力します。

注: Oracle の場合、スキーマはデータ・ソースの認証別名に設定されたユーザー名と同じです。

7. 「既存のビジネス・スペース・データ・ソース」フィールドでデータ・ソースが指定されていない場合は、「以下を使用して、ビジネス・スペース・データ・ソースを作成:」に移動して、Business Space で使用するデータベースに接続するデータ・ソースを選択します。

「以下を使用して、ビジネス・スペース・データ・ソースを作成:」の下でデータ・ソースを指定すると、選択したデータ・ソース上でモデル化された、JNDI 名が jdbc/mashupDS の Business Space 用のデータ・ソースが作成されます。

Business Space のデータ・ソースは、製品のデータ・ソースが別のサーバーまたはクラスターにあるとしても、Business Space を構成しているサーバーまたはクラスター上に作成されます。

注: 使用したい既存のデータ・ソースがリストにない場合は、「Business Space の構成」ページをキャンセルして使用したいデータベースおよびデータ・ソースを設定し、「Business Space の構成」ページを再開して構成を完了する必要があります。詳しくは、『始める前に』のセクションを参照してください。

8. 「OK」をクリックします。

9. Business Space で使用する各ウィジェットのための、システム Representational State Transfer (REST) エンドポイントに対する適切なデプロイメント・ターゲット (クラスターまたはサーバー) を登録するには、「**REST サービス・エンドポイント登録**」をクリックします。REST サービス・エンドポイント・タイプに対して選択するターゲットによって、一部のウィジェットに表示されるデータの有効範囲を設定することができます。あるいは、パフォーマンスまたは可用性を向上させるために、特定のクラスターまたはサーバーを選択してもよいでしょう。ターゲットを指定しない場合、このタイプの REST エンドポイントは Business Space に登録されず、このタイプの REST サービス・エンドポイントが必要なすべてのウィジェットは Business Space に表示されません。
10. 構成を保管します。
11. デプロイメント環境またはクラスターを始動する前に、Business Space のデータベース表を構成するスクリプトを実行します。このスクリプトは、構成が完了したときに生成されました。詳しくは、『Business Space のデータベース表の構成』を参照してください。

次のタスク

注: Oracle を使用している場合、Business Space データ・ソースの認証別名のパスワードは、Business Space のスキーマ名と同じに設定されます。スキーマのデフォルト値は `IBMBUSSP` です。Business Space の構成時に、管理コンソールまたはコマンド行で別のスキーマを指定できます。その場合、デフォルトのパスワードは、指定するスキーマと同じです。Business Space ユーザー名に別のパスワードを使用する場合は、管理コンソールを使用して、JDBC リソースを更新する必要があります。データ・ソース `jdbc/mashupsDS` を検索します。Business Space スキーマ名のパスワードと同じようになるように、認証別名の値を変更します。変更内容を保存して、サーバーを再始動します。

注: Business Space は、プロキシ・コンポーネントを使用して REST サービスに接続します。REST サービスの反応がない場合、REST サービス・サーバーのパフォーマンスに基づいて、Business Space から REST サービスへの接続タイムアウト設定を更新する必要があります。REST サービス接続がタイムアウトになる場合は、以下の設定を更新します。デフォルトで、`socket-timeout` 値は 30 秒に設定されています。この値を状況に適した値に変更します。

1. ファイル `profile_root/BusinessSpace/node_name/server_name/mm.runtime.prof/config/proxy-config.xml`を開きます。
2. `socket-timeout` の `proxy:value` を変更します。時間はミリ秒で指定します。

```
<proxy:meta-data>
  <proxy:name>socket-timeout</proxy:name>
  <proxy:value>30000</proxy:value>
</proxy:meta-data>
```
3. `wsadmin` スクリプト・クライアントを使用して、`updateBlobConfig` コマンドを実行します。その際には、`-serverName` および `-nodeName` パラメーター (スタンドアロン・サーバーの場合)、または `-clusterName` パラメーター (クラスターの場合) を指定すると共に、`-propertyFileName` パラメーターに `proxy-config.xml` ファイルのパスを値として指定し、`-prefix` パラメーターに値 `Mashups_` を指定します。

4. 管理コンソールから `mm_was_node_server` アプリケーションを再始動するか、サーバー・アプリケーション全体を再始動します。

コマンド行を使用したBusiness Space の構成

`wsadmin` コマンドを使用して、WebSphere が提供する Business Space をセットアップおよび構成できます。 `wsadmin` コマンドを使用して、管理コンソールで実行できるのと同じ Business Space の構成を実行できます。

始める前に

タスクを開始する前に、以下のタスクを完了しておく必要があります。

- 製品ソフトウェアをインストールしてプロファイルを作成します。製品をインストールすると、Business Space のファイルは、セットアップしたプロファイルに対応するインストール済み環境に組み込まれます。プロファイルで明示的に Business Space を構成するまでは、プロファイルは Business Space 用に構成されません。
- タスクの管理ウィジェットとワークフロー・ウィジェットを必要とする WebSphere Process Server ランタイム環境の Business Process Choreographer を構成します。詳しくは、WebSphere Process Server の資料の『Business Process Choreographer の構成』を参照してください。
- Business Space 用に機密保護機能のある環境をセットアップする場合は、セキュリティを使用可能にします。
- Representational State Transfer (REST) サービスを構成します。スタンドアロン・サーバー環境を使用しているか、または「デプロイメント環境構成」ウィザードを使用してランタイム環境を構成している場合、REST サービス・エンドポイントは自動的に構成されて使用可能になります。その他の環境については、REST サービス管理コンソールのページを使用して REST サービスを構成します。Business Space でウィジェットを使用可能にする場合は、それらのウィジェットに対する REST サービス・エンドポイントを構成する必要があります。REST エンドポイントは、Business Space がウィジェットをエンドポイントに関連付け、ウィジェットがパレットに表示されて使用できるようにするために、登録する必要があります。
- 製品のデータ・ソース以外のデータ・ソースを使用して、サーバーまたはクラスターに Business Space を構成する場合は、Business Space を構成する前 (`configureBusinessSpace` コマンドを実行する前) に、正しい JNDI 名である `jdbc/mashupDS` を指定して、サーバーまたはクラスター・スコープにデータ・ソースを作成します。
- Oracle の場合、製品データベースで使用されるスキーマとは異なるスキーマを Business Space テーブルに使用するには、Business Space をインストールおよび構成するためのコマンドをこの後の手順で実行する前に、以下のステップを実行してデータ・ソースを手動で作成します。
 - 管理コンソールを使用して JDBC プロバイダーを構成します。
 - 管理コンソールを使用して、JNDI 名が `jdbc/mashupDS` のデータ・ソースを、ご使用の環境に応じてサーバー・スコープまたはクラスター・スコープで作成します。

このタスクについて

管理コンソールを使用して Business Space を構成する代わりにスクリプトを作成する場合は、コマンド行を使用して Business Space を構成できます。

Business Space が既に構成されているかどうか不明な場合は、`getBusinessSpaceDeployStatus` コマンドを実行することで、サーバー、クラスター、またはセルで Business Space が構成されているかどうかを確認できます。このコマンドについて詳しくは、『`getBusinessSpaceDeployStatus` コマンド』を参照してください。

手順

1. コマンド・ウィンドウをオープンします。

`wsadmin` コマンドは、スタンドアロン・サーバー環境の場合は `profile_root/bin` ディレクトリにあり、Network Deployment 環境の場合は `deployment_manager_profile_root/bin` ディレクトリにあります。

2. コマンド・プロンプトから `wsadmin` コマンドを入力して `wsadmin` 環境を開始します。
3. `installBusinessSpace` コマンドを使用して、Business Space のエンタープライズ・アーカイブ (EAR) ファイルをランタイム環境にインストールします。
4. `configureBusinessSpace` コマンドを使用して Business Space 用のデータ・ソースを構成し、データベース表を構成するスクリプトを `profile_root/dbscripts/BusinessSpace/node_name_server_name/database_type/database_name` (スタンドアロン・サーバーの場合) または `profile_root/dbscripts/BusinessSpace/cluster_name/database_type/database_name` (クラスターの場合) にコピーします。データベース表を構成するスクリプトを実行する必要があります。スクリプトについて詳しくは、『Business Space のデータベース表の構成』を参照してください。

データベース構成にデータベース設計ファイルを使用する場合は、`configureBusinessSpace` コマンドを実行する際に、**`-bspacedbDesign`** パラメーターを使用してそのファイルを指定できます。

5. それぞれのコマンドの実行後に、`AdminConfig.save()` (Jython) または `$AdminConfig save (Jacl)` を実行します。
6. デプロイメント環境またはクラスターを始動する前に、Business Space のデータベース表を構成するスクリプトを実行します。詳しくは、『Business Space のデータベース表の構成』を参照してください。

タスクの結果

Business Space を構成すると、セットアップされたプロファイルで稼働するアプリケーションのビジネス・ユーザー向けに、ブラウザー・ベースのグラフィカル・ユーザー・インターフェースがセットアップされます。Business Space では、管理者およびアプリケーション・ユーザーは、WebSphere Business Process Management ポートフォリオの製品からコンテンツをカスタマイズできます。

例

以下の例では、Jython を使用して `installBusinessSpace` コマンドおよび `configureBusinessSpace` コマンドを実行することで、EAR ファイルをクラスターにインストールし、クラスターで Business Space のデータ・ソースを構成します。この例では、複数の製品がインストールされている場合に Business Space で使用するスキーマおよび製品データベースを指定します。WebSphere Process Server と WebSphere Business Monitor の両方がインストールされている場合、この例では WebSphere Process Server データ・ソースのプロパティを使用して Business Space データ・ソースを作成します。

```
AdminTask.installBusinessSpace('[-clusterName myCluster -save true]')
```

```
AdminTask.configureBusinessSpace('[-clusterName myCluster -schemaName mySchema -productTypeForDatasource WPS -save true]')
```

Jacl を使用した例を以下に示します。

```
$AdminTask installBusinessSpace {-clusterName myCluster -save true}
```

```
$AdminTask configureBusinessSpace {-clusterName myCluster -schemaName mySchema -productTypeForDatasource WPS -save true}
```

次のタスク

注: Oracle を使用している場合、Business Space データ・ソースの認証別名のパスワードは、Business Space のスキーマ名と同じに設定されます。スキーマのデフォルト値は `IBMBUSSP` です。Business Space の構成時に、管理コンソールまたはコマンド行で別のスキーマを指定できます。その場合、デフォルトのパスワードは、指定するスキーマと同じです。Business Space ユーザー名に別のパスワードを使用する場合は、管理コンソールを使用して、JDBC リソースを更新する必要があります。データ・ソース `jdbc/mashupsDS` を検索します。Business Space スキーマ名のパスワードと同じようになるように、認証別名の値を変更します。変更内容を保存して、サーバーを再始動します。

ランタイム環境で Business Space を使用可能にするには、コマンド行で Business Space を構成した後、次の手順を実行する必要があります。

- `registerRESTserviceEndpoint` コマンドを使用してエンドポイントを登録します。
- チームが使用する Business Space とウィジェットで使用する必要のあるセキュリティーをセットアップします。詳しくは、『Business Space のセキュリティーのセットアップ』を参照してください。

注: Business Space は、プロキシ・コンポーネントを使用して REST サービスに接続します。REST サービスの反応がない場合、REST サービス・サーバーのパフォーマンスに基づいて、Business Space から REST サービスへの接続タイムアウト設定を更新する必要があります。REST サービス接続がタイムアウトになる場合は、以下の設定を更新します。デフォルトで、`socket-timeout` 値は 30 秒に設定されています。この値を状況に適した値に変更します。

1. ファイル `profile_root/BusinessSpace/node_name/server_name/mm.runtime.prof/config/proxy-config.xml` を開きます。

2. socket-timeout の proxy:value を変更します。時間はミリ秒で指定します。

```
<proxy:meta-data>
  <proxy:name>socket-timeout</proxy:name>
  <proxy:value>30000</proxy:value>
</proxy:meta-data>
```

3. wsadmin スクリプト・クライアントを使用して、updateBlobConfig コマンドを実行します。その際には、**-serverName** および **-nodeName** パラメーター (スタンドアロン・サーバーの場合)、または **-clusterName** パラメーター (クラスターの場合) を指定すると共に、**-propertyFileName** パラメーターに proxy-config.xml ファイルのパスを値として指定し、**-prefix** パラメーターに値 Mashups_ を指定します。
4. 管理コンソールから mm_was_node_server アプリケーションを再始動するか、サーバー・アプリケーション全体を再始動します。

Business Space のデータベース表の構成

WebSphere が提供する Business Space 用のデータベース表は、インストール・プログラムによって生成されるスクリプトを使用して、リモート・データベース・サーバーに手でインストールすることができます。デプロイメント環境を使用する場合、またはデータベースがリモートの場合は、Business Space の構成後にこれらのテーブルをインストールする必要があります。

始める前に

このタスクを完了する前に、以下のタスクを完了しておく必要があります。

- 製品のインストール。
- プロファイルの作成および Business Space 用のサーバーまたはクラスターの構成。
- Oracle: データベースの作成。
- Microsoft SQL Server: SQL Server インスタンス認証の設定。SQL Server JDBC ドライバーは、混合認証モードのみをサポートします。このため、SQL Server インスタンスの作成時には、認証を「**SQL Server および Windows (SQL Server and Windows)**」に設定する必要があります。
- Business Space を使用するアプリケーション・サーバーが停止していることの確認。

Monitor **Process Server / ESB** DB2 for z/OS を使用しており、必要なリソースがまだコア製品インストールの一部としてセットアップされていない場合は、このタスクの開始前に以下の追加操作を実行してください。

- 一時データベースおよび一時テーブル・スペースを作成し、スクロール可能カーソルを処理するための宣言済み一時テーブルを格納する。
- 専用 STOGROUP を作成し、Business Space データを格納する。

Monitor **Process Server / ESB** DB2 for z/OS で、別のストレージ・グループを使用する場合 (例えば、共通データベースと同じデータベースおよびストレージ・グループに Business Space データベース表を追加したくない場合)

は、createStorageGroup.sql スクリプトを編集し、そのスクリプトを Business Space の構成後、および Business Space データベース表の構成前に実行する必要があります。

- createStorageGroup.sql ファイルを編集する。このファイルは `profile_root/dbscripts/BusinessSpace/node_name_server_name/database_type/database_name` (スタンドアロン・サーバーの場合) または `profile_root/dbscripts/BusinessSpace/cluster_name/database_type/database_name` (クラスターの場合) にあります。ここで、`database_type` は DB2zOSV8 または DB2zOSV9 です。
- VCAT の値を、@VCAT@ から、使用するストレージ・グループの統合カタログ機能のカタログの名前または別名に変更する。

DB2 V9.x を使用していて、パフォーマンスを改善したい場合は、createTableSpace.sql ファイルを編集します。createTableSpace.sql ファイルは、`profile_root/dbscripts/BusinessSpace/node_name_server_name/database_type/database_name` (スタンドアロン・サーバーの場合) または `profile_root/dbscripts/BusinessSpace/cluster_name/database_type/database_name` (クラスターの場合) にあります。

- IMMEDIATE SIZE 8000 PAGESIZE 32K を IMMEDIATE SIZE 8000 AUTOMATIC PAGESIZE 32K に変更します。
- CREATE SYSTEM TEMPORARY TABLESPACE @TSDIR@TMTP と CREATE REGULAR TABLESPACE @TSDIR@REGTP の両方の下にある EXTENTSIZE 16 の後ろに、PREFETCHSIZE AUTOMATIC という行を追加します。

このタスクについて

configBusinessSpaceDB スクリプトは、特定のデータベースを使用して Business Space 用のテーブルをセットアップします。特定のデータベースではなく既存のデータベース上にテーブルを作成する場合は、使用している製品で createDBTables スクリプトを使用します。

手順

1. テーブルを作成できる十分な権限を持つユーザー ID を使用していることを確認します。
2. 最後に構成したプロファイル内のスクリプトを探し、データベースと同じシステム上の任意のロケーションに保存します。
 - DB2 for z/OS を除くすべてのデータベースの場合、configBusinessSpaceDB.bat スクリプトまたは configBusinessSpaceDB.sh スクリプトを探します。
 - **Process Server / ESB** WebSphere Process Server for z/OS および WebSphere Enterprise Service Bus for z/OS で、他のすべてのデータベース・オブジェクトと共に Business Space データベース表を構成する場合は、createDB.sh スクリプトを探します。
 - **Monitor** **Process Server / ESB** DB2 for z/OS で、createDB.sh スクリプトを実行しない場合は、Business Space のファイルを個別に実行する

必要があります。createStorageGroup.sql、createDatabase.sql、createTablespace.sql、createTables_BusinessSpace.sql、およびcreateTable.sql を探します。

デフォルトでは、このスクリプトは、スタンドアロン・サーバーの場合は `profile_root/dbscripts/BusinessSpace/node_name_server_name/database_type/database_name`、クラスターの場合は `profile_root/dbscripts/BusinessSpace/cluster_name/database_type/database_name` に存在します。更新されたスクリプト（プロファイル作成時に入力した情報が含まれている）は、最後に構成したサーバーまたはクラスターのプロファイル内に存在します。「デプロイメント環境構成」ウィザードを使用した場合、スクリプトはデプロイメント・マネージャー・プロファイルに格納されます。リモート・データベースを構成する場合は、製品がインストールされているシステムからリモート・システム上にスクリプトをコピーしてください。

3. **Process Server / ESB** WebSphere Process Server for z/OS および WebSphere Enterprise Service Bus for z/OS の場合: DB2 for z/OS を構成する場合は、createDB.sh スクリプトを使用して、Business Space データベース表を、1 つのデータベース内のその他のすべてのデータベース・オブジェクトで構成することができます。詳しくは、WebSphere Process Server for z/OS の資料の『createDB.sh スクリプトによる DB2 データベース・オブジェクトの作成』を参照してください。
4. コマンド・プロンプトを開き、使用するプラットフォームに基づいて以下のいずれかのコマンドを実行します。

Derby の場合は、デフォルトの場所（スタンドアロン・サーバーの場合、`profile_root/dbscripts/BusinessSpace/node_name_server_name/database_type/database_name`）でコマンドを実行してください。

その他のデータベース・タイプの場合は、バッチ・ファイルおよびスクリプトが含まれているフォルダーを、データベースと同じロケーションにコピーし、そこでコマンドを実行します。ユーザー ID は、該当するデータベース・タイプ用のコマンド行インタープリターに対するアクセス権限およびコマンドを実行する権限を持っている必要があります。

- **Linux** **UNIX** **Linux、UNIX、および z/OS プラットフォームの場合:**
configBusinessSpaceDB.sh
- **Windows** **Windows プラットフォームの場合:** configBusinessSpaceDB.bat

Derby、DB2、SQL Server で、既存のデータベースを使用せずに別のデータベースを作成する場合は、オプションの **-createDB** パラメーターを使用します。

注: SQL Server を使用する場合は、データベース・スクリプトの実行後、systemout.log ファイルに「... 警告! キーの最大長は 900 バイトです (Warning! The maximum key length is 900 bytes) ...」という警告ステートメントが記録されます。フェデレーテッド・リポジトリをユーザー・レジストリーとして使用している場合は、この警告を無視できます。スタンドアロン LDAP レジストリーを使用している場合は、組織内のすべてのユーザー識別名 (DN) 項目が、131 文字の制限より少ないことを確認してください。いずれかのユーザー

DN 項目が 131 文字以上である場合は、ユーザー・アカウント・レジストリーをフェデレーテッド・リポジトリ・オプションに変更する必要があります。

z/OS の場合、以下のファイルを順番に実行します。

- createStorageGroup.sql
- createDatabase.sql
- createTablespace.sql
- createTables_BusinessSpace.sql
- createTable.sql

5. Linux UNIX Windows DB2 および DB2 for z/OS の場合は、次のコマンドを使用してコマンド行インターフェースを Business Space のデータベースにバインドします。

```
db2 connect to database_name
db2 bind DB2_installation_directory\%bnd%\db2cli.lst blocking all
grant public
db2 connect reset
```

各部の意味は、次のとおりです。

database_name は Business Space データベースの名前です

DB2_installation_directory は、DB2 がインストールされるディレクトリーです

次のタスク

- Business Space で使用できるようにしたいウィジェットのエンドポイントを更新します。
- Business Space と、チームが使用しているウィジェット用に、セキュリティーをセットアップします。

コマンド行を使用した Business Space ウィジェットの REST サービス・エンドポイントの登録

管理コンソールを使用して Business Space を構成する場合、Representational State Transfer (REST) エンドポイントを登録して、チームが Business Space 内でウィジェットを使用できるようにする必要があります。「ビジネス・スペースの構成」ページおよび「システム REST サービス・エンドポイント登録 (System REST service endpoint registration)」ページを使用して管理コンソール上でエンドポイントを登録しない場合、registerRESTServiceEndpoint コマンドを使用して登録できます。

始める前に

このタスクを完了する前に、以下のタスクを完了しておく必要があります。

- 製品のインストール。
- Business Space 内で使用するウィジェットのための REST サービスの構成。これは「REST サービス」管理コンソール・ページまたは updateRESTGatewayService コマンドを使用して行います。スタンドアロン・サーバー環境を使用しているか、または「デプロイメント環境構成」ウィザードを使用してランタイム環境を構成している場合、REST サービスは自動的に構成されて使用可能になります。

ビジネス・プロセスおよびヒューマン・タスクのための REST サービスの構成は、Business Process Choreographer および Human Task Manager コンテナを構成することによって行います。

- 「ビジネス・スペースの構成」管理コンソール・ページを使用するか、または `installBusinessSpace` コマンドおよび `configureBusinessSpace` コマンドを使用することによる Business Space の構成。
- データベース表の構成 (リモート・データベースまたはネットワーク・デプロイメント環境を使用する場合)。

このタスクについて

スタンドアロン・サーバー環境で管理コンソールまたはプロファイル管理ツールを使用して Business Space を構成している場合、または「デプロイメント環境構成」ウィザードを使用してランタイム環境を構成している場合、REST サービスは自動的に登録されます。これ以外の場合は、REST サービスを構成して登録する必要があります。

「システム REST サービス・エンドポイント登録 (System REST service endpoint registration)」管理コンソール・ページまたは `registerRESTServiceEndpoint` コマンドによって、Business Space 内の製品のすべてのウィジェットに対して REST サービスのエンドポイントを登録することができます。すると、Business Space が自動的にウィジェットをこれらのエンドポイントに関連付け、ウィジェットが Business Space パレットに表示されて使用できるようになります。

`registerRESTServiceEndpoint` コマンドでは、指定のプロバイダー、デプロイメント・ターゲット、またはセル内のすべての固有のエンドポイントについて、エンドポイントのセットを登録できます。このコマンドは、Business Space と同じセル内にある REST サービスのエンドポイントを登録します。

手順

1. コマンド・ウィンドウをオープンします。

`wsadmin` コマンドは、スタンドアロン・サーバー環境の場合は `profile_root/bin` ディレクトリーにあり、ネットワーク・デプロイメント環境の場合は `deployment_manager_profile_root/bin` ディレクトリーにあります。

2. コマンド・プロンプトから `wsadmin` コマンドを入力して `wsadmin` 環境を開始します。
3. `registerRESTServiceEndpoint` コマンドを使用して、ご使用の製品のすべてのウィジェットに対して REST サービスの Business Space エンドポイントを登録します。
4. 各コマンドの実行後に、`save` コマンドを実行します。

例

以下の例では、Jython を使用して `registerRESTServiceEndpoint` コマンドを実行した後、変更内容を保存します。ここでは、クラスター上で構成済みで使用可能なすべての REST サービスを Business Space に登録します。


```
AdminTask.registerRESTServiceEndpoint('[-clusterName
name_of_rest_services_cluster -businessSpaceClusterName
name_of_business_space_cluster]')
AdminConfig.save()
```

ここで、`name_of_rest_services_cluster` は REST サービスが構成されたクラスター名で、`name_of_business_space_cluster` は Business Space がデプロイされたクラスター名です。

次の例では Jacl を使用しています。

```
$AdminTask registerRESTServiceEndpoint
{-clusterName name_of_rest_services_cluster
-businessSpaceClusterName name_of_business_space_cluster}
$AdminConfig save
```

ここで、`name_of_rest_services_cluster` は REST サービスが構成されたクラスター名で、`name_of_business_space_cluster` は Business Space がデプロイされたクラスター名です。

appName、**webModuleName**、**type**、**version**、**nodeName**、**serverName**、および **clusterName** の各パラメーターはオプションです。

type、**appName**、および **webModuleName** の各パラメーターを指定しない場合、デプロイメント・ターゲットに構成されたすべての固有の REST サービス・エンドポイントが登録されます。

これらのどのパラメーターも指定しない場合、いずれかのデプロイメント・ターゲットに構成されているすべての固有の REST サービス・エンドポイントが登録されます。

次のタスク

Business Space は、プロキシ・コンポーネントを使用して REST サービスに接続します。REST サービスの反応がない場合、REST サービス・サーバーのパフォーマンスに基づいて、Business Space から REST サービスへの接続タイムアウト設定を更新する必要があります。REST サービス接続がタイムアウトになる場合は、以下の設定を更新します。デフォルトで、`socket-timeout` 値は 30 秒に設定されています。この値を状況に適した値に変更します。

1. ファイル `profile_root/BusinessSpace/node_name/server_name/mm.runtime.prof/config/proxy-config.xml` を開きます。
2. `socket-timeout` の `proxy:value` を変更します。時間はミリ秒で指定します。

```
<proxy:meta-data>
  <proxy:name>socket-timeout</proxy:name>
  <proxy:value>30000</proxy:value>
</proxy:meta-data>
```
3. `wsadmin` スクリプト・クライアントを使用して、`updateBlobConfig` コマンドを実行します。その際には、**-serverName** および **-nodeName** パラメーター (スタンドアロン・サーバーの場合)、または **-clusterName** パラメーター (クラスターの場合) を指定すると共に、**-propertyFileName** パラメーターに `proxy-config.xml` ファイルのパスを値として指定し、**-prefix** パラメーターに値 `Mashups_` を指定します。

4. 管理コンソールから `mm_was_node_server` アプリケーションを再始動するか、サーバー・アプリケーション全体を再始動します。

Business Space と連携するためのプロキシ・サーバーまたはロード・ balancer の構成

プロキシ・サーバーまたはロード・ balancer が存在する環境で Business Space を使用している場合は、Business Space およびウィジェットが正しく機能するように、ご使用の環境をセットアップする必要があります。

このタスクについて

Network Deployment 環境またはクラスター環境では、セキュリティ上の理由から、またはワークロード・ balancer を目的として、プロキシ・サーバーまたは HTTP サーバーをセットアップする場合があります。着信 HTTP 要求は、アプリケーション・サーバーに直接送信されるのではなく、プロキシ・サーバーに送信されます。このプロキシ・サーバーによって、処理を実行する複数のアプリケーション・サーバーの間で要求を分散することができます。

プロキシ・サーバーの代わりに (またはプロキシ・サーバーの前に)、IBM HTTP Server などのルーティング・サーバーを使用することができます。

重要: 複数のクラスター・メンバー間で HTTP 要求のワークロード・ balancer を行うには、プロキシ・サーバー (または代替ルーティング・サーバー) が必要です。プロキシ・サーバーによって、クライアントはこのトポロジー内のアプリケーションにアクセスできるようになります。

ブラウザと、Business Space サービスおよび REST サービスの間に、ロード・ balancer またはプロキシ・サーバーがある環境では、REST サービス・プロトコル、ホスト、およびポートの指定内容が、Business Space にアクセスするためのブラウザ URL と一致していることを確認してください。管理コンソールの REST サービス・プロバイダー・ページで、すべてのプロバイダー (Business Flow Manager や Human Task Manager など) のプロトコル、ホスト、およびポートが正しいことを確認してください。REST サービスの変更について詳しくは、『サービス・プロバイダーでの REST サービスの構成』を参照してください。

IBM HTTP Server を使用する場合は、追加のマッピング手順を実行して、モジュールが Web サーバーにマッピングされていること、およびホスト別名が構成されていることを確認する必要があります。

HTTP サーバーにリバース・プロキシ・セットアップを使用する場合は、Business Space およびウィジェットの URL をマップする必要があります。

IBM HTTP Server の Business Space 用の構成:

IBM HTTP Server を使用する場合は、ご使用の環境で Business Space が機能するように、追加のマッピング・ステップを完了する必要があります。

始める前に

Business Space と連携するように IBM HTTP Server を構成する前に、以下の手順を完了してください。

- IBM HTTP Server をインストールします。
- Secure Sockets Layer (SSL) が IBM HTTP Server で有効になっていることを確認します。
- IBM HTTP Server の Web サーバー定義が、アプリケーション・サーバーに追加されていることを確認します。

IBM HTTP Server プラグインのインストール中に、Web サーバー・マシンのインストール・プロセスによって、`configureWeb_server` スクリプトが生成されます。`configureWeb_server` スクリプトは、Web アプリケーション・モジュールを Web サーバーにマップするためのものです。したがって、このスクリプトは、デプロイメント環境の生成後に実行してください。

手順

1. モジュールが Web サーバーにマップされていることを確認します。 Business Space で必要となるアプリケーションごとに、選択されたターゲットの中に Web サーバーが含まれていることを確認します。
 - a. 管理ユーザーとして、管理コンソールにログインします。
 - b. 「アプリケーション」 → 「アプリケーション・タイプ」 → 「WebSphere エンタープライズ・アプリケーション」をクリックします。
 - c. 「エンタープライズ・アプリケーション」パネルで、アプリケーションの名前をクリックします。

以下のアプリケーションを確認します。 Business Space で使用する製品によっては、このリスト内のアプリケーションの一部またはすべてが揃っている可能性があります。

- **BPMAAdministrationWidgets_nodename_servername** (WebSphere Enterprise Service Bus および WebSphere Process Server の場合)
- **BusinessSpaceHelpEAR_nodename_servername** (すべての製品の場合)
- **BSpaceEAR_nodename_servername**(すべての製品の場合)
- **BSpaceWebformsEnabler_nodename_servername** (すべての製品の場合)
- **HumanTaskManagementWidgets_nodename_servername** (WebSphere Process Server および WebSphere Business Monitor の場合)
- **REST サービス・ゲートウェイ** (すべての製品の場合)
- **REST サービス・ゲートウェイ Dmgr** (WebSphere Enterprise Service Bus および WebSphere Process Server の場合)
- **mm.was_nodename_servername** (すべての製品の場合)
- **WBMDashboardWeb_nodename_servername** (WebSphere Business Monitor の場合)
- **wesbWidgets_nodename_servername** (WebSphere Enterprise Service Bus の場合)
- **widgets_busleader_nodename_servername** (WebSphere Business Compass の場合)
- **widgets_pubserver_nodename_servername** (WebSphere Business Compass の場合)

- **widgets_fabric_nodename_servername** (WebSphere Business Services Fabric の場合)
- d. アプリケーションごとに、「構成」タブの「モジュール」の下で「**モジュールの管理**」をクリックします。
 - e. アプリケーションの「モジュールの管理」ページで、選択されたターゲットの中に Web サーバーが含まれていることをモジュールごとに確認します。
 - 表の各モジュールの「サーバー」列を調べて、選択されたターゲットの中に Web サーバーが含まれていることをモジュールごとに確認します。例えば、`mm.was_nodename_servername` アプリケーションについては、「サーバー」列に表示される Web サーバー
WebSphere:cell=qaxs41Cell02,node=qaxs41Node03,server=httpserver
WebSphere:cell=qaxs41Cell02,cluster=Golden.WebApp を探します。
 - Web サーバーを追加する必要がある場合は、モジュールの名前の横にあるチェック・ボックスを選択します。次に、「クラスターおよびサーバー」リストで、Ctrl キーを使用して複数のターゲットを選択します。例えば、Web サーバーがアプリケーションにサービスを提供するようにするには、Ctrl キーを押しながら、アプリケーション・サーバー・クラスターと Web サーバーを一緒に選択します。変更を保存するには、「適用」、「OK」および「保存」をクリックします。
2. ホスト名の別名 `default_host` に、すべてのクラスター・メンバー、Web サーバー、またはプロキシ・サーバーの正しい情報が含まれていることを確認します。
 - a. 管理ユーザーとして、管理コンソールにログインします。
 - b. 「サーバー」 → 「サーバー・タイプ」 → 「**WebSphere Application Server**」をクリックします。
 - c. すべてのクラスター・メンバーについて、アプリケーション・サーバーの名前をクリックして、**WC_defaulthost** ポート名のポート番号を表示します。
 - 「通信」の下で、「ポート」を展開します。
 - ポート名 **WC_defaulthost** のポート番号を確認します。
 - d. 管理コンソールの左側のナビゲーション領域で、「環境」 → 「仮想ホスト」をクリックします。
 - e. 「**default_host**」の名前をクリックします。
 - f. 「追加プロパティ」で、「**ホスト別名**」をクリックします。
 - g. クラスター・メンバーのホスト名およびポート番号がリストに表示されていない場合は、「**新規**」をクリックして、欠落している項目をリストに追加します。ホスト名では、ワイルドカード文字 * (アスタリスク) がサポートされません。
 - h. 新規項目を追加する場合は、「保存」および「同期化」をクリックします。

リバース・プロキシ・サーバーのための Business Space URL のマッピング:

HTTP サーバーにリバース・プロキシがセットアップされている場合、Business Space と連携するように HTTP サーバーを構成するときに、Business Space とチームで使用するウィジェットの URL をマップする必要があります。

手順

1. HTTP サーバーの構成ファイルを編集します。
2. Business Space と、ランタイム・ソリューションでビジネス・ユーザーが使用するウィジェットのすべての URL をマップします。

一般的なBusiness Space フレームワーク (全製品) の URL:

- /BusinessSpace/*
- /mum/*
- /help/*
- /BSpaceWebformsProxy/*
- /themes/*

WebSphere Business Compass ウィジェットの追加 URL:

- /WBPublishingDRAFT/*
- /BusinessLeader/*
- /BusinessLeaderWidgets/*

WebSphere Business Services Fabric ウィジェットの追加 URL:

- /bpm/bslm/v1/*
- /bpm/glossary/v1/*
- /bpm/governance/v1/*
- /bpm/bvars/v1/var/*
- /rest/*

WebSphere Business Monitor ウィジェットの追加 URL:

- /BusinessDashboard/*
- /DashboardABX/*
- /monitorServerComponent/*
- /mobile/*
- /rest/*
- /AlphabloxServer/*
- /AlphabloxAdmin/*
- /AlphabloxTooling/*
- /BloxBuilder/*

WebSphere Enterprise Service Bus ウィジェットの追加 URL:

- /BSpaceWidgetsHM/*
- /rest/*
- /PolymorphicWidget/*
- /scaWidget/*
- /ServiceMonitorGraphWidget/*
- /StoreAndForward/*

WebSphere Process Server ウィジェットの追加 URL:

- /BspaceWidgetsHM/*
- /SecurityManagerWidgets/*
- /BspaceWidgetsBCM/*
- /rest/*
- /PolymorphicWidget/*
- /scaWidget/*
- /ServiceMonitorGraphWidget/*
- /StoreAndForward/*

クロスセル環境に対する Business Space ウィジェットの有効化

Business Space が、Representational State Transfer (REST) サービスが稼働しているセルと異なるセルで稼働している場合、またはウィジェットがBusiness Space と異なるセル上にある場合、エンドポイント・ファイルを手動で編集する必要があります。

始める前に

このタスクを完了する前に、以下のタスクを完了しておく必要があります。

- 製品のインストール。
- デプロイメント・ターゲット (サーバーまたはクラスター) 上の作成済みプロファイル、および構成済みの、 Business Space 。
- データベース表の構成 (リモート・データベースまたはデプロイメント環境を使用する場合)。
- WebSphere Business Compass の場合は、最初に WebSphere Business Compass データベースの Endpoints 表を更新します。Server_Name 列にはBusiness Space のインターネット・プロトコルを設定し、Port 列にはBusiness Space のポートを設定します。

このタスクについて

ご使用の製品で必要となるすべてのウィジェットは Business Space と共にインストールされますが、チームがBusiness Space でウィジェットを使用するには、ウィジェットで必要となるエンドポイントを構成および登録する必要があります。管理コンソール・ページを使用して、エンドポイントを構成および登録できます。しかし、ご使用の製品および REST サービスが Business Space とは異なるセルにインストールされている場合は、REST サービス・エンドポイント・ファイルを編集して、Business Space で REST サービスにアクセスし、ウィジェットが適切に動作するようにする必要があります。

インストール済みの製品、およびBusiness Space で使用しているウィジェットに基づいて、以下のエンドポイント・ファイルの 1 つ以上を編集します。

- WebSphere Business Compass: pubserverEndpoints.xml および busLeaderEndpoints.xml
- WebSphere Business Monitor: monitorEndpoints.xml
- WebSphere Business Monitor with Alphablox: monitorABXEndpoints.xml

- WebSphere Business Services Fabric: fabricEndpoints.xml
- WebSphere Enterprise Service Bus: wesbWidgetEndpoints.xml (メディエーション・ポリシーの管理ウィジェット、サービス・ブラウザー・ウィジェット、およびプロキシー・ゲートウェイ・ウィジェットの場 合)、 bpmAdministrationEndpoints.xml (管理ウィジェットの場 合)
- WebSphere Process Server: wpsEndpoints.xml、 bpmAdministrationEndpoints.xml (管理ウィジェットの場 合)、 wesbWidgetEndpoints.xml (メディエーション・ポ リシーの管理ウィジェット、サービス・ブラウザー・ウィジェット、およびプロキ シー・ゲートウェイ・ウィジェットの場 合)、 HumanTaskManagementEndpoints.xml (ビジネス・プロセスおよびヒューマン・タスクの場 合)、 bspaceWFSEndpoints.xml (Lotus Webform Server をヒューマン・タスク管理ウィジェットとともに使用する 場 合)
- すべての製品: wsumEndpoint.xml (ユーザー・メンバーシップの場 合)

管理者は、以下のステップを実行して、エンドポイントを登録し、ウィジェットを 使用可能にすることができます。

手順

1. ウィジェットがインストールされたセルから、製品インストール時にBusiness Space が構成されたセルへ、ウィジェットをコピーします。 ウィジェットは、 `install_root%BusinessSpace%widgets` ディレクトリーにあり、一時フォルダー にコピーできます。
2. `installBusinessSpaceWidgets` コマンドを実行して、 `install_root%BusinessSpace%widgets` ディレクトリーにある、指定されたウイ ジェットをインストール、デプロイ、および登録します。
 - a. ターゲット・サーバー (スタンドアロン・サーバー環境の場合) またはデプロ イメント・マネージャー (Network Deployment 環境の場合) が稼働している ことを確認し、そのプロファイルでコマンド・ウィンドウを開きます。

wsadmin コマンドは、 `profiles%profile_name%bin` ディレクトリーに格納さ れています。
 - b. コマンド・プロンプトから wsadmin コマンドを入力して wsadmin 環境を開 始します。
 - c. `installBusinessSpaceWidgets` コマンドを実行します。 クラスター環境の場 合、 **-clusterName** パラメーターを指定します。 スタンドアロン・サーバー環 境の場合、 **-serverName** および **-nodeName** パラメーターを指定します。 **-widgets** パラメーターを、ウィジェットを含むディレクトリーまたはファイ ルの絶対パスと共に指定します。
3. `install_root%BusinessSpace%registryData%endpoints` ディレクトリーで、エン ドポイント・ファイルを見つけます。 クラスターの場合、デプロイメント・マ ネージャー・プロファイル・ルートを使用します。 ファイル名はすべて、 Endpoints.xml または Endpoint.xml で終わっています。
4. 構成するエンドポイント・ファイルごとに、バックアップ・コピーを作成しま す。
5. 最初のセルのデプロイメント・マネージャー・プロファイル上のディレクトリー `profile_root%BusinessSpace%registryData%` (`profile_root` は通常は

`install_root%profiles%profile_name` または `install_root%pf%profile_name` が存在しない場合はこのディレクトリーを作成し、エンドポイント登録ファイルをこのディレクトリーにコピーします。

6. 必要に応じて、エンドポイント・ファイルを編集してエンドポイントを構成します。エンドポイント・ファイル内の各エンドポイントは、`<tns:Endpoint>` ブロックにより指定されます。変更するブロックを特定します。

ヒント: 一部のエンドポイントをアクティブにしない場合は、混乱を防ぐためにファイルから除去してもかまいません。

エンドポイントで特定されたロケーションは、`<tns:url>` で指定されています。この値は、Web モジュール内のパスであり、絶対または相対 HTTP URL として指定されます。デフォルトにより、URL は相対です。絶対 URL パスに変更します。例えば、`https://virtualhost.com:virtualport/rest/bpm/htm` または `http://host1:9445/WBPublishingDRAFT/` (製品 Web モジュールへのアクセス方法をプロトコル、ホスト、およびポートで指定) とします。

サーバーのポート番号を調べるには、次のステップを実行します。

- 管理コンソールにログインします。
- 「サーバー」 → 「サーバー・タイプ」 → 「WebSphere Application Server」をクリックします。
- ポート番号を調べる対象のサーバーをクリックし、「ポート」セクションを展開します。

すべてのアプリケーションは、`wc_defaulthost` (非セキュア・ホスト) パラメーターまたは `wc_defaulthost_secure` (セキュア・ホスト) パラメーターのいずれかに示されるように、同じポートを使用します。

注: HTTP サーバーを使用して Web モジュールにアクセスし、ロード・バランシングを行う場合は、HTTP サーバーのホスト名とポート設定を使用してください。

7. Business Space サーバーが構成されているセルで、エンドポイント XML ファイルを変更した後に、`updateBusinessSpaceWidgets` コマンドを使用してエンドポイント URL を更新します。
 - a. ご使用のプロファイルについて、コマンド・ウィンドウを開きます。`wsadmin` コマンドは、`profiles%profile_name%bin` ディレクトリーに格納されています。クラスター環境の場合、`deployment_manager_profile_root%bin` ディレクトリーからコマンドを実行します。スタンドアロン・サーバー環境の場合、`profile_root%bin` ディレクトリーからコマンドを実行します。
 - b. コマンド・プロンプトから `wsadmin` コマンドを入力して `wsadmin` 環境を開始します。
 - c. `updateBusinessSpaceWidgets` コマンドを実行します。クラスター環境の場合、`-clusterName` パラメーターを指定します。スタンドアロン・サーバー環境の場合、`-serverName` および `-nodeName` パラメーターを指定します。`-endpoints` パラメーターを、ウィジェット・エンドポイント・ファイルがあるディレクトリーの絶対パスまたは特定のエンドポイント・ファイルへの絶対パスと共に指定します。

例

以下のエンドポイント・ファイルの例は、WebSphere Business Monitor ウィジェットに対応するものです。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<!-- START NON-TRANSLATABLE -->
<tns:BusinessSpaceRegistry
  xmlns:tns="http://com.ibm.bspace/BusinessSpaceRegistry"
  xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
  xsi:schemaLocation="http://com.ibm.bspace/BusinessSpaceRegistry
    BusinessSpaceRegistry.xsd ">

  <tns:Endpoint>
    <tns:id>{com.ibm.wbimonitor}monitorServiceRootId</tns:id>
    <tns:type>{com.ibm.wbimonitor}monitorServiceRootId</tns:type>
    <tns:version>1.0.0.0</tns:version>
    <tns:url>/rest/</tns:url>
    <tns:description>Location of backing services for Monitor widgets
  </tns:description>
  </tns:Endpoint>

</tns:BusinessSpaceRegistry>
<!-- END NON-TRANSLATABLE -->
```

次のタスク

- `installBusinessSpaceWidgets` コマンドまたは `updateBusinessSpaceWidgets` コマンドを実行したら、手動のステップを実行して、Business Space のテンプレートとスペースを更新する必要があります。詳しくは、『ウィジェットのインストールまたは更新後の Business Space テンプレートおよびスペースの更新』を参照してください。
- サービス・エンドポイントの複数インスタンスの場合、例えば、2 つのクラスター上で処理を区画化して、各クラスターからのデータをウィジェットが表示するようにしたいときは、それぞれの追加クラスターに対して追加ウィジェットを手動で使用可能にする必要があります。ウィジェット・エンドポイント・ファイルとウィジェット・カタログ・ファイルの両方を編集する必要があります。詳しくは、『Business Space ウィジェットが複数のエンドポイントを処理できるようにする』を参照してください。
- ご使用の環境でセキュリティーを使用可能にしている場合は、Business Space を処理できるように正しくセットアップされていることを確認してください。

ビジネス・スペース・ウィジェットが複数のエンドポイントを処理できるようにする

既にBusiness Space インスタンスが構成してある状態で環境にサービス・エンドポイントの別のインスタンスを作成する必要がある場合は、ウィジェットが複数のサービス・エンドポイントからのデータを表示できるようにBusiness Space を構成する必要があります。エンドポイントをBusiness Space に登録するためのエンドポイ

ント・ファイルと、ウィジェットの定義を含むウィジェット・カタログ・ファイルの 2 つのファイルを編集する必要があります。

始める前に

このタスクを完了する前に、以下のタスクを完了しておく必要があります。

- 製品のインストール。
- Business Space 用のサーバーまたはクラスターの作成および構成。
- データベース表の構成 (リモート・データベースまたはデプロイメント環境を使用する場合)。

このタスクについて

デプロイメント環境では、作業区画を持つことができます。例えば、2 つのクラスターを使用して、一方のクラスターには会計データを処理させ、もう一方のクラスターには保険データを処理させることができます。ただし、サービス・エンドポイントは、1 つのクラスターにのみサービスを提供します。ビジネス・スペースから両方の作業区画にアクセスするには、2 つの別々のウィジェット (作業区画ごとに 1 つのウィジェット) を登録する必要があります。これにより、Business Space から両方の作業区画にアクセスすることができます。例えば、会計ヒューマン・タスク・リスト・ウィジェットと保険タスク・リスト・ウィジェットをカタログ内に持つことができます (実際のヒューマン・タスク・リスト・コードは、両方とも同じです)。

エンドポイント・ファイルおよびウィジェット・カタログ・ファイルを手作業で編集する必要があります。

ウィジェット・エンドポイント・ファイルは各製品にバンドルされており、製品のインストール時に追加されます。インストールした製品、および Business Space で使用しているウィジェットに基づいて、以下のエンドポイント・ファイルを 1 つ以上編集する必要があります。

- WebSphere Business Compass: pubserverEndpoints.xml および busLeaderWidgetEndpoints.xml。
- WebSphere Business Monitor: monitorEndpoints.xml
- WebSphere Business Monitor with Alphablox: monitorABXEndpoints.xml
- WebSphere Business Services Fabric: fabricEndpoints.xml
- WebSphere Enterprise Service Bus: wesbWidgetEndpoints.xml (メデイエーション・ポリシーの管理ウィジェット、サービス・ブラウザー・ウィジェット、およびプロキシ・ゲートウェイ・ウィジェットの場)、 bpmAdministrationEndpoints.xml (管理ウィジェットの場)
- WebSphere Process Server: wpsEndpoints.xml、 bpmAdministrationEndpoints.xml (管理ウィジェットの場)、 wesbWidgetEndpoints.xml (メデイエーション・ポリシーの管理ウィジェット、サービス・ブラウザー・ウィジェット、およびプロキシ・ゲートウェイ・ウィジェットの場)、 HumanTaskManagementEndpoints.xml (ビジネス・プロセスおよびヒューマン・タスクの場)、 bspaceWFSEndpoints.xml (Lotus Webform Server をヒューマン・タスク管理ウィジェットとともに使用する場)
- すべての製品: wsumEndpoint.xml (ユーザー・メンバーシップの場)

ウィジェット・カタログ・ファイルには、製品のウィジェットの定義が含まれます。インストールした製品、およびBusiness Space で使用しているウィジェットに基づいて、以下のウィジェット・ファイルを 1 つ以上編集する必要があります。

- WebSphere Business Compass: catalog_pubserverWidgets.xml および catalog_busLeaderWidgets.xml
- WebSphere Business Monitor: catalog_WBMonitor.xml
- WebSphere Enterprise Service Bus: catalogProxyGateway.xml および catalog_ServiceAdmin.xml
- WebSphere Process Server: catalog_BPMAAdministration.xml、catalog_BusinessRules.xml、catalog_ServiceAdmin.xml、および catalog_HumanTaskManagement.xml
- WebSphere Business Services Fabric: catalog_fabric.xml

エンドポイント・ファイルとウィジェット・カタログ・ファイルは、いずれも *install_root*¥BusinessSpace¥registryData¥ にあります。エンドポイント・ファイルは endpoints サブディレクトリーにあり、カタログ・ファイルは catalogs サブディレクトリーにあります。

ディレクトリー *install_root*¥BusinessSpace¥registryData¥ には、製品のエンドポイントおよびウィジェットのカタログ・テンプレート・ファイルが含まれています。テンプレートとして使用する必要のあるファイルをコピーして、変更を追加することができます。

ウィジェットのインスタンスを追加で作成する場合は、以下のステップを実行します。

手順

1. エンドポイントをさらに追加するために、エンドポイント・ファイルを編集します。
 - *install_root*¥BusinessSpace¥registryData¥endpoints ディレクトリーで、エンドポイント・ファイルを見つけます。テンプレート・ファイルを使用する場合は、エンドポイント・テンプレート・ファイルをコピーします。変更しないエンドポイントをすべて除去して、追加のエンドポイントを新しいファイルに追加します。
 - `<tns:Endpoint>` で始まり、固有の ID (`<tns:id>`) および新しいエンドポイントの URL (`<tns:url>`) を持つが、バージョンは同じエンドポイントを追加します。タイプ (`<tns:type>`) は ID (`<tns:id>`) に一致していなければなりません。名前および説明 (「チームの保険タスク・リスト」など) は変更できません。
 - `<tns:id>`: ID には任意のストリングを使用できますが、登録されたすべてのエンドポイントで固有でなければなりません。エンドポイントをさらに追加するときは、この ID が固有であることを確認してください。
 - `<tns:url>`: URL が相対 URL の場合は、REST サービス・エンドポイントが Business Space サーバーと同じ場所に配置されていることが想定されます。エンドポイントがリモート・システム上にある場合は、このフィールドを絶対 URL で更新します。

- `<tns:description>`: このエンドポイントで操作するデータ・セットの性質を詳述した意味のある説明を入力します。この説明は、データ・セットを操作するクラスターに基づくものにすることもできますし、データ・セットの性質に基づくものにすることもできます (例: 保険請求ヒューマン・タスク、会計データ・ヒューマン・タスク)。
- 変更を保存します。

以下のエンドポイントの例が `monitorEndpoints.xml` に入っています。

```
<tns:Endpoint>
  <tns:id>{com.ibm.wbimonitor}monitorServiceRootId</tns:id>
  <tns:type>{com.ibm.wbimonitor}monitorServiceRootId</tns:type>
  <tns:version>1.0.0.0</tns:version>
  <tns:url>/rest/</tns:url>
  <tns:description>Location of backing services for Monitor widgets
</tns:description>
</tns:Endpoint>
```

2. ウィジェット・カタログ・ファイルを編集して新しいウィジェット定義を追加します。

- `install_root¥BusinessSpace¥registryData¥catalogs` ディレクトリーでウィジェット・カタログ・ファイルを探します。
- 固有の ID (`id="{com.ibm.bspace.widget}widget_id` など) および固有の名前 (`unique-name="{com.ibm.bspace.widget}widget_name` など) を持つ `<entry>` を追加します。その他の定義はすべて維持することができます。
- タイトルおよび説明を変更して、新しいエンドポイントの性質を説明する新しいウィジェットを、Business Space で別個のウィジェットとして使用できるようにします。例えば、`<title>` でウィジェットに「マイ・チームの保険タスク・リスト」という名前を付けることができます。ビジネス・ユーザーが適切なウィジェットを容易に選択できるようなタイトルを入力してください。選択したウィジェットの機能とデータの性質をビジネス・ユーザーが容易に理解できるような説明を入力してください。
- カatalog・ファイルの `<metadata>` で、`endpoint://` がエンドポイント・ファイルのタイプおよび ID (`<tns:type>` および `.<tns:id>`) に一致していることを確認します。
- カatalog・ファイルの `<metadata>` で、`"refVersion"` : がエンドポイント・ファイルのバージョン (`<tns:version>`) に一致していることを確認します。
- 変更を保存します。

ウィジェット・カタログ・ファイルの例を以下に示します。

```
<entry id="{com.ibm.wbimonitor}instances"
unique-name="{com.ibm.wbimonitor}instances">
  <title>
    <!-- END NON-TRANSLATABLE -->
    <nls-string xml:lang="en">Instances</nls-string>
    <!-- START NON-TRANSLATABLE -->
  </title>
  <description>
    <!-- END NON-TRANSLATABLE -->
    <nls-string xml:lang="en">Instances</nls-string>
    <!-- START NON-TRANSLATABLE -->
  </description>
  <shortDescription>
    <!-- END NON-TRANSLATABLE -->
    <nls-string xml:lang="en">このウィジェットは、
個々のインスタンスまたはユーザー定義のコンテキスト・インスタンス・グループのいずれかで
使用可能なモニター・コンテキストを持つダッシュボードを表示します。
</nls-string><!-- START NON-TRANSLATABLE -->
  </shortDescription>
</definition>endpoint://{com.ibm.wbimonitor}monitorWidgetRootId
```

```

/com/ibm/wbimonitor/common/iWidgets/instances_iWidget.xml</definition>
  <content>endpoint://{com.ibm.wbimonitor}monitorWidgetRootId/img/
thumb_instances.gif</content>
  <preview>endpoint://{com.ibm.wbimonitor}monitorWidgetRootId/img/
prev_instances.gif</preview>
  <previewThumbnail>endpoint://{com.ibm.wbimonitor}monitorWidgetRootId/
img/prev_instances.gif</previewThumbnail>
  <help>endpoint://{com.ibm.bspace}bspaceWidgetHelpRootId/topic/
com.ibm.bspace.help.widg.mon.doc/dash/help_instance_whatIs.html</help>
  <icon>endpoint://{com.ibm.wbimonitor}monitorWidgetRootId/img/
icon_instances.gif</icon>
  <metadata name="com.ibm.mashups.builder.autoWiringEnabled">true
</metadata>
  <metadata name="com.ibm.bspace.version">7.0.0.0</metadata>
  <metadata name="com.ibm.bspace.owner">International Business
Machines Corp.</metadata>
  <metadata name="com.ibm.bspace.serviceEndpointRefs">
[{"name":"serviceUrlRoot", "required":"true",
"refId":"endpoint://{com.ibm.wbimonitor}monitorServiceRootId",
"refVersion":"1.0.0.0"}]</metadata>
</entry>

```

3. updateBusinessSpaceWidgets コマンドを実行します。

次のタスク

- installBusinessSpaceWidgets コマンドまたは updateBusinessSpaceWidgets コマンドを実行したら、手動のステップを実行して、Business Space のテンプレートとスペースを更新する必要があります。詳しくは、『ウィジェットのインストールまたは更新後の Business Space テンプレートおよびスペースの更新』を参照してください。
- REST サービスが実行されているのと異なるセルでビジネス・スペースが実行されている場合、エンドポイント・ファイルを手動で編集する必要があります。
- ご使用の環境でセキュリティーを使用可能にしている場合は、Business Space を処理できるように正しくセットアップされていることを確認してください。

複数の製品のウィジェットの構成

installBusinessSpaceWidgets コマンドを使用することによって、ある BPM 製品用の Business Space ウィジェットを、別の BPM 製品を使用して既に構成されている Business Space に構成または追加できます。

始める前に

このタスクを完了する前に、以下のタスクを完了しておく必要があります。

- BPM 製品をインストールおよび構成するためのすべてのステップが完了していて、Business Space が構成されている。
- 追加の BPM 製品をインストールおよび構成するためのすべてのステップが完了している。

このタスクについて

Business Space と連携する複数の BPM 製品をインストールできます。2 番目の製品をインストールした後、両方の製品のウィジェットを構成できます。ただし、最初の製品用のウィジェットを使用して Business Space を構成した後に 2 番目の BPM 製品をインストールする場合は、installBusinessSpaceWidgets コマンドを使用して、同じ Business Space と連携するように、2 番目の製品のウィジェットを追加して構成する必要があります。

スタンドアロン型の拡張では、ウィジェットは自動的にインストールされます。例えば、WebSphere Process Server スタンドアロン・プロファイルを作成し、Business Space 用のサーバーを構成し、WebSphere Business Monitor をインストールし、構成済みのサーバーを WebSphere Business Monitor に拡張すると、ウィジェットがインストールされます。しかし、Network Deployment 環境の場合、デプロイメント・マネージャーを別の製品に拡張しても、追加のウィジェットがインストールおよび構成されることはありません。

手順

1. デプロイメント・マネージャーのプロファイルが稼働していることを確認し、そのプロファイルでコマンド・ウィンドウを開きます。

`wsadmin` コマンドは `profiles/profile_name/bin` ディレクトリーに格納されています。

2. コマンド・プロンプトから `wsadmin` コマンドを入力して `wsadmin` 環境を開始します。
3. `installBusinessSpaceWidgets` コマンドを使用して、`install_root/BusinessSpace/widgets` ディレクトリーにある、指定されたウィジェットをインストール、デプロイ、および登録します。

例

以下の例では、Jython を使用して `installBusinessSpaceWidgets` を実行し、IBM WebSphere Process Server 用に構成済みの Business Space 環境で機能する、IBM WebSphere Business Monitor 用のウィジェットをインストールします。

```
AdminTask.installBusinessSpaceWidgets('[-nodeName node_name
-serverName server_name -widgets
install_root%BusinessSpace%widgets%WBM%Widgets_WBMonitor.zip]')
```

Jacl を使用した例を以下に示します。

```
$AdminTask installBusinessSpaceWidgets {-nodeName node_name
-serverName server_name -widgets
install_root%BusinessSpace%widgets%WBM%Widgets_WBMonitor.zip}
```

次のタスク

ランタイム環境で Business Space を使用可能にするには、ウィジェットを構成した後、次の手順を実行する必要があります。

- `installBusinessSpaceWidgets` コマンドまたは `updateBusinessSpaceWidgets` コマンドの実行後に、Business Space のテンプレートおよびスペースを更新するための手動のステップを実行してください。詳しくは、『ウィジェットのインストールまたは更新後の Business Space テンプレートおよびスペースの更新』を参照してください。
- REST サービスを構成します。詳しくは、『REST サービスの構成』を参照してください。
- REST エンドポイントを登録します。詳しくは、『管理コンソールでの Business Space の構成および REST エンドポイントの登録』を参照してください。

- セキュリティーが、チームが使用する Business Space およびウィジェットに対して機能するように正しくセットアップされていることを確認します。詳しくは、『Business Space のセキュリティーのセットアップ』を参照してください。

ビジネス・スペース内で使用するための特定のウィジェットのセットアップ

製品に付属するウィジェットの中には、ビジネス・スペースで使用する前に、追加の構成ステップが必要なものがあります。

このタスクについて

Business Process Management 製品にはいくつかのウィジェットが付属しており、これらの中にはビジネス・スペースのソリューションと通信するために追加の構成が必要なものがあります。

サービス・モニターの構成

新しいサーバーを作成し、(Business Space 内で使用可能な) サービス・モニター・ウィジェットを使用して、SCA モジュールによって公開または呼び出されるサービスの応答時間および要求スループットを測定する場合、管理コンソールでサービス・モニターを構成して有効化します。

始める前に

このタスクに必要なセキュリティー・ロール: 管理セキュリティーが使用可能になっている場合、このタスクを実行するには管理ロールでログインする必要があります。

このタスクについて

サービス・モニターではクライアント/サーバー・アーキテクチャーが使用されています。

- サービス・モニター・エージェント: 操作のスループットおよび応答時間を測定し、その測定値データをサービス・モニター・サーバーに送信します。
- サービス・モニター・サーバー: 稼働中のすべてのサービス・モニター・エージェントから応答時間およびスループットの測定値を収集および集約し、統計を算出して保管します。

デプロイメント環境では、サーバーがサポート・クラスターで稼働するのに対し、エージェントはモジュールがデプロイされたサーバー上のアプリケーション・クラスターで稼働します。スタンドアロン・サーバー環境では、サーバーとエージェントの両方がスタンドアロン・サーバーで稼働します。

重要: Business Space にアクセスするために外部 HTTP サーバーを使用している場合は、エンコードされたスラッシュを使用できるように HTTP サーバーを構成してください。詳しくは、HTTP サーバーの資料を参照してください。

手順

1. 管理コンソールに管理者特権でログインします。
2. サービス・モニター・サーバーを構成します。

- a. コンソール内で、「サーバー」 → 「サーバー・タイプ (Server Types)」 → 「WebSphere アプリケーション・サーバー (WebSphere application servers)」 → 「servername」 → 「サービス・モニター」をクリックします。
- b. 「サービス・モニター」ページで、「サービス・モニターの使用可能化」をクリックします。
- c. サービス・モニターのバッファ・サイズおよび照会サイズの制限のデフォルト値を検査し、必要に応じて変更します。
- d. サービス・モニターのターゲットを指定します。これらはデータ収集の対象となるサービス・モニター・エージェントです。

表 187.

モニターのターゲット	実行の手順
稼働中のすべてのサービス・モニター・エージェントをモニターする	「使用可能なすべてのサービス・モニター・エージェント」オプションにチェック・マークを付けます。
稼働中のサービス・モニター・エージェントの特定のサブセットをモニターする	<ol style="list-style-type: none"> 1. 「使用可能なすべてのサービス・モニター・エージェント」オプションをクリアします。コレクション・テーブルが表示されます。これが新しい構成の場合、テーブルは空です。 2. 「追加」をクリックします。「デプロイメント・ターゲットのブラウズ」ページが開きます。 3. 「デプロイメント・ターゲットのブラウズ」ページのコレクション・テーブルから、モニターするエージェントを持つデプロイメント・ターゲットを選択します。 4. 「OK」をクリックして「サービス・モニター・サーバー」ページに戻ります。 5. モニターするすべてのエージェントが追加されるまで、手順 2 から手順 4 を繰り返します。

- e. 「サービス・モニター・サーバー」ページで、「OK」をクリックします。構成が保存され、すぐに有効になります。
3. サービス・モニター・エージェントを構成します。
 - a. コンソール内で、「サーバー」 → 「サーバー・タイプ (Server Types)」 → 「WebSphere アプリケーション・サーバー (WebSphere application servers)」 → 「servername」 → 「サービス・モニター・エージェント」をクリックします。
 - b. 「サービス・モニター・エージェント」ページで、「サービス・モニター・エージェントの使用可能化」をクリックします。
 - c. エージェント構成のデフォルト値を検査し、必要に応じて変更します。
 - d. 「OK」をクリックします。

ビジネス・スペースでヒューマン・タスク管理ウィジェットを実行するためにフォームを使用可能にする

WebSphere Process Server を使用している場合は、追加のステップを実行して、Business Space でヒューマン・タスク管理ウィジェットを使用するためにフォームを使用可能にする必要があります。

このタスクについて

トピックの対象範囲: このトピックは、以下の製品を対象としています。

- WebSphere Business Compass
- WebSphere Business Monitor
- WebSphere Process Server
- WebSphere Business Services Fabric

Business Process Choreographer 以外のサーバー・インスタンスにBusiness Space がインストールされている場合は、別のエンタープライズ・アプリケーションにデプロイされているフォームを、ヒューマン・タスク管理ウィジェットに対して使用可能にするために追加のステップを実行する必要があります。これには、WebSphere Integration Developer で生成した HTML-Dojo フォーム、および IBM Lotus Forms が含まれます。

ビジネス・スペースと WebSphere Process Server の両方を同じ WebSphere Network Deployment セルのデプロイメント・ターゲットで構成するのか、それとも別々のセルで構成するのかに応じて、以下のステップのいずれかを実行します。

手順

1. シングル・セルのセットアップの場合: プロセスまたはヒューマン・タスクおよびフォームが含まれるエンタープライズ・アプリケーションをデプロイするときには、そのフォームの HTML ファイルまたは Lotus フォーム定義が含まれている Web モジュールを、Business Space が構成されているのと同じデプロイメント・ターゲットにマップする必要があります。
2. クロス・セル環境のセットアップの場合: フォームの HTML ファイルまたは Lotus フォーム定義が含まれている Web モジュールを、リモート・セル内のビジネス・スペースをホストするデプロイメント・ターゲットにデプロイします。Web モジュールをデプロイするときは、WebSphere Integration Developer のヒューマン・タスク・エディターでこれらのフォーム用に定義されたコンテキスト・ルートを指定する必要があります。Business Space のサーバーまたはクラスター上の新規アプリケーションを開始します。

次のタスク

Lotus Webform Server をヒューマン・タスク管理ウィジェットとともに使用する場合、Lotus Webform Server をビジネス・スペース用に構成する必要があります。

Business Space 内のヒューマン・タスク管理ウィジェットのための Lotus Webform Server の構成:

WebSphere Process Server ヒューマン・タスク管理ウィジェットを使用しており、実行時に Lotus Webform Server を使用してフォームを操作する場合は、Lotus Webform Server を使用するように Business Space を構成する必要があります。

始める前に

Lotus Webform Server を Business Space 内のヒューマン・タスク管理ウィジェットとともに使用できるようにするには、Lotus Webform Server 3.5.1 とフィックスパック 1 以降をインストールしておく必要があります。

Webform Server は 32 ビット・アーキテクチャーのマシンでのみ稼働します。

Webform Server をインストールする場合は、インストール・ツールの「サーバー・コンポーネント」ページで、必ず「**Webform Server- Application Server**」と「**Webform Server - Translator Server**」の両方を選択してください。「オプション・デプロイメント設定 (Optional Deployment settings)」ページで、必ず「**Webform Server - Translator Server を WebSphere Application Server にデプロイ (Deploy Webform Server - Translator Server to WebSphere Application Server)**」を選択してください。「**API を WebSphere Application Server または WebSphere Process Server にデプロイ (Deploy API to WebSphere Application Server or WebSphere Process Server)**」を選択しないでください。

注: Derby データベースを使用する場合は、別個のプロファイルに Lotus Webform Server をインストールする必要があります。Business Space および WebSphere Process Server と同じプロファイルを使用することはできません。

このタスクについて

トピックの対象範囲: このトピックは、以下の製品を対象としています。

- WebSphere Business Compass
- WebSphere Business Monitor
- WebSphere Process Server
- WebSphere Business Services Fabric

環境に応じて、以下の 3 つのステップのいずれかを実行してください。

手順

1. シングル・サーバー環境を使用しており、Lotus Webform Server が WebSphere Process Server と同じシステムに既にインストールされている場合は、プロファイル管理ツールを使用して Lotus Webform Server を Business Space 用に構成します。それ以外の場合、ステップ 2 に進みます。
 - a. プロファイル管理ツールを開始して、スタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成します。
 - b. 「プロファイル作成オプション」ページで、「**拡張**」オプションを選択します。
 - c. 「ビジネス・スペースの構成」ページで、「**Lotus Webform Server の構成 (Configure Lotus Webform Server)**」チェック・ボックスを選択し、Webform Server Translator およびインストールのルートを入力します。詳しくは、『**拡張スタンドアロン・サーバー・プロファイルの作成**』を参照してください。

2. WebSphere Process Server がインストールされているのと同じシステムに Lotus Webform Server がインストールされており、プロファイル管理ツールで Lotus Webform Server を構成しなかった場合は、以下のステップを実行します。それ以外の場合、ステップ 3 に進みます。

- a. ご使用のプロファイルについて、コマンド・ウィンドウを開きます。
wsadmin コマンドは、`profiles¥profile_name¥bin` ディレクトリーに格納されています。クラスター環境の場合、`deployment_manager_profile_root¥bin` ディレクトリーからコマンドを実行します。スタンドアロン・サーバー環境の場合、`profile_root¥bin` ディレクトリーからコマンドを実行します。
- b. コマンド・プロンプトから wsadmin コマンドを入力して wsadmin 環境を開始します。例えば、Windows プラットフォームの場合は `wsadmin.bat -conntype NONE` と入力します。
- c. Webform Server が配置されているのと同じマシン上で、ローカル・ホストおよび場所を指定して `configureWebformServer` コマンドを実行します。

例えば、Jython を使用して以下のコマンドを実行します。

```
AdminTask.configureLotusWebformServer(['-nodeName', node_name,
'-serverName', server_name, '-translatorHTTPLocation',
'http://localhost:8085/translator', '-serverInstallRoot',
'C:/IBM/LotusWebForms/3.5/WebFormServer'])
```

```
AdminConfig.save()
```

または、Jacl を使用して以下のコマンドを実行します。

```
$AdminTask configureLotusWebformServer {-nodeName node_name -serverName
server_name -translatorHTTPLocation http://localhost:8085/translator
-serverInstallRoot C:/IBM/LotusWebForms/3.5/WebFormServer}
```

```
$AdminConfig save
```

3. WebSphere Process Server がインストールされているのとは異なるシステムに Lotus Webform Server がインストールされている場合、以下のステップを実行します。

- a. `BSpaceWebformsEnabler.ear` を、`profile root/installableApps/BusinessSpace` ディレクトリーから Webform Server がインストールされているシステムにコピーします。この ear をリモート・アプリケーション・サーバーにデプロイします。
- b. ローカルの Business Space プロファイル (`bspaceWFSEndpoints.xml` ファイル内) で、エンドポイント `{com.ibm.bspace}bspaceWebformsProxyRootId` が `BSpaceWebformsEnabler.ear` の完全修飾ロケーションを参照するように設定します。エンドポイント・ファイルの編集について詳しくは、『Business Space ウィジェットをクロス・セル環境用に手動で使用可能にする』を参照してください。
- c. Webform Server システムで、Lotus Webform Server を構成したプロファイルの管理コンソールを開きます。

- d. 以下の変数を設定します。「環境」 → 「WebSphere 変数」をクリックし、使用中のサーバーを含むノードを選択し、次に「新規」をクリックしてそれぞれの新しい変数を設定します。
- Webform Server インストール・ディレクトリー変数を設定するには、名前が LFS_DIR で、値が Webform Server のインストール場所 (c:\Program Files\Lotus Webform Server\3.5\WebformServer など) である変数を作成します。
 - LFS_API_DIR 変数を設定するには、名前が LFS_API_DIR で値が \$(LFS_DIR)\Translator\API の変数を作成します。
 - LFS_API_LIB_DIR 変数を設定するには、名前が LFS_API_LIB_DIR で値が \$(LFS_API_DIR)\76\java\classes の変数を作成します。
 - LFS_DEP_DIR 変数を設定するには、名前が LFS_DEP_DIR で値が \$(LFS_DIR)\redist の変数を作成します。
 - **UNIX** **Linux** AIX、Linux、および Solaris オペレーティング・システムの場合、UWIJAVA 変数を設定するには、名前が UWIJAVA で値が JVM ライブラリーの変数を作成します。この値は、ご使用のオペレーティング・システムに応じて、以下のようになります。
 - AIX の場合: *process_server_install_root/java/jre/lib/ppc/j9vm/libjvm.a*
 - Linux の場合: *process_server_install_root/java/jre/lib/i386/libjava.so*
 - Solaris の場合: *process_server_install_root/java/jre/lib/sparc/libjava.so*
- e. Java プロセス定義を設定します。
- 「サーバー」 → 「サーバー・タイプ」 → 「WebSphere Application Server」 → 「server_name」 → 「Java およびプロセス管理」 → 「プロセス定義」 → 「環境項目 (Environment Entries)」をクリックします。
 - **Windows** Windows の場合: PATH プロパティを追加し、.dll ファイルを格納する API ディレクトリーを指すようにします (例: `${LFS_API_DIR};${LFS_API_DIR}/76/system`)。
 - **UNIX** AIX の場合: LIBPATH プロパティを追加し、.so ファイルを格納する API ディレクトリーを指すようにします (例: `${LFS_API_DIR}:${LFS_API_DIR}/76/system`)。
 - **UNIX** **Linux** Solaris および Linux の場合: LD_LIBRARY_PATH プロパティを追加し、.so ファイルを格納する API ディレクトリーを指すようにします (例: `${LFS_API_DIR}:${LFS_API_DIR}/76/system`)。
- 注: LD_LIBRARY_PATH プロパティ、LIBPATH プロパティ、または PATH プロパティが既に作成されている場合、既存のプロパティに API ディレクトリー・パスを追加してください。正しい分離文字を必ず使用してください。Windows ではセミコロンを使用しますが、AIX、Linux、および Solaris プラットフォームではコロンを使用します。
- PUREEDGE_INI プロパティと、値 `${LFS_DIR}\Translator\PureEdgeAPI.ini` を追加します。
- f. 共有ライブラリー LFS_API_LIB および LFS_DEP_LIB を設定します。
- 「環境」 → 「共有ライブラリー (Shared Libraries)」をクリックします。

- 使用中のサーバーを含むノードを選択してスコープを設定します。スコープは、環境変数の設定値と同じスコープである必要があります。
 - 「新規」をクリックします。
 - 「LFS_API_LIB」とクラスパスを名前として持つエントリーを作成します (1 行に 1 つずつ)。
 - `${LFS_API_LIB_DIR}/pe_api.jar`
 - `${LFS_API_LIB_DIR}/pe_api_native.jar`
 - `${LFS_API_LIB_DIR}/uwi_api.jar`
 - `${LFS_API_LIB_DIR}/uwi_api_native.jar`
 - `${LFS_API_LIB_DIR}/commons-codec.jar`
 - `${LFS_API_LIB_DIR}/xmlsec-1.4.1.jar`
 - 「OK」をクリックします。
 - 「新規」をクリックします。
 - 「LFS_DEP_LIB」とクラスパスを名前として持つエントリーを作成します (1 行に 1 つずつ)。
 - `${LFS_DEP_DIR}/commons-codec-1.3.jar`
 - `${LFS_DEP_DIR}/commons-httpclient-3.0.jar`
 - `${LFS_DEP_DIR}/ehcache-1.2.2.jar`
 - `${LFS_DEP_DIR}/log4j-1.2.8.jar`
 - `${LFS_DEP_DIR}/ws_common.jar`
 - `${LFS_DEP_DIR}/ws_framework.jar`
 - `${LFS_DEP_DIR}/ws_resourcestore.jar`
 - `${LFS_DEP_DIR}/ws_resourcebundle.jar`
 - 「OK」をクリックします。
- g. サーバー・クラス・ローダーを設定します。
- 「サーバー」 → 「サーバー・タイプ」 → 「WebSphere Application Server」 → 「*server_name*」 → 「Java およびプロセス管理」 → 「クラス・ローダー (Classloader)」をクリックします。
 - アプリケーション・サーバーのクラス・ローダーが存在しない場合、クラス・ローダーを作成する必要があります。「新規」をクリックして、「親が最後」オプションを選択します。
 - アプリケーション・サーバーのクラス・ローダーを選択し、「共有ライブラリー参照 (Shared Library References)」をクリックします。
 - 「追加」をクリックします。
 - 「ライブラリー名 (Library Name)」リストから LFS_API_LIB を選択します。
 - ライブラリー LFS_DEP_LIB について同じ手順を繰り返します。
 - 「OK」をクリックします。
- h. Webform Translator の場所を構成します。
- BSpaceWebformsEnabler EAR がデプロイされていることを確認します。

- 「アプリケーション」 → 「アプリケーション・タイプ」 → 「WebSphere エンタープライズ・アプリケーション」 → 「BSpaceWebformsEnabler」 → 「サーブレットのパラメーターを初期化」をクリックします。
 - translatorLocation の値を Webform Server Translator の http アドレスに設定します。Translator が BSpaceWebFormsEnabler と同じマシン上で実行するように構成されている場合、デフォルト値の http://localhost:8085/translator のままにします。
- i. すべての変更をマスター構成に保存し、サーバーを再始動します。

ヒューマン・タスク管理ウィジェットでイメージを使用可能にする

ヒューマン・タスク管理ウィジェットを含むように Business Space を設定する場合は、これらのウィジェットでチーム・メンバーのイメージを使用するようにエンドポイント・ファイルを作成できます。ユーザー ID を表示し、このユーザー ID によってグループ化できるように構成されているすべてのウィジェットについて、イメージの表示を有効にすることができます。

始める前に

トピックの対象範囲: このトピックは、以下の製品を対象としています。

- WebSphere Business Compass
- WebSphere Business Monitor
- WebSphere Process Server
- WebSphere Business Services Fabric

このタスクについて

デフォルトでは、Business Space は、ヒューマン・タスク管理ウィジェットに対してイメージ・サーバーを指定せずに構成されますが、ビジネス・ユーザーにチーム・メンバーのイメージを表示する場合は、新しいウィジェット・エンドポイント・ファイルのイメージの取得を使用可能に設定することができます。

手順

1. `install_root\BusinessSpace\registryData\` に新規ファイルを作成します。例えば、`imageEndpoint.xml` という名前を付けます。
2. 以下のテンプレートの中にコピーします。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<tns:BusinessSpaceRegistry xmlns:tns="http://com.ibm.bspace/
BusinessSpaceRegistry" xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
xsi:schemaLocation="http://com.ibm.bspace/BusinessSpaceRegistry
BusinessSpaceRegistry.xsd">
<tns:Endpoint>
<tns:id>{com.ibm.bspace.htm}bpaceUserServiceRootId</tns:id>
<tns:type>{com.ibm.bspace.htm}bpaceUserServiceRootId</tns:type>
<tns:version>1.0.0.0</tns:version>
<tns:url>URL</tns:url>
<tns:description>Location of user image services</tns:description>
</tns:Endpoint>
</tns:BusinessSpaceRegistry>
```

3. ユーザー・イメージに使用する適切なイメージ・サーバー・サーブレットを参照するように URL を更新します。

イメージ・サービス・エンドポイントは URL 接頭部に対する参照であり、これを使用して、ウィジェットは次の情報を連結することによりイメージを検出できます。

- 解決されたイメージ・サービス・エンドポイント・ストリング。
- 各ユーザーの固有 ID である Virtual Member Manager (VMM) 属性。
- .jpg ファイル拡張子。

例えば、エンドポイントの URL が `http://myserver:9080/UserImageWeb/UserImageServlet/` で、ユーザーの固有 ID が `id123456` である場合、ウィジェットは `http://myserver:9080/UserImageWeb/UserImageServlet/id123456.jpg` というリンクにある、そのユーザーのイメージを取得します。

4. `updateBusinessSpaceWidgets` コマンドを実行します。
 - a. ご使用のプロファイルについて、コマンド・ウィンドウを開きます。

`wsadmin` コマンドは `profiles/profile_name/bin` ディレクトリーに格納されています。

- b. `updateBusinessSpaceWidgets` コマンドを使用して、指定したウィジェットのインストール、デプロイ、および登録を行います。

Business Space のセキュリティーのセットアップ

ご使用の環境で WebSphere が提供する Business Space を利用しようとする場合は、Business Space の成果物をチームがどのように処理するかについてのセキュリティー・オプションを検討する必要があります。Business Space のセキュリティーをオンにする場合は、アプリケーション・セキュリティーをセットアップし、ユーザー・リポジトリーを指定します。Business Space 管理者を定義するには、スーパーユーザー・ロールを割り当てます。

このタスクについて

最善の結果を得るため、Business Space を構成する前にセキュリティーを有効にします。管理コンソールの「グローバル・セキュリティー」管理ページで、管理セキュリティーとアプリケーション・セキュリティーの両方を有効にします。また、ユーザー・アカウント・リポジトリーも指定します。

ユーザー・アカウント・レジストリーを Business Space と共に使用する場合の考慮事項:

- 使用している LDAP 構成のタイプに応じて、設定が、Business Space に正しくアクセスできる能力に影響を及ぼすことがあります。ユーザー・フィルター、グループ・フィルター、およびマッピング設定が適切に構成されていることを確認してください。詳しくは、WebSphere Application Server 資料の『Lightweight Directory Access Protocol 検索フィルターの構成』を参照してください。
- 使用しているフェデレーテッド・リポジトリー構成のタイプに応じて、設定が、Business Space に正しくアクセスできる能力に影響を及ぼすことがあります。レルムが適切に構成されていることを確認してください。詳しくは、WebSphere Application Server 資料の『フェデレーテッド・リポジトリー構成におけるレルムの管理』を参照してください。

- Business Space での検索にログイン・プロパティ uid (ユーザー ID) を使用するように LDAP セキュリティーがデフォルトでセットアップされます。ログイン・プロパティに、mail (E メール・アドレス) など、別の固有の LDAP フィールドを使用するように LDAP セキュリティーを変更する場合は、Business Space で検索が機能するようにするため、ConfigServices.properties ファイルの `userIdKey` プロパティを変更する必要があります。
ConfigServices.properties ファイルは、スタンドアロン・サーバーの場合は `profile_root%BusinessSpace% node_name%server_name %mm.runtime.prof%config%ConfigService.properties` に、クラスターの場合は `deployment_manager_profile_root %BusinessSpace%cluster_name %mm.runtime.prof%config%ConfigService.properties` にあります。LDAP セキュリティーのログイン・プロパティに合わせて、`userIdKey` 属性を `uid` から、例えば、`mail` に変更します。以下のパラメーターを指定して、`wsadmin` スクリプト・クライアントを使用して `updatePropertyConfig` コマンドを実行します。
-serverName および **-nodeName** (スタンドアロン・サーバーの場合) または **-clusterName** (クラスターの場合)、**-propertyFileName** (値は ConfigServices.properties ファイルのパス)、ならびに **-prefix** (値は `Mashups_`)。
- Microsoft SQL Server データベースおよび **Standalone LDAP** レジストリーを使用する場合は、必ずユーザー識別名 (ユーザー DN) を 131 文字より少ないようにしてください。いずれかのユーザー DN エントリーが 131 文字以上の場合には、ユーザー・アカウント・リポジトリに「**フェデレーテッド・リポジトリ**」オプションを指定する必要があります。フェデレーテッド・リポジトリと他のレジストリーとの切り替えを行うと、すべての既存のスペースおよびページは Business Space でアクセスできなくなるので、再作成する必要があります。
- 「**フェデレーテッド・リポジトリ**」を使用すると、拡張検索機能などの、ウィジェットおよびフレームワークの機能が追加されます。スペースおよびページを共用するためにユーザーを検索をするときは、検索有効範囲に E メール、ユーザーのフルネーム、およびユーザー ID が含まれます。

IBM Tivoli Access Manager WebSEAL を使用しており、それを Business Space 環境と共に使用したい場合は、追加の構成ステップを実行する必要があります。外部 Java Authorization Contract for Containers (JACC) プロバイダーと一緒に Tivoli Access Manager のセキュリティを構成し、Tivoli Access Manager で WebSEAL を構成し、製品アプリケーション・サーバーで WebSEAL を構成し、ご使用の環境のホスト・ジャンクションを構成します。

Business Space 環境で管理者となるユーザーを設定するため、スクリプトを実行して Business Space スーパーユーザー・ロールを割り当てます。

Business Space のアプリケーション・セキュリティの設定

Business Space のセキュリティをオンにするには、アプリケーション・セキュリティと管理セキュリティの両方を使用可能にする必要があります。

始める前に

このタスクを完了する前に、以下のタスクを完了しておく必要があります。

- 製品のユーザー・レジストリーにユーザー ID が登録されていることの確認。

保護された環境を使用することを予定している場合は、必ず、Business Space を構成する前にセキュリティーを有効にしてください。Business Space の構成後にセキュリティーを有効化または除去する場合は、ConfigServices.properties ファイルの MashupAdminFor00BSpace プロパティーと noSecurityAdminInternalUserOnly プロパティーの両方を変更し、有効な管理者 ID として正しいユーザー ID を設定する必要があります。ConfigServices.properties ファイルは、スタンドアロン・サーバーの場合は `profile_root%BusinessSpace%node_name%server_name%mm.runtime.prof`、`%config%ConfigService.properties` に、クラスターの場合は `deployment_manager_profile_root%BusinessSpace%cluster_name%mm.runtime.prof`、`config%ConfigService.properties` にあります。変更後のファイルを、システム上の空のフォルダーにコピーします。次に、wsadmin スクリプト・クライアントを使用し、以下のパラメーターを指定して `updatePropertyConfig` コマンドを実行します。

- **-serverName** および **-nodeName** (スタンドアロン・サーバーの場合) または **-clusterName** (クラスターの場合)
- **-propertyFileName** (値は ConfigServices.properties ファイルのパス)
- **-prefix** には値 `Mashups_` を指定します

このタスクについて

Business Space は、アクセスの認証と許可を確実に行うように事前に構成されます。Business Space URL へのアクセス時には、ユーザーに認証のプロンプトが出されます。認証されないユーザーは、ログイン・ページにリダイレクトされます。Business Space は、HTTP と HTTPS のいずれかによってアクセスすることができます。ただし、ログイン・ページの場合は常に HTTPS にリダイレクトされます。したがって、IBM HTTP Server などの Web サーバーを使用する場合は、HTTPS をサポートするようにそのサーバーを構成する必要があります。

Business Space のスペースおよびページ内容への権限は、スペース管理の一部として Business Space 内で処理されます。

Business Space への認証済みアクセスを使用可能にするには、ユーザー・レジストリーを構成して、アプリケーション・セキュリティーを使用可能にする必要があります。

手順

1. セキュリティーの詳細な説明については、製品のセキュリティー・ドキュメンテーションを参照してください。
2. Business Space アプリケーションの場合は、「グローバル・セキュリティー」管理コンソール・ページで、「管理セキュリティーを使用可能にする」および「アプリケーション・セキュリティーを使用可能にする」の両方を選択します。
3. 同じ管理コンソール・ページ上の「ユーザー・アカウント・リポジトリー」で、「フェデレーテッド・リポジトリー」、「ローカル・オペレーティング・システム」、「スタンドアロン LDAP レジストリー」、または「スタンドアロン・カ

スタム・レジストリー」のいずれかを指定します。『Business Space のセキュリティーのセットアップ』で、ユーザー・レジストリーの選択に関する考慮事項を確認してください。

4. Business Space が製品を実行している場所から離れている場合、および Business Space を実行中のノードと製品を実行中のノードが同じセル内にはない場合には、手動のステップによって確実にシングル・サインオン (SSO) を有効にする必要があります。例えば、複数の製品 (WebSphere Business Compass、WebSphere Business Monitor、WebSphere Enterprise Service Bus、または WebSphere Process Server) を使用し、サーバーをそれぞれ異なるノードに配置し、さらにそれらすべてが Business Space サーバーと連携できるようにする場合は、手動で SSO を構成する必要があります。SSO を有効にするには、以下のステップを実行します。
 - a. 各サーバーの管理コンソールで、「セキュリティー」 → 「グローバル・セキュリティー」をクリックして、「グローバル・セキュリティー」ページを開きます。「Web および SIP セキュリティー」を展開し、「シングル・サインオン (SSO)」をクリックして、「使用可能」チェック・ボックスが選択されていることを確認します。
 - b. すべてのノードが同じ「ユーザー・アカウント・リポジトリー」の情報 (ステップ 3 を参照) を使用することを確認します。
 - c. 最初のノードの管理コンソールで、「グローバル・セキュリティー」ページを開きます。「認証」の下にある「LTPA」をクリックします。
 - d. 「クロス・セル・シングル・サインオン」の下に、鍵ファイルのパスワード、および完全修飾鍵ファイル名 (つまり、鍵ファイルをエクスポートするロケーションとファイル名) を入力します。完全修飾鍵ファイル名は、サーバーが稼働しているシステム上での絶対パスです。
 - e. 「鍵のエクスポート」をクリックします。鍵ファイルは、サーバーが稼働しているシステムに保管されます。
 - f. 2 つのノードが同じシステム上にない場合は、鍵ファイルを物理的にその他のシステムにコピーします。
 - g. 同じ鍵ファイルを使用するその他すべてのノードに鍵ファイルをインポートするには、他のノードの管理コンソールにログオンして、「グローバル・セキュリティー」 > 「LTPA」ページに移動します。「クロス・セル・シングル・サインオン」の下に、鍵ファイルのパスワード、および完全修飾鍵ファイル名 (コピーしたエクスポート済み鍵ファイルと同じパスワードを使用) を入力し、「鍵のインポート」をクリックします。
 - h. 各システムに鍵をインポートした後、サーバーを再始動します。
5. エンドポイント・ファイルで HTTPS を使用していて、エンドポイントのロケーションが Business Space とは異なるノード上にあり、Secure Sockets Layer (SSL) 証明書が自己署名 SSL 証明書である場合には、その SSL 証明書をインポートする必要があります。
 - a. Business Space が含まれているサーバーの管理コンソールにログオンし、製品を実行しているリモート・ノードが使用する SSL 証明書をインポートします。
 - 1) 「セキュリティー」の下にある「SSL 証明書と鍵の管理」をクリックします。

- 2) 「SSL 証明書と鍵の管理」ページの「関連項目」で、「鍵ストアおよび証明書」をクリックします。
 - 3) 「鍵ストアおよび証明書」ページで、「NodeDefaultTrustStore」をクリックして truststore タイプを変更します。
 - 4) 「NodeDefaultTrustStore」ページの「追加プロパティ」の下で、「署名者証明書」をクリックします。
 - 5) NodeDefaultTrustStore の「署名者証明書」ページで、「ポートから取得」ボタンをクリックします。
 - 6) 「ポートから取得」ページの「一般プロパティ」に、製品を実行している場所でのホスト、ポート、および別名を入力します。「署名者情報の取得」ボタンをクリックして、「OK」をクリックします。
 - 7) 両方のサーバーを再始動します。
- b. 製品ノードの管理コンソールにログオンし、Business Space を実行しているノードが使用する SSL 証明書をインポートします。
- 1) ステップ a. の 1) から 5) を繰り返します。
 - 2) 「ポートから取得」ページの「一般プロパティ」に、Business Space を実行している場所でのホストおよびポートを入力します。「署名者情報の取得」ボタンをクリックして、「OK」をクリックします。
 - 3) 両方のサーバーを再始動します。

SSO および SSL については詳しくは、WebSphere Application Server インフォメーション・センターを参照してください。

次のタスク

- 管理セキュリティーおよびアプリケーション・セキュリティーをオンにした後は、Business Space にログオンすると、ユーザー ID およびパスワードを求めるプロンプトが表示されます。ログオンするためには、選択したユーザー・レジストリーから有効なユーザー ID およびパスワードを使用する必要があります。管理セキュリティーをオンにした後は、管理コンソールに戻るたびに管理権限を持つユーザー ID でログオンする必要があります。
- Business Space のページおよびスペースに対する権限を設定するには、Business Space のページおよびスペースを作成するときに権限を管理することができます。
- ユーザーおよびグループに基づいてウィジェット内のデータのセキュリティーをセットアップするには、REST サービス・ゲートウェイ・アプリケーションへのユーザーのマッピングを変更する必要があります。REST サービス・ゲートウェイ・アプリケーションを選択し、右のパネルの、「詳細プロパティ」の下の、「ユーザー/グループ・マッピングへのセキュリティー・ロール」を選択します。RestServicesUser ロールの場合、ユーザーおよびグループを追加して、すべての REST サービス・ウィジェットのデータへのアクセスを制御することができます。
- ユーザー・グループ・ロールに基づいてウィジェットのデータへのアクセスを制限したい場合は、管理グループ・ロールに割り当てたユーザーを変更することを検討してください。管理コンソールを開いて、「セキュリティー」 → 「管理、アプリケーション、およびインフラストラクチャーの保護」 → 「管理グループ・ロ

ール」をクリックし、グループを選択することにより、ロール・リストを表示してこれらのロールに割り当てられているユーザーを確認することができます。

ビジネス・ルールやビジネス変数などの、ウィジェットの管理グループ・ロールに割り当てられたユーザーを変更することを検討したい場合があります。

例えば、システム正常性ウィジェットの場合、以下の管理ロールはすべてモニター権限を持ち、管理コンソールへのアクセスが可能であるため、これらのロールに割り当てられたユーザーはシステム正常性ウィジェットのデータにアクセスできます。

- モニター
- コンフィギュレーター
- オペレーター
- 管理者
- **Adminsecuritymanager**
- デプロイヤー
- **iscadmins**

これらの管理グループ・ロールにマップされたユーザーは、システム正常性ウィジェットのデータにアクセスできます。これらのロールにマップされていないユーザーは、システム正常性ウィジェットのデータにアクセスできません。

- さらに、ウィジェットの中には、ビジネス・ユーザーが作成した成果物へのロール・ベースのアクセスの追加層を持つものもあります。ソリューション管理の場合、セキュリティー・ロール・ウィジェットを使用すると、ビジネス・カレンダー・ウィジェットのタイムテーブルに対してメンバーが持つアクセス権限のレベルを決定するユーザーおよびグループのシステム・ロールまたはモジュール・ロールを割り当てることができます。レビューの場合、アクセス制御のレビュー・ウィジェットは、レビューを行いコメントを入力できるユーザーのアクセス権限を管理します。詳しくは、ご使用のウィジェットのオンライン・ヘルプを参照してください。

注:

SystemOut.log ファイルで次のエラーを見つけた場合は、処理できない余分な属性がユーザー・レジストリーに含まれている可能性があります。

```
00000046 SystemErr R Caused by: com.ibm.websphere.wim.exception.WIMSystemException: CWWIM1013E
The value of the property secretary is not valid for entity uid=xxx,c=us,ou=yyy,o=ibm.com.
00000046 SystemErr R at com.ibm.ws.wim.adapter.ldap.LdapAdapter.setPropertyValue(LdapAdapter.java:3338)
```

これらの属性をバイパスするには、ConfigServices.properties ファイルで以下の属性を設定します。

```
com.ibm.mashups.user.userProfile = LIMITED
com.ibm.mashups.user.groupProfile = LIMITED
```

ConfigServices.properties ファイルは、スタンドアロン・サーバーの場合は `profile_root%BusinessSpace% node_name%server_name %mm.runtime.prof%config%ConfigService.properties` に、クラスターの場合は `deployment_manager_profile_root%BusinessSpace% cluster_name% mm.runtime.prof%config%ConfigService.properties` にあります。

ConfigServices.properties ファイルに変更を加えた後、以下のパラメーターを指定して、wsadmin スクリプト・クライアントを使用して updatePropertyConfig コマンドを実行します。 **-serverName** および **-nodeName** (スタンドアロン・サーバーの場合) または **-clusterName** (クラスターの場合)、**-propertyFileName** (値は ConfigServices.properties ファイルのパス)、ならびに **-prefix** (値は Mashups_)。

注:

クラスターで Java 2 セキュリティーを有効にした場合は、Business Space のヘルプのロケーションに適用されるサーバー・ポリシーの入力設定を強化することを検討してください。

Business Space のヘルプのロケーション・ポリシーは次のようになっています。

```
grant codeBase      "file:${was.install.root}/profiles/profile_name/temp/
node_name/-" {

    permission java.security.AllPermission;

};
```

このポリシーを次のように変更して強化します。

```
grant codeBase      "file:${was.install.root}/profiles/profile_name/temp/
node_name/server_name/BusinessSpaceHelpEAR_node_name_server_name/
BusinessSpaceHelp.war/-" {

    permission java.security.AllPermission;

};
```

Business Space を操作できるように Tivoli Access Manager WebSEAL を構成する

Tivoli Access Manager WebSEAL を保有しており、それを Business Space と共に使用したい場合は、いくつかの追加構成ステップを実行する必要があります。

このタスクについて

Tivoli Access Manager WebSEAL を Business Space と共に使用する場合は、外部 Java Authorization Contract for Containers (JACC) プロバイダーと一緒に Tivoli Access Manager のセキュリティーを構成し、Tivoli Access Manager で WebSEAL を構成し、製品アプリケーション・サーバーで WebSEAL を構成し、ご使用の環境のホスト・ジャンクションを構成します。

手順

1. Tivoli Access Manager を JACC と一緒に構成します。
 - a. 管理コンソールと wsadmin コマンドのどちらを使用するかに応じて、以下のいずれかのステップを実行します。
 - 管理コンソールを使用して Tivoli Access Manager を JACC と一緒に構成する場合は、以下のステップを実行します。
 - 1) グローバル・セキュリティーを有効にします。

- a) 「セキュリティ」 → 「グローバル・セキュリティ」を選択します。
- b) Tivoli Access Manager と一緒に構成する LDAP サーバーの「管理セキュリティ」、「アプリケーション・セキュリティ」、および「Java 2 セキュリティ」を有効にします。
- c) 「グローバル・セキュリティ」 → 「LDAP」を選択し、以下の情報を入力して「OK」をクリックします。

名前	説明
サーバー・ユーザー ID	Tivoli Access Manager の設定で管理者 DN に入力したのと同じユーザー ID を入力します。例: user1
サーバー・ユーザー・パスワード	puser1
ホスト	Tivoli Access Manager Access Manager と一緒に構成する LDAP
ポート	例: 389
基本識別名	例: o=ibm, c=us
バインド識別名	例: cn=SecurityMaster,secAuthority=Default
バインド・パスワード	SecurityMaster ユーザーのパスワード

- d) 構成を保存して、サーバーを再始動します。
- 2) Tivoli Access Manager および JACC の外部許可を有効にします。
 - a) 「セキュリティ」 → 「グローバル・セキュリティ」 → 「外部許可プロバイダー」を選択します。
 - b) 「許可プロバイダー」リストで、「外部 JACC プロバイダー」を選択し、「構成」をクリックします。Tivoli Access Manager のデフォルトのプロパティは正しく設定されているので、デフォルトの値は変更しないでください。
 - c) 「追加プロパティ」の下の「Tivoli Access Manager プロパティ」を選択します。「組み込み Tivoli Access Manager を使用可能にする」を選択し、以下の情報を入力して「OK」をクリックします。

名前	値
クライアント listen ポートの設定	デフォルト設定は 8900 から 8999 です。別のポートを使用する場合にのみ、変更してください。
ポリシー・サーバー (name:port)	該当する <i>policyserver:port</i> を指定します。例: windomain3.rtp.raleigh.ibm.com:7135
許可サーバーと優先順位 (name:port:priority)	該当する <i>authorizationserver:port:priority</i> を指定します。例: windomain3.rtp.raleigh.ibm.com:7136:1

名前	値
管理者ユーザー名	Tivoli Access Manager サーバーで別の管理者名を使用する場合を除き、ユーザー名は「 sec_master 」(デフォルト)のままにしてください。
管理者ユーザー・パスワード	domino123
ユーザー・レジストリー識別名の接尾部	アプリケーション・サーバーに使用する名前を入力します。例: o=ibm,c=us
セキュリティー・ドメイン	セキュリティー・ドメインの設定はデフォルトのままにします。Tivoli Access Manager サーバーでデフォルトのドメインを使用しない場合は、この設定を変更します。Tivoli Access Manager サーバーで複数のドメインを作成し、デフォルト以外のドメインに接続する場合またはそのようなドメインを使用する場合は、この設定を変更します。
管理者ユーザーの識別名	ユーザーの完全修飾名を入力します。例: cn=user1,o=ibm,c=us 注: このユーザーは、LDAP ユーザー・レジストリー・パネルで構成された「サーバー・ユーザー ID」と同じです。

このサーバーは、Tivoli Access Manager サーバーに接続して、いくつかのプロパティ・ファイルをアプリケーション・サーバーの下に作成します。このプロセスには数分かかることがあります。エラーが発生した場合は、system Out を調べて、問題を修正してください。

- wsadmin ユーティリティーを使用して Tivoli Access Manager を JACC と一緒に構成する場合は、以下のステップを実行します。以下の手順は、デプロイメント・マネージャー・サーバーで 1 回だけ実行します。同期化が実行されると、構成パラメーターが管理対象サーバー (ノード・エージェントを含む) に転送されます。構成の変更を有効にするには、管理対象サーバー自体を再始動する必要があります。
 - 1) すべての管理対象サーバー (ノード・エージェントを含む) が始動されたことを確認します。
 - 2) サーバーを始動します。
 - 3) `install_root/bin` ディレクトリーから `wsadmin` コマンドを実行して、コマンド行ユーティリティーを開始します。
 - 4) `wsadmin` のプロンプトで、以下の表内の該当する情報を指定して、`configureTAM` コマンドを実行します。

Jacl の例:

```
$AdminTask configureTAM -interactive
```

Jython の例:

AdminTask.configureTAM('-interactive')続けて、以下の情報を入力します。

名前	値
製品サーバーのノード名	ノードを 1 つだけ指定するか、アスタリスク (*) を入力してすべてのノードを選択します。
Tivoli Access Manager ポリシー・サーバー	Tivoli Access Manager ポリシー・サーバーの名前、および接続ポートを入力します。 <i>policy_server:port</i> という形式を使用します。 ポリシー・サーバーの通信ポートは Tivoli Access Manager の構成時に設定されます。デフォルトのポートは 7135 です。
Tivoli Access Manager 許可サーバー	Tivoli Access Manager 許可サーバーの名前を入力します。 <i>auth_server:port:priority</i> という形式を使用します。許可サーバーの通信ポートは Tivoli Access Manager の構成時に設定されます。デフォルトのポートは 7136 です。エントリーをコンマで区切ることにより、複数の許可サーバーを指定することができます。複数の許可サーバーを構成しておくことは、フェイルオーバーおよびパフォーマンスの観点で有効です。優先順位の値は許可サーバーの使用順序です。例えば、 <i>auth_server1:7136:1,auth_server2:7137:2</i> です。優先順位 1 は、許可サーバーを 1 つだけ構成する場合でも指定する必要があります。
製品サーバーの管理者の識別名	製品サーバーのセキュリティー管理者 ID の完全識別名を入力します。例えば、 <i>cn=wasadmin,o=organization,c=country</i> です。詳細については、関連リンクを参照してください。
Tivoli Access Manager ユーザー・レジストリーの識別名サフィックス	例: <i>o=organization, c=country</i>
Tivoli Access Manager 管理者のユーザー名	Tivoli Access Manager の構成時に作成される Tivoli Access Manager 管理者のユーザー ID を入力します。通常、この ID は <i>sec_master</i> です。
Tivoli Access Manager 管理者のユーザー・パスワード	Tivoli Access Manager 管理者のパスワードを入力します。
Tivoli Access Manager セキュリティー・ドメイン	ユーザーおよびグループを保管するために使用する Tivoli Access Manager セキュリティー・ドメインの名前を入力します。Tivoli Access Manager の構成時にセキュリティー・ドメインを確立していない場合は、「戻る」をクリックしてデフォルトを受け入れます。

名前	値
Embedded Tivoli Access Manager リスニング・ポート・セット	製品サーバーは、ポリシー・サーバーからの許可データベース・アップデートを TCP/IP ポートで listen します。特定のノードおよびマシンで複数のプロセスが実行されることがあるので、それらのプロセスのため、ポートのリストが必要です。Tivoli Access Manager クライアントがリスニング・ポートとして使用するポートを、コンマで区切って指定します。ポートの範囲を指定する場合は、最小値と最大値をコロンで区切って指定します。例えば、7999, 9990:9999 です。
据え置き	このオプションを yes に設定すると、次の再始動時まで、管理サーバーの構成が据え置かれます。no に設定すると、管理サーバーの構成が即座に有効になります。管理対象サーバーは次の再始動時に構成されます。

- 5) 必要な情報をすべて入力したら、「F」を選択して構成プロパティを保存します。または、「C」を選択して構成プロセスを取り消し、入力した情報を破棄します。

SVTM TAM60 サーバーの場合の例:

```
wsadmin>$AdminTask configureTAM -interactive
組み込み Tivoli Access Manager の構成
```

このコマンドは、指定された 1 つまたは複数の WebSphere Application Server ノードで組み込みの Tivoli Access Manager を構成します。

```
WebSphere Application Server ノード名 (nodeName): *
*Tivoli Access Manager Policy Server (policySvr):
  windomain3.rtp.raleigh.ibm.com:7135
*Tivoli Access Manager Authorization Server (authSvrs):
  windomain3.rtp.raleigh.ibm.com:7136:1
*WebSphere Application Server 管理者の識別名 (wasAdminDN):
  cn=was61admin,o=ibm,c=us
*Tivoli Access Manager ユーザー・レジストリー識別名の接尾部 (dnSuffix):
  o=ibm,c=us
Tivoli Access Manager 管理者のユーザー名 (adminUid):
  [sec_master]
*Tivoli Access Manager 管理者のユーザー・パスワード (adminPasswd):
  domino123
Tivoli Access Manager セキュリティー・ドメイン (secDomain): [Default]
Embedded Tivoli Access Manager listen ポート・セット (portSet): [9900:9999]
据え置き (defer): [no]
```

組み込み Tivoli Access Manager の構成

F (完了)
C (キャンセル)

選択 [F, C]: [F] F

```
WASX7278I: 生成されたコマンド行: $AdminTask configureTAM {-policySvr
  windomain3.rtp.raleigh.ibm.com:7135 -authSvrs
  windomain3.rtp.raleigh.ibm.com:7136:1 -wasAdminDN cn=wa
組み込み Tivoli Access Manager 構成処置パラメーターが正常に保存されました。
ターゲット・ノード上で実行されているすべての
WebSphere Application Server インスタンスを再始動します。
```

- 6) 管理コンソールで、「セキュリティー」 → 「グローバル・セキュリティー」 → 「外部許可プロバイダー」を選択します。次に、「JACC プロバイダーを使用する外部許可」を選択して「OK」をクリックします。
 - 7) メイン・セキュリティー画面に移動して、「OK」をクリックします。変更を保存して、同期化します。
 - 8) セル内のすべてのプロセスを再始動します。
- b. Tivoli Access Manager を有効にする前にアプリケーションをインストールした場合 (例えば、LDAP セキュリティーを有効にして、保護されたアプリケーションをいくつかインストールし、ユーザーおよびグループをセキュリティー・ロールにマップした場合など) は、セキュリティー・ロール・マッピング情報をデプロイメント記述子から Tivoli Access Manager ポリシー・サーバーに伝搬させます。管理コンソールと `wsadmin` コマンドのどちらを使用するかに応じて、以下のいずれかのステップを実行します。
- `wsadmin` コマンド `propagatePolicyToJACCProvider` を使用する場合は、『JACC プロバイダーへのインストール済みアプリケーションのセキュリティー・ポリシーの `wsadmin` スクリプトを使用した伝搬』を参照してください。
 - 管理コンソールを使用する場合は、『前にデプロイ済みのアプリケーションに対するセキュリティー・ポリシーとロールの伝搬』を参照してください。
2. Tivoli Access Manager で WebSEAL を構成します。
- a. WebSEAL がインストールされて適切に構成されていることを確認します。
 - b. TAI++ の場合は `-c iv_creds` オプションを使用して、TAI の場合は `-c iv_user` オプションを使用して、WebSEAL と製品アプリケーション・サーバーの間のジャンクションを作成します。ご使用の環境に応じた変数を使用して、以下のいずれかのコマンドを 1 行に入力します。

TAI++ の場合

```
server task webseald-server create -t tcp -b supply -c iv_creds
-h host_name -p websphere_app_port_number junction_name
```

- c. (TAI の構成に使用できるように) トラステッド・ユーザー・アカウントを Tivoli Access Manager で作成するには、以下のコマンドを発行します。

```
pdadmin -a sec_master -p domino123

pdadmin sec_master> user create -gsouser -no-password-policy taiuser
"cn=taiuser,ou=websphere,o=ibm,c=us" taiuser taiuser ptaiuser

pdadmin sec_master> user modify taiuser password-valid yes

pdadmin sec_master> user modify taiuser account-valid yes
```

- d. WebSEAL 構成ファイル `webseal_install_directory/etc/webseald-default.conf` で、以下のパラメーターを設定します。

```
basicauth-dummy-passwd=webseal_userid_passwd
```

例えば、Tivoli Access Manager で taiuser または ptaiuser を設定する場合は、次のパラメーターを設定します。basicauth-dummy-passwd = ptaiuser

フォーム・ベースの認証を使用する場合は、以下のパラメーターを設定します。

forms-auth=both

ba-auth=none

3. 製品アプリケーション・サーバー上で TAI++ インターセプターを有効にして、そのサーバーで WebSEAL を構成します。
 - a. 管理コンソールで、「グローバル・セキュリティー」 → 「認証メカニズムと有効期限」を選択します。
 - b. 「Web および SIP セキュリティー」を展開し、「トラスト・アソシエーション」を選択します。チェック・ボックスを選択して、「適用」をクリックします。
 - c. 「インターセプター」 → 「TAMTrustAssociationInterceptorPlus」 → 「カスタム・プロパティー」を選択して、以下のプロパティーを追加します。

名前	値
com.ibm.websphere.security.webseal.configURL	\${WAS_INSTALL_ROOT}/java/jre/PdPerm.properties
com.ibm.websphere.security.webseal.id	iv-creds
com.ibm.websphere.security.webseal.loginId	taiuser (ユーザー taiuser または ptaiuser を Tivoli Access Manager で作成してある場合)

- d. セルを再始動します。
- e. クライアントにアクセスするため、`https://webseal_server_name:webseal_port/junction_name/web_uri_for_client` に移動します。
4. Business Space ウィジェットが表示されるように、ご使用の環境のホスト・ジャンクションを構成します。仮想ホスト・ジャンクションとトランスペアレント・ホスト・ジャンクションのどちらを使用するかに応じて、以下のいずれかのステップを実行します。
 - 仮想ホスト・ジャンクションを使用する場合は、それを作成します。仮想ホスト・ジャンクションを使用することにより、個別にジャンクションを作成しなくても済むようになります。
 - a. 仮想ホストが構成されていることを確認します。仮想ホスト・ジャンクションは、ホスト名、ポート番号、および転送アドレスをターゲット・ホストのものと突き合わせます。URL フィルタリングは一切実行されず、該当するすべての要求がターゲット・ホストに転送されます。
 - b. 同じ仮想ホストに対して以下のアプリケーションが有効になっていることを確認します。Business Space で使用している製品に応じて、これらのアプリケーションの一部を使用している場合と、全部を使用している場合が考えられます。
 - BPMAdministrationWidgets_nodename_servername (WebSphere Enterprise Service Bus および WebSphere Process Server の場合)
 - BusinessSpaceHelpEAR_nodename_servername (すべての製品の場合)

- BSpaceEAR_nodename_servername (すべての製品の場合)
- BSpaceWebformsEnabler_nodename_servername (すべての製品の場合)
- HumanTaskManagementWidgets_nodename_servername (WebSphere Process Server および WebSphere Business Monitor の場合)
- REST サービス・ゲートウェイ (すべての製品の場合)
- REST サービス・ゲートウェイ Dmgr (WebSphere Enterprise Service Bus および WebSphere Process Server の場合)
- mm.was_nodename_servername (すべての製品の場合)
- WBMDashboardWeb_nodename_servername (WebSphere Business Monitor の場合)
- wesbWidgets_nodename_servername (WebSphere Enterprise Service Bus の場合)
- widgets_busleader_nodename_servername (WebSphere Business Compass の場合)
- widgets_pubserver_nodename_servername (WebSphere Business Compass の場合)
- widgets_fabric_nodename_servername (WebSphere Business Services Fabric の場合)

注: このアプリケーション・リストに含まれているのは、Business Space に必要なアプリケーションのみです。状況によっては、Tivoli Access Manager WebSEAL を使用するが Business Space を使用しないシナリオ用に、他のアプリケーションをリストに追加することが必要な場合もあります。

- c. pdadmin を使用して、以下のコマンドを実行します。


```
server task webseal
server virtualhost create -t transport -h target_host [-p port] [-v
virtual_host_name] virtual_host_label
```

次の情報を使用します。

- *webseal server* は、仮想ホスト・エントリーを作成する WebSEAL サーバーの名前です。
- *transport* はトランスポートのタイプです。有効なエントリーは、tcp、ssl、tcpproxy、および sslproxy です。
- *target_host* は、必要なアプリケーションのホストです。
- *virtual_host_name* は、仮想ホスト・ジャンクションに対する HTTP 要求の突き合わせに使用されます。何も値を入力しない場合は、デフォルトで、ターゲット・ホストとポートを組み合わせて値が設定されます。例えば、*virtual_host_name* を myvirthost.ibm.com:80 に設定した場合、WebSEAL は myvirthost.ibm.com:80 を含んでいる URL を、pdadmin コマンドで指定されているホストと突き合わせて経路指定します。
- *virtual_host_label* は、WebSEAL のエントリーを識別するためのラベルであり、固有のものでなければなりません。

期待したとおりに Business Space が実行されるようにするため、トランスポートのタイプとして ssl と tcp の両方のエントリーを作成する必要が

あります。Secure Sockets Layer (SSL) と伝送制御プロトコル (TCP) の両方を同じ仮想ホスト・ジャンクションでサポートする必要がある場合は、`-g vhost_label` オプションを使用する必要があります。`vhost_label` は構成を共有するためのオリジナルの仮想ホストのラベルです。このオプションを指定することにより、事前に作成されている仮想ホスト・ジャンクション (事前に作成された仮想ホスト・ジャンクションであり、`virtual_host_label` が `-g` オプションで指定されるラベルと一致するもの) が検出され、その構成が共有されるようになります。2 番目のエントリーについても、やはり、固有の `virtual_host_label` が必要ですが、ターゲット・ホスト、ポート、およびその他の値を共有することができます。この `-g` オプションを指定しない場合、WebSEAL がターゲット・ホストおよびポートが前に作成されたジャンクションのものと同一であるとみなし (そのような仮想ホストを作成することは許可されない)、2 番目の仮想ホストは作成されません。

- トランスペアレント・ホスト・ジャンクションを使用する場合は、それぞれの製品のウィジェット用の一連のトランスペアレント・パス・ジャンクションを作成します。
 - a. `pdadmin` を使用して、以下のコマンドを実行します。 `server task webseald server create -t transport type (ssl) or (tcp) -x -h hostname path`

例えば、次のように入力します。 `server task webseald-default create -t tcp -x -h monServer.ibm.com /BusinessSpace`
 - b. ご使用の製品用に以下のコンテキスト・ルートを作成します (『リバース・プロキシ・サーバーの Business Space URL のマッピング』を参照)。
- 5. ブラウザーの Cookie および仮想ホストに関する問題を解決するため、追加構成ステップを実行します。
 - a. Business Space の Cookie の名前変更を解決するため、以下の内容を WebSEAL 構成ファイルに追加します。

```
[preserve-cookie-names]
```

```
name = com.ibm.bspace.UserName
```

```
name = com.ibm.wbimonitor.UserName
```

- b. オプション: デフォルト以外の仮想ホストをコンテキスト・ルートと一緒に使用する場合は、Business Space ページに関する問題が発生することがあります。その場合は、`-j` オプションをコンテキスト・ルートに追加して、Business Space ページの JavaScript がジャンクションで上書きされないようにすることが必要です。次のコマンドを実行します。 `server task default-webseald create -f -h hostname -p portnumber -t tcp -b supply -c iv-user,iv-creds,iv-groups -x -s -j -J trailer/root context`

Business Space のスーパーユーザー・ロールの割り当て

Business Space では、スーパーユーザー (または Business Space 管理者) となるユーザーを割り当てることができます。スーパーユーザーは、すべてのスペースとページの表示、編集、削除のほか、テンプレートの管理と作成を行うことができます。また、所有者 ID を変更することでスペースの所有権を変更することもできます。

始める前に

Business Space を構成するときに管理セキュリティを有効にする場合は、グループおよびスーパーユーザーに関する以下の情報について考慮してください。

- 特別なユーザー・グループ **administrators** に属するユーザーは、デフォルトでスーパーユーザー・ロールを持ちます。結果として、スーパーユーザー・ロールの割り当てはユーザー・グループのメンバーシップによって処理されます。
- シングル・サーバー環境の場合、Business Space サーバーはデフォルトのユーザー・レジストリーに **administrators** ユーザー・グループを作成します。構成中に指定された管理者 ID は、自動的にこのグループのメンバーとして追加されます。
- ネットワーク・デプロイメント環境の場合、自動的に **administrators** ユーザー・グループが作成されることはありません。createSuperUser.py スクリプトを使用してユーザー・グループを作成し、デフォルトのユーザー・レジストリーでそのグループにメンバーを追加してください。
- デフォルトのユーザー・レジストリーではなく別のユーザー・レジストリー (例えば、LDAP など) を使用する場合、またはデフォルトのユーザー・レジストリーを使用するが **administrators** ユーザー・グループを使用したくない場合は、Business Space のスーパーユーザーに使用するユーザー・グループを特定する必要があります。必ず、ユーザー・レジストリーで認識される値を指定してください。例えば、LDAP の場合は、cn=administrators,dc=company,dc=com というように名前を指定します。このユーザー・グループを特定する方法については、「次の作業」で管理者グループの変更手順を参照してください。
- WebSphere Portal の Business Space の場合は、デフォルト・グループ **wpsadmins** もスーパーユーザー・ロールに使用されます。このグループのメンバーには、ビジネス・スペースに対するスーパーユーザー・ロールが付与されます。

注: WebSphere Portal で Business Space を使用する場合は、セキュリティを有効にする必要があります。

Business Space の構成時に管理セキュリティを有効にしない場合、特別なユーザー ID **BPMAdministrator** のみに Business Space のスーパーユーザー・ロールが付与されます。

ネットワーク・デプロイメント環境を使用している場合は、createSuperUser.py スクリプトを実行してスーパーユーザー・ロールを割り当てる (ユーザー・グループを作成してメンバーを追加する) 必要があります。このスクリプトを実行する前に、以下のステップを実行します。

- デフォルトの **administrators** グループ名が変更されていないことを確認します。
- デフォルト・リポジトリをユーザー・レジストリーに使用します。
- Business Space がインストールされているプロファイルについて、Business Space 環境用のサーバーまたはデプロイメント・マネージャーを始動します。

手順

1. ユーザーにスーパーユーザー・ロールを割り当てるためのスクリプト `install_root%BusinessSpace%scripts%createSuperUser.py` を見つけます。

2. コマンド・プロンプトを開いてディレクトリー `profile_root¥bin` に移動します。この `profile_root` は、Business Space がインストールされているプロファイルのディレクトリーを表します。
3. 以下のコマンドを入力します。


```
wsadmin -lang jython -f
install_root¥BusinessSpace¥scripts¥createSuperUser.py user_short_name
password
```

 ここで、`user_short_name` は Virtual Member Manager (VMM) のユーザーの固有 ID、`password` はそのユーザーの VMM パスワードです。そのユーザーが VMM に存在する場合、そのユーザーが管理者グループに追加されません。

注: パスにスペースが含まれる場合 (例えば、`install_root` が `My install dir` である場合)、パス名を引用符で囲む必要があります。例えば、以下のコマンドを入力します。


```
wsadmin -lang jython -f "%My install
dir¥BusinessSpace¥scripts¥createSuperUser.py" user_short_name_in_VMM
```

次のタスク

Business Space を開くには、以下の URL を使用します。 `http://host:port/BusinessSpace` この `host` はサーバーが稼働しているホスト名で、`port` はサーバーのポート番号です。

デフォルトの特別なユーザー・グループ **administrators** は変更できます。現在のグループ名を確認したり別の名前に変更したりするには、以下の手順を実行します。

以下の構成ファイルで、測定基準 `com.ibm.mashups.adminGroupName` の値を検査します。

- スタンドアロン・サーバーの場合: `profile_root¥BusinessSpace¥node_name¥server_name¥mm.runtime.prof¥config¥ConfigService.properties`
- クラスターの場合: `deployment_manager_profile_root¥BusinessSpace¥cluster_name¥mm.runtime.prof¥config¥ConfigService.properties`

スタンドアロン・サーバー上で管理グループを変更する場合、以下のステップを実行します。

1. 構成ファイル `profile_root¥BusinessSpace¥node_name¥server_name¥mm.runtime.prof¥config¥ConfigService.properties` の測定基準 `com.ibm.mashups.adminGroupName` を変更します。
2. プロファイルの `wsadmin` 環境で `updatePropertyConfig` コマンド `$AdminTask updatePropertyConfig {-serverName server_name -nodeName node_name -propertyFileName "profile_root¥BusinessSpace¥node_name¥server_name¥mm.runtime.prof¥config¥ConfigService.properties" -prefix "Mashups_"}` を実行してから、`$AdminConfig save` を実行します。
3. サーバーを再始動します。

クラスター上で管理グループを変更する場合、以下のステップを実行します。

1. 構成ファイル `deployment_manager_profile_root¥BusinessSpace¥cluster_name¥mm.runtime.prof¥config¥ConfigService.properties` の測定基準 `com.ibm.mashups.adminGroupName` を変更します。

2. デプロイメント環境プロファイルの wsadmin 環境で updatePropertyConfig コマンド `$AdminTask updatePropertyConfig {-clusterName cluster_name -propertyFileName "deployment_manager_profile_root¥BusinessSpace¥cluster_name¥mm.runtime.prof¥config¥ConfigService.properties" -prefix "Mashups_"}` を実行してから、`$AdminConfig save` を実行します。
3. デプロイメント・マネージャーを再始動します。

スタンドアロン・サーバー上で、セキュリティが有効でないときにスーパーユーザーを変更する場合、以下のステップを使用します。


1. 構成ファイル `profile_root¥BusinessSpace¥node_name¥server_name¥mm.runtime.prof¥config¥ConfigService.properties` の測定基準 `noSecurityAdminInternalUserOnly` を変更します。
2. プロファイルの wsadmin 環境で updatePropertyConfig コマンド `$AdminTask updatePropertyConfig {-serverName server_name -nodeName node_name -propertyFileName "profile_root¥BusinessSpace¥node_name¥server_name¥mm.runtime.prof¥config¥ConfigService.properties" -prefix "Mashups_"}` を実行してから、`$AdminConfig save` を実行します。
3. サーバーを再始動します。

クラスター上で、セキュリティが有効でないときにスーパーユーザーを変更する場合、以下のステップを使用します。

1. 構成ファイル `deployment_manager_profile_root¥BusinessSpace¥cluster_name¥mm.runtime.prof¥config¥ConfigService.properties` の測定基準 `noSecurityAdminInternalUserOnly` を変更します。
2. デプロイメント環境プロファイルの wsadmin 環境で updatePropertyConfig コマンド `$AdminTask updatePropertyConfig {-clusterName cluster_name -propertyFileName "deployment_manager_profile_root¥BusinessSpace¥cluster_name¥mm.runtime.prof¥config¥ConfigService.properties" -prefix "Mashups_"}` を実行してから、`$AdminConfig save` を実行します。
3. デプロイメント・マネージャーを再始動します。

Business Space を構成するためのコマンド (wsadmin スクリプト)

スクリプト・オブジェクトまたはコマンド・クラスを検索して、そのコマンド構文の詳細を参照してください。

インフォメーション・センターの目次を開いて、この参照情報の場所を表示するには、インフォメーション・センターの枠にある「目次に表示」ボタン () をクリックします。

configureBusinessSpace コマンド

`configureBusinessSpace` コマンドを使用して、WebSphere が提供する Business Space のデータベースを構成します。

このコマンドは、Business Space のデータ・ソースを構成します。また、データベース表を作成および構成するスクリプトを生成します。

コマンドを使用した後、以下のいずれかのコマンドを実行して、変更をマスター構成に保存します。

- Jython の場合:
AdminConfig.save()
- Jacl の場合:
\$AdminConfig save

必須パラメーター

-serverName *server_name*

構成のサーバー名を指定するパラメーター。サーバーでBusiness Space を構成するには、**serverName** と **nodeName** の両方を指定する必要があります。

-nodeName *node_name*

構成のノード名を指定するパラメーター。サーバーでBusiness Space を構成するには、**serverName** と **nodeName** の両方を指定する必要があります。

-clusterName *cluster_name*

構成のクラスター名を指定するパラメーター。クラスターでBusiness Space を構成するには、**clusterName** を指定する必要があります。

オプション・パラメーター

-schemaName *schema_name*

Business Space データベースの構成に使用するデータベース・スキーマを指定するオプション・パラメーター。デフォルト値は **IBMBUSSP** です。

-tablespaceDir *table_space_path*

テーブル・スペースの物理的なロケーションとして使用されるファイルのディレクトリー・パスまたはファイル名接頭部を指定するオプション・パラメーター。デフォルト値は **BSP** です。DB2、Oracle、および SQL Server で有効です (その他の場合は無視されます)。SQL Server の場合、このパラメーターは 1 次データ・ファイルおよびログ・ファイルに適用されます。

-tablespaceNamePrefix *table_space_prefix*

名前を固有にするためにテーブル・スペース名の先頭に追加される接頭部ストリングを指定するオプション・パラメーター。デフォルト値は **BSP** です。テーブル・スペース名の接頭部が 4 文字より長い場合は、4 文字に切り捨てられます。DB2、DB2 z/OS V8、DB2 z/OS V9、および Oracle で有効です (その他の場合は無視されます)。

-dbLocationName *database_location_name*

z/OS 上のデータベース・ロケーション名を指定するオプション・パラメーター。デフォルト値は、**BSP** または製品データベース名です。DB2 z/OS V8 および V9 で有効です (その他の場合は無視されます)。

-storageGroup *storage_group*

Business Space に使用する z/OS 上のストレージ・グループを指定するオプション・パラメーター。z/OS を使用する場合は、生成されたデータベース・スクリ

プトを実行する前に、それらのスクリプトを更新する必要があります。スクリプトについて詳しくは、『Business Space のデータベース表の構成』を参照してください。

-bspacedbDesign *database_design_file_name*

スキーマおよびテーブル・スペース・ディレクトリーを含め、すべてのデータベース構成情報の定義に使用するデータベース設計ファイルを指定するオプション・パラメーター。 **-bspacedbDesign** パラメーターを使用してデータベース設計ファイルを指定する場合、特定のデータベース構成情報についてデータベース設計ファイルの内容を指定変更する必要がない限り、**-schemaName** パラメーター、**-tablespaceDir** パラメーター、および **-storageGroup** パラメーターを指定する必要はありません。

注: Business Space のデータ・ソースには JNDI 名として jdbc/mashupDS が常に使用されるため、データベース設計ファイル内の JNDI 名は使用されません。 JNDI 名が jdbc/mashupDS のデータ・ソースが存在する場合、**-replaceDatasource true** パラメーターを同時に指定した場合を除き、このコマンドはプロファイルを構成せずに停止します。

-productTypeForDatasource *product_database*

Business Space とともに使用するデータ・ソースの作成に使用するプロパティを指定するオプション・パラメーター。 **productTypeForDatasource** を指定すると、WebSphere Process Server、WebSphere Enterprise Service Bus、WebSphere Business Monitor、および WebSphere Business Compass などのインストール済み製品のデータ・ソースに基づいてモデル化した、JNDI 名が jdbc/mashupDS の Business Space 用のデータソースが作成されます。有効な値は、WPS (WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus を指定する場合)、WPBS (WebSphere Business Compass を指定する場合)、および WBM (WebSphere Business Monitor を指定する場合) です。 **bspacedbDesign** パラメーターも指定した場合、**productTypeForDatasource** はデータベース・タイプおよび JDBC プロバイダーを指定変更し、データベース設計ファイル内の JNDI 名は使用されません。

注: JNDI 名が jdbc/mashupDS のデータ・ソースが存在する場合、**-replaceDatasource true** パラメーターを同時に指定した場合を除き、このコマンドはプロファイルを構成せずに停止します。

-replaceDatasource true/false

プロファイルが既に構成されている場合に **configureBusinessSpace** コマンドを実行するかどうかを指定するオプション・パラメーター。デフォルト値は **false** です。 Business Space のプロファイルが構成される際には、JNDI 名が jdbc/mashupDS のデータ・ソースが作成されます。データ・ソースが存在し、**-replaceDatasource true** を指定せずに **configureBusinessSpace** コマンドを実行した場合、このコマンドは構成を変更しません。 **true** を指定すると、このコマンドはデータ・ソースおよびその JDBC プロバイダーを削除し、これらを新しく作成して、新しい DDL スクリプトを作成します。

-save true/false

構成変更を保存することを示すパラメーター。デフォルト値は **false** です。

例

以下の例では、`configureBusinessSpace` コマンドを使用して、サーバーで `Business Space` データ・ソースを構成します。

- Jython の例:

```
AdminTask.configureBusinessSpace('[-nodeName myNode -serverName myServer]')
```

- Jacl の例:

```
$AdminTask configureBusinessSpace {-nodeName myNode -serverName myServer}
```

以下の例では、`configureBusinessSpace` を使用して、クラスター上で `Business Space` データ・ソースを構成して変更内容を保存します。

- Jython の例:

```
AdminTask.configureBusinessSpace('[-clusterName myCluster -save true]')
```

- Jacl の例:

```
$AdminTask configureBusinessSpace {-clusterName myCluster -save true}
```

以下の例では、`configureBusinessSpace` を使用して、`WebSphere Process Server` のスキーマ名と製品データ・ソースを指定して、クラスター上で `Business Space` データ・ソースを構成します。

- Jython の例:

```
AdminTask.configureBusinessSpace('[-clusterName myCluster -schemaName myCluster -productTypeForDatasource WPS -save true]')
```

- Jacl の例:

```
$AdminTask configureBusinessSpace {-clusterName myCluster -schemaName myCluster -productTypeForDatasource WPS -save true}
```

以下の例では、`configureBusinessSpace` を使用して、データベース設計ファイルに含まれるデータベース情報を使用して、クラスター上で `Business Space` データ・ソースを構成します。

- Jython の例:

```
AdminTask.configureBusinessSpace('[-clusterName myCluster -bspacedbDesign "C:¥Bspace_dbDesign.properties" -save true]')
```

- Jacl の例:

```
$AdminTask configureBusinessSpace {-clusterName myCluster -bspacedbDesign "C:¥Bspace_dbDesign.properties" -save true}
```

`configureLotusWebformServer` コマンド

`configureLotusWebformServer` コマンドを使用して、`IBM Lotus WebForm Server` を使用するよう `Business Space` を構成します。`Lotus Webform Server` はヒューマン・タスク管理ウィジェットを使用し、`WebSphere Process Server` サーバーおよびクラスター、ならびに `WebSphere Process Server` を含む `Business Process Management` 製品のあらゆるインストール済み環境に適用されます。

configureLotusWebformServer コマンドは、IBM Lotus WebForm Server がヒューマン・タスク管理ウィジェットを使用するよう Business Space を構成します。Webform Server は、スクリプトを実行するマシンと同じマシンにインストールされている必要があります。

コマンドを使用した後、以下のいずれかのコマンドを実行して、変更をマスター構成に保存します。

- Jython の場合:
`AdminConfig.save()`
- Jacl の場合:
`$AdminConfig save`

必須パラメーター

-serverName *server_name*

構成のサーバー名を指定するパラメーター。サーバー上に Business Space ウィジェットを構成するには、**serverName** と **nodeName** の両方を指定する必要があります。

-nodeName *node_name*

構成のノード名を指定するパラメーター。serverName、nodeName、または clusterName のいずれかが必須です。サーバーで構成するには、**serverName** および **nodeName** の両方を指定する必要があります。

-clusterName *cluster_name*

構成のクラスター名を指定するパラメーター。クラスターで Business Space を構成するには、**clusterName** を指定する必要があります。

-translatorHTTPLocation *URL*

Webform Server Translator の場所を指定するパラメーター。場所のデフォルト URL は `http://localhost:8085/translator` です。

-serverInstallRoot *Webform_Server_install_root*

Lotus Webform Server がインストールされている絶対パスを指定するパラメーター。例えば、Lotus Webform Server のインストール・ルートは、`C:/IBM/LotusWebForms/3.5/WebFormServer` である場合があります。

オプション・パラメーター

-save *true|false*

構成変更を保存することを示すパラメーター。デフォルト値は `true` です。

例

以下の例では、Business Space が Lotus Webform Server を使用してヒューマン・タスク管理ウィジェットと連携するように、configureLotusWebformServer を使用して Business Space を構成します。

- Jython の例:

```
AdminTask.configureLotusWebformServer(['-nodeName node_name  
-serverName server_name -translatorHTTPLocation  
http://localhost:9080/translator -serverInstallRoot  
C:/IBM/LotusWebForms/3.5/WebFormServer'])
```
- Jacl の例:

```
$AdminTask configureLotusWebformServer {-nodeName node_name
-serverName server_name -translatorHTTPLocation
http://localhost:9080/translator
-serverInstallRoot C:/IBM/LotusWebForms/3.5/WebFormServer}
```

getBusinessSpaceDeployStatus コマンド

getBusinessSpaceDeployStatus コマンドを使用して、特定のデプロイメント・ターゲットで WebSphere が提供する Business Spaceが構成されているかどうかを確認します。

このコマンドは、指定したサーバー上、ノード上、またはクラスター上でBusiness Space が構成されているかどうかを検査します。パラメーターを設定しなかった場合は、Business Space がセルで構成されているかどうかを検査されます。

コマンドを使用した後、以下のいずれかのコマンドを実行して、変更をマスター構成に保存します。

- Jython の場合:
AdminConfig.save()
- Jacl の場合:
\$AdminConfig save

必須パラメーター

-serverName *server_name*

Business Space が構成されているかどうかを検査するサーバー名を指定するパラメーター。

-nodeName *node_name*

Business Space が構成されているかどうかを検査するノード名を指定するパラメーター。

-clusterName *cluster_name*

Business Space が構成されているかどうかを検査するクラスター名を指定するパラメーター。

例

以下の例では、getBusinessSpaceDeployStatus コマンドを使用して、サーバーで Business Space が構成されているかどうかを検査します。

- Jython の例:
AdminTask.getBusinessSpaceDeployStatus(['-nodeName myNode -serverName myServer'])
- Jacl の例:
\$AdminTask getBusinessSpaceDeployStatus {-nodeName myNode -serverName myServer}

以下の例では、getBusinessSpaceDeployStatus コマンドを使用して、クラスターで Business Space が構成されているかどうかを検査します。

- Jython の例:
AdminTask.getBusinessSpaceDeployStatus(['-clusterName myCluster'])
- Jacl の例:

```
$AdminTask getBusinessSpaceDeployStatus {-clusterName myCluster}
```

以下の例では、`getBusinessSpaceDeployStatus` コマンドを使用して、セル内の `Business Space` に対して構成されているすべてのデプロイメント・ターゲット (サーバーおよびクラスター) のリストを返します。

コマンドをプロファイル・ルートの `bin` ディレクトリーから実行すると、コマンドはセル内の `Business Space` に構成されたすべてのデプロイメント・ターゲット (サーバーおよびクラスター) のリストを返します。

コマンドをインストール・ルートの `bin` ディレクトリーから実行すると、コマンドは同じインストール・ルート・ディレクトリー内の `Business Space` に構成されたすべてのデプロイメント・ターゲット (サーバーおよびクラスター) のリストを返します。

- Jython の例:

```
AdminTask.getBusinessSpaceDeployStatus()
```

- Jacl の例:

```
$AdminTask getBusinessSpaceDeployStatus
```

installBusinessSpace コマンド

`installBusinessSpace` コマンドを使用して、ランタイム環境で WebSphere が提供する `Business Space` をセットアップします。

`installBusinessSpace` コマンドによって、`Business Space` のエンタープライズ・アーカイブ (EAR) ファイルがランタイム環境にインストールされます。

コマンドを使用した後、以下のいずれかのコマンドを実行して、変更をマスター構成に保存します。

- Jython の場合:

```
AdminConfig.save()
```

- Jacl の場合:

```
$AdminConfig save
```

必須パラメーター

-serverName *server_name*

構成のサーバー名を指定するパラメーター。サーバーで `Business Space` を構成するには、**serverName** と **nodeName** の両方を指定する必要があります。

-nodeName *node_name*

構成のノード名を指定するパラメーター。 `serverName`、`nodeName`、または `clusterName` のいずれかが必須です。サーバーで `Business Space` を構成するには、**serverName** と **nodeName** の両方を指定する必要があります。

-clusterName *cluster_name*

構成のクラスター名を指定するパラメーター。クラスターで `Business Space` を構成するには、**clusterName** を指定する必要があります。

オプション・パラメーター

-noWidgets true/false

オプション・パラメーターであり、true に設定すると、製品ウィジェットがデプロイメント・ターゲットにインストールされなくなります。そのため、ウィジェットをインストールしたい場合は、Business Space が正常に構成された後に `installBusinessSpaceWidgets` コマンドを使用する必要があります。デフォルト値は false です。

-save true/false

構成変更を保存することを示すオプション・パラメーター。デフォルト値は false です。

例

以下の例では、`installBusinessSpace` コマンドを使用して、サーバーに Business Space EAR ファイルをインストールします。

- Jython の例:

```
AdminTask.installBusinessSpace('[-nodeName myNode -serverName myServer -save true]')
```

- Jacl の例:

```
$AdminTask installBusinessSpace {-nodeName myNode -serverName myServer -save true}
```

以下の例では、`installBusinessSpace` を使用して、クラスターに Business Space EAR ファイルをインストールします。

- Jython の例:

```
AdminTask.installBusinessSpace('[-clusterName myCluster -save true]')
```

- Jacl の例:

```
$AdminTask installBusinessSpace {-clusterName myCluster -save true}
```

installBusinessSpaceWidgets コマンド

`installBusinessSpaceWidgets` コマンドを使用して、WebSphere が提供する Business Space で使用するウィジェットをインストール、デプロイ、および登録します。

`installBusinessSpaceWidgets` コマンドは、圧縮ファイルまたはエンタープライズ・アーカイブ (EAR) ファイルに含まれる指定のウィジェットをインストール、デプロイ、および登録します。ウィジェットが既にデプロイされている場合、`installBusinessSpaceWidgets` コマンドは、バイナリーおよび登録情報をリフレッシュします。

ウィジェット圧縮ファイルの構造には、以下の項目が含まれています。

- [ear¥widgets_name.ear] 1 つ以上の EAR ファイル。
- [catalog¥catalog_name.xml]
- [endpoints¥*.xml] ウィジェット・エンドポイント
- [templates¥*.zip] テンプレートは圧縮ファイルに格納され、IBM Lotus Mashups テンプレート形式に従う必要があります。
- [help¥eclipse¥plugins¥*]

すべてのフォルダーが含まれている必要はありません。空のフォルダーは有効です。

コマンドを使用した後、以下のいずれかのコマンドを実行して、変更をマスター構成に保存します。

- Jython の場合:
`AdminConfig.save()`
- Jacl の場合:
`$AdminConfig save`

必須パラメーター

-serverName *server_name*

構成のサーバー名を指定するパラメーター。サーバーでBusiness Space を構成するには、**serverName** と **nodeName** の両方を指定する必要があります。

-nodeName *node_name*

構成のノード名を指定するパラメーター。serverName、nodeName、または clusterName のいずれかが必須です。サーバー上にBusiness Space ウィジェットを構成するには、**serverName** と **nodeName** の両方を指定する必要があります。

-clusterName *cluster_name*

構成のクラスター名を指定するパラメーター。クラスターでBusiness Space のウィジェットを構成するには、**clusterName** を指定する必要があります。

-widgets *widgets_path*

以下のいずれかを指定するパラメーター。

- ウィジェットを含む圧縮ファイルまたは EAR ファイルが置かれているディレクトリーの絶対パス。ディレクトリーを指定すると、そのディレクトリー内のすべての圧縮ファイルおよび EAR ファイルに含まれているすべてのウィジェットがインストールされます。
- ウィジェットを含む個別の圧縮ファイルの絶対パス。
- ウィジェットを含む個別の EAR ファイルの絶対パス。

-save *true|false*

構成を保存することを示すパラメーター。デフォルト値は true です。

オプション・パラメーター

-save *true|false*

構成を保存することを示すパラメーター。デフォルト値は true です。

例

以下の例では、installBusinessSpaceWidgets を使用して、サーバーにウィジェットをインストール、デプロイ、および登録します。

- Jython の例:

```
AdminTask.installBusinessSpaceWidgets(['-nodeName node_name  
-serverName server_name -widgets  
install_root%BusinessSpace%widgets%MyWidget.zip'])
```
- Jacl の例:


```
$AdminTask installBusinessSpaceWidgets {-nodeName node_name
-serverName server_name -widgets
install_root%BusinessSpace%widgets%MyWidget.zip}
```

以下の例では、`installBusinessSpaceWidgets` を使用して、クラスターにウィジェットをインストール、デプロイ、および登録します。

- Jython の例:

```
AdminTask.installBusinessSpaceWidgets('[-clusterName cluster_name
-widgets X:%WPS%Temp]')
```

- Jacl の例:

```
$AdminTask installBusinessSpaceWidgets {-clusterName cluster_name
-widgets X:%WPS%Temp}
```

Business Space のテンプレートおよびスペースを更新するには、`installBusinessSpaceWidgets` または `updateBusinessSpaceWidgets` コマンドの実行後に手動ステップが必要です。詳しくは、『ウィジェットのインストールまたは更新後の Business Space テンプレートおよびスペースの更新』を参照してください。

registerRESTServiceEndpoint コマンド

`registerRESTServiceEndpoint` コマンドを使用して、構成されて使用可能な Representational State Transfer (REST) エンドポイントを登録して、チームが Business Space 内でウィジェットを使用できるようにします。

このコマンドは REST サービス・エンドポイントを登録することで、Business Space が製品のウィジェットに正しく接続されるようにします。このコマンドは、Business Space と同じセル内にある REST サービスのエンドポイントを登録します。

コマンドを使用した後、以下のいずれかのコマンドを実行して、変更をマスター構成に保存します。

- Jython の場合:

```
AdminConfig.save()
```

- Jacl の場合:

```
$AdminConfig save
```

必須パラメーター

-clusterName *name_of_rest_services_cluster*

REST サービスのクラスター名を指定するパラメーター。クラスターの REST サービス・エンドポイントを登録するときには、**clusterName** を指定する必要があります。

-nodeName *name_of_rest_services_node*

REST サービスのノード名を指定するパラメーター。サーバーの REST サービス・エンドポイントを登録するときには、**serverName** および **nodeName** の両方を指定する必要があります。

-serverName *name_of_rest_services_server*

REST サービスのサーバー名を指定するパラメーター。サーバーの REST サービス・エンドポイントを登録するときには、**serverName** および **nodeName** の両方を指定する必要があります。

-type *name_of_service_type*

サービスのタイプ。このパラメーターはオプションです。このパラメーターを指定しない場合、指定されたデプロイメント・ターゲット上の指定された REST サービス・プロバイダーについて構成されているすべての固有の REST サービス・エンドポイントが登録されます。

-businessSpaceClusterName *name_of_business_space_cluster*

Business Space のクラスター名。Business Space がクラスター上に構成されている場合、**businessSpaceClusterName** を指定する必要があります。

-businessSpaceNodeName *name_of_business_space_node*

Business Space のノード名。Business Space がサーバー上に構成されている場合、**businessSpaceServerName** および **businessSpaceNodeName** の両方を指定する必要があります。

-businessSpaceServerName *name_of_business_space_server*

Business Space のサーバー名。Business Space がサーバー上に構成されている場合、**businessSpaceServerName** および **businessSpaceNodeName** の両方を指定する必要があります。

オプション・パラメーター

-appName *name_of_provider_application*

REST サービス・プロバイダーのアプリケーション名。

-webModuleName *name_of_web_module*

REST サービス・プロバイダーの Web モジュール名。

-version *name_of_version*

REST サービス・プロバイダーのバージョン。

例

以下の例では、registerRESTServiceEndpoint コマンドを使用します。ここでは、クラスター上で構成済みで使用可能なすべての REST サービスをBusiness Space に登録します。

- Jython の例:

```
AdminTask.registerRESTServiceEndpoint(['-clusterName  
name_of_rest_services_cluster -businessSpaceClusterName  
name_of_business_space_cluster'])
```

- Jacl の例:

```
$AdminTask registerRESTServiceEndpoint {-clusterName  
name_of_rest_services_cluster -businessSpaceClusterName  
name_of_business_space_cluster}
```

uninstallBusinessSpaceWidgets コマンド

uninstallBusinessSpaceWidgets コマンドを使用して、プロファイルからウィジェットおよびウィジェット定義を除去します。これには、個々のウィジェット資産 (アプリケーション、カタログ、エンドポイント、スペース、テンプレート、ヘルプ) の除去が含まれます。

`uninstallBusinessSpaceWidgets` コマンドは、指定された圧縮ファイル内またはエンタープライズ・アーカイブ (EAR) ファイル内のウィジェット・ファイルを削除します。ウィジェット圧縮ファイルの構造には、以下の項目が含まれています。

- `[ear¥widgets_name.ear]` 1 つ以上の EAR ファイル。
- `[catalog¥catalog_name.xml]`
- `[endpoints¥*.xml]` ウィジェット・エンドポイント
- `[templates¥*.zip]` テンプレートは圧縮ファイルに格納され、IBM Lotus Mashups テンプレート形式に従う必要があります。
- `[help¥eclipse¥plugins¥*]`

すべてのフォルダーが含まれている必要はありません。空のフォルダーは有効です。

注: `updateBusinessSpaceWidgets` コマンド以外の方法を使用して REST エンドポイント情報をカスタマイズした場合、エンドポイントに対するそれらの変更内容は、`uninstallBusinessSpaceWidgets` コマンドの実行後に失われます。

コマンドを使用した後、以下のいずれかのコマンドを実行して、変更をマスター構成に保存します。

- Jython の場合:
`AdminConfig.save()`
- Jacl の場合:
`$AdminConfig save`

必須パラメーター

-serverName *server_name*

構成のサーバー名を指定するパラメーター。サーバーで Business Space を構成するには、**serverName** と **nodeName** の両方を指定する必要があります。

-nodeName *node_name*

構成のノード名を指定するパラメーター。サーバーで Business Space を構成するには、**serverName** と **nodeName** の両方を指定する必要があります。

-clusterName *cluster_name*

構成のクラスター名を指定するパラメーター。クラスターで Business Space を構成するには、**clusterName** を指定する必要があります。

-widgets *widgets_path*

以下のいずれかを指定するパラメーター。

- ウィジェットを含む圧縮ファイルまたはウィジェット EAR ファイルが置かれているディレクトリーの絶対パス。ディレクトリーを指定すると、そのディレクトリー内のすべての圧縮ファイルおよび EAR ファイルに含まれているすべてのウィジェットがインストールされます。
- ウィジェットを含む個別の圧縮ファイルの絶対パス。
- ウィジェットを含む個別の EAR ファイルの絶対パス。

オプション・パラメーター

-save *true|false*

構成変更を保存することを示すパラメーター。デフォルト値は `true` です。

例

以下の例では、`uninstallBusinessSpaceWidgets` コマンドを使用して、クラスターからウィジェットを除去します。

注: これは、単に説明を目的とする例であり、含まれている変数の値はコードのストリットとして再利用するためのものではありません。

- Jython の例:

```
AdminTask.uninstallBusinessSpaceWidgets('[-clusterName  
cluster_name -widgets X:%WPS%Temp]')
```

- Jacl の例:

```
$AdminTask uninstallBusinessSpaceWidgets {-clusterName  
cluster_name -widgets X:%WPS%Temp}
```

updateBusinessSpaceWidgets コマンド

`updateBusinessSpaceWidgets` コマンドを使用して、以前に構成した Business Space のウィジェットと、そのエンドポイント、カタログ、テンプレート、およびヘルプ・プラグインを更新します。

`updateBusinessSpaceWidgets` コマンドは、Business Space に以前インストールされて構成済みのウィジェットのウィジェット・バイナリー・ファイル、カタログ・ファイル、エンドポイント・ファイル、テンプレート、およびヘルプ・プラグインを更新します。

`updateBusinessSpaceWidgets` コマンドは、指定された圧縮ファイル内またはエンタープライズ・アーカイブ (EAR) ファイル内のウィジェット・ファイルを更新します。ウィジェット圧縮ファイルの構造には、以下の項目が含まれています。

- [ear%widgets_name.ear] 1 つ以上の EAR ファイル。
- [catalog%catalog_name.xml]
- [endpoints%*.xml] ウィジェット・エンドポイント
- [templates%*.zip] テンプレートは圧縮ファイルに格納され、IBM Lotus Mashups テンプレート形式に従う必要があります。
- [help%eclipse%plugins%*]

すべてのフォルダーが含まれている必要はありません。空のフォルダーは有効です。

コマンドを使用した後、以下のいずれかのコマンドを実行して、変更をマスター構成に保存します。

- Jython の場合:

```
AdminConfig.save()
```

- Jacl の場合:

```
$AdminConfig save
```

必須パラメーター

-serverName *server_name*

構成のサーバー名を指定するパラメーター。サーバー上にBusiness Space ウィジェットを構成するには、**serverName** と **nodeName** の両方を指定する必要があります。

-nodeName *node_name*

構成のノード名を指定するパラメーター。serverName、nodeName、または clusterName のいずれかが必須です。サーバー上にBusiness Space ウィジェットを構成するには、**serverName** と **nodeName** の両方を指定する必要があります。

-clusterName *cluster_name*

構成のクラスター名を指定するパラメーター。クラスターでBusiness Space を構成するには、**clusterName** を指定する必要があります。

オプション・パラメーター

-widgets *widget_path*

ウィジェットのエンタープライズ・アーカイブ (EAR) ファイルまたはウィジェット圧縮ファイルが配置されているディレクトリーの絶対パス、または特定の EAR ファイルまたはウィジェット圧縮ファイルの絶対パスを指定するパラメーター。

-endpoints *endpoint_path*

ウィジェット・エンドポイント・ファイルが配置されているディレクトリーの絶対パス、または特定のエンドポイント・ファイルの絶対パスを指定するパラメーター。

-catalogs *catalog_path*

ウィジェット・カタログ・ファイルが格納されているディレクトリーの絶対パス、または特定のカタログ・ファイルの絶対パスを指定するパラメーター。

-templates *template_path*

ウィジェット・テンプレート・ファイルが格納されているディレクトリーの絶対パス、または特定のテンプレート・ファイルの絶対パスを指定するパラメーター。

-helpplugins *help_path*

ウィジェット・オンライン・ヘルプ・プラグイン・ファイルが格納されているディレクトリーの絶対パス、または特定のウィジェット・オンライン・ヘルプ・プラグイン・ファイルの絶対パスを指定するパラメーター。

-noWidgets *truelfalse*

ウィジェット圧縮ファイルに含まれているウィジェット EAR ファイルを更新しないことを指定します。

-noEndpoints *truelfalse*

ウィジェット圧縮ファイルに含まれている指定したエンドポイント・ファイルを更新しないことを指定します。

-noCatalogs *truelfalse*

ウィジェット圧縮ファイルに含まれているカタログ定義ファイルを更新しないことを指定します。

-noTemplates true/false

ウィジェット圧縮ファイルに含まれているテンプレートを更新しないことを指定します。

-noHelp true/false

ウィジェット圧縮ファイルに含まれているヘルプ・ファイルを更新しないことを指定します。

-save true/false

構成を保存することを示すパラメーター。デフォルト値は true です。

例

以下の例では、`updateBusinessSpaceWidgets` を使用して、クラスター上のウィジェットを更新します。

Jacl の例:

```
$AdminTask updateBusinessSpaceWidgets {-clusterName cluster_name
    -endpoints endpoint_path -widgets widget_path}
```

Jython の例:

```
AdminTask.updateBusinessSpaceWidgets(['-clusterName',
    cluster_name, '-endpoints', endpoint_path,
    '-widgets', widget_path])
```

以下の例では、`updateBusinessSpaceWidgets` を使用して、サーバー上のウィジェットを更新します。

Jacl の例:

```
$AdminTask updateBusinessSpaceWidgets {-nodeName node_name
    -serverName server_name -endpoints endpoint_path}
```

Jython の例:

```
AdminTask.updateBusinessSpaceWidgets(['-nodeName',
    node_name, '-serverName', server_name, '-endpoints',
    endpoint_path])
```

Business Space のテンプレートおよびスペースを更新するには、`installBusinessSpaceWidgets` または `updateBusinessSpaceWidgets` コマンドの実行後に手動ステップが必要です。詳しくは、『ウィジェットのインストールまたは更新後の Business Space テンプレートおよびスペースの更新』を参照してください。

updateRESTGatewayService コマンド

`updateRESTGatewayService` コマンドを使用して、Representational State Transfer (REST) サービスが構成されて使用可能になるように REST ゲートウェイ・サービスを更新します。

このコマンドは、REST サービスが構成されて使用可能になるように REST ゲートウェイ・サービスを更新します。REST サービスのデプロイメントは、スタンドアロン・サーバー・プロファイルで自動的に実行されます。他のタイプの構成では、「REST サービス」管理コンソール・ページまたは `updateRESTGatewayService` によって、Business Space 内の製品のすべてのウィジェットに対して REST サービスを構成することができます。

注: WebSphere Process Server の場合、Business Process Choreographer および Human Task Manager の REST サービスは、Business Process Choreographer コンテナおよび Human Task Manager コンテナを構成するときに構成されます。

コマンドを使用した後、以下のいずれかのコマンドを実行して、変更をマスター構成に保存します。

- Jython の場合:
`AdminConfig.save()`
- Jacl の場合:
`$AdminConfig save`

必須パラメーター

-clusterName *cluster_name*

REST サービスのクラスター名を指定するパラメーター。クラスター上に REST サービスを構成するには、**clusterName** を指定する必要があります。

-nodeName *node_name*

REST サービスのノード名を指定するパラメーター。サーバー上で REST サービスを構成するには、**serverName** と **nodeName** の両方を指定する必要があります。

-serverName *server_name*

REST サービスのサーバー名を指定するパラメーター。サーバー上で REST サービスを構成するには、**serverName** と **nodeName** の両方を指定する必要があります。

-enable **true** | **false**

REST サービスが使用可能かどうかを示します。有効な値は、**true** または **false** です。

オプション・パラメーター

-type *name_of_service_type*

REST サービスのタイプ。

-version *name_of_version*

REST サービスのバージョン。

例

以下の例では、`updateRESTGatewayService` コマンドを使用して、REST サービスが構成されて使用可能になるように REST ゲートウェイ・サービスを更新します。

- Jython の例:
`AdminTask.updateRESTGatewayService(['-nodeName node1 -serverName server1 -type "{com.ibm.bpm}TimeTable" -version 6.2.0.0 -enable true'])`
- Jacl の例:
`$AdminTask updateRESTGatewayService {-nodeName node1 -serverName server1 -type "{com.ibm.bpm}TimeTable" -version 6.2.0.0 -enable true}`

ウィジェットのインストールまたは更新後の Business Space テンプレートおよびスペースの更新

クラスター環境で `installBusinessSpaceWidgets` または `updateBusinessSpaceWidgets` コマンドを実行した後、Business Space のテンプレートおよびスペースを更新するための手動ステップを実行する必要があります。

始める前に

以前に `installBusinessSpaceWidgets` コマンドまたは `updateBusinessSpaceWidgets` コマンドを使用したことがある場合は、以下の追加ステップを実行する必要があります。

手順

1. Business Space がクラスター内で構成されている場合は、以下のステップを実行します。
 - a. 以下のようにして、`oobLoadedStatus.properties` ファイルのカスタム・プロファイルを識別します。
 - 1) デプロイメント・マネージャー・プロファイルで、
`deployment_manager_profile_root¥BusinessSpace¥cluster_name¥mm.runtime.prof¥config¥ConfigService.properties` ファイルを開きます。
 - 2) `com.ibm.mashups.directory.templates` プロパティまたは `com.ibm.mashups.directory.spaces` プロパティでセル、ノード、およびサーバーの名前を探します。

例えば、`com.ibm.mashups.directory.templates = config/cells/Cell101/nodes/Node01/servers/Server1/mm/templates` の場合、カスタム・プロファイルは `Cell101` というセル名と `Node01` というノード名で探すことができます。
 - 3) セル、ノード、およびサーバーの名前を使用して、カスタム・プロファイルを探します。
 - b. カスタム・プロファイルで、
`custom_profile_root¥BusinessSpace¥cluster_name¥mm.runtime.prof¥public¥oobLoadedStatus.properties` ファイルを開き、`importTemplates.txt` プロパティまたは `importSpaces.txt` プロパティを以下のように更新します。

```
importTemplates.txt=true
importSpaces.txt=true
```
 - c. カスタム・プロファイルを再同期します。
 - 1) 管理コンソールを開き、「システム管理」 → 「ノード」 をクリックします。
 - 2) 「完全な再同期」 をクリックします。
 - d. クラスターを再始動します。
2. Business Space が管理対象サーバー内で構成されている場合は、以下のステップを実行します。

- a. 管理対象サーバーが置かれているカスタム・プロファイルで、
`custom_profile_root%BusinessSpace%node_name%server_name%`
`mm.runtime.prof%public%oobLoadedStatus.properties` ファイルを開き、
`importTemplates.txt` プロパティまたは `importSpaces.txt` プロパティを以下のように更新します。

```
importTemplates.txt=true
importSpaces.txt=true
```
- b. カスタム・プロファイルを再同期します。
 - 1) 管理コンソールを開き、「システム管理」 → 「ノード」 をクリックします。
 - 2) 「完全な再同期」 をクリックします。
- c. サーバーを再始動します。

WebSphere Portal での Business Space の構成

チームが WebSphere Portal を使用する場合、WebSphere Portal 環境で動作するように Business Space を構成することができます。

始める前に

このタスクを完了する前に、以下のタスクを完了しておく必要があります。

- WebSphere Portal V6.1.0.3 とフィーチャー・パック V6.1.5 のインストールおよび構成が完了している。
- WebSphere ビジネス・プロセス・マネジメント製品 (WebSphere Business Compass、WebSphere Business Monitor、WebSphere Business Services Fabric、WebSphere Enterprise Service Bus、または WebSphere Process Server) のインストール。
- Representational State Transfer (REST) サービスの構成 (ウィジェットが実行時にサービスにアクセスできるようにするため)。
- 使用するウィジェットに固有の構成ステップの実行 (必要な場合)。

WebSphere Portal の管理インストールの場合: ポータルのインストール中に管理インストール・オプションを選択しており、WebSphere Portal で Business Space を使用する場合は、マッシュアップ統合を使用可能にし、新規マッシュアップ・ルート・ページを追加して、アクセス制御を構成する必要があります。以下の手順に従ってください。

1. コマンド・プロンプトを開き、ディレクトリー `wp_profile_root%ConfigEngine` にナビゲートします。
2. 以下の構成タスクを実行します。

```
ConfigEngine.sh|bat deploy-portal-mashup-ui
-DWasPassword=was_password
-DPortalAdminPwd=portal_password
```

`wp_profile_root%ConfigEngine%properties` ディレクトリーにある `wkplc.properties` ファイルにパスワードが追加されている場合は、コマンド行でこれらのパスワードを指定する必要はありません。このスクリプトは、Home ノードの隣に My Mashups という名前のトップレベル・ページを作成します。

3. WebSphere Portal の資料の説明に従って、ポータルでのマッシュアップのアクセス制御設定を構成します。

WebSphere Portal で作動するように Business Space ウィジェットをセットアップする場合、以下の問題を考慮してください。

- WebSphere Portal サーバーにはビジネス・プロセス・マネジメント製品をインストールしないでください。
- 他の WebSphere Portal ポートレットと、Business Space のウィジェットを、同じページで混用することはできません。

サーバー環境またはクラスター環境で WebSphere Portal の Business Space をセットアップするには、以下のいずれかの手順を実行します。

WebSphere Portal サーバーでの Business Space の構成

チームが WebSphere Portal を使用する場合は、WebSphere Portal サーバーで動作するように Business Space を構成することができます。

手順

1. ご使用の製品のランチパッドを開始し、「**WebSphere Portal のアドイン**」をクリックして、WebSphere Portal インストーラー上で Business Space を実行します。ほとんどのビジネス・プロセス・マネジメント製品の場合は、「**追加ソフトウェアのインストール**」の下にこのオプションがあります。WebSphere Business Compass の場合は、「**拡張インストール・オプション**」の下にこのオプションがあります。WebSphere Portal インストーラー上の Business Space では、Derby データベースを使用するスタンドアロン・サーバー用の自動インストールを指定するか、または他の構成用のカスタム・インストールを指定することができます。WebSphere Portal インストーラー上の Business Space を使用して、インストールを完了します。
2. カスタム・インストールを実行した場合は、以下のステップを実行します。
 - a. プロパティ・ファイルを作成します。『WebSphere Portal 構成用サンプル・プロパティ・ファイル』を参照してください。
 - b. `wp_profile¥ConfigEngine¥properties¥wkp1c.properties` を編集し、`WasPassword` の値を、WebSphere Portal で使用している WebSphere Application Server の管理パスワードに設定し、`PortalAdminPwd` の値を WebSphere Portal 製品の管理パスワードに設定します。
 - c. `wp_profile¥bin` ディレクトリーの `startServer.bat` ファイルまたは `startServer.sh` ファイルを実行して、WebSphere Portal サーバー (**WebSphere Portal** アプリケーション) を開始します。
 - d. デフォルトの SOAP タイムアウトである 180 秒の長さでは不十分な場合があります。これは、管理タスクが WebSphere Portal 構成タスクより前に開始しないためです。SOAP タイムアウトを増やすには、`wp_profile¥properties¥soap.client.props` ファイルを編集して SOAP タイムアウトを `com.ibm.SOAP.requestTimeout=1800` に設定します。
 - e. コマンド・プロンプトを開き、`wp_profile/bin` ディレクトリーに変更します。以下のコマンドを入力します。`wsadmin -port SOAP_connector_address -user wsadmin_user_name -password wsadmin_password`

コマンドの例を以下に示します。

```
C:¥IBM¥WebSphere¥wp_profile¥bin> wsadmin -port 10033 -user  
wsadmin -password wasadmin
```

SOAP コネクター・ポートを取得するには、「アプリケーション・サーバー」 → 「WebSphere_Portal」 → 「ポート」 → 「SOAP_connector_address」をクリックします。

- f. サーバーを再始動します。
- g. `installBusinessSpaceOnPortal` コマンドを実行します。

Jython の例: `AdminTask.installBusinessSpaceOnPortal('[-serverName WebSphere_Portal_server -nodeName WebSphere_Portal_node -user wsadmin_user_name -password wsadmin_password -portalRoot WebSphere_Portal_home]')`

Jacl の例: `$AdminTask installBusinessSpaceOnPortal {-serverName WebSphere_Portal_server -nodeName WebSphere_Portal_node -user wsadmin_user_name -password wsadmin_password -portalRoot WebSphere_Portal_home}`

`WebSphere_Portal_home` は、WebSphere Portal Server のインストール先 (例えば、`C:¥IBM¥WebSphere¥PortalServer`) です。

- h. `configureBusinessSpaceOnPortal` コマンドを実行します。

Jython の例: `AdminTask.configureBusinessSpaceOnPortal ('[-serverName WebSphere_Portal_server -nodeName WebSphere_Portal_node -inputParamsFile full_path_to_properties_file]')`

Jacl の例: `$AdminTask configureBusinessSpaceOnPortal {-serverName WebSphere_Portal_server -nodeName WebSphere_Portal_node -inputParamsFile full_path_to_properties_file}`

`full_path_to_properties_file` には、ステップ 2.a で作成したプロパティ・ファイルを使用します。

- i. WebSphere Portal サーバーの `systemout.log` ファイルにエラーが出されているか確認します。特に、MANUALLY EDIT AND RUN THE COMMAND または `build failed` と記述されているエラーを探します。MANUALLY EDIT AND RUN THE COMMAND というメッセージが示されているエラーがある場合、生成されたコマンドを検査し、手動で実行します。コマンド全体がログに生成されます。一般に、これらのエラーは、`wkplc.properties` ファイルの `WasPassword` および `PortalAdminPwd` の情報が正しくない場合に発生します。また、構成の実行時に、必要なファイル許可を持っていない場合もコマンドが失敗することがあります。
- j. ご使用のデータベースに対して `Business Space DDL` を実行します。この DDL は、その生成先である `wp_profile¥dbscripts¥BusinessSpace` ディレクトリで見つけることができます。生成された DDL ファイルを検査してからスクリプトを実行します。

ご使用のプラットフォームに応じて、データベース用の `configBusinessSpaceDB.bat` スクリプトまたは `configBusinessSpaceDB.sh` スクリプトを使用します。データベース・スクリプトの実行については、『Business Space のデータベース表の構成』を参照してください。スクリプトを個別に実行する場合、これらのスクリプトを `createDatabase.sql` (Portal Server で使用されているのと同じデータベースを使用する場合は不要)、`createSchema.sql` (Business Space スキーマの作成用)、および `createTables_BusinessSpace.sql` (Business Space テーブルの作成用) の順に手動で実行する必要があります。ご使用のデータベースに対して `.sql` スクリプトを実行する方法については、そのデータベース製品の資料を参照してください。

3. WebSphere Portal サーバーを再始動します。

次のタスク

カスタム・インストールを実行した場合は、`installBusinessSpaceWidgetsOnPortal` コマンドおよび `updateEndpointBindingOnPortal` コマンドを実行して、WebSphere Portal 上に BPM ウィジェットを設定します。

1. `installBusinessSpaceWidgetsOnPortal` コマンドを実行します。

Jython の例: `AdminTask.installBusinessSpaceWidgetsOnPortal('[-serverName WebSphere_Portal_server_name -nodeName WebSphere_Portal_node_name -widgets install_root%BusinessSpace%widgets%MyWidget.zip -portalusername user_name -portalpassword password]')`

Jacl の例: `$AdminTask installBusinessSpaceWidgetsOnPortal {-serverName WebSphere_Portal_server_name -nodeName WebSphere_Portal_node_name -widgets install_root%BusinessSpace%widgets%MyWidget.zip -portalusername user_name -portalpassword password}`

2. `WebSphere_Portal_application_server/BusinessSpace/registryData/endpoints` にある、製品ウィジェット用のエンドポイント・ファイルを更新します。製品固有のエンドポイント・ファイルについては、『Business Space ウィジェットが複数のエンドポイントを処理できるようにする』を参照してください。
3. `updateEndpointBindingsOnPortal` コマンドを実行します。

Jython の例: `AdminTask.updateEndpointBindingsOnPortal ('[-serverName WebSphere_Portal_server_name -nodeName WebSphere_Portal_node]')`

Jacl の例: `$AdminTask updateEndpointBindingsOnPortal {-serverName WebSphere_Portal_server_name -nodeName WebSphere_Portal_node}`

注: Business Space は、プロキシ・コンポーネントを使用して REST サービスに接続します。REST サービスの反応がない場合、REST サービス・サーバーのパフォーマンスに基づいて、Business Space から REST サービスへの接続タイムアウト設定を更新する必要があります。REST サービス接続がタイムアウトになる場合は、以下の設定を更新します。デフォルトで、ソケット・タイムアウト値は 10 秒に設定されています。この値を状況に適した値に変更します。WebSphere Process Server 管理ウィジェットを使用している場合は、初期タイムアウト値を 30 秒に設定します。

1. ファイル `wp_profile/installedApps/node_name/AJAX Proxy Configuration.ear/wp.proxy.config.war/WEB-INF/proxy-config.xml` を開きます。
2. `socket-timeout` の `proxy:value` を変更します。時間はミリ秒で指定します。

```
<proxy:meta-data>
  <proxy:name>socket-timeout</proxy:name>
  <proxy:value>10000</proxy:value>
</proxy:meta-data>
```
3. WebSphere Portal の管理コンソールにログインします。
4. AJAX プロキシ構成アプリケーションを再始動します。

WebSphere Portal クラスターでの Business Space の構成

チームが WebSphere Portal を使用する場合は、クラスター環境の WebSphere Portal で動作するように Business Space を構成することができます。

手順

1. 1 次ノードで、ご使用の製品のランチパッドを開始し、「**WebSphere Portal のアドイン**」をクリックして、WebSphere Portal インストーラー上で Business Space を実行します。ほとんどのビジネス・プロセス・マネジメント製品の場合は、「**追加ソフトウェアのインストール**」の下にこのオプションがあります。WebSphere Business Compass の場合は、「**拡張インストール・オプション**」の下にこのオプションがあります。WebSphere Portal インストーラー上の Business Space で、カスタム・インストールを指定し、WebSphere Portal インストーラー上の Business Space を使用して、インストールを完了します。
2. ご使用の製品用の V7.0.0.2 フィックスパックを 1 次ノードにインストールします。
3. 1 次ノード上でノード・エージェントを開始します。
4. デプロイメント・マネージャーを始動します。
5. 1 次ノード上で WebSphere Portal サーバーを始動します。通常、サーバー名は **WebSphere_Portal** です。
6. エラーが発生した場合にその詳細が収集されるようにするために、`com.ibm.com.bspace.admin.*` および `com.ibm.mm.*` のトレースを開始します。
7. プロパティ・ファイルを作成します。『WebSphere Portal 構成用サンプル・プロパティ・ファイル』を参照してください。
8. `wp_profile%ConfigEngine%properties%wkplc.properties` を編集し、`WasPassword` の値を、WebSphere Portal で使用している WebSphere Application Server の管理パスワードに設定し、`PortalAdminPwd` の値を WebSphere Portal 製品の管理パスワードに設定します。
9. 1 次ノード上でコマンド・プロンプトを開き、`wp_profile/bin` ディレクトリに変更します。以下のコマンドを入力します。`wsadmin -port SOAP_connector_address -user wsadmin_user_name -password wsadmin_password`

SOAP コネクタ・ポートを取得するには、「サーバー」 → 「サーバー・クラスター (Server clusters)」 → 「*name_of_cluster*」 → 「クラスター・メンバー」 → 「WebSphere Portal」 → 「ポート」 → 「*SOAP_connector_address*」をクリックします。

10. `installBusinessSpaceOnPortal` コマンドを実行します。以下のコマンドを入力します。

Jython の例: `AdminTask.installBusinessSpaceOnPortal('[-clusterName WebSphere_Portal_cluster -dmHost deployment_manager_host_name -dmPort deployment_manager_SOAP_port -dmUser deployment_manager_administrator_user_name -dmPassword deployment_manager_administrator_password -portalRoot WebSphere_Portal_home]')`

Jacl の例: `$AdminTask installBusinessSpaceOnPortal {-clusterName WebSphere_Portal_cluster -dmHost deployment_manager_host_name -dmPort deployment_manager_SOAP_port -dmUser deployment_manager_administrator_user_name -dmPassword deployment_manager_administrator_password -portalRoot WebSphere_Portal_home}`

`WebSphere_Portal_home` は、WebSphere Portal Server のインストール先 (例えば、`C:\IBM\WebSphere\PortalServer`) です。

11. プロパティ・ファイルを指定して、`configureBusinessSpaceOnPortal` コマンドを実行します。

Jython の例: `AdminTask.configureBusinessSpaceOnPortal('[-inputParamsFile full_path_to_properties_file]')`

Jacl の例: `$AdminTask configureBusinessSpaceOnPortal {-inputParamsFile full_path_to_properties_file}`

`full_path_to_properties_file` には、ステップ 7 で作成したプロパティ・ファイルを使用します。

12. `AJAX Proxy Configuration.ear` アプリケーションを 1 次ノードから一時ディレクトリにエクスポートします。コマンド・プロンプトを開き、`install_root/bin` ディレクトリに変更し、使用するプラットフォームに基づいて以下のいずれかのコマンドを実行します。

- **Linux および UNIX プラットフォームの場合:**

```
./WebSphere_Portal_profile/bin/wsadmin.sh -user wpsadmin -password wpsadmin -c '$AdminApp export "AJAX Proxy Configuration" "AJAX Proxy Configuration.ear"'
```

- **Windows プラットフォームの場合:** `wsadmin.bat -user admin_user_id -password admin_password -c "$AdminApp export %AJAX Proxy Configuration% %AJAX Proxy Configuration.ear%"`

詳しくは、WebSphere Portal インフォメーション・センターの『カスタマイズ済みのテーマおよびスキンのデプロイ』を参照してください。

13. 以下の EAR ファイルを WebSphere Portal クラスターにインストールします。選択したデプロイメント・ターゲットが Business Space クラスターであることを確認してください。
 - BSpaceEAR.ear (*wp_profile*¥installableApps¥BusinessSpace¥ に存在)。
 - BSpaceWebformsEnabler.ear (*wp_profile*¥installableApps¥BusinessSpace¥ に存在)。
 - BusinessSpaceHelpEAR.ear (*wp_profile*¥installableApps¥BusinessSpace¥ に存在)。
 - BPM 製品ウィジェット EAR ファイル (*wp_profile*¥BusinessSpace¥widgets¥installw.*month-date-timestamp*¥*widget_name*.widgets¥ear ディレクトリー、例えば、C:¥IBM¥WebSphere¥*wp_profile*¥BusinessSpace¥widgets¥installw.Jan-18-15.17.54-EST-2010¥Dashboard.widgets¥ear 内のウィジェット圧縮ファイル内に存在)。インストールした BPM 製品によっては、複数のウィジェットがインストールされている可能性があります。
14. デプロイメント・マネージャーによって管理される Business Space クラスター上の AJAX Proxy Configuration.ear アプリケーションを更新します。デフォルトで、この EAR ファイルは、デプロイメント・マネージャー・プロファイルのルート・ディレクトリーにエクスポートされます。このアプリケーションを必ず WebSphere Portal クラスターに関連付けてください。
15. 生成された Business Space DLL ファイルを実行して、Business Space データベース成果物を作成します。この DDL は、その生成先である *wp_profile*¥dbscripts¥BusinessSpace ディレクトリーで見つけることができます。生成された DDL ファイルを検討してからスクリプトを実行します。クラスターは共通データベースを共有しているため、これらのファイルを実行する必要があるのは 1 回のみです。ご使用のプラットフォームに応じて、データベース用の configBusinessSpaceDB.bat スクリプトまたは configBusinessSpaceDB.sh スクリプトを使用します。データベース・スクリプトの実行について詳しくは、『Business Space のデータベース表の構成』を参照してください。
16. installBusinessSpaceWidgetsOnPortal コマンドおよび updateEndpointBindingOnPortal コマンドを実行して、BPM ウィジェットを WebSphere Portal 上に設定します。
 - a. 以下のコマンドを入力します。


```
Jython の例: AdminTask.installBusinessSpaceWidgetsOnPortal([-clusterName WebSphere_Portal_cluster_name -widgets install_root¥BusinessSpace¥widgets¥MyWidget.zip -portalusername user_name -portalpassword password]')
```

```
Jacl の例: $AdminTask installBusinessSpaceWidgetsOnPortal {-clusterName WebSphere_Portal_server -widgets install_root¥BusinessSpace¥widgets¥MyWidget.zip -portalusername user_name -portalpassword password}
```
 - b. *WebSphere_Portal_application_server/BusinessSpace/registryData/endpoints* にある、製品ウィジェット用のエンドポイント・ファイルを更新

します。製品固有のエンドポイント・ファイルについて詳しくは、『Business Space ウィジェットが複数のエンドポイントを処理できるようにする』を参照してください。

- c. 以下のコマンドを入力します。

Jython の例: `AdminTask.updateEndpointBindingsOnPortal ('[-clusterName WebSphere_Portal_cluster_name]')`

Jacl の例: `$AdminTask updateEndpointBindingsOnPortal {-clusterName WebSphere_Portal_server}`

次のタスク

注: Business Space は、プロキシ・コンポーネントを使用して REST サービスに接続します。REST サービスの反応がない場合、REST サービス・サーバーのパフォーマンスに基づいて、Business Space から REST サービスへの接続タイムアウト設定を更新する必要があります。REST サービス接続がタイムアウトになる場合は、以下の設定を更新します。デフォルトで、ソケット・タイムアウト値は 10 秒に設定されています。この値を状況に適した値に変更します。WebSphere Process Server 管理ウィジェットを使用している場合は、初期タイムアウト値を 30 秒に設定します。

1. ファイル `wp_profile/installedApps/node_name/AJAX Proxy Configuration.ear/wp.proxy.config.war/WEB-INF/proxy-config.xml` を開きます。
2. `socket-timeout` の `proxy:value` を変更します。時間はミリ秒で指定します。

```
<proxy:meta-data>
  <proxy:name>socket-timeout</proxy:name>
  <proxy:value>10000</proxy:value>
</proxy:meta-data>
```
3. WebSphere Portal の管理コンソールにログインします。
4. AJAX プロキシ構成アプリケーションを再始動します。

WebSphere Portal で Business Space を構成するためのプロパティ・ファイルの例

WebSphere Portal 構成用プロパティ・ファイルの例を使用して、構成のパラメーターを定義できます。以下の例は、DB2 データベース用です。

サーバー環境用のプロパティ・ファイルの例

```
#####
#configureBusinessSpaceOnPortal 用の入力パラメーター・ファイルの例
#####
# コマンド configureBusinessSpaceOnPortal は、2 とおりの方法で呼び出すことができます。
```

- ```
#1. Derby Embedded データベースおよび Business Space の
デフォルト値を使用して素早く構成する場合は、
以下のコマンドを使用します。
wsadmin>$AdminTask configureBusinessSpaceOnPortal { -serverName
<WebSphere_Portal> -nodeName <NODE_NAME> -portalusername <admin>
-portalpassword <admin> }
#2. このプロパティ・ファイルを使用したカスタム/詳細構成。
#
configureBusinessSpaceOnPortal を試行する前に、
```



```

コマンド installBusinessSpaceOnPortal を実行する必要があります。
wsadmin>$AdminTask configureBusinessSpaceOnPortal { -serverName
<WebSphere_Portal> -nodeName <NODE_NAME> -inputParamsFile
<PATH_TO_bspconfig.properties> }
#
#
#構成コマンドの入力

serverName=WebSphere_Portal
nodeName=CONFI

#dbName は、何も指定しない場合はデフォルトで BSPACE に設定されます。
dbName=MYDBNAME

#schemaName は、何も指定しない場合はデフォルトで IBMBUSSP に設定されます。
schemaName=MYSHEMA

storageGroup はデフォルトで BSPACE 設定されます。
storageGroup=

RDBMS に指定できる値には、DB2、Oracle、SQLServer、および DerbyEmbedded が
あります。
RDBMS=DB2
dbserver=localhost
dbport=50000
dbusername=administrator
dbpassword=mypassword
driverPath=c:/IBM/SQLLIB/java
dbDirectoryDerbyEmbedded=

#テーブル・スペースの物理的なロケーションとして使用されるファイルの
ディレクトリー・パスまたはファイル名接頭部を指定します。
デフォルト値は BSP です。
tableSpaceDir を指定しない場合、tableSpaceName が使用されます。
tableSpaceNamePrefix=
#Instrumented= SQL output directory - 値を空にして Business Space のデフォルトを
#使用します。
outputDir=
#テーマの登録 - ConfigEngine コマンドで使用されます。
portalusername=admin
portalpassword=admin
prodDirName=BusinessSpace

```

```

dmHost=
dmPort=
dmUser=
dmPassword=
cluster - クラスター名を指定する場合は、serverName や nodeName を
指定しないでください。
clusterName=
#####

```

## クラスター環境用のプロパティ・ファイルの例

```

#####
#configureBusinessSpaceOnPortal 用の入力パラメーター・ファイルの例
#####

```

```

#構成コマンドの入力

```

```

dbName=BSPACE
schemaName=BSPACE
##tableSpaceName=
storageGroup=
RDBMS に指定できる値には、DB2、Oracle、および SQLServer があります。

```

```

RDBMS=DB2
dbserver=localhost
dbport=50000
dbusername=db2user
dbpassword=password
driverPath=c:/IBM/SQLLIB/java
dbDirectoryDerbyEmbedded=
outputDir=
テーマ登録には、以下が必要です - ConfigEngine コマンドで使用されます。
PortalAdminPwd=admin
WasPassword=password
prodDirName=BusinessSpace

dmHost=dmgr.mydomain.com
dmPort=8879
dmUser=admin
dmPassword=password
クラスター名を指定する場合は、serverName や nodeName を指定しないでください。
clusterName=PortalCluster
portalusername=admin
portalpassword=password
#####

```

## WebSphere Portal でのウィジェットの SSO および SSL の構成

Business Space を WebSphere Portal で動作させる場合、WebSphere Portal およびご使用の Business Space サーバーでシングル・サインオン (SSO) をセットアップすること、および Secure Sockets Layer (SSL) 証明書が WebSphere Portal および Business Space の各サーバー間で交換されるようにすることが必要です。

### このタスクについて

WebSphere Portal と Business Process Management 製品が別のセルにある場合、2つのサーバー間でシングル・サインオンを構成する必要があります。

ご使用の製品は、Representational State Transfer (REST) API を提供します。この API は、REST ゲートウェイを通じてアクセスできます。デフォルトでは、REST ゲートウェイは HTTPS 接続のみを受け入れるように構成されています。一部のウィジェットがこれらの REST API にアクセスするため、WebSphere Portal で、ご使用の製品から SSL 証明書をインポートする必要があります。

WebSphere Portal と製品のサーバーの両方で、管理コンソールにログオンする際に同じユーザー名およびパスワードを使用する必要があります。

### 手順

1. WebSphere Portal Server でシングル・サインオンをセットアップします。 クラスター環境の場合は、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールでこのステップを実行します。
  - a. WebSphere\_Portal サーバーの WebSphere Portal 管理コンソールにログオンします。
  - b. WebSphere Portal とともに使用している WebSphere Application Server のバージョンに応じて、以下のいずれかにナビゲートします。

- WebSphere Application Server V6.2 を使用している場合、「セキュリティ」 → 「セキュア管理、アプリケーション、およびインフラストラクチャー (Secure administration, applications, and infrastructure)」をクリックし、「認証メカニズムおよび有効期限 (Authentication Mechanism and Expiration)」をクリックします。
- WebSphere Application Server V7.0 を使用している場合、「セキュリティ」 → 「グローバル・セキュリティ」をクリックし、「LTPA」をクリックします。

c. 「クロス・セル・シングル・サインオン (Cross-cell single sign-on)」セクションで、パスワード (これは鍵ファイルの暗号化のみに使用します) および鍵ファイルの絶対パスを入力します。

d. 「鍵のエクスポート」をクリックします。鍵ファイルが生成されます。

クラスター環境の場合は、「コンソール設定」ページで必ず「ノードと変更を同期化」を選択してください。(「システム管理」 → 「コンソール設定」にナビゲートします。)

2. Business Space サーバーでシングル・サインオンをセットアップします。クラスター環境の場合は、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールでこのステップを実行します。

a. ご使用の Business Process Management 製品の管理コンソールにログオンします。

b. 「セキュリティ」 → 「グローバル・セキュリティ」にナビゲートし、「LTPA」をクリックします。

c. 「クロス・セル・シングル・サインオン (Cross-cell single sign-on)」セクションで、ステップ 1.c. のパスワードと、鍵ファイルへの絶対パスを入力します。

d. 「鍵のインポート」をクリックします。

e. Business Space サーバーを再始動します。

クラスター環境の場合は、「コンソール設定」ページで必ず「ノードと変更を同期化」を選択してください。シングル・サインオンが構成されると、鍵ファイルを削除できます。

3. WebSphere Portal とBusiness Space サーバーとの間で交換されるように Secure Sockets Layer (SSL) 証明書をセットアップします。

a. WebSphere Portal の管理コンソールにログオンします。

b. 「セキュリティ」 → 「SSL 証明書および鍵管理 (SSL certificates and key management)」にナビゲートします。

c. 「関連項目」の下で「SSL 構成」をクリックし、NodeDefaultSSLSettings を選択します。

d. 「関連項目」の下で「鍵ストアおよび証明書 (Key stores and certificates)」をクリックし、NodeDefaultTrustStore を選択します。

NodeDefaultTrustStore ではなく z/OS 鍵リングを使用する場合は、関連情報『トラストストアから z/OS 鍵リングへの署名者証明書のインポート』を参照してください。

- e. 「追加プロパティ」の下で、「署名者証明書 (Signer Certificates)」をクリックします。
- f. 製品サーバーが稼働していることを確認し、「ポートから取得 (Retrieve from Port)」をクリックして、正しいホスト名と default\_host の HTTPS ポート (デフォルトは 9443) を 2 つのフィールドに入力します。独自の別名を選択できます。
- g. 「署名者情報の取得」をクリックします。WebSphere Portal が証明書をロードし、その情報を表示します。証明書がロードされない場合は、接続プロパティを確認してください。
- h. 「OK」をクリックして構成を保存します。

## WebSphere Portal での Business Space ウィジェット用のスペースの作成

WebSphere Portal での Business Space ウィジェットの使用は、スペースを作成することによって開始します。

### 手順

1. WebSphere Portal にログオンします。
2. 「ビジネス・スペース」をクリックします。
3. 「スペースの管理 (Manage Spaces)」をクリックします。
4. ご使用の製品ウィジェット用のテンプレートおよび Business Space テーマを使用して、スペースを作成します。
  - a. 「スペースの作成」をクリックします。
  - b. ビジネス・プロセス・マネジメント製品とともに提供されているウィジェットが含まれたテンプレートを選択します。
  - c. 「Business Space テーマ (Business Space Theme)」テーマを選択します。
  - d. 「保存」をクリックします。

## WebSphere Portal でのビジネス・スペースの移動

WebSphere Portal でビジネス・スペースを使用することを決定する前からビジネス・スペース環境で作業していた場合は、スペースをビジネス・スペース環境から WebSphere Portal に移動できます。

### 始める前に

このタスクを実行する前に、WebSphere Portal 用のビジネス・スペースを構成しておく必要があります。

以下のステップを実行するには、ビジネス・スペースの管理者でなければなりません。

### 手順

1. スペースを作成したビジネス・スペース環境 (WebSphere Portal のビジネス・スペースではありません) にログインし、WebSphere Portal に移動するスペースからテンプレートを作成します。

- a. 「スペースの管理 (Manage Spaces)」をクリックします。「スペースの管理 (Space Manager)」が開きます。
- b. 移動するスペースの隣で「アクション」 → 「テンプレートとして保存 (Save as Template)」をクリックします。
2. テンプレートをエクスポートします。
  - a. 「アクション」 → 「テンプレートの管理 (Manage Templates)」をクリックします。
  - b. 作成したテンプレートの隣で「アクション」 → 「エクスポート」をクリックし、圧縮ファイルを保存します。
3. WebSphere Portal でビジネス・スペースにログオンし、「ビジネス・スペース」をクリックします。
  - a. 「アクション」 → 「テンプレートの管理 (Manage Templates)」をクリックします。
  - b. 「テンプレートのインポート (Import Template)」をクリックし、ビジネス・スペースからエクスポートした圧縮ファイルを選択します。
4. インポートした新しいテンプレートからスペースを作成します。
  - a. 「スペースの管理 (Manage Spaces)」をクリックします。
  - b. 「スペースの作成」をクリックし、インポートしたテンプレートを選択します。
5. 必要に応じて、作成したスペースの所有者を元の所有者に変更します。
  - a. 「スペースの管理 (Manage Spaces)」をクリックします。「スペースの管理 (Space Manager)」が開きます。
  - b. スペースの隣で「アクション」 → 「設定の編集」をクリックし、スペースの所有者を変更します。
  - c.
6. スペースの所有者は、必要に応じて、スペースを共有するための設定を変更できます。
  - a. 「スペースの管理 (Manage Spaces)」をクリックします。「スペースの管理 (Space Manager)」が開きます。
  - b. スペースの隣で「アクション」 → 「共有 (Share)」をクリックし、スペースの表示および編集を行うためのアクセス権限を付与するユーザー ID を選択します。
7. オプション: ビジネス・スペースおよび WebSphere Portal 上のビジネス・スペースに作成したテンプレートが不要な場合は、削除しても構いません。

## V6.2.x Business Space ウィジェットの WebSphere Portal の V7.0 環境へのマイグレーション

WebSphere Portal で V6.2 製品の Business Space ウィジェットを使用していた場合は、それらのウィジェットを WebSphere Portal の V7.0 環境で機能するようにマイグレーションすることができます。

### 始める前に

このタスクを完了する前に、以下のステップを完了しておく必要があります。

1. ご使用の製品 (WebSphere Business Modeler Publishing Server V6.2.0.1、WebSphere Process Server V6.2.0.1、WebSphere ESB V6.2.0.1、または WebSphere Process Server V6.2 および WebSphere Enterprise Service Bus V6.2 Feature Pack) を V7 にアップグレードします。
2. WebSphere Portal V6.1.0.1 から WebSphere Portal V6.1.5 にアップグレードします。
3. WebSphere Portal 上で Business Space を構成し、ご使用の V7.0 製品 (WebSphere Business Compass、WebSphere Process Server、または WebSphere Enterprise Service Bus) に必要なウィジェットを構成します。『WebSphere Portal での Business Space の構成』を参照してください。

## 手順

1. migrateIWidgets.properties ファイルの以下のプロパティを、ご使用の環境用に更新します。マイグレーション・スクリプトは、WebSphere Portal サーバー・ノード上の `WebSphere_Application_Server_install_root¥BusinessSpace¥scripts¥portal¥migration` にあります。  

```
Portal.Home=C:/IBM/WebSphere/Portal/PortalServer
Portal.userid=admin
Portal.password=admin
Portal.Url=http://localhost:10040
Portal.SOAP.Port=10033
```
2. マイグレーション・スクリプト migrateIWidgets を実行します。マイグレーション・スクリプトは `WebSphere_Application_Server_install_root¥BusinessSpace¥scripts¥portal¥migration` にあります。

以下の該当する migrateIWidgets スクリプトを実行します。


- **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合: `migrateIWidgets.sh -w WebSphere_Application_Server_install_root`
- **Windows** プラットフォームの場合: `migrateIWidgets.bat -w WebSphere_Application_Server_install_root`

## 次のタスク

1. WebSphere Portal にログオンし、「**Business Space**」をクリックして、マイグレーションされたウィジェットのページが正しく表示されることを確認します。  
 マイグレーションされたすべてのページは、1 つのデフォルトのスペース (Business Space V7 Portal マイグレーション・スペース) にまとめられます。
2. 旧バージョンのウィジェットを使用して構成されているページを手動で削除します。
3. 旧バージョンのウィジェットのポートレット・インスタンスを手動で削除します。

## WebSphere Portal で Business Space を構成するためのコマンド (wsadmin スクリプト)

スクリプト・オブジェクトまたはコマンド・クラスを検索して、そのコマンド構文の詳細を参照してください。

インフォメーション・センターの目次を開いて、この参照情報の場所を表示するには、インフォメーション・センターの枠にある「目次に表示」ボタン (  ) をクリックします。

## configureBusinessSpaceOnPortal コマンド

configureBusinessSpaceOnPortal コマンドを使用して、Business Space のデータ・ソースを構成し、データベース表を構成するスクリプトを実行します。

このコマンドは、WebSphere Portal 上でBusiness Space のデータ・ソースを構成し、データベース表を構成するスクリプトを作成します。

コマンドを使用した後、以下のいずれかのコマンドを実行して、変更をマスター構成に保存します。

- Jython の場合:  
`AdminConfig.save()`
- Jacl の場合:  
`$AdminConfig save`

### 必須パラメーター

#### **-serverName** *server\_name*

構成のサーバー名を指定するパラメーター。サーバーでBusiness Space を構成するには、**serverName** と **nodeName** の両方を指定する必要があります。

#### **-nodeName** *node\_name*

構成のノード名を指定するパラメーター。サーバーでBusiness Space を構成するには、**serverName** と **nodeName** の両方を指定する必要があります。

#### **-clusterName** *cluster\_name*

構成のクラスター名を指定するパラメーター。クラスターでBusiness Space を構成するには、**clusterName** を指定する必要があります。

#### **-dbName** *database\_name*

構成のデータベースを指定するパラメーター。

#### **-inputParamsFile** *properties\_file\_path*

WebSphere Portal 上で Business Space を構成するために使用しているプロパティ・ファイルへのパスを指定するパラメーター。プロパティ・ファイルを使用して、ご使用の構成のパラメーターを定義できます。このパラメーターは、クラスター環境で構成を行う場合は必須ですが、サーバー上で構成を行う場合はオプションです。クラスター上で構成し、なおかつプロパティ・ファイルを使用している場合、指定する必要があるパラメーターは **-inputParamsFile** のみです。サーバー上で構成し、なおかつこのパラメーターを指定する場合、他に指定する必要があるパラメーターは **-serverName** および **-nodeName** のみです。

#### **-portalusername** *user\_name*

WebSphere Portal 管理ユーザー ID を指定するパラメーター。WebSphere Portal 上の Business Space で Business Space のデフォルトのページおよびテーマが必要な場合は、**portalusername** と **portalpassword** の両方のパラメーターを指定します。

**-portalpassword** *password*

WebSphere Portal 管理ユーザー ID のパスワードを指定するパラメーター。  
WebSphere Portal 上の Business Space で Business Space のデフォルトのページ  
およびテーマが必要な場合は、**portalusername** と **portalpassword** の両方のパラ  
メーターを指定します。

## オプション・パラメーター

**-schemaName** *schema\_name*

Business Space データベースの構成に使用するデータベース・スキーマを指定す  
るオプション・パラメーター。デフォルト値は **IBMBUSSP** です。

**-tablespaceDir** *table\_space\_path*

テーブル・スペースの物理的なロケーションとして使用されるファイルのディレ  
クトリー・パスまたはファイル名接頭部を指定するオプション・パラメーター。  
デフォルト値は **BSP** です。DB2、Oracle、および SQL Server で有効です (そ  
他の場合は無視されます)。SQL Server の場合、このパラメーターは 1 次デ  
ータ・ファイルおよびログ・ファイルに適用されます。

**-tablespaceNamePrefix** *table\_space\_prefix*

名前を固有にするためにテーブル・スペース名の先頭に追加される接頭部ストリ  
ングを指定するオプション・パラメーター。デフォルト値は **BSP** です。テーブ  
ル・スペース名の接頭部が 4 文字より長い場合は、4 文字に切り捨てられま  
す。DB2、DB2 z/OS V8、DB2 z/OS V9、および Oracle で有効です (その他の  
場合は無視されます)。

**-storageGroup** *storage\_group*

Business Space に使用する z/OS 上のストレージ・グループを指定するオプショ  
ン・パラメーター。z/OS を使用する場合は、生成されたデータベース・スクリ  
プトを実行する前に、それらのスクリプトを更新する必要があります。スクリ  
プトについて詳しくは、『Business Space のデータベース表の構成』を参照してく  
ださい。

## 例

以下の例では、**configureBusinessSpaceOnPortal** を使用して、WebSphere Portal サー  
バー上で Business Space のデータ・ソースを構成します。

- Jython の例:

```
AdminTask.configureBusinessSpaceOnPortal(['-serverName
WebSphere_Portal_server -nodeName
WebSphere_Portal_node -inputParamsFile
/tmp/bspace/bscfg_linux.properties'])
```

- Jacl の例:

```
$AdminTask configureBusinessSpaceOnPortal {-serverName
WebSphere_Portal_server -nodeName
WebSphere_Portal_node -inputParamsFile
/tmp/bspace/bscfg_linux.properties}
```

## installBusinessSpaceOnPortal コマンド

**installBusinessSpaceOnPortal** コマンドを使用して、WebSphere が提供する Business  
Space を WebSphere Portal ランタイム環境にセットアップします。



installBusinessSpaceOnPortal コマンドは、Business Space を WebSphere Portal ランタイム環境にインストールします。

コマンドを使用した後、以下のいずれかのコマンドを実行して、変更をマスター構成に保存します。

- Jython の場合:  
AdminConfig.save()
- Jacl の場合:  
\$AdminConfig save

## 必須パラメーター

### **-serverName** *server\_name*

構成のサーバー名を指定するパラメーター。サーバーで Business Space を構成するには、**serverName** と **nodeName** の両方を指定する必要があります。

### **-nodeName** *node\_name*

構成のノード名を指定するパラメーター。サーバーで Business Space を構成するには、**serverName** と **nodeName** の両方を指定する必要があります。

### **-user** *user\_ID*

サーバーのユーザー ID を指定するパラメーター。サーバーで Business Space を構成するには、**user** を指定する必要があります。

### **-password** *password*

サーバーのパスワードを指定するパラメーター。サーバーで Business Space を構成するには、**password** を指定する必要があります。

### **-clusterName** *cluster\_name*

構成のクラスター名を指定するパラメーター。クラスターで Business Space を構成するには、**clusterName** を指定する必要があります。

### **-dmHost** *deployment\_manager\_host\_name*

デプロイメント・マネージャー・ホストの名前を指定するパラメーター。クラスターで Business Space を構成するには、**dmHost** を指定する必要があります。

### **-dmPort** *deployment\_manager\_SOAP\_port*

SOAP ポート名を指定するパラメーター。クラスターで Business Space を構成するには、**dmPort** を指定する必要があります。

### **-dmUser** *deployment\_manager\_user\_ID*

デプロイメント・マネージャーのユーザー ID を指定するパラメーター。クラスターで Business Space を構成するには、**dmUser** を指定する必要があります。

### **-dmPassword** *deployment\_manager\_password*

デプロイメント・マネージャーのパスワードを指定するパラメーター。クラスターで Business Space を構成するには、**dmPassword** を指定する必要があります。

### **-portalRoot** *path\_to\_Portal\_Server*

WebSphere Portal Server がインストールされているパスを指定するパラメーター。

## 例

以下の例では、installBusinessSpaceOnPortal を使用して、Business Space をサーバー構成の WebSphere Portal Server にインストールします。

- Jython の例:

```
AdminTask.installBusinessSpaceOnPortal(['-serverName WebSphere_Portal
-nodeName myNode -user admin -password admin
-portalRoot C:¥IBM¥WebSphere¥PortalServer'])
```

- Jacl の例:

```
$AdminTask installBusinessSpaceOnPortal {-serverName WebSphere_Portal
-nodeName myNode -user admin -password admin
-portalRoot C:¥IBM¥WebSphere¥PortalServer}
```

以下の例では、installBusinessSpaceOnPortal を使用して、Business Space をクラスター構成の WebSphere Portal Server にインストールします。

- Jython の例:

```
AdminTask.installBusinessSpaceOnPortal(['-clusterName PortalCluster
-dmHost dmgr.domain.com -dmPort 8879 -dmUser admin -dmPassword admin
-portalRoot C:¥IBM¥WebSphere¥PortalServer'])
```

- Jacl の例:

```
$AdminTask installBusinessSpaceOnPortal {-clusterName PortalCluster
-dmHost dmgr.domain.com -dmPort 8879 -dmUser admin -dmPassword admin
-portalRoot C:¥IBM¥WebSphere¥PortalServer}
```

## installBusinessSpaceWidgetsOnPortal コマンド

installBusinessSpaceWidgetsOnPortal コマンドを使用して、WebSphere Portal 上の Business Space で使用するウィジェットをインストール、デプロイ、および登録します。

installBusinessSpaceWidgetsOnPortal コマンドは、圧縮ファイルまたはエンタープライズ・アーカイブ (EAR) ファイルに含まれる指定のウィジェットをインストール、デプロイ、および登録します。ウィジェットが既にデプロイされている場合、installBusinessSpaceWidgetsOnPortal コマンドは、バイナリーおよび登録情報をリフレッシュします。

コマンドを使用した後、以下のいずれかのコマンドを実行して、変更をマスター構成に保存します。

- Jython の場合:

```
AdminConfig.save()
```

- Jacl の場合:

```
$AdminConfig save
```

## 必須パラメーター

**-serverName** *WebSphere\_Portal\_server\_name*

構成のサーバー名を指定するパラメーター。サーバーで Business Space を構成するには、**serverName** と **nodeName** の両方を指定する必要があります。

**-nodeName** *WebSphere\_Portal\_node\_name*

構成のノード名を指定するパラメーター。serverName、nodeName、または

clusterName のいずれかが必須です。サーバー上に Business Space ウィジェットを構成するには、**serverName** と **nodeName** の両方を指定する必要があります。

**-clusterName** *WebSphere\_Portal\_cluster\_name*

構成のクラスター名を指定するパラメーター。クラスターで Business Space ウィジェットを構成するには、**clusterName** を指定する必要があります。

**-dmHost** *deployment\_manager\_host\_name*

デプロイメント・マネージャー・ホストの名前を指定するパラメーター。クラスターで Business Space を構成するには、**dmHost** を指定する必要があります。

**-dmPort** *deployment\_manager\_SOAP\_port*

SOAP ポート名を指定するパラメーター。クラスターで Business Space を構成するには、**dmPort** を指定する必要があります。

**-dmUser** *deployment\_manager\_user\_ID*

デプロイメント・マネージャーのユーザー ID を指定するパラメーター。クラスターで Business Space を構成するには、**dmUser** を指定する必要があります。

**-dmPassword** *deployment\_manager\_password*

デプロイメント・マネージャーのパスワードを指定するパラメーター。クラスターで Business Space を構成するには、**dmPassword** を指定する必要があります。

**-widgets** *widgets\_path*

以下のいずれかを指定するパラメーター。

- ウィジェットを含む圧縮ファイルまたは EAR ファイルが置かれているディレクトリーの絶対パス。ディレクトリーを指定すると、そのディレクトリー内のすべての圧縮ファイルおよび EAR ファイルに含まれているすべてのウィジェットがインストールされます。
- ウィジェットを含む個別の圧縮ファイルの絶対パス。
- ウィジェットを含む個別の EAR ファイルの絶対パス。

**-portalusername** *user\_name*

WebSphere Portal 管理ユーザー ID を指定するパラメーター。テンプレートを登録する場合、このパラメーターは必須です。ウィジェットでテンプレートを使用する場合は、このパラメーターを指定してください。

**-portalpassword** *password*

WebSphere Portal 管理ユーザー ID のパスワードを指定するパラメーター。テンプレートを登録する場合、このパラメーターは必須です。ウィジェットでテンプレートを使用する場合は、このパラメーターを指定してください。

**portalusername** パラメーターを指定する場合は、このパラメーターを指定する必要があります。

## オプション・パラメーター

**-noEndpoints** *true|false*

ウィジェット圧縮ファイルに含まれている指定したエンドポイント・ファイルを更新しないことを指定します。

## 例

以下の例では、installBusinessSpaceWidgetsOnPortal を使用して、ウィジェットを WebSphere Portal サーバーにインストール、デプロイ、および登録します。ウィジェットを含む圧縮ファイルを指定します。

- Jython の例:

```
AdminTask.installBusinessSpaceWidgetsOnPortal('[-nodeName
WebSphere_Portal_node_name -serverName
WebSphere_Portal_server_name -widgets
install_root%BusinessSpace%widgets%MyWidget.zip
-portalusername user_name -portalpassword
password]')
```

- Jacl の例:

```
$AdminTask installBusinessSpaceWidgetsOnPortal {-nodeName
WebSphere_Portal_node_name -serverName
WebSphere_Portal_server_name -widgets
install_root%BusinessSpace%widgets%MyWidget.zip
-portalusername user_name -portalpassword
password}
```

以下の例では、installBusinessSpaceWidgetsOnPortal を使用して、ウィジェットを WebSphere Portal クラスターにインストール、デプロイ、および登録します。ウィジェットの格納先ディレクトリーのパスを指定します。

- Jython の例:

```
AdminTask.installBusinessSpaceWidgetsOnPortal ('[-clusterName
WebSphere_Portal_cluster_name -widgets
install_root%BusinessSpace%widgets%MyWidget.zip -portalusername
user_name -portalpassword password]')
```

- Jacl の例:

```
$AdminTask installBusinessSpaceWidgetsOnPortal {-clusterName
WebSphere_Portal_cluster_name -widgets
install_root%BusinessSpace%widgets%MyWidget.zip -portalusername
user_name -portalpassword password}
```

## updateEndpointBindingsOnPortal コマンド

updateEndpointBindingsOnPortal コマンドを使用して、構成されて使用可能な Representational State Transfer (REST) エンドポイントを登録して、チームが WebSphere Portal 上の Business Space 内でウィジェットを使用できるようにします。

このコマンドは、構成された REST サービス・エンドポイントを登録することで、Business Space が製品のウィジェットに正しく接続されるようにします。このコマンドが使用できるのは、Business Space と同じセル内にある REST サービスのエンドポイントを登録する場合に限られます。

このコマンドを実行する前に、*WebSphere\_Portal\_application\_server/*BusinessSpace/registryData/endpoints にある、製品ウィジェット用のエンドポイント・ファイルを更新する必要があります。製品固有のエンドポイント・ファイルについては、『Business Space ウィジェットが複数のエンドポイントを処理できるようにする』を参照してください。

コマンドを使用した後、以下のいずれかのコマンドを実行して、変更をマスター構成に保存します。

- Jython の場合:  
AdminConfig.save()
- Jacl の場合:  
\$AdminConfig save

## 必須パラメーター

- serverName** *WebSphere\_Portal\_server\_name*  
構成のサーバー名を指定するパラメーター。サーバーでBusiness Space を構成するには、**serverName** と **nodeName** の両方を指定する必要があります。
- nodeName** *WebSphere\_Portal\_node\_name*  
構成のノード名を指定するパラメーター。サーバーでBusiness Space を構成するには、**serverName** と **nodeName** の両方を指定する必要があります。
- clusterName** *WebSphere\_Portal\_cluster\_name*  
構成のクラスター名を指定するパラメーター。クラスターでBusiness Space を構成するには、**clusterName** を指定する必要があります。
- dmHost** *deployment\_manager\_host\_name*  
デプロイメント・マネージャー・ホストの名前を指定するパラメーター。クラスターで Business Space を構成するには、**dmHost** を指定する必要があります。
- dmPort** *deployment\_manager\_SOAP\_port*  
SOAP ポート名を指定するパラメーター。クラスターで Business Space を構成するには、**dmPort** を指定する必要があります。
- dmUser** *deployment\_manager\_user\_ID*  
デプロイメント・マネージャーのユーザー ID を指定するパラメーター。クラスターで Business Space を構成するには、**dmUser** を指定する必要があります。
- dmPassword** *deployment\_manager\_password*  
デプロイメント・マネージャーのパスワードを指定するパラメーター。クラスターで Business Space を構成するには、**dmPassword** を指定する必要があります。

## 例

以下の例は、WebSphere Portal サーバー上で構成済みで使用可能なすべての REST サービスをBusiness Space に登録します。

- Jython の例:  
AdminTask.updateEndpointBindingsOnPortal(['-serverName  
WebSphere\_Portal\_server\_name  
-nodeName WebSphere\_Portal\_node'])
- Jacl の例:  
\$AdminTask updateEndpointBindingsOnPortal {-serverName  
WebSphere\_Portal\_server\_name  
-nodeName WebSphere\_Portal\_node}

以下の例は、WebSphere Portal クラスター上で構成済みで使用可能なすべての REST サービスを Business Space に登録します。

- Jython の例:

```
AdminTask.updateEndpointBindingsOnPortal('[-clusterName
WebSphere_Portal_cluster_name -dmHost
deployment_manager_host_name -dmPort
deployment_manager_SOAP_port -dmUser
deployment_manager_user_ID -dmPassword
deployment_manager_password]')
```

- Jacl の例:

```
$AdminTask updateEndpointBindingsOnPortal {-clusterName
WebSphere_Portal_cluster_name -dmHost
deployment_manager_host_name -dmPort
deployment_manager_SOAP_port -dmUser
deployment_manager_user_ID -dmPassword
deployment_manager_password}
```

---

## ビジネス・ルールおよびセレクターの構成

ビジネス・ルールおよびセレクターは、基準に基づいて処理の結果を変更できるため、ビジネス・プロセスに柔軟性が提供されます。ビジネス・ルールおよびセレクターのコンポーネントを含むアプリケーションをインストールする前に、ビジネス・ルール動的リポジトリをインストールする必要があります。スタンドアロン・サーバー用または Network Deployment 用のビジネス・ルール動的リポジトリをインストールできます。

## ビジネス・ルールとセレクターの監査ログの構成

ビジネス・ルールとセレクターの新規作成、変更、および削除を追跡するログの値として、デフォルト値とは異なる値を使用するように、サーバーを構成できます。構成を変更すると、サーバー上のリソースを効率的に使用できます。

### 始める前に

このタスクを実行するには、管理コンソールを使用している必要があります。

**このタスクに必要なセキュリティ役割:** セキュリティとロール・ベースの許可が有効になっている場合、このタスクを実行するには、コンフィギュレーターとしてログインする必要があります。

### このタスクについて

サーバーを実稼働環境で一定期間実行した後で、ビジネス・ルールとセレクターの監査ログのためにサーバーが使用しているデフォルト値を調整する必要があると判断することがあります。

ビジネス・ルールとセレクターの監査ログを構成するには、以下のステップを実行します。

### 手順

1. 「サーバー」>「アプリケーション・サーバー」> *servername* > 「ビジネス・ルール」> 「ビジネス・ルールとセレクター監査」をクリックして、「ビジネス・ルールとセレクター監査」ページにナビゲートします。
2. 必要な変更のタイプに応じて、以下のいずれかを実行します。

| 変更のタイプ | アクション                                                                                                                                                                                                                                                     |
|--------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 即時     | <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 「ランタイム」タブを選択します。</li> <li>2. 必要な変更を入力します。</li> <li>3. オプション: 永続的に変更するには、「構成へのランタイム変更も保管」を選択して、変更内容をリポジトリにコピーします。</li> <li>4. 変更を適用してから前のページに戻るには、「OK」をクリックします。変更の適用後もこのページを表示したままにするには、「適用」をクリックします。</li> </ol> |
| 遅延     | <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 「構成」タブを選択します。</li> <li>2. 必要な変更を入力します。</li> <li>3. 変更を適用してから前のページに戻るには、「OK」をクリックします。変更の適用後もこのページを表示したままにするには、「適用」をクリックします。</li> <li>4. 変更内容を有効にするには、サーバーを再始動します。</li> </ol>                                     |

## タスクの結果

指定した属性が監査ログに適用されます。

注: WebSphere Application Server 6.1 でセキュリティーが有効に設定されている場合、サーバー・ユーザー ID の指定方法のために、ビジネス・ルールとセクター監査の構成の変更が必要なことがあります。サーバー・ユーザー ID にデフォルト値が使用されている場合は、ビジネス・ルールまたはセクターのインストール後にビジネス・ルールまたはセクターが含まれているアプリケーションが開始され、ビジネス・ルールまたはセクターを使用する監査可能アクションが実行されると、自動生成されたサーバー ID 値がユーザーの監査レコードに記録されます。インストール後のアプリケーションの開始、管理クライアント、または管理コンソールでのインポートまたはエクスポートによってビジネス・ルールまたはセクターの成果物に変更されると、監査可能なアクションが発生します。生成される値は、他の監査レコードで使用されているユーザー ID の形式と一致していないことがあり、より一貫性のある値が必要な場合があります。

サーバー ID を指定するには、「リポジトリに保管されたサーバー ID」を使用するオプションを選択します。これにより、ユーザー・リポジトリのユーザー ID が、サーバー・プロセスに関連付けられます。ビジネス・ルールまたはセクターの成果物がリポジトリにインストールされた後で、ビジネス・ルールまたはセクターを含むアプリケーションが開始され、ビジネス・ルールまたはセクターを使用する監査可能アクションが実行されると、監査レコードでこの ID が使用されます。

管理クライアント (ビジネス・ルール・マネージャーなど) による変更が行われる監査アクション、およびビジネス・ルール・グループのエクスポートやインポートな

どの管理アクションには、サーバー ID 値は影響しません。このようなアクションの場合、監査レコードでは認証済みユーザーが使用されます。

サーバー・ユーザー ID の変更についての詳細は、『アプリケーションと環境の保護』の各トピックと、WebSphere Application Server の WebSphere Application Server Network Deployment セキュリティーに関する資料を参照してください。

## コマンドを使用したビジネス・ルールとセレクターの監査の構成

サーバーの実行中に特性を変更する必要がある場合には、コマンドを使用して、ビジネス・ルールとセレクターの監査を構成します。

### 始める前に

これらのコマンドは、サーバーのコマンド行環境から実行する必要があります。

**このタスクに必要なセキュリティ役割:** セキュリティーとロール・ベースの許可が有効になっている場合、このタスクを実行するには、コンフィギュレーターとしてログインする必要があります。

### このタスクについて

ビジネス・ルールとセレクターを監査するサーバーの数を変更する必要があるにもかかわらず、関連するサーバーを再始動できない場合があります。コマンド行を使用して、サーバーの構成をバッチ・モードで自動化できます。以下のタスクは、コマンドを使用して 1 つのサーバーを構成する方法を示しています。

**重要:** これらの設定は、サーバーを再始動した場合には保管されません。これらのコマンドを入力した後で構成を保管するには、管理コンソールを使用する必要があります。「サーバー」>「サーバー・タイプ」>「WebSphere Application Server」>「*servername*」>「ビジネス・ルール」>「ビジネス・ルールとセレクター監査」>「ランタイム」または「サーバー」>「サーバー・タイプ」>「WebSphere Application Server」>「*servername*」>「セレクター」>「ビジネス・ルールとセレクター監査」>「ランタイム」を選択します。

コマンドを使用したビジネス・ルールとセレクターの監査を構成するには、以下のステップを実行します。

**注:** 以下のタスクでは、サーバー *server1* を構成します。サーバーの名前が *server1* でない場合は、以下の *server1* を、そのサーバーの名前で置き換えます。ステップ 3 以降のすべてのステップは、jacl スクリプトに組み込んで実行できます。

### 手順

1. 管理環境に入ります。

```
wsadmin
```

2. 監査ロギングを構成するか、既存の構成を変更するかを決定します。

| タスク       | コマンド                                                                                        |
|-----------|---------------------------------------------------------------------------------------------|
| 監査ロギングの構成 | set mbean [\$AdminControl] queryNames<br>*:* ,name=CustomizationAuditMBean,process=server1] |



| タスク         | コマンド                                          |
|-------------|-----------------------------------------------|
| 監査ロギング構成の変更 | set auditconfig [\$AdminConfig list AuditLog] |

3. 該当するコマンドを入力します。

## 監査ロギングを構成または変更するコマンド

**重要:** 既存の構成を変更するコマンドを入力する場合は、変更内容を保管する必要があります。サーバーを再始動しないと、変更内容は有効になりません。

以下は、入力可能なコマンドです。

### **\$AdminControl invoke \$mbean getSeparateAuditLogEnabled**

別個の監査ログへのロギングを実行するかどうかを判別するために使用します。

### **\$AdminControl invoke \$mbean setSystemOutAuditLogEnabled {boolean}**

SystemOut.log ファイルへのロギングを使用可能または使用不可にするために使用します。Boolean には、true または false を指定できます。

### **\$AdminControl invoke \$mbean getSeparateAuditLogFileName**

別個の監査ログのファイル名を判別するために使用します。

### **\$AdminControl invoke \$mbean setSeparateAuditLogFileName {filename}**

新規のログ・ファイルの名前 (MyAudit.log など) を設定するために使用します。

### **\$AdminControl invoke \$mbean getSeparateAuditLogFileRolloverSize**

監査ログのサイズを判別するために使用します。

### **\$AdminControl invoke \$mbean setSeparateAuditLogFileRolloverSize integer**

システムが監査ログをヒストリー・ファイルへロール・オーバーする条件となる、監査ログのサイズを設定するために使用します。サイズはメガバイト単位です。

### **\$AdminControl invoke \$mbean getSeparateAuditLogFileMaxNumberOfBackupFiles**

監査ログ・ヒストリー・ファイルの数を判別するために使用します。

### **\$AdminControl invoke setSeparateAuditLogFileMaxNumberOfBackupFiles integer**

監査ログ・ヒストリー・ファイルの数を設定するために使用します。

### **\$AdminControl invoke \$mbean setSeparateAuditLogEnabled {boolean}**

別個のログ・ファイルへのロギングを開始または停止するために使用します。Boolean には、true または false を指定できます。

### **\$AdminConfig showall \$auditconfig**

現在の監査ログ構成を表示するために使用します。

### **\$AdminConfig modify \$auditconfig {{separateAuditLogEnabled true}}**

別個の監査ログへのロギングを使用可能にするために使用します。

### **\$AdminConfig modify \$auditconfig {{systemOutAuditLogEnabled false}}**

system.Out ファイルへの監査を使用不可にするために使用します。

```
$AdminConfig modify $auditconfig {{customAuditLog {{maxNumberOfBackupFiles 7} {rolloverSize 7}}}}
```

監査ログ・ヒストリー・ファイルの数と監査ログ・ファイルのサイズを変更するために使用します。

```
$AdminConfig modify $auditconfig {{customAuditLog {{fileName MyAudit.log}}}}
```

監査ログ・ファイルの名前を変更するために使用します。

```
$AdminConfig save
```

構成を保管するために使用します。

## 次のタスク

管理コンソールを開き、「サーバー」>「サーバー・タイプ」>「WebSphere Application Server」>「*servername*」>「ビジネス・ルール」>「ビジネス・ルールとセレクトター監査」>「ランタイム」、または「サーバー」>「サーバー・タイプ」>「WebSphere Application Server」>「*servername*」>「セレクトター」>「ビジネス・ルールとセレクトター監査」>「ランタイム」を選択して、変更を保存します。あるいは、`$AdminConfig save` と入力します。

注: WebSphere Application Server 6.1 でセキュリティーが有効に設定されている場合、サーバー・ユーザー ID の指定方法のために、ビジネス・ルールとセレクトター監査の構成の変更が必要なことがあります。サーバー・ユーザー ID にデフォルト値が使用されている場合は、ビジネス・ルールまたはセレクトターのインストール後にビジネス・ルールまたはセレクトターが含まれているアプリケーションが開始され、ビジネス・ルールまたはセレクトターを使用する監査可能アクションが実行されると、自動生成されたサーバー ID 値がユーザーの監査レコードに記録されます。インストール後のアプリケーションの開始、管理クライアント、または管理コンソールでのインポートまたはエクスポートによってビジネス・ルールまたはセレクトターの成果物に変更されると、監査可能なアクションが発生します。生成される値は、他の監査レコードで使用されているユーザー ID の形式と一致していないことがあります、より一貫性のある値が必要な場合があります。

サーバー ID を指定するには、「リポジトリに保管されたサーバー ID」を使用するオプションを選択します。これにより、ユーザー・リポジトリのユーザー ID が、サーバー・プロセスに関連付けられます。ビジネス・ルールまたはセレクトターの成果物がリポジトリにインストールされた後で、ビジネス・ルールまたはセレクトターを含むアプリケーションが開始され、ビジネス・ルールまたはセレクトターを使用する監査可能アクションが実行されると、監査レコードでこの ID が使用されます。

管理クライアント (ビジネス・ルール・マネージャーなど) による変更が行われる監査アクション、およびビジネス・ルール・グループのエクスポートやインポートなどの管理アクションには、サーバー ID 値は影響しません。このようなアクションの場合、監査レコードでは認証済みユーザーが使用されます。

サーバー・ユーザー ID の変更についての詳細は、『アプリケーションと環境の保護』の各トピックと、WebSphere Application Server の WebSphere Application Server Network Deployment セキュリティーに関する資料を参照してください。

## ビジネス・ルール・マネージャーのインストールの考慮事項

ビジネス・ルール・マネージャーを分散環境で使用する場合、セル、ノード、クラスター概念、および実行時のパフォーマンスを最適にするビジネス・ルール・マネージャーのセットアップ方法を理解する必要があります。

アプリケーション・サーバーは、セル、ノード、およびサーバー概念に基づいて編成されます。スタンドアロン・サーバー構成では、1つのセルには1つのノードが含まれ、各ノードには1つのサーバーが含まれます。システム管理アプリケーションとユーザー・アプリケーションはすべて同じサーバーで稼働します。スタンドアロン・サーバー構成では、ビジネス・ルール・マネージャーを同じアプリケーション・サーバーにインストールできます。また、ビジネス・ルール・マネージャーにはデフォルトの URL からアクセスできます。

分散サーバー構成では、1つのセルに複数のノードが含まれ、各ノードに複数のアプリケーション・サーバーが含まれるように構成できます。各セルは、単一の管理ドメインを構成します。この構成では、ドメイン全体で中央管理、ワークロード管理、およびフェイルオーバー構成を使用できます。

分散サーバー構成でパフォーマンスを最適にするには、ビジネス・ルール・マネージャーを管理デプロイメント・ターゲット (ビジネス管理サービスが中央にホストされているセル内のアプリケーション・サーバー) にインストールします。通常、このサーバーは Common Event Infrastructure サービスをホストするサーバーです。

セル内では、すべてのサーバーが単一のビジネス・ルール・リポジトリを使用および共有します。ビジネス・ルール・リポジトリにアクセスすると、ビジネス・アプリケーションがどの場所にインストールされているかにかかわらず、すべての動的ビジネス・ルール成果物の定義にアクセスできます。

実行時にセル内のすべてのビジネス・ルールが使用できるこの中央ストレージがあることによって、セル内のどのアプリケーション・サーバーにもビジネス・ルール・マネージャーをデプロイできます。また、ビジネス・ルール・マネージャーは、セル内のすべてのビジネス・ルールの一貫性のあるビューを提供します。ただし、高可用性を考慮すると、ビジネス・ルール・マネージャーを管理デプロイメント・ターゲット (ビジネス管理サービスが中央でホストされているセル内の専用アプリケーション・サーバー) にデプロイすることを、システム管理者にお勧めします。管理デプロイメント・ターゲット・サーバーは、Common Event Infrastructure サービスやその他のビジネス管理アプリケーションがインストールされているのと同じサーバーです。この構成では、高可用性が必要な場合、管理デプロイメント・ターゲット・サーバーをクラスター化して、アプリケーション・ユーザーに拡張が容易なソリューションを提供できます。

### 管理コンソールを使用したビジネス・ルール・マネージャーのインストール

ビジネス・ルール・マネージャーをエンタープライズ・アプリケーションとして WebSphere Process Server にインストールすると、実行時にビジネス・ルールを管理できます。WebSphere Process Server 6.1 以降では、プロファイル管理ツールの「ビジネス・ルール・マネージャーの構成」ページのチェック・ボックスを選択して WebSphere Process Server プロファイルを作成する時点で、同時にビジネス・ルール・マネージャーをインストールできます。ビジネス・ルール・マネージャー

は、ほかの 3 つの方法を使用してインストールすることもできます。具体的には、管理コンソールの構成ページを使用する方法、オペレーティング・システムの JACL コマンドを使用する方法、Admin Tasks コマンドを使用する方法がありますが、Admin Tasks コマンドを使用する方法は、WebSphere Process Server 6.1 以降でのみ可能です。詳しくは、各インストール方法の個々のトピックを参照してください。

## 始める前に

**このタスクに必要なセキュリティ役割:** セキュリティーとロール・ベースの許可が有効になっている場合、このタスクを実行するには、管理者またはコンフィギュレーターとしてログインする必要があります。

## このタスクについて

管理コンソールを使用してビジネス・ルール・マネージャーをインストールするには、以下のステップを実行します。

### 手順

1. 管理コンソールが稼働していることを確認します。
2. ナビゲーション・ペインで、「サーバー」>「サーバー・タイプ」>「WebSphere Application Server」または「サーバー」>「クラスター」>「WebSphere Application Server クラスター」をクリックします。
3. サーバーまたはクラスター・ターゲットの名前を選択します。
4. 「構成」タブを含むページで、「Business Integration」の下にある「ビジネス・ルール」を展開して、「ビジネス・ルール・マネージャーの構成」をクリックします。
5. 「一般プロパティ」から、「ビジネス・ルール・マネージャーのインストール」チェック・ボックスを選択します。

**注:** ビジネス・ルール・マネージャーが既にインストールされている場合は、このチェック・ボックスがチェックされた状態になりますが、このページからビジネス・ルール・マネージャーをアンインストールすることはできないのでぼかし表示されます。ただし、アプリケーションのリストを表示し、このリストから手動でアンインストールできます。

6. 「コンテキスト・ルート」フィールドで、デフォルト・コンテキスト・ルートの /br を受け入れるか、またはビジネス・ルール・マネージャー URL のカスタム・コンテキスト・ルートを入力します。
7. 「OK」をクリックします。
8. 構成を保管します。

## 次のタスク

ナビゲーション・ペインで、「アプリケーション」>「アプリケーション・タイプ」>「WebSphere エンタープライズ・アプリケーション」をクリックし、「ビジネス・ルール・マネージャーの始動 (Start Business Rules Manager)」を選択します。

## JACL コマンドを使用したビジネス・ルール・マネージャーのインストール

Windows、Linux、i5/OS では、ビジネス・ルール・マネージャーをインストールするときに、管理コンソールの代わりとして JACL コマンドを使用できます。JACL コマンドを使用できるのは、WebSphere Process Server をインストールしてプロファイルを作成したときに、ビジネス・ルール・マネージャーをインストールしていなかった場合です。

### 始める前に

**このタスクに必要なセキュリティ役割:** セキュリティーとロール・ベースの許可が有効になっている場合、このタスクを実行するには、管理者またはコンフィギュレーターのリールに割り当てられているユーザー ID を使用して認証される必要があります。

### このタスクについて

JACL コマンドを使用してビジネス・ルール・マネージャーをインストールするには、以下のステップを実行します。

### 手順

1. WebSphere Process Server が始動していることを確認します。
2. オペレーティング・システムのシェル環境またはコマンド・プロンプトを開き、*install\_root/bin* ディレクトリー (Windows の場合は *install\_root\bin* ディレクトリー) に移動します。
3. オペレーティング・システム独自のインストール・コマンドを以下のように実行します。
  - Windows で実行するコマンド: `wsadmin.bat -f installBRManager.jacl [-s servername -n nodename | -cl clustername] -ce cellname -r rootname`
  - Linux で実行するコマンド: `wsadmin.sh -f ./installBRManager.jacl [-s servername -n nodename | -cl clustername] -ce cellname -r rootname`
  - i5/OS で実行するコマンド: `wsadmin -f ./installBRManager.jacl [-s servername -n nodename | -cl clustername] -ce cellname -r rootname`

ビジネス・ルール・マネージャーをインストールして、それを複数のターゲットにマップするには、ご使用のオペレーティング・システムで以下のコマンドを実行します。

- Windows で実行するコマンド: `wsadmin.bat -f installBRManager.jacl -m "{{target1} {target2} ... {targetn}}" -ce cellname -r rootname`
- Linux で実行するコマンド: `wsadmin.sh -f installBRManager.jacl -m "{{target1} {target2} ... {targetn}}" -ce cellname -r rootname`
- i5/OS で実行するコマンド: `wsadmin -f installBRManager.jacl -m "{{target1} {target2} ... {targetn}}" -ce cellname -r rootname`
- z/OS で実行するコマンド: `wsadmin.sh -f installBRManager.jacl -m "{{target1} {target2} ... {targetn}}" -ce cellname -r rootname`

**注:** パラメーター「-m」（「複数 (multiple)」を意味する) を指定すると、ビジネス・ルール・マネージャーを複数のターゲットに一括でインストールしてマップできます。複数のターゲットを二重引用符で囲みます。

各部の意味は、次のとおりです。

*servername*

アプリケーション・サーバーの名前。

Network Deployment 構成内でクラスターが指定されていない場合には、引数のペア「-s *servername*」が必要です。欠落している場合、*servername* のデフォルト値は「server1」です。

*nodename*

インストール・ノードの名前。

Network Deployment 構成内でクラスターが指定されていない場合には、引数のペア「-n *nodename*」が必要です。

*clustername*

アプリケーションをインストールするクラスターの名前。

Network Deployment 構成内でサーバー名とノード名が指定されていない場合には、引数のペア「-cl *clustername*」が必要です。

**注:** ノードとサーバーを指定するか、またはクラスターを指定する必要があります。両方は指定しないでください。

*cellname*

インストール・セルの名前。

引数のペア「-ce *cellname*」はオプションです。

*rootname*

アプリケーション・ルート・ディレクトリの名前。

引数のペア「-r *rootname*」はオプションです。欠落している場合、*rootname* のデフォルト値は「/br」です。

**target<sub>i</sub>** ビジネス・ルール・マネージャーをインストールしてマップするターゲット (*i* は 1、2、...、*n*)。

ターゲットは (-s *servername* および -n *nodename*) または -cl *clustername* のいずれかです。

**重要:** WebSphere Process Server が単一サーバー環境で構成されている場合、これらの引数のペアのすべてはオプションです。WebSphere Process Server が Network Deployment 環境用に構成されている場合、以下の引数ペアのいずれかが必要です。

- (-s *servername* および -n *nodename*)
- または -cl *clustername*
- または -m "{target1} {target2} ... {targetn}"

他の引数ペアはオプションです。

## 例

**例:** ビジネス・ルール・マネージャー・アプリケーションを以下のターゲットにマップするとします。

- クラスタ 「BofACluster」
- Web サーバー 「RedirectorServer」 およびノード 「AIXNode01」
- アプリケーション・サーバー 「LinuxServer」 およびノード 「LinuxNode02」

コンテキスト・ルートは 「bofa/brm」 です。

以下のようにコマンドを実行します。

```
install_root/bin/wsadmin -f installBRManager.jacl -m "{{-cl BofACluster}
{-n AIXNode01 -s RedirectorServer} {-s LinuxServer -n LinuxNode02}}" -r
bofa/brm
```

## AdminTask コマンドを使用したビジネス・ルール・マネージャーのインストール

WebSphere Process Server 6.1 以降を使用して、Admin Task コマンドを使用してビジネス・ルール・マネージャーをインストールできます。管理コンソールや JACL コマンドを使用する場合と同様に WebSphere Process Server と作成済みプロファイルのインストール時にビジネス・ルール・マネージャーをインストールしなかった場合は、Admin Task コマンドを使用してください。

### 始める前に

**このタスクに必要なセキュリティ役割:** セキュリティとロール・ベースの許可が有効になっている場合、このタスクを実行するには、管理者またはコンフィギュレーターとしてログインする必要があります。

### このタスクについて

管理タスク・コマンドを使用してビジネス・ルール・マネージャーをインストールするには、以下のステップを実行します。

### 手順

1. WebSphere Process Server が始動していることを確認します。
2. コマンド・ウィンドウで WebSphere Process Server のホーム・ディレクトリーに移動して、ディレクトリー /bin に切り替えます。
3. wsadmin コマンドを実行して、wsadmin モードに入ります。
4. 以下のいずれかのコマンドを入力して、ビジネス・ルール・マネージャーをインストールします。

```
wsadmin> $AdminTask configBusinessRulesManager {-serverName <serverName>
-nodeName <nodeName> -contextRoot <contextRoot>}
```

または

```
wsadmin> $AdminTask configBusinessRulesManager {-clusterName
<clusterName> -contextRoot <contextRoot>}
```

ここで、

*serverName*

アプリケーション・サーバーの名前。

*nodeName*

インストール・ノードの名前。

*clusterName*

アプリケーションをインストールするクラスターの名前。

*contextRoot*

アプリケーションを起動するために使用するコンテキスト・ルート。デフォルト値は /br です。

5. wsadmin> \$AdminConfig save を実行して、構成を保存します。

**ヒント:** \$AdminTask help configBusinessRulesManager を実行すると、そのパラメーターの詳細を知ることができます。

## 例

**例:** コンテキスト・ルート「br」を使用してサーバー「cvuServer」およびノード「cvuNode01」にビジネス・ルール・マネージャーをインストールするには、以下のコマンドを入力します。

```
wsadmin> $AdminTask configBusinessRulesManager {-serverName cvuServer
-nodeName cvuNode01 -contextRoot br}
```

次に構成を保存するには、以下のように入力します。

```
wsadmin> $AdminConfig save
```

## ビジネス・ルール・マネージャーのサーバー・セキュリティの構成

サーバーでセキュリティを使用する場合は、ビジネス・ルール・マネージャーを使用しているサーバーを構成する必要があります。サーバーでセキュリティを使用可能に設定しない場合は、追加の構成なしでビジネス・ルール・マネージャーを使用できます。

## このタスクについて

異なるロールまたはユーザー ID がある場合、サーバーの構成時に管理セキュリティを設定する必要があります。サーバーのセキュリティを設定するには、以下のステップを実行します。

## 手順

1. ユーザー ID の作成時に各 ID にロールを割り当てることにより、ユーザー ID に管理セキュリティを設定します。各ユーザー ID を作成して、それをロール BusinessRuleUser にマップします。

ロールを設定するには、ビジネス・ルール・マネージャー・アプリケーションにナビゲートし（「アプリケーション」>「エンタープライズ・アプリケーション」



ン)、ビジネス・ルール・マネージャー・アプリケーションを選択します。  
「ユーザー/グループ・マッピングへのセキュリティー役割」を選択し、  
BusinessRuleUser ロールを更新します。

BusinessRuleUser ロール以外に、NoOne と AnyOne という 2 つのロールが定義されています。NoOne は、直接アクセスすべきではないリソースを明示的に設定する場合に開発者が使用します。 AnyOne は、WebSphere Process Server 環境の許可を取得する場合に Tivoli Access Manager が使用します。

**注:** 管理セキュリティーが有効に設定された ND 環境において、ポート 908n (n は正の整数) 上でビジネス・ルール・マネージャーを実行する場合は、ポート「944(n+3) とホスト値 "\*"」を構成する必要があります。該当するポートがない場合は、ビジネス・ルール・マネージャーを起動する前に手動で構成します。

2. Cookie を使用してセッションを追跡するように、セッション・トラッキング・メカニズムを設定します。
3. 最低でも、適切なセッション・タイムアウト値を必ず設定します。

## ビジネス・ルール・マネージャーを正常に動作させるための Web ブラウザーの構成

サーバーは、ビジネス・ルール・マネージャーのインストール中に自動的にクライアントを構成しますが、ビジネス・ルール・マネージャーが正しく動作するように、Web ブラウザーが正しく構成されていることを確認する必要があります。

### このタスクについて

ビジネス・ルール・マネージャー用の Web ブラウザーが正しく構成されていることを確認するには、以下のステップを実行します。

### 手順

1. Web ブラウザーでスクリプトが使用可能であることを確認します。

ビジネス・ルール・マネージャーが動作するには、スクリプトが機能する必要があります。

2. Cookie が使用可能であることを確認します。

ビジネス・ルール・マネージャーを使用する場合、必要に応じてセッションの追跡に Cookie が使用されます。このため、セッションを追跡できるように、ブラウザで Cookie を使用可能にします。Cookie を使用可能にする場合、必ずシステム管理者に連絡してください。

---

## リレーションシップ・サービスの構成

製品をインストールした後で、リレーションシップ・サービス用の構成プロパティを設定する必要があります。

### 始める前に

**このタスクに必要なセキュリティー役割:** セキュリティーとロール・ベースの許可が有効になっている場合、このタスクを実行するには、コンフィギュレーターまた

は管理者としてログインする必要があります。どの WebSphere セキュリティー役割でもこの構成を表示できます。

## このタスクについて

リレーションシップ・サービスのデータ・ソース・プロパティと照会ブロック・サイズ・プロパティ (リレーションシップ・インスタンス・カウント) を設定するには、以下のステップを実行します。

### 手順

1. 管理コンソールが稼働していることを確認します。
2. ナビゲーション・ペインで、「統合アプリケーション」 > 「**Relationship Manager**」をクリックします。
3. 「リレーションシップ・サービス構成」をクリックします。

タブ付きの構成ページが表示され、現在インストールされているリレーションシップ・サービスの名前とバージョン (読み取り専用) が示されます。

4. 「照会ブロック・サイズ (リレーションシップ・インスタンスのカウント) (Query block size (relationship instance count))」フィールドに、リレーションシップ・サービスがリレーションシップ照会用に確保する最大キャッシュを指定します。この設定により、照会結果セットのサイズが決定します。デフォルトでは、5000 個のリレーションシップ・インスタンスが一度に読み取られます。このフィールドによってサーバー・サイズ・メモリー使用量が制御されるため、管理者は、任意の照会が消費できるメモリー・リソースの量を一定の範囲内で制御できるようになります。
5. 「データ・ソース」フィールドで、セル・レベルで定義されたデータ・ソースの Java Naming and Directory Interface (JNDI) 名を入力して、リレーションシップ・サービスのデフォルトのデータ・ソースを指定します。これは、リレーションシップ・サービス用のテーブルが保管される場所です。デフォルトでは、各リレーションシップ関連スキーマはこのデータ・ソース内に作成されます。
6. 以下のオプションがあります。
  - 変更内容を保管し、前のページに戻る場合は、「OK」をクリックします。
  - 変更内容をクリアし、現在構成されている値または最後に保管された値を復元する場合は、「リセット」をクリックします。
  - そのページで保管されていない変更内容をすべて破棄し、前のページに戻る場合は、「キャンセル」をクリックします。

---

## 拡張メッセージング・リソースの構成

管理コンソールを使用して、拡張メッセージング・サービスおよびこのサービスを使用するアプリケーションに必要なリソースを構成します。拡張メッセージング・サービスを使用可能にすること、遅延応答に対応するためリスナー・ポートの拡張を構成すること、および拡張メッセージングを使用するアプリケーションに対して入力ポートと出力ポートを追加または変更することができます。

**重要:** 拡張メッセージング・サービス機能は、WebSphere Process Server 6.0.x から非推奨になっています。WebSphere Process Server 6.2 以降は、アプリケーションで使用することはできません (マイグレーション中のセル内の 6.0.x ノードを管理す

る場合は除く)。拡張メッセージング・サービスに依存する既存のアプリケーションは、標準の JMS API を使用するアプリケーションに置き換えるか、同じ機能を備えたメッセージング製品に置き換えてください。

拡張メッセージングはコンテナ管理メッセージングを使用可能にします。この機能は、既存のコンテナ管理パーシスタンスおよびトランザクションの振る舞いを使用するように、基本の Java Message Service (JMS) サポート、Enterprise Java Bean (EJB) コンポーネント・モデル、EJB 2.0 メッセージ駆動型 Bean を拡張します。

拡張メッセージングは、Bean 管理メッセージング実装を使用して JMS インターフェースを提供します。これにより、Bean 管理メッセージングと拡張メッセージングの両方で一貫した JMS サポートが使用されるようになります。JMS の使用法は簡単です。それは、JMS のサポートが拡張メッセージング・サービスによって管理されているためです。

拡張メッセージングについて詳しくは、WebSphere Business Integration Server Foundation インフォメーション・センターの以下の記事を参照してください。

- 拡張メッセージング：概説
- アプリケーションにおける拡張メッセージングの使用

## 拡張メッセージング・サービスを使用可能にする

拡張メッセージング・サービスを使用可能にして、コンテナ管理メッセージング(拡張メッセージング)のランタイム・サポートを提供します。「拡張メッセージング・サービス」ページを使用して、アプリケーション・サーバーの始動時にこのサービスを自動的に開始するか、または手動で開始するかを指定します。

### このタスクについて

**重要:** 拡張メッセージング・サービス機能は、WebSphere Process Server 6.0.x から非推奨になっています。WebSphere Process Server 6.2 以降は、アプリケーションで使用することはできません (マイグレーション中のセル内の 6.0.x ノードを管理する場合は除く)。拡張メッセージング・サービスに依存する既存のアプリケーションは、標準の JMS API を使用するアプリケーションに置き換えるか、同じ機能を備えたメッセージング製品に置き換えてください。

**このタスクに必要なセキュリティ役割:** セキュリティおよびロール・ベースの許可が使用可能になっている場合は、このタスクを実行するために、管理者またはコンフィギュレーターとしてログインする必要があります。

拡張メッセージング・サービスを使用可能にするには、以下のステップを実行します。

### 手順

1. 管理コンソールが稼働していることを確認します。
2. 「サーバー」 → 「サーバー・タイプ」 → 「**WebSphere Application Server**」 → 「*server\_name*」 → 「**拡張メッセージング・サービス**」をクリックして、「拡張メッセージング・サービス」ページを表示します。

3. サーバー起動時に拡張メッセージング・サービスを自動的に開始できるようにする場合、「サーバー起動時にサービスを使用可能にする」チェック・ボックスを選択します。 手動でサービスを開始する場合は、チェック・ボックスをクリアします。
4. 「OK」をクリックします。
5. プロンプトが表示されたら、コンソール・タスクバーの「保管」をクリックして、マスター・リポジトリに変更を保存します。
6. ご使用の構成で WebSphere MQSeries バインディング・トランスポートを使用している場合、MQ\_INSTALL\_ROOT 環境変数の値を次のように設定します。
  - a. 管理コンソールで、「環境」 → 「WebSphere 変数」をクリックします。
  - b. MQ\_INSTALL\_ROOT をクリックして、環境変数の構成ページを表示します。
  - c. 「値」フィールドで、デフォルト値 (\${WAS\_INSTALL\_ROOT}/lib/WMQ) を削除し、明示的なインストール・パス (Windows システムの場合は D:/IBM/WebSphereMQ など) に置換します。
  - d. 「OK」をクリックします。
7. 変更を有効にするには、アプリケーション・サーバーを停止して再始動します。

## 遅延応答を処理するためのリスナー・ポートの拡張の構成

リスナー・ポートに遅延応答を処理させるためには、拡張を構成して、ポートが応答をチェックする頻度、および応答を待つ長さを指定します。

### このタスクについて

**重要:** 拡張メッセージング・サービス機能は、WebSphere Process Server 6.0.x から非推奨になっています。WebSphere Process Server 6.2 以降は、アプリケーションで使用することはできません (マイグレーション中のセル内の 6.0.x ノードを管理する場合は除く)。拡張メッセージング・サービスに依存する既存のアプリケーションは、標準の JMS API を使用するアプリケーションに置き換えるか、同じ機能を備えたメッセージング製品に置き換えてください。

遅延応答は、送信側 Bean から送信されたメッセージに対する応答がメッセージング・インフラストラクチャーによって遅れた場合に発生します。その結果、アプリケーションは応答を受け取ることができません。拡張メッセージングは、これらの遅延応答メッセージを取得して、アプリケーションが提供するメッセージ駆動型 Bean に渡し、遅延応答を処理します。

**このタスクに必要なセキュリティ役割:** セキュリティおよびロール・ベースの許可が使用可能になっている場合は、このタスクを実行するために、管理者またはコンフィギュレーターとしてログインしている必要があります。

遅延応答を処理する、リスナー・ポートの拡張を作成し使用可能にするには、以下のステップを実行します。

## 手順

1. リスナー・ポートが定義済みおよび構成済みであること、および送信側 Bean を「遅延応答を処理 (Handle late responses)」オプションを使用可能にしてデプロイ済みであることを確認してください。

注: このオプションを使用可能にした送信側 Bean のデプロイについては、WebSphere Business Integration Server Foundation インフォメーション・センターを参照してください。

2. 管理コンソールから、「サーバー」 → 「サーバー・タイプ」 → 「WebSphere Application Server」 → 「*server\_name*」 → 「拡張メッセージング・サービス」 → 「リスナー・ポートの拡張」をクリックします。
3. 「リスナー・ポートの拡張」ページで、「新規」をクリックし、新規のリスナー・ポート拡張を作成します。
4. 「新規リスナー・ポートの拡張 (New Listener Port Extension)」ページで、「使用可能」チェック・ボックスを選択して、拡張および遅延応答の処理を使用可能にします。
5. 「要求間隔」フィールドで、デフォルト値を受け入れるか、または新規の値を指定して、リスナー・ポートが遅延応答をチェックする頻度を指定します。
6. 「要求タイムアウト」フィールドで、デフォルト値を受け入れるか、または新規の値を指定して、リスナー・ポートが遅延応答を待つ長さを指定します。リスナー・ポートは、指定されたタイムアウト値後に受信したあらゆる応答を廃棄します。
7. 「リスナー・ポート」ドロップダウン・メニューを使用して、拡張に使用するリスナー・ポートを指定します。
8. 「OK」をクリックします。
9. プロンプトが表示されたら、コンソール・タスクバーの「保管」をクリックして、マスター・リポジトリに変更を保存します。
10. 変更を有効にするには、アプリケーション・サーバーを停止して再始動します。

## 次のタスク

リスナー・ポートの拡張を作成した後、「リスナー・ポートの拡張」の設定ページを使用して、必要に応じて構成を変更できます。

## 拡張メッセージング・プロバイダーを選択する

管理する拡張メッセージング・プロバイダーを選択するには、「拡張メッセージング・プロバイダー」ページで適切なスコープをクリックします。拡張メッセージングを使用するアプリケーションを含む各スコープ (セル、ノード、およびサーバー) は、それぞれ独自の拡張メッセージング・プロバイダーを保有し、リソースを管理します。入力ポート、出力ポート、または各プロバイダーのその他のカスタム・プロパティを作成、変更または削除できます。

## このタスクについて

**重要:** 拡張メッセージング・サービス機能は、WebSphere Process Server 6.0.x から非推奨になっています。WebSphere Process Server 6.2 以降は、アプリケーションで

使用することはできません (マイグレーション中のセル内の 6.0.x ノードを管理する場合は除く)。拡張メッセージング・サービスに依存する既存のアプリケーションは、標準の JMS API を使用するアプリケーションに置き換えるか、同じ機能を備えたメッセージング製品に置き換えてください。

**このタスクに必要なセキュリティ役割:** セキュリティーおよびロール・ベースの許可が使用可能になっている場合は、このタスクを実行するために、管理者、オペレーター、コンフィギュレーター、またはモニターとしてログインしている必要があります。

管理する拡張メッセージング・プロバイダーを選択するには、以下のステップを実行します。

## 手順

1. 管理コンソールで、「リソース」>「拡張メッセージング・プロバイダー」をクリックします。
2. 「拡張メッセージング・プロバイダー」ページで、管理する拡張メッセージング・プロバイダーについて適切なスコープを選択します。
  - 「セル」: 最も汎用的なスコープです。セル・スコープに定義された拡張メッセージング・リソースは、オーバーライドされない限り、すべてのノードおよびサーバーから可視です。
  - 「ノード」: ノード・スコープに定義された拡張メッセージング・リソースは、セル・スコープに定義されたあらゆる重複する定義をオーバーライドします。そのノード上のサーバー・スコープでオーバーライドされていない限り、同じノードのすべてのサーバーから可視です。
  - 「サーバー」: サーバー・スコープに定義された拡張メッセージング・リソースは、セル・スコープ、または親ノード・スコープに定義されたあらゆる重複する定義をオーバーライドします。これらは、特定のサーバーからのみ可視です。

スコープについて詳しくは、WebSphere Application Server インフォメーション・センターを参照してください。

3. 「適用」をクリックします。

## タスクの結果

管理コンソールは、ページ下部の「スコープ」、「名前」、「説明」フィールドを更新し、選択したリソース・プロバイダーの値として反映させます。

## 次のタスク

入力ポート、出力ポート、または選択した拡張メッセージング・プロバイダーのその他のカスタム・プロパティを作成、変更または削除できます。

## 入力ポートの構成

管理コンソールを使用して、セッション Bean から作成された各受信側 Bean について、新規入力ポートを作成または既存入力ポートを変更します。入力ポートは、受信する Java Message Service (JMS) 宛先についてプロパティを定義し、メッセージの選択および処理方法を指定し、必要な応答宛先に関する詳細を提供します。

## このタスクについて

**重要:** 拡張メッセージング・サービス機能は、WebSphere Process Server 6.0.x から非推奨になっています。WebSphere Process Server 6.2 以降は、アプリケーションで使用することはできません (マイグレーション中のセル内の 6.0.x ノードを管理する場合は除く)。拡張メッセージング・サービスに依存する既存のアプリケーションは、標準の JMS API を使用するアプリケーションに置き換えるか、同じ機能を備えたメッセージング製品に置き換えてください。

メッセージ駆動型 Bean から作成された受信側 Bean について入力ポートを作成する必要はありません。必要な詳細は、デプロイ済みメッセージ駆動型 Bean およびメッセージ・リスナー・サービスに関連付けられています。

**このタスクに必要なセキュリティ役割:** セキュリティおよびロール・ベースの許可が使用可能になっている場合は、このタスクを実行するために、管理者またはコンフィギュレーターとしてログインしている必要があります。

入力ポートを追加または変更するには、以下のステップを実行します。

### 手順

1. 管理コンソールで、「リソース」>「拡張メッセージング・プロバイダー」をクリックします。
2. 「拡張メッセージング・プロバイダー」ページで、作業するリソース・プロバイダーについて適切な範囲を選択します。
3. 「適用」をクリックします。
4. 「追加プロパティ」テーブルから「入力ポート」をクリックします。
5. 「入力ポート」のコレクション・ページで、以下のいずれかを行います。
  - 新規の入力ポートを作成する場合は、「新規」をクリックします。
  - 既存の入力ポートを変更する場合は、ポート名をクリックします。
6. 「入力ポート」の設定ページで、入力ポートに適切なプロパティを指定します。
7. 「OK」をクリックします。
8. プロンプトが表示されたら、コンソール・タスクバーの「保管」をクリックして、マスター・リポジトリに変更を保存します。
9. 変更を有効にするには、アプリケーション・サーバーを停止して再始動します。

### 入力ポート設定:

新規の入力ポートを作成、または既存の入力ポートを変更する場合、特定のプロパティを指定する必要があります。このトピックの情報を使用して、オプションまたは必須のプロパティ、受け入れるデータ・タイプを決定してください。

**重要:** 拡張メッセージング・サービス機能は、WebSphere Process Server 6.0.x から非推奨になっています。WebSphere Process Server 6.2 以降は、アプリケーションで使用することはできません (マイグレーション中のセル内の 6.0.x ノードを管理する場合は除く)。拡張メッセージング・サービスに依存する既存のアプリケーションは、標準の JMS API を使用するアプリケーションに置き換えるか、同じ機能を備えたメッセージング製品に置き換えてください。

入力ポートには以下の構成プロパティがあります。

#### 有効範囲

拡張メッセージング・プロバイダーが定義される範囲。この値は、構成ファイルの場所を表します。管理コンソールは自動的にこのフィールドを取り込みます。値を編集することはできません。

**名前** 管理目的で使用される入力ポートの名前。このフィールドにはストリング値が必要です。

#### JNDI 名

入力ポートの Java Naming and Directory Interface (JNDI) 名。このフィールドにはストリング値が必要です。

**説明** 管理目的で使用される入力ポートの説明。このフィールドはオプションです。ストリング値が入力できます。

#### カテゴリ

リソースの分類またはグループ化を行うために使用するカテゴリ・ストリング。このフィールドはオプションです。ASCII 文字で最大 30 文字のストリング値が入力できます。

#### JMS 接続ファクトリー JNDI 名

入力ポートが使用している Java Message Service (JMS) 接続ファクトリーの JNDI 名。このフィールドにはストリング値 (jms/connFactory1 など) が必要です。

#### JMS 宛先 JNDI 名

入力ポートが使用している JMS 宛先の JNDI 名。このフィールドにはストリング値 (jms/destn1 など) が必要です。

#### JMS 肯定応答モード

メッセージの応答に使用する JMS モード。このフィールドは Bean 管理トランザクション区分を使用するメッセージ駆動型 Bean (言い換えると、トランザクション・タイプを Bean に設定) に必須です。

このフィールドの有効な値は以下のとおりです。

- **Auto Acknowledge:** 以下のいずれかの場合、セッションは自動的にメッセージに応答します。
  - セッションが、呼び出しから正常に戻ってメッセージを受信する場合
  - セッションがメッセージ・リスナーを呼び出してメッセージを処理し、そのリスナーから正常な応答を受け取った場合
- **Dups OK Acknowledge:** セッションはメッセージの送達にのみ応答します。このため、JMS が失敗すると、重複メッセージが送達されることになります。

デフォルト・モードは Auto Acknowledge です。

#### 宛先タイプ

JMS リソース・タイプ。このフィールドには以下のいずれかの値が必要です。

- **Queue:** 受信側 Bean はキュー宛先からメッセージを受信します。
- **Topic:** 受信側 Bean はトピック宛先からメッセージを受信します。



デフォルト値は Queue です。

### サブスクリプション永続性

JMS トピック・サブスクリプションに耐久性があるかどうかを指定します。このフィールドは、JMS 宛先タイプがトピックの場合、必須です。このフィールドの有効な値は以下のとおりです。

- **Durable:** サブスクライバーは、JMS によって保存される固有の ID を持つ永続サブスクリプションを登録します。ID が同じ後続のサブスクライバー・オブジェクトは、前のサブスクライバーが残した状態でサブスクリプションを再開します。永続サブスクリプションのアクティブ・サブスクライバーがない場合、JMS は、メッセージを受信するかメッセージが期限切れになるまで、サブスクリプションのメッセージを保存します。
- **NonDurable:** 非永続サブスクリプションは、所有するサブスクライバーの存続時間中は持続します。クライアントは、サブスクライバーがアクティブの間のみ、トピックで公開されたメッセージを確認します。サブスクライバーが非アクティブの場合、クライアントはそのトピックで公開されたメッセージを確認できません。

デフォルト値は NonDurable です。

### 応答 JMS 接続ファクトリー JNDI 名

応答で使用する JMS 接続ファクトリーの JNDI 名。このフィールドにはストリング値 (jms/connFactory1 など) が必要です。

### 応答 JMS 宛先 JNDI 名

応答で使用する JMS 宛先の JNDI 名。このフィールドにはストリング値 (jms/destn1 など) が必要です。

## 出力ポートの構成

管理コンソールを使用して、送信側 Bean について、新規出力ポートを作成または既存出力ポートを変更します。出力ポートは、送信されたメッセージの宛先を定義するために必要な送信側 Bean のプロパティを指定します。また、応答が期待される場合のオプションのプロパティも指定します。出力ポートは、デプロイメント時に送信側 Bean に関連付けられます。

## このタスクについて

**重要:** 拡張メッセージング・サービス機能は、WebSphere Process Server 6.0.x から非推奨になっています。WebSphere Process Server 6.2 以降は、アプリケーションで使用することはできません (マイグレーション中のセル内の 6.0.x ノードを管理する場合は除く)。拡張メッセージング・サービスに依存する既存のアプリケーションは、標準の JMS API を使用するアプリケーションに置き換えるか、同じ機能を備えたメッセージング製品に置き換えてください。

**このタスクに必要なセキュリティ役割:** セキュリティおよびロール・ベースの許可が使用可能になっている場合は、このタスクを実行するために、管理者またはコンフィギュレーターとしてログインしている必要があります。

出力ポートを追加または変更するには、以下のステップを実行します。

## 手順

1. 管理コンソールで、「リソース」>「拡張メッセージング・プロバイダー」をクリックします。
2. 「拡張メッセージング・プロバイダー」ページで、変更する拡張メッセージング・プロバイダーについて適切な範囲を選択します。
3. 「適用」をクリックします。
4. 「追加プロパティ」テーブルから「出力ポート」をクリックします。
5. 「出力ポート」のコレクション・ページで、以下のいずれかを行います。
  - 新規の出力ポートを追加する場合は、「新規」をクリックします。
  - 既存の出力ポートを変更する場合は、ポート名をクリックします。
6. 「出力ポート」の設定ページで、出力ポートに適切なプロパティを指定します。
7. 「OK」をクリックします。
8. プロンプトが表示されたら、コンソール・タスクバーの「保管」をクリックして、マスター・リポジトリに変更を保存します。
9. 変更を有効にするには、アプリケーション・サーバーを停止して再始動します。

## 出力ポート設定:

新規の出力ポートを作成、または既存の出力ポートを変更する場合、特定のプロパティを指定する必要があります。このトピックの情報を使用して、オプションまたは必須のプロパティ、受け入れるデータ・タイプを決定してください。

**重要:** 拡張メッセージング・サービス機能は、WebSphere Process Server 6.0.x から非推奨になっています。WebSphere Process Server 6.2 以降は、アプリケーションで使用することはできません (マイグレーション中のセル内の 6.0.x ノードを管理する場合は除く)。拡張メッセージング・サービスに依存する既存のアプリケーションは、標準の JMS API を使用するアプリケーションに置き換えるか、同じ機能を備えたメッセージング製品に置き換えてください。

出力ポートには以下の構成プロパティがあります。

### 有効範囲

拡張メッセージング・プロバイダーの範囲。この値は、構成ファイルの場所を表します。管理コンソールは自動的にこのフィールドを取り込みます。値を編集することはできません。

**名前** 管理目的で使用される出力ポートの名前。このフィールドにはストリング値が必要です。

### JNDI 名

出力ポートの Java Naming and Directory Interface (JNDI) 名。このフィールドにはストリング値が必要です。

**説明** 管理目的で使用される出力ポートの説明。このフィールドはオプションです。ストリング値が入力できます。

## カテゴリー

リソースの分類またはグループ化を行うために使用するカテゴリー・ストリング。このフィールドはオプションです。ASCII 文字で最大 30 文字のストリング値が入力できます。

## JMS 接続ファクトリー JNDI 名

出力ポートが使用している Java Message Service (JMS) 接続ファクトリーの JNDI 名。このフィールドにはストリング値 (jms/connFactory1 など) が必要です。

## JMS 宛先 JNDI 名

出力ポートが使用している JMS 宛先の JNDI 名。このフィールドにはストリング値 (jms/destn1 など) が必要です。

## JMS 送達モード

メッセージの送達に使用する JMS モード。このフィールドには以下の値のいずれかを選択する必要があります。

- Persistent: 宛先上のメッセージは永続的です。
- Nonpersistent: 宛先上のメッセージは永続的ではありません。

デフォルト値は Persistent です。

## JMS 優先順位

キュー宛先のメッセージ優先順位。このフィールドでは、0 から 9 までの整数値が必要です。デフォルト値は 4 です。

## JMS 存続時間

メッセージがキュー内に存続する時間 (ミリ秒)。指定された時間が経過すると、メッセージの有効期限が切れます。

このフィールドでは、0 から  $n$  までの整数値が必要です。

- 0: メッセージはタイムアウトになりません。
- $n$ : メッセージは  $n$  ミリ秒後にタイムアウトになります。

デフォルト値は 0 です。

## JMS 使用不可メッセージ ID

JMS メッセージ ID をシステムが生成するかどうかを指定。このフィールドは必須フィールドです。以下のいずれかの値を選択します。

- 選択: JMS メッセージ ID は生成されません。
- クリア: JMS メッセージ ID が自動的に生成されます。

デフォルトでは、JMS message ID は生成されます。

## JMS メッセージ・タイム・スタンプ使用不可

JMS メッセージ・タイム・スタンプが生成されるかどうかを指定します。このフィールドは必須フィールドです。以下のいずれかの値を選択します。

- 選択: 送信メッセージにメッセージ・タイム・スタンプは追加されません。
- クリア: 送信メッセージにメッセージ・タイム・スタンプは自動的に追加されます。

デフォルトでは、送信メッセージにメッセージ・タイム・スタンプは追加されます。

#### 応答 JMS 接続ファクトリー JNDI 名

出力ポートで処理する応答で使用する JMS 接続ファクトリーの JNDI 名。このフィールドにはストリング値 (jms/connFactory1 など) が必要です。

#### 応答 JMS 宛先 JNDI 名

出力ポートで処理する応答で使用する JMS 宛先の JNDI 名。このフィールドにはストリング値 (jms/destn1 など) が必要です。

---

## メッセージング・サーバー環境のセットアップ

XMS アプリケーション (XMS に付属のサンプル・アプリケーションを含む) を実行する前に、メッセージング・サーバー環境をセットアップする必要があります。

### このタスクについて

メッセージング・サーバー環境をセットアップするために実行すべき手順は、アプリケーションが接続する成果物と、Message Service Client for .NET か Message Service Client for C/C++ のどちらを使用しているかによって異なります。これらの手順については、当該タイプのクライアントに関する資料で説明されています。

### 手順

- Message Service Client for .NET のセットアップ
- Message Service Client for C/C++ のセットアップ

### 次のタスク

メッセージ・サービス・クライアントに付属のサンプル・アプリケーションを使用すると、インストールおよびメッセージング・サーバーのセットアップを検証することができます。サンプル・アプリケーションの使用については、以下のトピックを参照してください。

- .NET のサンプル XMS アプリケーションの使用
- C/C++ のサンプル XMS アプリケーションの使用

---

## JNDILookup Web Service の構成

Message Service Clients for C/C++ and .NET を備えた WebSphere Process Server で提供された管理 JMS オブジェクトを使用する場合、WebSphere Process Server が提供する JNDILookup Web Service を、非 Java クライアントが非 Java 環境から管理 JMS オブジェクトにアクセスできるように構成する必要があります。

### 始める前に

このタスクを開始する前に、JNDILookup Web サービス・アプリケーションがインストールされていることを確認してください。

### このタスクについて

管理上定義された ConnectionFactory オブジェクトおよび Destination オブジェクトによって、JMS 実装と JMS インターフェースが分離されます。これにより、JMS クライアント・アプリケーションが JMS プロバイダーの実装詳細から隔離されるため、移植性が高まります。管理対象オブジェクトを使用すると、管理者は中央リ

ポジトリーからクライアント・アプリケーションの接続設定を管理できるようになります。例えば、アプリケーションが JNDI を通して取得する管理対象の Destination オブジェクトを変更することで、アプリケーションが使用する特定のキューを変更できます。

Message Service Clients for C/C++ and .NET などの非 Java クライアントも管理対象オブジェクトを使用できます。ただし、WebSphere Process Server によって提供される管理対象の JMS オブジェクトは、JNDI を通してアクセスされる直列化 Java オブジェクトなので、非 Java クライアントは JNDILookup Web サービスを使用しないとこれらのオブジェクトを正しく解釈できません。この Web サービスによって提供されるルックアップ・オペレーションを使用すると、Message Service Clients for C/C++ and .NET がオブジェクト名を指定することで JNDI オブジェクトの取得を要求できるようになります。管理対象オブジェクトのプロパティは、名前/値ペアのマッピングを使用してアプリケーションに返されます。

## 手順

Message Service Client for C/C++ または Message Service Client for .NET アプリケーション内で JNDILookup Web サービス URL を定義します。アプリケーション内で Web サービス URL を定義するには、InitialContext オブジェクトの XMSC\_IC\_URL プロパティを Web サービスのエンドポイント URL に設定します。このプロパティは、InitialContext オブジェクトの構成時に引数として指定することも可能です。

---

## Common Event Infrastructure の構成

サーバー AdminTask オブジェクトを使用して、Common Event Infrastructure リソースを構成できるほか、既存のリソースを変更することもできます。

### このタスクについて

Common Event Infrastructure (CEI) は、デフォルト構成を使用してインストールすることができます。このデフォルト構成は、スタンドアロン・サーバー構成で完全に機能する構成です。この構成は、プロファイル管理ツールを使用して、スタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成する場合にのみ行います。これ以外の場合 (Network Deployment 環境またはクラスターにインストールする場合など) は、管理コンソールを使用して CEI を構成し、システムに適した構成となるようにします。

また、wsadmin コマンドを使用して CEI を構成したり、このコマンドを使用して既存の CEI 構成を変更することもできます。いずれの場合も、サーバー AdminTask オブジェクトを使用して CEI の構成を変更し、管理コマンドを実行します。

CEI 構成の変更後に、サーバーまたはクラスターを再始動する必要があります。

## Common Event Infrastructure コンポーネント

Common Event Infrastructure コンポーネントは、一連のアプリケーション、サービス、およびリソースとしてサーバー上にインストールされます。

Common Event Infrastructure を構成すると、いくつかのコンポーネントが作成され、サーバー上にデプロイされます。

## Common Event Infrastructure サービス

サーバーにインストールされるサービスで、アプリケーションおよびクライアントが Common Event Infrastructure を使用できるようにします。

Common Event Infrastructure サービスの構成は、次のようにして管理コンソールに表示できます。

- サーバーの場合は、「サーバー」>「アプリケーション・サーバー」>「*server\_name*」>「ビジネス・インテグレーション」>「Common Event Infrastructure」>「Common Event Infrastructure サービス」を選択します。
- クラスターの場合は、「サーバー」>「クラスター」>「*cluster\_name*」>「ビジネス・インテグレーション」>「Common Event Infrastructure」>「Common Event Infrastructure サービス」を選択します。

「イベント・インフラストラクチャー・サーバーを使用可能に設定」というチェック・ボックスが選択されている場合、サービスはインストール済みで稼働しているか、サーバーまたはクラスターを再始動すると始動します。このチェック・ボックスがクリアされている場合、サービスはインストールされていないか、サーバーまたはクラスターを再始動するとアンインストールされます。

## イベント・サービス設定

イベント・サービスが使用する一連のプロパティ。これらのプロパティにより、データ・ストアを使用して、イベントの配布および永続化が可能になります。通常、このリソースに構成は必要ありませんが、同じセルに複数のイベント・サービスをセットアップする場合は、追加のイベント・サービス設定を作成することが必要な場合があります。イベント・サービス設定を表示するには、「サービス統合」>「イベント・サービス」>「イベント・サービス設定」をクリックします。

## イベント・メッセージング構成

Java Messaging Service (JMS) を使用して、イベントをイベント・サービスに非同期的に転送することが可能なリソース。デフォルトのメッセージング構成では、サーバー組み込みメッセージが使用されます。必要な場合は、イベント・メッセージング用に外部の JMS プロバイダーを構成することもできます。

## イベント・データベース

イベント・データベースは、イベント・サービスが受け取ったイベントを永続的に保管するために使用されます。Derby データベースは、サーバーの一部として組み込まれていますが、実稼働環境での使用には推奨されません。その代替りとして、DB2、Oracle、SQLServer、および Informix 製品で外部イベント・データベースを構成できます。

## イベント・フィルター・プラグイン

フィルター・プラグインは、XPath イベント・セレクターを使用して、ソースのイベントをフィルターに掛けるために使用されます。フィルター・プロパティを構成するには、「サービス統合」>「Common Event Infrastructure」>「イベント・エミッター・ファクトリー」>「イベント・フィルター設定」をクリックします。

### エミッター・ファクトリー

エミッター・ファクトリーは、エミッターを作成するためにイベント・ソースで使用されるオブジェクトです。エミッターは、イベントをイベント・サービスに送信するために使用されます。エミッター・ファクトリーのプロパティは、そのエミッター・ファクトリーを使用して作成したすべてのエミッターの動作に影響を与えます。フィルター・プロパティを構成するには、「サービス統合」>「**Common Event Infrastructure**」>「イベント・エミッター・ファクトリー」をクリックします。

### イベント・サービス伝送

イベント・サービス伝送は、エミッターが EJB 呼び出しを使用してイベント・サービスに同期的にアクセスする方法を決定するプロパティを定義するオブジェクトです。これらのプロパティは、エミッターを新規作成するときにエミッター・ファクトリーで使用されます。使用可能なイベント・サービス伝送は、エミッター・ファクトリー設定から表示または変更できません。

### JMS 伝送

JMS 伝送は、エミッターが JMS キューを使用してイベント・サービスに非同期にアクセスする方法を決定するプロパティを定義するオブジェクトです。これらのプロパティは、エミッターを新規作成するときにエミッター・ファクトリーで使用されます。使用可能な JMS 伝送は、エミッター・ファクトリー設定から表示または変更できます。

### イベント・グループ

イベント・グループは、イベントの論理的な集合であり、イベントをその内容に応じて分類するために使用されます。イベント・サービスからイベントを照会する場合、またはイベント配布をサブスクライブする場合、イベント・コンシューマーは、イベント・グループを指定することにより、そのグループのイベントのみを取得できます。イベント・グループは、永続データ・ストアに保管するイベントを指定するために使用することもできます。使用可能なイベント・グループを管理コンソールで表示するには、「サービス統合」>「**Common Event Infrastructure**」>「イベント・サービス (Event service)」>「イベント・サービス (Event services)」>「*event\_service*」>「イベント・グループ」をクリックします。

## 管理コンソールを使用した **Common Event Infrastructure** の構成

サーバー管理コンソールを使用して **Common Event Infrastructure** を構成します。

### このタスクについて

管理コンソールの「**Common Event Infrastructure** サーバー」パネルを開きます。

サーバーを構成する場合は、「サーバー」>「サーバー・タイプ」>「**WebSphere Application Server**」> *server\_name* > 「ビジネス・インテグレーション」>「**Common Event Infrastructure**」>「**Common Event Infrastructure** サーバー」を選択します。

クラスターを構成する場合は、「サーバー」>「クラスター」>「WebSphere Application Server クラスター」> *cluster\_name* >「ビジネス・インテグレーション」>「Common Event Infrastructure」>「Common Event Infrastructure サーバー」をクリックします。

## 手順

1. Common Event Infrastructure エンタープライズ・アプリケーションのデプロイメントを可能にするために、「イベント・インフラストラクチャー・サーバーを使用可能に設定」というチェック・ボックスを選択します。サーバーが既に構成済みである場合は、このチェック・ボックスを選択するかクリアすることによって、サーバーを使用可能または使用不可に設定できます。使用可能に設定するチェック・ボックスがクリアされている場合、Common Event Infrastructure はまだ構成されていないか、以前の構成が既に無効にされており、サーバーが再始動されていません。情報メッセージにより、このデプロイメント・ターゲットに Common Event Infrastructure が構成済みであるかどうかを示されます。サーバーが既に構成済みである場合は、イベント・データベースかメッセージ・ストア、またはその両方のデータ・ソース設定を変更できます。

**注:** サーバーがまだ構成されていない場合に、チェック・ボックスを選択して Common Event Infrastructure サーバーを使用可能にすると、表示されたパラメーターを変更しない限り、それらのパラメーターを使用してサーバーが構成されません。

- 初めて構成を行う場合は、共通データベースにイベント・データ・ソース・テーブルが作成されます。既に Common Event Infrastructure サーバー構成がある場合は、データベースを作成する必要があります。
- 共通データベース内の固有スキーマの下にメッセージング・サービスが作成されます。

Common Event Infrastructure が構成されているサーバー/クラスターを再始動すると、新規の変更が有効になります。

2. イベント・データベースを構成 (または既存のイベント・データベース構成の現在の設定を変更) します。次のいずれかで、フィールドに適切な設定値を入力してください。
  - 「編集」をクリックして、このパネルよりも詳細なオプション・リストを持つデータベース構成パネルを表示します。
  - パネルの各フィールドを使用して、情報を入力します。
    - a. 「データベース名」 – イベントの保管に使用するデータベースの名前を入力します。
    - b. 「テーブルの作成」 – イベント・データベースにデータベース表を作成する場合は、このチェック・ボックスを選択します。

**注:** 別のサーバーにあるデータベースを使用するように Common Event Infrastructure を構成する場合は、このコントロールを使用してテーブルを作成することはできません。この構成をすべて設定した後に生成されるデータベース・スクリプトを使用する必要があります。その場合、「編集」をクリックしてデータ・ソース詳細パネルを表示すると、データベース作成スクリプトの場所が表示されます。



- c. 「ユーザー名」および「パスワード」 - イベント・データベースの認証時に使用されます。
- d. 「サーバー」 - イベント・データベースが存在するサーバーの名前を入力します。
- e. 「プロバイダー」 - データベースのプロバイダーをメニューから選択します。

注: 「スキーマ」フィールドは、iSeries または z/OS プラットフォーム上で DB2 を使用してデータベースを作成する場合のみアクティブになります。それ以外の場合、「スキーマ」フィールドは使用できません。

重要: ターゲット・データベースにテーブルが存在する場合は、構成が失敗することがあります。

- 3. Common Event Infrastructure バスがサーバー上で「ローカル」として存在するか、あるいは「リモート」として他のサーバー上に存在するかを選択します。「リモート」を選択した場合は、リモートのロケーションをメニューから選択するか、あるいは「新規」をクリックして新規リモート・バスを作成します。
- 4. メッセージング用の Common Event Infrastructure サポートを構成します。
  - 「編集」をクリックして、このパネルよりも詳細なオプション・リストを持つデータベース構成パネルを表示します。
  - パネルの各フィールドを使用して、情報を入力します。
    - a. 「データベース名」 - メッセージの保管に使用するデータベースの名前を入力します。
    - b. 「スキーマ」 - スキーマの名前を入力します。表示されたデフォルト名をそのまま使用してもかまいません。
    - c. 「ユーザー名」および「パスワード」 - メッセージング・データベースの認証時に使用されます。
    - d. 「サーバー」 - メッセージング・データベースが存在するサーバーの名前を入力します。
    - e. 「プロバイダー」 - データベースのプロバイダーをメニューから選択します。
- 5. Common Event Infrastructure バスのメッセージング認証別名を作成します。
  - a. 「追加プロパティ」 > 「JMS 認証別名」を選択します。
  - b. システム統合バスでのセキュア通信に使用するユーザー ID およびパスワードを入力します。セキュリティが使用不可の場合は、ユーザー ID とパスワードの両方について、デフォルトの構成値「CEI」を使用してもかまいません。セキュリティが使用可能に設定されている場合は、バス認証に使用するユーザー ID とパスワードを入力します。実稼働環境では、独自のユーザー ID とパスワードを選択してシステムを保護します。
  - c. 「OK」をクリックします。
- 6. 「OK」または「適用」をクリックします。
- 7. サーバーまたはクラスターを再始動します。

## タスクの結果

これで、Common Event Infrastructure の主要な部分がすべて構成されて、サーバーまたはクラスターで稼働するようになります。この構成にはイベント・データ・ストア、メッセージング・エンジン、およびイベント・アプリケーションが含まれます。このパネルを使用することにより、多数のコマンドとステップを使用して Common Event Infrastructure を構成する必要がなくなります。

## 次のタスク

サーバーまたはクラスターの再始動後は、アプリケーションから発行されたサービス・コンポーネント・イベントを保管できるようになります。この後は、

「**Common Event Infrastructure の宛先**」パネルを選択して、Common Event Infrastructure サーバーのランタイム・プロパティを変更することができます。また、始動時に Common Event Infrastructure サーバーを始動するかどうかを選択したり、イベントが送信されるエミッター・ファクトリー JNDI 名を指定することができます。

## Common Event Infrastructure アプリケーションのデプロイ

Common Event Infrastructure を使用するには、まずイベント・サービスおよび関連するリソースをサーバー・ランタイム環境にデプロイしておく必要があります。

### このタスクについて

Common Event Infrastructure エンタープライズ・アプリケーションには、イベント・サービスのランタイム・コンポーネントと、非同期イベント送信で使用されるデフォルトのメッセージング構成が含まれます。

イベント・サービスをデプロイするには、以下の手順を実行します。

### 手順

wsadmin ツールから **deployEventService** 管理コマンドをバッチ・モードまたは対話モードで実行します。 **deployEventService** 管理コマンドのパラメーターは、以下のとおりです。

#### **nodeName**

イベント・サービスをデプロイするノードの名前。このパラメーターは任意指定です。ノード名を指定しない場合、デフォルト値は現在のノードです。ノード名を指定する場合は、**serverName** パラメーターを使用してサーバー名も指定する必要があります。クラスターにイベント・サービスをデプロイする場合は、このパラメーターは無効です。

#### **serverName**

イベント・サービスをデプロイするサーバーの名前。このパラメーターは、ノードを指定する場合にのみ必要です。クラスターにイベント・サービスをデプロイする場合は、このパラメーターは無効です。

#### **clusterName**

イベント・サービスをデプロイするクラスターの名前。このパラメーターは任意指定です。ノードまたはサーバーの有効範囲にデプロイする場合は指定しないでください。

## enable

サーバー始動時にイベント・サービスを自動的に開始するかどうかを示します。  
デフォルト値は true です。

## タスクの結果

管理コマンドが完了すると、Common Event Infrastructure のイベント・サービスおよびデフォルトのメッセージング構成が、指定された有効範囲にデプロイされます。

## 次のタスク

WebSphere セキュリティーが使用可能な場合は、**setEventServiceJmsAuthAlias** 管理コマンドを使用して JMS 認証別名とパスワードを構成する必要もあります。

クラスターにイベント・サービスをデプロイする場合は、イベント・データベースを手動で構成する必要もあります。

## Common Event Infrastructure のクラスターへのデプロイ

Common Event Infrastructure リソースは、いくつかの方法でクラスター環境にデプロイできます。

### Common Event Infrastructure の既存のクラスターへのデプロイ:

既存のクラスターにイベント・サービス・アプリケーションをデプロイできます。

### このタスクについて

イベント・サービス・アプリケーションをクラスターにデプロイすることは、アプリケーションをスタンドアロン・サーバーにデプロイすることと本質的には同じです。ただし、クラスター環境では、デフォルトのイベント・データベースは構成されません。

Common Event Infrastructure をクラスター環境にデプロイして構成するには、以下の手順を実行します。

### 手順

1. クラスターの名前を指定し、それ以外はスタンドアロン・サーバーの場合と同様に、**deployEventService** 管理コマンドを実行します。クラスターを指定するには、**clusterName** パラメーターを使用します。
2. デプロイメント・マネージャー・システムで、データベース構成管理コマンドを実行します。**clusterName** パラメーターを使用して、クラスター名を指定します。このコマンドにより、データベース構成スクリプトが生成されます。
3. 生成されたデータベース構成スクリプトをデータベース・システムにコピーします。
4. データベース・システムに対してデータベース構成スクリプトを実行して、イベント・データベースを作成します。
5. デプロイメント・マネージャー・システムで **enableEventService** コマンドを実行して、イベント・サービスを使用可能にします。**clusterName** パラメーターを使用して、クラスターの名前を指定します。

## 既存の Common Event Infrastructure サーバーの変換によるクラスターの作成:

Common Event Infrastructure と共に構成されている既存のスタンドアロン・サーバーを変換して、クラスターを作成することができます。

### 始める前に

既存のサーバーを変換する前に、そのサーバーが Common Event Infrastructure 用に完全に構成されていることを確認してください。この構成には、イベント・サービス・アプリケーションのデプロイとイベント・データベースの構成も含まれます。

### このタスクについて

クラスターを作成するには、以下の手順を実行します。

### 手順

1. 通常の WebSphere プロセスに従って、スタンドアロン・サーバーを新しいクラスターの最初のメンバーに変換します。サーバーを変換するときに、以下のステップが実行されます。
  - サーバーの有効範囲にある使用可能な Common Event Infrastructure リソースが、新しいクラスターの有効範囲に移動されます。

**デフォルト・データベース:** 既存のサーバーがデフォルトの Derby データベースと共に構成されている場合、データベース・リソースは、クラスターの有効範囲に移動されずに除去されます。デフォルトのデータベース構成は、クラスターでサポートされません。この場合、デフォルトでは、クラスター内のイベント・サービスは使用不可になります。
  - デプロイするイベント・サービス・アプリケーションのターゲット・リストが変更され、変換されるサーバーが除去されて新しいクラスターが追加されます。
2. オプション: 変換されるサーバーがデフォルトの Derby データベースと共に構成されていた場合は、クラスターの新しいイベント・データベースを構成してから、イベント・サービスを使用可能にする必要があります。
  - a. デプロイメント・マネージャー・システムで、データベース構成管理コマンドを実行します。 `clusterName` パラメーターを使用して、クラスター名を指定します。このコマンドにより、データベース構成スクリプトが生成されます。
  - b. 生成されたデータベース構成スクリプトをデータベース・システムにコピーします。
  - c. データベース・システムに対してデータベース構成スクリプトを実行して、イベント・データベースを作成します。
  - d. デプロイメント・マネージャー・システムで `enableEventService` コマンドを実行して、イベント・サービスを使用可能にします。 `clusterName` パラメーターを使用して、クラスターの名前を指定します。

既存の Common Event Infrastructure サーバーをテンプレートとして使用してクラスターを作成する:

既存の Common Event Infrastructure サーバーをテンプレートとして指定することにより、クラスターを作成できます。

### 始める前に

この方法を使用してクラスターを作成する前に、Common Event Infrastructure 用に完全に構成済みである既存のサーバーを用意する必要があります。この構成には、イベント・サービス・アプリケーションのデプロイとイベント・データベースの構成も含まれます。

### このタスクについて

クラスターを作成するには、以下の手順を実行します。

### 手順

1. 通常の WebSphere プロセスに従い、既存の Common Event Infrastructure サーバーを最初のクラスター・メンバーのテンプレートとして使用して、新しいクラスターを作成します。最初のメンバーを作成すると、以下のステップが実行されます。
  - 既存のサーバーの有効範囲にある使用可能な Common Event Infrastructure リソースが、新しいクラスターの有効範囲にコピーされます。

**デフォルト・データベース:** 既存のサーバーがデフォルトの Derby データベースと共に構成されている場合、データベース・リソースは、クラスターの有効範囲にはコピーされません。デフォルトのデータベース構成は、クラスターではサポートされません。この場合、クラスター内のイベント・サービスはデフォルトで使用不可になります。
  - デプロイするイベント・サービス・アプリケーションのターゲット・リストが変更され、新しいクラスターが組み込まれます。
2. オプション: 既存のサーバーがデフォルトの Derby データベースと共に構成されていた場合は、クラスターの新しいイベント・データベースを構成してから、イベント・サービスを使用可能にする必要があります。
  - a. デプロイメント・マネージャー・システムで、データベース構成管理コマンドを実行します。 `clusterName` パラメーターを使用して、クラスター名を指定します。このコマンドにより、データベース構成スクリプトが生成されます。
  - b. 生成されたデータベース構成スクリプトをデータベース・システムにコピーします。
  - c. データベース・システムに対してデータベース構成スクリプトを実行して、イベント・データベースを作成します。
  - d. デプロイメント・マネージャー・システムで `enableEventService` コマンドを実行して、イベント・サービスを使用可能にします。 `clusterName` パラメーターを使用して、クラスターの名前を指定します。

## イベント・メッセージングの構成

JMS でイベントをイベント・サービスに転送する場合に使用するメッセージングの構成を変更できます。

## このタスクについて

管理コンソール・パネルを使用して、サーバー上に **Common Event Infrastructure** を構成するときは、**Common Event Infrastructure** のメッセージング・インフラストラクチャーを作成します。一般に、メッセージング構成は、イベント・サービスへのイベントの非同期伝送にデフォルトのメッセージング・プロバイダーを使用し、単一の **JMS** キューを作成します。必要であれば、このメッセージング構成を変更できます。

### 追加の **JMS** キューの構成

デフォルトのイベント・メッセージング構成を使用している場合は、イベントをイベント・サービスに転送するために **JMS** キューを追加できます。

## このタスクについて

デフォルトのメッセージング構成を使用して追加の **JMS** キューを構成するには、サービス統合バスのキュー宛先に転送される複数の **JMS** キューをセットアップします。**Common Event Infrastructure** サービス統合バスのキュー宛先は、イベント・サービスがデプロイされる有効範囲によって決まります。

| 有効範囲  | サービス統合バスのキュー宛先                                                     |
|-------|--------------------------------------------------------------------|
| サーバー  | <code>node.server.CommonEventInfrastructureQueueDestination</code> |
| クラスター | <code>cluster.CommonEventInfrastructureQueueDestination</code>     |

サービス統合バスの構成の詳細については、資料を参照してください。

### 外部 **JMS** プロバイダーを使用したイベント・メッセージングの構成

デフォルトの組み込みメッセージング構成をイベント伝送で使わない場合は、非同期メッセージ・トランスポートを構成することにより、外部の **Java Messaging Service (JMS)** プロバイダーを使用できます。

### 始める前に

外部 **JMS** プロバイダーを使用してイベント・メッセージングを構成する前に、まず使用している **JMS** プロバイダーに適したインターフェースを使用して **JMS** キューおよび接続ファクトリーを作成する必要があります。リスナー・ポートまたはアクティベーション・スペックを作成する必要もあります。

## このタスクについて

外部 **JMS** プロバイダーを使用してイベント・メッセージングを構成するには、以下の手順を実行します。

### 手順

**wsadmin** ツールから **deployEventServiceMdb** 管理コマンドをバッチ・モードまたは対話モードで実行します。 **deployEventServiceMdb** コマンドのパラメーターは、以下のとおりです。

**applicationName**

デプロイするイベント・サービスのメッセージ駆動型 Bean のアプリケーション名。このパラメーターは必須です。

**nodeName**

イベント・サービスのメッセージ駆動型 Bean をデプロイするノードの名前を指定します。ノード名を指定する場合は、サーバー名も指定する必要があります。ノード名はオプション・パラメーターで、デフォルト値は現在のノードです。クラスターにアプリケーションをデプロイする場合は、このパラメーターを指定しないでください。

**serverName**

イベント・サービスのメッセージ駆動型 Bean をデプロイするサーバーの名前を指定します。このパラメーターは、サーバーの有効範囲にアプリケーションをデプロイする場合、必須です。それ以外の場合は、任意指定です。クラスターにアプリケーションをデプロイする場合は、サーバー名を指定しないでください。

**clusterName**

イベント・サービスのメッセージ駆動型 Bean をデプロイするクラスターの名前を指定します。このパラメーターは、アプリケーションをクラスターにデプロイする場合にのみ指定します。

**listenerPort**

イベントの公開時にイベント・サービスのメッセージ駆動型 Bean が使用するリスナー・ポートの名前を指定します。指定するリスナー・ポートは存在している必要があります。リスナー・ポートとアクティベーション・スペックのいずれかを指定する必要がありますが、両方を指定しないでください。

**activationSpec**

イベントの公開時にイベント・サービスのメッセージ駆動型 Bean が使用するアクティベーション・スペックの JNDI 名を指定します。指定するアクティベーション・スペックは存在している必要があります。リスナー・ポートとアクティベーション・スペックのいずれかを指定する必要がありますが、両方を指定しないでください。

**qcfJndiName**

イベント・サービスのメッセージ駆動型 Bean が使用する JMS キュー接続ファクトリーの JNDI 名。このパラメーターは、アクティベーション・スペックを指定する場合、必須です。それ以外の場合は、任意指定です。キュー接続ファクトリーとリスナー・ポートを指定する場合、キュー接続ファクトリーは、そのリスナー・ポート用に構成されたものと一致する必要があります。

**タスクの結果**

**deployEventServiceMdb** 管理コマンドは、指定したリスナー・ポートまたはアクティベーション・スペック用に構成された、イベント・サービスのメッセージ駆動型 Bean をデプロイします。外部の JMS 構成を使用して、エミッター・ファクトリーと JMS 伝送の作成も行います。アプリケーションは、(デフォルトのメッセージング構成を使用するように構成された) デフォルトのエミッター・ファクトリー、または (外部の JMS プロバイダーを使用する) 新しいエミッター・ファクトリーを使用できます。

## 次のタスク

イベント・サービスに対して複数の JMS キューをセットアップする場合は、異なるエンタープライズ・アプリケーション名と JMS キューを指定して、このコマンドを複数回実行します。スクリプトを実行するたびに、追加のメッセージ駆動型 Bean がデプロイされ、新規リソースで指定された JMS キューを使用するように構成されます。

## JMS 認証別名の構成

WebSphere セキュリティーが使用可能で、非同期 JMS メッセージングを使用してイベントをイベント・サービスに送信する場合は、JMS 認証別名を構成する必要があります。

## このタスクについて

JMS 認証別名を構成するには、以下の手順を実行します。

### 手順

wsadmin ツールから **setEventServiceJmsAuthAlias** 管理コマンドをバッチ・モードまたは対話モードで実行します。 **setEventServiceJmsAuthAlias** コマンドのパラメーターは、以下のとおりです。

#### userName

JMS 認証別名で使用するユーザーの名前。このパラメーターは必須です。

#### password

JMS 認証別名で使用するユーザーのパスワード。このパラメーターは必須です。

#### nodeName

JMS 認証別名を更新または作成するノードの名前。ノード名を指定する場合は、サーバー名も指定する必要があります。クラスターの認証別名を構成する場合は、ノード名を指定しないでください。

#### serverName

JMS 認証別名を更新または作成するサーバーの名前。このパラメーターは、ノードを指定する場合にのみ必要です。クラスターで認証別名を構成する場合は、このパラメーターは無効です。

#### clusterName

JMS 認証別名を更新または作成するクラスターの名前。このパラメーターは、クラスターで認証別名を構成する場合にのみ指定します。クラスター名を指定する場合は、ノード名またはサーバー名を指定しないでください。

## タスクの結果

イベント・サービス・オブジェクトが使用する JMS 認証別名は、指定された有効範囲で更新されます。認証別名が存在しない場合は、指定された値を使用して認証別名が作成されます。



## イベント・データベースの構成

サポートされている各データベース製品に固有のコマンドを使用して、イベント・データ・ソースを構成できます。

### このタスクについて

イベント・データベースでは、イベントの永続性をサポートする必要があります。管理コンソールの Common Event Infrastructure 構成パネルを使用しなかった場合でも、ここで説明するコマンドを使用すればイベント・データベースを作成できます。

### イベント・データベースの制限

特定のデータベース・ソフトウェアを使用してイベント・データベースを構成する場合は、いくつかの制限が適用されます。

ご使用の環境に適用される制限については、以下の表を参照してください。

表 188. イベント・データベースの制限

| データベース・タイプ | 制限                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                         |
|------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Oracle     | <ul style="list-style-type: none"><li>• Oracle 11 JDBC Thin ドライバーでは、Unicode 文字セットを使用する場合にストリング値のサイズ制限があります。大きい値 (長メッセージ属性など) を含むイベントがイベント・データベースに保管されると、Oracle ORA-01461 エラーが発生する可能性があります。この制限についての詳細は、Oracle 11 の資料を参照してください。<br/><br/>この問題を避けるには、Oracle 11 OCI ドライバーまたは Oracle 11 Thin ドライバーを使用してください。</li><li>• Oracle データベース・ソフトウェアは、ブランクのストリングを NULL 値として扱います。ブランクのストリングをイベント属性値として指定すると、そのストリングは、Oracle イベント・データベースに保管されるときに NULL に変換されます。</li></ul> |

表 188. イベント・データベースの制限 (続き)

| データベース・タイプ | 制限                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 |
|------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Informix   | <ul style="list-style-type: none"> <li>• JDBC 3.0 ドライバー (またはそれ以降) が必要です。以前のバージョンの JDBC ドライバーでは、必要な XA トランザクションが完全にはサポートされません。</li> <li>• <b>configEventServiceInformixDB</b> 管理コマンドにより生成されるデータベース構成スクリプトおよびデータベース除去スクリプトでは、SQL スクリプトを実行するために <b>dbaccess</b> コマンドが必要です。このコマンドは、Informix サーバー上でしか使用できない可能性があります。したがって、Informix サーバーが WebSphere サーバーとは別のシステム上にある場合は、データベース構成スクリプトを Informix サーバーにコピーして、ローカルで実行する必要があります。</li> </ul>                  |
| SQL サーバー   | <ul style="list-style-type: none"> <li>• SQL サーバー・データベースは、混在認証モードを使用するように構成する必要があります。トラステッド接続はサポートされません。</li> <li>• XA ストアード・プロシージャをインストールする必要があります。このストアード・プロシージャは、Microsoft Corporation が提供する JDBC ドライバーに同梱されています。</li> <li>• PATH ステートメントで指定したディレクトリに <code>sqljdbc.dll</code> ファイルが含まれ、使用できる必要があります。このファイルは、Microsoft Corporation が提供する JDBC ドライバーに同梱されています。</li> <li>• Distributed Transaction Coordinator (DTC) サービスを開始する必要があります。</li> </ul> |

## Derby イベント・データベースの構成

Linux、UNIX、または Windows システム上のサーバーまたはクラスターの有効範囲にある Derby イベント・データベースを構成できます。

### このタスクについて

イベント・データベースに使用できる Derby データベースには、Derby Embedded と Derby Network の 2 つのタイプがあります。どちらのタイプも WebSphere Application Server に添付されていますが、機能が制限されており、実稼働環境には適していません。したがって、Derby は開発やテストなどの目的でのみ、イベント・データベースとして使用してください。Derby データベースの詳細については、WebSphere Application Server の (このページの下部にリンクがある) 資料を参照してください。

Derby Embedded は、スタンドアロン・サーバーでのみ使用できます。したがって、スタンドアロン・サーバーをクラスター環境または ND 環境に統合する場合は、別のデータベース製品を使用してイベント・データ・ソースを完全に再構成する必要があります。この処理は、サーバーを始動すると自動的に開始されます。

Derby Network はクラスター環境または ND 環境で使用できますが、Derby Embedded と同じように、実際の稼働システムでの使用には適していません。これをサーバーで使用するには、データベースを手動で開始する必要があります。

Derby イベント・データベースを構成するには、以下の手順を実行します。

## 手順

1. wsadmin ツールを開始します。
2. AdminTask オブジェクトを使用して、**configEventServiceDerbyDB** 管理コマンドをバッチ・モードまたは対話モードで実行します。 **configEventServerDerbyDB** コマンドに最低限指定する必要のあるパラメーターを以下に示します。

### createDB

データベース構成スクリプトを管理コマンドで作成して実行するかどうかを指定します。 **true** または **false** を指定します。このパラメーターを **false** に設定すると、スクリプトは作成されますが、実行されません。この場合、データベース構成を完了するにはデータベース構成スクリプトを実行する必要があります。

### nodeName

イベント・サービス・データ・ソースを作成するサーバーを含むノードの名前。ノード名を指定する場合は、サーバー名も指定する必要があります。以下のいずれかを指定してください。

- ノード名およびサーバー名
- クラスター名

### serverName

イベント・サービス・データ・ソースを作成するサーバーの名前。

### clusterName

イベント・サービス・データ・ソースを作成するクラスターの名前。クラスター名を指定する場合は、ノード名とサーバー名を指定しないでください。

環境によっては、その他のパラメーターが必要になる場合もあります。詳細なパラメーターのリストとその使用方法については、**configEventServiceDerbyDB** 管理コマンドのヘルプを参照してください。

## タスクの結果

管理コマンドは、必要なデータ・ソースを指定された有効範囲に作成します。**createDB** パラメーターに **true** を指定した場合、コマンドは、生成されたデータベース構成スクリプトも実行し、データベースを作成します。

デフォルトでは、生成されたデータベース構成スクリプトは、**profile\_root/databases/event/node/server/dbscripts/derby** ディレクトリーに保管されます。(Network Deployment 環境では、これらのスクリプトは、デプロイメント・マネージャーのプロファイル・ディレクトリーの下に保管されます。) 任意指定の

outputScriptDir パラメーターに値を指定した場合は、その場所にスクリプトが保管されます。これらのスクリプトを使用すると、イベント・データベースをいつでも手動で構成できます。

## DB2 イベント・データベースの構成 (Linux、UNIX、および Windows システム)

Linux、UNIX、または Windows システムで、DB2 Universal Database を使用して、外部イベント・データベースを構成できます。

### このタスクについて

Linux、UNIX、または Windows システムで DB2 イベント・データベースを構成するには、以下の手順を実行します。

### 手順

1. wsadmin ツールを開始します。
2. AdminTask オブジェクトを使用して、**configEventServiceDB2DB** 管理コマンドをバッチ・モードまたは対話モードで実行します。 **configEventServiceDB2DB** コマンドに最低限指定する必要のあるパラメーターを以下に示します。

#### createDB

データベース構成スクリプトを管理コマンドで作成して実行するかどうかを指定します。 true または false を指定します。このパラメーターを false に設定すると、スクリプトは作成されますが、実行されません。この場合、データベース構成を完了するにはデータベース構成スクリプトを実行する必要があります。

#### nodeName

イベント・サービス・データ・ソースを作成するサーバーを含むノードの名前。ノード名を指定する場合は、サーバー名も指定する必要があります。以下のいずれかを指定してください。

- ノード名およびサーバー名
- クラスター名

#### serverName

イベント・サービス・データ・ソースを作成するサーバーの名前。

#### clusterName

イベント・サービス・データ・ソースを作成するクラスターの名前。クラスター名を指定する場合は、ノード名とサーバー名を指定しないでください。

#### jdbcClassPath

JDBC ドライバーへのパス。ドライバー・ファイルのパスのみを指定します。ファイル名は指定しないでください。

#### dbHostName

データベースがインストールされているサーバーのホスト名。

#### dbUser

イベント・データベースの作成時に使用する DB2 ユーザー ID。指定するユーザー ID には、データベースを作成および除去するための十分な特権が必要です。

## dbPassword

使用する DB2 パスワード。

環境によっては、その他のパラメーターが必要になる場合もあります。詳細なパラメーターのリストとその使用法については、**configEventServiceDB2DB** 管理コマンドのヘルプを参照してください。

## タスクの結果

管理コマンドは、必要なデータ・ソースを指定された有効範囲に作成します。**createDB** パラメーターに **true** を指定した場合、コマンドは、生成されたデータベース構成スクリプトも実行し、データベースを作成します。

デフォルトでは、生成されたデータベース構成スクリプトは、*profile\_root/databases/event/node/server/dbscripts/db2* ディレクトリーに保管されます。(Network Deployment 環境では、これらのスクリプトは、デプロイメント・マネージャーのプロファイル・ディレクトリーの下に保管されます。) 任意指定の **outputScriptDir** パラメーターに値を指定した場合は、その場所にスクリプトが保管されます。これらのスクリプトを使用すると、イベント・データベースをいつでも手動で構成できます。

## z/OS システムでの DB2 データベースの構成

DB2 データベース・ソフトウェアを使用して、z/OS システムでイベント・データベースを構成することができます。

## 始める前に

リモート・クライアントから DB2 データベースを構成するには、最新のフィックスバックを含む DB2 Connect 製品がインストールされている必要があります。

## このタスクについて

イベント・データベースを構成するには、以下の手順を実行します。

## 手順

1. **Linux** **UNIX** **Windows** z/OS イベント・データベースを Linux、UNIX、または Windows クライアント・システムから構成する場合は、以下のステップを実行して、データベースを作成およびカタログします。
  - a. z/OS システム上で、DB2 管理メニューを使用してサブシステムを作成します。
  - b. オプション: イベント・データベースに使用するストレージ・グループを作成します。既存のストレージ・グループ (**sysdeflt** など) を使用することもできます。
  - c. イベント・データベースで使用する 4 K、8 K、および 16 K のバッファークラスタ・プールを使用可能にします。
  - d. データ・ソースが使用するユーザー ID に対して必要な権限を付与します。このユーザー ID には、作成したデータベースおよびストレージ・グループへのアクセス権限がなければなりません。また、データベース用新規テーブル、テーブル・スペース、および索引を作成する権限も必要です。

- e. リモート・データベースをカタログします。 スクリプトまたは DB2 コマンド行ウィンドウで、以下のコマンドを実行します。

```
catalog tcpip node zosnode remote hostname server IP_port
 system db_subsystem
catalog database db_name as db_name at node zosnode authentication DCS
```

ノードとそのデータベースをカタログする方法については、DB2 Connect の資料を参照してください。

- f. リモート・サブシステムへの接続を確立できることを確認してください。 この確認を行うには、以下のコマンドを実行します。

```
db2 connect to subsystem user userid using password
```

- g. ホスト・データベースにバインドします。 以下のコマンドを実行します。

```
db2 connect to db_name user userid using password
db2 bind db2_root/bnd/@ddcsmvs.1st blocking all sqlerror continue message
 mvs.msg_grant public
db2 connect reset
```

クライアントをホスト・データベースにバインドする方法について詳しくは、DB2 Connect の資料を参照してください。

2. WebSphere システムで、wsadmin ツールを開始します。
3. AdminTask オブジェクトを使用して、**configEventServiceDB2ZOSDB** 管理コマンドをバッチ・モードまたは対話モードで実行します。
- configEventServiceDB2ZOSDB** コマンドに最低限指定する必要があるパラメーターを以下に示します。

### createDB

**Linux** **UNIX** **Windows** データベース構成スクリプトを管理コマンドで作成して実行するかどうかを指定します。このパラメーターは、管理コマンドを Linux、UNIX、または Windows クライアント・システムから実行する場合にのみ適用されます。 true または false を指定します。

このパラメーターを false に設定するか、z/OS システム上でコマンドを実行すると、スクリプトは作成されますが、実行されません。この場合、データベース構成を完了するにはデータベース構成スクリプトを実行する必要があります。

### nodeName

イベント・サービス・データ・ソースを作成するサーバーを含むノードの名前。ノード名を指定する場合は、サーバー名も指定する必要があります。以下のいずれかを指定してください。

- ノード名およびサーバー名
- クラスタ名

### serverName

イベント・サービス・データ・ソースを作成するサーバーの名前。

### clusterName

イベント・サービス・データ・ソースを作成するクラスタの名前。クラスタ名を指定する場合は、ノード名とサーバー名を指定しないでください。

**jdbcClassPath**

JDBC ドライバーへのパス。ドライバー・ファイルのパスのみを指定します。ファイル名は指定しないでください。

**dbHostName**

データベースがインストールされているサーバーのホスト名。

**dbUser**

イベント・データベースの作成時に使用する DB2 ユーザー ID。指定するユーザー ID には、データベースを作成および除去するための十分な特権が必要です。

**dbPassword**

使用する DB2 パスワード。

環境によっては、その他のパラメーターが必要になる場合もあります。詳細なパラメーターのリストとその使用法については、**configEventServiceDB2ZOSDB** 管理コマンドのヘルプを参照してください。

**タスクの結果**

管理コマンドは、必要なデータ・ソースを指定された有効範囲に作成します。また、コマンドを Linux、UNIX、または Windows DB2 クライアント上で実行している場合、createDB パラメーターに true を指定すると、コマンドは、生成されたデータベース構成スクリプトも実行し、データベースを作成します。z/OS システムの場合は、SQL Processor Using File Input (SPUFI) 機能を使用して、生成された DDL ファイルを実行する必要があります。DDL ファイルは、*profile\_root/databases/event/node/server/db2zos/ddl* ディレクトリーに保管されます。

デフォルトでは、生成されたデータベース構成スクリプトは、*profile\_root/databases/event/node/server/dbscripts/db2zos* ディレクトリーに保管されます。(Network Deployment 環境では、これらのスクリプトは、デプロイメント・マネージャーのプロファイル・ディレクトリーの下に保管されます。) 任意指定の outputScriptDir パラメーターに値を指定した場合は、その場所にスクリプトが保管されます。これらのスクリプトを使用すると、イベント・データベースをいつでも手動で構成できます。

**次のタスク**

データベースの構成が終了した後、サーバー管理コンソールを使用してデータベース構成をテストできます。このタスクを実行する場合、該当する JDBC データ・ソースにナビゲートして「テスト接続」オプションを選択します。

**iSeries システムでの DB2 データベースの構成**

DB2 データベース・ソフトウェアを使用して、iSeries システムでイベント・データベースを構成することができます。

**このタスクについて**

ローカル iSeries サーバーを使用してリモート iSeries サーバーを構成する場合は、ローカル・サーバー上のリモート・データベース項目をターゲット・データベース

に対して別名として指定する必要があります。イベント・データベースを構成するには、以下の手順を実行します。

## 手順

1. wsadmin ツールを開始します。
2. AdminTask オブジェクトを使用して、**configEventServiceDB2iSeriesDB** 管理コマンドをバッチ・モードまたは対話モードで実行します。

**configEventServiceDB2iSeriesDB** コマンドに対して最低限指定する必要のあるパラメーターを以下に示します。

### createDB

データベース構成スクリプトを管理コマンドで作成して実行するかどうかを指定します。true または false を指定します。このパラメーターを false に設定すると、スクリプトは作成されますが、実行されません。この場合、データベース構成を完了するにはデータベース構成スクリプトを実行する必要があります。

**制限:** 管理コマンドでデータベース構成スクリプトを自動的に実行できるのは、iSeries システム上に限られます。クライアント・システム上でコマンドを実行した場合は、エラーが返されます。

### nodeName

イベント・サービス・データ・ソースを作成するサーバーを含むノードの名前。ノード名を指定する場合は、サーバー名も指定する必要があります。以下のいずれかを指定してください。

- ノード名およびサーバー名
- クラスター名

### serverName

イベント・サービス・データ・ソースを作成するサーバーの名前。

### clusterName

イベント・サービス・データ・ソースを作成するクラスターの名前。クラスター名を指定する場合は、ノード名とサーバー名を指定しないでください。

### toolboxJdbcClassPath

IBM Toolbox for Java の DB2 JDBC ドライバーのパス。このパラメーターは、ネイティブ JDBC ドライバーではなく、Toolbox for Java のドライバーを使用する場合にのみ指定します。ドライバー・ファイルのパスのみを指定します。ファイル名は含めないでください。

### nativeJdbcClassPath

DB2 for iSeries のネイティブ JDBC ドライバーのパス。このパラメーターは、Toolbox for Java のドライバーではなく、ネイティブ JDBC ドライバーを使用する場合にのみ指定します。ドライバー・ファイルのパスのみを指定します。ファイル名は含めないでください。

### dbHostName

データベースがインストールされているサーバーのホスト名。このパラメーターは、Toolbox for Java の JDBC ドライバーを使用する場合、必須です。



### dbUser

イベント・データベースの作成時に使用する DB2 ユーザー ID。指定するユーザー ID には、データベースを作成および除去するための十分な特権が必要です。

### dbPassword

使用する DB2 パスワード。

環境によっては、その他のパラメーターが必要になる場合もあります。詳細なパラメーターのリストとその使用方法については、**configEventServiceDB2iSeriesDB** 管理コマンドのヘルプを参照してください。

## タスクの結果

管理コマンドは、必要なデータベースとデータ・ソースを指定された有効範囲に作成するスクリプトを生成します。デフォルトでは、これらのスクリプトは、*profile\_root/databases/event/node/server/dbscripts/db2iseries* ディレクトリーに保管されます。任意指定の *outputScriptDir* パラメーターに値を指定した場合は、その場所にスクリプトが保管されます。これらのスクリプトを使用すると、イベント・データベースをいつでも手動で構成できます。

## 次のタスク

データベース構成管理コマンドをクライアント・システム上で実行した場合は、生成されたスクリプトを iSeries システムに転送してから実行して、必要なリソースを作成する必要があります。

データベースの構成が終了した後、サーバー管理コンソールを使用してデータベース構成をテストできます。構成をテストする場合、該当する JDBC データ・ソースにナビゲートして「テスト接続」オプションを選択します。

## Informix イベント・データベースの構成

Linux、UNIX、または Windows システムで、IBM Informix Dynamic Server を使用して、外部イベント・データベースを構成できます。

## このタスクについて

Informix イベント・データベースを構成するには、以下の手順を実行します。

### 手順

1. wsadmin ツールを開始します。
2. AdminTask オブジェクトを使用して、**configEventServiceInformixDB** 管理コマンドをバッチ・モードまたは対話モードで実行します。

**configEventServiceInformixDB** コマンドに最低限指定する必要があるパラメーターを以下に示します。

### createDB

データベース構成スクリプトを管理コマンドで作成して実行する必要があるかどうかを示します。true または false を指定します。このパラメーター

を `false` に設定すると、スクリプトは作成されますが、実行されません。この場合、データベース構成を完了するにはデータベース構成スクリプトを実行する必要があります。

**特権:** このパラメーターに `true` を指定する場合は、Informix データベース、DB スペース、テーブル、ビュー、索引、およびストアド・プロシージャを作成するための十分な特権がご自分のユーザー ID にあることを確認してください。

#### **nodeName**

イベント・サービス・データ・ソースを作成する必要があるサーバーを含むノードの名前。ノード名を指定する場合は、サーバー名も指定する必要があります。以下のいずれかを指定してください。

- ノード名およびサーバー名
- クラスター名

#### **serverName**

イベント・サービス・データ・ソースを作成する必要があるサーバーの名前。

#### **clusterName**

イベント・サービス・データ・ソースを作成する必要があるクラスターの名前。クラスター名を指定する場合は、ノード名とサーバー名を指定しないでください。

#### **jdbcClassPath**

JDBC ドライバーへのパス。ドライバー・ファイルのパスのみを指定します。ファイル名は指定しないでください。

#### **dbInformixDir**

Informix データベース・ソフトウェアがインストールされているディレクトリー。このパラメーターは、`createDB` パラメーターに `true` を指定した場合にのみ必要です。

#### **dbHostName**

データベース・サーバーがインストールされているシステムのホスト名。

#### **dbServerName**

Informix サーバー名 (`o1_servername` など)。

#### **dbUser**

イベント・データベース表を所有する Informix データベース・スキーマ・ユーザー ID。これは、データベースと DB スペースを作成するための十分な特権を持つユーザー ID である必要があります。WebSphere データ・ソースは、このユーザー ID を使用して Informix データベース接続を認証します。

#### **dbPassword**

指定したスキーマ・ユーザー ID のパスワード。

環境によっては、その他のパラメーターが必要になる場合もあります。詳細なパラメーターのリストとその用法については、**`configEventServiceInformixDB`** 管理コマンドのヘルプを参照してください。

## タスクの結果

管理コマンドは、必要なデータ・ソースを指定された有効範囲に作成します。`createDB` パラメーターに `true` を指定した場合、コマンドは、生成されたデータベース構成スクリプトも実行し、データベースを作成します。

デフォルトでは、生成されたデータベース構成スクリプトは、`profile_root/databases/event/node/server/dbscripts/informix` ディレクトリーに保管されます。(Network Deployment 環境では、これらのスクリプトは、デプロイメント・マネージャーのプロファイル・ディレクトリーの下に保管されます。) 任意指定の `outputScriptDir` パラメーターに値を指定した場合は、その場所にスクリプトが保管されます。これらのスクリプトを使用すると、イベント・データベースをいつでも手動で構成できます。

**スクリプトの実行: `configEventServiceInformixDB`** 管理コマンドにより生成されるデータベース構成スクリプトおよびデータベース除去スクリプトでは、SQL スクリプトを実行するために `dbaccess` コマンドが必要です。このコマンドは、Informix サーバー上でしか使用できない可能性があります。したがって、Informix サーバーがサーバーとは別のシステム上にある場合は、データベース構成スクリプトを Informix サーバーにコピーして、ローカルで実行する必要がある可能性があります。

## Oracle イベント・データベースの構成

Linux、UNIX、または Windows システム上で、Oracle データベースを使用して、外部のイベント・データベースを構成できます。

### 始める前に

Oracle イベント・データベースを構成する前に、まずデータベースを作成しておく必要があります。イベント・データベースの構成コマンドを実行する前に、Oracle SID が既に存在している必要があります。イベント・データベースのデフォルトの SID は、`event` です。

### このタスクについて

Oracle イベント・データベースを構成するには、以下の手順を実行します。

#### 手順

1. `wsadmin` ツールを開始します。
2. `AdminTask` オブジェクトを使用して、**`configEventServiceOracleDB`** 管理コマンドをバッチ・モードまたは対話モードで実行します。**`configEventServiceOracleDB`** コマンドに最低限指定する必要があるパラメーターを以下に示します。

#### **createDB**

データベース構成スクリプトを管理コマンドで作成して実行する必要があるかどうかを示します。 `true` または `false` を指定します。このパラメーターを `false` に設定すると、スクリプトは作成されますが、実行されません。この場合、データベース構成を完了するにはデータベース構成スクリプトを実行する必要があります。

#### **nodeName**

イベント・サービス・データ・ソースを作成する必要があるサーバーを含む

ノードの名前。ノード名を指定する場合は、サーバー名も指定する必要があります。以下のいずれかを指定してください。

- ノード名およびサーバー名
- クラスター名

**serverName**

イベント・サービス・データ・ソースを作成する必要があるサーバーの名前。

**clusterName**

イベント・サービス・データ・ソースを作成する必要があるクラスターの名前。クラスター名を指定する場合は、ノード名とサーバー名を指定しないでください。

**jdbcClassPath**

JDBC ドライバーへのパス。ドライバー・ファイルのパスのみを指定します。ファイル名は指定しないでください。

**oracleHome**

ORACLE\_HOME ディレクトリー。このパラメーターは、createDB パラメーターに true を指定した場合にのみ必要です。

**dbPassword**

データベース構成時に作成されるスキーマ・ユーザー ID に対して使用するパスワード (デフォルトのユーザー ID は ceiuser です)。このパスワードは、Oracle データベース接続を認証するために使用されます。

**sysUser**

Oracle SYSUSER ユーザー ID。このユーザー ID には、SYSDBA 特権が必要です。

**sysPassword**

指定した SYSUSER ユーザー ID のパスワード。

環境によっては、その他のパラメーターが必要になる場合もあります。詳細なパラメーターのリストとその用法については、**configEventServiceOracleDB** 管理コマンドのヘルプを参照してください。

## タスクの結果

管理コマンドは、必要なデータ・ソースを指定された有効範囲に作成します。createDB パラメーターに true を指定した場合、コマンドは、生成されたデータベース構成スクリプトも実行し、データベースを作成します。

デフォルトでは、生成されたデータベース構成スクリプトは、*profile\_root/databases/event/node/server/dbscripts/oracle* ディレクトリーに保管されます。(Network Deployment 環境では、これらのスクリプトは、デプロイメント・マネージャーのプロファイル・ディレクトリーの下に保管されます。) 任意指定の outputScriptDir パラメーターに値を指定した場合は、その場所にスクリプトが保管されます。これらのスクリプトを使用すると、イベント・データベースをいつでも手動で構成できます。

## SQL サーバー・イベント・データベースの構成

Windows システムで、Microsoft SQL Server Enterprise を使用して、外部イベント・データベースを構成できます。

### このタスクについて

SQL サーバー・イベント・データベースを構成するには、以下の手順を実行します。

### 手順

1. SQL サーバー・データベース・サーバー・システムで、データベース・ファイルを格納するために使用するディレクトリーを作成します。デフォルトでは、ファイルは `c:\program files\ibm\event\%ceiinstl%\sqlserver_data` ディレクトリーに書き込まれます。別の場所を指定する必要がある場合は、生成されたデータベース構成スクリプトを編集して `ceiInstancePrefix` パラメーターの値を変更し、次にスクリプトを手動で実行する必要があります。
2. サーバー・システムで、`wsadmin` ツールを開始します。
3. `AdminTask` オブジェクトを使用して、`configEventServiceSQLServerDB` 管理コマンドをバッチ・モードまたは対話モードで実行します。

`configEventServiceSQLServerDB` コマンドに最低限指定する必要があるパラメーターを以下に示します。

#### `createDB`

データベース構成スクリプトを管理コマンドで作成して実行する必要があるかどうかを示します。 `true` または `false` を指定します。このパラメーターを `false` に設定すると、スクリプトは作成されますが、実行されません。この場合、データベース構成を完了するにはデータベース構成スクリプトを実行する必要があります。

#### `nodeName`

イベント・サービス・データ・ソースを作成する必要があるサーバーを含むノードの名前。ノード名を指定する場合は、サーバー名も指定する必要があります。以下のいずれかを指定してください。

- ノード名およびサーバー名
- クラスター名

#### `serverName`

イベント・サービス・データ・ソースを作成する必要があるサーバーの名前。サーバー名を指定する場合は、ノード名も指定する必要があります。

#### `clusterName`

イベント・サービス・データ・ソースを作成する必要があるクラスターの名前。クラスター名を指定する場合は、ノード名とサーバー名を指定しないでください。

#### `dbServerName`

SQL サーバー・データベースのサーバー名。このパラメーターは、`createDB` パラメーターに `true` を指定した場合にのみ必要です。

#### `dbHostName`

SQL サーバー・データベースが稼働しているサーバーのホスト名。

### dbPassword

イベント・データベース表を所有するために作成されたユーザー ID に対して使用するパスワード (デフォルトのユーザー ID は `ceiuser` です)。WebSphere データ・ソースは、このパスワードを使用して SQL サーバー・データベース接続を認証します。

### saUser

データベースとユーザーを作成および除去する特権を持つユーザー ID。このパラメーターは、`createDB` パラメーターに `true` を指定した場合にのみ必要です。

### saPassword

指定した SA ユーザーのパスワード。

環境によっては、その他のパラメーターが必要になる場合もあります。詳細なパラメーターのリストとその使用方法については、`configEventServiceSQLServerDB` 管理コマンドのヘルプを参照してください。

## タスクの結果

管理コマンドは、必要なデータ・ソースを指定された有効範囲に作成します。`createDB` パラメーターに `true` を指定した場合、コマンドは、生成されたデータベース構成スクリプトも実行し、データベースを作成します。

デフォルトでは、生成されたデータベース構成スクリプトは、`profile_root/databases/event/nodeserver/dbscripts/dbscripts/sqlserver` ディレクトリーに保管されます。(Network Deployment 環境では、これらのスクリプトは、デプロイメント・マネージャーのプロファイル・ディレクトリーの下に保管されます。) 任意指定の `outputScriptDir` パラメーターに値を指定した場合は、その場所にスクリプトが保管されます。これらのスクリプトを使用すると、イベント・データベースをいつでも手動で構成できます。

## データベース構成スクリプトの手動実行

データベース構成管理コマンドで生成されたスクリプトは、いつでも手動で実行できます。

## このタスクについて

データベース構成には 2 つのステップがあります。まず、データベース構成管理コマンドが、環境に対応したデータベース固有のスクリプトを生成します。次に、この生成されたスクリプトが、イベント・データベースとデータ・ソースを構成します。管理コマンドの実行時に `createDB` パラメーターに `true` を指定した場合は、両方のステップが自動的に実行されます。

ただし、`createDB` パラメーターに `false` を指定した場合は、生成されたスクリプトをターゲット・システム上で手動で実行して、データベース構成を完了する必要があります。以下の状況の場合は、スクリプトを手動で実行する必要がある可能性があります。

- 管理コマンドを実行したシステムとは異なるシステムでイベント・データベースを構成する必要がある。
- イベント・データベースを後で再作成する必要がある。

- 生成されたスクリプトを実行する前に、そのスクリプトが使用するデフォルト・オプションを変更する必要がある。

### Derby イベント・データベースの手動による作成:

Derby イベント・データベース用のデータベース構成スクリプトを手動で生成するには、`cr_event_derby` コマンドを使用します。

#### このタスクについて

Derby イベント・データベース用に生成されたデータベース構成スクリプトを手動で実行するには、以下の手順を実行します。

#### 手順

1. サーバー・システムで、生成されたスクリプトを含むディレクトリーに移動します。デフォルトの場所は、`install_root/profiles/profile_name/dbscripts/CEI_ceiDbName` ディレクトリーです。データベース構成管理コマンドの `outputScriptDir` パラメーターに値を指定した場合は、その場所にスクリプトが保管されています。
2. 必要に応じ、ASCII テキスト・エディターを使用して構成スクリプトを変更します。スクリプトの名前は、ご使用のオペレーティング・システムに応じて異なります。

- **Windows** `cr_event_derby.bat`

- **Linux** **UNIX** `cr_event_derby.sh`

- **i5/OS プラットフォームの場合:** `cr_event_derby`

3. オプション: iSeries システム上でデータベースを構成する場合は、Qshell インタープリターを始動します。

4. 以下の構文を使用して、データベース作成スクリプトを実行します (該当する場合は、ファイル拡張子を指定することを忘れないでください)。

```
cr_event_derby -p profile_path [-s server_name|-c cluster_name]
```

パラメーターは、以下のとおりです。

#### **-p** *profile\_path*

WebSphere プロファイル・ディレクトリーへのパス。このパラメーターは必須です。

#### **-s** *server\_name*

サーバーの名前。このパラメーターは、サーバーの有効範囲でデータベースを構成する場合、必須です。

#### **-c** *cluster\_name*

クラスターの名前。このパラメーターは、クラスターの有効範囲でデータベースを構成する場合、必須です。

例えば、以下のコマンドは、`profile1` プロファイルを使用して、`server1` サーバーの有効範囲に `Derby` データベースを作成します。

```
cr_event_derby -p c:%WebSphere%appserver%profiles%myprofile -s server1
```

5. サーバーを再始動します。統合ノードの場合は、**stopNode** および **startNode** コマンドを使用して、ノード・エージェントを停止してから再始動する必要があります。

### 次のタスク

データベースの構成が完了したら、管理コンソールを使用してデータベース構成をテストできます。これを行うには、該当する JDBC データ・ソースにナビゲートし、「テスト接続」オプションを選択します。

### Linux、UNIX、または Windows システム上での手動による DB2 イベント・データベースの作成:

Linux、UNIX、または Windows サーバー上で DB2 イベント・データベース用のデータベース構成スクリプトを手動で生成するには、`cr_event_db2` を使用します。

### このタスクについて

Linux、UNIX、または Windows システムの DB2 イベント・データベース用に生成されたデータベース構成スクリプトを手動で実行するには、以下の手順を実行します。

### 手順

1. サーバー・システムで、生成されたスクリプトを含むディレクトリーに移動します。デフォルトの場所は、`install_root/profiles/profile_name/dbscripts/CEI_ceiDbName` ディレクトリーです。データベース構成管理コマンドの `outputScriptDir` パラメーターに値を指定した場合は、その場所にスクリプトが保管されています。
2. 必要に応じ、ASCII テキスト・エディターを使用して構成スクリプトを変更します。スクリプトの名前は、ご使用のオペレーティング・システムに応じて異なります。

- **Windows** Windows システムの場合: `cr_event_db2.bat`

- **Linux** **UNIX** Linux および UNIX システムの場合: `cr_event_db2.sh`

3. 以下の構文を使用して、データベース作成スクリプトを実行します (該当する場合は、ファイル拡張子を指定することを忘れないでください)。

```
cr_event_db2 [client|server] db_user [db_password]
```

パラメーターは、以下のとおりです。

#### **client|server**

データベースがクライアントとサーバーのいずれであることを示します。

**client** または **server** を指定する必要があります。

#### *db\_user*

データベース・ユーザー ID。このパラメーターは必須です。

#### *db\_password*

データベース・ユーザーのパスワード。クライアント・データベースのパスワードを指定しない場合は、パスワードの入力プロンプトが表示されます。



例えば、以下のコマンドは、ユーザー ID db2admin とパスワード mypassword を使用して、クライアント・データベース用の DB2 イベント・データベースを作成します。

```
cr_event_db2 client db2admin mypassword
```

4. サーバーを再始動します。統合ノードの場合は、**stopNode** および **startNode** コマンドを使用して、ノード・エージェントを停止してから再始動する必要があります。

## 次のタスク

データベースの構成が完了したら、管理コンソールを使用してデータベース構成をテストできます。これを行うには、該当する JDBC データ・ソースにナビゲートし、「テスト接続」オプションを選択します。

## z/OS システム上での手動による DB2 イベント・データベースの作成:

Linux、UNIX、または Windows クライアント・システムを使用して、z/OS システム上で DB2 イベント・データベース用のデータベース構成スクリプトを手動で生成するには、`cr_event_db2zos` を使用します。

## このタスクについて

Linux、UNIX、または Windows クライアント・システムを使用して、z/OS システムの DB2 イベント・データベース用に生成されたデータベース構成スクリプトを手動で実行するには、以下の手順を実行します。

## 手順

1. サーバー・システムで、生成されたスクリプトを含むディレクトリーに移動します。デフォルトの場所は `install_root/profiles/profile_name/dbscripts/CEI_ceiDbName` です。データベース構成管理コマンドの `outputScriptDir` パラメーターに値を指定した場合は、その場所にスクリプトが保管されています。
2. 必要に応じ、ASCII テキスト・エディターを使用して構成スクリプトを変更します。スクリプトの名前は、ご使用のオペレーティング・システムに応じて異なります。

- Windows システムの場合: `cr_event_db2zos.bat`
- Linux および UNIX システムの場合: `cr_event_db2zos.sh`

3. 以下の構文を使用して、データベース作成スクリプトを実行します (該当する場合は、ファイル拡張子を指定することを忘れないでください)。

```
cr_event_db2zos [dbName=db_name] db_user [db_password]
```

パラメーターは、以下のとおりです。

### *db\_name*

使用するデータベース名。このパラメーターは任意指定です。データベース名を指定しない場合は、名前が生成されます。

### *db\_user*

使用するためのデータベース・ユーザー ID。このパラメーターは必須です。

*db\_password*

データベース・ユーザーのパスワード。パスワードを指定しない場合、DB2 データベースは、パスワードの入力プロンプトを表示します。

例えば、以下のコマンドは、ユーザー ID `db2admin` とパスワード `mypassword` を使用して、`event` という名前の DB2 イベント・データベースを作成します。

```
cr_event_db2zos dbName=client db2admin mypassword
```

4. サーバーを再始動します。統合ノードの場合は、**stopNode** および **startNode** コマンドを使用して、ノード・エージェントを停止してから再始動する必要があります。

## 次のタスク

データベースの構成が完了したら、管理コンソールを使用してデータベース構成をテストできます。これを行うには、該当する JDBC データ・ソースにナビゲートし、「**テスト接続**」オプションを選択します。

## iSeries システム上での手動による DB2 イベント・データベースの作成:

iSeries システム上で DB2 イベント・データベース用のデータベース構成スクリプトを手動で生成するには、`cr_event_db2iseries` コマンドを使用します。

## このタスクについて

iSeries システム上の DB2 イベント・データベース用に生成されたデータベース構成スクリプトを手動で実行するには、以下の手順を実行します。

## 手順

1. サーバー・システムで、生成されたスクリプトを含むディレクトリーに移動します。デフォルトの場所は `install_root/profiles/profile_name/dbscripts/CEI_ceiDbName` です。データベース構成管理コマンドの `outputScriptDir` パラメーターに値を指定した場合は、その場所にスクリプトが保管されています。
2. 必要に応じ、ASCII テキスト・エディターを使用して `cr_event_db2iseries` スクリプトを変更します。
3. Qshell インタープリターを開始します。
4. 以下の構文を使用して、データベース作成スクリプトを実行します。

```
cr_event_db2iseries db_user db_password
```

パラメーターは、以下のとおりです。

*db\_user*

データベース・ユーザー ID。このパラメーターは必須です。

*db\_password*

データベース・ユーザーのパスワード。このパラメーターは必須です。

例えば、以下のコマンドは、ユーザー ID `db2admin` とパスワード `mypassword` を使用して、DB2 イベント・データベースを作成します。

```
cr_event_db2iseries db2admin mypassword
```

5. サーバーを再始動します。統合ノードの場合は、**stopNode** および **startNode** コマンドを使用して、ノード・エージェントを停止してから再始動する必要があります。

### 次のタスク

データベースの構成が完了したら、管理コンソールを使用してデータベース構成をテストできます。これを行うには、該当する JDBC データ・ソースにナビゲートし、「テスト接続」オプションを選択します。

#### Informix イベント・データベースの手動による作成:

データベース構成管理コマンドで生成されたスクリプトは、いつでも手動で実行できます。

#### このタスクについて

Informix イベント・データベース用に生成されたデータベース構成スクリプトを手動で実行するには、以下の手順を実行します。

#### 手順

1. サーバー・システムで、生成されたスクリプトを含むディレクトリに移動します。デフォルトの場所は `install_root/profiles/profile_name/dbscripts/CEI_ceiDbName` です。データベース構成管理コマンドの `outputScriptDir` パラメーターに値を指定した場合は、その場所にスクリプトが保管されています。
2. 必要に応じ、ASCII テキスト・エディターを使用して構成スクリプトを変更します。スクリプトの名前は、ご使用のオペレーティング・システムに応じて異なります。
  - **Windows** Windows システムの場合: `cr_event_informix.bat`
  - **Linux** **UNIX** Linux および UNIX システムの場合:  
`cr_event_informix.sh`
3. パラメーターを指定せずに、データベース作成スクリプトを実行します。
4. サーバーを再始動します。統合ノードの場合は、**stopNode** および **startNode** コマンドを使用して、ノード・エージェントを停止してから再始動する必要があります。

### 次のタスク

データベースの構成が完了したら、管理コンソールを使用してデータベース構成をテストできます。これを行うには、該当する JDBC データ・ソースにナビゲートし、「テスト接続」オプションを選択します。

#### Oracle イベント・データベースの手動による作成:

Oracle イベント・データベース用のデータベース構成スクリプトを手動で生成するには、`cr_event_oracle` コマンドを使用します。

## このタスクについて

Oracle イベント・データベース用に生成されたデータベース構成スクリプトを手動で実行するには、以下の手順を実行します。

### 手順

1. サーバー・システムで、生成されたスクリプトを含むディレクトリーに移動します。デフォルトの場所は `install_root/profiles/profile_name/dbscripts/CEI_ceiDbName` です。データベース構成管理コマンドの `outputScriptDir` パラメーターに値を指定した場合は、その場所にスクリプトが保管されています。
2. 必要に応じ、ASCII テキスト・エディターを使用して構成スクリプトを変更します。スクリプトの名前は、ご使用のオペレーティング・システムに応じて異なります。

- **Windows** Windows システムの場合: `cr_event_oracle.bat`

- **Linux** **UNIX** Linux および UNIX システムの場合: `cr_event_oracle.sh`

3. 以下の構文を使用して、データベース作成スクリプトを実行します (該当する場合は、ファイル拡張子を指定することを忘れないでください)。

```
cr_event_oracle password sys_user
 sys_password [sid=sid]
 [oracleHome=oracle_home]
```

パラメーターは、以下のとおりです。

#### *password*

スキーマ・ユーザー ID のパスワード。このパラメーターは必須です。

#### *sys\_user*

Oracle データベースの SYSDBA 特権を持つユーザー ID (通常は、システム・ユーザー)。このパラメーターは必須です。

#### *sys\_password*

指定したシステム・ユーザー ID のパスワード。このユーザー ID でパスワードを使用しない場合は、`none` を入力します。

#### *sid=sid*

Oracle システム ID (SID)。このパラメーターはオプションです。

#### *oracleHome=oracle\_home*

Oracle ホーム・ディレクトリー。このパラメーターは任意指定です。値を指定しない場合は、生成されたパスが使用されます。

例えば、以下のコマンドは、スキーマ・ユーザー ID `auser` とシステム・ユーザー ID `sys` を使用して、Oracle イベント・データベースを作成します。

```
cr_event_oracle auser sys syspassword sid=event oracleHome=c:\%oracle
```

4. サーバーを再始動します。統合ノードの場合は、**stopNode** および **startNode** コマンドを使用して、ノード・エージェントを停止してから再始動する必要があります。

## 次のタスク

データベースの構成が完了したら、管理コンソールを使用してデータベース構成をテストできます。これを行うには、該当する JDBC データ・ソースにナビゲートし、「テスト接続」オプションを選択します。

### SQL サーバー・イベント・データベースの手動による作成:

SQL サーバー・イベント・データベース用のデータベース構成スクリプトを手動で生成するには、`cr_event_mssql` コマンドを使用します。

### このタスクについて

SQL サーバー・イベント・データベース用に生成されたデータベース構成スクリプトを手動で実行するには、以下の手順を実行します。

### 手順

1. サーバー・システムで、生成されたスクリプトを含むディレクトリーに移動します。デフォルトの場所は `install_root/profiles/profile_name/dbscripts/CEI_ceiDbName` です。データベース構成管理コマンドの `outputScriptDir` パラメーターに値を指定した場合は、その場所にスクリプトが保管されています。
2. 必要に応じ、ASCII テキスト・エディターを使用して `cr_event_mssql.bat` スクリプトを変更します。
3. 以下の構文を使用して、データベース作成スクリプトを実行します。

```
cr_event_mssql user_id password [server=server] sauser=sa_user
sapassword=sa_password
```

パラメーターは、以下のとおりです。

#### *user\_id*

作成されたテーブルを所有する SQL サーバー・ログイン・ユーザー ID。このユーザー ID は、データベースへの JDBC 接続ができるようにするために SQL サーバー内で作成する必要があります。(JDBC ドライバーは、トラステッド接続をサポートしません。)

#### *password*

作成する新しいログイン・ユーザー ID のパスワード。

#### *server=server*

SQL サーバー・データベースを含むサーバーの名前。このパラメーターは任意指定です。デフォルト値は、ローカル・ホストです。

#### *sauser=sa\_user*

sa ユーザー ID。このユーザー ID には、データベースおよびユーザー・ログインを作成するための十分な特権が必要です。

#### *sapassword=sa\_password*

sa パスワード (混在認証モードを使用する場合)。sa ユーザー ID にパスワードが設定されていない場合は、`sapassword=` に値を指定しないでください。トラステッド接続を使用する場合は、このパラメーターを省略します。

例えば、以下のコマンドは、ログイン・ユーザー ID `userid` を使用して、SQL サーバー・イベント・データベースを作成します。

```
cr_event_mssql userid apassword server=myserver sauser=sa sapassword=sapassword
```

4. サーバーを再始動します。統合ノードの場合は、**stopNode** および **startNode** コマンドを使用して、ノード・エージェントを停止してから再始動する必要があります。

## 次のタスク

データベースの構成が完了したら、管理コンソールを使用してデータベース構成をテストできます。これを行うには、該当する JDBC データ・ソースにナビゲートし、「テスト接続」オプションを選択します。

## 以前のバージョンからのイベント・データベースのアップグレード

以前のバージョンの Common Event Infrastructure からマイグレーションした場合、イベント永続性を使用するには、既存のイベント・データベースのアップグレードが必要になる場合があります。

### このタスクについて

イベント・データベースのアップグレードが必要になるのは、Common Event Infrastructure バージョン 5.1 以前からマイグレーションする場合です。

データベースのアップグレード・プロセスでは、現在のイベント・データを保持しながら、既存のイベント・データベースのスキーマとメタデータが現行バージョンにアップグレードされます。

データベースのアップグレード・スクリプトでは、既存のイベント・データベースのスキーマとメタデータが現行バージョンにアップグレードされます。

**サポートされないバージョン:** Common Event Infrastructure 6.0 でサポートされなくなったバージョンのデータベース・ソフトウェアをイベント・データベースが使用している場合は、まず、そのデータベース・ソフトウェア用の適切な手順を使用して、データベースをサポートされるバージョンへとマイグレーションする必要があります。次に、イベント・データベースのアップグレード・プロセスに従って、データベースをアップグレードします。

### 以前のバージョンからの DB2 イベント・データベースのアップグレード:

Linux、UNIX、または Windows システムに Common Event Infrastructure バージョン 5.1 の既存の DB2 イベント・データベースがある場合は、それを現行バージョンにアップグレードする必要があります。

### このタスクについて

Linux または UNIX システムで DB2 イベント・データベースをアップグレードするには、以下の手順を実行します。

#### 手順

1. 既存のイベント・データベースのバックアップ・コピーを作成します。
2. `profile_root/bin` ディレクトリに移動します。
3. 次のように、ご使用のオペレーティング・システム用の DB2 アップグレード・スクリプトを実行します。

- **Windows** Windows システムの場合:

```
eventUpgradeDB2 runUpgrade=[true|false] dbUser=user
[dbName=name] [dbPassword=pw]
[dbNode=node] [scriptDir=dir]
```

- **Linux** **UNIX** Linux および UNIX システムの場合:

```
eventUpgradeDB2.sh runUpgrade=[true|false] dbUser=user
[dbName=name] [dbPassword=pw]
[dbNode=node] [scriptDir=dir]
```

通常、必要なパラメーターは以下のとおりです。

#### **runUpgrade**

生成された DDL スクリプトをアップグレード・スクリプトで自動的に実行してデータベース・アップグレードを完了するかどうかを指定します。このパラメーターは必須です。データベース・アップグレードを後で、または別のシステム上で手動で実行する場合は、`false` を指定します。

#### **dbUser**

使用する DB2 ユーザー ID を指定します。このパラメーターは必須です。

#### **dbName**

DB2 データベース名を指定します。デフォルトのイベント・データベース名は `event` です。このパラメーターは、`runUpgrade=true` を指定した場合、必須です。

#### **dbPassword**

指定した DB2 ユーザー ID のパスワードを指定します。このパラメーターは任意指定です。パスワードを指定しない場合、DB2 は、パスワードの入力プロンプトを表示します。

#### **dbNode**

データベース・ノード名を指定します。このパラメーターは、DB2 クライアント・システムからアップグレード・スクリプトを実行する場合、必須です。

#### **scriptDir**

生成された DDL スクリプトを含めるディレクトリーを指定します。このパラメーターは任意指定です。ディレクトリーを指定しない場合は、`¥eventDBUpgrade¥dbName` ディレクトリーにスクリプトが保管されます。

詳細なパラメーターのリストとその使用方法を確認するには、パラメーターを指定せずに **eventUpgradeDB2** スクリプトを実行します。

### **タスクの結果**

アップグレード・スクリプトは、イベント・データベースをアップグレードするために必要な DDL スクリプトを生成します。 `runUpgrade=true` を指定した場合は、DDL スクリプトが自動的に実行され、アップグレードが完了します。

### **例**

Windows システムの既存の DB2 データベースをアップグレードする例を以下に示します。

```
eventUpgradeDB2 runUpgrade=true dbUser=db2inst1 dbName=event
```

## 次のタスク

runUpgrade=false を指定した場合は、データベース・システム上で DDL スクリプトを手動で実行して、データベース・アップグレードを完了する必要があります。

## 以前のバージョンからの DB2 for z/OS イベント・データベースのアップグレード

z/OS システムに Common Event Infrastructure バージョン 5.1 の既存の DB2 イベント・データベースがある場合は、それを現行バージョンにアップグレードする必要があります。

## このタスクについて

z/OS システムの DB2 イベント・データベースをアップグレードするには、以下の手順を実行します。

## 手順

1. 既存のイベント・データベースのバックアップ・コピーを作成します。
2. `profile_root/bin` ディレクトリーに移動します。
3. ご使用のクライアント・オペレーティング・システム用の DB2 for z/OS アップグレード・スクリプトを以下のように実行します。

- **Windows** Windows システムの場合:

```
eventUpgradeDB2ZOS runUpgrade=[true|false] dbUser=user
[dbName=name] [dbPassword=pw]
[scriptDir=dir] storageGroup=group
bufferPool14K=4kbufpool bufferPool18k=8kbufpool
bufferPool16K=16kbufpool
```

- **Linux** **UNIX** Linux および UNIX システムの場合:

```
eventUpgradeDB2ZOS.sh runUpgrade=[true|false] dbUser=user
[dbName=name] [dbPassword=pw]
[scriptDir=dir] storageGroup=group
bufferPool14K=4kbufpool bufferPool18k=8kbufpool
bufferPool16K=16kbufpool
```

通常、必要なパラメーターは以下のとおりです。

## runUpgrade

生成された DDL スクリプトをアップグレード・スクリプトで自動的に実行してデータベース・アップグレードを完了するかどうかを指定します。このパラメーターは必須です。データベースを後で、または別のシステム上で手動でアップグレードする場合は、false を指定します。

**z/OS システム:** このパラメーターは、ネイティブ z/OS システムでは無視されます。生成された DDL スクリプトの自動実行は、クライアント・システムでのみサポートされます。

## dbUser

使用する DB2 ユーザー ID を指定します。このパラメーターは必須です。



**dbName**

DB2 データベース名を指定します。デフォルトのイベント・データベース名は `event` です。このパラメーターは、`runUpgrade=true` を指定した場合、必須です。

**dbPassword**

指定した DB2 ユーザー ID のパスワードを指定します。このパラメーターは任意指定です。パスワードを指定しない場合、DB2 は、パスワードの入力プロンプトを表示します。

**scriptDir**

生成された DDL スクリプトを含めるディレクトリーを指定します。このパラメーターは任意指定です。ディレクトリーを指定しない場合は、`¥eventDBUpgrade¥db2zos` ディレクトリーにスクリプトが保管されます。

**storageGroup**

ストレージ・グループの名前を指定します。このパラメーターは必須です。

**bufferPool4K**

4K バッファ・プールの名前を指定します。このパラメーターは必須です。

**bufferPool8K**

8K バッファ・プールの名前を指定します。このパラメーターは必須です。

**bufferPool16K**

16K バッファ・プールの名前を指定します。このパラメーターは必須です。

詳細なパラメーターのリストとその使用方法を確認するには、パラメーターを指定せずに `eventUpgradeDB2ZOS` スクリプトを実行します。

**タスクの結果**

アップグレード・スクリプトは、イベント・データベースをアップグレードするために必要な DDL スクリプトを生成します。クライアント・システムで `runUpgrade=true` を指定した場合は、DDL スクリプトが自動的に実行され、アップグレードが完了します。

**例**

Windows クライアント・システムから DB2 for z/OS イベント・データベースをアップグレードする例を以下に示します。

```
eventUpgradeDB2ZOS runUpgrade=true dbUser=db2inst1 dbName=event
storageGroup=sysdef1t bufferPool4K=BP9 bufferPool8K=BP8K9 bufferPool16K=BP16K9
```

**次のタスク**

`runUpgrade=false` を指定した場合、または z/OS システム上でアップグレード・スクリプトを実行した場合は、生成された DDL スクリプトを、SQL Processor Using File Input (SPUFI) 機能を使用して z/OS システムで手動で実行する必要があります。この手順によって、データベース・アップグレードが完了します。

## Oracle イベント・データベースのバージョン 5 からのアップグレード:

Common Event Infrastructure バージョン 5.1 の既存の Oracle イベント・データベースを使用している場合は、それを現行バージョンにアップグレードする必要があります。

### このタスクについて

Oracle イベント・データベースをアップグレードするには、以下の手順を実行します。

#### 手順

1. 既存のイベント・データベースのバックアップ・コピーを作成します。
2. `profile_root/bin` ディレクトリに移動します。
3. 次のように、ご使用のオペレーティング・システム用の Oracle アップグレード・スクリプトを実行します。

- Windows システムの場合:

```
eventUpgradeOracle runUpgrade=[true|false] schemaUser=schemauser
[oracleHome=dir] [dbName=name]
[dbUser=sysuser] [dbPassword=pw]
[scriptDir=dir]
```

- Linux および UNIX システムの場合:

```
eventUpgradeOracle.sh runUpgrade=[true|false] schemaUser=schemauser
[oracleHome=dir] [dbName=name]
[dbUser=sysuser] [dbPassword=pw]
[scriptDir=dir]
```

通常、必要なパラメーターは以下のとおりです。

#### runUpgrade

生成された DDL スクリプトをアップグレード・スクリプトで自動的に実行してデータベース・アップグレードを完了するかどうかを指定します。このパラメーターは必須です。データベースを後で、または別のシステム上で手動でアップグレードする場合は、`false` を指定します。

#### schemaUser

データベース表を所有する Oracle ユーザー ID を指定します。このパラメーターは必須です。

#### oracleHome

Oracle ホーム・ディレクトリを指定します。このパラメーターは、`runUpgrade=true` を指定した場合、必須です。

#### dbName

Oracle データベース名を指定します。デフォルトのイベント・データベース名は `event` です。このパラメーターは、`runUpgrade=true` を指定した場合、必須です。

#### dbUser

Oracle システム・ユーザー ID を指定します。このパラメーターは、`runUpgrade=true` を指定した場合、必須です。

### dbPassword

システム・ユーザー ID のパスワードを指定します。システム・ユーザー ID にパスワードがない場合は、このパラメーターを指定しないでください。

### scriptDir

生成された DDL スクリプトを含めるディレクトリーを指定します。このパラメーターは任意指定です。ディレクトリーを指定しない場合は、`¥eventDBUpgrade¥oracle` ディレクトリーにスクリプトが保管されます。

詳細なパラメーターのリストとその使用方法を確認するには、パラメーターを指定せずに **eventUpgradeOracle** スクリプトを実行します。

### タスクの結果

アップグレード・スクリプトは、イベント・データベースをアップグレードするために必要な DDL スクリプトを生成します。 `runUpgrade=true` を指定した場合は、DDL スクリプトが自動的に実行され、アップグレードが完了します。

### 例

Windows システムの既存の Oracle データベースをアップグレードする例を以下に示します。

```
eventUpgradeOracle runUpgrade=true schemaUser=cei
dbName=event dbUser=sys
```

### 次のタスク

`runUpgrade=false` を指定した場合は、データベース・システム上で DDL スクリプトを手動で実行して、データベース・アップグレードを完了する必要があります。

## WebSphere Business Monitor 用のクロスセル Common Event Infrastructure 構成

Common Event Infrastructure (CEI) イベントを生成するリモート・サーバーと、WebSphere Business Monitor サーバーの間に、接続を構成する必要があります。

### このタスクについて

マルチサーバー環境で複数のセルにわたって CEI を構成する方法については、IBM WebSphere Business Monitor インフォメーション・センターの『WebSphere Business Monitor を使用するようにリモート CEI サーバーを構成』というトピックを参照してください。

---

## WebSphere Business Integration Adapter の構成

WebSphere Business Integration Adapter と WebSphere Process Server を連携させるには、インストールおよび構成の手順を実行する必要があります。

### 手順

1. アダプターをインストールします。

- a. WebSphere Business Integration Adapters のインストール方法が説明されている『WebSphere Business Integration Adapters 製品のインストール』の手順に従います。
  - b. 『WebSphere Business Integration Adapters の資料』に移動し、「アダプター」の下にあるナビゲーションを展開して、ご使用のアダプターに固有の必須の追加手順があるかどうかを確認します。ご使用のアダプターについて追加のインストール・タスクが記載されている場合は、そのタスクを実行します。
2. 『WebSphere Business Integration Adapters の資料』に移動して、「アダプター」の下にあるナビゲーションを展開し、ご使用のアダプターの構成手順に従って、アダプターを構成します。構成手順を実行すると、必要な成果物が生成されます。
  3. メディエーション モジュールのデプロイの指示に従って、アプリケーション EAR ファイルをインストールします。

## WebSphere Business Integration Adapter の管理のセットアップ

WebSphere Business Integration Adapter を管理できるようにするには、いくつかの管理機能を実行する必要があります。

### 始める前に

- 『WebSphere Business Integration Adapters 製品のインストール』に示されている手順を理解している必要があります。
- アプリケーション EAR ファイルをインストールして、このタスクを実行する前に WebSphere Business Integration Adapter に必要な成果物を作成する必要があります。

### このタスクについて

WebSphere Business Integration Adapter を管理するには、以下の管理機能を実行します。

### 手順

1. キュー接続ファクトリーを作成します。

管理コンソールの最上位から、以下の手順を実行します。

- a. 「リソース」を展開します。
- b. 「JMS」を展開します。
- c. 「キュー接続ファクトリー」を選択します。
- d. 管理入出力キューの有効範囲レベルに対応する有効範囲レベルを選択します。
- e. 「新規」をクリックして、新規 JMS キュー接続ファクトリーを作成します。
- f. JMS リソース・プロバイダーを選択します。「デフォルトのメッセージング・プロバイダー」を選択して「OK」をクリックします。
- g. 以下を例外として、すべてのデフォルト値を受け入れます。
  - 名前: QueueCF

- JNDI 名: jms/QueueCF
  - バス名: 現在のバス名
- h. 「OK」をクリックして、新しい JMS キュー接続ファクトリーの作成を完了します。

「JMS キュー接続ファクトリー」パネルの上部にメッセージ・ウィンドウが表示されます。

- i. メッセージ・ウィンドウで「保管」をクリックして、ローカル構成レベルで行った変更をマスター構成に適用します。
2. WebSphere Business Integration Adapter リソースを作成します。

管理コンソールの最上位から、以下の手順を実行します。

- a. 「リソース」を展開します。
- b. 「WebSphere Business Integration Adapter」ページを開きます。

「WebSphere Business Integration Adapters」を選択します。

- c. 「新規」をクリックして、新しい WebSphere Business Integration Adapter を作成します。
- d. 以下を例外として、すべてのデフォルト値を受け入れます。
- 名前: EISConnector
  - キュー接続ファクトリー JNDI 名: jms/QueueCF
  - 管理入力キュー JNDI 名: *connectorName/AdminInQueue*
  - 管理出力キュー JNDI 名: *connectorName/AdminOutQueue*
- e. 「OK」をクリックして、WebSphere Business Integration Adapter の作成を完了します。

「WebSphere Business Integration Adapters」パネルの上部にメッセージ・ウィンドウが表示されます。

- f. メッセージ・ウィンドウで「保管」をクリックして、ローカル構成レベルで行った変更をマスター構成に適用します。
3. WebSphere Business Integration Adapter サービスを使用可能にします。

管理コンソールの最上位から、以下の手順を実行します。

- a. 「サーバー」を展開します。
- b. 「サーバー・タイプ」を展開します。
- c. 「WebSphere Application Server」を選択します。
- d. サーバー・リストから、WebSphere Business Integration Adapter サービスを使用可能にするサーバーを選択します。

対象となるリソースをホストするサーバーの名前をクリックします。

- e. 「構成」タブの「Business Integration」リストから、「WebSphere Business Integration Adapter サービス」を選択します。
- f. 「サーバー始動時にサービスを使用可能にする」チェック・ボックスが選択されていることを確認します。
- g. 「OK」をクリックします。

「WebSphere Business Integration Adapters」 ページの上部にメッセージ・ウィンドウが表示されます。

- h. WebSphere Business Integration Adapter サービスを使用可能とする予定の各サーバーごとに、ステップ 3d (737 ページ) から 3g (737 ページ) を繰り返します。
- i. メッセージ・ウィンドウで「保管」をクリックして、ローカル構成レベルで行った変更をマスター構成に適用します。

**注:** WebSphere Business Integration Adapter サービスを使用可能または使用不可にする場合、変更を有効にするためにサーバーを再始動する必要があります。

---

## Service Federation Management 用の WebSphere Process Server の構成

WebSphere Service Registry and Repository バージョン 7.0 で提供された Service Federation Management (SFM) コンソールによって管理できる接続サーバーとして、WebSphere Process Server を使用可能にすることができます。これによって、SFM コンソールは WebSphere Process Server で、SFM プロキシを構成できます。

### このタスクについて

別のビジネス単位に、別のエンタープライズ・サービス・バス (ESB) を保有している場合があります。各 ESB および関連付けられたサービス・レジストリーは、接続されたサービス・アプリケーションの別のドメインを構成しています。この結果、ドメイン間で大量のアプリケーションの重複が発生する可能性があります。また、ドメインを横断するアプリケーション接続の実装に要する開発体力が増加する可能性があります。WebSphere Service Registry and Repository バージョン 7.0 で提供されている SFM を使用すれば、異なる ESB 間にブリッジが確立され、サービスおよびアプリケーションをドメイン間で共用することができます。

SFM プロバイダー:

- フェデレーション対応コンテンツを統一して表示できるフェデレーション・モデル。
- ドメインをサポートする、サービス接続およびレジストリー・コンポーネントにアクセスする、Service Connectivity Management プロトコル。
- サービス・ドメインを制御するコンソール。

SFM を使用することにより、コンソール・ユーザーは 1 つのドメインでサービスを構成し、そのサービスを使用して別のドメインの消費者にサービスを提供することができます。1 つのドメインのサービス・エンドポイントは、別のドメインのサービス・プロキシ・エンドポイントとして使用可能です。

## Service Connectivity Management 接続サーバーの構成

Service Federation Management (SFM) コンソールは、Service Connectivity Management プロトコル (SCMP) を使用して、WebSphere Process Server と通信します。

## このタスクについて

WebSphere Process Server は、SCM Connectivity Server という名前のシステム REST サービスとして、Atom ベースのプロトコルを公開します。このサービスは、スタンドアロン・サーバー用の REST サービス・プロバイダーと、Network Deployment 環境のデプロイメント・マネージャーでは、デフォルトで使用可能になっています。

### 手順

1. REST サービスを構成します。プロトコルによって戻される Atom 文書には、SFM コンソールによって保持される絶対 URL が含まれています。これらの絶対 URL で使用されるプロトコル、ホスト名、およびポート番号は、REST サービス構成から取得されます。SFM コンソール・サーバーと WebSphere Process Server の間のロード・バランシングおよびネットワーク・コンポーネントを検査することが重要です。
  - a. サービス・プロバイダーのトピックの『REST サービスの構成』で説明されているように、スタンドアロン・サーバーまたはデプロイメント・マネージャー REST サービス・プロバイダー用に、プロトコル、完全修飾ホスト名、およびポート番号を構成します。
2. SFM コンソール・ユーザーに、接続サーバーへのアクセスに必要な詳細を提供してください。
  - a. 接続サーバー用の Atom サービス文書の URL は、REST サービス・パネルで見つけることができます。サービスのタイプは、*SCM Connectivity Server* です。
  - b. WebSphere Process Server 管理セキュリティーが使用可能な場合、SFM コンソール・ユーザーも、サービス・エンドポイントへのアクセスには、ユーザー名およびパスワードが必要です。これらの資格情報は、Service Connectivity Architecture モジュールをインストールするための十分な管理権限を持つ、RestServicesUser グループ内のユーザーのものでなければなりません。

## Service Connectivity Management 接続プロバイダーの構成

管理コンソールを使用して、ご使用の環境の Service Connectivity Management (SCM) 接続プロバイダーを構成できます。

### このタスクについて

SCM 接続プロバイダーは、SCM プロトコルを使用して公開される ESB の論理区画です。その接続プロバイダー上で SCM グループ・プロキシーを作成するときにプロキシー・ゲートウェイ・モジュールがデプロイされるターゲット (サーバーまたはクラスター) が定義されます。また、それらのグループ・プロキシー上で作成されたプロキシー・ターゲットで使用されるプロパティーも定義されます。

### 手順

「サービス統合」>「SCM 接続プロバイダー」を選択します。「SCM 接続プロバイダー」ページが開き、現在の環境内の接続プロバイダーがすべて表示されます。

## タスクの結果

SCM 接続プロバイダーは、このページから、追加、除去または使用できます。

### 接続プロバイダーの追加

管理コンソールを使用して、Service Connectivity Management (SCM) 接続プロバイダーとして、サーバーまたはクラスターを追加できます。

#### 手順

1. 「サービス統合」>「SCM 接続プロバイダー」をクリックします。「SCM 接続プロバイダー」ページが開き、現在の環境内の接続プロバイダーがすべて表示されます。
2. 「追加」をクリックして、サーバーまたはクラスターを接続プロバイダーとして追加します。接続プロバイダーを追加するためのウィザードが開きます。
3. ウィザードで「ステップ 1 サーバーまたはクラスターの選択」を完了して、この接続プロバイダー用に SCM グループ・プロキシをデプロイする必要があるサーバーまたはクラスターを識別します。「次へ」をクリックします。
4. ウィザードで「ステップ 2 SCM 接続プロバイダー・プロパティの指定」を完了して、プロパティを指定します。

| オプション | 説明                                                                                                                                   |
|-------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 名前    | SCM 接続プロバイダーの名前。これはセル内で固有でなければなりません。名前が既に存在する場合は、例外がスローされます。名前、説明、連絡先、組織、およびロケーションは、Service Federation Management コンソールのユーザーに表示されます。 |
| 説明    | SCM 接続プロバイダーの簡単な説明。これは任意指定であり、デフォルトは空ストリングです。名前、説明、連絡先、組織、およびロケーションは、Service Federation Management コンソールのユーザーに表示されます。                |
| 連絡先   | SCM 接続プロバイダーの連絡先担当者の名前。これは任意指定であり、デフォルトは空ストリングです。名前、説明、連絡先、組織、およびロケーションは、Service Federation Management コンソールのユーザーに表示されます。            |
| 組織    | SCM 接続プロバイダーの所有組織の名前。これは任意指定であり、デフォルトは空ストリングです。名前、説明、連絡先、組織、およびロケーションは、Service Federation Management コンソールのユーザーに表示されます。              |



| オプション     | 説明                                                                                                                                                             |
|-----------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| ロケーション    | SCM 接続プロバイダーのロケーション。これは任意指定であり、デフォルトは空ストリングです。名前、説明、連絡先、組織、およびロケーションは、Service Federation Management コンソールのユーザーに表示されます。                                         |
| HTTP ホスト  | 保護されていないプロキシ・ターゲットのエンドポイントに対して返されるホスト名。これは、別のドメイン内の Web サービス・クライアントがプロキシへのアクセスに使用するホストであり、Web サーバーおよびその他のネットワーク・コンポーネントが考慮されます。                                |
| HTTP ポート  | 保護されていないプロキシ・ターゲットのエンドポイントに対して返されるポート。これは、別のドメイン内の Web サービス・クライアントがプロキシへのアクセスに使用するポートであり、Web サーバーおよびその他のネットワーク・コンポーネントが考慮されます。                                 |
| HTTPS ホスト | 保護されているプロキシ・ターゲットのエンドポイントに対して返されるホスト名。これは、別のドメイン内の Web サービス・クライアントがプロキシへのアクセスに使用するホストであり、Web サーバーおよびその他のネットワーク・コンポーネントが考慮されます。                                 |
| HTTPS ポート | 保護されているプロキシ・ターゲットのエンドポイントに対して返されるポート。これは、別のドメイン内の Web サービス・クライアントがプロキシへのアクセスに使用するポートであり、Web サーバーおよびその他のネットワーク・コンポーネントが考慮されます。                                  |
| 認証別名      | 基本認証資格情報を提供する認証別名の名前。この資格情報は、SCM 接続プロバイダーのドメインに関連付けられたサービス・レジストリーから、HTTP を使用して WSDL 文書を取得するために使用されます。サービス・レジストリーに接続するために基本認証が必要とされない場合は、このパラメーターを指定する必要はありません。 |

| オプション  | 説明                                                                                                                                             |
|--------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| SSL 構成 | SSL 構成の名前。この構成は、SCM 接続プロバイダーのドメインに関連付けられた保護されているサービス・レジストリーから、HTTP を使用して WSDL 文書を取得するために使用されます。これは任意指定であり、指定しなかった場合は、サーバーのデフォルト SSL 構成が使用されます。 |

5. 「終了」をクリックします。SCM 接続プロバイダー・ページが開き、新規の接続プロバイダーがリストされます。
6. 「メッセージ」セクションを確認し、接続プロバイダーおよびそのプロパティが完了していることを確認してください。
7. 「保存」をクリックして、接続プロバイダーをマスター構成に保存します。

### 接続プロバイダーの除去

管理コンソールを使用して、Service Connectivity Management (SCM) 接続プロバイダーとして、サーバーまたはクラスターを除去できます。

#### 手順

1. 「サービス統合」>「SCM 接続プロバイダー」をクリックします。「SCM 接続プロバイダー」ページが開き、現在の環境内の接続プロバイダーがすべて表示されます。
2. 接続プロバイダーを選択します。「除去」をクリックして、サーバーまたはクラスターを接続プロバイダーから除去します。

### 接続プロバイダーの使用

管理コンソールを使用して、Service Connectivity Management (SCM) 接続プロバイダーをリスト、表示および変更できます。

#### 手順

1. 「サービス統合」>「SCM 接続プロバイダー」をクリックします。「SCM 接続プロバイダー」ページが開き、現在の環境内の接続プロバイダーがすべて表示されます。
2. 接続プロバイダーを選択して、詳細ページを表示します。
3. このページでフィールドを変更できます。ただし、「名前」、「作成者」、「作成」、または「更新」フィールドは変更できません。
4. 変更を完了するには、「適用」、「OK」、「リセット」、「キャンセル」ボタンを使用してください。

## Service Component Architecture モジュールの Service Connectivity Management の使用

Service Component Architecture モジュールは、Service Federation Management コンソールがグループ・プロキシを作成するごとに、インストールされます。これら

の Service Component Architecture モジュールは、エンタープライズ・アプリケーション・ビューおよび管理コンソールの Service Component Architecture モジュール・リストで表示できます。

バージョン管理されている Service Component Architecture モジュールは、グループ・プロキシ用に使用されます。基本モジュール名は ScmGroupProxy で、バージョン番号は v1\_0\_0 です。セル ID は、接続プロバイダー名およびセル内のグループ・プロキシ用固有 ID から形成されます。

モジュール・リストに表示されるサービス・モジュールの名前は ScmGroupProxy (*ConnectivityProviderName\_UniqueId*) で、サービス・アプリケーション名は、ScmGroupProxy\_v1\_0\_0\_ConnectivityProviderName\_UniqueIDApp という形式です。また、同じ固有 ID が、SCM プロトコルを介してグループ・プロキシにアクセスするために使用される、URL および Atom ID の一部も形成しています。

生成された固有 ID *xot5* で接続プロバイダー *ExampleConnectivityProvider* 上に作成されたグループ・プロキシは、最終的に ScmGroupProxy (*ExampleConnectivityProvider\_xot5*) という名前のモジュールになり、アプリケーション ScmGroupProxy\_v1\_0\_0\_ExampleConnectivityProvider\_xot5App として、接続プロバイダーに関連付けられたサーバーまたはクラスターにデプロイされます。

グループ・プロキシ・リソースを表す、Atom 文書にアクセスするための URL は、次の形式になります。

```
/rest/scmp/connectivity-provider/ExampleConnectivityProvider-g0jk9fzm/mediation/group-proxy-type/group-proxy/xot5-g0jkja19
```

この文書の Atom ID は次の形式になります。

```
urn:wesb-scmp:cell/localhostNode01Cell/connectivity-provider/ExampleConnectivityProvider-g0jk9fzm/mediation/group-proxy-type/group-proxy/xot5-g0jkja19
```

注: SCM グループ・プロキシの属性は、モジュールのプロモートされたプロパティとして表示されます。これらは、管理コンソールを介して表示できますが、変更してはいけません。

## Service Connectivity Management (SCM) のプロキシ・ゲートウェイへのマッピング

Service Connectivity Management (SCM) グループ・プロキシ・モジュールは、WebSphere Process Server 内にプロキシ・ゲートウェイとして実装されています。

グループ・プロキシの SCM プロキシ・ターゲットは、プロキシ・ゲートウェイの仮想サービスとして表示され、プロキシ・ゲートウェイ・ウィジェットを介して、WebSphere が提供する Business Space で表示することができます。プロキシ・ターゲットのプロパティは、仮想サービスのプロパティとして表示されます。

注: SCM グループ・プロキシー・モジュールに関連付けられた仮想サービスを、プロキシー・ゲートウェイ・ウィジェットを介して、追加、除去、または変更しないでください。

---

## 構成のトラブルシューティング

WebSphere Process Server の構成に失敗したときに、問題を診断できます。





Printed in Japan